

ハイスクールD×D 駒 王学園の赤と緋の双龍

フレイムドラゴン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺、土騎明日夏は、妹と仕事で家を空けがちの兄と姉の三人の家族と幼馴染みでもある親友となんてことのない普通の日常をすごしている高校二年生。ただし、俺たち兄弟にはある秘密があった。それは、親友にも秘密にしていることだった。そんなある日に親友に彼女ができた。そのことを境に、俺たちの日常に変化が訪れることとなった。悪魔、堕天使、ドラゴン。さまざまな異形と異能が混じり合う、学園ラブコメバトルファンタジーが開幕する！

※ハイスクールD×D　く赤と紅と緋くのリメイク作品です。主に設定の追加や変更、新キャラの追加、展開の修正や変更、セイクリッド・ギア神　器などの名前の変更などがなされています。

ます。

目次

登場人物：メインキャラクター	2
登場人物：サブキャラクター	16
オリジナル用語	21
オリジナル神器（セイクリッド・ギア）	30
第1章 旧校舎のディアボロス	30
Life. 1 士騎 明日夏	37
Life. 2 賞金稼ぎ（バウンティハンター）	64
Life. 3 彼女に殺されました！	64
Life. 4 あなたね、私を呼んだのは？	82
Life. 5 俺、生き返りました！	109
Life. 6 俺、人間やめました！	128
Life. 7 やってきました、オカルト研究部！	155
Life. 8 悪魔の仕事、始めます	184
Life. 9 駒の特性	203
Life. 10 はぐれ悪魔祓い（工	239

クソシスト)

Life. 11 友達、できました!

270

Life. Extra 友達と遊びま
す!
第2章 戦闘校舎のフェニックス

566

Life. 12 友達、救います!

311

Life. 1 悪魔、やっています!

364

Life. 13 幼馴染み、怒ります

588

Life. 2 転校生は幼馴染みでし

! Life. 14 緋い龍、暴れます!

419

た! Life. 3 生徒会と顔合わせしま

Life. 15 元カノ、倒します!

469

す! Life. 4 使い魔、ゲットします

Life. 16 新部員、入部します

509

! Life. 5 喧嘩、売ります!

Life. 17 新部員、入部します

537

717 Life. 5 喧嘩、売ります!

Life. 6	修業、始めました	755
Life. 7	修業の成果	778
Life. 8	決戦、始まります!	808
Life. 9	絶賛、決戦中です!	838
Life. 10	決戦、終了です!	876
Life. 11	もうひとつの決戦、始まります!	900
Life. 12	幼馴染みたち、暴れます!	932
Life. 13	約束、守りに来ました!	970
Life. Extra	士騎兄妹の休日 明日夏篇	1000
Life. Extra	士騎兄妹の休日 千秋篇	1028
第3章	月光校庭のエクスカリバー	
Life. 1	不穏な気配再びです!	1049
Life. 2	どうしちまったんだ、イケメン!	1095
Life. 3	エクスカリバーを許さない!	1138

L i f e .	10	行動、バレました！			
L i f e .	9	情報、求めます！			
L i f e .	8	共同戦線です！			
L i f e .	7	意地、ぶつけます！			
L i f e .	6	聖剣と戦います！			
L i f e .	5	聖剣と交渉します！			
L i f e .	4	聖剣、来ました！			
				ア	
L i f e .	17	堕天使の目的			1516
L i f e .	16	夜刀神 蓮火			
L i f e .	15	憎しみの末路			
L i f e .	14	アルミヤ・A・エトリ			1498
L i f e .	13	破壊の肉宴			1475
				ア	
L i f e .	12	他でも待ち伏せ、			1448
L i f e .	11	カリス・パトウーリ			1405

L i f e .	1735	24	エクスカリバーを折	2007
L i f e .		23	決戦、駒王学園！	1969
L i f e .		22	強敵、現れました！	1945
L i f e .		21	血の悪魔	1918
テイラス				1898
L i f e .		20	ベルティゴ・ノ	1874
(ブラッド・チルドレン)				1623
L i f e .	1598	19	血の悪魔の子供たち	1840
L i f e .		18	『鬼刃』の使い手	1768
L i f e .		26	極焔の緋龍	1808
L i f e .		27	遅れてきた剣士たち	1768
L i f e .		28	紅い閃刃	
L i f e .		29	錬鉄の剣聖	
L i f e .		30	行け！ オカルト研	
究部！				
L i f e .		31	決着！ VS コカビ	
エル！				
L i f e .		32	決戦後	
れ！				
L i f e .		25	絶対絶命です！	

L i f e . 3 3 衝撃の展開です！

2034

第四章 停止教室のヴァンパイア

L i f e . 1 魔王と姉の来訪

2070

L i f e . 2 夏です！ 水着です！

2095

L i f e . 3 水着です！ ピンチで

す！

2123

L i f e . 4 白と対面します！

2155

L i f e . 5 授業参観、始まります

2182

L i f e . 6 後輩、できました！

2216

L i f e . 7 女の戦い、勃発です！

2252

登場人物：メインキャラクター

——オカルト研究部関係者——

◎士騎しき 明日夏あすか名前の由来は四季十夏から

身長：175 cm

体重：65 kg

種族：人間

○プロフィール

本作の主人公。冬夜、千春の弟で千秋の兄。原作主人公のイツセーとは物心がつく前からの幼馴染みであり親友。駒王学園高等部の二年生で、イツセーたちと同じクラス。ドレイクが宿った神セイクリッド・ギア器、『緋アグレッション・スカーレットい龍衣』の所有者。幼少の頃までは普通の一般人だったが、両親が事故死し、頼れる親戚等がいなかったために兄の冬夜が明日夏たち下の弟妹たちを養うために賞金稼ぎパウンティハンターになったことを知ったことを発端に、賞金稼ぎバウ

ンテイーハンターをを目指すようになった。

● 外見

髪型はくせのある黒髪のショートヘアをしているイメージモデルは『機動戦士ガンダムSEEDEDDESTINY』のシン・アスカ。つり目で黒色の瞳、整った顔立ちをしており、クールな印象も相まってイケメンな容姿をしている。細目な体格をしているがバウンティハンター賞金稼ぎになるために幼い頃から鍛えられているため、逞しく引き締まった体型をしている。学生服の着こなしはブレザーとワイシャツを全開にしており、黒色のタンクトップを着ている。

● 性格

普段はクールで冷静な振る舞いをしているが、実際は感情的になりやすく、お人好しな性格この性格はイツセーへの憧れが影響している。家族や友人、仲間想いなため、それらに対して危害を加える者に対しては激しい激情をあらわにする。基本的に真面目だが、イツセーのスケベ柄みの状況などに対してはメンドクさがりな面を見せ、スルーすることもある。一度相手に抱いた罪悪感や後ろめたさは、たとえ相手が気にしないかろうといつまでも必要以上に抱えこんでしまうタチで、冬夜と風間姉妹に対する罪悪感をいまだに抱いている。

● 趣味・嗜好

家事好き。特に料理が得意で、それなりの腕とこだわりも持っており、自分よりも高い技術を持つ者に対して対抗心を燃やすこともある。フアツションは黒系統のものを好み、派手さは控えめで、機能性が高いものを愛用する。イツセーとは真逆で、女性に對してはそこまで興味はないが、魅力的なところを感じるくらい感性は持っている。自分がホモ関連の出来事に巻き込まれることは中学時代のトラウマもあって、かなりの嫌悪感を抱く。ヒトをいじるのが好きな一面がある主なターゲットは燕。その際に浮かべる笑顔は周り曰く「黒い」とのこと。

● 対人関係

親友であるイツセーには千秋が引きこもりから立ち直る件で深く感謝しており、密かに憧れも抱いていることもあって、絶大な信頼を寄せている。性欲過多などところに対してはどうしようもないと、どうこうするのは諦めている。家族との仲は良好で、千秋のことは冬夜と千春ほどではないが、かわいい妹としてそれなりに溺愛している。イツセーへの想いも応援しており、イツセーに千秋以外の彼女ができたときには思わずシヨックを受けるほど。冬夜と千春のことは兄、姉としても先輩ハンターとしても尊敬しているが、自分たちを養うために『普通の日常』を捨てた冬夜に対して罪悪感を抱いている。風間姉妹にはいじめられていた二人を見てみぬふりをしていた経緯があるため、仲良くなつたいまでもそのことに対する罪悪感を抱いている。松田、元浜とは中

学からの悪友であり、扱いが雑なときもあるが、性欲過多などころに対してはイツセーと同様の扱い。

● 周囲からの印象・評価

普段の振る舞いから無愛想と評されているがイケメンなため、学園では木場ほどではないが女生徒に人気がある。中学時代にはイツセーとのホモ疑惑が流れたこともあり、真に受けた千秋の誤解を解くのに苦労したり、冬夜と千春にからかわれたこともあって、若干トラウマになっている。

● 能力

幼い頃から賞金稼バウンティハンターぎになるために鍛えており、第1章時点では並のはぐれ悪魔を圧倒するぐらいの戦闘力を持っている。戦闘スタイルは八極拳を中心とした体術と刃物を使った近接戦を状況により使い分けるテクニク寄りのパワータイプ。八極拳の一撃は自身よりも巨体なはぐれ悪魔を吹き飛ばすほど。刃物は刀やナイフを我流ながらも高い技術で扱い、ナイフによる投擲も的確に狙った場所に当てられるほどの正確さを持っていて。第2章からはイツセーやアーシアの死を経験したことから『緋い龍衣』の能力を積極的に使うようになり、緋い龍気を使った中距離戦もこなせるようになった。戦闘中も的確な判断ができる冷静さと相手の実力をしつかりと把握できる鋭い観察眼も持っている。電気抵抗が高い特殊体質で雷系の攻撃が効きにくい。

怒りなどの感情が限界を越えて高ぶると、逆に冷静になって思考がクリアになり、この状態になると、集中力が増し、動体視力や観察眼、洞察力がより鋭くなり、戦闘力も飛躍的に上昇する。

●使用技

スカーレット・フレーム
・緋い龍撃命名はM×M

腕に集束させた緋い龍気を撃ちだし炸裂させる技。その際、明日夏の無意識のイメージからオーラがドラゴンの頭部を模す。現在の段階ではドレイクのサポートなしでは消耗が激しく連発はできない。

◎士騎しき 千秋ちあき名前の由来は四季十秋から

スリーサイズ：B72バスト W55ウエスト H74ヒップ

身長：154 cm

体重：44 kg

種族：人間

○プロフィール

本作のヒロインの一人。初登場は第1章。明日夏の妹。駒王学園の高等部一年生で、小猫と同じクラス。幼少の頃に両親の死を間近で見ってしまったために、そのショックか

ら引きこもっていた時期があつたが、イツセーの尽力で立ち直った経緯がある。

●外見

黒髪のロングヘアーを後ろで束ねているイメージモデルは『インフィニット・ストラトス』のシャルロット・デュノア。少しつり目で黒色の瞳をしている。少し幼さを残した容姿をしている。スレンダーで、起伏が控えめな体型。

●性格

普段はクールだが、イツセーに対しては年相応に奥手で恥ずかしがり屋になる。兄の明日夏と同様、家族や仲間想いなため、家族や仲間特にイツセーに危害を加える者には激しい激情をあらわにする。幼少期は人見知りだったが、現在は解消されている。本質は甘えん坊で、幼少の頃は両親にべったりであり、現在もイツセーに依存気味。イツセーへの想いは奥手で恥ずかしがり屋なため消極的だが、ときには大胆な行動に出たり、変に暴走することもある。両親の死から、大切な人物の死には非常に敏感になっている。

●趣味・嗜好

趣味は読書で恋愛ものを愛読する。想いを寄せるイツセーが巨乳好きなため、自身の体型に少しコンプレックスを持っている。

●対人関係

イツセーとは幼馴染みであり、引きこもりから立ち直るきつかけとなった人物。その経緯から「イツセー兄」と呼んで慕い、想いを寄せている。また、精神的な支えとして依存気味にもなっている。兄姉間の仲は良好。末っ子なためか、三人それぞれで差はあれど溺愛されており、イツセーへの想いは応援されている。明日夏にはたまにイツセー絡みのことで発破をかけられたり、暴走したときに諫められたりもしている。

● 周囲からの印象・評価

美少女と言える容姿なため、学園では男生徒から人気があるが、兄である明日夏が恐れられているためか言い寄ろうとする者はいない。

● 能力

蹴り技ブラックホークと黒鷹ブラックホークによる狙撃を得意とし、『怒涛ブラスト・ストライカーの疾風』による攻防一体の風により、全距離をオールラウンドに立ち回れる。第1章時点では油断していたとはいえ墮天使三人を相手に一方的な戦いができる程の高い戦闘力を持っている。

◎ 風間 鵜かぜま つべみ

スリーサイズ：B 92バスト W 60ウエスト H 88ヒップ

身長：178 cm

体重：62 kg

種族：人間

○プロフィール

本作のヒロインの一人。初登場は第2章。雲雀の妹で燕の姉。アーシアの転入と同じころに駒王町へ燕と共に帰郷、駒王学園のイツセーのクラスに転入し、イツセーと一緒にいたいたためにオカルト研究部に入部する。さらに燕と共にイツセーの家に下宿する。実家が忍の家系であり、本人もさわり程度の風間流忍術を扱う忍。幼少の頃に男遊びが激しい母親が原因で両親は離婚、父親からは勘当を言い渡され、さらに母親の悪評が原因でいじめを受けており、駒王町から引越す原因となった経緯がある。

○外見

若干幼げな容姿で常のにんびりそうな雰囲気放っている。髪型は青髪のロングヘア。アーイメージモデルは『真剣^{まじ}で私に恋しなさい!』の板垣辰子。目の形は切れ長で瞳の色は赤色だが普段は糸目。体格は肉付きがほどよく、出るところが出るグラマーな体型。

○性格

のんびり屋で家族想いで、かなりのシスコン。燕とイツセーのことになると抑えが効かず、危害が加わったり、加わろうとすると怒り、狂暴になるが、燕とイツセーがなだめることで大人しくなる。幼少の頃のいじめが原因で人間不信に陥っていた時期も

あつたが、イツセーたちとのふれあいで解消されている。

○趣味・嗜好

趣味は昼寝でお気に入りの抱き枕はイツセー。家事全般が得意。騒がしい場所は基本的に好まない。

◎風間かじま 燕つばめ

スリーサイズ：バスト B 68 ウエスト W 54 ヒップ H 72

身長：152 cm

体重：40 kg

種族：人間

○プロフィール

本作のヒロインの一人。初登場は第2章。雲雀と鶯の妹。実家が忍の家系であり、人もさわり程度の風間流忍術を扱う忍。アーシアの転入と同じころに駒王町へ鶯と共に帰郷、駒王学園の千秋と小猫のクラスに転入し、素直になれないながらもイツセーと一緒にいたいたためにオカルト研究部に入部する。さらに鶯と共にイツセーの家に下宿する。姉の鶯と同じ経緯がある。

○外見

幼げな容姿で少しきつめな雰囲気を持つ少女。髪型は赤髪のツインテールイメージ。モデルは『デート・ア・ライブ』の五河琴里。目の形はつり目で瞳の色は青色。体格は小柄でスレンダーな体型。

○性格

素直になれないツンデレで、かなりの毒舌家。素直じゃないところをいじられやすい主に明日夏から。

○趣味・嗜好

忍の技術を応用したマッサージと針治療が得意であり、マッサージは趣味でもある。忍の技術を応用しているだけあって効果も絶大。

◎ドレイク

初登場は第1章。『緋アグレッション・スカレットい龍衣』に封じられているドラゴン。肉体がオーラで構成

されている特殊なドラゴン。司る色は緋。過去に当時の冬の秘密を探ろうと『緋アグレッション・スカレットい龍衣』の特性を利用して明日夏の肉体を奪おうとしたことがある。能天気で

勝手気ままな非常に遊び好きな性格。明日夏からは肉体を奪おうとした経緯から警戒されているが、ドレイク自身は割と明日夏のことや周囲の状況を気に入っている。周囲と会話する際にはオーラで作られた小型のドラゴンイメージモデルは『遊戯王

『ZEXAL』の銀河眼の光子龍を介して会話する。

—その他—

◎夜刀神 槐 やとがみ えんじゆ

スリーサイズ：B 96 バスト W 58 ウエスト H 88 ヒップ

身長：166 cm

体重：54 kg

種族：人間

本作のヒロインの一人。初登場は第1章。賞金稼ぎ・Cランク。凛々しい容姿をした少女で、黒髪の長髪をポニーテールに結っているイメージモデルは『インフィニット・ストラトス』の篠ノ之箒。少しきつめの目つきをしており、瞳の色はブラウン。体格は鍛練によって引き締まった体つきながら出るところは出ている。鬼刃一刀流を扱う剣士であり、満身創痍だったとはいえ、中級堕天使のデイブラを一蹴するほどの剣術の腕を誇る。明日夏とはお互いの兄が親友同士なため、その縁で知り合い、良好な関係を築いている。アーシアをめぐる戦いのあと、イツセーたちと知り合い、一緒に遊んだことで仲良くなる。

◎ライニー・ディランディ名前の由来はライル・ディランディ+ニール・ディランディから

身長：172 cm

体重：64 kg

種族：人間（血の悪魔の子供たち）

初登場は第3章。コカビエルに奪われたエクスカリバーの奪還任務のために駒王町にやってきた教会の戦士エクソシスト。黒髪イメージモデルは『ブラック・プレット』の里見蓮太郎で褐色肌をした常に刺々しい雰囲気を持つ少年。つり目でキツめの目つきをしており、瞳の色は黒。戦闘スタイルは拳銃型の武装十字器による二丁拳銃と徒手空拳。

◎神田ユウナ名前の由来は神田ユウを女版ぼくしたもの

スリーサイズ：B87バスト W59ウエスト H86ヒップ

身長：164 cm

体重：44 kg

種族：人間（血の悪魔の子供たち）

初登場は第3章。コカビエルに奪われたエクスカリバーの奪還任務のために駒王町

にやってきた教会の戦士エクソシスト。天真爛漫で人懐っこそうな雰囲気を持つ少女。かなりの食いしん坊であり大食らい。黒髪をポニーテールにしているイメージモデルは『D・Greyman』の神田ユウ。黒い瞳をしている。戦闘スタイルは刀型の武装十字器による二刀流。

◎クロエ・シュバリエ

スリーサイズ：B^{バスト}85 W^{ウエスト}59 H^{ヒップ}89

身長：159 cm

体重：44 kg

種族：人間

初登場は第3章。レティシアの双子の妹。ネストのメンバー。

◎レティシア・シュバリエ

スリーサイズ：B^{バスト}85 W^{ウエスト}59 H^{ヒップ}89

身長：159 cm

体重：44 kg

種族：人間

初登場は第3章。
クロエの双子の姉。
ネストのメンバー。

登場人物：サブキャラクター

—— 主要人物関係者 ——

◎霧崎きりさき 美優みゆ名前の由来は霧島美穂＋神崎優衣から

スリーサイズ：B87バスト W55ウエスト H83ヒップ

身長：164 cm

体重：56 kg

駒王学園高等部の二年生で、明日夏たちと同じクラスの少女。両親がおらず、一人暮らしをしている。髪型は黒髪のセミロングイメーজモデルは『Fate／Prototype』の沙条綾香。黒い瞳をしており、メガネをかけている。元浜の特技による測定では、着痩せするタイプで、隠れ巨乳とのこと。温和で、あまり目立ちたがらない性格をしており、一見すると地味な印象を受けるが、明日夏曰く浮世離れた雰囲気を持っている。家事好きで、セール商品に関して情報通。明日夏とは同じ家事好きということもあって、学園でもよく意見交換するぐらい意気投合しており、買い出し先でもしよっちゅう遭遇している。明日夏との縁でイツセーたちとも仲がいい。

◎夜刀神 やとがみ 蓮火 れんか

身長：175 cm

体重：62 kg

種族：人間

初登場は第3章。槐の兄。賞金稼ぎ・チルドレンBランク。鬼刃一刀流の使い手。

飄々とししながらどこか不敵な雰囲気を漂わせる不良系イケメンの少年。赤みがか

かった茶髪をポニーテールにしているイメージモデルは『銀魂』の沖田総悟（五年後）。

つり目で赤い瞳をしている。『双持者』であり、状態変化系の『龍の耳』と属性系

の『紅い雷火』の所有者で、それぞれ禁手。『龍の音響結界』、

『紅蓮の霹靂一閃』へと至らせている。ノリが軽く、悪戯好き。子供好きでもあり、

子供に危害を加える者には一切容赦しない。神速の踏み込み速度と剣速を誇る居合の

達人であり、鬼刃一刀流の秘技である『極域』と奥義を修めてる。

◎番場 ばんば 樹里 じゅり

スリーサイズ：B85 W57 H88

身長：175 cm

体重：59 kg

種族：人間

初登場は第3章。不敵ながらも親しみやすい雰囲気をした二十代後半の女性。茶髪を後頭部でまとめて結っているイメージモデルは『Fate』シリーズのネロ・クラディウス。ブラウンの瞳をしている。元賞金稼ぎで、現在は情報屋。元Aランクでもあったので、実力も高く、情報屋になった現在でも衰えていない。情報屋稼業に勤しむ傍ら、駒王町の繁華街の人通りの少ない一角でBAR『JB』の経営もしている。気さくな人柄で細かいことを気にしない性格。情報屋稼業では顔馴染みをお得意さまとして優遇する傾向にある。

◎アルミヤ・A・エトリア名前の由来はアルトリア+エミヤ、ミドルネームのAはアーチャーから

身長：188 cm

体重：68 kg

種族：人間

初登場は第3章。コカビエルに奪われたエクスカリバー三本の奪還任務のために駒王町にやってきた教会の戦士。褐色肌をした落ち着いた雰囲気を持つ青年。白髪を

オールバックにしているイメージモデルは『Fate』シリーズのエミヤ。赤い瞳をしている。創造系セイクリッド・ギア神器『聖剣創造』の所有者。禁手バランス・ブレイカーは亜種で『極聖輝の剣製』。特殊な聖剣使いの因子を保持しており、聖剣に多大負荷をかけて最終的に修復不可能な状態にする反面、聖剣のオーラと力を何倍にも強化する特性がある。

——その他——

◎M×M

第1章で突然、明日夏の前に現れた謎の人物。ローブを着込み、目の周りだけを覆う形状をした仮面で素顔を隠し、声をなんらかの力で加工しており、男か女かの判別もできないほどに正体を隠している。正体不明のハンターを自称しており、明日夏に興味があると告げている。その怪しすぎる風貌から明日夏には警戒心をあらわにされている。

——敵——

◎ダイブラ

レイナーレの部下である中級墮天使で、薄い青紫色の長髪をしており、顔立ちが整った男。表面上は紳士的な口調をしており、物腰も丁寧で、上司であるレイナーレをたてているが、本性は他者が苦しみ、絶望するさまを見て楽しむ外道。レイナーレに付き従っているのも、レイナーレが利用しやすいという理由であり、レイナーレや他の仲間のこととも見下しており、いざつてときは全責任を押しつける対象としか思っていない。グリゴリの方針に対しても不満を持っている。実力もレイナーレよりも上であり、光力で作った剣を無数に展開させ、波状的に射ち出す戦闘スタイルを得意とする。一斉掃射中に一部の光の剣を自在に操作して相手の死角をついたり、巨大な槍のように束ねることで強力な一撃を放つこともできる。相手の不意を衝いて転移させて孤立させたり、攻撃をくらう直前に転移することで攻撃を躲すなど、転移の術にも長けている。アーシアをめぐる戦いでは、転移で明日夏を孤立させ、明日夏を翻弄して圧倒するが、油断と趣味を優先して明日夏を煽った結果、明日夏に『緋アグレッション・スカーレット、い龍スカーレット・ドラゴン、衣スカーレット・ドレス』を使う決意をさせてしまい、逆に圧倒される。最後は片腕と両翼を斬られたうえで緋い龍撃をくらい敗北するが、転移で明日夏の攻撃の直撃は避けた。レイナーレたちがリアスたちに討たれたことで責任を押しつける相手がいなくなったことであとがなくなり、精神の均衡を大きく欠く。逆上して明日夏に報復しようとして明日夏の周りにいる人物たちを殺そうとするが、最後はそこに駆けつけた槐によってバラバラに斬り裂かれた。

オリジナル用語

——バウンテイハンター賞金稼ぎ関連——

◎賞金稼ぎバウンテイハンター

作中の一般的なものではなく、一般人に被害を出し、驚異となる異形の存在、異能を扱う者を討伐して各国の政府から賞金を得る業者たちの呼称。『ハンター』とも呼称される。討伐以外にも異形・異能力が絡んでると思われてる事件の調査や解決なども行っている。バウンテイハンター賞金稼ぎになるためには、ハンター協会に申請し、ライセンスを得る必要がある。主に人間がほとんどだが、人外、人外の血を宿す者も少なからずいる。職業の性質から、ならず者も多く、バウンテイハンター賞金稼ぎ間のトラブルも多い。

◎ハンター協会

各国の政府によって組織されたバウンテイハンター賞金稼ぎを管理する機関。『ギルド』と呼称され、世界各国に点在している。ハンターの活動を管理し、ハンターになるためのライセンスの授与などを行っている。他にもハンターのサポート、賞金首の認定、ハンターへの特別依

頼なども行っている。

◎ハンターランク

バウンティハンター

賞金稼ぎがどれだけの実力があるのかを表すものであり、細かくランク分けされて、Gから始まり、F、E、D、C、B、Aとあり、実績を積んでハンター協会に実力を認められることで上昇していく。Dまでを下位ランカーと呼び、C以降は上位ランカーと呼ばれている。B以上の上位ランカーにはハンター協会に寄せられた特別な依頼を任されることもある。

◎賞金首ランク

賞金首がどれだけ驚異かを表すものであり、細かくランク分けされて、高い順からS〜G級まであり、ランクが高いほど、かけられた賞金も高額となる。強さだけでなく、過去の被害や将来的な驚異度も考慮されている。

—— 武器・装備 ——

ライトニングスラッシュ

◎雷 刃

明日夏専用に使われた高い切れ味を誇る高周波ブレード。術式に干渉できる術式が施されており、異能の力に対する耐性と破壊力もある。刀を鞘に収めた状態で、音声コードを口にすることで、ふたつの機能が作動する。ひとつは刀身に電流を流し込むことで切れ味と強度を一定時間の間だけ強化する機能。音声コードは「Slash」。もうひとつは肉体に電流を流し込むことで身体能力を強化する機能。音声コードは「Attack」。この状態になると刀は使えず、肉体への負担も大きい。解除コードは「Release」。

◎ 黒鷹
ブラックホーク

千秋専用に使われた機械仕掛けの弓。力を溜める機能と射ちだす際に加速をかける機能があり、飛距離と貫通力を高めた超遠距離からの狙撃ができる。専用の矢が数種類ある。

○ 専用の矢

・ 通常型

通常の矢で、貫通力に秀でている。

・ 拡散型

射出から設定した飛距離に達した瞬間に複数の鏃を拡散して射ちだす矢。

・炸裂型

爆薬が内蔵された矢で、異能の力、衝撃などに反応して起爆する。

◎士騎家専用戦闘服

冬夜が知り合いに頼んで製作された戦闘服。頑丈であらゆるダメージに対して高い防御力を誇り、動きやすく、通気性もよく、耐熱性、耐寒性、身体能力を強化する術式も組み込まれている。また、兄弟それぞれの戦闘服には、それぞれの戦闘スタイルに合わせた仕様にもなっている。冬夜の趣味が少し入っており、黒ずくめで、前開するタイプのロングコートと指ぬきグローブが共通となっている。明日夏の感想は「中一臭い」とのこと。

○明日夏専用

近距離での戦闘を得意としている明日夏に合わせ、より頑丈で高い防御耐性を持つ超接近戦仕様になっている。出で立ちは兄弟共通のロングコートと指ぬきグローブ以外の特徴として、タンクトップ型のインナー、ズボン、ブーツという構成。

○千秋専用

蹴り技を多用する千秋に合わせ、脚力を中心に身体能力を高め、回避率を高めるためにより動きやすいように作られている。そのため、基本的に回避前提な仕様となってお

り、必要最低限の防御耐性しかない。出で立ちは兄弟共通のロングコートと指ぬきグローブ以外の特徴として、インナーがシャツ型で灰色となっており、ホットパンツ、ロングブーツという構成。右手のグローブは黒鷹ブラックホークを扱う際に手を保護するために、ゆがけに似た形状になっている。

◎暮紅葉くれもみぢ

レンが使用する太刀。鞘にはトリガーとカートリッジが備えられている。カートリッジには『クリムゾン・レベイン紅い雷火』の紅雷がチャージされており、トリガーを引くことで、刀身に紅雷が放電され、『飛電の太刀』のチャージの短縮や『孤月紅刃』を使用できる。

◎賞金稼ぎ用の装備バウンティハンター

ハンター協会が販売している賞金稼ぎバウンティハンター専用^{バウンティハンター}に用意された装備。特殊な術式や加工が施されており、異形の存在や異能力者と戦えるだけの強度と攻撃力を持っている。ナイフや刀などの刃物、銃などの小火器や重兵器、特殊な装備などと種類が豊富である。

◎武装指輪アームズリング

賞金稼ぎ用の装備。宝石部に装備を収納しておき、状況に応じて装備を取り出すことが出来る指輪。賞金稼ぎの必需品。バウンティハンター

○バーストフアング

爆薬が内蔵された投擲用のナイフ。異能の力、衝撃などに反応して起爆する。誤爆の危険がないように安全装置がつけられており、グリップをひねることで解除される。

○フラッシュフアング

バーストフアングの閃光弾バージョン。閃光を放ち、相手の視界を奪う投擲用ナイフ。バーストフアングと仕組みは同じ。

—— 鬼刃一刀流関連 ——

◎鬼刃一刀流

人間が異能の力に頼らず、剣の力のみで異形の存在を斬るために編みだされた剣術。

○剣技

・一の型 疾風はやて

強烈な踏み込みで相手に一瞬で接近して斬る剣技。歩法としても使用でき、連続で使用することで、長距離を短時間で移動することもできる。もつとも基本な技であり、それゆえに他のすべての型と併用ができる。

・二の型 螺旋撃らせんげき

回転の勢いを乗せることで斬撃の威力を高める剣技。

- ・ 三の型 雫一穿しずくいつせん

腕を引いた構えから打ち出される神速の突き。腕を引く動作ができれば、どんな体勢からでも放てる。

- ・ 四の型 落葉切りらくようぎ

渾身の力で放つ神速の居合い斬り。

- ・ 五の型 天翔脚てんしょうきゃく

強烈な踏み込みでジャンプして相手を斬る剣技。遮蔽物や壁、天井を足場に連続で使用することで、空中戦を可能にすることもできる。

- ・ 六の型 飛燕兜割りひえんかぶとわ

相手の攻撃を足場にして飛び上がり、落下の勢いを乗せた唐竹割りで相手を斬る回避と攻撃を両立した剣技。

- ・ 七の型 陽炎かげろう

極限の緩急によって作りだした残像を利用した回避技。他の型と併用することで回避と攻撃を両立できる。

- ・ 八の型 獣爪撃じゅうそうげき

ほぼ同時に繰り出す三連続の斬撃。名前の通り、獣の爪で切り裂かれたような斬り傷

を残す。

・九の型 せうりゆうげき 双龍撃

ほぼ同時に二方向から繰り出す斬撃。同時に二つの対象を斬ることができる。一方の斬撃を囷にして、もう一方の斬撃で相手を斬るといった奇襲法もできる。

・十の型 斬り嗣ぎ舞まい

勢いを殺すことなく斬撃を繋げるように放つことで、連続攻撃特有の隙をなくした連続斬撃。

○秘技

・錬域

極度の集中状態になることで至る境地。スポーツで起こる『ゾーン』に似た状態で、それを剣術を扱うことに特化させたもの。この領域に至ることで、視界から入る不必要な情報がカットされ、そのぶん、動体視力や洞察力が高まり、さらには反応速度や身体能力も上昇する。肉眼では見えなかった異能の力も見えるようになる。身体的変化として瞳からハイライトが消える。鬼刃一刀流の使い手にとっては基本の技術であり、自由とその領域に入ることができ、常にその状態を維持することができるのが基本。未熟な者の場合、消耗が激しいだけでなく、感情が高ぶりすぎると解除されることもある。

— 組織・部隊 —

◎ネスト

『神の子を見張る者』のエージェントチーム。討伐任務のほか、護衛や事後処理を担当している。

◎執行者

『聖書の神の死』を秘匿するために組織された教会の暗部組織。信徒や他者に神の死を認知されるのを防いだり、また不用意に知ってしまった者を秘密裏に処理するのが役割。構成員は厳選な審査のもと、神の死を知つても揺るがぬ信仰心と心の平常を保てる者と判断され、神の死を知らされた者たち。任務の内容上、その存在は極秘とされており、存在を知っているのは『熾天使』のメンバーと神の死を知らされている一部の上層部の面々だけである。少数精鋭の組織なため、基本的に構成員の現場判断に委ねられている。

オリジナル神器（セイクリッド・ギア）

◎ 緋い龍衣
アグレッション・スカレット

所有者：士騎明日夏

ドレイクを宿す神器。セイクリッド・ギア ドレイクのオーラを自在に操り、さまざまな形に形態変化させることができる。このオーラにはあらゆるものと混ざりあい、侵食する特性を持ち、その性質を利用して武器の強化などもできる。扱えるオーラの総量は宿主の練度に比例している。能力を引き出せば引き出すほど、ドレイクから干渉されやすくなる。

● 極焔の緋龍
アドバンスド・スカレット・バースト

ドレイクが意識を表に出しているときに神器をバースト状態にすることで覚醒させた疑似禁手。能力は単純で『緋い龍気』を一気に全面解放させる。爆発的に戦闘力を上げることができるが、代償に明日夏の肉体にも、神器そのものにも多大な負担をかける諸刃の剣。明日夏の生命力を減らし、最悪、明日夏が再起不能に至る可能性がある。イメージモデルは『起動戦士ガンダムOO』のTRANS-AMと

『NARUTO』の尾獣の衣バージョン1。

◎怒涛の疾風

ブラスト・ストライカー

所有者：士騎千秋

属性系、風系攻撃系セイクリッド・ギア 神 器。両手から風を発生させて操り、攻撃以外にも防御や飛

行などにも応用できる。

◎死の傀儡

コープス・マリオネット

所有者：カリス・パトウーリア

死体を操り使役する状態変化系セイクリッド・ギア 神 器。

●死傀儡師による狂演劇

コープス・クレイジー・パベットシヨイ
パランス・ブレイカー

カリスの禁手。死体を操るだけでなく、死体の修復や改造を行え、死体に自身の

感覚をリンクさせることで、自分の肉体のように動かし、見聞きや触った感触を感じられるようにすることができる。死後数十秒以内であり、死してもなお強烈な想いを抱いている対象に能力を使うと、その死者は意思を持った状態で復活するが、カリスのコントロールが効かず、抱いていた想いに沿ってしか行動しないという欠点がある。

◎黄光矢スターリング・イエロー

所有者：シャルト

光系攻撃系神器セイクリッド・ギア。原作の『青光矢』、『緑光矢』の亜種。能力は同じ。シャルトは軌道変更できない代わりに速度のある矢や無数に分裂して飛翔する矢を放てる。

◎龍の耳サウンド・レシーバー

所有者：夜刀神蓮火

聴覚を強化する状態変化系、封印系（ドラゴン系）神器セイクリッド・ギア。原作の『龍の手』と

同じタイプの神器セイクリッド・ギアとしてはありふれたものだが、「ドラゴンを封じた神器」なので潜在能力は高く、レンは半径一キロ圏内の音を正確に聞き取れる。広い範囲の音を捉えようとするほど神経使うため、普段は三百メートルくらいに抑えている。弱点として聴覚を狙った音による攻撃に弱く、レンは対策として聴覚を保護するための遮音ヘッドホンを常に身に付けている。

●龍の音響結界スプレッド・サウンド・レシーバー
バランス・ブレイカー

レンの禁手。能力は聴覚の周囲への拡張。離れた場所の音をダイレクトに聞き

くことができ、それにより、より正確に音を聞き取ることができ、人間には聞こえない周波の音さえも聴くことができる。反面、バランス・ブレイカー禁手前よりも聴覚を狙った音による攻撃が弱点になっている。

◎クリムゾン・レベン紅い雷火

所有者：夜刀神蓮火

紅い雷を操る属性系、雷系攻撃系セイクリッド・ギア神器。レンは能力を巧みに使いこなし、肉体に

紅雷を纏うことで身体能力を強化する『紅纏』や暮紅葉に紅雷を集束させ、居合の動作で様々な雷撃を放つ『飛電の太刀』、暮紅葉の刀身から紅雷の刀身を伸ばす『紅刃』などの様々な技を編みだしている。

○ベにまとい紅纏

紅雷を纏うことで身体能力を上昇させる。纏い方を変化させることで計八つの形態になることができる。

・ほのいかづち火雷

もつともバランスがよく、他の形態への起点となる基本形態。

・おほいかづち大雷

紅雷で細胞を活性化させることで治癒力を高め、傷を高速で治癒させる形態。欠点と

して肉体に負担をかけるうえに体力を著しく消耗する。得られる治癒力も止血レベル程度まで。

・若雷わかいかづち

身体能力の強化を最低限にするかわりに手に持つ刀に紅雷を流し込むことで斬撃を強化する形態。派生技として身体能力の強化に回している紅雷も刀身流し込むことで、刀身から紅雷の刃を伸ばす『紅刃』べにはが使用できる。

・土雷つちいかづち

身体能力の強化を最低限にするかわりに防御力を高める形態。派生技として身体能力の強化に回している紅雷も防御に回した『土雷・硬』がある。

・鳴雷なるいかづち

足に重点的に纏うことで速さを強化する形態。

・伏雷ふしいかづち

腕に重点的に纏うことで剣速を強化する形態。

●紅蓮トランジエント・クリムゾン・ライトニングの霹靂バランス・ブレイカー一閃

レンの亜種の禁手バランス・ブレイカーであり、一度放つとすぐに解除される禁手バランス・ブレイカーとしての発展や拡張を必殺の一

撃必殺型の能力を有している。その能力は禁手バランス・ブレイカーとしての発展や拡張を必殺の一

太刀に集約させることで一撃の威力を極限にまで昇華させた超高速居合斬りと斬った対象を焼き払う雷撃による同時攻撃。極限の紅纏によつて太刀の切れ味と身体能力が極限にまで高められており、その速さは雷の如きであらゆるものを斬り裂く。さらに斬った対象に切断箇所から太刀を通じて大量の紅雷を流し込み、相手を内側から雷撃で焼き払う。その威力は掠つただけでもその箇所を消し飛ばすほど。欠点として、肉体への負担と消耗が大きく、また一撃ごとにインターバルがあるため連発ができない。そのため、ここぞというときにしか使えない。

◎ 聖剣創造

ブレッド・ブラックスミス

所有者：アルミヤ・A・エトリア

原作で登場したあらゆる属性を付与した聖剣を生成できる創造系セイクリッド・ギア 神器。アルミヤは主に属性が付与されていない代わりに強度を高めたものを使用する。

● 極聖輝の剣製

イミテーション・ブレッド・ワークス
バランス・ブレイカー

本来の禁手である『聖輝の騎士団』から『創造』の能力を突き詰めることで至つたアルミヤの亜種の禁手。伝承などに登場する伝説クラスの聖剣を複製できるが、複製した聖剣はオリジナルよりも性能がワンランク低下する。『聖輝の騎士団』から発

展させた禁^{バランス・プレイヤー}手であるため、騎士団を使役する能力も健在。

第1章 旧校舎のディアボロス

Life. 1 土騎 明日夏

俺の名前は土騎明日夏。とある学園に通っている高校二年生だ。ちなみに部活には所属していない。

そんな俺が現在いる場所はとある廃工場。そして、俺の目の前にいるのは――。

「アーツハハハハハハッ！ どうしたの？ ずいぶんとおとなしいわねえ！ 坊やあ！」

甲高い笑い声をあげ、醜悪な笑みを浮かべているバケモノ。四肢が太く、巨大な手からは鋭利な爪を生やしており、顔は恐ろしく醜い。まさに『バケモノ』といった風貌だった。

バケモノはゆっくりと俺に近寄ってくる。

「怖くて動けないのかしらあ？　大丈夫よお！　こわいのは一瞬だからああああッ
！」

バケモノはその鋭い爪を振りかぶり、俺めがけて振り下ろした。

さて、なんで俺がこんな場所で、こんなバケモノと対峙しているのかというと、少し
遡る――。



私立駒王学園。幼小中高大一貫の進学校で、俺はその高等部に通っている。

この学園は数年前まで女子校で、最近になって共学になっており、そのためか男女比率ではいまだに女子の割合が多い。学年が下がるごとに男子の比率は上がるが、それでもやはり全体的に女子が多かった。それから海外から留学してきた生徒も多い。

そんな学園に俺が高校から志望した理由だが、特に深い理由はない。単純に近場だったことと、物心がつく前からの幼馴染みでもある親友と中学からの悪友の男子たちがそこを志望したから「じゃあ、俺もそこにするか」というものだ。

そんな俺は現在、部活に所属しているわけでもなく、することもないので帰路につこ

うとしていた。その途中、学園内の坂になつてゐる芝生に横ならびで仰向けに横たわつていた三人の男子を見つけた。

真ん中の茶髪の男子の名は兵藤一誠。俺と同じく高等部二年で、さつき言つた俺の幼馴染みであり、親友だ。俺や周りは「イツセー」と呼んでいる。

イツセーの両隣にいる丸刈りにした頭の男子と眼鏡をかけた男子も高等部二年で、名前は丸刈り頭が松田、メガネをかけたのが元浜。さつき言つた中学からの悪友だ。そんな三人を上から見下ろしていると、三人の会話が聞こえてきたのだが――。

「あー、おっぱい揉みてー……………」

「兵藤一誠くんに同意イツー！」

「言うな。……………空しくなる」

……………なんとも言えない内容の会話をしていた。
俺が聞いていることに気づかず、三人は会話を続ける。

「松田。元浜。どうして俺たちはこの学校に入学した？」

起き上がったイツセーが二人にそんな質問をした。

「我が私立駒王学園は、女子校から共学になって間もない。よつて、圧倒的に女子が多く、海外からの留学生も多数！」

元浜も起き上がり、メガネのブリッジを指で軽く押し上げ、メガネを光らせながら答える。

「そのため、男子は希少。すなわち、黙っていてもモテモテ！　まさに入れ食い！」

松田も起き上がり、ガッツポーズをとりながら答える。

「これ、すなわち、ハーレム！」

そうイツセーが大々的に叫ぶと、三人は拳を強く握りながらそれぞれポーズをとり、松田が叫ぶ。

「おうよ！ 俺たちに待ってるのは、おっぱい溢れるリア充ライフ！」

……以上の会話から察する通り、こいつらはそんな下心満載な理由でわざわざ偏差値の高いここ駒王学園を志望し、猛勉強の末に合格したのだ。

テンション高々だった三人だが、途端に元のテンションに戻る。

「——の予定が、彼女一人できないまま、入学二年目の春を迎えちゃったわけだ……」

イツセーのその言葉により、三人は遠い目をしながら、走り込みをしている陸上部の女子たちを眺める。

そんな自分たちの現状が空しくなってきたのか、元浜がボソツとこぼす。

「……言うな。……空しくなる……」

三人の会話内容に内心で嘆息する。

いいかげん、黙ってこいつらの会話を聞いているのもあれなので、俺は三人に話しかける。

「何やってんだか。おまえらは」

「「あつ、明日夏」」

声をかけたことでようやく俺に気づいた三人に俺は呆れながら言う。

「あつ、じゃねえよ。何アホみたいな会話してんだよ。……まあ、いつものことだが」

俺がそう言うと、松田と元浜が敵意剥き出しで睨みつけてくる。

「女子に人気のあるおまえには関係のないことだ！ 失せろ！」

「松田くんに同意イイツ！」

こいつらが言うには、俺は女子に人気があるらしい。

——確かに、たまに女子たちから好意的な視線を感じることはあったが。

「モテないことで俺に当たるな。——ていうか、モテないのは日頃の行いのせいだろう

が」

この三人は通称『変態三人組』と呼ばれている。理由はまあ、文字通り変態でスケベだからだ。

普段から堂々とセクハラ発現をしたり、教室でためらいなくエロ本やエロDVDを取り出したりと、女子たちに引かれるような行いばかりを行っている。

極めつけは女子の着替えの覗き行為。はつきり言つて、モテないのは自業自得であつた。

「……………ぐつ……………」

本当のことを言われ、松田と元浜は押し黙ってしまった。

「だけどー！ これはこれで、あれはあれなんだよー！」

イツセーが変な食い下がりをしてくる。

「……………やれやれ……………本当は悪い奴らじゃないんだがな。」

度を越したドスケベだが、欠点はむしろそれぐらいしかない。それどころか、こいつらはちよつとお調子者だが好青年な部類だと言つても過言じゃなかったりする。ドスケベなどころを少し自重すれば、彼女ができて別におかしくなかつたりする。

まあ、その自重ができないから、現状なわけだが。

「明日夏兄。イツセー兄」

そんななか、黒髪を後ろで束ねた一人の女子生徒が俺たちに話しかけてきた。

「千秋か」

「あ、千秋じゃん。いま帰りか？」

「うん」

話しかけてきた女子生徒の名前は土騎千秋。駒王学園の高等部一年で、苗字から察する通り、俺の妹だ。

俺と同じく、イツセーとは幼馴染みで、イツセーのことは兄のように慕っていた時期があり、俺の名前を呼ぶときみたいに「イツセー兄」と呼んでいる。イツセーも千秋のことは妹のように思ってる。

「松田さん。元浜さん。こんにちわ」

「こんにちは、千秋ちゃん！ 今日もかわいいね！」

千秋の挨拶に松田と元浜がテンションを上げて応える。女子にまともに相手にされない機会が多い二人にとっては嬉しいことなんだろうな

千秋も二人が悪い奴らじゃないと知っているの、二人の言動には呆れつつも嫌ってはいない。

「おっと、そろそろ時間だな。俺、行くわ」

「あつ、俺も！」

松田と元浜がいやらしい笑顔を浮かべてどこかに行こうとする。気になった様子のイツセーが二人に訊く。

「どこ行くんだよ？」

「「おまえも来るか？」」

「明日夏、千秋、また明日！」

二人から誘われたイツセーは何かを察したのか、即座に俺と千秋に別れを告げると、そのまま二人についていつてしまった。

「……去り際のイツセーの顔は松田元浜と同じようないやらしい表情だった。

「……またか、あいつら。」

大方、またどつかに覗きに行つたな。……やれやれだ。

本当は注意すべきなんだろうが、言つても聞かないことが明白なので、あいつらにそういうことをするのは正直諦めてる。

「……イツセー兄……」

隣から千秋の落ち込んだような声が聞こえてきた。

千秋がここに来たのは、イツセーと一緒に帰るためにイツセーを探していたからだ。

その理由は、千秋がイツセーに好意を寄せているからだ。

幼少の頃、千秋はある理由で引きこもっていた時期があつた。それを立ち直らせるきつかけとなつたのがイツセーだ。以来、千秋はイツセーのことを兄のように慕い、次第に好意を抱くようになったわけだ。

そういうわけで、千秋はなるべくイツセーとの二人きりの時間を作ろうと、いまのよ

うにイツセーと一緒に登下校などしようとする。家も向かい同士だしな。

で、邪魔するのもあれなので、俺はあれやこれやと適当な理由をつけて、二人とは別々に登下校をしている。

「いつそのこと、さっさと告白したらどうだ？」

これで何回めになるかわからないことを言うと、千秋は耳まで顔を真っ赤にしてしま
う。

このように、千秋はイツセーのこととなると途端に奥手で恥ずかしがり屋になる。そのせいか、いまだに告白できずにいる。

まあ、もともと、人見知りか激しい性格だったからな。そのため、幼少の頃はいつつ
も両親にびつたりだった。いまは人見知りなところは改善されたとはいえ、そういう方
面まではまだまだ積極的にはなれないか。

「ま、後悔するようなことがないようにな」

「……………うん……………」

俺の言葉に千秋は静かにうなずいた。

たぶん、千秋と付き合うようになれば、イツセーもあのスケベなところを多少は自重するだろう。

「ならいいが。——で、どうするんだ？　このまま待つてるつもりか？」

「うん、そうする」

「なら、俺は先に帰る。気をつけて帰ってこいよ」

「わかった」

俺は千秋を残し、その場から去る。

「やれやれ。素直になれないのもだが、あいつもあいつで鈍いのもな……」

イツセーに千秋の想いがなかなか伝わらないのは、千秋が奥手なこともあるが、イツセー自身が鈍いところにもある。

以前、千秋がイツセーに大胆なアプローチをしかけたことがあった。——のだが、それをイツセーは千秋が自分を兄のように慕ってるからの行動だと思ったようだ。さっ

きも言ったが、イツセーは完全に千秋のことを妹のように思っちゃまってるところがあ
る。そのへんが原因だろうな。

まあ、これは千秋自身の問題だし、あんまり俺がとやかく言うことじゃないんだろう
が。

「あつ。そういえば——」

ふと、買っておかなきゃいけないものがあつたことを思い出す。

「ついでに買い出しもするか」



ここで俺たちのことを追加で話しておくか。俺の家族には妹の千秋の他に兄の土騎
冬夜と姉の土騎千春がいる。

.....そして両親は、十二年前に交通事故で亡くなっている。

当時の幼い千秋と一緒に散歩の最中、突然走行中のタンクローリーが車線を外れて歩

道に突っ込み、横転したうえに、積まれていたガソリンが引火して爆発炎上。父さんと母さんはそれに巻き込まれて死んだ。

幸い、事故が起こったのは千秋がたまたま興味を引かれるものを見つけて、それを間近で見ようと二人から少し離れたタイミングだったことで、千秋は爆風で吹っ飛ばされこそしたが擦り傷だけで済んだ。

……だが、同時に幼い千秋は父さんと母さんの死を間近で見ることとなり、ひどいショックを受けることとなった。引きこもりになっていた原因はそれだ。

その後、兄貴は頼れる親戚等がいなかった俺たちを養うために十歳の身でありながらある職業で生活費を稼ぐようになり、その四年後には姉貴も同じ職業についた。

そして、俺と千秋も大学卒業と同時に同じ職業につこうかと考えている。

兄貴は内心では反対してる。なぜなら、それはそれなりの身の危険が伴うからだ。だが、俺たちの意志も固く、兄貴は渋々ながらも俺達の意味を尊重してくれた。ただ、千秋に関しては俺も兄貴と同意件だが。

それまでは兄貴と姉貴の仕送りで生活することになってる。

そんなこんなで、俺はそのことを除けばなんてことのない普通の日常を兄貴たちやイツセーたちと満喫していた。

現在、兄貴と姉貴は基本家を空けており、時間を見つけたときにしか帰ってこない。

そのため、実質千秋との二人暮らしだ。家事のほとんどは俺が自主的に担当している。そのため、このような買い出しはだいたい俺がやっている。

千秋も手伝ってくれるが、俺自身、家事全般をやるのが好きなのと、千秋にはイッセーとの恋のほうに集中してほしいので、家事のほぼすべてを俺一人でこなしている。ちなみに、兄貴と姉貴も千秋の恋を応援している。

「土騎くん」

「ん？」

商店街を歩いていると、駒王学園の制服を着た黒髪でメガネをかけた少女に声をかけられた。

「霧崎か」

俺に話しかけてきた彼女の名前は霧崎美優きりさき みゆう。駒王学園の高等部二年で、俺とはクラスメイトの間柄だ。

「士崎くんもお買いもの？」

「ああ。買っておかないやいけないものを買いに来たついでに買い置きするものでもと思ってるな」

「だったら、今日はこれとこれが安売りしてたよ」

霧崎はそう言うと、手に持つ買いもの袋からセールルのシールが貼られた商品を見せてくる。

霧崎は一人暮らしをしており、この商店街によく買い出しに来ている。

その霧崎とはこうして買い出し先で出会うことが多い。

最初は学校でも特に接点がなかったので、軽く挨拶をする程度だったが、何回か会ううちに同じ家事好きということもあり、次第に学校でも家事関連のことで意見の交換をするようになっていた。

「ありがとうな、いつも」

「いいよ。私もいろいろと教えてもらってるから」

柔和に微笑む霧崎。その笑顔に少し見とれてしまう。

霧崎はおとなしく、あまり目立ちたがらない性格で、一見すると地味な印象を受けるが、俺はなんとなく、彼女からは浮世離れた雰囲気を感じることがあった。

「なら、売り切れる前にセール品を確保しないとな」

「うん。がんばってね。それじゃ、私はこれで」

霧崎とはそこで別れ、俺は教えてもらったセール品の確保のために急いで店にむかう。せつかくくれた情報をムダにしちや悪いからな。



「ふう。もうこんな時間か」

セール品含めいろいろと買ってたたら、すっかり日が暮れてきてしまった。

「さつさと帰るか」

「ねえ、坊やあ」

「——ん？」

買いものを終え、いざ帰路につこうとしたら、妙に色っぽい格好をした黒髪ロングの女性が話しかけてきた。

「何か用ですか？」

俺が尋ねると、女性は自分の胸もとをなでる。

「イツセーたちが見たら、確実に鼻の下を伸ばしそうだな。」

「坊やあ、これからお姉さんと『い・い・こ・と』しなあい？」

「……こんな人通りの多いところでですか？」

「ウフフ。も・ち・ろ・ん、いいところに移動してよお」

女性はさらに唇をなぞりながら言う。

「——いいですよ。少しだけ付き合います」

「うふふ。素直な子ねえ。素直な子、お姉さん、大好きよお」

俺は女性についていき、その場から移動する。

女性に連れられ、徐々に人の気配がなくなっていくなかで着いた場所はとある廃工場だった。

「………こんなところで何を？」

買ったものを入れた袋を少し離れたところに置きながら、俺は女性に訊く。

「もちろん、『いいこと』よお」

「その『いいこと』ってのは？」

「そ・れ・は——私が坊やのことを食べちゃうことよおおおおおツツ！」

突然、女性が狂ったような叫びをあげる。そして、女性の体が隆起していく。四肢は太くなり、大きくなった手からは鋭利な爪が生え、顔も醜くなっていた。まさしく、『バケモノ』と呼べるような風貌になった女性は甲高い笑い声をあげる。

「アーツハハハハハハツ！　どうしたのお？　ずいぶんとおとなしいわねえ！　坊やあ！」

醜悪な笑みを浮かべるバケモノはゆっくりと俺に近づいてくる。

「怖くて動けないのかしらあ？　大丈夫よお！　こわいのは一瞬だからああああッ
！」

バケモノはその鋭い爪を振りかぶり、俺めがけて振り下ろした。

普通の人なら、こんなバケモノを見たら、その姿を見ただけでパニックになり、なんの抵抗もできずにあの爪の餌食になってしまうだろう。——普通ならな。

「——ッ!？」

爪の一撃が俺に届こうとした瞬間、バケモノが驚愕の表情を浮かべる。

理由はバケモノの顔、正確には片目に目掛けて飛んできたもの——俺が懐から取り出

しぎまに投擲したナイフにバケモノは驚いたのだ。

バケモノは慌てて飛んでくるナイフを避けるが、それにより、爪の一撃が逸れる。その隙に俺はバケモノの懐に潜りこむ！

「ふッ！」

「——っ!？」

俺はバケモノの腹に鋭く拳を打ちこんだ！

「はあッ！」

「がああああああっ!？」

俺は打ちこんだ拳に力をこめてバケモノを後方に大きく吹き飛ばす！

「がはっ………ごほっ………！ 貴様、何者だああああっ!？」

血混じりのヘドを吐きながら、バケモノは叫ぶように俺に問いかけてくる。

「……一見見たときから、おまえがはぐれ悪魔だということに気づいていた人間、
と言うべきか？」

そう答えながら、制服のポケットからある指輪を取り出し、右手の中指にはめる。

この世界には漫画やアニメ、ゲームなどに出てくる異形の存在が実在する。

その中に『悪魔』と呼ばれる種族が存在する。人間と契約し、契約者の願いを叶え、その代償として対価を得る種族だ。

そして、悪魔にも法やルールなどがある。それを破り、己の欲のままに行動する悪魔のことを『はぐれ悪魔』と呼ぶ。——そう、目の前の女のバケモノがまさにそのはぐれ悪魔だった。

「ま、ここに来るときに言った通り、おまえの言う『いいこと』とやらには付き合つてやるよ」

「貴様アアアアッ！」

俺の言葉に激怒したはぐれ悪魔が再び、爪による一撃を放ってくるなか、はめた指輪

の宝石部分が輝き、魔法陣が出現する。

魔法陣に手を入れ、手を引き抜くと、その手には二本のナイフが握られていた。俺はナイフを両手に逆手で持ち、身を翻して爪を避ける。

そのまま、片方のナイフをはぐれ悪魔の腕の関節部に突き刺し、もう片方のナイフではぐれ悪魔の首を斬りつける！

「浅かったか」

手応えから首への斬撃が浅かったことを察した俺は、腕に突き刺したナイフを離し、はぐれ悪魔に背中から体当たりを打ちこむ！

「があっ！」

八極拳の技、鉄山靠を喰らい、苦悶の呻き声を出しながら、はぐれ悪魔は再び後方へと吹き飛ぶ。

「……………貴様アアア……………」

ナイフが刺さった腕をだらんとさせ、斬られた首から血を流すはぐれ悪魔は忌々しそうに俺のことを睨みつけてくる。

大したことはないな。F級程度といったところか。

俺はナイフを指輪の魔法陣に収納し、別のものを取り出す。

それは、機械仕掛けの大きめな鞘に収められている鏢なしの刀だった。

俺は居合の構えをとり、音声コードを口にす。

「— S i a s h —」
ス ラ ッ シ ャ

バジッ！

、音声を確認した鞘から電気が迸り、刀に帯電する。

「小癩なああああッ！」

それをこけおどしだと判断したのか、はぐれ悪魔は勢いに任せて突進してくる。

シュツ！

刀を振って、刀身についた血を払い落とす。

落ちてきた鞘をキャッチすると、刀を鞘に収める。

それと同時に、はぐれ悪魔の胴体が倒れ、縦に真つ二つになった頭部が床に落ちた。

「ふう」

はぐれ悪魔が完全に事切れたことを確認した俺は軽く息を吐き、最初に投げつけたナイフとはぐれ悪魔に突き刺したナイフを回収する。

カアアアツ。

突然、廃工場内に紅い光が差し込む。

光の発生源のほうに目を向けると、そこには魔法陣が出現していた。

魔方陣の輝きがさらに増すと、そこから駒王学園の制服を着た四人の男女が現れる。

先頭にいる紅髪の少女が廃工場内の現状を見て口を開く。

「大公からの討伐の依頼が届いたから来てみれば——なかなかおもしろいことになって
いるわね？」

Life. 2 賞金稼ぎ（バウンティハンター）

「これをやったのはあなたかしら？」

突然現れた紅髪の少女——リアス・グレモリー先輩が訊いてくる。

リアス・グレモリー。駒王学園の高等部三年生。オカルト研究部の部長。——というのが表向きの肩書き。

その正体はここ駒王町で活動する上級悪魔だ。

悪魔には階級があり、トップである『魔王』から始まり、『最上級』、『上級』、『中級』、『下級』とある。その中で人間と契約を行い、対価を得る仕事を請け負うのが上級悪魔であり、その活動をするための領地をその上級悪魔には与えられている。俺が住んでいるこの町、『駒王町』がその領地である。

そして、彼女が率いている少年少女たちがグレモリー先輩の眷属悪魔である。眷属とというのはざっくり言えば部下みたいなものである。

「ええ、そうですよ」

とりあえず、訊かれたことに答える。

「そう。あなた、うちの生徒よね。名前を訊いてもいいかしら？」

名前を訊かれ、俺は少し考える。

正直言うと、悪魔と関わりを持つことにはあまり気乗りしなかった。

上級悪魔が率いる眷属悪魔だが、実は純粋な悪魔ではない。『転生悪魔』と呼ばれる、多民族から悪魔に転生した者たちなのだ。むろん、その多民族の中には人間も含まれている。

詳しいことは省くが、悪魔は人口が著しく激減している。しかも、悪魔は妊娠率や出生率がきわめて低い。それが相まって、悪魔は種そのものが存続の危機にある。

それを解消するために生み出されたのが転生悪魔だ。

ただ、この転生悪魔にはめんどろな問題がある。それは、眷属が主である上級悪魔にとつてステータスになっていることだ。そのため、優秀な人材を眷属にすることに躍起になっている上級悪魔がいる。ここまでなら別に問題はない。やっかいなのはここか

らだ。

悪魔の社会はざつと言えば、貴族社会だ。そして、上級悪魔はほとんどが貴族から出た者たちで、当然、中には傲慢な考え方を持つ者たちがいる。

上級悪魔が多種族を眷属にする際にそれなりの交渉が行われるのだが、この傲慢な連中の中には相手側にとって不利だったり不当な条件で強制的に眷属にする輩もいる。

俺はそれを危惧して、余計なトラブルを生みださないために、できれば悪魔とは関わりたくなかった。

たかがF級程度のはぐれ悪魔を圧倒するぐらいで俺が優秀な人材だとうぬぼれるつもりもないが、まんがいちもあるからな。

その点を考慮して名を明かすか迷ったが、どのみち、顔を見られたうえに同じ学園に通っていることもバレている。隠しても意味はないか。

「士騎明日夏。駒王学園高等部の二年です。リアス・グレモリー先輩」

「あら、私のことを知っているのね？」

「そりゃ、有名人ですから」

たぶん、学園でグレモリー先輩を知らないヤツは数えるほどしかないだろう。下手

すれば皆無かもな。それぐらい、グレモリー先輩は学園では有名だ。

「とりあえず、ここで何があったか、聞かせてもらえるかしら？」

俺は先輩にこであった出来事を簡潔に話した。

そもそも、先輩がここにやって来た理由は、自分の領地に侵入して勝手しようとしていたはぐれ悪魔を討伐するためだ。

「ひとつ尋ねますけど、こいつはどれだけの被害を？」

少し気になっていたので、訊いてみると、先輩は笑みを浮かべる。

「狙われたのは、あなたが最初で最後よ」

それを聞いて幸いだと安堵する。

はぐれ悪魔にとつちや、不幸だったかもしれないがな。

「とりあえず、お礼を言うわね。おかげで私が管理するこの町で犠牲者が出なかったのだから」

「いえ、たまたま遭遇しただけなので」

本当に最初に狙われたのが俺でよかつたよ。俺を狙ったところを見ると、学生、たぶん若い男をターゲットにしていたのだろう。

イツセーたちが最初に遭遇しなくてよかつたよ。現実にはぐれ悪魔の誘いにホイホイ乗って、はぐれ悪魔の胃袋に直行だったろうからな。

「すみませんが、後始末をおまかせしてもいいですか？」

「ええ、いいわ、それくらい」

買ったものを入れた袋を手を持ち、先輩たちを残してその場から去ろうとする。

「最後に訊きたいのだけど。あなたは一体何者なのかしら？」

すれ違いざまに先輩にそう訊かれる。

「——ただの賞金稼ぎになる予定の男ですよ。別にあなたの領地で妙なことをしようなんて気はありません。悪魔と関わるつもりもありませんし」

「そう。でも、もし学校で会うことがあったら、同じ学園に通う者同士、仲良くしましう」

「ええ、それぐらいでしたら」

それだけ話すと、俺は今度こそ廃工場をあとにする。



バウンティハンター
賞金稼ぎ——。

名前だけなら聞いたことはあるだろう。犯罪者や逃亡者を逮捕することで報酬を得る業者のことだ。兄貴や姉貴がやってる、そして俺や千秋なろうとしている業者の名だ。

ただし、それは普通の賞金稼ぎバウンティハンターのことであり、兄貴たちがやってるのはだいぶ異なる。さつき戦ったはぐれ悪魔などの異形の存在、もしくは俺みたいな異能の力を扱う者を

対象にしたものだ。

異形や異能の力などの存在は一般人には基本的に知られていない。だが、それらは世界の裏側で暗躍しており、さっきのグレモリー先輩みたいなのが世界各地にいる。そして、中にはさっきのはぐれ悪魔みたいな一般人に被害を出す存在もいる。

それらに対処する組織や専門家はもちろん存在する。だが、世界は広い。どうしても手が回らないところが出てしまうのだ。現にさっきのはぐれ悪魔のようにな。

そこで各国の政府が一般には非公開でそういった存在に賞金をかけ、そういった存在を対処できる基本的にフリーな者たちに討伐させて賞金を与える制度を作った。そうやって賞金を得る者たちのことが俺が言う賞金稼ぎだ。バウンティハンター たいていは『ハンター』と称されている。

このハンターたちを取り締まるのは政府が組織した『ハンター協会』と呼ばれる組織だ。こっちは『ギルド』と呼称されている。

ハンターになるにはこのギルドでライセンスを取得する必要がある。ライセンスを得る条件だが、ぶっちゃければ、実力を示す。これだけだ。

ハンターには細かいランク分けがされており、高い順からA〜Gランクまである。これはハンターの強さを表しており、実績を積んでギルドに実力を認められればランクは上昇していく。さらに、B以上のランカーには、ギルドから特別な依頼を任せられるこ

ともある。

賞金首にも細かくランク分けされており、高い順からSとG級まであり、ランクが高いほど、かけられた賞金も高額となる。ちなみに、こっちのランクは強さだけじゃなく、被害や将来的な驚異度も考慮されている。

「それにしても、これで何回目くらいだ？」

帰り道を歩きながら俺は軽くぼやく。

今みたいのは初めてじゃない。こういう遭遇は結構以前からあった。俺はハンターになるのを目指し始めたときから鍛えてきたのもあって、そのすべてを振り返りにしてきた。千秋も同様である。実力も高ランククラスとまではいかないかもしれないが、少なくともEランクくらいの実力はあると自負している。

もし、俺がハンターだったら、それなりに稼げて、生活費の足しにできただろうにな。まあ、仕方ねえか。大学卒業後が兄貴が許してくれた条件だからな。

ちなみにハンターがはぐれ悪魔を討伐した際は人間側の政府を通じて悪魔側の政府から賞金をもらうことになっている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう。いつまでついてくるつもりだ？」

歩みを止めて、俺は振り返って物陰に向かって問いかける。

スツ。

すると、物陰から黒いローブを着た者が現れた。フードを深く被っており、顔が俯かせ気味でよく見えないため、男か女かはわからなかった。ただ、わずかに見える口元は薄く笑みを浮かべていた。

実は廃工場を出たあたりからずっとつけられていたのだ。

警戒しながら、手を出してきたらすぐに対処できるようにしていたのだが、黙ってつけてくるばかりだったので、いいかげん、痺れ切らして俺のほうから呼び出したのだ。

「・・・・・・・・ハンターか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

訊いても、ローブの人物は何も答えない。

「もしそうなら、獲物を横取りしちまったか？」

「——いいや」

ようやく口を開いたが、その声は合成音声みたいな加工されたかのような感じの声だった。

魔法かなんかの類で声をぼかしてるのか？

「キミがあのはぐれ悪魔についていくところを見かけてね。もし、手こずるようなら手助けしてあげようかなと見てただけだよ。まあ、必要なかったけどね。それに、ハンター業界で獲物は早い者勝ちだろ？ 仮にそうだったとしても、私は突つかかったりしないよ」

こいつの言う通り、ハンター業界は基本的に実力主義。賞金首の討伐も早い者勝ちで、獲物の取り合いなんてよくあることだ。それゆえに、ハンターには荒くれものも多いし、ハンター同士によるいざこざやトラブルも多い。

実際、俺も「ハンターじゃねえガキが獲物を横取りしやがって」と突つかかれたこと

がある。

——にしても、俺を手助けしようとしたか。正直、信用できなかった。

「だったら、なんでさつきからついてくるんだ？　もう用は済んでるはずだろ？　しかも、そんなふうに正体を明かさないようにして」

「これは私が正体不明のハンターで通してるからだよ」

……正体不明のハンター、ね。

「話を戻すけど、キミをつけてたのはキミに興味があつたからだよ」

「……興味があるのは俺じゃなく、兄貴のほうなんじゃねえのか？」

実は兄貴はハンター業界じゃ、結構有名になってる。なんせ、俺が兄貴がハンターになったことを知ったのは、兄貴がハンターになってから二年後のことで、そのときにはもうDランクとなっており、その二年後にはCランクと若くして数年でランクを上げているのだ。

GとDランクは下位ランカーと呼ばれ、四年で上げられてもこの範囲が限界なのが普

通だ。

それが一気に上位ランカーのCランクだ。だから、本当に興味があるのはそれだけ規格外な実力を示している兄貴のほうじゃねえのかと勘ぐってしまふ。

すると、ローブの人物は俯かせ気味だった顔を上げる。その顔には鼻から上を覆うタ イプの仮面をしており、結局、男か女かははっきりしなかった。

仮面をしてまで正体を隠していることにますます警戒心をあらわにする俺に気にも 留めず、ローブの人物は言う。

「キミのお兄さんの話はもちろん聞いてるよ。たった数年で上位ランカーに到達した天才 才ってね。でもあいにく、私はこの目で見たものしか評価しないタチでね。お兄さんた ちのことは、この目で見たことなく、話でしか知らないんだ。私はね、この目で見たも の以外はある興味ないんだ。だから、今日会ったキミのことに興味を湧いたんだ」

ふーん。それが本当なら、相当変わってる奴だな。——ま、本当かどうかは怪しいが ない。

「あんまり信用してないね」

「今日会ったばかりなうえに、その胡散くさい格好だ。信用しろっていうのは無理な話だろうが」

「それもそうだね」

俺の指摘を聞いて、ロープの人物はクスクスと笑う。

「でも、キミに興味あるってだけは信用してほしいかな」

それを聞いて、余計に胡散くさく感じる。

「ま、今日はそろそろ退散するよ。このままじゃ、ストーカーとして通報されそうだからね。そうなったらめんどうだし。もしくは、キミが懐に隠し持つてるナイフで斬られるかもしれないし」

それだけ言うと、ロープの人物はその場から飛び上がり、建物の屋根に飛び乗る。そのまま、他の建物の屋根に飛び移りながら闇夜に姿を消した。

「………本当になんだったんだ？」

まあ、家族やダチたちに累を及ばさないのなら別に無視すればいいか。………今後もつきまとはってくるのなら、正直ウザいが。

念のため、千秋や兄貴たちにもあいつのことを伝えておくか。



「すっかり遅くなったな」

はぐれ悪魔やグレモリー先輩、あの胡散くさいローブの奴の相手をしていたらすっかり遅い時間になってしまった。

千秋はもう帰ってきてるだろうな。メシどうしてるかな？

「ただいま。千秋、いるか？」

家に入り、リビングのドアを開ける。

リビングに入った俺の視界に入ってきたのは――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

テーブルにうなだれている千秋だった。

「・・・・・・・・・・どうしたんだ？」

とりあえず、うなだれている千秋に声をかける。

ま、大方、イツセーのことでこうなってるんだろがな。

イツセーのことでシヨツクなことがあると、よくこうなるからな。

「イツセーと一緒に帰れなかったのか？」

まあ、十中八九これだろうな。それぐらいの理由でもこうなるからな。すると、千秋はうなだれながら弱々しく答える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・一緒に帰ったよ・・・・・・・・」

あれ、違ったか。学校で千秋と別れてから、起こる可能性だと、これぐらいしか思いつかないんだがな・・・・・・・・

——まさかとは思うが。

「イツセーに嫌われたか？　もしくはおまえが嫌ったのか？」

たぶん、ありえないと思うが、念のために訊く。・・・・・・・・もしこれだったらどうするか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ううん。仲のいい幼馴染のみはまだよ・・・・・・・・」

これも違ったか。——とりあえずホツとする。

それにしても、じゃあ、一体何があったってんだよ？

まさかな——。

「じゃあ、あれか。イツセーがおまえ以外の誰かと付き合うことになったとか？」

「まあ、ないだろ」なんて考えながら適当にそう訊いた。
だが――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

千秋は弱々しく返事をした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。はっ！ ヤベ、一瞬、呆けた。
た。

――ていうか、うん？ あれ？ ・・・・・・・・なんか肯定されたんだが・・・・・・・・。

「・・・・・・・・マジか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちよつと信じられず、改めて問いかけるが、千秋は無言で一切の反応を示さなかった。
・・・・・・・・だが、むしろ、それが肯定の意を表していた。

・ ・ ・ ・ ・ マジかよ。イツセーに彼女ができた？ 千秋以外の？

俺が学校で千秋と別れてから家に帰ってくる間に一体何があったんだ？

とりあえず、千秋を少し落ち着かせるか。そして、詳しく何があったか訊くか。

ちなみにその日、千秋はシヨックで夕飯が満足に喉を通らなかつたのであった。

俺も俺で、衝撃がありすぎて、ローブの奴のことなんて、すっかり忘れてしまっていた。

Life. 3 彼女に殺されました！

「村山の胸、マジでけええええ！」

「80、70、81」

「片瀬ええ、いい足してんなあああ！」

「78、5、65、79」

「こらー！ 俺にも見せろ！ 二人占めすんなってーの!？」

俺、兵藤一誠は現在、松田と元浜に連れてきてもらった覗きスポットに来ていた。場所は女子剣道部の部室の裏。その壁に穴が空いており、そこから部室内を覗けるのだ。

そして、いまは女子剣道部員たちが着替えの真っ最中！ つまり、穴の向こうには楽園があるのだ！

……なのに、松田と元浜がなかなか交代してくれないので、いっこうに覗けないでいた。

松田が感想を言い、元浜がメガネ越しに女子のスリーサイズを測定する特技でスリーサイズを言うたびにますますその穴の先が見たくなってくる!

「やばい! 気づかれたぞ!」

松田が穴から目を離して慌てた様子で叫ぶ。

どうやら、穴の先の女子たちに覗かれているのがバレたらしい!?

「逃げろ!」

元浜がそう言うと同時に松田と元浜が俺を置いて一目散に逃げだした!

「あつ、待てこらあつ!」

俺も二人を追って慌てて逃げ出した!

結局、俺は女子の生着替えを覗くことができなかつた……。

慌てて逃げてきた俺たちは、学園にある旧校舎の前にやって来ていた。

「ふぎけんなよ！ 俺だけまったく見れなかったじゃねえか!？」

俺が捲し立てて文句を言った。

「フツ、この場所を見つけたのは俺たちだぞ。そのぶん、優先権があつて当然じゃあないか」

松田はニヒルに笑いながら言う。

元浜もメガネを光らせながら続ける。

「むしろ、連れてつてやっただけでも感謝するべきだろう?」

「ああ！ おっぱいのひとつでも見られたのなら、いくらでも感謝してやるよ!」

クソオオオオオツ！ 俺も見たかったぞ！ 女子の生着替え！

元浜がメガネを光らせながら言う。

「ふん！ だいたい、千秋ちゃんと一緒に登下校しているヤツが贅沢を言うな！」
「まったくだ！」

元浜の言葉に松田も強く頷いた。

確かに、俺は千秋と一緒によく登下校している。仲のいい幼馴染みで、家が向かいだからそうなるのだ。俺も千秋みたいなかわいい女の子と一緒に登下校できて幸せだ。
ちなみに明日夏はなんか用事があるのか、いつもさつさと一人で行ってしまふ。

「あーあ、これなら千秋と一緒に帰ったほうがよかつたぜ」

俺は二人に自慢するように言ってやると、二人は悔し涙を流し始めた。

「ちくしょう！ なんでイツセーにあんなかわいい幼馴染みがいるんだよ!!」

松田が慟哭するのに対し、元浜は感情を殺すように言葉を絞り出す。

「・・・・・・・・言うな・・・・・・・・!!」
・・・・・・・・空しくなる・・・・・・・・!!」

それでも松田の慟哭は止まらない。

「おまけに、その幼馴染みには超美人なお姉さんがいて、そのお姉さんとも幼馴染みだという！ しかもナイスバディ！」

「……………だから言うな……………！……………空しくなる……………！」

松田が言っているのは、明日夏と千秋のお姉さんのことだ。名前は土騎千春さん。松田の言う通り、それはもう見事なナイスバディな美少女なのである。

そんな美少女姉妹と幼馴染みなのは、周りの男子からすればさぞや羨ましいことなのだろう。俺も逆の立場だったら……………うん、血の涙を流すかもな。

それから、明日夏たちには冬夜さんっていうお兄さんもいる。すぐく頭がよくて、俺たちが難易度の高い駒王学園に入学できたのも、冬夜さんが家庭教師をしてくれたおかげによるところが大きい。——あと、超イケメンだ。明日夏もイケメンだし、まさにイケメン兄弟だ。

そんな明日夏たちとは幼馴染みで、明日夏とは親友とも呼べる間柄だ。

「ん?」

ふと、俺の視界に紅色が入る。

紅い——ストロベリーブロンドよりもさらに紅の髪を持った少女が、旧校舎の窓からこちらを見ていた。

リアス・グレモリー——この駒王学園の高等部三年生。俺の先輩にあたる。我が学園のアイドルでもある。出身は北欧っていう噂だ。

いいなあ……あの真つ赤な髪……

俺がその真つ赤な髪に見惚れてると、リアス先輩は身を翻して中のほうに行ってしまった。



「………なんかゴメンな、千秋」

俺は隣にいる千秋に謝る。

あのあと、松田と元浜と別れ、一人で帰ろうとしたら、一人校門の前にいた千秋を見

つけたのだ。

どうやら、俺を待っていてくれたみたいだ。

．．．．．なんか申し訳なくなり、いまこうして謝っているわけだ。

「いいよ。私が勝手に待ってたわけだから」

「．．．．．つつてもな．．．．．」

「気にしなくていいよ．．．．．あんまり気にされると．．．．．私まで申し訳なくなる．．．．．」

うーん、そこまで言われるたら、気にしないほうがいいのか？

「そういえば、明日夏は？」

「買わなきゃいけないものがあるから、商店街のほうに行くって」
「そっか」

——あいつ、完全に主夫だな。

明日夏たちは幼い頃に両親を交通事故で亡くしている。そのために、冬夜さんと千春

さんが仕事に出て生活費を稼いでいる状態だ。

その冬夜さんと千春さんは仕事の都合で家を空けている。そのため、明日夏が自主的に家事なんかをやっているわけだ。本人が家事が好きだつてもあつて、特に苦には感じていないみたいだ。

その姿はもう主夫と言つてもいいぐらいだ。無愛想だけどイケメンだし、性格も悪くないし、家事もできて、たぶん、いい旦那さんになるだろう。

．．．．．それに引き換え俺は．．．．．学校では松田と元浜と共に変態三人組と女子に嫌われ、彼女のいない学園生活を送っております。

クソツ！ なぜだ!? 当初の計画では、入学早々に彼女をゲットしているはずだったのに！

そのために、女子の多い駒王学園に冬夜さんの家庭教師とスケベ根性で入学したのに！

女子が多ければ彼女の一人や二人、すぐにできると思つたのに——結果は一部の男子——いわゆるイケメンがモテて、俺なんて女子の眼中に入つてなかつた。

．．．．．はあ．．．．．世の中不公平だよなあ．．．．．

．．．．．俺たちの相手をしてくれる女子なんて、ここにいる千秋ぐらいだ。

ちなみに、千秋とは仲のいい幼馴染みで、とくにそれ以上でもそれ以下でもない。

定番の仲のいい幼馴染み同士が恋人同士に——なんていう展開はもちろんなかった。千秋にとって俺はもう一人の兄みみたいな感じなんだろうな。まあ、俺も千秋のことを妹のように思っているけど。

・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・暗い青春だあ・・・・・・・・このまま俺の学園生活は花も実もなく、おっぱいに触れることすら叶わず終わっちゃうのかあ・・・・・・・・。

「どうしたの、イツセー兄？」

「ああいや！ なんでもない！」

そんなふうには、内心落ち込みながら千秋と帰っていると——。

「あ、兵藤くん」

俺たちに話しかけてくる少女がいた。

「霧崎さん？」

話しかけてきたのは、メガネをかけた少女、霧崎美優さんだった。

買い物をした帰りなのか、手には商店街の袋を持っていた。

霧崎さんは俺と同じクラスの女子で、ほとんどの学園の女子に嫌われているであろう俺たちにも普通に話しかけてくれる少女なのだ。

一人暮らして、よく買い物をしているイメージがあった。

それに、家事好き同士で明日夏と意気投合しており、よく明日夏と意見交換してる場面を目撃する。

その縁で、俺たちもちよつとした知り合いになっていた。

——ちなみに、元浜がスカウターで測定したところ、着痩せするタイプで、隠れ巨乳らしい。

「あれ、買い物した帰りなら、ここで会うのはおかしくないか?」

たぶん、商店街で買い物してたんだらうけど、それなら、ここで会うのはおかしかつた。

商店街から帰る場合、こっちは霧崎さんが住んでるところとは真逆のはずだからだ。

「うん、ちよつとね」

「何、学校に忘れもの？」

「ううん、そうじゃなくて、兵藤くんに会いたって子を連れてきたんだ」
「俺に会いたい子？」

「なんだ、誰だろう？」

よく見ると、霧崎さんの後ろに見慣れない制服を着た少女がいた。

「ほら、ちよつと兵藤くんに会えたよ」

「——あ、あの」

霧崎さんに促されて、少女に話しかけられる。

黒髪がツヤツヤのロングでスレンダーな女の子だった。

「駒王学園の兵藤一誠くん……ですよね？」

少女はもじもじしながら尋ねてくる。

か、かわいいいいッ!

とにかく、かわいい子だった!

「あのっ!」

「ああつ! な、何か俺に用…….?」

少女は少しのあいだもじもじすると尋ねてくる。

「…….えつと…….兵藤くんって…….いま付き合ってるヒトとか
います…….?」

「えっ?」

「あつ」

少女は俺の隣にいる千秋を見て、とたんに不安そうに訊いてくる。

「もしかして、隣の子が…….か、彼女さんですか…….?」

「あ、いや。この子は幼馴染みで妹みたいな子で……彼女は……別にいいけど……」

それを聞いて、少女は安心したように息を吐く。

「よかったあ！」

少女は決心したかのような表情になると言う。

「——あ、あの……私と……付き合っていただけませんか」

「はっ？ い、いま、なんて……？」

き、聞き違いじゃないよな!? い、いま——。

「——以前、ここを通るのを見かけて……それで……あの……兵藤くんのことを……」

お、おい! これって!?

「わ、私と………私と付き合ってください!」

マ、マジっスかあああああつ!?

俺、兵藤一誠——女の子から告白されましたあああああツ!



「なっ!?! 何iiiiiiiiっ!?!」

「なぜええっ!?!」

翌日、松田と元浜があるものを見て驚愕していた。

それは——。

「ああ、この子、天野夕麻ちゃん」

イツセーの隣にいる天野夕麻という名の少女のことだ。

「こいつら、俺のダチの明日夏に松田、元浜」

「よろしくね」

天野夕麻が微笑みながら挨拶するなか、イツセーが俺たちにだけ聞こえる声で言う。

「一応、俺のカ・ノ・ジヨ♪ ま、おまえらも彼女を早く作れよ♪」

そう言うと、イツセーは天野夕麻を連れて行ってしまふ。

で、松田と元浜を見ると――。

「ううっ！ 裏切り者めえええっ！」

「あああ………」

元浜は血の涙を流さんばかりに慟哭しており、松田は涙を流しながら呆然としてい

た。

で、今度は千秋のほうを見ると――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

うなだれていた。耳をすませば、すすり泣きが聞こえてきた。

――さて、情報を整理するか。千秋に聞くところ、昨日、イツセーは千秋と一緒に帰っているところに、イツセーに一目惚れしたという天野夕麻に告白され、イツセーは即OKした。

で、今日ここでその天野夕麻をイツセーに紹介された。そして、そのことに松田と元浜は慟哭し、千秋はうなだれながらすすり泣いてるわけだ。

うん・・・・・・・・・・なんでこうなったんだ？

いや、別にイツセーに彼女ができたことが信じられないわけじゃない。ていうか、彼女ができて別におかしくないからな。

イツセーはスケベだが、それを除けば、その人柄はよく、非常に真つ直ぐなところがある。

実を言うと、俺はイツセーのそういうところに密かに憧れてたりする。

まあ、それはいいとして。——そういうわけだから、イツセーのそういうところに好感を持ち、惹かれる女子も少なくはないだろう。

……だが、それは付き合いが長くなり、イツセーのことを理解した場合においての話だ。いや、一目惚れすることがないとは言いきれないが……。

まあ、それもいまでもいいか。

「まさか、兵藤くんに彼女さんができるなんてね」

いつの間にか、俺の隣にいた霧崎がそう言ってきた。

「兵藤くんのことを聞かれたときは、まさかとは思ったけど、本当にそうだったから、びっくりしたよ」

千秋から聞いた話じゃ、イツセーのところに天野夕麻を連れてきたのは霧崎だったらしい。

「ところで、あれ大丈夫なのかな？」

霧崎が指をさすほうを見ると、いまだに泣きわめくバカ二人といつの間にか膝を抱えてうなだれている千秋がいた。

まあ、このままにしておくわけにはいかないよな。

それにしても――。

俺はイツセーたちが歩いて行つたほうを見る。

「どうしたの、土騎くん？」

「――いや、なんでもない」

あの少女、天野夕麻を見ると、なんでか……いやな予感がした。



数日後――。

イツセーと天野夕麻は今日、デートすることになった。

なんで知ってるかって？ イツセーに自慢されたから――てなわけではなく、デート

プランについて相談されたからだ。

……なぜ恋愛経験のない俺に訊く？ まあ、それ以前に、知り合いに恋愛経験がある奴なんていないけどな。

——で、アドバイスなんてできるわけもなく、結局、雑誌などを参考にして、内容は王道なものになった。

そして、俺がいま何をしているのかというところ——イツセーたちのデートの尾行をするために、二人の待ち合わせ場所から少し離れた場所にいた。

ちなみにイツセーは、気合を入れたオシヤレをして、待ち合わせ時間の三時間前に来ていた。

で、待ち合わせ時間が間近に迫ったところで、イツセーに女性が一人近づくと。

「あれは——」

イツセーは女性からチラシを一枚受け取る。

遠目ではなんのチラシなのかよくわからないが、おそらくあれは——。

「イツセーくん！」

そして、天野夕麻がようやく到着した。

「ゴメンね! 待った?」

「いや、俺もいま来たところだから」

三時間もまえに来て、なに言ってるんだか。

ちなみに相談時にイツセーはこんなことを言っていた。

『一度、「待った?」て訊かれて「いま来たところだから」て言ってみたいんだよな』

そのために、確実に先に来るためにイツセーは三時間もまえに来ていたのだ。

そして、二人はデートを開始する。俺は気づかれないように二人のあとをつける。

そもそも、なんで俺がこんなことをやっているのかというと、あの日、イツセーに天野夕麻を紹介されてから抱いたいやな予感。・・・それが日増しに強くなっているのだ。

それが気になってしかたなかった俺はそれを確かめるためにこうして尾行をしてい

るわけだ。

「……………俺の気のせいで済めばいいんだけどな。」

デート風景そのものはいい感じと行ったものだった。町を歩き、ショッピングをし、その際にイツセーが彼女にプレゼントを買ってあげ、ファミレスで食事をする。——王道で鉄板物なデートだった。

「ここまでいい雰囲気だと、俺のいやな予感も気のせいのように思えてきた。」

「——帰るか」

これ以上は二人に悪いだろうと、踵を返して帰ろうとすると——。

「ん？ あれは——」

俺の視界にあるものが入る。それは——。

「……………何やってんだよ……………」

変装をしてイツセーたちを尾行している千秋だった。

いやまあ、気持ちは察せなくてもないが、その変装が問題だった。

千秋の出で立ちは、フード付きのパーカーにサングラスに帽子というものだった。……うん、怪しき満点だ。

変装つてのは、自分を隠すのではなく周りに溶けこませるようになるものだ。「木を隠すなら森」つてな。自分を隠そうと着飾れば着飾るほど、かえって目立つ出で立ちになつてしまふ。

俺も変装しちやいるが、髪を後ろで縛り、伊達メガネをかけた程度だ。あとはスマホをいじるふりでもしていれば、人通りの多いここなら、そのへんにいる若者程度にしか認識されないだろう。

まあ、それはどうでもいいとして。……あれ、どうするか？

自分の妹があんな格好でウロウロしているのは、正直、勘弁願いたいな。

そう思い、千秋のところに行こうとした俺は、視界に入った光景に驚愕する!

イツセーにチラシを渡していた女性がいつのまにか千秋にもチラシを渡していたからだ。

千秋はジーツとそのチラシを眺め、何かを決心したような表情でウンと頷いた!

別のいやな予感を感じた俺はダッシュで千秋のもとまで走るのだった!



「今日は楽しかったね！」

「ああ！ 最高の一日だったよ！」

夕麻ちゃんに笑顔で訊かれ、俺も笑顔で答える。

デートは順調に進み俺と夕麻ちゃんは町外れ公園に来ていた。

夕麻ちゃんは小走りで公園の噴水の前まで行くと、俺のほうに振り向いて言う。

「ねえ、イツセー君？」

「うん？」

「私達の初デートの記念にひとつだけ私のお願い聞いてくれる？」

来た、これ！ 来ましたよ！

「な、何かな、お願いって？」

こ、これって! もしかして、キ——。

「——死んでくれないかな?」

冷たい声でそう言われてしまった。

「え? それって……あれ? 夕麻ちゃん、ゴメン。もう一度言ってくんない?
……なんか……俺の耳変だわ……」

聞き違いだと信じて、乾いた笑いを上げながら訊き返したが——。

「死んでくれないかな?」

夕麻ちゃんは俺の耳元ではつきりとそう言った。

その瞬間、夕麻ちゃんが着ていた服が弾け飛び、ものスツゴいエロい衣装を身にまとい、背中から黒い翼が生えた!

見えた！ いま見えたよな!? 一瞬だけど、たしかに生おっぱい！ ついに初の生おっぱいを拝んじまったぜ！ それにこんなかわいい女の子の！

こういうのをなんだっけ、眼福っていうんだっけ!?

——つて、そうじゃない！ そうじゃなくてさ……羽？

……目の前の光景にただただ混乱してしまう。

夕麻ちゃんは冷たい目つきで言う。

「楽しかったわ。ほんの僅かなとき、あなたと過ごした初々しい子供のままごとにつき合えて。あなたが買ってくれたこれ、大切にするわ」

そう言つて、夕麻ちゃんは俺が買つてあげたシユシユを見せてきた。

「——だから……」

冷笑を浮かべた夕麻ちゃんの手にも光る槍みたいなのが握られる！

「……夕麻……ちや——」

「死んでちょうだい」

俺の言葉をかき消すかのように、手に持つ槍を投げられ——槍は俺の腹を貫いた。



「クソツッ！ なんなんだ、この胸騒ぎは!?!」

あのあと、千秋を諫めるのに苦勞させられた。

千秋はイツセーのことになると奥手で恥ずかしがり屋になると言ったが、ときどき變に暴走することがある。そのときは諫めるのに苦勞するんだよな……。

だが、いまそれはどうでもいい!

千秋を諫めるのに苦勞したせいで、イツセーたちのことを見失った。

別に帰ろうとしてたから、問題なかった——はずだったのに、その瞬間にいやな胸騒ぎ——警告音のようなものが俺の中で響いた!

俺は千秋を適当な理由で帰らせ、イツセーたちを探し始めて現在に至る。

相談のときに聞いたプランと確認できたデートの進行状況をもとに、いまイツセーた

ちがどこにいいのかを予測する。

そして、おそらくいまは町外れの公園にしていると推測し、そこに急いで向かう！
日が傾くにつれ、胸騒ぎがどんどん大きくなっていく。

そして、公園に到着した俺の目に映ったのは――。

「死んでちょうだい」

――服装が変わり、背中から黒い翼を生やした天野夕麻がその言葉と同時に、冷笑を
浮かべながら投げた槍のようなものでイツセーを貫く光景だった。

L i f e . 4 あなたね、私を呼んだのは？

イツセーを貫いた槍はすぐに消え、抑えるものを失った傷口から血が大量に噴き出し……イツセーはそのまま力なく倒れてしまう。

そして、駆けつけた俺に天野夕麻が気づいた。

「あら、人がいたのね？」

俺は天野夕麻を無視し、イツセーのもとに駆け寄る！

しやがんでイツセーを抱き起こし、脈を確認する。まだ脈はあった。——だが、明らかに出血多量……死は免れない事実だった。

「ああ、あなた。その子の友達だった子よね？」

後ろで天野夕麻が問いかけてくるが、俺は答えず、振り向かないで訊く。

「………なんでだ………?」

「うん?」

「………なんでイツセーを殺した?」

「あら、ゴメンね。その子が私たちにとつて危険因子だったから、早めに始末させてもらったの」

イツセーを殺した謝罪と理由を言うが、この女からは誠意なんてものは感じられなかった。

「恨むなら、その子に『セイクリッド・ギア神器』を宿した神を恨んでちょうだい」

自分は悪くないと言いたいかのように平然とのたまう天野夕麻に俺は低い声音で言う。

「———知るかよ」

イツセーをゆっくり寝かせ、立ち上がる。

「——そう言われて、『はい、そうですか』と納得できるかよ」

俺は天野夕麻のほうを向き、明確な殺意を向けて天野夕麻を激しく睨みつける。

「安心して。見られたからにはあなたにも死んでもらうから。よかつたわね？ お友達のところに行けるんだから」

そう言うと、天野夕麻の手にイツセーを貫いたものと同じ光の槍が握られる。

「お友達同士仲良く、天国に行きなさい」

その言葉と同時に槍が俺の胸目掛けて投げつけられた。
だが——。

「え？」

天野夕麻は呆けていた。

理由は俺が槍を刺さる寸前で掴んでいたからだ。

「ただの人間が光の槍を素手で掴んだですって!？」

そして、天野夕麻は驚愕を露にする。

「——俺がただの人間なんて誰が言った。天野夕麻——いや、墮天使」

悪魔がいれば、その大敵の天使も存在する。

その天使が欲を持ち、その身を天から地に墮とした存在が墮天使。この女の正体がその墮天使だ。

俺はこいつが言ったイツセーを殺した理由を思い出す。自分たちの種族を脅かす可能性があるものを排除する。——その行動は理解できなくはない。人間だってやつてることだからな。

——だがな。それで納得できるほど、俺は人間できちやいない!

「……私たちのことを知っている！ いえ、だからといって、私の光の槍を素手で掴むなんて——」

天野夕麻（十中八九偽名だろうが、本名を知らないので仮称）が槍を掴んでいる俺の右手を見て、怪訝な表情を浮かべる。

天使、墮天使は光を操り、それを武器にする。俺が掴んでいる槍も本来なら素手で掴めば手を焼き焦がされるはずだった。だが、俺の手は無傷だった。

その理由は、右手にはさつきまでははめられていなかった指ぬきのグローブがはめれていたからだ。

こいつには特殊な術式が施されており、こういった攻撃から手を保護してくれるのだ。

イツセーを寝かせているときにはめておいたのだ。

「まあ、いいわ。たかが人間ごとさ。さつきと殺してあげるわ」

天野夕麻はそう言うと、手に光の槍を持って構える。

投擲は通じないと考え、接近戦に切り替えたようだ。

俺は掴んでいた光の槍を投げ捨てると、指輪——賞金稼ぎ用の装備の『武装指輪』バウンティハンターから魔方阵が出現し、魔方阵が俺の体を通過する。

すると、俺の出で立ちが黒のロングコートにインナー、ズボン、ブーツに指ぬきのグローブというものになった。背中にははぐれ悪魔との戦いするとき使用した機械仕掛けの鞘に収められた刀も背負っていた。

『武装指輪』アームズリングは寶石部に装備を収納しておき、状況に応じて装備を取り出すことができる指輪だ。そして、俺が着ているのは戦闘服というやつだった。兄貴が賞金稼ぎバウンティハンターの仕事で使う俺専用にと知り合いに頼んで製作してもらったものだ。

性能がとにかくいい。頑丈で防弾、防刃どころか、あらゆるダメージに対して防御力が高い。もちろん、動きやすい。通気性もよくて、耐熱性もある。なのに、耐寒性能もある。おまけに身体能力を強化してくれると至れり尽くせりな性能をしているのだ。

……ただ、兄貴の趣味が少し入ってて、些か、中二くさいんだよな。まあ、それはいまはどうでもいい。

はぐれ悪魔のときは着るまでもないと着なかつたが、この墮天使相手だとそうもいかないかもしれない。たぶん、中級レベルはある。ランクでいうとD級ぐらいはありそうだった。

俺は背中に背負った機械仕掛けの鞘から刀を抜き、片手で構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

睨み合いが続くなか、先に動いたのは俺だった。

「はあッ！」

首を狙い、一太刀でしとめようと刀を振った。

「甘いわー！」

天野夕麻は光の槍で斬撃を受け流した。

俺は気にせず、続けて斬撃を放つ！

だが、天野夕麻も的確に俺の斬撃を受け流す。

しばらくそんな状態が続いたが、ここで変化が起きる。

「残念ね」

天野夕麻がそう言った次の瞬間、俺の刀が上空に弾かれた！

「これで終わりね」

天野夕麻は勝ち誇った笑みを浮かべ、得物を失った俺を貫こうと刺突を放つ。

——甘いのはおまえのほうだ。

ズドツ！

「——つつ!?!」

俺は刺突を躲し、天野夕麻の懐に潜りこんで裡門頂肘を墮天使の鳩尾に打ちこんでいた。

「はッ!」

さらにそのまま鉄山靠で天野夕麻を後方に吹き飛ばす！

「……………かはっ……………
……………貴様……………いずれ至高の墮天使となる私に……………
よくも！」

吹っ飛ばされた天野夕麻は立ち上がると、胸を押さえながら忌々しそうに俺のことを睨みつけてくる。

俺は気にせず、墮天使に向かって駆けだした！

「くっ！」

墮天使が苦し紛れに光の槍を投擲するが俺は裏拳で弾く。

だが、光の槍を弾いた隙を衝くように天野夕麻が勢いを乗せて刺突を放ってきた。

ガキイイイイツ！

「なっ!？」

俺は上空から降ってきた刀を掴み、刃の上で滑らすように刺突を逸らす!

刺突を逸らされた天野夕麻は勢いを止められず、俺に肉薄してきた。

「しまっ——」

ズバツ!

そして、俺はそのまますれ違いざまに天野夕麻を切り裂いた!

俺をなめてかかつてきていたうえに、武器を弾いたことで油断したところに一撃を入られたことであっさりと冷静さ失って考えなしに突っ込んできてくれるとはな。おかげでだいぶやり易かった。

——まあ、そう油断してくれるようにわざとあからさまな狙いの斬撃を放ち、タイミングよく自分のところに落ちてくるようにわざと刀を上弾かせただけだな。

振り向き、天野夕麻を見ると、斬られた箇所を押さえながらうすぐまっていた。

手応えからして、浅くはなかつた。だが、しとめるには至ってないようだな。

殺すつもりで斬ったんだが、うまく身を捻るなりして急所は外したってところか？
腐っても中級堕天使か。

俺は警戒を緩めず、堕天使を見据えて刀を構える。

「……………この私に傷を……………！」

傷口を押さえながらよろよろと立ち上がり、さつきよりも忌々しそうに殺気を込めて激しく睨んでくる天野夕麻。だが、そうするだけで、動く気配はなかった。

急所を外したとはいえ、重傷。それは傷口からの出血量からして間違いはなかった。戦闘を満足に続けるのはまず難しいだろうな。

——なら逃げられるまえにしとめる！

俺はトドメを刺そうと天野夕麻に近寄ろうとした瞬間——。

「——ッ!？」

突然、天野夕麻とは別の殺気を感じ、その場から急いで飛び退いた！
すると、俺がいた場所に、複数の光の剣が突き刺さった！

「くっ！」

俺は殺気を感じたほうに視線を向けると、そこには黒い翼を生やした男——つまり、天野夕麻とは別の墮天使が笑みを浮かべていた。

男墮天使の特徴は薄い青紫色の長髪をしており、顔立ちは整った感じだった。

「何をやっているのですか、レイナーレさま？」

男墮天使は天野夕麻のそばに降り立つと、俺のほうを警戒しながら天野夕麻に話しかける。

レイナーレ——それが天野夕麻の本当の名前か。

「……………うるさいわよ。——デイブラ」

デイブラと呼ばれた墮天使はレイナーレに肩を貸しながら言う。

「アザゼルさまからの命は完了しました。あまり遊んでおられると、この町を根城にしている悪魔に感ずかれてしまいます。そのケガで事をかまえるのは得策ではありません。たかが人間一人の目撃者など、捨て置いて問題ないでしょう」

デイブラに諭されると、レイナーレは再び俺を睨む。

「……いまは見逃してあげるわ……でも、いずれ後悔させてやるわ！」

レイナーレが捨て吐くと、堕天使たちは翼を羽ばたかせ、この場から飛び去ろうとする！

「逃がすか——ッ!？」

逃がすまいと駆けだそうとしたが、デイブラが光の剣を投げつけてくる！

直感的に受けるのはマズいと思った俺は後方に跳んで避ける。

地面に突き刺さった光の剣は爆発し、爆風の衝撃が襲ってくる。

なんとか地面を転がりながら爆風の衝撃を逃し、勢いを利用して体勢を立て直すのが、墮天使たちはすでにこの場から飛び去っていた。

「……………逃げたか！」

墮天使に逃げられたことに内心で舌打ちする。……………追うことも無理そうだな。完全に見失ってしまっており、追跡は不可能だった。

「……………クソッ！」

俺は毒づきながら刀を鞘に収め、着ていた戦闘服から元の私服姿に戻る。

「……………イツセー……………イツセー……………」

俺は死に瀕しているイツセーに歩み寄る。——イツセーはまだ微かに息をしていた。

「……………明……………日、夏……………」

イツセーは虚ろな声音で俺を呼んだ。

「……………なんだ？ ……何か言い残したいことでもあるのか？」

俺は血が出るほど拳を握りしめながらも耳をすませて訊く。

「……………部、屋……………の……………エロ本……………」

「……………こんなときまでそんなことかよ……………」

……………らしいっちゃ、らしいが……………もうちよい、マシな遺言はなかったのかよ……………？

——それ以前にもう声を出すのも厳しいか。

……………もうまもなく、イツセーは息を引き取るだろう。

松田や元浜、イツセーの両親は驚き悲しむだろうな。

兄貴も姉貴も。二人ともイツセーを気に入っていたからな。

千秋には——なんて言えはいんだろうな。たぶん、誰よりも悲しむ。ただでさえ、

一度大切な存在を——父さんと母さんを目の前で失っている。そのせいで、イツセーに依存気味なところがある。……ヘタをすれば、二度と立ち直れないかもしれない。

「クソツ！」

自分の無力さに腹が立ち、当たるように地面に拳を打ちつける！

俺にもっと力があったら、あの女の変装に気づけたかもしれないのに！ そうしていれば、むぎむぎイツセーを殺されることもなかったのに！

何がランクEぐらいだ！ 力を持っていようと、はぐれ悪魔と戦えようが、墮天使と戦えようが、ダチ一人守れないんじゃないの意味もねえ！

避けられないイツセーの死に打ちひしがれていると、イツセーが弱々しく手を上げる。

イツセーは何かを思い起こすかのように、自身の鮮血に染まる手を見ていた。

カアアアツ。

次の瞬間、イツセーから紅色の光が漏れ出した！

俺は光の発生源であるイツセーのポケットを漁ると、一枚のチラシが出てきた。光の発生源はこのチラシだった。

チラシには『あなたの願いを叶えます！』という謳い文句と魔法陣が描かれていた。普通の人なら一見すれば、怪しいもの、詐欺的なものと断定するだろう。

だが、俺は知っている。このチラシの正体を。

チラシがさらに輝きだし、ひとりで俺の手から離れる。

チラシが地面に落ちると、輝きがさらに増し、ひとつの魔法陣が出現する。

魔法陣が輝くと、駒王学園の制服を着た紅髪の少女が現れた。

その少女は、つい先日に出会ったばかりのリアス・グレモリー先輩だった。

グレモリー先輩はイツセーのほうに視線を向けると開口一番に言う。

「あなたね、私を呼んだのは？」



．．．．．真っ赤っかだ。紅。．．．．．あのヒトの髪と一緒だ．．．．．。

鮮血にまみれた手を見ながら、死に体の俺はそんなことを思っていた。

紅い、ストロベリーブロンドよりもさらに紅の髪。この手を染めた色と同じ色だ。

旧校舎で見かけたあのとき、あの紅い髪が俺の目には鮮烈に映った。

ははっ。俺、何言ってるんだ……。これから死んじまうつてのに……。

……。ダメだ、クソツ……。もう、体が全然……。

視界に入っている明日夏の顔もぼやけてきた……。ちくしょう……。な

んでこんなわけのわかかんえ死に方……。

……。ああ。それにしても、薄っぺらな人生だったな……。

……。生まれ変わるのなら、俺は……。俺は……。

……。リアス先輩か……。あのキレイな紅い髪……。

……。あのヒトの……。どうせ死ぬのなら、あんな美少女の胸で死に

たかった……。

「あなたね、私を呼んだのは？」

明日夏じゃない誰かが声をかけてきた。

……。そこで俺の意識は途絶えた……。

意識が途絶える瞬間、俺の目に鮮やかな紅い髪が映りこんでいた。

Life. 5 俺、生き返りました！

「また会ったわね、士騎明日夏くん。早速で悪いのだけど、ここで何があったのか、詳しく話せるかしら？」

グレモリー先輩に訊かれた俺は自身の不甲斐なさからくる苛立ちを抑えながら事の経緯を説明する。

「……ここに倒れてるイツセー——兵藤一誠が墮天使に殺されました。理由はイツセーに自分たちを脅かす可能性がある『セイクリッド・ギア神器』を宿していると判断したからです」

それを聞いて、グレモリー先輩は確証を得たかのような反応してイツセーのほうに視線を移す。

「そう、やはりこの子には『セイクリッド・ギア神器』が宿っていたのね」

それを聞いて、思わず内心で先輩に対して怒りが沸き起こるが、ぐつと堪える。

「——知っていたんですか？ イッセーセイクリッド・ギアに神器が宿っていたことを」

それでも、キツめ口調で先輩に言ってしまった。

「確証はなかったけど、一応目はつけておいたのよ。堕天使がこの子に接触したあたりからその可能性があるとは思っていたわ」

「どうやら、最初から天野夕麻——レイナーレが堕天使だったことにも気づいていたみたいだな。」

「だったらッ！ ——と、感情的になりかけるがなんとか頭を冷やす。」

俺の内心の怒りを察したのか、先輩は申し訳なさそうに言う。

「——ゴメンなさいね。堕天使のことは監視していたのだけど。……私たち悪魔と堕天使の関係のこともあるから、おいそれと介入はできなかつたの。一応は理解して

もらえるありがたいのだけど．．．．．」

悪魔、墮天使、そして天使は過去に大きな戦争を起こした。悪魔の人口が著しく激減したのもその戦争が原因だ。他の勢力も小さくない被害が出ており、互いに疲弊し、いまは停戦状態になっている。——だが、ほんのちよつとの切っ掛けで戦争を再開しかない緊張状態だともいう。

そのことを考えれば、たかだか一個人、しかも他人のことで不用意に悪魔が墮天使と関わるべきではないことは理解できる。

「．．．．．でも、あなたからしてみれば．．．．．納得はできないでしょうね．．．．．」

．．．．．ええ。できたら、墮天使の行動を阻止してほしかったですよ。

．．．．．もつとも、俺がもつとしっかりしていれば、こんなことはならなかったんだがな．．．．．。

俺はふと、先輩にならイツセーのことを生き返らせることができる方法があることを思い出す。

そんなことを考えている俺をよそに、先輩はイツセーのもとまで歩み寄ると、うんと

頷く。

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ」

その言葉に俺は驚く!

「意味はわかるでしょう?」

「ええ」

上級悪魔が他種族を悪魔へと転生させる際にある道具が使われる。それが『イービル・ピース悪魔の駒』と呼ばれるものだ。

『イービル・ピース悪魔の駒』には、死んだ者でさえも悪魔へと転生させることができる。つまり、イツセーを悪魔として生き返らせるということだ。

「——でも、なぜ?」

『イービル・ピース悪魔の駒』には限りがある。だから、主のステータスにもなる下僕選びには慎重に

なってしまうものだ。

正直、頼んだとしても、断られるだろうと思っていたのだが――。

「勘違いしないで。ただ、善意でやるわけではないわ。墮天使が危惧するような神セイクリッド・ギア器を持つこの子が欲しいと思ったからよ」

なるほど。ちゃんとこのヒトナりのメリットはあるわけか。

「理由はどうあれ、イツセーを助けてくることには感謝します。ですが――」

下僕を本当にただの駒のように扱う上級悪魔がいることがあり、先輩がイツセーをそんなふうに扱うかもしれないという一抹の不安を覚え、つい先輩を睨みつけてしまう。

「わかっているわ。あなたが考えているようなことはしないから」

それでも――。

俺はグレモリー先輩を真つ直ぐ見据えながら告げる。

「——仮にそのようなことをするようなら……何があろうとも、あなたからイツセーを引き離す! たとえ、あなたが魔王の妹だろうと!」

そう。先輩は実は魔王の妹でもあるのだ。

それを聞いて、グレモリー先輩は目を細めて言う。

「……それは、下手をすれば悪魔全体を敵にまわしてもかまわないと受け取ってもいいのかしら?」

俺はそれに一切怯むことなく言う。

「……覚悟がなければ、魔王の妹であるあなたにこんな啖呵きりませんよ」

正直、悪魔全体を敵にまわしてタダで済むとは思っちゃいない。十中八九、死ぬだろう。

それでも、イツセーに危害を加えようとするのなら、なにがなんでもかじりついてや

る！

そういう想いと覚悟をこめて、先輩に告げた。

それを聞いて、グレモリー先輩は笑い出す。

「うふふ。あなた、おもしろいわね。いいわ、約束する。絶対にこの子のことは悪いようにはしないわ。我らが魔王さまに誓って」

グレモリー先輩も真つ直ぐ俺を見据えながら言った。

その言葉に嘘偽りがないことを把握した俺は、友人の恩人になるようなヒトに失礼な態度をとってしまったことを詫びる。

「すみませんでした」

先輩は気にしてないと言うように手を振る。

「いいのよ。それだけ、あなたにとって、お友達が大事なことだもの。じゃ、そろそろ彼を生き返らせましょうか」

そう言い、先輩は紅色をしたチエスの駒を取り出す。

このチエスの駒が『悪魔の駒』だ。チエスを模して、『王』以外の駒と同じ数——『女王』が一個、『騎士』が二個、『戦車』が二個、『僧侶』が二個、『兵士』が八個の計十五個がある。

グレモリー先輩が取り出したのは『兵士』の駒八個だった。俺は思わずそれに驚いてしまう。

「八個すべてですか？」

「ええ。こうしないと、この子を転生できないの。それだけ、この子に宿っているものが規格外ということよ」

転生者のスペックが高い場合、転生させる際に必要な駒の数が多くなるケースがあるという。

イツセーは本来、普通の人間だったので、ぶつちやけてしまえば、駒ひとつで十分な程度のスペックでしかないはずである。

先輩の言う通り、イツセーの身に宿っているものはそれだけ規格外だったということ

なのだろう。

何も知らない普通の人間であるイツセーにそれだけ強大な力を扱いこなすのはまず不可能に近い。最悪、暴走して、イツセーのみならず、周りにいる俺たちもタダでは済まなかったかもしれない。墮天使が危惧するわけだ。

グレモリー先輩は『兵士』の駒をイツセーの胸の上にすべて置く。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、兵藤一誠よ。いま再びこの地に魂を帰還せしめ、我が下僕悪魔と成れ。汝、我が『兵士』として、新たな生に歓喜せよ！」

『兵士』の駒が紅い光を発し、ひとつずつイツセーの胸に沈んでいく。

すべての駒が沈み、それに伴ってイツセーの腹の傷が塞がり——イツセーが息を吹き返した！

「ふう。これでもう大丈夫よ。あとはこの子を家へ帰すだけね」

「それは俺がやりますよ」

「じゃあ、お願いするわ。それから、この子には今日のことや悪魔のことは伏せておいてくれるかしら」

「——自力で自分の身の変化に気づかせるためですか？」
「ええ」

確かに、自力で気づいていったほうが、自分の身に起こった変化も受け入れやすくなるか。

それでも、パニックにはなるだろうが。

「頃合を見て真相を話すから、そのときはあなたも来てちょうだい」

「わかりました」

「それじゃ」

グレモリー先輩は魔法陣による転移でこの場から去っていった。

「——さて」

俺はイツセーを担ぐ。

血まみれだったが、幸い時間も時間なので、人がいなくて助かった。

俺はそのままイツセーを担いで家に向かう。
道中、担いでいるイツセーに視線を向ける。

「セイクリッド・ギア神 器 か」

今回の事件が起こる原因となったものの名を呟いた。

『セイクリッド・ギア神 器』

——聖書に記されし神が作ったとされる特定の人間に身に宿る規格外の力。イツセーが殺される原因になったものだ。

その力は様々なものがあり、人間社会規模でしか機能しないものもあれば、あの墮天使が言ったように、種族規模に影響をおよぼす力を持ったものもある。

そして、後者のほうがイツセーに宿っていたとはな。

墮天使が種族規模で危険視したり、先輩の『イーゼル・ピース悪魔の駒』の『ポーン兵士』の駒をすべて使わ

なければイツセーを転生させることができなかつたのことを考えると、相当規格外な力を持ったものがイツセーに宿っていたことになる。

悪魔になったこともあり、イツセーはもう、普通の暮らしはできなくなつた。

イツセーが自分の身に起こつたことを受け入れてくれるかどうか……。

俺も今後のことで兄貴たちと相談したほうがいいだろうな。

「さて……千秋になんて説明するか。……荒れそうだな……」

イツセーが一度死んだこと、悪魔として生き返ったこと、イツセーの身に規格外レベルの神セイクリッド・ギア器が宿っていたこと。説明することがたくさんあるな。

それから家に着いて、すぐに千秋と鉢合わせた。

予想通り、イツセーの状態に慌てたり、イツセーが一度死んだことにショックを受けたり、イツセーが生き返ったことに涙を流しながら安堵する千秋をなだめるのに苦労するのだった。



「おまえら……マジで夕麻ちゃんのことを覚えてないのか?」

「……だから、そんな子知らねえって」

「何度も言うが、俺たちはそんな子紹介なんてされてないし——おまえに彼女とかありえない」

学校の休み時間、俺は松田と元浜に夕麻ちゃんのことを訊くが、二人とも知らない—

—ていうか、初めからいなかったふうに言う。

最初は俺をからかっているのだと思った。

けど、一度真剣に語り合った結果、そうでないと痛感する。

あの日——夕麻ちゃんとデートした日、俺は彼女とデートをして、彼女に殺された——という夢を最近見たんだ。

それからだ。夕麻ちゃんの痕跡がいつさいなくなっていたのは。ケータイにあった電話番号もメアドも消えていた。

夕麻ちゃんと過ごしてきた時間が全部嘘だったと、夢だったと言うのかのよう
に………。

「何の騒ぎだ?」

そこへ、明日夏と千秋がやってきた。

そういえば、夢の最後らへんに明日夏が出てきたな。

「な、なあ、二人とも! もう一度訊くけど、二人とも、夕麻ちゃんのこと覚えてるか!」

俺は二人に詰め寄るが――。

「・・・・・・・・・・夕麻? 俺ももう一度訊くが、本当に誰なんだ?」

「・・・・・・・・・・うん、誰のこと?」

二人から帰ってきた答えは松田と元浜のと同じようなものだった。
明日夏と千秋も夕麻ちゃんのこととは覚えていない。松田と元浜と同じだ。

「どうしたの?」

そこへ、騒ぎを聞きつけて霧崎さんがやって来た。

俺は霧崎さんにも訊く。

「なあ、霧崎さん。天野夕麻って子のこと、覚えてる?」

「・・・・・・・・・・天野夕麻さん? ううん、知らないヒトの名前だよ」

霧崎さんも同じだった。

「おまえ、エロい妄想ばっかしておかしくなったんじゃないか？」

松田が憐れみの視線を向けながら訊いてきた。

「おまえと一緒にするな！ 俺は確かに——」

俺の言葉を遮り、松田が俺の肩に手を置く。

「いいから、今日は俺ん家に寄れ。秘蔵のコレクションを皆で見ようじゃないか！」
「それはいい！ 是非そうしよう！」

元浜も松田の提案に乗った。

二人はグフフフといやらしい笑い声をあげて俺を置いて勝手に話を進めてしまう。

「二人とも、男の子なんだから、そういうのに興味があるお年頃なんだろうけど、もう少し場所を考えたほうがいいよ」

霧崎さんがやんわりと注意を促してきた。

そんな霧崎さんに明日夏が言う。

「・・・・・・・・無駄だ、霧崎。こいつらは言っても聞かねえよ・・・・・・・・」

すると、松田と元浜が明日夏に食ってかかる。

「うるさい！ 美少女を入れ食いしてるような奴には関係のないことだ！」

「・・・・・・・・そんなことした覚えも、やる気もねえよ」

「女子に人気がある時点で入れ食いしてるようなものだ！」

明日夏と松田と元浜のやり取りを見て苦笑していると、千秋に袖を引っ張られる。

「どうした、千秋？」

「・・・・・・・・イツセー兄、大丈夫？」

……千秋にまで、俺がおかしくなったって思われてんのかな？ 真剣に心配
そうに俺のことは見ていた。

俺は千秋の頭をなでながら言う。

「大丈夫だよ。変なこと訊いて悪かったな」

頭をなでられた千秋は安心したような表情になる。

千秋って、明日夏や冬夜さん、千春さんになでられるとちよつといやそうにするけど、
なぜか俺になでられるときはうれしそうにするんだよな？

「おい、イツセー！ なに千秋ちゃんといチャついてんだ！」

「せつかく心配してやってるってのに！ ふぎけるな！」

松田と元浜が血の涙を流さんばかりに怒鳴ってきた。

「い、いや、別にイチャついてなんかいいえよ！」

おもわず、千秋の頭から手を離してしまう！
千秋のほうも顔を真っ赤にしちゃってるし！

「おまえら、少し落ち着けよ」

明日夏が二人を諷めようとするが、松田と元浜の熱は冷めない。

「そんなに千秋ちゃんといチャつけるんなら、彼女がいる妄想なんてしなくていいだろうが！」

「まったくだ！ 何が夕麻ちゃんだ！」

二人の怒りメーターがどんどん上っていくなか――。

「――いい加減、やかましいんだよ」

明日夏のアイアンクローによって、二人は撃沈してしまった。

そんないつも通りの光景にハハハと笑っていると、俺の視界に紅が映る。

学園三年のリアス・グレモリー先輩が俺たちのそばを通り抜けていったのだ。

そのとき、リアス先輩が微笑みながらこちらのことを見ていた。

その瞬間、心まで掴み取られるような感覚に陥った。

そして、不意に思い出した。——リアス先輩らしきヒトが夢に出てきたことを。



『変身！ 花卉ライダーピンキー！』

それから、松田と元浜に「これ以上、千秋ちゃんとイチヤつかせるか！」と無理矢理松田の家に連れてこられて、松田の秘蔵のエロDVDとやらを見ていた。

「おおおッ！ これはモモちゃんの新作、花卉ライダーピンキー！」

「フン、入手にはちと苦労したがな」

二人がDVDに興奮しているのをよそに、俺はいまだに夕麻ちゃんのことを考えていた。

やっぱりおかしい。数日間の記憶が全部夢でしたなんて……普通ありえるか

?

仮にそうだとして、そのあいだの記憶はどこ行っちゃったんだ？

「おい、どうしたんだよ、イツセー？」

考え込んでいると、松田が話しかけてきた。

「おまえ、桃園モモちゃんのファンだろう？」

桃園モモってのは、いま見ている特撮番組に出ているアイドルの名前だ。松田の言う通り、俺は桃園モモちゃんのファンだ。彼女の音声でいろんなシュチュエーションな起こし方をしてくれるという革新的な目覚まし時計を持っているほどだ。

普段だったら、二人と同じようにテンションが上がっていただろうが………ただ、いまは夕麻ちゃんのことと頭がいっぱいで、そんな気分になれなかった。

「そうだ！ さらなるムーディーを演出するため、灯りを消そう！」

元浜はそう言い、立ち上がって部屋の電気のスイッチを押した。

「おおっ！ いい感じ！」

「だろう！」

あれ？ 部屋の灯り消えてなくね？

「なあ、消えてねえぞ」

「あん？ なんだって？」

「部屋の灯り消えてねえだろ？」

「はあ？ おまえ、何言ってるんだ？」

松田と元浜がおかしなものを見るような目で俺を見てきた。

よく見ると、確かに部屋の灯りは消えていた。——でも見える。灯りが点いていたときよりもはつきりと部屋の中が見えている！

「……悪い……俺、帰るわ」

「お、おい。具合でも悪いのか?」

「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・そんな感じだ・・・・・・・・・・」

松田の家から出て、帰り道を歩く。

「・・・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・・・昼間よりはつきり見える」

道中にあつた路地を見ると、もう日が暮れてろくに見えないはずの路地の中がはつきりと見えた。

それに、あの夢を見てからというものの、どういうわけか体から力が溢れてくるみたいな感じがするんだ。

『やだやだ! 買って買って!』

『そんなにわがまま言うと、置いてっちやうわよ』

『やああだあああつ!?!』

俺の耳に駄々をこねる子供と子供を叱る母親の会話が聞こえてきた。

「な、なんで、あんな遠くの声が聞こえてくるんだ!？」

親子がいるのは、ここから百メートルは離れているコンビニだった。普通ならどんなに叫んだとしても、こんなにはつきり聞こえるわけがない!

俺はわけがわからなくなり、その場から駆けだした!

どうしちまったんだ!?! 俺の体おかしすぎだろ!?

当てもなく走っていると、とある公園にたどり着いた。

「・・・・・・・・ここっつて・・・・・・・・夕麻ちゃんと最後に来た・・・・・・・・」

そうだ・・・・・・・・ここだよ。ここは・・・・・・・・夕麻ちゃんとのデートで最後に来た場所だ。そして・・・・・・・・彼女に殺された。

ぞくつ。

突然、背筋に冷たいものが走った!

「なんだ!？」

振り向くと、帽子をかぶり、スーツを着た男がこちらに歩み寄ってきていた。

「これは数奇なものだ。こんな地方の市街で貴様のような存在に会うのだものな」

な、なんだ！ 体の震えが止まらねえ！

「フツ」

「——ツ!？」

男に睨まれ、おもわず後ろに飛んだ俺は、その飛んだ距離に驚愕する。
ちよつと下がったつもりだったのに！

「逃げ腰か？」

男が問いかけてくるが、答える余裕なんてあるわけがなく、その場から急いで逃げました！

その足の速さに再び驚愕する。明らかにいつもよりも速度が上がっているからだ。

普通なら混乱するところだが、いまはありがたい！

全力疾走で走っていると、周囲に黒い羽が舞い落ちてきた。

「羽!? 夕麻ちゃん!」

夢で見た夕麻ちゃんの持つ翼のものと同じ羽だったものだから、一瞬夕麻ちゃんかと思っただが、羽の持ち主は夕麻ちゃんと同じ翼を生やしたさっきの男だった。

男はあっさりと俺を追い抜き、俺の前に降り立った。

「下級の存在はこれだから困る」

ま、また夢かよ!?! これ!?!

「ふん、主の気配も仲間の気配もなし。消える素振りすら見せず、魔法陣すら展開しな

い。状況を分析すると、おまえは『はぐれ』か。ならば、殺しても問題あるまい」

そういう男の手には、夕麻ちゃんと同じ光る槍のようなものが握られていた!

同じ夢なら、こんな男より美少女のほうが一億倍マシだぜ——つて、こんなときまで何考えてんだよ俺は!

「安心しろ。苦しむまもなく、殺してやろう」

男が夕麻ちゃんのように槍を振りかぶる。

夢の通りなら、あの槍で俺は——。

「——死ね」

ドオンツ!

「ぐおおっ!?!」

男が槍を投げつけようとした瞬間、槍が急に爆発した！

「……これは貴様のしわざ——ではなさそうだな」

男がそう言うのと同時に、俺を跳び越えて、黒いロングコートを着た男が俺の前に降り立った。

顔は見えないけど、その後ろ姿から男の正体が俺にはすぐにわかった。長い付き合いだからな。

「——今度は間に合った」

黒いロングコートをなびかせながら言うのは俺の幼馴染みで親友——土騎明日夏だった。

L i f e . 6 俺、人間やめました!

「——無事か、イツセー?」

そう訊きつつ、イツセーの状態を確認する。

見た感じ、怪我はなさそうだな。

「——貴様、何奴だ? 見たところ人間のようだが……。なぜそのはぐれをかばう?」

「答える義理なんてないだろう」

俺は後ろにいるイツセーに気を配りながら目の前の墮天使に言った。

「あ、明日夏! こ、これは一体? てか、なんでここに!? そいつは一体なんなんだよ!?」

混乱した様子のイツセーが訊いてきた。

「いつぺんに訊くな！ 説明はあとでするから、いまは黙って俺の後ろにいろ！」

「あ、ああ！」

イツセーをどうにか落ち着かせて、俺は墮天使を見据える。

「フン、まあいい。人間ごときができることなど、たかが知れている。邪魔だてするのなら、まとめて始末すればいい」

墮天使は光の槍を手にしながら言った。

——随分となめられたもんだ。まあ、油断してくれるのならやりやすくなるけどな。

「くたばるがいい！」

墮天使は俺に向けて槍を投げ放とうとする。

しかも、軌道上にイツセーが入るように!

堕天使の表情には「避ければ後ろにいるイツセーが死ぬ」と言いたそうな邪悪な笑みを浮かべていた。

「はッ!」

堕天使が手に握る槍を放ってきた。

確かに避ければイツセーが死ぬ――。

ギーン!

なら、避けないで対処すればいいだけだ!

「弾いただと!?!」

堕天使は俺が取り出したナイフで槍を弾いたのを見て驚愕する。

「ならば出力を上げるまでだ！」

墮天使はすぐさまさつきよりも光が濃い槍を作りだし、投げつけようとしてくる。

俺はそこへ別のナイフを二本投げつけた！

「こんなもの！」

墮天使はすぐに反応し、槍でナイフを弾いた瞬間――。

ドオオンツ！

「ぐおおっつ!？」

ナイフが爆発し、墮天使は爆風をもろにあびた。

さつきイツセーを助けた爆発も、いまのナイフ――衝撃や異能の力に反応して起爆する『バーストファング』によるものだ。

俺はその場から駆けだした！

爆風で吹き飛ぶ墮天使に肉薄し、スーツを掴んで引き寄せる。

「ふッ!」

「ぐほおおっ!」

そのまま拳による寸勁を打ち込んで吹き飛ばしてやった!

墮天使を吹き飛ばした俺は、後方に何回も飛んでイツセーの前に降り立つ。

「.....ぐおおお.....っ!?!.....き、貴様あああつ.....
!」

墮天使は胸を押さえながら、憤怒の表情で俺を睨みつけてきた。

墮天使はそのまま怒りに任せて、槍を作りだそうとするが――。

「その子に触れないでちょうだい」

その場にかげられた声によって中断された。

少し離れた場所に声の主——リアス・グレモリー先輩がいた。

「・・・・・・・・・・紅い髪・・・・・・・・・・グレモリー家の者か・・・・・・・・・・」

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん」

堕天使は爆風で吹っ飛んだ帽子を拾い、帽子に付いた埃を払いながら不敵な笑みを浮かべて言う。

「・・・・・・・・・・フフ。これは・・・・・・・・・・この町がグレモリー家の次期当主の管轄であったとは・・・・・・・・・・。そこの悪魔はそちらの眷属、その者は契約者と言ったところか？」

俺は別に契約者ってわけじゃないんだが、説明する必要もないので黙ってる。

「その子にちよつかいを出すのなら、容赦しないわ」

「ま、今日のところは詫びよう。だが、下僕は放し飼いにしないことだ。私のような者が、散歩がてら狩ってしまうかもしれないぞ？」

グレモリー先輩の言葉に墮天使は帽子をかぶり直しながら、怯まずに返した。

「ご忠告痛み入るわ。でも——」

グレモリー先輩は視線を鋭くし、墮天使を睨みながら言う。

「私のホームで今度こんなマネをしたら、そのときは躊躇なくやらせてもらおうから——
そのつもりで」

墮天使も怯まず、グレモリー先輩を見据える。

「そのセリフ、そっくりそちらに返そう、グレモリー家の次期当主よ。我が名はドーナ
シーク。再びまみえないことを祈ろう」

そう残し、墮天使ドーナシークはこの場から飛び去っていった。



翼を生やした男が去ってからも、俺はいまだに混乱の最中にいた。

——何がどうしてこうなったんだ………？

松田と元浜に連れられてエロDVDを見に行つて、途中で抜け出して、体の変化に混乱して当てもなく走つてたら夕麻ちゃんと最後に来た公園に着いて、変な男に追いかけてられて殺されそうになったら親友が駆けつけてきて、アクション映画ばりの戦いを繰り広げたと思つたら、そこにリアス先輩が現れて、男はどっかに行つてしまった。

——いっぺんにいろいろありすぎて、もうわけわかんねえよ！ 夢だよな！ 夢なんだよな!?

そんな俺の心を見透かしたように明日夏が言う。

「——混乱してるところ悪いが、これは夢じゃねえよ」

明日夏は俺の体の状態を確認すると、改めて訊いてくる。

「もう一度確認するが、ケガはねえな？」

「あ、ああ………」

「なら、いいが」

「いや、よくねえよ!」

少しだけ冷静になってきたところで、改めて明日夏に訊く。

「これは一体なんなんだよ!? なんでリアス先輩がここにいるんだよ!」

「あー……」

明日夏はリアス先輩のほうを見る。

リアス先輩はそれを見て、仕方がないといった感じの笑みを浮かべる。

「もう少し時間を置こうかと思ったけど、こうなっては仕方がないわね。兵藤一誠くん
「あ、は、はい!」

急に呼ばれて、おもわずうわずった返事をしてしまった。

「明日、いままでのことを説明してあげるわ」

……いままでのこと……？

「先輩、俺のほうでできる範囲まで説明をしておきましょうか？」

「そうね。話したことのないヒトよりは、落ち着いて聞いてくれるかもしれないし、お願いするわ」

俺をよそに、明日夏と先輩でどんだん話が進んでいった。

「使いを出すから、彼と一緒に来てちょうだい」

リアス先輩はそういうと、足元に紅く輝く輝く魔法陣のようなものを展開する。

「じゃあ、放課後にまた会いましょう」

その言葉を最後に、リアス先輩はどこかへと消えていってしまふ。

「さて……おまえを置いてきぼりにして勝手に話を進めちまって悪いな」

明日夏が後頭部を搔きながら謝ってきた。

「……いや、まあ……ちゃんと説明してくれるならいいけどよ……」

正直、まだ混乱してて、まともな判断とかできそうになかったからな。

明日夏は左手を左の方向に伸ばした。よく見ると、中指にシンプルな指輪がはめられていた。

すると、指輪の宝石部分が光り、魔法陣のようなものが出てきた!

魔法陣が明日夏の体を通過すると、コート姿から駒王学園の制服姿になってしまった

!

な、なんだよ、ありや!?

「説明は一度帰ってからゆっくりするつもりだが……それとも、いますぐがいいか?」

「いや、一旦落ち着かせてくれ……」

いまの状態で聞けば、さらにパニックになるだけのような気がする。それにしても、リアス先輩もだけど、おまえって一体何者なんだ？ たぶん、いまが俺の中でも一番の疑問だったろう。



あのあと、一旦家に帰って落ち着いてから、説明を受けるためにこうして明日夏の家に来て来た。そして現在、明日夏の家のリビングで椅子に座っていた。テーブルを挟んで、対面には明日夏と千秋がいる。

千秋もここにいてるってことは、これからしてくれる説明にも関係あるってことだよな？

「さて、何から話すか」

明日夏たちのことは——最後に訊くか。

「……じゃあ……あの翼を生やした男について教えてくれよ……」

リアス先輩は堕ちた天使って言ってたけど。

「あれは墮天使。神に仕える天使が欲を持ち、その身を天から地に墮とした存在だ」

——天使に墮天使ときたか。明日夏の雰囲気から冗談ではないよな。

「——天野夕麻」

「っ!?!」

明日夏が口にした名を聞いて、俺はテーブルに身を乗り出して明日夏に詰め寄ろうとしてしまう!

「ど、どうして!?! おまえ、知らないって——」

俺がそう詰め寄るだろうと予想していたのか、明日夏は淡々と俺を手で押しつけた。

「——落ち着け。そのことに関しては悪かった……………」
「……………ゴメン……………イツセー兄……………」

二人に謝罪をされてしまったので、俺は明日夏の言う通り、一旦落ち着く。
ていうか、千秋も本当は知っていたんだな。

「……………知らないふりをしていたのは、グレモリー先輩に止められていたからだ」
「先輩に?」

「ああ。理由を説明するにはまず、天野夕麻のことを説明してからだな」

「そうだ! 二人が夕麻ちゃんのことを覚えていたってことは、夕麻ちゃんは実在して
いたってことになる!」

でも、だとしたら、松田や元浜、霧崎さんが覚えてないのはなんでだ? なんで二人
だけ——いや、それも明日夏たちの秘密に関係あるってことなのか?

「おまえ、天野夕麻とのデートのことは覚えてるな?」

それを訊かれてハツとする。

もし、あの夢が本当は現実だとしたら——。

「………夕麻ちゃんも………墮天使だって言うか………?」

俺の脳裏に黒い翼を生やした夕麻ちゃんの姿が浮かびあがる。夕麻ちゃんの翼と今日出会った男の翼は全く同じものだった。

「ああ。あの女——天野夕麻も墮天使だ」

——いや、ちょっと待て!

「仮にあのデートが本当のことだったとして——なんで俺は生きてるんだ!」

あのとき、俺は彼女の光の槍で貫かれた! どう考えても、生きてるなんてありえないはずだ!

「そこからは、グレモリー先輩の正体にも触れながら説明する」

そこでリアス先輩の正体に触れるのか？

俺のこととリアス先輩——なんか関係……あるんだろうな。

「まず、グレモリー先輩の正体だが——あのヒトは悪魔だ」

「あ、悪魔……？」

『『悪魔の契約』で有名なあの悪魔だ』

「それってつまり……リアス先輩は人々の願いを叶えては魂を奪っていくヒトだつて言うのか……？」

俺の頭の中に邪悪な笑みを浮かべて人々の魂を奪うリアス先輩の姿が浮かぶ。

「最近じゃ、魂を対価にするような契約はほとんどないらしいぞ。基本的に対価はそこから手に入る普通の物品で済まされてるらしい」

「えっ、そうなの」

なんか、イメージをぶち壊されたような……。

「そして、グレモリー先輩は悪魔の中でも上級の階級を持つ上級悪魔で、この町を縄張りに活動している」

「えっ、それって、この町が悪魔に支配されてるってことか?」

「いや、別に支配してるわけじゃねえよ。活動場所として管理しているだけで、そこに住んでる人々に契約以外のことで干渉はしていない」

「そうなのか。で、リアス先輩がその悪魔だとして……俺とどう関係が?」

「おまえ、自分の身の変化に気づいてるか?」

「——ッ!?!」

そう問われた俺は、今日のことを思いだす。

暗い場所がよく見えたり、遠くの声がよく聞こえたり、走力が上がっていたり、とにかく身体能力が異様に高まっていた。

「単刀直入に言う。おまえはあのか、一度死んだ。そして、生き返った——いや、転生

したと言ふべきか。——悪魔にな」



「……………落ち着いたか？」

「……………ああ」

イツセーは自分が悪魔になってしまったことにパニックを起こしてしまった。

まあ、無理もないか。立て続けに起こった事態にいま知った真実、これだけでも驚愕ものなところ、しまいには自分が死んで悪魔に転生したなんて言われれば、そりやパニックにもなるな。

いまは俺が淹れたお茶を飲んで落ち着いていた。

「説明再開していいか？」

「あ、ああ……………」

確認をとり、イツセーが頷くのを見ると、俺は説明を再開する。

「まず、グレモリー先輩のような上級悪魔は眷属っていうのを従えているんだ」
「眷属?」

「直属の部下みたいなもんだな。で、その眷属を得るのに、他種族を悪魔に転生させる場合がある——ていうか、ほとんどが他種族の転生体だな。特に人間」

「じゃあ、俺はリアス先輩のその眷属として悪魔になったってことか?」

一旦落ち着いたことで冷静になり、すぐにそこへ至ることができたようだな。

「ああ。悪魔への転生は死んだ者さえも生き返らせることができるからな」

「てことは、リアス先輩は俺の命の恩人ってことになるのか?」

「そうだな」

俺はあるものをテーブルの上に置く。

「こいつを覚えてるか?」

「あつ、それって!」

俺がテーブルの上に置いたのは、『あなたの願いを叶えます！』と言う謳い文句と魔法陣が描かれたチラシだった。

「どうして、おまえがそれを？」

「あー、そのへんに関してはノーコメントで……」

これはあの日、イツセーと天野夕麻の尾行をしていた千秋が受け取ったものだ。

あのとき、千秋は変に暴走して冷静じゃなかったため、何を願うかわかったものではなかったのだ、俺が慌てて没収したのだ。

「でだ。このチラシは悪魔と契約を結ぶために悪魔を呼び出すことができる魔法陣だ。本来は自分で魔法陣を描いて願いを叶えてもらうものなんだが、いまだき、そんな人間いないからな。お手軽にしようと、こんなふうに簡易版にしたらしい」

「なんか、ファンタジー観がぶち壊しじゃね？」

……そこは現代社会に合わせたって言ってやれ。

「あの日、おまえもこれを持っていただけだろ?」

「ああ、そうだけど。なんで知ってたんだ?」

「おまえが死んだあの場に俺がいて、その魔法陣からグレモリー先輩が現れる瞬間を見ただけだ」

本当はデートを尾行してたからなんだがな。

「そういえば、あのとき、意識が朦朧としてきたときに、おまえの姿を見かけたな。なんでおまえがあの場に?」

「……いやな胸騒ぎがしてな。おまえのデートプランと時間から場所を特定して急いで向かって……そして、駆けつけて入ってきた光景がおまえが殺された瞬間という最悪な場面だったってだけだ。……俺がもつとしっかりしていれば、おまえは死なずに済んだかもしれないのに……!」

俺はあのときの不甲斐なさを思い出し、血がにじむほど拳を握りしめる。

千秋も悔しそうな表情でうつむいていた。

「ふ、二人とも、そんなに気に病むなよ！ ほら、こうして俺は生きてる——ていうか、生き返ったわけだから、結果オーライってことでき！」

「…………おまえがいいとしても、俺たちにとってはそうもいかねえんだよ。」

「ほ、ほら、説明！ 説明の続き頼むよ！」

イツセーに催促されたので、説明を再開する。

「とにかく、おまえは瀕死の状態で何かを思い、このチラシでグレモリー先輩を呼んだんだ。そして——あとはわかるだろう？」

「——先輩が俺を悪魔として生き返らせてくれたってことか」

「そういうことだ。そして、その変化に自力で気づいてもらうために、いままでのことを黙っているようにグレモリー先輩に言われたんだ」

「とりあえず理解はしたよ。でも、なんで墮天使が俺の命を？」

次はその説明か。

「墮天使がおまえを狙った理由は——『セイクリッド・ギア神 器』だ」

「……せい、なんだって……?」

『セイクリッド・ギア神 器』——特定の人間に宿る規格外の力のことだ。歴史上の人物には、それをもつて名を残した者がいたりするんだ」

「マジで……そんなものが俺に……?」

「そうらしい。本人が話したからな。で、おまえの持つセイクリッド・ギア神 器は墮天使たちにとっては危険因子だったらしくてな」

「……それで殺されたと……」

こっからは、こいつにとってはキツイ内容になってしまいが、言うべきだろうな。

「……天野夕麻——あの女はおまえの持つセイクリッド・ギア神 器が本当に危険因子なのかどうか調べるためにおまえに近づいた」

「ツ!?!」

俺の言葉にイツセーは驚愕で目を見開く。

「…………おまえに見せた表情も仕草も…………全部おまえに近づいたための演技だったってわけだ。そして、役目を終えた天野夕麻は、堕天使の力を使い、記憶などの自身の痕跡を消した。俺たちを除いて、松田や元浜、霧崎が覚えてなかったのもそのためだ」

イツセーは目に見えてショックを受けていた。

こいつが天野夕麻を大事にしようとしていたのは一目でわかった。その想いは本気の本気だった。

イツセーは数刻ほど落ちこむと、笑顔を見せてきた。

…………それが空元気なのが、俺と千秋にはわかってしまう。

イツセーは話題を変えてくる。

「それにしても…………俺にそんなものがあるなんて…………」

「確かめてみるか？」

「えっ、できんの!？」

「ああ。そんなに難しいことをする必要はないぞ」

「——何をすればいいんだ？」

「まず、目を閉じて、おまえの中で一番強い存在を思い浮かべろ。軽くじゃなく強くだぞ」

イツセーは目を閉じて、何かを思い浮かべ始める。

たぶん、『ドラグ・ソボール』の主人公、空孫悟そらまごだろうな。

昔っから、世界最強だつて言つて譲らなかつたからな。

「思い浮かべたか？」

「ああ」

「じゃあ、悟のマネをしろ」

「は？」

俺が言ったことにイツセーは素つ頓狂な声をあげる。

「思い浮かべたの、空孫悟だろ？」

「……………そうだけ。なんでわかつた？ ——ていうか、マネつて……………」

「千秋もそうして出せるようになったからな……」
「えっ、千秋も神セイクリッド・ギア器を!？」

イツセーの言葉に千秋は頷く。

「千秋だけじゃなく、俺や兄貴、姉貴も持つてるぞ」

「おまえや二人にも!？」

どういうわけか、俺たち兄弟全員に神セイクリッド・ギア器が宿っている。
偶然にしては運命の悪戯すぎる。

「それは別にいいだろ。さっさとやれ」

「ええ……」

イツセーは露骨にいやそうな顔をした。

まあ、この歳でマンガのキャラのマネなんて、羞恥プレイにもほどがあるだろうからな。

俺は洩るイツセーに言う。

「どのみち、明日、グレモリー先輩のところでも同じことをやることになると思うぞ。そしておそらく、先輩の他の眷属もいる前で——」

「やります！ やらせていただきます！」

さすがに見ず知らずの誰かに見られるくらいなら、付き合いの長い俺と千秋に見られるほうがまだマシだと思ったみたいだ。

イツセーは立ち上がると、両手を合わせ、腕を引いた構えをとる。

「ドオオラアアゴオオオン波アアアアッ！」

その叫びと同時にイツセーは手を前に突き出した。

空孫悟の必殺技である『ドラゴン波』だ。悟を象徴するといつてもいいと言われている。

そして、イツセーの左手が光り輝き、光が形を成していく。

「い、これが……」

「ああ。おまえの神セイクリッド・ギア器だ」

イツセーの左手には、赤色の籠手が装着されていた。手の甲の部分には、緑色の宝玉がはめ込まれている。

これがイツセーの神セイクリッド・ギア器か。

俺は籠手を見て、内心で疑問に思う。

感じられる波動から、堕天使が危惧するような代物だとはどうも思えなかったからだ。

発現が甘いのか？

「一度出せば、あとは自分の意思で出し入れできるぞ」

そう言ってやると、イツセーは籠手を消したり、出したりを二、三回繰り返してから籠手を消した。

「とりあえず、こんなもんだろ。悪魔や堕天使についてのもっと詳しい内容は、明日、先輩から聞いてくれ」

「ああ、わかったよ」

さて――。

「――いよいよ、俺たちのことか……」
「……」

俺は、俺たち兄弟の秘密、つまり賞金稼バウンティハンダーぎのことをイツセーに打ち明けたのだった。

Life. 7 やつてきました、オカルト研究部！

明日夏から俺が悪魔になったことなどを説明され、明日夏たちの秘密を打ち明けてもらい、一晩たった朝、俺と明日夏と千秋はひさしぶりに三人で登校していた。

だが――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

登校を始めてから、俺たちの間にいつさいの会話がなかった。

あ、勘違いしないでくれよ。別に俺が悪魔になったことや、明日夏たちの秘密を知ったことでお互いに気まづくなつたわけじゃない。

そのことに關してはお互い特に気にしてない。そんな感じで、俺が悪魔になり、明日夏たちの秘密を知っても、俺たちの關係は昔のままの仲のいい幼馴染のままである。

じゃあ、なんで会話がないのかというと――。

「……………ううう……………」

「大丈夫、イツセー兄?」

うなだれながら呻く俺を千秋が心配そうに覗き込んできた。

実は、朝から妙に体がダルく、日差しがキツイのだ。そのせいで、あまり会話する気になれない。

これは先日からからそうで、このせいで朝に起きられず、千秋が起こしに来てくれなかつたら、危うく遅刻するところだった。

どうにも明日夏が言うには、悪魔は闇に生きる種族で、光が苦手みたいだ。

いまの体調も、悪魔の体質によるもので、朝日にやられてしまっているようだ。逆に夜になれば活発になり、昨日のように身体能力が上がるようだ。

「……………まるで吸血鬼だな……………」

「だったら、灰になつてゑぞ」

「あつ、そつか。ていうか、吸血鬼も実在するのか?」

「ああ、いるぞ」

「妖怪とか、魔法使いもいるよ」

もう、なんでも実在しているんだな。

そんな感じで、ダルい体を引きずって、俺は二人と学校に向かうのだった。



授業が終え、放課後になると、俺と明日夏はリアス先輩の使いを待っていた。

「たしか、放課後に来るんだよな？」

「ああ」

「昨日、リアス先輩が今日の放課後に使いを出すと言っていたから、そろそろ来る頃だろう。」

「なあ、明日夏」

「なんだ？」

「使いつてのは、やっぱり——」

「ああ。おまえと同じ眷属悪魔なのは間違いないだろう」

俺以外の眷属悪魔か。どんな奴なんだろう？

かわいい美少女とかだつたらいいなあ！

「「「「キヤーツ！」」」」

突然、教室内に女子たちの黄色い歓声が沸き起こる。

歓声の発生源にはクラスの女子たちが群がっており、その中心に金髪で爽やかな笑顔を浮かべている男子生徒がいた。

木場祐斗——俺と明日夏とは同学年で……学園女子のハート射抜いている学校のイケメン王子と呼ばれている。つまり、俺たちモテない男子生徒全員の敵だ！

そんな木場をクラスの女子たちはうっとりとした表情で見つめていた。

ちなみに、明日夏も木場ほどじゃないが結構モテてる。

フン！ イケメン死ぬ！

「ちよつと、失礼するよ」

木場がそう言うと、女子たちは一斉に道を開けた。

「どうぞどうぞー！」

「汚いところですけど、どうぞー！」

木場は女子たちの輪から抜け出すと、まっすぐこちらにやってきて、声をかけてくる。

「や。どうも」

「………なんだよ？」

俺がおもしろくなさそうに返していると、明日夏が木場に問いかける。

「おまえがグレモリー先輩の使いか？」

「うん。そうだよ」

「——ッ!? じゃあ、おまえが！」

まさか、先輩の使いが木場だったなんて。

「二人とも、僕についてきてくれるかい?」

それを聞き、俺と明日夏は立ち上がる。

すると、話を聞いていたクラスの女子たちが一斉に悲鳴をあげる。

「そんなあ!? 土騎くんはともかく、エロ兵藤が木場くんと一緒に歩くなんて!」

「汚れてしまうわ、木場くん!」

「木場くん×土騎くんはありだけど、木場くん×エロ兵藤のカップリングなんて許せない!」

クツソオ、わけわかんねえこと言いやがって……。

女子たちの言葉をなるべく聞かないようにしながら、俺は明日夏と一緒に木場についていく。

そんななか、明日夏が木場に話しかける。

「木場」

「なんだい？」

「妹も連れてつていいか？　ちゃんと事情は知っている」

「うん。それならいいと思うよ」

了承を得た明日夏は、スマホで千秋を呼び出す。

呼び出された千秋はすぐにやってきて、再び歩き始めた木場に俺たちはついていくのだった。



木場に連れられてやってきたのは、以前リアス先輩を見かけた学園の旧校舎だった。

旧校舎っていうから、古くてボロボロなイメージがあっただけど、中に入ってみると、多少の古くさはあつたが、埃などは一切なく、小綺麗なものだった。

それを見て、家事好きの明日夏も感嘆の息を吐くほどだ。

「着いたよ」

木場がとある教室の前で止まって言う。

戸にかけられたプレートには『オカルト研究部』と書かれていた。

そういうえば、リアス先輩って、オカルト研究部の部長を務めてるって聞いたことがあつたな。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

木場が確認を取ると、中からリアス先輩の声が聞こえてきた。

それを聞いた木場が戸を開け、俺たちもあとに続いて室内に入る。

室内は薄暗く、なんとも不気味な雰囲気醸し出していた。灯りもロウソクの火だけだ。

奥のほうに立派なデスクと椅子のセットがあり、ソファアアがいくつかとテーブルがあつた。

で、ソファアアに一人、小柄な女の子が座っていた。

——って、この子は!? 小柄な体型、無敵のロリフェイス、そのスジの男子だけでな

く、女子にも人気が高いマスコットキャラ、塔城小猫ちゃんではないか！
こちらに気づいたのか、視線が合う。

「彼女は一年の塔城小猫さん。こちら、二年の兵藤一誠さんと土騎明日夏くん」

木場が紹介してくれ、塔城小猫ちゃんがペコリと頭を下げてくる。

「あ、どうも」

俺と明日夏も頭を下げる。

「同じクラスで知ってるかもしれないけど、こっちは土騎明日夏くんの妹さんの土騎千秋さん」

そういえば、千秋と塔城小猫ちゃんって同じクラスだったな。

千秋も頭を下げ、それを見た塔城小猫ちゃんは再び頭を下げると、黙々と羊羹を食べ始める。

うーむ。噂通り、寡黙な子だな。

——まあ、それがまた、マスコットとして人気があるのだが。

シャワー。

部屋の中から水が流れる音が聞こえた。

奥のほうを見ると、シャワーカーテンがあつた。

シャワー! 部屋に!

ツ!? こ、これは!

カーテンに女性の陰影が映っていた!

アート! まさにアートと言っても過言ではない、その陰影は美しいラインだった!

「部長、お召し物です」

「ありがとうございます、朱乃」

この声はリアス先輩! つまり、あの陰影はリアス先輩のもの! なんて素敵な部屋なんだ!

「.....いやらしい顔」

ぼそりと呟く声。声の発生源は塔城小猫ちゃんだ。

・・・・・・・・いやらしい顔をしていましたか。それはゴメンよ。

「あらっ？」

ふと、別の女性の声が聞こえてきた。

そちらのほうを向けば、黒髪のポニーテールの女性がニコニコフェイスでこちらを見ていた。

「あらあら、うふふ。はじめまして。私、副部長の姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。うふふ」

こ、このお方は！ 絶滅危惧種の黒髪ポニーテール、大和撫子を体現した究極の癒し系にして、リアス先輩と並び、この学園の二大お姉さまの一人、姫島朱乃先輩！

「ひよ、兵藤一誠です。こちらこそ、はじめまして」

「はじめまして。二年の士騎明日夏です。こっちは妹の——」
「二年の士騎千秋です。はじめまして」

俺たちも姫島先輩に挨拶を返す。

それにしても、学園の二大お姉さまのリアス先輩と姫島先輩、学園のマスコットの塔城小猫ちゃん。——学園を代表とするアイドルたちがいるなんて——オカルト研究部、なんて素敵な部活なのだ! ……学園一のイケメン王子の木場という余計な奴もいるけどな。

「お待ちせ」

カーテンが開いて、リアス先輩がタオルで髪を拭きながら出てきた。

「ゴメンなさい。あなたたちが来るまえに上がるつもりだったのだけど」

「い、いえ、お気にせず」

リアス先輩が千秋のほうを見る。

「あなたは土騎明日夏くんの妹さんだったわね？」

「はい。土騎明日夏の妹の土騎千秋です」

リアス先輩が千秋と軽く挨拶すると、周りを見てうんとうなずいて言う。

「さあ、これで全員揃ったわね。私たちオカルト研究部はあなたたちを歓迎するわ」

「え、ああ、はい。……俺の場合は悪魔として、ですか？」

「ええ、その通りよ、兵藤一誠くん。イツセーと呼んでもいいかしら？」



「粗茶です」

「「あつ、どうも」」

ソファアーに座る俺、イツセー、千秋に姫島先輩がお茶を淹れてくれた。

とりあえず、俺たちは出されたお茶をずずつと一飲みする。

「うまいです」

「ああ、うまいな」

「おいしいです」

「あらあら。ありがとうございます」

俺たちが感想を言うと、姫島先輩はうれしそうに笑みを浮かべた。

「……俺が淹れるのよりも全然うまいな……」。

なんて、少し対抗心を燃やしているあいだに、姫島先輩はグレモリー先輩の隣に座る。

俺、イツセー、千秋はソファアーに並んで座っており、テーブルを挟んで、対面のソファアーにグレモリー先輩たちが座っていた。

「さて、イツセー。彼からどのあたりまで説明されたのかしら?」

「えーつと……先輩方がこの町で活動する悪魔で、死んだ俺を先輩が自分の眷属の悪魔として生き返らせてくれたこと、俺を殺したのは堕天使というやつで、俺が殺された理由は、俺が神セイクリッド・ギア器キア っていうのを持っていたから——っていうところまでは」

「そう。だいたいこのことはもう把握しているわけね。それじゃあ、神セイクリッド・ギア器キアは出せるか

しらっ？」

「あ、はい」

イツセーは立ち上がると、左手を前に出す。

すると、イツセーの左手から光が赤く輝き、赤い籠手が現れる。

「これが俺の持つ神セイクリッド・ギア器みたいです」

「そう。それがあなたの神セイクリッド・ギア器なのね」

先輩はイツセーの籠手を数十秒ほどまじまじと見つめる。

「ありがとう。もうしまつていいわよ」

「あ、はい」

先輩に言われ、イツセーは籠手をしまう。

「さて、私たちのことも改めて説明するまでもないでしょうし、これからは私の下僕とし

てよろしくね」

「は、はい」

先輩は視線を俺と千秋のほうに向けてくる。

「——次は、あなたたちのことね」

……俺たちのことというのは、俺たちの今後の先輩たちとの付き合い方だな。本来は関わるつもりはなかったが、そこにイツセーがいるとなると、だいぶ変わってくるからな。

「悪いけれど、あなたたちの身辺調査をさせてもらったわ。あなたたちは幼い頃にご両親を亡くし、頼れる親戚等もいなかったから、あなたたちの上のご兄弟であるお兄さんとお姉さんが生計を立てるために賞金稼パウンティハンターぎになり、あなたたちもいずれはハンターになる気であるということの間違いないわね?」

「ええ。概ねその通りです」

正確には、最初は兄貴が一人で生計を立てていたのだ。俺たちも最初は周りにしてい

たように親戚の援助を受けていたというふうには兄貴に言われていたんだが、あるときに兄貴のハンター活動を知ることになり、そして姉貴もハンターになり、俺と千秋も大学卒業後にハンターになるということになったのだ。

ちなみに、兄貴にはなぜかハンターの知り合いがいたみたいで、ハンターになりたての頃はそのヒトのお世話になっていたみたいだ。

「……………ゴメンなさい。辛いことを思い出させたかもしれないわね……………」

先輩は俺と千秋に辛いことを思い出させたかもしれないと、申し訳なさそうにする。

「……………いえ、気にしないでください。それで、俺たちのことはどうするつもりですか？」

俺は少し警戒心を出しながら先輩に訊いた。

「どうするも何も、とくに私たちに累を及ぼすわけでもないし、イツセーの友人だということなら、イツセーの主としても、学校の先輩後輩としてもこれからよろしくお願い

て感じかしら。なんだったら、イツセーと一緒にこのオカルト研究部に入部する?」

先輩は微笑みながら言った。

「いいんですか? オカルト研究部という看板は表向きで、実際はあなたが悪魔の活動をするための場所なのでしょう?」

「ええ、かまわないわ。それに、せっかくの部活という看板なのだから、賑やかなほうがいいでしょう」

それを聞いて、俺と千秋は少しのあいだ、互いに見つめ合うと、笑みを浮かべてうんと頷く。

「じゃあ、せっかくなので入部します」

「私もします」

「よろしくね。これからは明日夏と千秋と名前で呼んでもいいかしら?」

「かまいません」

「私も大丈夫です」

苗字で呼ばれれば、兄妹の俺たちにとつちやややこしいことになるからな。

「フフフ。それじゃあ、よろしくね、イツセー、明日夏、千秋」

「「よろしくお願ひします」」

こうして、俺たちはオカルト研究部に入部することになるのだった。

L i f e . 8 悪魔の仕事、始めます!

「さて、イツセー。私たち悪魔が主にどういう活動をしているかも、明日夏から聞いているかしら?」

「はい。人間と契約して願いを叶え、それに見合った対価をもらうんですよね」

「ええ、そうよ。そのために、私たちは悪魔を召喚してくれそうな人に、このチラシを配っているのよ」

そう言い、先輩改め部長は、部長席のデスクの上に大量の召喚用魔法陣が描かれたチラシの山を置く。

「まず、イツセーにやってもらうことは、このチラシを召喚してくれそうな人の家に配ることよ。この機械を使えば、召喚してくれそうな人の場所がわかるわ」

部長はチラシの横にその機械らしきものとチラシを入れるためのバックを置く。

「普通は使い魔にやらせるんだけど、これも下僕として悪魔の仕事を一から学ぶためよ」

イツセーはとりあえず、言われるがままにチラシをバックに詰めていく。

「がんばりなさい。あなただつて、自分の下僕を持てるかもしれないのよ」

「お、俺の下僕！」

イツセーが『自分の下僕』という単語に過剰に反応した。

「あなたの努力次第でね。転生悪魔でも実績を積んでいけば、中級、上級へと昇格できるの。そして、上級悪魔になれば、爵位を与えられて、下僕を持つことが許されるの。ちなみに、私の爵位は公爵よ」

部長の説明を聞くうちに、イツセーは鼻の下をどんどん伸ばしていく。

「……何を考えているのかが、手に取るように丸わかりな反応だな。」

「げ、下僕つてことは……俺の言うことには逆らわないってことですよね?」
「そうね」

「何をやってもいいんですよ?」

「ええ」

「た、たとえば……エ、エ、エツチなことでもっ!」

「あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

それを聞いたイツセーは雷に打たれたような反応を示すと、歓喜の雄叫びをあげる。

「うおおおおおおおおおおおッ! 悪魔最高じゃねえか! ハーレム! 俺だけのハーレムができるんだ!」

イツセーはチラシと機械の入ったバックを持つと、意気揚々とチラシ配りに向かう。

「では、部長。チラシ配りに行ってきます! ハーレム王に俺はなるっ!」

廊下からイツセーのそんな宣言が聞こえてきた。

「フフ。イツセーはおもしろい子ね」

「……部長がそう思っていただけなんらしいんですが……」

イツセーの扱い方を早速理解されたようだ。

まあ、そんなことよりも――。

「――少しは落ち着いたらどうだ？」

俺は隣でそわそわしながらイツセーが出ていった部室のドアのほうを見ている千秋に言う。

「でもー！」

「昨日みたいなのはそうそう起こらねえよ」

千秋が落ち着きがないのは、イツセーが身の安全が心配なのだ。

昨夜、イツセーは墮天使ドーナシックにはぐれと勘違いされて襲われた。そのことが

あつて、千秋は気が気でないのだ。

とはいえ、あのドーナシックは天野夕麻のサポートもしくは天野夕麻の痕跡の後始末係のはずだ。

イツセーと遭遇したのはたまたまのはずだろう。

そもそも、上級悪魔である部長の管理地であるこの町に目的を達した堕天使がいつまでも居座ることもないはずだ。

仮に目的であるイツセーが生きていることで居座っているにしても、イツセーはいまや部長の眷属、しかも、部長は悪魔のトップである魔王の妹だ。魔王の身内の眷属に手を出そうとすれば、悪魔と堕天使の間で戦争が再び勃発する火種になりかねない可能性がある以上、下手なことはしないでだろう。

それは千秋もわかつてはいる——が、頭では理解していても、感情まではそうはいかないか。

「……部長」

「仕方ないわね」

「だとき。ただ、あんまり余計なことはするなよ?」

俺がそう言うのと、千秋は強く頷き、イツセーのあとを追って部室から出ていく。

「随分と心配性な妹さんね」

「……まあ、昨日のこともありますけど……生き返ったとはいえ、イツセーが一度死んだことがですね……」

イツセーが一度死んだことを伝えたときは本当に大変だった。

「フフ。愛されているのね、イツセーは」

まあ、もう少し、その行動力をアプローチ方面とかに回してみろって感じですがね。

「ところで、もし仮に墮天使に襲われそうになった場合、彼女は大丈夫なの？」

「ええ。昨日の奴クラスでしたら、イツセーを守りながらでも」

それを聞いた部長は俺のことを興味深そうに見てくる。

「そう。あなたたちの力、この目で見てみたいわね」

「機会がありましたら」

なんとなく、そんな機会はすぐに来そうな気がしていた。



俺たちがオカルト研究部に入部してから、一週間が経った。

今日もイツセーはチラシ配りに、千秋はイツセーの護衛にしていた。

「………部長、どうしますか?」

「そうね」

なにやら、部長と塔城が何かで悩んでいた。

「どうかしたんですか?」

「実は、小猫に予約契約が二件入ってしまったって、両方行くのも少し難しそうなの」

「そういう場合はどうするんですか？」

「こういうときは、他の子が代わりに行ってもらっているんだけど、祐斗も朱乃もちよつと手が離せないのよ」

部長は少しのあいだ考え込むと、何か思いついたような反応をする。

「そうね。ちよつと早いかもしれないけど、イッセーに行ってもらおうかしら」

「大丈夫なんですか？」

ベテランである塔城へ来た予約だ。いきなり新人であるイッセーにやらせても大丈夫なのか？

「そんなに難しそうな契約内容じゃないから、デビューにはうってつけよ」

部長がそういうのなら、大丈夫なのか。

「配達終わりました」

噂をすれば、件のイツセーと千秋が帰ってきた。

「来たわね。イツセー」

「あ、はい」

「今日はもうひとつ仕事があるの」

「仕事？」

「小猫に二件、召喚の予約が入ってしまったの。そこで、片方をイツセーに任せるわ」
「……………よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる塔城。

「ああつ、こちらこそ——ということ、ついに俺にも契約が!」

契約デビューってことがあるからか、イツセーはやる気をみなぎらせる。

「左手を出して、イツセー」

「あ、はい」

部長に言われ、イツセーが左手を差し出すと、部長がイツセーの手のひらに指先で何かをなぞりだす。

すると、イツセーの手のひらに紋様ができあがっていた。

「刻印よ。グレモリー眷属である証。転移用の魔法陣を通って依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

その他にも、部長は依頼者のもとに到着後の対応などの説明をする。

そして、そのあいだに副部長が転移用の魔法陣を展開していた。

「到着後のマニュアルは大丈夫ね」

「はいー！」

「いいお返事ね。じゃあ、行ってきなさい」

「はい！ よーし！ 野望に一步前進だぜ！」

意気揚々とイツセーは転移用の魔法陣の上に立つ。

すると、魔法陣が光りだし、光がイツセーを包んでいく。

そして、光が止むと、イツセーの姿が消えて――。

「――あれ?」

――いなかった。

イツセーは転移しておらず、その場で棒立ちしていた。

「………部長。確か、この転移って、そこまで魔力は必要ないはずでしたよね?」

「ええ。子供でもできることなんだけれどね」

「えっ? 何、どういうこと?」

イツセーは何がなんだかだかわからないという感じであたふたしていた。

「イツセー」

「な、なんだよ?」

俺は残酷のような、残念なような事実をイツセーに言い渡す。

「おまえの魔力が子供以下のせいで、魔法陣が反応しないみたいだ」

「えつと……つまり……?」

「イツセー。おまえは魔法陣によるジャンプができない」

「……ええええええええつ!?!」

一拍あけて、イツセーが驚愕の叫びをあげた。

「あらあら」

「ふう」

「……無様」

副部長が残念そうな表情を浮かべ、木場がため息を吐き、塔城がキツイ一言と、他の部員もそれぞれの反応を示して、イツセーに精神的なダメージを与えていた。

塔城のが一番ダメージデカそうだな。

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イツセー」
「は、はい!」

しばし考え込んだ部長はイツセーに言い渡す。

「前代未聞だけれど、足で直接現場へ行つてちょうだい」
「足!？」

驚愕するイツセー。だいぶ予想外の答えだったみたいだな。

「ええ。チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものは他で補いなさい。ほら、行きなさい! 契約を取るのが悪魔のお仕事! 人間を待たせてはダメよ!」

急かす部長。

イツセーは涙を流しながらその場から駆けだした。

「クツソー!? どこにチャリで召喚に応じる悪魔がいるってんだああああつ!?」

．．．．．いきなり前途多難だな。



ちくしょう! 魔力がないって、どういうことだよ!? こんなんで俺、爵位なんても
らえるのか!?

そんなことを内心で嘆きながら、俺はチャリを全速力で漕ぐ。

「えつと．．．．．元気だして、イツセー兄」

チャリの後部に乗っている千秋が慰めてくれる。

「ゴメンな、千秋。俺が不甲斐ないせいで．．．．．」

チラシ配りのときも、堕天使に襲われないように俺の護衛ってことで、千秋についてきてもらったんだよ。

俺が魔法陣でジャンプできれば、こんな苦勞させないで済んだってのに。

「大丈夫だよ、イツセー兄。万が一があつたら……私はいやだから」

そう言つて、千秋は俺を抱く手の力を強める。

両親の死を目の当たりして、シヨックで引きこもつたことがある千秋にとっては、親しい者の死は本当に耐えられないことなだらう。

明日夏から聞いたが、俺が一度死んだことを知つたときは、大変だつたらしい。

どうにかして、千秋を安心させてやりたいが……

そんなことを考えているうちに、目的地に到着した。

「日暮荘——ここだな」

目的地は普通のアパートだった。ここの一室に依頼者がいるらしい。

「私も行って大丈夫かな？」

「うーん、どうだろう？　向こうが了承してくれれば、見学くらいならいいんじゃないか？」

部長も千秋がついてくることに特に何も言っていなかったからな。

とりあえず、依頼者である森沢さんというヒトの部屋のドアをノックする。

「こんばんは、森沢さん。悪魔グレモリーの使いの者ですが」

ガチャ。

「うん？」

ドアが開き、メガネをかけた痩せ型の男性が不審者を見るような顔で出てきた。

「ああ、どうも——」

「——チェンジ」

そう言つて、ドアを閉められてしまった!

「ちよ、ちよつと待つてください!?! 悪魔を召喚したのはあなたでしよう!?!」

「玄関を叩く悪魔なんかいるもんか」

「ここにいますけど!」

「ふざけるな。小猫ちゃんはいつだつて、このチラシの魔方陣から現れるぞ。だいたい、俺が呼んだのは小猫ちゃんだ。とつとと帰れ」

「お、俺だつて……出られるものならそうしたかつたさ! 何が悲しくて深夜にチャリなんかとぼしてえ……うううううう……」

俺は悲しさから、その場で泣き崩れてしまった。

「……しょうがないな」

森沢さんはそんな俺を見て同情してくれたのか、中に入れてくれることになった。

「ところで——そっちの子は？」

森沢さんは千秋のほうを見ながら訊いてきた。

「ああ、この子は千秋つて名前です。俺の幼馴染みで、見学として来ました」

俺がそう説明すると、森沢さんはギラッと視線を鋭くして睨んできた！

「ちよつと待て．．．．．キミ、いまなんて言った？」

「えっ．．．．．見学として来ました．．．．．？」

「そのまえだ！」

「悪魔じゃない．．．．．？」

「そのあと！」

「．．．．．俺の幼馴染み．．．．．？」

「そう、それだ！　こんなかわいい幼馴染みがいるとか、羨ましすぎるぞ、この野郎！」

いきなりそんなこと言われましても!

「よし、この子だけ残って、キミは帰ってよし!」

「いや、だから、千秋は悪魔じゃないですから! 悪魔の俺がいなきや、意味ないでしょう!」

「うるさい! 屋根伝いで部屋を歩き来したり、朝起こしてもらったりなんてしてるんだろ!」

「いや、家は向かいなんで、屋根伝いで部屋を歩き来したりはできませんよ。——まあ、たまに朝起こしてもらったりはしてますけど……」

「死ね、リア充!」

それから、俺と森沢さんは千秋のことではばらく言い争いを始めてしまうのだった。



森沢さんとの口ゲンカが終わり、俺と千秋は森沢さんにお茶を出してもらっていた。

「あ、すいません」

「どうも」

とりあえず、出してもらったお茶をひとすすりする。

「で？ キミも悪魔なら、特技はあるんだろ？ とりあえず、見せてくれよ」

．．．．．悪魔としての特技かあ．．．．．なんもないんですけど。

「．．．．．あの、ちなみに小猫ちゃんは一体どんな技を？」

「ああ——」

すると、森沢さんは何かを取り出して言う。

「コスプレでお姫様抱っこだ！」

そう言って取り出したのは、昨今話題のアニメ、『暑宮アキノ』の登場人物である短門

キユの制服だった。

なるほど。たしかに小猫ちゃんは短門キユに似ているところがあるから、似合うだろうな。

「——つて、そんなの、悪魔じゃなかったって……」

わざわざ、悪魔に頼んでまですることなのか？

「ふん、あんな小さな女の子がお姫様抱っこしてくれるなんて、悪魔以外ありえないだろう！」

はあ、そりやそうですけど——つて、え？　してくれる？

俺の脳内でコスプレした小猫ちゃんがだいの大人である森沢さんをお姫様抱っこしている光景が浮かぶ。……なんともシユールな絵だ。

「で、キミの特技は？」

「ああ、えーと……」

俺はその場で立ち上がる。

「ドオオラアアゴオオオン波アアアアツ！　・・・・・・・・・・・・・・・・すいません、まだ何もできないんです・・・・・・・・」

ヤケクソでドラゴン波の真似をするが、当然ドラゴン波など出るはずもなく、素直に何もできないことを打ち明けた。

「ドラグ・ソボールか」

「え？」

「フン。キミの歳じゃ、所詮再放送組だな？　僕なんか直撃世代だぜ！」

森沢さんが立ち上がると、部屋の一面にあるカーテンを開ける。

「見ろ！　全部初版本だよ！」

開けたカーテンの先には、ドラグ・ソボールのコミック全巻が並べられた本棚があった!

それを見た俺は、対抗意識を燃やす!

「ちよ、直撃だからなんだってんですか!」

「何!?!」

「俺だって全巻特装版持つてんすよ!」

「ぷつ、貴様にはわかるまい。毎週水曜放送の翌日、アルティメット豪氣玉を作るため、友人たちと地球上の豪氣を集めた熱い日々を!」

「俺だって悪友たちと公園で『気で探るかくれんぼ』くらいやったつうの! いまでも主人公の空孫悟、世界最強って信じてるっすよ!」

「僕はデルが最強だと思っがなっ!」

「おお、それもある意味アリですね!」

「だろお!」

「でも、やっぱ空孫悟、ドラゴン波っすよ!」

森沢さんはおもむろに、本棚からドラグ・ソボールのコミックを数冊取り出し、テー

ブルの上に置く。

「フツ、語るかい？」

「語りますか」

それから、森沢さんとドラグ・ソボールについて熱く語り合った。



「……はあ、結局、契約も取れず、熱くドラグ・ソボール談義をただけ……
何やってんだ、俺……」

もうこれ以上ないくらい、森沢さんと熱く語ったが、それに熱中するあまり、契約を取
取することをすっかり忘れてしまった。……ホント、何やってんだ、俺……。

「でも、楽しそうだったよ？ イッセー兄も森沢さんも」

「まあ、楽しかったけどさ……やっぱ、契約を取ってなんぼだろ？ 悪魔ならさ」

千秋とそんな感じの会話をしながら、チャリを押しして部室に戻っていると――。

「――っ!？」

突然、妙な悪寒を感じた!

「………イツセイ兄」

どうやら、千秋も何か感じているみたいだった。

この感じ、あいつだ! あいつと同じ!? あのドーナシークと名乗っていた墮天使と会ったときと同じ感じだった!

すると、千秋が後ろのほうに振り向いていた。俺も振り向いてみると――。

コツコツ。

スーツを着た女性がこちらに歩み寄ってきていた。

「——妙だな？　人違いではなさそうだ。足跡を消すよう命じられたのは、このカラワーナだからな。まことに妙だ——」

カラワーナと名乗った女性はブツブツと何かを言っている。

この感じ……まさか、この女も!?

「なぜ貴様は生きている？」

そう言った女性の背中から、夕麻ちゃんやあの男と同じ翼が生えた！

墮天使ツ！

「貴様はあのお方が殺したはずだ！」

そう言うと、いきなり光の槍を投げつけてきた！

「イツセー兄！」

「うわっ!？」

光の槍が俺を貫こうとした瞬間、飛びかかってきた千秋によって押し倒される！ おかげで、光の槍には当たらずに済んだ。

「イツセー兄、下がってて！」

千秋が俺を守るように前に躍り出る。

「貴様は確か、あのお方が仰っていた男の妹……それに、そいつから感じる気配——そうか、ドーナシックがはぐれと間違えたのは貴様か。まさか、グレモリー家の眷属になっていたとは。ならば、ますます生かしてはおけぬ！」

そう言うと、堕天使は光の槍を手にこちらを睨んでくる！

「……やらせない！」

そう言うと同時に千秋は飛び出していた。

「フン。邪魔だてをするのなら容赦はせん！」

墮天使は千秋に向けて光の槍を投げつける！

「千秋！」

俺の叫びと同時に光の槍が千秋に当たりそうになった！

だけど、千秋はその槍を横に少し動いただけで避けてしまった！

「何!?! チツ！」

舌打ちした墮天使が翼を羽ばたかせて飛び上がった！

「逃がさない！」

それを千秋はその場から墮、屋根へと飛び移り、さらに屋根から墮天使の頭上に飛び上がる!

そのまま、千秋は墮天使の頭目掛けてオーバーヘッドキックのように蹴りを繰り出す!

「ぐっ!?!」

墮天使は腕を交差させて千秋の蹴りを防ぐが、千秋はそのまま墮天使を地面へと蹴り落としてしまう。

「がっ!?!」

蹴り落とされた墮天使は地面に叩きつけられ、千秋は地面に着地すると同時に後ろに飛んで墮天使から距離を取る。

「.....ぐっ.....貴様っ.....!」

「——ねえ」

睨んでくる堕天使に千秋は低い声音で訊く。

「——あなたが言ってるあのお方って——天野夕麻のこと？」

ツ!?　　そういえば、あの堕天使は俺のことを知っているようだった。「足跡を消すよう命じられた」と言っていた。てことは、堕天使が言うあのお方ってのは、千秋の言うように夕麻ちゃんの可能性が大きいということになる。

「天野夕麻?　　ああ、あのお方の偽名か。だとしたら、どうだと言うんだ？」

堕天使はあのお方ってのが、夕麻ちゃんであるということを確認した!

刹那——。

ゾワツ。

「——ツ!？」

千秋からとてつもないプレッシャーを感じてしまう!

間違いない。これは殺気ってやつだ! 千秋からあの堕天使へと殺気が向けられているのだ。

「フン。大した殺気だな? だが、所詮は人間。先程は不覚を取ったが、私の敵ではない!」

堕天使は光の槍を手に飛びだし、千秋に向けて槍を振るう! だけど、槍が千秋を捉えることはなかった。

「何っ——がっ!?!」

千秋は宙返りで槍を避け、さらに、そのまま堕天使の顎を蹴り上げてしまった!

「ふッ!」

蹴り上げた墮天使の鳩尾に千秋の鋭い回し蹴りが打ち込まれる！

鈍い音が鳴り、墮天使は叫び声もあげられずに後方へと吹き飛んでいった。

「くっ……ここは一時引くか。貴様が生きていることを、まずはあのお方に報告せねばなるまい！」

墮天使はそう言うと、この場から飛び去っていった。

「——ふう」

千秋は息を吐くと、俺のもとまで走り寄ってくる。

「イツセー兄、怪我はない？」

「あ、ああ。俺は平気だ。千秋は？」

「私も大丈夫だよ」

お互い、怪我はないようだ。

「助かつたよ、本当。千秋がいなかったら、俺……また死んでたかもしれないなかつたよ。」

……本当、そう思うとゾツとするぜ……

……にしても、俺、ホントなんもできなかったな。明日夏や千秋に守られてばかりだ。

「イツセー兄。何もできなかったことは仕方ないよ。イツセー兄は私や明日夏兄と違って、つい最近までこんなこととは無縁の世界にいたんだから」

確かにそうだけど……それでも。ましてや、男が女の子の後ろでビクビクするとか論外だろ。

自分の不甲斐なさに打ちひしがれていると、千秋が俺の手を取る。

「イツセー兄」

千秋が俺の手をやさしく握ってくれる。

「イツセー兄ならきつと強くなれるよ」

「俺がか？」

「うん」

千秋はやさしそうな笑顔を浮かべる。

俺は思わず、その微笑みにドキツとして見とれてしまう。

その笑顔からは、千秋は俺が強くなれることを心から信じているみたいだった。

そうだよな。クヨクヨしてたつて始まらないよな。

女の子——それも幼馴染みにここまで想われているのなら、応えてやらないと男が廢るってもんだ！

それに、少しでも強くなれば、千秋も安心してくれるかもしれないしな。

「ありがとうな、千秋。俺、強くなるぜ！ 今度は千秋を守るようにな！」

「うん！」

よし。とりあえず、墮天使に襲われたことを部長に報告したほうがいいよな。
また襲われてもあれだし、千秋を後ろに乗せて、俺は部室に向けてチャリを全力疾走をさせるのだった。



それにしても、強くなるって決めたのはいいけど、どうしたもんかな？
鍛えてもらえるように明日夏に頼んでみるとか？

「イツセー兄」

「ん、なんだ？」

「強くなるって言ってたけど——もしかして、明日夏兄に鍛えてもらおうなんて考えてる？」

「うーん、まあ、方法のひとつとしては考えてるかな」

「……明日夏兄、たぶん、スパルタだと思うよ」

「……あ、やっぱりか」

明日夏つてなんとなく、スパルタつて雰囲気がありそうだったんだよな。
なんやかんやで、自分含めてそういうところには厳しいところがあるし。

でも、強くなるためなら。

——もし頼むときが来たら……できる限り、お手柔らかにしてくれるように
頼もう……。

L i f e . 9 駒の特性

朝、俺はいつも通り、千秋と二人で登校していた。

「………あー、昨夜はマズったなあ………」

魔法陣でジャンプできない、契約は取れない、堕天使と遭遇しちまうと、昨夜は色々やらかしてしまった。

堕天使のことを部長に報告したら――。

『困ったことをしてくれたわ。あなたが死んでおらず、あろうことか悪魔として生き返ってしまったことを堕天使側に知られてしまうなんて。まあ、堕天使と接触したのは事故だから仕方ないわね』

少し怒り気味でそう言われてしまった。

「部長はイツセー兄のことが本当に心配だから、あんなふうになつちやつたんだよ」

それはなんとなくわかるんだけど。

部長を含めたグレモリー一族は身内や眷属への情愛が深いって、明日夏も言ってたからな。

それでもなあ……はあ、部長、まだ怒ってたらどうすつかなあ……？

「はわうー！」

「うん？」

突然、後方から声が聞こえると同時にボスンと路面に何か転がるような音がする。振り向くと、そこにはシスターが転がっていた。

手を大きく広げ、顔面から路面に突っ伏した、なんともマヌケな転び方をしていた。しかも、パンツ丸出しだよ！

ついつい、シスターのパンツをガン見してしまう！

「………イツセー兄」

千秋にジト目で呼ばれ、俺は慌ててシスターに駆け寄って手を差し出した。

「だ、大丈夫っスか？」

「あうう。なんで転んでしまうんでしょうか……。ああ、すみません。ありがとうございます」

シスターが俺の手を掴むと、手を引いて起き上がらせる。

ふわっ。

それと同時に、シスターのヴェールが風に飛ばされ、シスターの素顔が露になる。

——か、かわいい。

俺は一瞬心を奪われていた。

金髪の美少女。グリーン色の双眸はあまりにもに綺麗で引き込まれそうだった。

「あ、あの………」

「ああ、ごめん！」

俺がシスターに見惚れて、いつまでも手を握っていたからか、シスターが戸惑いの声をあげる。

それを聞いた俺は慌てて手を離す。

「これ」

「あつ、ありがとうございます」

千秋（なぜか、少し不機嫌そうだった）が風に飛ばされたヴェールをシスターに手渡す。

にしても、かわいい！ まさに俺の理想の女子・バージョン金髪美少女！

「あのお………」

シスターがなんか、もじもじしながら何かを言い淀んでいた。やがて、言い淀んでいた言葉を口にする。

「……道に……道に迷って、困っているんです」



俺と千秋は道に迷ったと言うシスターに道案内をしてあげていた。

「旅行？」

「いえ、違うんです。この町の教会に赴任することになりました」

人事異動みたいなもんか？ 教会も大変だねえ。

「言葉が通じる親切な方々に会えてよかったあ。これも主のお導きですね」

道行く人に道を訊こうにも、日本語がしゃべれず、言葉が通じなかったみたいだ。

俺がシスターと会話できるのは、悪魔の持つ『言語』の力によるものだ。

俺が話す言葉を聞く人は聞き慣れた言語として変換されて聞こえるみたいだ。逆に俺が聞くすべての言語は日本語に変換されて聞こえる。

ちなみに、千秋はちゃんとシスターの話す言語で会話している。

簡単な会話をするだけなら、明日夏と千秋は英語や中国語などのメジャーな言語を話すことができるみたいだ。

それにしても、シスターの胸元で光っているロザリオを見てみると最大級の拒否反応を覚えてしまう。

悪魔は聖なるもの——例えば十字架なんかには触れることはできない。

……チャツと見ただけでこの反応だからなあ。

「うわああああん！」

道中にある公園の前を横切ろうとしたら、公園から子供の泣き声が聞こえてきた。

見ると、膝にケガをした子供がいた。

転んじやつたのか？

すると、シスターが子供のそばまで駆け寄る。

「男の子ならこのくらいにケガで泣いてはダメですよ」

シスターは子供の頭をなでながら言うと、子供のケガした膝に手を当てる。

次の瞬間、シスターの両手の中指に指輪みたいなのが現れ、淡い緑色の光を発した！
そして、光に照らされた子供の膝から傷が消えていく。

「——っ！」

その光景を見た瞬間に左腕が疼き出した！

千秋が心配そうに小声で話しかけてくる。

(………イツセー兄、大丈夫？)

(………ああ、ちよつと疼いただけだ。それよりも千秋、あれって………)

(うん。 セイクリッド・ギア 神 器で間違いないよ)

てことは、この疼きは俺の セイクリッド・ギア 神 器が彼女の セイクリッド・ギア 神 器に共鳴してるってことか？

「はい、傷はなくなりましたよ。もう大丈夫」

シスターは子供の頭をひとなですると、俺たちのほうへ顔を向ける。

「すみません。つい」

彼女は舌を出して、小さく笑う。

「ありがとう！ お姉ちゃん！」

子供は笑顔でシスターにお礼を言うと、元気よく走っていった。

『ありがとう！ お姉ちゃん！』だってさ」

俺が通訳すると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

それから、俺たちは再び歩き出す。

「驚いたでしょう？」

「いやあ、ははは。キミ、すごい力持ってるんだね？」

「神さまからいただいた素晴らしい力です。．．．．．そう、素晴らしい．．．．．」

彼女は微笑みながら言うけど、その笑みはどこか寂しげだった。

何かあるのかもしれないけど、深く追求しちやダメだよな。

「あつ、あそこですね？」

しばらく歩いていると、目的地である教会が見えてきた。

「ああ。この町の教会っていったら、あそこだけだから」

「よかった！ 本当に助かりました！」

シスターがお礼を言ってくるけど、俺はそれどころじゃなかった。

ゾクッ！

教会が見えてきたあたりから、ずっと悪寒が体中を走っていた！ いやな汗もかなりかいてる！

悪寒の原因は当然、悪魔である俺が教会に近づいたからだろうな。神さまとか天使に関係する教会なんて、敵地もいいところだからな。

部長にも神社や教会には近づかないようにって強く言われたしな。

「是非お礼がしたいので、ご一緒に来ていただけませんか？」

「い、いや、ちょっと用事があるんで！」

「……………学校もあるし」

「……………そうですか。分かりました。また今度、お礼をさせていただきます。あ、私、アーシア・アルジェントと申します。アーシアと呼んでください」

そういうえば、まだ自己紹介してなかったな。

「俺、兵藤一誠。イツセーでいいよ」

「私は士騎千秋。私も名前がいいよ」

「イツセーさん、千秋さんですね。日本に来て、すぐにお二人のような親切でやさしい方々と出会えて、私は幸せです！」

結構大袈裟だな、この子。

「是非ともお時間があるときに教会までおいでください！ 約束ですよ！」

「えつ、ああ、うん。わかった。じゃあ、また」

「はい！ またお会いしましょう！」

俺と千秋はそこでアーシアと別れ、学校に向かうのだった。

アーシアは俺たちの姿が見えなくなるまで笑顔で手を振っていた。

本当にいい子なんだなあ。



「二度と教会に近づいてはダメよ」

夜の部室にて、イツセーは部長に厳しく叱られていた。理由は悪魔であるイツセーが教会に近づいたからだ。そのイツセーが教会に近づいた理由は、道に迷っていたシスターを送り届けるためらしい。

「教会は私たち悪魔にとつて敵地。踏み込めば、それだけで神側と悪魔側で問題になるの。いつ光の槍が飛んでくるのかわからなかったのよ？」

「マ、マジですか……」

それを知って、イツセーは身震いをする。

「千秋もどうして、イツセーを教会に近づけるようなマネをしたのよ！」

「すみません。でも、もし他にも教会関係者が近くにいるかもしれないと思ったら、あそこでイツセー兄を一人にするのは危険だと思ったので……」杞憂でしたけど」なるほど。なんで千秋がイツセーの身を危険に晒すかもしれない教会に近づくのをおよとしたのか気になったが、そういうことか。

まあ、確かに、仮にそのシスターを迎えに来た教会関係者が近くにいたら、イツセーを一人にした瞬間に悪魔祓いをされてたかもしれないからな。

「まったく。いいこと、イツセー。教会の者と一緒にいることは死と隣り合わせと同義。とくに教会に属する『悪魔祓い』エクスシストには神セイクリッド・ギアの使い手だっているんだから。イツセー。悪魔祓いを受けた悪魔は完全に消滅するの。無、何もなく、何も感じず、何もできない。それがどれだけのことか、あなたにはわかる？」

「……………いい、いえ……………」

「……………ゴメンなさい。熱くなりすぎたわ。とにかく、今後は気をつけてちょうだい」

それにしても、イツセーがシスターを案内した教会つてのは、あそこにあるヤツのとだよな。このへんの教会つていったら、あそこだけだからな。

だが、あの教会は確か、廃棄されたヤツのはず。——そういえば、イツセーを襲った墮天使。もし、あの教会を墮天使たちが根城にしているのだとすると、そのシスターは教会を追放された者。

そう考えれば、あの教会にシスターが赴任するっていうのも辻褄が合う。

だが、腑に落ちないことがある。なんで墮天使は部長の管理するこの町に居座る？

墮天使がこの町にいるのは、イツセー以外に別の目的がありそうだな。

「あらあら。お説教は終わりましたか？」

いつのまにか、副部長がイツセーの背後にいた。

「朱乃。どうしたの？」

「さきほど、大公より連絡が」

「大公から？」

「この町でまたはぐれ悪魔が見つかったそうですわ」



はぐれ悪魔というのがこの町で見つかり、それを討伐するよう、上級の悪魔から部長に届けられた。

現在、俺を含めたオカルト研究部のメンバーは、町はずれの廃屋の近くまで来ていた。この廃屋にはぐれ悪魔がいるらしい。

ちなみに、同行メンバーには明日夏と千秋もいる。

千秋が俺の身を案じて同行を部長に頼み、部長がそれを了承してくれたからだ。朱乃さんがここにいるはぐれ悪魔について教えてくれる。

「この先の廃屋で誘き寄せた人間を食べていると報告がありました」

「た、食ベ．．．．．ッ!？」

「それを討伐するのが、今夜のお仕事ですわ」

聞くと、明日夏も同じ手口のはぐれ悪魔をつい先日討伐したらしい。

「主を持たず、悪魔の力を無制限に使うことがいかに醜悪な結果をもたらすか．．．．．」

「んん？ どういう意味だ、木場？」

「ようは醜いバケモノになるってことだ。俺が討伐した奴もそういう存在だった」

バケモノ、か．．．．．確かに、やってることはバケモノの所業かもな。

「イツセー」

「あつ、はい、部長」

「あなた、チェスはわかる？」

「チェスつて、ボードゲームのあれですか？」

「主の私が『王』^{キング}で、『女王』^{クイーン}、『騎士』^{ナイト}、『戦車』^{ルーク}、『僧侶』^{ビショップ}、『兵士』^{ポーン}、爵位を持った悪魔は、この駒の特性を自分の下僕に与えているの」

駒の特性？

「私たちはこれを『悪魔の駒』^{イービル・ピース}と呼んでいるわ」

「何でわざわざ、そんなことを？」

「これから見せてあげるわ。とにかく今夜は、悪魔の戦いというものをよく見ておきな
ゃ」

「は、は」

部長の話の話を聞いているうちに、廃屋に着いた。

「………血の臭い」

中に入ると、小猫ちゃんが袖で鼻を覆いながら吠いた。

「………来たな」

今度は明日夏が吠くと、室内に低い声音が響いた。

「不味そうな匂いがするわあ。でも、美味しそうな匂いもするわあ。甘いのかしらあ？

苦いのかしらあ？」

暗がりからゆっくり姿を現したのは——上半身が裸の女性だった！

「おっぱいー！」

思わず叫んでしまった。

かなりの美人だし、何より、おっぱいがまる見え！ しかも、かなり大きい！
その見事な大ききの生乳をついついガン見してしまった！

——でも、なんで浮いてるんだ？

なぜか、女性は浮いており、下半身のほうが暗闇に隠れてよく見えなかった。

「はぐれ悪魔バイサー。主のもとを逃げ、その欲求を満たすために暴れ回る不逞の輩。その罪、万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを吹き飛ばしてあげる！」

部長が啖呵を切るが、はぐれ悪魔バイサーは余裕の表情だった。

「こざかしい小娘だこと。その紅い髪のように、あなたの身を鮮血で染めてあげましょうかあ！」

自分の胸を揉みしだきながら言うバイサー。

「雑魚ほど洒落の効いたセリフを吐くものね」

バイサーの余裕に対して、部長は冷静に鼻で笑うだけだった。

いっぽう、俺は未だにバイサーの胸をガン見してました。

「こ、これがぐれ悪魔……ただの見せたがりのお姉さんにしか——」

「……イツセー。鼻の下を伸ばすのは奴の全体を見てからにしたらどうだ？」

明日夏がそんなことを言ってくるが、どういうことだ？

そして、バイサーの下半身をよく見てみると、暗がりからようやく隠れていた下半身が現れた。けど——。

「なあっ!？」

俺はバイサーの下半身を見て驚愕する。

なんせ、その下半身は巨大な腕と足の四足歩行のバケモノとしか言いようがないものだった。蛇の尾があり、独立して動いていた。

「さつき木場が言ってただろ？ 『醜悪な結果をもたらす』って。あれがその結果だ」

あ、あんないいおっぱいなのに、もったいない！

「あれ？ あれ．．．．．魔法陣じゃね？」

バイサーが揉みしだいている胸を凝視していると、魔方陣が浮かんでいた！
そして、魔法陣から魔力が撃ち出された！

「ボサツとするな！」

「うわっ!？」

バイサーの攻撃に対して皆がとつくに回避行動をとるなか、俺はブーツと突っ立ってしまっていたが、明日夏に襟首を引っ張られたおかげで事なきを得た。

ジュウウウ。

バイサーの魔力が当たった場所が音をたてて溶けていた！

「ひええっ！ 確かにバケモノだわ！」

「油断しちゃダメよ。祐斗！」

「はい！」

部長の命を受けて、木場が飛び出した。

速い！ なんて速さだ！ 速すぎて見えないくらいだ！

部長が『イビルピリス悪魔の駒』の説明を再開してくれる。

「祐斗の役割は『騎士^{ナイト}』。特性はスピード。そして、その最大の武器は剣」

部長が説明しているうちに、木場がバイサーの懐に現れたと思つた瞬間、バイサーの巨大な腕が斬り落とされていた！

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

腕を斬られたバイサーの悲鳴がこだまする。

そんな悲鳴をあげるバイサーに、小柄な人影が近づいていく。小猫ちゃんだ！

それを見たバイサーは顔を醜く変形させ、胴体が縦に裂けて、牙が生えた大きな口が現れた！

「危ない、小猫ちゃん！」

「死ねええええええッ！」

バイサーはそのまま倒れこむように小猫ちゃんに襲いかかり、なんと、小猫ちゃんはそのまま巨大な口に飲み込まれてしまった！

「大丈夫」

「え？」

部長に大丈夫と言われ、バイサーのほうを見る。

「フッフッフッフ、アツハハハハ——っ!？」

バイサーは勝ち誇ったかのように笑い声をあげていたが、その顔が驚愕に染まる。

バイサーの巨大な口がこじ開けられたからだ。

そこには、服はボロボロだけどまったくの無傷の小猫ちゃんがいた。

「小猫は『戦車』^{ルック}よ。その特性はシンプル。バカげた力と防御力。あの程度じゃ、ビクともしないわ」

「……………ぶっ飛べー！」

小猫ちゃんはそのまま、体を捻るように口から出ると、強烈な右フックで牙を砕きながらバイサーを吹っ飛ばした！

……………小猫ちゃんには、逆らわないようにしましょう。小突かれただけでも死んじやいそうだ。

「朱乃」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしらあ？ うふふ」

部長に命じられた朱乃さんはいつものニコニコフェイスでバイサーに近寄っていく。

……………なぜだろう。いまはその笑顔がこわい。

すると、部長の後方で、さつき木場が斬り落としたバイサーの両腕の片方が、ぴくりと動いた！　そして、跳ねるように飛んで部長へと襲いかかる！

「部長！」

反射的に俺は神セイクリッド・ギア器を出して、部長に襲いかかろうとしていたバイサーの腕を殴り飛ばしていた。

「あ、ありがとう………」

尻もちをついた部長から呆けたように礼を言われ、思わず少し照れてしまう。

「ああ、いえ。体が勝手についていうか——」

「イツセー、避けて！」

「——ツ!？」

そこへ、バイサーの腕は再び動き出して、今度は俺のほうに襲いかかってきた！

ドスツ！

俺が身構えた瞬間、バイサーの腕は矢みたいなものによって空中から撃ち抜かれた！

「イツセー兄、大丈夫！」

俺の横に千秋が空中から降りてきた。

その手には弓みたいなのが握られている。それで空中からあの腕を撃ち抜いたのか。

バイサーの腕は矢で打ちつけられた状態で未だに動こうとしていた。

そんな腕に千秋は近寄り、至近距離で矢を射る！

バイサーの腕はそれで今度こそ動かなくなつた。

「——つて、そうだ！ 腕はもう一本——」

慌てて、もう片方の腕のほうを見ると——。

「こつちなら、心配いらねえよ」

バイサーの腕は明日夏に踏みつけられていて、もがいていた。

その明日夏の手には、刀のようなものとその刀の鞘らしきものが握られていた。

明日夏はもがく腕に刀を突き刺した！

それにより、こちらの腕も動かなくなった。

それを確認した明日夏は、刀を腕から抜き、刀身についた血を振り払ってから鞘に収めた。

明日夏も千秋も、こんな動くバケモノの腕を見ても、まったく動じずにあっさりと対処してのけた。

これが俺の知らなかった賞金稼バウンティハンターぎとしての二人の姿か。

「朱乃」

いつのまにか立ち上がっていた部長が朱乃さんへと命を下した。

「あらあら。おイタをするイケナイ子は、お仕置きですわね」

そう言う朱乃さんの手から、雷がほとぼしっていた！

「彼女は『女王^{クイーン}』。他の子の全ての力を兼ね備えた、無敵の副部長よ」

「ぐううううつ．．．．．」

部長が説明しているなか、バイサーは弱りながらも、朱乃さんを睨みつける。

朱乃さんはそれを見て、不敵な笑みを浮かべた。

「あらあら。まだ元気そうね？　なら、これはどうでしょう？」

朱乃さんが天に向かって、手をかざす。

カツ！

刹那、屋内が強く照らされ、バイサーに雷が落ちた！

「があああああああああっっ!?!」

バイサーの凄まじい叫び声が屋内に響くなか、部長は平然と説明を続ける。

「魔力を使った攻撃が得意なの。そのうえ、彼女は究極のSよ」

S!?! 究極のSですか!?!

「あらあら、まだ元気そう? どこまで耐えられるかしらあ?」

「ぎゃああああああああああっっ!?!」

「うふふふふふふふ!」

わ、笑ってる。雷で苦しんでるバイサーを見て、心底楽しんじゃってるよ、あのヒト

!

明日夏と千秋もドン引きしてるし!

「朱乃。それくらいにしておきなさい」

部長の言葉を聞いて、ようやく、朱乃さんが雷による攻撃をやめた。

「もうおしまいなんて。ちよつと残念ですわね。うふふ」

うわあ。朱乃さん、全然物足りなさそうな顔をしているよ。部長が止めなかったら、まだまだ続いてたんだろうなあ……。

部長がもはや虫の息のバイサーに歩み寄る。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

「……………殺せ……………」

「そう。なら——消し飛びなさい」

ドンツ！

部長の手のひらからドス黒い魔力の塊が撃ちだされ、バイサーの巨体以上の大きさの塊がバイサーを覆う！

「チェックメイト」

魔力が宙へと消えた瞬間、バイサーの姿はそこにはなかった。部長が言った通り、消し飛んだようだ。

「終わったわ。さあ、帰るわよ」

「はい、部長」

部長の言葉に、部員の皆にもこやかに返事をする。返事をしていないのは、さっきの部長の魔力を見て呆気にとられている俺や明日夏に千秋だけだった。

——つと、そうだ。

「あ、あの、部長」

『イビル・ピース悪魔の駒』のことを聞いてから、部長に訊きたいことがあったんだった。

「なあに？」

「それで、俺は？ 俺の駒っていうのが、下僕として役割はなんなんですか？」

ただ、正直このときいやな答えを予感していた。

「『^{ポーン}兵士』よ」

「『^{ポーン}兵士』って……あの……」

「そう。イツセー。あなたは『^{ポーン}兵士』」

『^{ポーン}兵士』……一番下つ端のあれえええつ!？」

Life. 10 はぐれ悪魔祓い（エクソシスト）

深夜、俺はチャリをとぼして、依頼者のもとへ向かっていた。

『小猫の召喚がまた重なってしまったの。今夜一件お願いできるかしら？』

ていうことで、また小猫ちゃんへの契約が重なったので、片方を俺が行くことになった。

「それにしても、『兵士』^{ポーン}かぁ……」

下僕を持つには、上級悪魔にならないといけない。

最初から上級悪魔な部長と違って、俺たち転生者は力を認められ、昇格しなきゃならない。——だが、俺は『兵士』^{ポーン}。最弱の駒。……捨て駒じゃねえか……。はぁ……ハーレム王への道は遠いなあ。

内心でため息を吐いていると、隣で走って俺と並走する明日夏が言う。

『兵士』も別に悪いポジションじゃないと思うぞ」

いつものように、俺の身を案じてくれた千秋が俺の護衛につこうとしてくれたんだけど、「毎回毎回やってたら、身がもたねえぞ」ということで、今回は明日夏が護衛についてくれることになった。

本人的には、こうしてチャリで移動する俺と並走することで、ついでも鍛錬になるぞうだ。

『兵士』には『プロモーション』ってのがあるんだ」

「プロモーション?」

「ああ。実際のチェスでもある相手の陣地に入った瞬間から、『王』以外の駒に昇格できる『兵士』の特性だ。相手の陣地つてのはこの場合、部長が敵地の重要な場所と認定した場所だな。例えば、昨夜の廃屋で部長が許可を出せば、おまえは『騎士』にでも『戦車』にでもなれるってわけだ」

へえー、『兵士』にそんな特性があったのか。

でも、プロモーションできないと、結局は最弱の駒のままじゃねえか。やっぱり、ハーレム王の道は遠いなあ……。

そうこうしていると、依頼者が住んでる場所に到着した。森沢さんのときとは違い、普通の一軒家だった。

「俺は外で待つてる」

「えっ、いいのか？」

「ああ。少し休憩がてらに夜風に当たりたいしな」

「ああ。わかった」

明日夏には外で待つてもらおうことになり、俺は依頼者の家のインターホンを鳴らす。

——けど、反応がなかった。

「ん？」

ドアノブに手をかけると、鍵がかかってなかった。

開けっ放しなんて、物騒だなあ。

奥のほうを見ると、電気はついておらず、淡い灯りが漏れている一室があった。

「ちわーっす。グレモリーさまの使いの悪魔ですけど」

呼んでみるけど、返事がない。

「依頼者の方は——ッ!？」

中へ足を踏み入れた瞬間、なんか、いやな感じがした！

「……………いらっしやいますか?」

もう一回呼んでみるけど、やっぱり返事がない。

……………なんだ? それに、このいやな感じも?

正直、もう帰りたくなってきた。

でも、脳内に夕方、部長に言われたことが思い出される。

『今度こそ、必ず契約を取ってくるのよ。私の期待を裏切らないで』

このまま帰ったら、いよいよ部長に合わせる顔がねえし、俺は意を決して、依頼者の家の中に入る。

「…………お邪魔しますよ」

灯りが漏れている部屋のほうに進んでいく。

この灯り、ロウソクかなんかか？ 雰囲気でも作ってんのかねえ？

「すいませーん——うおわっ!？」

部屋の中に入ったところで、何か液体みたいなものを踏んでしまい、靴下が濡れてしまった。

「なんかこぼれて——」

靴下についた液体を手で取った俺は絶句してしまった。

「——これって……」

ドロドロとしていて、鉄のような臭いがする液体——そう、血だった。
俺は床にこぼれている血の先を見る。

「なあっ!？」

そこには逆十字の恰好で壁に貼りつけられた人間の死体があった！
たぶん、この家の住人、今回の依頼者の男性だ。

全身が切り刻まれ、傷口から内臓もこぼれている。太くて大きい釘で手のひら、足、胴体の中心が壁に打ちつけられており、それで壁に固定されていた。

「ゴボツ」

腹からこみ上げてくるものがあり、思わず口を手で押さえる。

な、なんだこれ!? 普通の神経でじゃこんなことできねえよ!?

「『悪い人はお仕置きよ』——」

突然聞こえた声のほうを見ると、白髪の男がこちらに背を向ける形でソファアームに座っていた。

「——って、聖なるお方の言葉を借りてみましたあ♪」

男は首だけをこちらに向けて舌を出してニンマリと笑う。

十代くらいの若い外国人の少年で、結構な美少年だった。——浮かべた醜悪な笑顔でせつかくのイケメンが台無しになっていたが。

「んーんー。これはこれは、悪魔くんではありませんかー。俺の名前はフリード・セルゼン」

礼儀正しく一礼をするフリードと名乗る少年。

だが、すぐふざけたように手足を躍らせ、礼儀正しい雰囲気をぶち壊す。

「とある悪魔祓い組織に所属している少年神父でござんす♪」
「神父！」

「まあ、悪魔みたいなクソじゃないのは確かですが」

俺は殺された男性を指差しながら、少年神父に訊く。

「おまえがやったのか!？」

「悪魔に頼るなんてのは人として終わった証拠。エンドですよ！ エンド！ だから殺してあげたんですう！ クソ悪魔とクソに魅入られたクソ共を退治するのがあ、俺さまのお仕事なんでえ」

そこまで言うと、神父は刀身のない剣の柄のようなものと拳銃を取り出した。さらに柄から光の刀身のようなものが出てきた。

「光の剣!？」

「いまからおまえの心臓ハートにこの刃をおつたてて、このイカす銃でおまえのドタマに必殺必中フォーリンラブウしちやいますう！」

イカレた表情を作り、神父が飛びかかってくる！

「うわっ！」

光の剣の一振りをすんでのところ、身をかがめてなんとか躲す！

「バキユン！」

「ぐあああつ！」

後ろから左足を撃たれてしまい、足に凄まじい激痛が走る！

この痛み!! 撃たれただけだからじゃない！

「エクソシスト謹製、祓魔弾。お味はいかががっスかあ？」

「くうっ……こんのオオツ！」

俺は神セイクリッド・ギア器を出す、神父は愉快そうに笑うだけだった。

「おおおつ！ まさに悪魔！ そのほうがこっちも悪魔祓いの気分が出ますなあ！」

「でええあああッ！」

「残・念！」

ズバツ！

「ぐああっ!？」

俺は神父に殴りかかるが、あつさりと躲された拳句、神父に背中を斬りつけられてしまった！

「ぐっ………うう………」

「おやおや、見かけ倒しっスかあ？ というのが一番ムカつくざんす！」

神父がキレた笑いを発しながら、俺にトドメを刺そうとしてきた！

「きゃあああー！」

瞬間、神父の背後で悲鳴があがった。

神父と一緒に後ろのほうを見ると、金髪のシスターが男性の遺体を見て呆然としていた。

そして……そのシスターを俺は知っていた。

「おんやあ？ 助手のアーシアちゃん？」

神父がシスターの名を口にした。

そう。そのシスターは、つい先日出会ったアーシアだった！

「結界は張り終わったのかなあ？」

神父はアーシアに訊くが、アーシアは男性の遺体の惨状に目を奪われていて、答える

余裕なんてなかった。

「……………これは……………?」

「そうかそつかあ。キミはビギナーでしたなあ。これが俺らの仕事。悪魔に魅入られたダメ人間をこうして始末するんっス」

「……………そ、そんな!」

アーシアが初めて神父のほうへ目を向ける。当然、俺のことも視界に入ってしまう。

「あっ」

そして、俺とアーシアの目が合ってしまった。

「イ、イツセーさん……………?」

「……………アーシア……………」

「何なあにい? キミたちお知り合い?」

神父の問いに答えず、アーシアは俺に訊いてくる。

「どうして、あなたが!？」

「……………ごめん……………俺……………悪魔なんだ……………」

「悪魔……………? イツセーさんが……………?」

「騙してたんじゃない! だから、キミとは……………もう二度と会わないほうがいいつて……………決めてたのに……………っ!」

俺の言葉に、アーシアは目に涙を浮かべている。その姿に胸が痛む。

「そ、そんな……………!? じゃあ、千秋さんも……………?」

「千秋は悪魔じゃない! 悪魔じゃないけど……………たぶん、千秋は……………」

悪魔である俺たちと関わっている以上、千秋ももうアーシアに会うつもりはなかったはずだ。

「……………ごめん……………また会おうって約束……………破るよ

うなことをして……」

しかも、再会がこんな最悪の形になるなんて……。

「残念だけど、アーシアちゃん。悪魔と人間は、相容れませーん。ましてや僕たち、墮天使さまのご加護なしでは、生きてはいけぬ半端者ですからなあ」

墮天使？ こいつ、いま墮天使って言ったか？

「さて、ちよちよいとお仕事完了させましょうかねえ」

首筋に光の剣の切っ先が突きつけられる！

「覚悟はOK？ なくても行きます！」

神父が光の剣を振りかぶった瞬間、俺の前に躍り出る影が――。

「ああん？」

「えっ？ アーシア？」

アーシアが俺の前に立ち、両手を広げていた。

「……………おいおい、マジですかー？」

「フリード神父！ お願いです！ この方をお許してください！ どうかお見逃しを！」

「キミイ、自分が何をしているか、わかっているのかなあ？」

「たとえ悪魔だとしても、イツセーさんはいいヒトです！ それにこんなこと、主がお許しになるはずがありません！」

アーシアは必死に神父へと主張した。

「はああああつ?! バカこいてんじゃねえよ！」

神父が光の剣を縦に一閃。そして、アーシアの服が剣閃に沿ってに切り裂かれた！

「あああつ!？」

アーシアは悲鳴をあげ、慌てて腕で前を隠しながら崩れ落ちる。

「アーシア——ぐっ!？」

アーシアの前に出ようとしたが、足の激痛で膝が崩れ落ちてしまう！

「このクソアマがッ！ マジで頭にウジ湧いてんじゃねえのかあ？ あああん！」

神父がアーシアの顎をつかんで、無理矢理立たせる。

「……墮天使の姐さんに傷つけないよう、念を押されてるけどお——これはちよつとお仕置きが必要かなあ！」

アーシアが両手を上げさせられ、袖を光の剣で縫いつけられた。

「汚れなきシスターが神父におもいつきり汚されるってさあ——ちよつとよくなあい
♪」

「いやあああああつ!?!」

野郎！ アーシアの体をまさぐり始めやがった！

「・・・・・・・・やめろ！」

怒りがふつふつと沸き上がってきた俺は、激痛に耐えて立ち上がる。

「おつとお！ タダ見はご遠慮願いますよ、お客さん！」

「・・・・・・・・アーシアを・・・・・・・・はなせ！」

「ヒュウウ。マジマジ？ 俺と戦うのお？ 苦しんで死んじやうよお？」

アーシアを縫いつけていた光の剣が抜かれ、切っ先がこちらに向けられる。

「イツセーさん、ダメです！」

アーシアの静止の叫びをあげ、俺に逃げろって促すけど、俺は構わず神父と向かい合う！

勝ち目はねえ。たぶん、死んじまうかもしんねえけど——俺を庇ってくれたこの子の前で、逃げるのもねえ——。

「——だろおおッ！」

「——ッ！ 痛いッ!？」

俺が反撃できるとは思っていなかったのか、神父はまともに俺の拳をくらって、床に倒れこんだ。

「ああああ………プツ………おもしろいねえ………」

神父はすぐに立ち上がってきた。

クソッ。やっぱ、勝ち目がねえな！

いまの一撃も不意打ちだったからだし、もうこっちの攻撃も当たらねえだろうな。

「……勝ち目があるとすれば——明日夏。明日夏ならなんとかしてくれるかもしれないし……最悪、アジアだけでも……」。

窓ガラスを割るなりして暴れ回れば、明日夏も異変に気づいてくれるかな？

「あれ？ もしかして、お外にいるお仲間さんが助けに来てくれるかも、なんて期待しちゃってるう？」

「なっ!? こいつ、明日夏のこと気づいていたのか！」

「ぎくんねくんながらあ、僕ちんのお仲間もお外にいましてねえ。今頃、そいつらに八つ裂きにされてるだろうさあ！」

「なっ!? てめえ！」

「さあて、どこまで肉を細切れにできるかあ、世界記録に挑戦しましょうかあ！ イエエアアアアツ！」

神父が光の剣を振りかぶって、飛びかかってきた！

避けようとしたが、足の激痛で膝をついてしまう！

「きやあああ!？」

「ギャツハハハハハッ！」

悲鳴と笑い声が響き、もうダメだと思った瞬間――。

ドオオンッ！

「なっ!？」

「なんだあっ!？」

突然、爆発音を伴い、部屋の壁が外側から吹き飛んだ！

ヒュッ。

さらに神父に向かって、何かが飛来する！

「――ッ！　しやらくせえ！」

神父はそれを光の剣で斬り払うが、そのあいだに俺を横切り、神父に肉薄する人影が――。

「ふうッ！」

「ぐぼおおあああつ?!」

突き出した拳が神父に突き刺さり、神父が後方に吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた――!

「――無事か、イツセー?」

人影の正体は、外で待っていたはずの明日夏であった。



イツセーが依頼者の家へ上がって行くのを見届けた俺は、持ってきたスポーツドリン

クを呷る。

渴いた喉をスポーツドリンクが潤し、適度に疲れた体内にスポーツドリンクの糖分が染み渡る。

「ふう——ッ！」

一息ついていた俺だったが、すぐに警戒心をあらわにした。

一人、二人——いや、三人か。

三人ほどの敵意と殺意が、道の先の暗闇から発せられていた。

ザッ。

暗闇から現れたのは、神父の格好をした男が三人だった。顔は何やらマスクのようなものをかぶっており見えない。

「・・・・・・・・・・悪魔祓いか？」

エクソシスト

格好とこの敵意と殺意、たぶん間違いないだろう。

俺は警戒心をさらに深めながら神父たちに訊く。

「狙いはイツセーか？」

俺の質問に対し、神父たちは鼻で笑い、懐から拳銃を取り出し、銃口をこちらに向けてきた！

「忌々しき悪魔なら、今頃、家内にいる同胞が滅していよう」

「——ッ!？」

「我々の狙いは、悪魔と知りながらも関わろうとする貴様だ！」

「悪魔に魅入られし者よ！ 滅してくれる！」

問答無用で拳銃の引き金が引かれる！

「ちっ！」

俺はすぐさま電柱の陰に隠れて、銃弾をやり過ぎた！

問答無用なうえに、やり方もずいぶん過激だな？

まあいい。そんなことよりも、「家内にいる同胞」って言ったな。だとしたら、イツセーが危ない！

「時間をかけてられねえな！ さっさと片付ける！」

俺は手早く戦闘服に着替え、電柱の陰から飛びだし、神父たち目掛けて駆けだす！

「——ッ——」

神父たちは再び銃撃を放ってくるなか、俺は顔の前で腕をクロスさせる。

銃弾は俺に命中するが、戦闘服がダメージと衝撃を緩和してくれるため、俺は無傷だった。

銃撃が無意味と判断した神父たちは拳銃を捨て、刀身のない剣の柄を取り出すと、柄から光の刀身が現れた。

俺はそれを見ると、すぐさま背中に背負っている刀——俺専用の特注された高周波ブ

リード、『ライトニングスラッシュ雷 刃』の機能を起動する音声コードを口にする！

「スラッシュSlash！」

音声コードを口にすると、機械仕掛けの鞘から電気がほとぼしり、刀身に帯電している。
く。

肉薄した神父に抜きざまに一閃！

神父は光の剣で防ごうとするが、俺は光の剣ごと、神父の首を一閃する！

神父の首が飛び、残った体が崩れ落ちた。

これがライトニングスラッシュ雷 刃の機能。帯電による刀身の強化。時間制限はあるが、その斬れ味は

ご覧の通りだ。

「なっ!?!」

「貴様ツ！」

残る二人の神父が前後から光の剣で斬りかかってくる。

背後からの斬撃をライトニングスラッシュ雷 刃の鞘で防ぎ、正面からの斬撃は刀身で弾き、そのまま振り

向きながら、背後の神父を光の剣ごと袈裟斬りで斬り伏せる！

「きゃー——」

ザシユツ！

残りの神父が何かを言おうとしたところを、ライトニングスラッシュ 刃を逆手持ちに持ち替え、後ろに飛んで、背後にいる神父に刀身を突き刺す！

そのまま背負い投げ、背後から神父の首を折る。

「イツセー！」

俺はすぐさまイツセーのあとを追い、家内に入ろうとしたが、何かに阻まれてしまう。

「これは………結界か！」

おそらく、人払いと侵入妨害のためのものだろう。

クソッ！ 時間がねえつてときに！

だが、よく見ると、張りかたが不十分なのか、結構ほころびが見え隠れしていた。

「これならすぐにどうにかできるか」

俺は雷ライトニングスラッシュ 刃を構える。

「はッー！」

結界のほころびを切り裂くと、ほころびだらけで脆かった結界はあっさりと崩壊した。

雷ライトニングスラッシュ 刃には術式に干渉できる術式が施されている。こうして、術式のほころびなどを切り裂くことでその術を破壊することができなのだ。

「玄関から入ってたら間に合わねえー！」

窓のカーテンのスキマから灯りが僅かに漏れている部屋を見つけ、そこにイツセーが

！
いることに賭けて俺はバーストブレイカーを二本取り出し、その部屋の壁に投げつける

ドオオンツ！

バーストフアングが壁に命中した瞬間、爆発し、部屋の壁を吹き飛ばした。

それと同時に部屋に飛びこむと——イツセーに斬りかかろうとしていた神父が目に入った！

瞬時に俺はナイフを神父に投擲した！

「——ツ！　しやらくせえ！」

神父はすぐに反応して、手に持つ光の剣でナイフを斬り払った。

だが、そのスキに神父の懐に飛びこむ！

「ふうッ！」

「ぐぼおおあああつ?!」

突き出した拳が神父に突き刺さり、神父は後方に吹っ飛び、壁に叩きつけられた！

「——無事か、イツセー？」

どうやら間に合ったようだな。

とはいえ、クソツ。無傷じゃねえか。

確認できるイツセーのケガは——背中の切創と左足の銃創。それ以外はなさそうだな。

だが、エクソシスト悪魔祓いの武器によつてできた傷ならおそらく、悪魔であるイツセーには傷以上の痛みが伴つてるか……。

「チミチミイ……。」

吹っ飛ばした神父が起き上がってきた。

殺すつもりでやったんだが——殴った際に感じた硬い何かの感触から察するに、剣の柄を盾にしたか？

「これは銃刀法違反、器物破損、家宅侵入で犯罪ですよ？」
「……てめえが言うな」

俺は壁に貼りつけられた男性の遺体を見ながら言った。

「ていうかあ、お外にいた僕ちんの仲間はどうしたのかなあ？」

「ああ、あいつらなら問答無用で襲いかかってきたから、返り討ちにした」

神父の問いに答えながら、
ライトニングスラッシュ 雷 刃を逆手持ちで構える。

「ちつ、役立たずどもが！ ま、いつか。獲物のクソ人間が増えたってことだし」

神父は舌を出して狂ったような醜悪な笑みを浮かべ、光の剣をデタラメに振りながら言った。

この神父、随分と聖職者にあるまじき言動だな？

さっきの過激な神父たちとい——もしかして、こいつら、はぐれか？

「さあて。今度こそ、どこまで細切れにできるかあ、世界記録挑戦と行きましようかあ！」

斬りかかってくる神父の光の剣を雷ライトニングスラッシュ 刃で受ける。

「なかなかイカす刀じゃねえか？ 何々、サムライってやつですかあ？」

「……その口、黙らせろ……」

「おまえが黙れよ！」

「——ッ！」

至近距離から顔面に銃口を向けられる！

「バキューン！」

引き金が引かれるのと、俺が顔を逸らすのはほぼ同時だった！

銃口から放たれた銃弾が俺の頬を掠めた！

「——ッ！」

「痛いっ!？」

すぐさま、神父の顔面に自分の額をぶつけてやる！

俺の頭突きで神父が仰け反ったところを斬り上げるが、神父に後ろへ飛ばれてしま
い、俺の一撃は空振ってしまった。

ちっ、言動はアレだが、さっきの神父たちと違い、強いなこいつ。

「いいねいいねえ。やるじゃん、キミイ。殺しがいいがあるじゃん。だから、早く殺されて
？」

「……はいつて言うと思うか？」

「あ、答えは聞いてないんで」

そう言いながら神父は光の剣と拳銃を構える。

俺も奴の行動に素早く対応できるように、身構えた瞬間——。

「なんだ？」

「魔法陣！」

「来たか！」

部屋に紅い光を放つ魔法陣が現れた。

魔法陣が輝き出すと、光の中から人影が俺の隣に躍り出てきた。

「二人とも、助けに来たよ」

「遅えよ」

人影の正体は木場だった。

「あらあら、これは大変ですわね？」

「……………悪魔^{エクソシスト}祓い」

さらに、木場に続いて、副部長と塔城も現れた。

「ヒヤッホオオオツ！ 悪魔の団体さんのご到着う！」

距離を置いた神父が余裕の態度を崩さず、むしろ、獲物が増えたことに歓喜していた。

「悪いね。彼らは僕らの仲間なんだ」

「おおお！ いいね、そういうの！ うーん、何かい？ キミが攻めで、彼らが受けの3

Pなのかなあ？」

「………んなわけねえだろ………」

「あつ、もしかして、キミが攻め——」

「………おまえ、ホント黙れ………」

………正直、鬱陶しい。

「ヒュウウ。怖いねえ。そんなに照れな——」

「………舌を抜かれるのと、斬られる、どっちがいい………？」

「もちろん、俺さまがおまえの舌を斬るだよん♪」

神父の下品な言動に木場は嫌悪の表情を見せる。

「……………神父とは思えない下品な口だ」

「上品ぶるなよ、クソ悪魔。てめえらクソ虫を狩ることが、俺の生きがいだ！ 黙って俺に殺されりやいいんだよお！」

「悪魔だって、相手を選びますわ」

副部長が目元を鋭くして言い放つ。

「いいよ！ いいよ、その熱視線！ ああ、これは好意？ いや殺意？ ンヒヒヒヒヒ！」

殺意は向けるのも、向けられるのもたまらないねえ！」

「……………調子に乗つてると死ぬぜ」

「殺せるものなら殺してみろよ！」

「なら、消し飛ぶがいいわ」

醜悪な笑みを浮かべていた神父の顔が急変し、その場を飛び退いた瞬間、黒い魔力がその場に当てられ、床の一部を消滅させた！

やったのは当然、魔法陣から現れた部長だった。

「私のかわいい下僕をかわいがってくれたみたいね？」

部長は凄まじい殺気を神父に放つ。相当キレてるな。

「おおお！ これまた真打ち登場？ はいはい、かわいがってあげましたが、それが何かあ？」

「大丈夫、イツセー？」

部長は神父の挑発を無視し、イツセーに視線を向けて問いかけた。

「……………はい……………部長、すみません……………叱られたばつかなのに……………俺、またこんなことを……………」

部長の期待に沿えなかったどころか、こんな面倒をかけてしまったことに、イツセーはうなだれてしまう。

だが、部長は膝を曲げて、うなだれるイッセーの頬に優しく手を添える。

「……こんなにケガしちゃって。ごめんなさいね。はぐれ悪魔祓エックスいが来ていたなんて。さつきまで結界が張られていて、気づかなかったの」

さつき、俺が破ったものことだろう。

「あうっ!？」

「何してんだよ！ このクソアマ！ 結界は、おめえの仕事だろうがあー!」

「アーシアー!」

神父がシスターを足蹴にしていた。

どうやら、あの結界は彼女が張ったものみたいだ。そして、イッセーの反応からして、彼女が教会へ案内したシスターなのであろう。

部長はスツと立ち上がると、鋭い眼差しで神父を睨みつける。

「私は、私の下僕を傷つける輩を絶対に許さないことにしているの。特にあなたのように

な、下品極まりない者に自分の所有物を傷つけられるのは、本当に我慢ならないの！」

部長から危険な魔力がほとばしり始める。

「・・・・・・・・おっと・・・・・・・・ちよつと、この力、マズくねえ？　つか、かなりヤバア・・・・・・・・！」

部長の迫力と状況でさすがの神父も焦りだしてきたようだ。

「・・・・・・・・墮天使、複数」

塔城が鼻を動かしながら言う。

「アツハツハハハハハ！　形勢逆転すなあ！　皆さん、まとめて光の餌食けつ決めてーい！」

状況が好転したと見るや、再びふざけた態度に戻りやがった。

だが、確かに墮天使が来るのはヤバいな。

「部長！ イッセーを連れて先に行ってください！ その魔法陣による転移ができるのは部長の眷属だけでしよう？」

「ええ、そうよ。急いでいたものだから、調整する時間がなかったの。だから明日夏、私たちが時間を稼ぐから、あなたが先にこの場から！」

「俺は自力で逃げれます！ いまはイッセーの回収が最優先でしょ！」

「わかったわ。気をつけなさいね、明日夏。朱乃、ジャンプの用意を」

「はい」

「小猫、イッセーを頼むわ」

「………はい」

「クソ悪魔ども！ 逃がすか——って、わたたた——痛あい!？」

神父が追撃しようとするが、塔城が投げたテーブルが直撃して伸びてしまった。

皆がイッセーを連れてジャンプしようとするなか、イッセーとシスターがお互いのことを見ていた。

「部長！ あの子も一緒に！」

「それは無理よ。明日夏が言っていたでしょう？ この魔方陣は私の眷属しかジャンプできない」

「そ、そんな!？」

イツセーが一瞬、俺のほうを見ると、何かを言おうとしたが、すぐに目を逸らして黙ってしまう。

「アーシア！」

イツセーはシスターのほうへ手を伸ばすが、当然届くはずもなかった。

「はなせ!? アーシアを助けるんだ！ はなせ！ アーシアアアアッ！」

イツセーはじたばたと暴れるが、イツセーを担ぐ塔城の腕は緩まない。

「イツセーさん……また……また……また、いつか……どこかで……」

シスターは目に涙を浮かべて、にっこりと微笑む。

「アーシアアアアアアアアアアアッ！」

イツセーの叫びが響き渡るなか、イツセーたちは光に包まれて消えていった。

Life. 11 友達、できました!

さて、イツセーは部長たちが回収してくれたな。

これで――。

「あなたも早く逃げてくださいー!」

シスターが逃げるように促してきた。

――あいにく、そ·う·い·う·わ·け·に·は·い·か·な·い·ん·だ·よ·な。

「残・念。てめえは逃がさねえよ!」

回復した神父が光の剣と拳銃を構えながら言った。

どこかイライラしてるように見えるが、獲物が逃げたことにイラついているのか?

「やれやれ。来てみれば、すでにもう悪魔どもがいらないではないか？」

「何々い？ 無駄足い？」

「いや、一人いるな」

そこへ、三人の墮天使が現れた。

一人は、以前相對した帽子をかぶり、スーツを着た男性、ドーナシーク。

一人は、長い黒髪のスーツを着た女性。千秋が言っていた奴だな。たしか、名前はカラワーナだと言っていたな。

最後は、金髪のごシック調の服を着た少女。こっちは知らないな。

……レイナーレとあのディブラって奴はいないか。

「また会ったな」

「フン、あのときの借り、耳を揃えて返してやろう」

ドーナシークが以前ほどの油断のない雰囲気をもとっていた。だが、やはり、どこか俺を人間だからと慢心している感じだ。

「私も貴様の妹には借りがあるのでな。貴様の首でも贈ってやるとするか」
「さっさと、殺っちゃおうよ」

それは、他の二人も同じだった。

「へっ、バカな奴だぜ。クソ悪魔どもをエサにすれば、逃げられたらうによお」

神父も神父で、完全に油断してるな。

ま、そのほうが都合がいいけどな。

俺は雷ライトニングスラッシュ 刃を鞘に収める。

「なんだ、諦めたのか?」

「それとも、命乞いでもするう?」

俺は――。

「――ツ!?!」

墮天使三人と神父に向けて、バーストファンクを投擲した！

「しやらくせえ！」

「こんなもん！」

「フン！」

女墮天使二人と神父はそれぞれ光の槍や剣でバーストファンクを弾こうとする。

「バカ者！ 避ける！」

バーストファンクの仕組みを知っていたドーナシックだけは慌てて叫ぶ。

ドオオンツ！

「！！」——「?!」「！！」

だが、ときすでに遅く、ドーナシック以外の三人はバーストフアングの爆発に巻き込まれる。

そして、部屋中に爆煙が充満する。

俺は爆煙に紛れて、ある行動に移す。

「あんの野郎、なめたマネしやがって!」

神父は吐き捨てるように言い、俺のことを探しだす。

「おっ、見つけた——って、なっ!」

「何っ!」

「——っ!」

煙が晴れ、俺の姿を捉えた神父と墮天使たちの表情が驚愕に染まった。
なぜなら——。

「貴様ツ! アーシア・アルジエントを!」

ドーナシークが慌てたように叫んだ。

なぜなら、俺がシスターの喉元に雷ライトニングスラッシュ 刃を突きつけていたからだ。

「おいおい、それは卑怯なんじゃないんですかあ？」

神父は相も変わらずの雰囲気だったが、明らかに余裕がなくなっていた。

墮天使たちに至っては、ひどく焦燥に駆られていた。

正直、賭けだったが……うまくいったな。

(悪いな。もう少しだけ耐えて、怯えているふりをしててくれ)

(は、はい！)

俺とシスターは墮天使たちに聞こえないように、小声で会話する。

いまのこの状態は、シスターの了承を得たうえでの人質をとったふりだ。

まあ、当のシスターはわけもわからずといった感じだがな。

ドーナシークが忌々しそうに俺を睨みつけながら訊いてくる。

「……貴様、アーシア・アルジエントをどうするつもりだ?」

こいつらの反応、少し引つかかるな?

——少しカマかけてみるか。

「ずいぶんとこいつの心配しているな? それとも、心配なのはこいつのことじゃなく、別のことだったりするのかな?」

そう訊くと、墮天使たちの表情に僅かだが変化があつた。

イツセーと千秋から、このシスターが回復系のセイクリッド・ギアの神器を所持していることを聞いて

いた。そのシスターが墮天使のもとに来る。そして、その墮天使がいまだにこの町に留まっている。さらに、いまの状況による目の前の墮天使たちの焦燥に駆られた姿。

これらの情報から、俺の中である仮説が立てられた。

「おい! 男が女を人質に取って恥ずかしくねえのかよ! おい! うちを無視すんじゃないねえ、コラッ!」

ゴシック調の服を着た堕天使が挑発じみたことを言ってくるが、俺は無視した。

「とりあえず、この場は退散させてもらおうぜ」

「待て！　アーシア・アルジェントを連れていかせはせん！」

ドーナシークの言葉を皮切りに堕天使たちが身構えるなか――。

「じゃあな」

俺はあるナイフを取り出し、それを床に叩きつける！

カッ！

瞬間、部屋に閃光が走る。

これは特殊なナイフで、『フラッシュファンング』といい、早い話、バーストファンングの閃光弾バージョンである。バーストファンングと同じ仕組みで閃光を放ち、相手の視界を

奪うものだ。

「「「ぐっ!?!」」」

不意打ちでくらった墮天使たちや神父は、閃光で視界を潰されていた。

「キャツ!?!」

俺はその隙に、シスターを担ぎ、俺が空けた壁の穴から外へ飛び出し、その場から駆けだした。

—○●○—

「あ、あの、ここは?」

「俺の家だ。とりあえず、入れ」

シスターを連れてやってきたのは、俺の家だった。

中に入り、とりあえず、シスターをリビングで待たせ、俺は服を取ってきてシスターに渡す。

「姉貴のお古で悪いが、とりあえず、これに着替えろ。そんな格好じゃ、動きにくいだろう?」

俺はシスターが着替えるために、廊下に出る。

「あ、あのー、着替えました」

しばらくして、シスターがそうやってきた。

その言葉を聞き、俺はリビングに入る。

シスターは斬られたシスター服じゃなく、姉貴の服を着ていた。サイズが大きいのか、少しダボダボだった。

「ひとつ訊くぞ。おまえ、あいつらのもとに戻る気はあるか?」

「えっ!」

俺の問いかけに、シスターは一瞬驚くが、すぐに首を横に振る。

「……………私、あのようにならぬ場所にはいたくはありません……………
!」

「なら、ここにいろ」

「えっ?」

「不自由を強いるかもしれないが、我慢してくれ」

俺は雷ライトニングスラッシュ 刃を鞘から少しだけ抜き、刀身の状態を確かめ、鞘に戻す。

そして、その場から去ろうとすると、シスターが声をかけてきた。

「あつ、あのつ、ど、どこへ!?!」

「あいつらの目をここから逸らしてくる」

それを聞いて、悲痛な表情でシスターは言う。

「き、危険です！　どうして、今日初めて会った私なんかのために!？」

たしかに、俺たちはお互い、今日初めて会った間柄だ。
それでも、俺にはシスターを助ける理由があつた。

「イツセーに頼まれたからな」

「えっ?」

転移する直前、イツセーは俺に何かを言いかけていた。おそらく、俺にシスターを助けてほしい、と言うつもりだつたんだろう。だが、俺の身を案じて、結局頼めなかつた。イツセーがこの子を手助けると頼みかけた、なら、助けない選択肢などなかつた。

ま、俺自身がほっとけなかつたつてもあるがな。

だから、俺はあえて部長たちから先にあの場から去つてもらつた。じゃないと、シスターを手助けるときに、色々と面倒になつていただろうからな。

「あ、あなたは一体……?」

「ただのあいつのダチだ。それ以上でも、それ以下でもねえよ。いいか、絶対にここから動くなよ」

俺はシスターにそう言い聞かせ、外に出ようとすると――。

「あ、あのっ!」

「ん?」

シスターに呼び止められた。

「なんだ?」

「まだ……あなたのお名前を聞いていません?」

ああ、自己紹介をする余裕なんてなかったからな。

「明日夏。士騎明日夏だ。明日夏でいい」

「士騎? もしかして!」

「ああ。千秋は俺の妹だ」

「そうだったんですか。あつ、私はアーシア・アルジェントと申します。私もアーシアで

構いません」

「そうか。なら、アーシア。何回も言うが、絶対にここから動くなよ」

「はい。明日夏さんもお気をつけて」

「ああ」

俺は笑顔で答え、ここに向かってくるであろう者たちのもとへ向かう。



「見つけたぞ！」

家からだいたい離れた場所にやってきた俺の目の前には、さっきの墮天使たちがいた。

「………貴様、アーシア・アルジエントをどこへやった？」

「さあな」

ドーナシークが訊いてくるが、俺は適当にはぐらかしてやる。

「正直に言ったら——」

「楽に殺すつてか？」

「なっ!? うちのセリフ盗んなッ!」

「挑発に乗るな、ミッテルト」

「なに、少々痛めつけてやればすぐに吐くだろう」

墮天使たちはそれぞれの手に光の槍を持つ。

俺も雷ライトニングスラッシュ 刃の柄を握る。

「「はッ!」」

墮天使たちが手に持つ光の槍を一齐に投げつけてくる。

「ふッ!」

ライトニングスラッシュ

雷 刃を抜き、俺はすべての光の槍を弾き落とす。

「どうした？ その程度か？」

「クツ!? 調子に乗りやがって！」

「落ち着け、ミッテルト」

「我々をなめおつて……。カラワーナ、ミッテルト、本気を出さずぞ！」

「チツ！ 面倒だけど仕方ないわね」

どうやら、手加減をやめたようだな。

俺はさらに気を引き締め、ライトニングスラッシュ 雷 刃を構える。

堕天使たちは俺を囲いだし、ドーナシックが斬りかかってきた。

俺は雷ライトニングスラッシュ 刃でドーナシックの光の槍を受ける。

「——ッ!？」

そこへ、ミッテルトと呼ばれた堕天使とカラワーナが、光の槍を投げつけてきた！

「終わりだ！」

ドーナシークはそれに合わせて、後ろに飛び退いた。

「——ッ！」

俺はその場で飛びながら身を捻って槍を避けた!

「「何っ!?!」」

それに驚いて硬直している堕天使たちにバーストフアングを投擲する!

「フン！」

「同じ手など!」

「喰らうかってんの!」

堕天使たちは同じ轍は踏まないと、バーストフアングを避けるが——。

ドオオンッ!

「——っ!?!」

墮天使たちの背後で爆発が発生し、墮天使たちを襲った。

避けられるのは想定できたことであり、それを逆手に取って、墮天使たちの背後でバーストファンク同士が交錯するように投擲したのだ。

俺は墮天使の一人——ドーナシック目掛けて、飛び上がる。

そのまま、ドーナシックを斬りかかろうとした瞬間——。

「——ッ!?!」

横合いから光の槍が飛んできた!

俺は慌ててそれを弾くが、ドーナシックには体勢を立て直されてしまう。

「くっ!」

俺は光の槍が飛んできたほうを見ると、そこには――。

「レイ………ナーレ………ッ!」

その容姿と名前は忘れるわけがない。イツセーを騙して近づき、殺した張本人。そいつがいた。

俺の中で沸々と怒りが湧いて出てきた。

………千秋のことを言えないな、俺も。

「ひさしぶりね? あなたを見ると、この傷が疼いて仕方がないわ………っ!」

レイナーレは忌々しそうに俺が付けた傷に巻かれた包帯を撫でながら言った。

「いますぐ、この傷のお礼をしたいところだけど、いまはアーシアのほうが一番優先よ」

レイナーレは他の墮天使たちのほうを向いて言う。

「あなたたち、こんなガキは放っておいて、アーシアを捜すわよ。おそらく、この子の目的は私たちを引き付けて、アーシアが逃げる時間を稼ぐことよ。相手にしてたら、アーシアがどんどん見つけ難くなるわ。アーシアがいなくちゃ、計画も何もないわ」

「ハッ！」

墮天使たちはレイナーレに言われた通り、アーシアを探しに行こうとする。

「行かせるか！」

行かせまいと、墮天使たちに仕掛けようとした瞬間――。

「――ッ!？」

レイナーレが民家に向けて光の槍を投げつけたのだ！

「クソッ！」

俺はすぐさま、その場から飛び上がって、光の槍を弾く！
だが、レイナーレや墮天使たちの姿はもう消えていた。

「チツ」

レイナーレ……イツセーの借りを返したかったが……。まあいい。それはまたの機会か。

とりあえず、連中はアーシアが逃げだしたと勘違いしてくれた。これで時間を稼げる。

あとは、そのあいだにアーシアをどうするかを考えないとな。
ひとまず、イツセーや部長たちに俺の無事を知らせるか。



「大丈夫ですか？」

「は、はい……」

朱乃さんがフリードによってつけられた傷に包帯を巻いてくれる。

ちなみに、傷を治療する際、部長に裸で抱きつかれるというステキなイベントがあった！

裸で抱きつくことで魔力を分け与え、治癒力を高めるのらしい。部長と同じ眷属だからできたことみたいだ。

当然、部長のその裸体を存分に拝みましたとも！

細い腰。白くスラリとした足。太もも。形のいいお尻。そして、なかなか豊かなおっぱいを！ その先端までじっくりと！

部長も「見たいなら見てもいいわ」なんてステキなお話をおっしゃってくれた！

「そんな日本語があったのか!？」と衝撃を受けたよ。

「完治には少し時間がかかりそうですわ」

「あの『はぐれ悪魔祓^{エクソシスト}い』が使った光の力が相当濃いだよ」

「はぐれって、悪魔だけじゃないんですか？」

「教会から追放されて、墮天使の下僕に身を墮とす者も多いんだ」

俺の質問に木場が答えてくれた。

——つて、ちよつと待てよ!

「じゃあ、アーシアもその『はぐれ悪魔祓い』^{エクスシスト}だつて言うのかよ!」

木場は何も言わなかった。

「どうであろうと、あなたは悪魔。彼女は堕天使の下僕。これは事実なのよ」

「……………部長……………」

「それよりも明日夏のことよ」

そうだ! 明日夏は部長の眷属じゃないために、俺たちと一緒に魔方陣によるジャンプができなかった。

明日夏は自力で逃げれるつて言つてたけど……………。そんななか、俺のケータイの着信音が鳴る。見てみると——。

「——明日夏ッ!」

かけてきたのは、明日夏だった。

「おい、明日夏！ 無事なのか!？」

『……デカい声で話しかけるな』

「だって、おまえ、大丈夫なのかよ!？」

『大丈夫じゃなかったら電話してねえよ』

「そっか……そりゃ、そうだよな」

とりあえず、無事でよかった。

そこへ、部長が代わってくれと言ってきたので、ケータイを部長に渡す。



『もしもし、明日夏』

「はい、部長」

『とりあえず、無事なようね?』

「ええ。ご心配をおかけしました」

電話から聴こえる部長の声から、こちらを安堵しているようすが感じられた。

『墮天使は?』

「どうにかまきました」

とりあえず、アーシアのことを伏せてそういうことにして伝えた。

「そう」

「いま、そちらに向かいます」

『いいわ。そのまま帰って、ゆっくり休んでちょうだい』

こちらの身を案じてくれたのか、念のためにと言ってくれた。

「なら、お言葉に甘えさせてもらいます」

別に無傷なので、平気なのだが、アーシアのことが心配なので、そうさせてもらった。

『——ただ、ひとつ訊きたいのだけど?』

「なんですか?」

『あなた、まさかとは思うけど——あのシスターを助けた——なんてことしてないわよね?』

「……ええ、もちろんです。そんな余裕もなかったですし、ましてや、彼女は墮天使側の人間ですしね」

『そう。ならいいわ』

「俺からもひとつ」

『何かしら?』

「イツセーの容態は?」

『命に別状はないわ。ただ、あのはぐれ神父の使っていた光の力が濃いのか、完治には時間を要するわ』

悪魔に光の力は致命的だからな。

「それを除けば、無事ってことですか?」

『ええ、とりあえずは』

「わかりました。それじゃ、また明日」

『ええ。おやすみなさい』

部長がそう言うと同時に、切られた。

「……やれやれ、やつぱりアジアを助けたことを怪しまれたか。まあいい。とりあえず、これからのことだな」



はあ……弱い。俺は弱すぎだ。所詮『兵士^{ポイン}』。女の子一人、救えやしねえ。あのあと、俺の身を案じてくれた部長に帰宅を命じられ、明日も学校を休むことになつてゐる。

その帰り道、俺はただただ、自分の無力さに打ちひしがれていた。念のための護衛として隣にいる千秋から心配そうに声をかけられる。

「……イツセー兄」

「ああ、わかつてるよ」

そうだ！ くよくよしてたつて始まらねえ！

「弱いなら、鍛えて強くなればいいんだ！ このあいだ、そう決心したんだからな！ よしっ！ 腹も括った！ 帰ったら、早速明日夏に頼もう！」

すると、千秋が視線を鋭くしながら言う。

「ちゃんと、ケガが治ってから……！」

「……はい」

千秋から発せられる圧力に思わずたじたじになってしまふ。

昔から、俺や明日夏がケガをすると、千秋はいまみたいになんとも言えない圧力を発してくるんだよなあ。

いやまあ、心配してくれてるからなんだろうけど。

「とりあえず、明日夏の顔を見ていくよ」

無事だとわかったとしても、やっぱり心配だったからな。そうこうしていると、土騎家に到着した。

「ただいま」

「お邪魔します」

明日夏の顔を見るために上がらせてもらう。

「おい、明日夏。大丈夫——」

リビングのドアを開けると——。

「イツセーさん？」

そこには、アジアがいた。

「——つて、なんでアジアがここに!?!」

千秋はなぜか、呆れたように嘆息していた。

「夜中に騒々しいぞ、イツセー」

キッチンには、お湯を沸かしている明日夏がいた。

何がどうなってるんだよ、一体!?!

俺はわけもわからず、慌てることしかできなかつた。



「日本のお茶は不思議な味がしますが、とても美味しいです」
「日本人を代表して礼を言うよ」

俺の隣でアーシアが明日夏の淹れたお茶に舌鼓を打ち、明日夏も礼を言いながらクルに自分の淹れたお茶を飲んでいた。

とりあえず、俺も一口。

うん、ウマイ。朱乃さんが淹れてくれたのと負けてない。

「……………いや、副部長のほうが上だな」

「……………心読むなよ——つて、そうじゃなくて!」

俺は明日夏に詰め寄る。

「なんでアーシアがここににいるんだよ!?!」

「あのあと、アーシアを連れて逃げたからだ」

「なんで、そんなことを……………?」

「あのとき、おまえ、俺に頼もうとしてただろ?」

確かに、あのとき、明日夏にアーシアを助けてくれるように頼もうとしたけど、そうすると、明日夏の身が危険だと思って、結局言えなかった。

まあ、そういう素振りをした時点で、明日夏に伝わっちゃったみたいだけど。

「先に部長たちを行かせたのも、アーシアを連れ出すためだ。あの場に部長がいたら、やこしいことになっただろうからな」

それもそうか。さつき部長にも「あなたは悪魔。彼女は墮天使の下僕。相容れない存在同士よ」——と言われたばかりだからな。

「とりあえず、アーシアの無事がわかってよかつ——っ！」

「イツセー！」

「イツセー兄！」

お茶を飲もうとしたら、激痛が走り、湯のみを落としてしまう。

「イツセーさん！ 傷を見せてください！」

アーシアに言われるがまま、俺は上着を脱いで、傷に巻いていた包帯を取る。

アーシアが手のひらを傷に当てると、手から淡い緑色の光が発せられる。

あの子供の子供のケガのように、俺の傷がみるみるうちに治っていき、傷痕も残らなくなっていく。傷はなくなりました。

「確か、足も？」

そのまま、足のケガも治療してもらおう。

「いかがですか？」

「えっと——おお！ 全然なんともない！ おっ！ 足も治ってる！ スゲエ！ スゲエよ、アーシア！」

さつきまで激痛が走っていたのに、もう全然なんともなかった。

「たいしたもんだな。墮天使たちがほしがるのも領ける」

明日夏という言葉に引っかかった俺は明日夏に訊く。

「あいつらって、やっぱ——」

「ああ。おそらく、アーシアを引き入れたのは、その治癒の力——セイクリッド・ギア神器が目当てだ」

やっぱり、そういうことなんだろうな。

「やっぱ、アーシアの神セイクリッド・ギア器ってすごいもんなのか？」

「ああ。そもそも、治癒の力ってだけでも、相当希少なんだ。教会の連中は治癒の力は神の加護と呼ぶくらいだからな。それが、アーシアクラスのものとなればなおさらだ。さらに、その神の加護を失った堕天使たちにとっては余計にほしいものだろう」

神の加護ねえ。悪魔の俺でさえ治療できちやうのにか。

「それで、これからアーシアをどうするんだ？」

「匿う。堕天使たちには絶対に渡すわけにはいかないからな」

「ああ、当然だ！」

アーシアを絶対に渡すもんか!

「イツセーさん。明日夏さん。お気持ちは嬉しいですが……これ以上、ご迷惑をおかけできません。やっぱり、私はあの人たちのもとへ——」

「何言ってるんだよ、アーシア!?!」

「私なら大丈夫です。この力がある限り、私が死ぬようなことは——」

「いや、あいつらのもとへ行けば、遅かれ早かれ、おまえは殺されるぞ」

「えっ?」

「なっ!? どういうことだよ、明日夏!?! あいつらはアーシアの力がほしいから、一応はアーシアのことを大事にしてるんだろ!?!」

フリード、あいつは別だろう。たぶん。

「単純なことだ。アーシアを連れているよりも、携帯性をよくする方法があるからだ」

「それって——ッ! ま、まさかつ!」

「ああ。あいつらの最終的な目的は、アーシアから神セイクリッド・ギア器を抜き取り、自分たちに移植することだ」

セイクリッド・ギア
神 器 っ て、 抜き取ったり、 移植したりできるのか。

なら、 いつそのこと、 アーシアの神 器を墮天使たちに渡しちまえば——。

「言っておくが、
セイクリッド・ギア
神 器を抜き取られた所有者は命を落とすぞ。
セイクリッド・ギア
神 器 っ てのは、

所有者の魂と密接になっているかららしい」

「なっ!？」

「だから、 アーシアを絶対にあいつらに渡すわけにはいかないんだ」

そういうことなら、 なおさらアーシアを絶対に渡すわけにはいかない!

「でも、 どうやってアーシアを守るんだ？」

明日夏、 それに千秋も確かに強い。 けど、 墮天使一人ならともかく、 墮天使複数だと、
さすがの二人だって……。

部長たちを頼るのも無理だろう。

「とりあえず、奴らには、アーシアが逃げて、この町のどこか、もしくは町の外にいるように誤魔化して、俺が匿っていることからは目をそらさせた」

「じゃあ——」

「そのまま、この町から立ち去ってくればいいが、そうもいかないだろう。せいぜい、時間を稼げる程度だ。いずればれる」

「じゃあ、どうすんだよ!?!」

「落ち着け。そのときは、俺と千秋が奴らを倒す。千秋もいいな?」

「うん」

「でも、二人だけで……」

「なに、やりようはある。それに、部長たちが連中を片付けてくれるかもしれないからな」

「なんで部長たちが? 部長は堕天使と関わらないようにしてたのに?」

「これが堕天使全体の計画なら、部長も不干涉を貫くだろう。干涉すれば、悪魔と堕天使の間で再び戦争が始まるかもしれないからな」

「なら——」

「——墮天使全体の計画だったら、だ」

どういうことだ？

明日夏の言おうとしていることをいまいち飲み込めなかった。

「俺はこの計画をあいつらの独断だと睨んでいる」

「なんでだ？」

「考えてもみろ。ここは部長が管理する町——つまり、墮天使たちにとっては敵地同然だ。そんな場所で、わざわざどこでもできるような計画を実行する必要があるか？」

「——ッ!？」

「そうだ！ わざわざ、敵地である部長の管理するこの町よりも、自分たちの領域でやったほうが、安全に実行できるはずだ。」

「それをしないってことは、明日夏の言う通り、自分たちの独断でやってる可能性が高いってことだ。」

「おまえがアーシアを案内した教会。あそこはもう、随分前に破棄された場所だ。誰も

目に止めない場所でもある」

こつそり計画を実行するぶんには都合のいい場所つてわけか。

「たまたま、都合のいい場所があったから、おまえを殺す命令を口実に、この町にやってきたつてわけだ。あいつらは」

「そういえば、あのドーナシックつていう墮天使、ここが部長の管理している——それどころか、悪魔が管理している町だつてことを知らなかったみたいだつたな。つて——」。

「ちよつと待て、その言い分からすると……この計画の首謀者つて——」
「ああ。天野夕麻だ」

夕麻ちゃんが、アーシアを……。

「墮天使全体ではなく、一個人の独断で行動している奴らなら、部長も無視はしないはず

だ。墮天使側も、戦争を回避するために、勝手なことをしたそいつらの自業自得と断ずるだろう」

「じゃあ、そのことを部長に教えれば！」

「いや、証拠がない。俺の推測だけじゃ、部長も確信を持って打って出れない」

そっか。だよな。証拠がねえもんな。

「部長も部長で、調査はしているはずだ」

「じゃあ、それまでのあいだ、アーシアを連中に見つからないようにしないとダメってわけか」

「間に合わず、アーシアが見つかった場合は、俺たちが打って出るしかないがな」

やっぱ、そうなるか。

「まあ、把握できてる戦力を考えれば、不覚をとることはないはずだ。いざつてときは、兄貴を頼るって手もある」

「えっ、冬夜さんって、そんなに強いのか？」

「ああ。墮天使たちが束になっても足下にも及ばないくらいにはな」

マジかよ。明日夏たちだけでも俺にとつちや十分にスゴいのに、冬夜さんって、ただスゲエんだ?

「あ、あの、皆さん……私なんかのために……」

アーシアが申し訳なさそうに顔をうつむかせながら言った。

「何言ってるんだよ、アーシア。それを言うなら、先に助けてもらったのは俺のほうだよ! あのととき、アーシアが庇ってくれなかつたら、たぶん、明日夏が間に合うことなく、俺はあいつ——フリードに殺された。だから、今度はこつちの番——って、俺は弱いから、明日夏たちに頼る形になっちまってんだけど……」

ああ、もう! ホント無力な自分が腹たたい!

だけど、強くなるって決めたんだ! なら、当初の予定どおりに——。

「明日夏! 俺を鍛えてくれ!」

「言うと思つた」

明日夏は軽く嘆息してから言う。

「俺は結構厳しいぞ。いいな？」

「ああ！」

散々迷惑かけちまつてるんだ！ 厳しいとか、そんな贅沢は言わねえよ！

「ただし、そんなすぐに強くなれわけじゃねえからな。鍛えたからって調子に乗って、墮天使と戦うようなバカなマネはするなよ？」

明日夏は強くそう言い聞かせてきた。

俺はそれに頷いて答える。

「皆さん………私なんかのためにありがとうございます！」

「なんかって言うなよ」

それでも、アーシアは「私なんかのために」って言って、頭を下げてくる。そこへ、明日夏がアーシアに話しかける。

「なあ、アーシア」

「あ、はい。なんですか?」

「どうしておまえは——教会を追放されたんだ?」

「——っ!」

明日夏の間いかけにアーシアは息を呑む。

アーシアが墮天使のもとにいるってことは……そういうことなんだろう。

「……………」

アーシアはただ、うつむいて黙っているだけだった。

「いや、言いたくないなら、無理して言わなくていい。ただ、不思議に思っただけ。おまえ

みたいな奴がなんで教会を追放されたのかがな」

確かに、アーシアはとつてもやさしい子だ。本来敵同士であるはずの俺を庇ってくれ
るくらいだ。とても、教会を追放されるような悪い子には見えなかった。

「……いえ、話します」

そして、アーシアの口から話される。——一人の『聖女』と呼ばれた少女の話を。



アーシアは生まれてすぐに、親にヨーロッパにある教会の前に捨てられたらしい。
アーシアはそこで拾われ、育った。

ある日、傷ついた子犬が教会に迷いこんできた。その子犬は死にかけていて、教会の
者もお手上げだったらしい。アーシアはそれでも諦めずに祈り続けたそうだ。すると
奇跡が起き、子犬のケガが治った。

そのときにアーシアは初めて神セイクリッド・ギアの力に目覚めたのだろう。

その光景を見た教会関係者はアーシアを『聖女』として崇め、たくさんの傷ついた人々を治療したらしい。アーシア自身も、人々の役に立てるのが嬉しかったみたいだ。

だが、そんなアーシアに転機が訪れた。

ある日、アーシアの前に傷ついた男性が現れた。当然、やさしいアーシアはその男性を放っておくことができず、その男性を治療した。それ自体は問題なかった。だが、その男性の正体が問題だった。

その男性は悪魔だったのだ。

そして、その光景を見た教会関係者は彼女を異端視する。

『悪魔を治療する力だと!』

『「魔女」だ!』

『悪魔を癒す「魔女」め!』

治癒の力は神の加護を受けている者しか癒さないと考えている教会の者たちは、悪魔も治療できてしまう力を持ったアーシアを『魔女』と蔑み、アーシアを異教徒として追放した。

アーシアは人々を癒す聖女から悪魔を癒す魔女になってしまったのだ。

そして、行き場のなくなったアーシアを、その力に目を付けた墮天使が拾ったというわけである。

「でも、私は神の祈りを、感謝を忘れたことなどありません。……まして、あの方たちが皆、あんな酷いことをしているなんて……」

アーシアの壮絶な過去に、俺たちは言葉を失う。

ある意味、これは神セイクリッド・ギアの弊害と言える。

人間つてのは、異質なものを見ると、それがたとえ些細なことでもそれを嫌悪し避ける。それが、人智を超えた異形や異能ならなおさらだ。

アーシアの例はまさにそれだ。

「きつと、これも主の試練なんです。この試練を乗り越えれば、いつか主が、私の夢を叶えてくださる、そう信じているんです」

「夢？」

「たくさんお友達ができて、お友達と一緒にお花を買ったり、本を買ったり、お喋りしたり、そんな夢です。私、友達がないので……」

笑ってはいるが、その心には一体どれだけの悲しみで満ちているのか想像できなかつた。

たった一人の神を信じる少女のささやかな夢は、その神がもたらした力のせいで叶うことがなかった。

その事実を察したイツセーは神に対しての怒りに震えていた。
そして、イツセーはその場から勢いよく立ち上がる。

「イツセーさん？」

キョトンとするアーシアに、イツセーは強く言う。

「友達ならいる！」

「えっ？」

「俺がアーシアの友達になってやる！」

「——ッ!?!」

「つうかさ、俺たちもう友達だろ？ だって、こうして一緒にお茶を飲んで喋ったりした

しき！ あ、まあ、花とか本とかはなかったけど………こんなんじや、ダメかな？」

その質問にアーシアは首を横に振る。

「………いいえっ！　いいえ、いいえ！　いいえッ！」

本当にこいつは。

普段はスケベなクセして、根っここの部分では本当に真っ直ぐで誠実——それが兵藤一誠という男だった。

こいつのそういうところはこういうときになると出でくる。

「明日夏と千秋だって、もうアーシアと友達だろ？」

言われるまでもないな。

「ああ。俺もアーシアの友達だ」

「私も」

アーシアは涙を流し始めてしまうが、それは悲しみからくるものじゃないと、この場にいる誰もがわかっていた。

「……でも、イツセイさんたちにご迷惑が……」

「悪魔もシスターも関係ねえ。友達は友達だつての」

「もつと頼つていいんだよ。友達なんだからな」

「私、私、嬉しいです!」

そこには、いままでの中で最高の笑顔があった。

こうして俺たちに、新しい友達ができたのだった。



「さて、どう転ぶか」

あのあと、アーシアと友達になった俺たちは、今後のことを話し合った。

『まず、アーシアには不自由な思いをさせることになるが、非常時以外はこの家から一歩も外に出るな。墮天使たちは、いまも血眼になってアーシアを探しているはずだからな』

『それに見つかからないようにするためだな』

『ああ。本当は自由にしてやりたいんだが……。すまないな、アーシア』

『いえ、こうして皆さんとお友達になれただけでも幸せですから』

『全てが終わったら、思いっきり遊ぼうな、アーシア！』

『はい！』

全てが終わったら、遊ぶ約束をしたあと、次はイツセーのことになった。

『さて、次にイツセー、おまえだが。おまえは部長に言われて、明日、学校を休むんだっ
たな？』

『ああ』

『なら、そのまま休め。ケガが治ったことを部長に知られれば、アーシアのことに感づかれるかもしれないからな。でだ。おまえはひとまず、この家でアーシアと一緒にいろ。』

そして、何かあったら、すぐに俺に知らせろ。そして、逃げろ』
『わかった』

ひとまず、今後の方針はこんなもんだろう。

「さて。念には念を入れないとな」

俺はスマホである人物に電話をかける。

『ヤッホー、明日夏』

ワンコール後に電話から聴こえてきたのは温和そうな男性の声だった。

「急に悪いな、兄貴」

そう、この電話の相手こそ、俺と千秋の兄である土騎冬夜だった。

『大丈夫だよ。それよりも、いきなり電話してくるってことは、何かあったのかい?』
「ああ、実は——」

俺は詳しい事情を兄貴に伝える。

『なるほどね。たぶん、明日夏の推理は当たつてると思うよ。イツセーくんときはともかく、そのアジアって子みたいな境遇の子は基本的に保護するのがグリゴリの方針だからね』

『神の子を見張る者』——墮天使陣営の中心組織の名前だ。

異能・超能力の研究を主目的とする機関で、セイクリッド・ギア神器関連では、そのものの研究、所有者の保護などを行っているみたいだ。

「念のため、調べてくれないか?」

『いいよ、まかせて』

あとはその情報次第だな。

『念のために、そつちに誰か行ってもらおうかい?』

「ああ、そうだな。できることなら、アーシアを守るために万全を期したい」

『OK』

誰をよこすかわからないが、知り合いの誰かなら頼りになるのは間違いない。
.....あとは、連中がどう動くかだな。

Life. 12 友達、救います！

早朝、俺はいつもよりも早く登校した。部長に話したいことがあったからだ。

内容は墮天使たちの目的に対する俺の推察だ。もちろん、アーシアを匿っていることは秘密にした。

やはり、部長も墮天使たちのことは探っていたようだ。

部長も墮天使たちの行動は独断専行であると睨んでいるらしい。もう少し情報が得られれば、打って出るみたいだ。

なら、それまでのあいだ、アーシアを守らないとな。

そんなこんながあり、現在は昼休み。俺は松田と元浜の二人と昼飯を食べていた。

いつもなら、ここにイツセーを加えた四人でいることが多い。千秋も合流した五人でいることもある。

「しかし、イツセーの奴が風邪で休みとはな」

「確かに」

イツセーは風邪で休みということになっている。神父にやられた傷が原因とは言えないからな。

「まさか! 実は仮病で、町で女の子とイチャイチャしているんじゃない?」
「なにいつ!」

「……………やれやれ。なんでそうなるんだよ?」

まあ、アーシアと一緒にいるので、あながち間違いではなかったりする。町ではなく、俺の家でだがな。

松田は悔し涙を浮かべながらまくし立て始める。

「クソツ! おかしすぎる!」

「……………何がだよ?」

「最近、あいつの周りには美女美少女が多いじゃないか!」

「部長や副部長に搭城のことか?」

「千秋ちゃんや千春さんもだ!」

二人は前からだろ。

「幼馴染みである二人はともかく！」

「なんであいつが美女美少女揃いのオカルト研究部に入部できたんだよ！ いままで、何人の入部希望者が入部できなかったと思ってるんだ！」

しょうがねえだろ。実際は部長の眷属の集まりなんだからな。

「俺たちと同じモテない同盟の一員だったのに、なぜ、二大お姉さまのリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩に学園のマスコットの搭城小猫さんという学園のアイドルがいるオカルト研究部にいるッ!？」

「なぜ、こいつも差ができた!?! 納得できん！」

……俺に言われてもな。

「ただの部員じゃねえか？ 何をそんなにギャーギャーと……」

「あいつの周りに美女美少女がいることが問題なんだよ!」

「……. ようは羨ましいだけだろ?」

「うるせえええつ!」

. うるさいのはおまえらのほうだ。

これ以上、相手をするのも面倒になってきたので、俺はさっさと昼飯を平らげることができた。



「きゅ、98. ! きゅ、99. ! ひゃ、ひゃあつ.
くうう. ! だはああ!」

俺は腕立て百回を終え、疲れからその場で突っ伏してしまふ。

なぜ、こんなことをやっているのかというと、鍛えてほしいと頼んだ明日夏から言い渡された筋トレメニューを実行しているからだ。

明日夏曰く「まずは基本的な体作りからだ。これをやるやらないで、だいたい違うから

な」——らしい。

とはいえ、こんな本格的なものは初めてなので、悪魔になった身でも、こなすと同時にこのありさまだ。

「イツセーさん、これをどうぞ」

アーシアがタオルとスポーツドリンクと明日夏お手製のレモンのはちみつ漬けを差し出してくれる。

「ありがとう、アーシア」

受け取ったタオルで汗を拭き、スポーツドリンクを飲んでから、レモンをひとつ口にする。

明日夏がこのような体作りを言い渡したのは、もうひとつ理由がある。

それは、昨夜のアーシアを守るための話し合いをしていた最中だった。

『そうだ、おまえを鍛えるうえで確認したいことがある』

『なんだよ？』

『おまえの神セイクリッド・ギア 器についてだ。その能力次第で、戦い方が変わってくるからな』

それから、俺セイクリッド・ギアの神 器にどういう力があるのかを調べることになった。

その結果、わかったことは、俺セイクリッド・ギアの神 器は『龍トウウイス・クリテイカルの手』って呼ばれるもので、その力は所有者の力を倍にするっていうものだった。

それが判明したとき、明日夏は怪訝そうにしていた。どうやら、墮天使たちが危険視するほど強力なものではなく、ありふれたものらしい。

つまり、俺は勘違いで殺されたことになる——って、なんだよそりや!?

とりあえず、神 器セイクリッド・ギアの力を活かすため、基礎能力を上げる意味でも、この筋トレメニューを行っていた。基礎能力が高ければ、倍になったときの爆発力が大きいからな。にしても、力を倍にするだけって、アーシアのと比べると、シヨボいよなあ。

おまけに、それを危険なものだと勘違いされて殺されたんだもんなあ。

まあ、嘆いていても仕方ねえ!

アーシアを守るために、そして、ハーレム王になるためにも強くならないとな!

「おっしや! 休憩はこのくらいにして、再開するか!」

「頑張ってください！ イッセーさん！」

「ああ！」

こんなかわいい子から応援もされれば、気合いも入るってんだ！

「あなたみたいな下級悪魔が、いくら頑張ったところで、所詮下級は下級。無駄な努力よ」

そんな俺を嘲笑うかのような第三者の声が耳に入った。



「イツセー兄、どんな感じかな」

「そうだな・・・・・・なんやかんやでこなしてるんじゃないか」

下校中の俺と千秋は、俺の組んだメニューに取り組んでいるであろうイツセーのことを話していた。

一応、いま現在のイツセーの身体能力を考慮して組んだメニューなのだから、こなそうと思えばこなせるはずだ。

ただ、釘をさしてはおいたが、無茶してオーバーワークに取り組んでなきやいいんだがな。

「一応、どんな調子が聞いてみるか」

俺はスマホを取り出し、イツセーへ電話をかける。一回めのコール音の途中ですぐに繋がった。

「イツセー、調子はどう——」

『明日夏ッ！ だて——』

ブツツ。ツーツー。

「——っ!?!」

繋がったと思った瞬間、イツセーの切羽詰まった声が聞こえ、いきなり切られてしまった！

俺はもう一度かけるが繋がらなかった。

だて？ まさか！

「急ぐぞ、千秋！ イッセーが危ない！」

俺のただならぬ気配を感じ取ったのか、千秋は険しい表情を浮かべて頷いた。俺たちは大急ぎでイツセーとアジアのもとに向かつて駆けだした！

「——ッ!？」

その瞬間、殺気を向けられ、俺と千秋はその場から飛び退いた！

そして、俺がいた場所に、複数の光の剣が突き刺さった！

こいつは！

「行かせませんよ」

上から声をかけられ、上空に視線を向けると、やっぱりデイブラがいた。クソツ、足止めか!

あたりを見渡すと、すっかり人払いもされて、この辺一帯を包み込むように結界らしきものが張られていた。

「邪魔をするな!」

俺はバーストファングを投擲し、千秋が矢を放つ!

「フツ、当たりませんよ」

デイブラは俺たちの攻撃を最小限の動きで華麗に躲す。

ドオオンツ!

「何!?!」

た。 躲された俺たちの攻撃はデイブラの背後で交錯し、俺のバーストフアングが起爆し

すかさず、俺は雷ライトニングスラッシュ 刃でデイブラに斬りかかる！

「クッ！」

デイブラは光の剣で俺の雷ライトニングスラッシュ 刃を受け止める。

「行け！ 千秋！」

「うん！」

その隙に千秋をイツセーのもとへ向かわせる。

「やれやれ、お友達のピンチだと言うのに、冷静に対処しますね」
「てめえの相手は俺がしてやるよ！」

無事でいろよ!? イッセー! アーシア!



ケータイに明日夏からの電話がかかってきて、急いで墮天使が来たことを伝えようとしたけど、その墮天使が投げつけてきた小さな光の槍でケータイを壊されてしまった!

「あの坊やを呼ぼうとしても無駄よ」

「夕麻ちゃん……!」

そう、現れた墮天使は、俺の彼女だった天野夕麻ちゃんだった。もともと、彼女だったのは演技みたいだけだな。

「悪魔に成り下がって無様に生きてるっていうのは本当だったのね」

夕麻ちゃんは興味なさげにそう言うと、アーシアのほうを見る。

「まったく。あの坊やのおかげでとんだ時間をくわされたわ。ディブラに言われた通りに来てみれば……ビンゴだったわね。アーシア、逃げてでも無駄なのよ」

「いやです！ 人を殺めるところに戻れません！ レイナーレさま！」

レイナーレ——アーシアが夕麻ちゃんのことをそう呼んだ。それが夕麻ちゃんの本当の名前か。

「アーシアを渡すか！」

俺はアーシアを守るように前が出る！

「汚ならしい下級悪魔の分際で、気軽に話しかけないでくれるかしら？」

レイナーレは心底、俺を見下したふうに言った。

俺の脳内で夕麻ちゃんとの記憶が呼び覚まされる！

くそッ！ あいつは墮天使だ！ 俺の知っている夕麻ちゃんはいないんだ!!

夕麻ちゃんの姿がちらつくくなか、俺は自分にそう言い聞かせた！

「セイクリッド・ギア神 器 ツ！」

俺はセイクリッド・ギア神 器を出す！

「……………ぷっ！ あはははははッ！」

レイナーレが俺のセイクリッド・ギア神 器を見た瞬間、盛大に笑い始めた！

「何かと思ったら、ただの『トウワイス・クリテイカル龍の手』！ 力を倍にするだけのセイクリッド・ギア神 器の中でもありふれたものじゃない！ 下級悪魔にはお似合いねえ！」

うるせえ！ 知ってるよ、もう！

「あなたの持つセイクリッド・ギア神 器が危険、そう上から連絡があったから、あんなつまらないマネまですしたのに。——好きです！ 付き合ってください！ ——なぐんてね♪ あのととき、あなたの鼻の下の伸ばしようつたら！ アツハハツハハハハ！」

「うるせえ！ 黙れ！」

レイナーレの言葉にカツとなり、セイクリッド・ギア 神器を装着した左腕を彼女に向ける！

「そんなものでは、この私に敵いはしないわ！ おとなしくアーシアを渡しなさい？」

「いやだ！」

「邪魔をするなら、今度こそ完全に消滅させるわよ？」

「友達くれえ、守れなくてどうすんだ！」

たぶん、敵わない。明日夏からも、「堕天使と戦うな」、「非常時は逃げろ」って言われた。でも、こいつが大人しく逃がしてくれるとも思えないし、逃げきれるとも思えない！

さっきの電話で不審に思った明日夏が急いでこっちに向かってきてるはずだ！
なら、明日夏が来るまで、時間を稼ぐくらい！

「動け！ セイクリッド・ギア 神器！」

『ブースト
Boost!!』

籠手から音声が発せられた瞬間、俺の体に力が流れ込んでくる!

これが、俺の力が倍になった証だ!

よし、あとは明日夏が来るまで——。

ズブツ!

「——えっ?」

俺の腹から鈍い音が鳴った。

見ると、俺の腹を光の槍が貫いていた。

「いっしょ……」

槍が消え、腹に空いた穴から血が吹き出ると同時に、俺は崩れ落ちてしまう。

「きやあああああつ!? イッセーさん!? イッセーさんっ!?」

「わかった? 一の力が二になったところで、大した違いはないわ」

く……………くっそお……………。

痛みに苦しんでいたとき、アーシアが腹の傷に癒しの光を当ててきた。

「……………大丈夫ですか?」

「……………あ、ああ」

スゲエ……………! 傷の痛みだけじゃなく、光の痛みも消えていく……………!!

「うっふっふっふっふ。アーシア、おとなしく私と共に戻りなさい。あなたの『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』は、そいつの神セイクリッド・ギア器とは比較にならないほど希少な」

この言い分、やっぱり明日夏の言う通り、こいつらはアーシアじゃなく、アーシアの力目当てで!

「戻ってくるなら、その悪魔の命だけは取らないでおくわよ?」

「ふざけんな! 誰がおまえなんか!」

「ふうッ!」

「——っ! アーシア、危ないッ!」

レイナーレがさつきよりも大きな光の槍を投げつけてきたのを目にした俺は、慌ててアーシアを突き飛ばす!

カッ! ドオオオオオオン!

「うわあああああッ!」

俺の足元に刺さった槍が光り輝き、その光の波動によつて、俺は後方に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられてしまう!

クソッ!?! いままでの槍とは全然比べものにならねえ!?

「いまのはわざと外したの。命中すれば、体はバラバラよ。アーシアの治癒が間に合う

かしら?」

レイナーレはアーシアに諭すように言った。

「……アーシア、ダメだ……! そいつの言葉に耳を貸す——」

ズンツ!

「ぐあああああつ!」

俺の右腕に光の槍が突き刺された!

「イツセーさん!」

「あなたもいい加減黙っててくれないかしら? あんまりうるさいと、本当に殺すわよ?」

「わかりました! 私は戻ります! だからもう、イツセーさんを傷つけないでください!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・アーシア・・・・・・・・・・!?
・・・・・・・・・・行くな・・・・・・・・・・
アーシア・・・・・・・・・・!」

ズブツ!

「ゴッ!?!」

「イツセーさんっ!?!」

また、腹に光の槍が突き刺さされた!

「もう、やめてください!! イツセーさんも、もう喋ってはダメです!」

アーシアが涙を流しながら悲痛の叫びをあげている顔が見えたけど、途端に視界がぼやけてきた。

ヤバイ。目が霞む。意識が・・・・・・・・。

そんななか、アーシアが俺に駆け寄り、癒しの光を当ててくれた。

「イツセーさん、守ってくれようとしてくれたのに、勝手なことをしてしまって、すみません。明日夏さんと千秋さんにも、ゴメンなさい、と伝えてください」

・・・・・・・・ダメだ。行くな、アーシア・・・・・・・・。

「さよなら・・・・・・・・イツセーさん」

アーシアのその別れの言葉を最後に、俺は意識を失うのだった。



「・・・・・・・・・・・・・・・・ツセ・・・・・・・・ツセー・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・イツ・・・・・・・・イツセ・・・・・・・・兄・・・・・・・・」

なんだ？ 誰かに呼ばれてるような？

ていうか、俺、寝ちやつたのか？

そう思いながら、再び意識を沈めようとしたら――。

「イツセーッ!」

「イツセー兄ッ!」

「——ッ!?!」

一際大きな声で呼ばれて、ようやく意識が覚醒する。

そして、すぐにアーシアが墮天使に連れていかれたことを思い出す!

「アーシアッ!?!」

すぐにアーシアを助けに行かないと! そう思った俺は慌てて起き上がる!

「落ち着きなさい、イツセー」

慌てる俺にかけられる低い声音。

「部長!?!」

声がするほうを見れば、部長がいた。

「なんで部長が——つて、ここつて、部室？」

周りを見渡してみると、間違いなく、オカルト研究部の部室で、俺は部室のソファーに横になっていたようだ。

「なんで俺、部室にいるんだ？」

「気を失っていたおまえを部長がここに運んだんだ」

「明日夏?!」

俺の近くには、かなり険しい表情をした明日夏と涙を浮かべながら安堵したような様子の子の千秋がいた。

また、千秋に心配かけちゃったみたいだな。

「そうだ、明日夏！ アーシアがつ！」

「ああ、知ってる」

「なら、すぐに助けに行かないと!」

「待ちなさい。まずは、いろいろと説明してもらいたいだけど?」

部長の声音がさらに低くなる。

明日夏はあまり時間をかけないようにと、アジアと俺たちのことを部長へ簡潔に説明する。

「どうやら、千秋が駆けつけたときには、気を失った俺しかいなく、そこへ墮天使の気配を察知した部長たちが現れたそうだ。」

「そう。あのとき、一人残ったときはもしやと思っただけど……随分と勝手なことをしたものね、明日夏。それに、千秋も。そして、イツセーも」

「うっ……」

「……………」

明日夏たちはともかく、部長の眷属の俺まで勝手なことをしたものだからか、見るからに部長が不機嫌だ。

「部長——」

「ダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

アーシアの救出を願いでるまえに、部長に俺の願いを却下される。

「アーシアは友達なんです！」

「でも、彼女はもともと神側の人間。私たちとは根底から相容れない。墮天使のもとへ降っていたとしても、私たちが敵同士であることに変わりはないわ」

「アーシアは敵じゃないです！」

「だとしても、墮天使側の者よ」

「あいつらは、アーシアのことを——」

「ええ、そのことは、明日夏から聞いたわ。でも、それはあくまであなたたちの推論にすぎないわ。これが彼らの独断専行だという確証がないわ」

「でも——」

「パァン！」

部室内に乾いた音が鳴り響いた。

なおも食い下がる俺の頬を、部長に平手打ちにされたのだ。

「何度言えばわかるの？ ダメなものはダメよ。彼女のことは忘れなさい。あなたはグレモリー家の眷属なのよ」

「……じゃあ、俺をその眷属から外してください。そうすりゃ、俺一人で……！」

「できるはずないでしょう?」

「俺って、チエスの『兵士』^{ホーン}なんでしょう? 『兵士』^{ホーン}の駒くらい、一個消えたって——」

「お黙りなさいッ!」

「——っ!」

部室内に部長の怒声が響いた。

「なら、部長。俺と千秋がアーシアを助けに行きます。眷属じゃない俺たちなら——」

「ダメよ。明日夏と千秋も、これ以上勝手なことをすることは許さないわ。知っている

でしょう？　ここは私の管理する町。そこで問題を起こすのなら、私たちはあなたたち二人を拘束しなきゃいけない。私はそんなことしたくないわ」

俺たちと部長は睨み合う。

クソツ！　こうしているあいだにも、アーシアが！

そこへ、朱乃さんが部長に近寄り、何かを耳打ちする。

「急用ができたわ。私と朱乃は少し外出します」

「部長!?　話はまだ終わっ——」

「イツセー。あなたは『兵士』^{ポーン}を一番弱い駒だっと思ってっているわけね？」

「——っ、『プロモーション』のことですか？」

「もう、プロモーションのことは知っているのね。そう、『兵士』^{ポーン}には『王』^{キング}以外の駒に昇格できるわ。ただ、いまのあなたでは、『女王』^{クイーン}への昇格は、負荷がかかりすぎるため無理ね。でも、それ以外の駒なら可能よ。それから、あなたの神^{セイクリッド・ギア}器^{ギア}だけど」

「『龍』^{トウワイズ・クリティカル}の手』^{トウワイズ・クリティカル}っていう、力を倍にする神^{セイクリッド・ギア}器^{ギア}です。明日夏から教えてもらいましたし………夕麻………墮天使も言っていました」

部長は俺に歩み寄ると、先程とは違って、優しく微笑みながら、頬を手で撫でて言う

「思いなさい。セイクリッド・ギア 神器は、持ち主の想う力で動くの。その思いが強ければ強いほど、必ずそれに応えてくれるはずよ」

想いの……力?

「最後に、プロモーションを使ったとしても、駒ひとつで勝てるほど、堕天使は甘くないわ」

それだけ言うと、部長は朱乃さんを連れて、どこかへと転移していった。

「……そのくらい、わかっていますよ」

俺はその場で踵を返すと、木場が呼び止めてくる。

「行くのかい?」

「ああ。止めたって無駄だからな」

「待つて、イツセー兄!？」

千秋が血相を変えて俺を呼び止めてきた。

「悪いな、千秋。これ以上、おまえや明日夏に迷惑をかけられねえからな」

そして、そのまま一人でアーシアのもとへ向かおうとしている俺に、木場はなおも語りかけてくる。

「殺されるよ?」

「……たといえ死んでも、アーシアだけは逃がす!」

「いい覚悟——と言いたいけど、やっぱり無謀だ」

「うるせえ、イケメン! だつたら、どうすりゃいいんだよ!? こつちとら、時間がねえんだよ!」

「イツセー兄っ!」

千秋がいまにも泣き出しそうな顔で、俺の制服の裾を掴む。

「はなしてくれ、千秋！」

「いやッ！」

なんとか千秋の手をはなさせようとするけど、千秋は頑なにはなしてくれない。

「二人とも、少し落ち着け」

なぜか、部長に物申ししていたときと違って、明日夏は妙に落ち着き払っていた。

「二人とも、さっきの部長の言葉を思い出してみろ」

部長の言葉？

言われた通り思い出してみるけど、それがなんだってんだ？

「気づかぬえか？ 部長はプロモーションしてもって言ってただろ。これ、遠回しにプ

ロモーションの許可を出したってことだろ？」

「——ッ！」

言われてハツとする！

つまり、部長はアーシアを助けに行くのを許可してくれたということか！

「そして、『駒ひとつで勝てるほど、墮天使は甘くない』とも言った。これは、おまえに同行してフォローをしろっていう意味の指示——そうなんだろ、二人とも？」

明日夏は流し目で木場と小猫ちゃんのほうを見る。

「正解。結構冷静だね、キミ」

そう言いながら、木場は腰に剣を差していた。

見ると、小猫ちゃんもいつでも出れるといった様子だった。

「ダチの危機だからこそ、冷静にならないといけないからな」

そう言う明日夏も、戦闘時に着ていたコートを着込んでいた。背中には、あの刀も背負っている。

「なら、俺と千秋が行っても問題ないよな？」

「うん。大丈夫だと思うよ。ダメだったら、キミたちを止めるように言われてただろうからね」

「なら、遠慮なく。それと、イツセー」

「な、なんだよ？」

なんか、明日夏がジト目で睨んでくる。

「いまさら迷惑をかけないようになって水くさいこと言うんじゃないやねえよ。ましてや、俺たちもアーシアの友達なんだからな」

そうだったな。友達を助きたい気持ちは明日夏たちも同じか。

「それから——」

明日夏は顎で千秋を指す。

「……………イツセー兄」

見ると、千秋はスゴク怒った様子で、泣きそうな顔をしていた。

「……………イツセー兄、あんなこと、二度と言わないで……………!」
「えっ?」

「『たとえ死んでも』なんて……………!」
「あっ」

千秋が怒ってるのはそれか。

だよな。千秋にとつちや、そのセリフは許せないよな。

俺は千秋の頭を撫でながら言う。

「ごめん、千秋。俺は絶対に死なないよ。生きて、アーシアを助ける！」
「うん！」

ようやく、千秋が笑顔を浮かべてくれた。
木場が訊いてくる。

「話はまとまったかい？」

「ああ！」

話はまとまった！ 待ってるよ、アーシア！ いま行くからな！



俺、イツセー、木場、塔城はアーシアが捕らわれているであろう町外れの教会の前にいた。

千秋には陽動を買って出してもらい、教会の裏方面から向かってきてもらっている。それに、あいつは屋内よりも、屋外向きだからな。

本当は万全を期して兄貴がよこしてくれる奴を待ちたかったが、そんな時間はないからな。

「……………なんつう殺気だよ」

イツセーが言うように、教会から濃密な殺気がヒシヒシと感じる。

「神父も相当集まってるようだね」

「マジか……………。来てくれて助かったぜ」

「だって、仲間じゃないか……………それに個人的に神父や墮天使は好きじゃないからね。憎いと言ってもいい……………」

「木場？」

神父や墮天使の名を口した木場の表情は、とてもドス黒いものを感じるものだった。まるで、その胸に強い憎しみを抱いているようだった。

過去に何かあったのか？ それもたぶん、悪魔になる前に。

「あれ、小猫ちゃん?」

そんななか、塔城が教会の入口の前に立つ。

「……………向こうも私たちに気づいてるでしょうから」

ま、だろうな。教会の周りに誰もいないってことは、俺たちが来ることを見越して、中の守りに集中させているってことだろうからな。

なら、コソコソしててもしょうがねえか。

俺たちも教会の入口の前に立つと、塔城は教会の扉を蹴破る。

入口を潜り、中を見渡すと、酷い有様が目に入った。とくに目につくのは、聖人と思われる彫刻の頭部が、明らかに意図的に壊されていたことだった。

「……………ひつでえもんだなあ」

「……………はぐれの中には、こういう冒流行為に酔いしれる奴もいるからな」

以前に会ったことあるはぐれ神父の中に、似たようなことをやっていた奴がいたこと

を思い出す。

パチパチパチ。

突如、教会内に鳴り響く乾いた拍手音。柱の影から人影が現れる。

「やああやああやああ！ 再会だねえ！ 感動的ですねえ！」

「フリード！」

「………出たか」

現れたのは、先日、イツセーを襲った少年神父。イツセーから聞いた名前は、フリード・セルゼン。

「俺としては二度会う悪魔なんていないって思ってたんスよお。ほら俺、メチャクチャ強いんでえ——一度会ったら即これよ——でしたからねえ」

フリードは手刀で首を斬るような動作をする。

「……だからさあ、ムカつくわけよ……俺に恥かかせたてめえらクソ悪魔とクソ人間のクズどもがよお!」

憎悪を剥き出しにした表情で、フリードは取り出した銃を舐める。

「……教会の連中もよく、こんな奴を一時期とはいえ、教会に置いていたな。」

「アーシアはどこだ!」

「ああ、悪魔に魅入られたクソシスターなら、この祭壇から通じてる地下の祭儀場におりますですう」

地下か。たぶん、そこには天野夕麻と多数の神父もいるのだろう。

「まあ、行けたらですけどねえ」

「——ツ!」

「セイクリッド・ギア神 器 ツ!」

その言葉と同時に、イツセーは神セイクリッド・ギア器を出し、俺たちは構える。そんななか、塔城は自慢の怪力で教会にあった自身の何倍もあるであろう長椅子を持ち上げていた。

「……………潰れて」

塔城はそのまま、長椅子をフリード目掛けて投げつける。

「ヒヤッホォー！」

フリードはそれを剣で縦に真つ二つに斬り裂いてしまう。

「しやらくせえんだよ。このチビ」

「……………チビ」

どうやら、気にしていたのか、怒った塔城が長椅子を投げまくる。

「ヒヤッハア！」

「「——ッ！」」

フリードも投げつけられる長椅子を避けながら、正確に銃で撃ってくる!

「——ッ！」

「ふッ！」

塔城の投げる長椅子に紛れていた木場がフリードに斬りかかる。

「しやらくせえ! 邪魔くせえ! とにかく、うぜえ!」

木場は自慢の俊足を駆使して、多方向からフリードに斬りかかるが、フリードもフリードで、木場の動きに対応してやがった。

「やるね」

「あんたも最高。本気でぶっ殺したくなりますなあ」

二人がつばぜり合いに入った瞬間、俺は雷ライトニングスラッシュ刃ユを手に駆けだす！

「——ッ！」

「はあッ！」

木場とつばぜり合いをしているフリードを背後から斬りかかる！

「——ッ!？」

だが、フリードはありえない身のこなしで俺の斬撃を避けやがった！
そのまま、銃口を俺に向けてくる！

「——ッ！」

俺は撃たれた銃弾をコートの袖で防ぐ！

フリードは俺を撃ったあとに、木場にも銃弾を撃ちこむ。

「はッ!」

だが、木場もフリードに負けない身のこなしで宙返りをして銃弾を避けた。

俺たちが銃弾に対処をしているあいだに、フリードは俺たちから距離を取った。

俺は距離を取ったフリードにナイフを投げつけるが、投げた瞬間にナイフは撃ち落とされてしまう。

そして、その銃口をこちらに向けられる!

俺はすぐさま、木場の前に出て、顔の前で腕を交差させる!

放たれた銃弾は全て俺に命中するが、戦闘服の防弾機能でダメージはなしだ。

「チッ。そのコート、防弾かよ! メンドくせえな!」

「.....そっちこそ、二人を相手にしてよく言うぜ。デタラメな身のこなしや反応速度を持ちやがって」

ナイフを即座に撃ち落とした反応速度。おそらく、バーストフアングを警戒してだろう。あの感じじゃ、バーストフアングを使うのは控えたほうがいいな。

やっぱりこいつ、厄介だな。たった一人でここに配置されただけはある。

(木場)

(なんだい?)

(このままじゃ、罅が明かない。時間も惜しい。どうにかして隙を作れないか?)

(一応、切り札はあるよ。たぶん、それで隙は作れるはずだよ)

(なら頼む。隙ができた瞬間に俺が決める)

(わかったよ)

俺たちは頷き合ったあと、俺はライトニングスラッシュ 雷 刃を鞘に収める。

「頼むぞ!」

「了解!」

俺たちは同時にそれぞれ左右に駆けだした!

「僕も少しだけ本気を出させてもらおうよ!」

そう言った木場の剣が、闇に覆われる。
その闇で覆われた剣で木場は斬りかかる。

「ウエへへへエー！　へヤアッ！」

木場の剣の変化をコケ脅しと判断したのか、フリードは気にすることなく、木場に斬りかかる。

二人の剣が再びつばぜり合いになった瞬間、変化が起こった。

「——ッ!?　なんだよ、こりやつ!?!」

木場の剣を覆っていた闇が、フリードの光の剣を侵食し、光を消失させていく!

『ホーリー・イレイザー光喰剣』、光を喰らう闇の剣さ!

「て、てめえも神器持ちかッ!?!」

あの剣、魔剣だったのか。光を使う天使や墮天使、エクソシスト悪魔祓いには有効な能力だな。俺はすかさずフリードめがけて駆けだす！

「クソツタレがつ！」

フリードは木場の魔剣の力で使い物にならなくなった剣を捨て、拳銃の銃口をこちらに向け、銃弾を撃ってくる。

俺は顔の前で腕を交差させて顔に銃弾が当たるのを防ぎながらそのままフリードに突貫する！

「クソツタレがああつ!？」

接近されたフリードは完全に焦っていた。

ここで決めようと構えた瞬間――。

「――なーんつって♪」

フリードが醜悪な笑みを浮かべ、懐から別の光の剣を取り出した！
フリードは光の剣を振りかぶりながら言う。

「ぎゅんねん♪」

フリードの光の剣が振り下ろされた。

「——Attack」

それと同時に俺はいままでとは別の音声コードを口にした。

刹那、俺の体に電流が流れ込み、体中から電気がほとぼしり始めた。

ライトニングスラッシュ

雷 刃にはもうひとつ機能があつた。それは肉体に帯電させ、身体能力を強化する
るというものだった。

「あれえ？」

次の瞬間には、俺はフリードの光の剣を躲し、フリードの背後に回っていた。

——読んでいたさ。おまえが俺を油断させ、予備の剣で攻撃しようとしていたことはな。

当のフリードは光の剣を空振り、俺のことを見失っていた。

普通の人間なら、この方法による肉体の強化は肉体に並々ならぬ負荷がかかり、最悪感電死しかねなかった。

だが、俺は人よりも電気に強い体質を持っていた。それにより、少なくとも感電死することはないし、負担も通常よりは軽い。——まあ、それでも軽くない負担がかかるけどな。

それと、もうひとつの欠点として、刀身は機能の起動キーになってるので、この状態になると、刀が使えなくなってしまう。

「——まあ、問題ないがな」

そう呟きつつ、俺はフリードの背後で構える。

「クソがつ——」

背後にいる俺に気づき、フリードは慌てて振り向こうとするが——もう遅い!

「猛虎硬爬山!」

掌底による重い一撃がフリードの体にめり込む!

メキメキヤ!

「がああっ!?!」

骨が軋む音と共にフリードの悲鳴が響き、フリードは吹っ飛ばされた!

チツ! 野郎、咄嗟に懐に隠し持つてる予備の剣か銃でガードしやがった!

おかげで、思ったよりもダメージを与えられなかった!

「やってくれやがったな! このクソヤローが——」

「いまだ、動けええッ!」

『ブースト
Boost!!』

フリードは憤怒の表情を浮かべて立ち上がるが、そこへ神セイクリッド・ギアの能力で力が倍になったイツセーがフリード目掛けて駆けだした！

イツセーは俺たちの戦いに呆然としていて、ついてこれていない状態だったが、それでも、虎視眈々とフリードの隙をうかがっていたのだ。

「じゃらくせえー！」

フリードは銃口をイツセーに向ける。

「プロモーションッ！」

その瞬間、イツセーはプロモーションで自身の駒を昇格させる。

「『戦車ルック』の特性は、ありえない防御力と——」

フリードの撃った銃弾は、イツセーに命中しても、弾かれるだけだった。

「——マジですか」

その光景に、真顔で驚愕するフリード。

「バカげた攻撃力ッ!」

「痛ああいつ!?!」

完全に虚を衝かれたフリードの顔面にイツセーの拳が食い込んだ!

「あつ!?! ああああああつ——ぐぎやつ!?!」

そのままフリードは床で一回バウンドして後方に吹っ飛ばされ、長椅子のひとつに叩きつけられた。

「はあ、はあ、はあ、アジアに酷えことしやがつて! 少しスッキリした!」

粉碎された長椅子を破片を払いながら、フリードはヨロヨロと立ち上がる。その顔には憤怒の表情を浮かべていた。

「ぎっけんな……ふざけんなよ、このクソがああッ！」

新たに二本の剣を取り出して、フリードは飛びかかってくる。

ガンッ！

「痛あああいつ!？」

そこへ、塔城の投げた長椅子が直撃した。

トドメをさそうと、俺と木場は斬りかかるが、結構ダメージを与えているにも関わらず、奴はその身体能力を駆使し、俺たちから距離を取った。

「俺的に、悪魔に殺されんのは勘弁なのよねえ！ なわけ——はい、ちゃらば！」

「——ッ!？」

フリードが何かを床に叩きつけた瞬間、眩い閃光が襲い、視界が潰される！
閃光が晴れると、フリードはもうそこにはいなかった。

「逃げやがった!?!」

「………引き際もしつかりしてるな」

つくづく厄介な奴だな。できることなら、ここで仕留めたかったが………。
とはいえ、逃げた奴を追う余裕はない!

俺たちは領き合うと、先を急ぐことにする。

塔城が祭壇を破壊すると、そこに地下へと通じる階段が現れた。

俺たちは急いで階段を駆け下りる。

すると、開け放たれた扉が見えてくる。

明らかに誘ってやがるな? いやな予感がする!

俺たちは躊躇なく、扉を潜る。

「いらっしやい、悪魔の皆さんに坊や。遅かったわね」

レイナーレが、奥の階段の上に立てられた十字架のそばで佇んでいた。階段の前には、大勢の神父が群がっている。そして、十字架には眠っているアーシアが磔にされていた！

「アーシアアアッ！」

「……… イッセー……… さん……… ?」

イッセーの叫びが聞こえたのか、アーシアは薄らと目を開く。

「アーシア！ いま行く——」

イッセーがアーシアのもとまで駆けだそうとした瞬間、レイナーレが光の槍を投げつけてきた！

「イッセー！」

「兵藤くん！」

慌てて、俺と木場がイツセーの腕を引いて、槍は当たらずすんだが、床に刺さった槍が強烈な光を発した!

「「ぐっ………」」

その波動で俺たちは後方に吹き飛んでしまい、俺たちは背中を打ち付けてしまう!

「感動の対面だけど、残念ね。もう、儀式は終わるところなの」

「あああああああつ!」

十字架が不気味に輝きだし、アーシアは苦しみに叫ぶ!

「アーシアあつ!」

「ああつあああああああつあつあつあああああああああああああ——つ!」

アーシアの胸から、淡い緑色に光るものが飛び出し、アーシアは糸が切れた人形のよ

うに力なく崩れ落ちた。

『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』、ついに私の手に！』

その言葉が指し示す事実は………アーシアの死。

Life. 13 幼馴染み、怒ります！

明日夏兄に陽動を言い渡された私は現在、教会の裏方面の林にやってきていた。

明日夏兄の予想だと、私たちが裏側から来ると予想した墮天使がここで待ち伏せている可能性があるとのこと。それを引きつけるのが私の役目。

ちなみに、いまの私の服装は冬夜兄が用意してくれた私専用の戦闘服姿だった。

「——ッ！」

誰かの気配を感じた。

私は気配を消して身を隠しつつ、気配を感じたほうへ向かう。

「ハア、退屈う。どうしてうちが見張りなんてえ」

そこには、木の枝に座り、何やら不満を漏らしている金髪の少女がいた。

金髪と服装から、明日夏兄から聞いたミッテルトという名の墮天使の特徴と一致した。

確認できたのは、そのミッテルト一人。

もしかしたら、敵を見つけると同時に他の墮天使が来るのかもしれない。

そう判断した私は、少し揺さぶるため、彼女に向けて冬夜兄が私のために特注してくれた機械仕掛けの弓、ブラック・ホーク黒鷹を構える。

当てないように照準を合わせ、矢を射る！

ドスッ！

「ひいつ!？」

射った矢は、真っ直ぐ飛んでいき、墮天使の顔をかするように木に突き刺さった。そのことに驚いたミッテルトは、マヌケな声を出して仰天していた。

「だ、誰だゴラア!？」

怒声を放つミツテルトに見つからないように身を隠す。

「この野郎！ 出てきやがれ！」

ミツテルトに見つからないように場所を移動し、もう一回矢を射る！

「によわっ!?!」

今度も当たらないように射つたため、彼女の顔面ストレスで矢は外れた。

「クツソオ！ 裏から来ることは予想してたけど、まさか、こんなふうにな意打ちしてくるなんて!?!」

憤るミツテルトをよそに、私はもう一度黒^{ブラック}鷹^{ホーク}を構える。

パアアア。

すると突然、紅い光を放つ魔法陣が現れた。
そして、魔法陣から部長と朱乃さんが現れた。

「……………やつと出てきたか……………シンツ」

私のことを部長たちと勘違いしたミッテルトは、一度咳払いし、礼儀正しく振る舞い始める。

「これはこれは。わたくし、人呼んで墮天使のミッテルトと申します」

「あらあら、これはご丁寧に」

「ていうか、さつきから不意打ちばっかしやがって、この卑怯者！」

「なんの話かしら？ 私たちはたったい来たところなのだけれど」

「しらばっくれんな！ あの矢はあんたらのもんでしょうが!？」

部長はミッテルトが指し示した私が射った矢を見る。

「あの矢は——なるほどね」

前に黒鷹ブラック・ホークの矢は見せているので、部長は私がここにいることに気づいたようです。部長たちが来れば、十分に陽動になるだろうと考えた私は隠れるのをやめ、部長たちのところに姿を現す。

「あら、千秋。姿を現して大丈夫なの？」

「はい。部長たちが来た段階で、私の役目は完了したと思うので」

相手に私一人だと感づかせないために隠れていたわけですから。

「さっきの矢はてめえのしわざかよ！ フン。弱い人間らしい手なこと」

私が現れたことに、最初は訝しんでいたミッテルトだったが、私が人間だとわかった途端、見下し始めた。

明日夏兄の言う通り、彼女らは私たち人間を格下の存在だと思い込んでいるみたいだった。

部長がミッテルトに言う。

「さて、こうして待ち伏せていたということは、私たちに動かれるのは、一応は怖いみたいね?」

「うん。大事な儀式を悪魔さんに邪魔されたら、ちよつと困るっただけえ」

「あら、ごめんなさい。たつたいま、うちの元気な子たちがそちらに向かいましたわ」

「えっ、本当!? やだ、マジっスかあ!」

朱乃さんの言葉に驚愕するミツテルトに私はさらに言う。

「うん、私たちは陽動。本命はもう正面から乗り込んでる」

「しまったああっ!? 裏からこつそり出でくると予想してたのにいっ!」

地団駄を踏むミツテルトだったが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「まあ、三下なんか何人邪魔しようともーマンタイじゃねえ? うん、決めた、問題なし。なんせ、本気で邪魔になりそうなのは、あなた方お二人だけだもんねえ」

人間を格下と思い込んでいる彼女にとって、私は物の数に含まれていないようだった。

「わざわざ来てくれて、あつぎーっス」

「無用なことだわ」

「え？」

「私は一緒に行かないもの」

「へえー、見捨てるってわけ？ まあ、とにかくあれよ。主のあんたをぶっ潰しちゃえば、他の下僕っちはおしまいになるわけだし。いでよ♪ カラワーナ♪ ドーナシーク♪」

ミッテルトがその名を呼ぶと、私たちの背後に二人の墮天使が現れた。

「何を偉そうに」

「あいにく、またまみえてしまったようだな、グレモリー嬢」

「フン。貴様から受け取ったあのときの借り、ここで返させてもらおう」

一人は、私が以前戦った墮天使カラワーナ。もう一人はおそらく、明日夏兄が以前戦ったという墮天使ドーナシックなのだろう。

「あらあら、お揃いで」

「ふふ」

墮天使の増援が現れたのにも関わらず、部長と朱乃さんは余裕の態度を崩さない。

でもそれは、墮天使たちのような相手を侮った慢心によるものじゃなく、相手の実力をきちんと測ったうえでの強者の余裕というものだった。

「我らの計画を妨害する意図が貴様らにあるのは、すでに明白」

「死をもって贖うがいい」

墮天使たちは翼を羽ばたかせ、空中に飛び上がって、抗戦の意を見せる。

「朱乃」

「はい、部長」

朱乃さんが手を上げると、雷が朱乃さんを包み、着ていた服装が学生服から巫女装束へと変わった。

大和撫子と呼ばれる朱乃さんには、非常によく似合っていた。

「何！　うちと張り合ってコスプレ勝負う!？」

ミツテルトが対抗心を燃やしていた。

あれって、やっぱりコスプレだったんだ。

でも、朱乃さんのは、コスプレというよりも、私たちの戦闘服に近いものを感じた。朱乃さんって、もともとそういう家系の生まれなのかな？

「はッ!」

朱乃さんが印を結んだ瞬間、このあたり一帯が結界で隔離された。

「結界だど!？」

「クツ!？」

「これって、かなりヤバくねえ!？」

自分たちが閉じ込められた事実には、墮天使たちは焦りを見せ始めた。

「うつつふ、この檻からは逃げられませんかわあ」

朱乃さんが恍惚した表情で指を舐めていた。

「……………朱乃さん、Sモードに入ってますね……………」

「貴様ら、最初から!？」

「ええ。あなた方をお掃除するつもりで参りましたの。ごめんあそばせ」

「うちらはゴミかい!？」

部長が不敵に墮天使たちに告げる。

「おとなしく消えなさい」

だが、それを聞いた墮天使たちはなぜか、余裕を取り戻し始めていた。

「フン、せいぜい余裕ぶっているがいい」

「儀式が終われば、貴様ですら敵う存在ではなくなるのだからな」

それを聞いた部長は完全に得心がいった様子だった。

「やはり、あなたたちを従えている墮天使は、あのシスターから神セイクリッド・ギア器を奪うつもりなのね」

「その通り。自分も他者も治療できる治癒の力を持った墮天使。レイナーレ姉さまはまさに至高の墮天使になるってわけ」

「そうなれば、墮天使としてあの方の地位は約束されたようなもの」

「そして、あなたたちはその恩恵にあやかろうというわけね?」

「あの方はそうしてくると約束してくれたのでな。だが、そのためには、貴様らの存在を許すわけにはいかないのだ」

「それはつまり、あなたたちは上に黙って、独断で行動している?」

「だとしたら、どうする?」

明日夏兄の推理は的を射ていたみたいだった。

「そう。それを聞いて安心したわ。これで心置きなく、私の管理するこの町で好き勝手するあなたたちを消し飛ばすことができるのだから」

部長は大胆不敵に告げた。

「我々を甘く見ないでもらおうか！」

ドーナシークのその言葉と同時に、墮天使たちは臨戦態勢に入った。



「アーシアアッ!?!」

アーシアの名を叫ぶが、アーシアはピクリとも反応しない。

そこへ、レイナーレの歓喜の声が響く。

「これこそ、私が長年欲していた力！ これさえあれば、私は愛をいただけるわ！」

狂気に彩られた表情で、レイナーレはアジアから飛び出た光を抱きしめる。

途端に眩い光が儀式場を包み込む。

光が止むと、そこには、淡い緑色の光を全身から発するレイナーレがいた。

「ウッフフ。アツハハ！ 至高の力！ これで私は至高の墮天使になれる！ 私をバカにしてきた者たちを見返すことができるわ！」

「ぎげんな！」

俺は駆けだした！

「悪魔め！」

「滅してくれる！」

立ち塞がる神父たち。

神父の一人による斬撃を神セイクリッド・ギア器で防ぎ、そのまま神父を殴り倒す！

「どけ！ てめえらに構ってるヒマはねえんだ！」

横合いから斬りかかってきた神父を蹴りでひるんだところを、回し蹴りで蹴り倒す！

「——ッ!？」

背後からも神父が斬りかかってきたが、そこへ木場が割って入ってくる！

「なっ——うおっ？ うわっ!？」

木場の闇の剣によって光の剣を浸食され、それを見て驚く神父を小猫ちゃんが投げ飛ばす！

「Aアtタtタaクcクk!」

明日夏の声が聞こえたと思った瞬間、俺の頭上を体から電気をほとばしらせ、両手にナイフを逆手で持った明日夏が飛び越えていった!

「——っ!?!」

明日夏はそのまま、二人の神父に飛びかかり、神父二人を押し倒しながら手に持つナイフを神父二人の首に突き刺した!

神父からナイフを抜き、明日夏は神父の集団に向かって飛びだす。木場と小猫ちゃんも明日夏に続く。

三人は次々と神父たちを薙ぎ倒していき、階段までの道が開けた!

明日夏がアイコンタクトで伝えてくる。「ここは俺たちに任せて、おまえは行け——と。」

明日夏! 木場! 小猫ちゃん!

「サンキュー!」

三人に感謝して、三人が開いてくれた道を駆け抜ける！

「アーシアアアッ！」

アーシアの名を叫びながら、階段を駆け上る！

「………アーシア………」

そして、ようやくアーシアのもとにたどり着くが、アーシアはまるで、糸が切れた人形のようにグツタリとしていた。

「……までたどり着いたご褒美よ」

そう言い、レイナーレが指を鳴らすと、アーシアを拘束していた鎖が消失する。

「アーシアアッ！」

戒めが解かれ、倒れ込んでくるアーシアを抱き抱える。

「アーシア、大丈夫か!？」

「……………んう……………イツセー……………さん……………」

「……………迎えに来たぞ。しつかりしろ」

「……………はい……………」

アーシアの返事は弱々しく、生気を感じさせなかった。

「その子はあなたにあげるわ」

「ふざけんな！ この子の神セイクリッド・ギア器をもとに戻せ！」

「うふ、バカ言わないで。私は上を欺いてまで、この計画を進めたのよ？ 残念ながら、あなたたちはその証拠になってしまうの。でも、いいでしょ？ 二人仲良く消えるのだから」

クソツ……………レイナーレを見ると、夕麻ちゃんの影がチラついてしようがねえ！

「兵藤くん！　ここでは不利だ！」

下のほうから、木場の叫びが聞こえてきた。

「……………夕麻ちゃん……………」

だけど、俺は動かず、うわ言のように夕麻ちゃんの名を口にしていた。

「あら、まだその名で呼んでくれるのね」

「……………初めての彼女だったんだ……………」

「ええ。見ていて、とても初々しかったわよ。女を知らない男の子は、からかいがいがあったわ」

「……………大事にしようよ、思ってたんだ……………」

「うつふふ、ちよつと私が困った顔を見せると、即座に気をつかってくれたよね。でもあれ、全部私わがざとそういうふうにしたのよ。だって慌てふためくあなたの顔、とてもおかしいんですもの！」

「……俺……夕麻ちゃんが本当に好きで……初デート、明日夏と相談しながら念入りにプラン考えたよ……。絶対にいいデートにしようと思つてさ……」

「アツハハハハハ！ そうね、とても王道なデートだったわ。——おかげでとつてもつまらなかつたけどね」

「……夕麻ちゃん……!」

「夕麻——そう、あなたを夕暮れに殺そうと思つたから、その名前にしたの。なかなか素敵でしょう？　なのに死にもしないで、すぐこんなブロンドの彼女作っちゃつて。——ひどいわひどいわ！　イツセーくんつたらあ！　またあのクソおもしろくもないデートに誘つたのかしらあ？　あつ、でも田舎育ちの小娘には新鮮だったかもねえ！　『こんな楽しかったのは、生まれて初めてですう!』とか言つたんじゃない？　アツハハハハハ!」

そこで俺は我慢の限界を迎え、怒声を張り上げる!

「レイナーレエエエツ!!」

「腐つたガキが、その名前を気安く呼ぶんじゃないわよ！　汚れるじゃない!」

こいつのほうこそ、よっぽど悪魔じゃねえか！

「はあッ！」

「クッ！」

レイナーレが槍を高く掲げ、勢いよく突き刺そうとしてきた！

アーシアを抱えて身構えた瞬間――。

バシユウウツ！

「――ッ!? 明日夏！」

俺たちの間に明日夏が割り込み、レイナーレの刺突を掴んで止めていた！

「――チッ。また、あなた……………」

「明日夏……………」

「――行け、イツセー」

「でもっ!」

「——いいから、行け。ここじゃ、アーシアが危険だ。俺たちの目的はアーシアを助けることだ。まずやるべきことは、アーシアを安全な場所に連れていくこと。——そうだろう?」

「………わかった」

俺はアーシアをお姫様抱っこし、階段を一気に飛び降り、祭儀場の出口めがけて駆けだした!

途中で神父たちが立ち塞がるが、木場と小猫ちゃんが道を切り開いてくれた。

「僕と小猫ちゃん、道を塞ぐ! 行くんだ!」

「………早く逃げて」

俺は無言で頷き、二人が切り開いた道を駆け抜ける。

出入口の前に来たところで振り向いて叫ぶ。

「木場、小猫ちゃん、帰ったら、絶対俺のこと、『イツセー』って呼べよ! 絶対だから

な！」

二人はそれに口元を僅かに動かして微笑んで答える。

「いいか！ 俺たち、仲間だからな！」

俺は全力で階段を駆け上る。冷たくなる、アーシアを抱えながら……。



墮天使たちが放った光の槍をすかさず、朱乃さんが障壁で防ぐ。

「ナマやつてくれちゃうじゃん」

「フン、その程度の障壁、いつまでもつか」

「貴様らが貼った結界があだになったな」

「あつ、それとも、結界解いて逃がしてくれちゃう？ ノンノノン。うちらがあんたら

逃がさねえつ。あんたの下僕っちも、いまごろ、ポロカスになってるだろうしねえ。

特にほら、レイナーレ姉さまにぞっこんだったあのエロガキ

「——ッ！」

イツセー兄のことを口にされた瞬間、思わずビクツと震えてしまう。

「あいつなんて、とつくに——」

「イツセーを甘く見ないことね」

「あん？」

ミツテルトの言葉を、部長が遮った。

「あの子は、私の最強の『兵士』^{ポーン}だもの」

部長は迷いなく言う。

それは虚勢でもなんでもなく、本当にイツセー兄を信じていることがうかがえた。

「『兵士』^{ポーン}？ ああ、あんたたち、下僕をチエスに見立ててるんだっけ？ 『兵士』^{ポーン}って、

前にズラツと並んでヤツよね？」

「フフン、要するに捨て駒か」

「あらあら、うちの部長は捨て駒なんて使いませんのよ」

「貴様はよほどあの小僧を買っているようだが、能力以前に、あいつはレイナーレさまには勝てはしない」

ドーナシークのその言葉を皮切りに、墮天使たちは、イツセイ兄のことを嘲笑い始める。

「だって元カノだもんねえ！ レイナーレ姉さまからあいつの話聞いたわ。もう、大爆笑！」

「フハハハ！ 言うな、ミツテルト。思い出しただけで、腹がよじれる！」

「まあ、酒の肴にはなつたがな！」

「——笑つたわね？」

墮天使たちの嘲笑を、部長の低い声音が遮る。

「私の下僕を笑ったわね？」

部長から明確な怒りが、墮天使たちに向けられていた。

「笑ったから、何？ もしかして、怒っちゃった！」

「ハハハハ！ 大層、下僕想いなことだ！ あの小僧もさぞや、下僕冥利に尽きることだろう！」

「でも、あんなエロガキを下僕にするなんて、趣味悪いんじゃない？」

「言うな、ミッテルト。貴族さまはたいそう、ゲテモノが好きなのだろう！」

部長の怒りを感じて、墮天使たちはさらにイツセー兄を嘲笑い始める。

怒りが頂点に達したのか、部長が両手に滅びの魔力を練り始めた瞬間――。

「――黙ってよ」

私は部長以上に冷たく、低い声音を口にした。

「いきなり何よ、あんた？」

「この殺気……そういえば、おまえは私にレイナーレさまのことを尋ねたときにも、このような殺気を放っていたな？」

そして、何かを察したのか、カラワーナが笑い出す。

「そうか！ おまえ、あの男に惚れているのだな！」

それを聞いて、ドーナシークとミツテルも笑い始める。

「なるほどな！ それならば、この殺気も領ける。想いを寄せる相手を侮辱されれば、腹が立つのも当然か！」

「アツハハハハ！ えつ、マジで！ あんた、男の趣味悪すぎい！」

墮天使たちの笑い声が耳に入るたびに、私の奥底から、ドス黒いものが湧き溢れてくる。

「あんな奴のどこがいいんだか？」

「言つてやるな。その貴族さま以上にゲテモノ好きなのだろう！」

「それか、恋する自分に酔っているのか？」

「——黙れ」

墮天使たちの嘲笑は止まらない。

「あの小僧とのデートとやら、レイナーレさまはたいそう退屈に感じたそうぞぞ」

「聞いた聞いた！　うちもすつごくつまらないって感じだったもん！」

「まあ、女を知らないガキにできるのは、所詮その程度だろうな」

「——ッ！」

もう我慢の限界だった！

「——部長」

「——何かしら、千秋？」

「部長の気持ちは察せませんが——」

「——いいわ。遠慮なくやってしまいなさい」

部長は私が言わんとしたことを察してくれたようで、朱乃さんと共に下がってくれた。

私は前に歩み出る。

「何？ もしかして、あんたがうちらと戦うってんの？」

「フン。リアス・グレモリーといい、貴様といい、我々も甘く見られたものだ」

「まあいい。私は貴様に借りを返したかったところだったしな」

墮天使たちは光の槍を手に飛び上がる。

「にしても、あんな奴のために怒るなんて、いくら惚れてるからってねえ」

「まあ、そう言うな。いまごろ、あの小僧は、レイナーレさまによつて、あの世だろう」

「なら、すぐにでも、惚れた男のもとに送つてやるとしよう！」

墮天使たちは、自分たちの持つ光の槍を投げつけてきた。

槍が迫り、私を貫こうとした瞬間――。

ビュオオオオオオオオオオオツ！

「――ツ?!」

私の周囲を風がうねり、竜巻となつて墮天使たちの光の槍を弾いた。

「この風！ 貴様、セイクリッド・ギア神 器の持ち主か!？」

『ブラスト・ストライカー怒濤の疾風』――私が所有する風を操る神セイクリッド・ギア器。

私は周囲に渦巻く風を両手に収束させ、墮天使たちに向けて解放する！

「――ツ！」

「なっ――ぐああああああつ!？」

ドーナシークとミッテルトには避けられるが、カラワーナだけは逃げ遅れ、暴風が風

の暴力となってカラワーナを襲う。

風が止み、ボロボロになったカラワーナが力なく墜落する。

「ぐっ……貴様ツ——っ!？」

カラワーナは、憤怒に塗れた表情を向けてくるが、すぐに驚愕の表情に変わった。――
――眼前に迫っている私が射った矢を目にして。――

「……まずは一人」

ドスツ!

カラワーナは、なんの抵抗もできないまま、私の矢によって、額を撃ち抜かれた。

「カラワーナ!? おのれ、貴様!」

「やってくれんじゃん!」

残る二人が憤るなか、私は新たな矢を射る!

「そんなもの!」

「当たるかっつてんだ!」

二人が矢を避けようとした瞬間、矢が弾け、複数の鏃が飛び散る。

「——っ!?!」

予想外の攻撃に二人は慌てて腕で顔を覆うことしかできず、体中に鏃が突き刺さる。

「このっ!」

「よくもっ!」

二人は光の槍を手に反撃してこようとするが——。

「なっ!?! いない!?!」

「どこへ——ッ！ 後ろだ、ミッテルト！」

私はすでにその場から移動し、風で飛翔してミッテルトの背後を取っていた。

「えっ——」

ミッテルトがこちらに振り向くのと、私が矢を射るのは同時だった。

ミッテルトの胸に矢が刺さり、糸が切れた人形のように、ミッテルトは力なく墜落していった。

「ミッテルト!? おのれ！」

憤るドーナシックに向けて、私は別の矢を射る！

「クッ！」

ドーナシックはさっきの拡散型の矢を警戒して障壁を展開する。

ドゴオオオン！

「ぐおっ!？」

障壁に阻まれた矢は爆発し、そのことにドーナシックは驚愕する。

その隙をついて、風による推進力を得て、ドーナシックに肉薄する！

「クッ!？」

ドーナシックは光の槍を振るって反撃してくるが、私は風の推力を利用して光の槍を避ける。

「はああッ!」

風の推力を乗せた回転を加えた回し蹴りをドーナシックの首筋に叩きこむ！

「ぐおああああああっ!?!」

叫び声をあげながら、ドーナシークは地面へと叩きつけられる。
私はトドメをさそうと、通常の矢を射る!

「ぐっ!」

ドーナシークはその場から転がるようにして、私の矢を避けよとする。
私は風を操作し、矢の軌道を変える!

「ぐわああっ!?!」

矢はドーナシークの肩に突き刺さった。

「ふっ!」

私は落下の勢いを利用して、ドーナシークの肩に突き刺さった矢を蹴りで杭のように

打ち込む!

「ぐっ……クソッ!」

深く打ち込まれた矢は、ドーナシックと地面を縫い付けてしまっており、ドーナシックは起き上がることができないでいた。

「……」

「——っ!?! ま、待て——」

ドーナシックの上に馬乗りになった私は、矢を手に振りかぶり、そのままドーナシックの胸に矢を振り下ろす!

ドスッ!

矢を突き刺されたドーナシックは、それで絶命した。



「あくあ、逃がしてくれちゃって。まあ、すぐに追いかければ済む話ね」
「——行かせると思うか？」

明日夏くんは、冷たく、低い声音で言った。

「あ、そうそう。これ、覚えているかしら？」

そう言って、墮天使は明日夏くんに脇腹あたりを見せつける。そこには、刃物などで切り裂かれたような傷があった。

「あなたにつけられた傷よ。この傷をつけられたときは、至高の墮天使となる私の体によくも傷を、って思ったんだけどねえ。でも、許してあげるわ。なんせ、いまの私は至高の墮天使なんだから！」

墮天使の手のひらから緑色の光が発せられ、墮天使の傷が跡形もなく消えてしまっ

た。

「どう、すごいでしょ？ この力を得て至高の墮天使となつたいまの私は、この程度の傷に目くじらを立てるほど、器は小さくないの。寛大な心で、あなたを許してあげるわ」

これは少し厄介だね。傷つけても、すぐに治療してしまう墮天使。彼女の言う通り、至高の墮天使と言つても過言じゃないのかもしれない。

「だから………苦しむことなく、楽に殺して——」

「——少し黙れよ」

墮天使の言葉を、明日夏はさきほど以上に冷たい声音で一蹴した。

「………ベラベラ、ベラベラ、他人から奪つた力を、よくもまあ、あたかも自分の力のように自慢できるな？」

「だって、その通りだもの。アーシアを見つけたときから、アーシアを含めて私のものだったのだから。——もしかして明日夏くん、さつきイツセーくんに言ったことを怒っ

てるの？ キャー、怖ーい！」

墮天使はわざとらしく、口調を変えて言った。

「あのとときも思ってたけど、あんな奴のために、よくもまあ、そこまで怒れるものね？ いくら友達だからってねえ」

マズい！ 彼女は明らかに明日夏くんを挑発している！

「明日夏くん、それは挑発だ！ 冷静になるんだ！」

だが、僕の声は明日夏くんには届いていないようだった。

明日夏くんのところに向かおうにも、いまだ大勢いる神父たちが阻んでくる。

「あなた、友達を選んでほうがいいわよ？ あんな、冴えなくて、バカ正直で、女の子一人守れない男と知り合っていないければ、こんなところに来ることもなく、死ぬことなんてなかったのにねえ！ アツハハハハハ！」

墮天使の嘲笑が祭儀場に響く。

「あの世で後悔しなさい。あんなガキと出会ったことを、友達になつてしまったことを——」

ドゴオオオツ!

祭儀場に響く衝撃音に、墮天使も、神父たちも、僕と小猫ちゃんも硬直してしまう!

「——黙れつて言つたよな?」

見ると、さつきまでアーシアさんが礫にされていた十字架を明日夏くんが殴りつけていた。十字架を見ると、明日夏くんの打ちつけた拳を中心に、亀裂が入っていた。

「至高の墮天使か。確かに至高かもな——薄汚さが」

「なんですつて?」

明日夏くんの言葉に、墮天使は僅かに眉をピクつかせる。

「よくまあ、ヒトをここまでイラつかせてくれたもんだ。……おかげで、かえって冷静になれたぜ」

明日夏くんのうちには、激しい憎悪が渦巻いているのは明白だった。普通なら、冷静ではいられないくらいに。だが、明日夏くんは至って冷静そのものだった。

「いったい何を言ってるのかしら？　あまりに怒りすぎておかしくなっちゃ——」

墮天使が言葉を最後まで口することはできなかつた。

明日夏くんがナイフを墮天使に向けて投擲していたから。

「——ッ!？」

墮天使は慌てて明日夏くんのナイフを避ける。

「ドーナシークたちから、あなたの爆発するナイフのことは聞いているわ!」

「——だからどうした?」

「——ツ!?!」

明日夏くんは、はなっから避けられることを見越していたのか、ナイフを手に墮天使に迫っていた!

「チッ!」

墮天使も、光の槍で反撃しようとする。

そこへ、明日夏くんは、ナイフを墮天使の槍に向かって投げつけた!

ドゴオオオン!

「——っ!?!」

刹那、明日夏くんのナイフが爆発した！

さつき、堕天使が言っていた爆発するナイフなのだろう。

だが、あんな至近距離で爆発させてしまえば！

現に明日夏くんまでもが、爆炎に巻き込まれてしまっていた！

爆煙から堕天使が翼を羽ばたかせて飛び出てきた。

「また、私に傷を！ でも、バカな行いね！ あなたと違って、私は傷を治療でき——」

「——A t t a c k」

「——っ!? がっ!?」

堕天使が爆発でできた傷を治療しようとした瞬間、爆煙から電気を纏った明日夏くんが飛びでて、堕天使の首を握り絞めた！

「どうした？ 自分の傷を治療できるんだろう？ なら、さつきとやったらどうだ？」

明日夏くんがそう言うが、堕天使は握り絞められた首が苦しいのか、それどころではないといった感じだった。

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・なせ・・・・・・・・・・!!」

墮天使は光の槍を手にし、それを明日夏くんに突き刺そうとする!

ドゴオツ!

「・・・・・・・・・・っ!?!」

だが、そのときにはすでに、墮天使は明日夏くんによつて蹴り飛ばされていた!

「・・・・・・・・・・がつ!?!」

壁に叩きつけられた墮天使は、その衝撃に苦悶の声をあげた。

ドシユツ!

「——っ!？」

その肩に、明日夏くんが投擲したナイフが突き刺さる！

「ふッー！」

さらに明日夏くんは、複数のナイフを同時に投擲する。

「………こんなものー！」

墮天使は、光の槍でナイフを振り払おうとする。

「——俺のナイフのことは聞いてたんじゃないのか？」

「——っ!？」

明日夏くんの言葉を聞いた瞬間、墮天使は己の失策に気づく。

ドゴツドゴオドゴオオオオオオオン！

だが、ときすでに遅く、墮天使は複数の爆発をその身に受けることとなった。

「があっ!？」

爆風によって床に叩きつけられた墮天使は、満身創痕といった様子だった。

明日夏くんは儀式用の祭壇から飛び降り、トドメをさそうと、墮天使に歩み寄る。

「あなたたちっ!?! 何をしているのっ!?! 早く私を助けなさいっ!?!」

『——ッ!?!』

明日夏くんの一方的な戦いに呆然としていた神父たちだったが、墮天使に言われ、ようやく動き出す!

「しまった!」

僕も明日夏くんの戦いぶりに呆然としていたために、神父たちの動きに反応が遅れて

しまった！

神父たちは、一斉に拳銃で明日夏くんを狙い撃つ！

「チッ！」

明日夏くんは、腕で顔を覆って銃弾をやり過ぐす。

その隙について何人かの神父が明日夏くんに襲いかかる。

「――邪魔だ！」

明日夏くんはナイフ二本を近づいてきた神父の二人に投げつける！

ナイフを投げつけられた神父二人はなんの抵抗もできないまま、胸にナイフが突き刺さり倒れた。

「せいッ！」

光の槍（神父たちが持つ光の剣の槍バージョン）を持った神父が明日夏くんに向けて

突きを放った。

明日夏くんは身を少しそらすだけで神父の突きを躲し、光の槍をつかんで引き寄せ
る。

そのまま神父に肘打ち打ち込む。

神父は肘打ちのダメージで光の槍をはなして後方に吹っ飛ばされ、明日夏くんはその
まま光の槍を奪って、襲いかかってきた別の神父に光の槍を投げつける。

光の槍はそのまま神父の胸を貫いた。

「隙あり！」

残る神父二人が明日夏くんに斬りかかるが、明日夏くんは最小限の動きで神父たちの
斬撃を躲す。

「――Release」

明日夏くんがそう言った瞬間、明日夏の体からほとぼしっていた電気が霧散し、それ

と同時に明日夏くんは刀を抜き、神父二人を一瞬で斬り伏せた。
強い——。

僕は素直にそう思った。

彼が賞金稼ぎになるために鍛えていたことは話に聞いていた。だから、それなりの
実力はあるだろうとは思っていた。

でも、実際は想定以上だった。

あれはもう、鍛えていたという次元じゃない。もともとそういうセンス——天性の戦
闘の才能があっただんだと思う。

そう思えるくらい、彼の戦闘ぶりはスゴかった。

そのスゴさは神父たちにも伝わっており、皆戦慄していた。

その隙に僕と小猫ちゃんは明日夏のもとに到達できた。

「大丈夫かい、明日夏くん？」

「——問題ない」

だろうね。でも、一応、念のためにね。

「よくも……よくも、至高の墮天使たる私を……!!?」

墮天使がいつの間にか、儀式場の出入口の前にいた!

その顔には、明日夏くんに対する憎悪の感情が色濃く表れていた。

「いいわ。あなたがたいそう大事に思っているお友達を徹底的に痛ぶってあげるわ! ああなたのせいでこんな目にあつたと、あなたを憎むようになるまで、徹底的にね! あなたたち、それまで、彼らの足止めをしていなさい!」

そう言い残し、墮天使は兵藤くんのあとを追ってしまふ!

だけど、神父たちは、先程の明日夏くんの戦いぶりにいまだに戦慄して動けないでいた。

これなら、わざわざ相手をしなくても行ける!

「急ごう! 明日夏くん! 小猫ちゃん!」

「ああ!」

「……はい!」

僕たちは領き合い、イツセーくんのもとに向かおうと駆けだした瞬間――。

「がっ!?!」

突然、神父の一人が背後から光の剣で貫かれた!

思わぬ出来事に驚いていると、上空に一人の堕天使がいた。

やったのはどうやら、あの堕天使のようだった。

堕天使はいきなり仲間を殺されて驚いている神父たちに向けて言う。

「何をやっているのですか、あなたたちは? まさかとは思いますが、敵に背を向けて逃

げるつもりではありませんよね?」

Life. 14 緋い龍、暴れます!

僕は明日夏くんから聞いた墮天使たちの情報を思い出す。

明日夏くんが把握していた墮天使の人数は五人。そのうちの一人のデイブラという墮天使と上空にいる墮天使と特徴が一致した。

それにしても、平然と仲間を殺すとはね………。

……いや、彼らからしたら、人間なんて駒みたいにしかなってないのかもしれない。

……やはり、墮天使は好きになれないな。

先ほどまで戦意喪失していた神父たちは、一斉に武器を手に構え始めた。

だけど、その表情は必死そのもので、明らかに死への恐怖に駆られたものだった。

そんな神父たちを、デイブラは醜悪な笑みを浮かべて眺めていた。

——ゲスだね、あの墮天使。

あのレイナーレとかいう墮天使といい、本当に嫌悪感を覚える存在だよ。

とはいえ、マズいね。あまり時間をかけていると、兵藤くんの身が危ない。

「はいは——。」

「明日夏くん。ここは僕たちにまかせて、キミは兵藤くんのもとへ！」

「——わかった」

「行くよ、小猫ちゃん！」

「はい！」

僕と小猫ちゃんは頷き合うつ、その場から飛びだす！

神父たちは迎え撃とうと身構えるけど、恐怖に駆られた者など案外御しやすいものだった。

僕と小猫ちゃんは神父たちを次々と薙ぎ倒していき、明日夏くんが通れる道を作った。

それと同時に明日夏くんは僕たちが作った道を全速力で駆け抜けていく。

「おっと、させませんよ」

デイブラが明日夏くんの背後から光の剣で斬りかかる！

「だけど、明日夏くんもそれを予期していたのか、即座に振り向いて、デイブラの攻撃を刀で防いだ。」

「はあッ！」

そして、同じように予期していた僕はすかさずデイブラを背後から斬りかかった！

「——そうはいきませんよ」

刹那、明日夏くんとデイブラの足下に魔方陣が出現していた！

「何!?!」

「しまっ——」

「ふふ」

そして、魔方陣が二人を通過し、明日夏くんとデイブラはその場から消えてしまった

！



「クソツ！」

転移が終わった直後、俺はデイブラから距離を取り、あたりを見渡す。見ると、さつきまでいた教会からそう離れてはいない場所だった。

「そんなに心配しなくとも、急いで向かえば、お友達を助けることはできると思いますよ」

デイブラの言葉を聞き、すぐさまデイブラを警戒する。

「さて、あなたをみすみす行かせると、レイナーレさまはますます機嫌が悪くなるでしょうし、あなたのお相手は私がいたしますよ」

デイブラがそう言うと同時に、デイブラの周りに光の剣が出現していき、無数もの光

の剣がディブラの周りに展開された！

「フフ」

ディブラが笑みを浮かべた瞬間、光の剣が射ちだされる！

「ちっ！」

射ちだされる光の剣を^{ライトニングスラッシュ}雷刃で弾き、防ぎきれないものは横に飛んで躲す！

「クソッ！」

アーシアを連れていかれたときも、このようにして足止めされてしまった。

厄介なのは、一齐に射ちだすのではなく、緩急を入れて射ちだしているところだ。そのせいで、迂闊な行動ができなかった。

次第に波状的に射ちだされる光の剣をさばききれず、かするものが出てきた！

戦闘服の防御力ならその程度はどうってことなかった。一発一発の威力も低いみた

いだからな。

だが、あれだけの数をまとめてくらってしまったえば、この戦闘服を着ていてもただでは
すまない。

「ならー！ A t t a c k！」

ライトニングスラッシュ

雷 刃を鞘に戻し、身体強化の機能を起動させ、両手にナイフを逆手に持って光の
剣を迎撃する！

「ほお。なかなかやりますね」

ディブラは一旦光の剣の射出をやめ、俺の対応に感心していた。

ちっ、余裕そうだな！

間違いなく、こいつはレイナーレよりも強い！

「フフ」

再び、光の剣の射出が始まってしまう！

「くっ、はあああッ！」

さつきと同様、両手のナイフで光の剣を迎撃する！

このままじゃ、ジリ貧だな………。

ライトニングスラッシュ

雷 刃の身体強化も無限じゃない。いずれ、体の限界が来てしまう。

クソッ、急がないといけねえってのに！

おまけに、奴はあからさまに手を抜いていた。

あのときと同じように足止めに徹して時間を稼ぐ攻撃の仕方だった。

「さあさあ、早くしませんと、お友達が大変なことになってしまいますよ？」

デイブラは俺を焦らすように煽ってくる。

けど、俺は冷静そのもので光の剣を迎撃していた。

——我ながら、冷静なもんだ。

前々から、俺は感情が、特に怒りが限界を越えて高ぶると、頭の中がかえってクリア

になる傾向があつた。

しかも、その状態になると、集中力が増し、見えているものがよりよく見えるようになっていた。

普段の状態だったら、今頃、あの光の剣で俺は蜂の巣にされていただろう。それから——この状態になったことで、わかつたこともあつた。

「——いい加減、その薄っぺらい仮面を外したらどうだ？」

俺の言葉を聞き、ディブラは眉をひそませ、攻撃の手を止める。

「さつきもレイナーレさまレイナーレさまなんて慕つてるふうに振る舞つてたが、本当はそんなことないんだろ？」

「……………」

俺の言葉にディブラは答えず、ただただ無言だった。

この状態になって目がよくなつたおかげでわかつたことがあつた。

——こいつの紳士然とした振る舞いがただただ見栄えをよくするためのものだって

のが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・クフツ」

デイブラは顔を手で覆うと、とたんにこもった笑い声をあげ始める。

「クハハハハハハハハッ!」

そして、背中を仰げ反らせながら盛大に笑い声をあげた。

「まあ、ここにはあなたしかいませんし、別にいいですかね! いい加減、肩も凝ってきましたし。それに、あの女に余計なことをしゃべろうとしたら、喉を潰すなりすればいいでしょうしね」

本性を表したデイブラは、口調こそ丁寧だが、さつきまでの紳士然とした雰囲気はもう微塵も感じられなかった。

「……あの女に従ってるのは、成り上がったあいつの恩恵にあやかろうってところか？」

「キヒヒヒヒヒヒヒッ！」

俺の言葉を聞いて、デイブラは愉快そうに醜悪な笑い声をあげた。

「それもいいですがね、正直言うと、そこまでそんなものに興味はありませんよ」

「……何？」

「そもそも、バレたときのリスクのほうが大きいですからね」

「……どういう意味だ？」

「グリゴリの基本方針として、不用意に人間を殺すことはご法度でしてね。彼女のようセイクリッド・ギアな神器所持者は本来なら保護しなければならぬですよ。だと言うのに、あの女は成り上がりたがために、いままで数々の非道な行いをしてきました。バレたら、確実に懲戒処分でしょうね。当然、あの女に付き従っていたものたちもその煽りを受けるでしょうね。あの女はバレなければいいと思いますが、いかんせん、あのバカ女は詰めが甘く、おつむも弱いでしょうもない女でしてね。現に、もつと上手く立ち回っていれば、リアス・グレモリーにこちらの存在がバレることなく、楽にアーシア・アル

ジェントから『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』奪えたというのに。いずれ、致命的なミスを犯して、いままでの所業は上にバレるでしょうね」

なんてことのないように言うデイブラ。

レイナーレのことも、平然とこき下ろしていた。

「他人事みたいに言ってるが、バレたらおまえも危ないんじゃないのか?」

「ええ、ですから、今回の騒動が終わって、あのバカ女が有頂天になるところで、私の上にあのバカ女の所業を密告するつもりなんですよ」

「……なんだと?」

「私のはあのバカ女とは違います。上手く立ち回って、すべての責任をあのバカ女やそれに付き従っているバカどもに押しつけるつもりですよ」

仲間を平然と売るようなことを言うデイブラ。

「……いや、もともと仲間なんて思っちゃいないのか。」

「だが、それでおまえになんの得がある?」

こいつはさつき、レイナーレがもたらす恩恵に興味ないと言った。

だとしたら、たいして慕ってもいない女に猫を被つてまで付き従っていたのはなんんだ？

「趣味ですよ」

「………何？」

「私の趣味はですね、他人が悲しんだり、苦しんだりするさまを見て楽しむことなんですよ。特に女が絶望するさまなんて、ちよつと下品ですけど、勃起してしまうぐらいに興奮してしまうんですよ。あの神父たちのあの必死な姿もなかなかよいものでしたよ」

なんてことのないようにデイブラは言った。

「………こいつは………とんだ外道だな………」

「いま、『とんだ外道だな』なんて思いましたか？ 最ツ高の褒め言葉です！」

奴の言葉を聞くたびに、俺の中でデイブラに対する嫌悪感がどんどん高まっていく。

「それにしても——」

「デイブラはふと、教会のほうに視線を向ける。

「アーシア・アルジェントは惜しかつたですねえ。ああいう純粹で純情な女が絶望するのが最高にいいのに、あんな穏やかそうな表情で死んでしまいましたからねえ。あの兵藤一誠の死体でも見せてあげれば、少しはマシな死に顔をしていたでしょうかね？ せめて、教会を追放されたときの顔が見たかったですよ」

あの優しい少女の不幸を愉快そうに楽しむ目の前の外道にさらに怒りが湧いてくる。

「さて、そろそろ、続きを再開しますか」

再び、無数の光の剣が射ちだされる！

「くっ！」

俺もすかさず、両手のナイフで弾く。

「さて、少し手を加えますか」

奴がそう言った瞬間、何本かの光の剣が意思を持ったかのように軌道を変えてきた！

「クソッ！」

それにより、360度全体に意識を割かなくてはならなくなってしまった！

「さあ、もっと必死になりませんか！」

デイブラが手に光の剣を生みだし、それを投擲してきた！

「しまっ——」

その光の剣を受け切れなかった俺は体勢を崩されてしまった!
そして、俺の眼前には、先程から射ちだされていた無数の光の剣が――。

「ぐああああああああつ!」

戦闘服で防ぎきれなかった熱と衝撃が俺を襲う!

ただでさえ、ライトニングスラッシュ雷 刃の身体強化で負担をかけていた体に激痛が走る!

「.....ぐっ.....ぐうあ.....」

地面に仰向けに倒れた俺はうめき声をあげる。

そんな俺をディブラは愉快そうに眺めてきていた。

「そうそう、あの兵藤一誠もなかなかいい表情をしましたね。ありきたりですが、惚れた女に裏切られたあの顔はなかなか。アーシア・アルジェントの死を認識したときもよい顔をしていたでしょうね。あーあ、非常に残念です」

ダチたちの苦しんでる姿を楽しむデイブラ。怒りから拳を握りこみ、血がにじみ出てきた。俺は怒りをバネにし、体を起き上がらせる。

「ほお、人間にしては意外と頑丈ですね？」

体中から悲鳴があがるなか、俺はデイブラを睨む。

「これは、あのバカ女もあなたを痛ぶりがいがありそうですね。さて、そろそろ、抵抗できないうちに、手足をもぎますか。あと、余計なことを口にしないうちに喉も潰しときますか」

再び、デイブラの周囲に無数の光の剣が展開される。

「——ふうう………Release」

俺は身体強化を解除する。

「すううはああああ．．．．．」

深く深呼吸をした。

頭の中はいたって冷静、クリアそのものだった。

——だが、心のうちでは、ドス黒い感情が渦巻いていた。

——怒り。憎しみ。レイナーレとデイブラに対する怒りと憎しみ。——そして、不甲斐ない自分自身に対する怒りが。

——ああ、そうだ。俺はイツセーとアーシアを守れなかった。だからムカつく、自分の弱さが。

——すべてが許せねえ。特に何も守れない自分が心底許せなかった。

いま、イツセーの身が危ない状況。イツセーを助けるためには目の前にいる外道をさつさと消さないといけない。——だが、いまの俺じゃ、それは無理だった。

リスクを恐れているいまの俺じゃ．．．．．。

だから——。

「——だから、この身がどうなろうとかまいやしねえ」

「おや、どうかしましたか？　あまりの激痛におかしくなりましたか？」

だから――。

「ま、とりあえず、これで終わりですね」

ディブラがそう言うと同時に無数にあつたすべての光の槍が一斉に射出された。
無数の光の剣が迫ってくるなか――俺は叫ぶ！

「――力を貸しやがれ！」

刹那、緋が俺の身を包み込んだ。



「あれは!?!」

墮天使たちを倒し、その場の後始末を部長と朱乃さんにまかせて、風で飛翔して教会に向かっていた私の視界に緋色の輝きが入った。

あのオーラ、間違いない！

「明日夏兄！」

私は急いでオーラの発生源に向かって、全速力で飛翔する！

教会を通り越し、教会から少し離れた場所から緋色のオーラが発生しており、私は急いでその場所に降り立つ！

そこで私の視界に入ったのは上空にいるディブラと無数の光の剣が突き刺さった緋いオーラを発している塊だった。

「な、なんだ、これは?！」

ディブラは目の前の光景に驚愕していた。

すると、塊が少し動いた。

次の瞬間、すべての光の剣が緋色のオーラによって薙ぎ払われた！

そこには、緋色のオーラを発した明日夏兄がいた。

「ちっ！」

ディブラは舌打ちをすると、無数の光の剣を精製すると、それを明日夏兄に向けて一斉に放った！

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ・・・・・・・・！」

明日夏兄は無言で腕を横薙ぎに振るうと、その動きに連動して緋色のオーラが光の剣をすべて薙ぎ払った！

「・・・・・・・・明日夏兄？」

私はとある懸念を抱きながら、おそるおそる明日夏兄に呼びかける。

「——千秋か」

明日夏兄は私のほうを一瞬だけ見ると、すぐにディブラのほうに視線を戻す。

「手は出さなくていい。——すぐに終わらせる」

それを聞いて、懸念していたことになっていないことにとりあえず安堵する。

「千秋、あれはなんなの?」

いつの間にか私の隣に転移してきていた部長が私に訊いてきた。

「——もう察しはついてると思いますけど、あれが明日夏兄の神セイクリッド・ギア器です。名前は

『緋い龍衣』。とあるドラゴンが宿った神セイクリッド・ギア器です」

「——ドラゴン系神セイクリッド・ギア器」

「その能力は、宿っているドラゴンのオーラを操るといふものです」

それだけ聞くと、一見たいしたことのない神セイクリッド・ギア器のように見える。

けど、その操るオーラがドラゴンのものなら話は変わってくる。

ドラゴン——異形の存在の代表格といってもいい存在。その力は強大で、オーラそのものだけでも強大な破壊力を誇り、存在そのものが力の塊とさえ言われている。あらゆる書物や文献でもその存在感は大きい。

そんな存在のオーラを操れるというのだから、明日夏兄の神セイクリッド・ギア器は十分に強力なものなのは間違いなかった。

「あなたも神セイクリッド・ギア器を！　だが、なめるな！」

デイブラはそう言うと、無数の光の剣を出現させると、それを一ヶ所にまとめ始める。集束された無数の光の剣は一本の巨大な光の槍となった！

「くらえ！」

デイブラはその光の槍を明日夏兄に向けて放った！

それを明日夏兄は雷ライトニングスラッシュ刃で斬りつける。

「無駄ですー！」

斬りつけられた光の槍は一瞬だけ止まるが、徐々に明日夏兄を押し始めた！

「はあッー！」

でも、次の瞬間には、光の槍は明日夏兄によつて真つ二つに切り裂かれた！

カッ！ ドオオオオオオオオオオオッ！

真つ二つになった光の槍はそのまま明日夏兄の後方に飛んでいき、刹那、明日夏兄の背後で一瞬だけ閃光が走り、けたましい爆音があたりに響き渡った！

明日夏兄の後方にあつた木々は跡形もなく吹き飛ばされていた。

「な、なんだと!?!」

そんな威力の攻撃をしたデイブラは戦慄していた。

それだけ、自分の攻撃を切り裂かれたことが信じられなかったんだろう。

よく見ると、明日夏兄の持つ雷ライトニングスラッシュ 刃の刀身が緋くなっていた。

これはあのオーラの特性だった。

あのオーラを冬夜兄は『緋い龍気』と名付け、以降、私たちもそう呼んでいる。その緋い龍気の特性は、あらゆるものと混ざり合い、侵食するというものだった。

その特性を応用することで、あのように刀身に纏わせるだけでなく、刀身と融合させることで、単純に纏うよりも、強度や斬れ味を強化できるのだった。

「ちいっ!」

デイブラはさらに上空へと飛び上がろうとする。

おそらく、高空から地面に向けて攻撃することで、さつきみたいに切り裂かれても問題ないようにするつもりなのだろう。

「があっ!?!」

だけど、デイブラは突然、何かに引つ張られるように空中で制止した。

見ると、明日夏兄がデイブラに向けて手を伸ばしており、その手からオーラが伸びており、オーラは手のカタチになってデイブラの体を掴んでいた。

「ふッ!」

「ぐあっ!?!」

明日夏兄が手を引くと、それに連動してオーラの手がデイブラを引き寄せ始めた。

デイブラを至近距離まで引き寄せた明日夏兄はすかさず、ライトニングスラッシュ 雷 刃で斬りかかる!

「くっ!」

デイブラは慌てて光の剣で防ごうとするけど、ライトニングスラッシュ 緋い雷 刃は難なく光の剣を切り裂き、堕天使の腕が虚空を舞った。

「私の腕がああっ!?!」

腕を斬り飛ばされたデイブラは絶叫し、斬られた箇所を押さえながら後ずさる。

明日夏兄はそんなデイブラの背後に周り、デイブラの翼を根元から切り裂いた！

「がああああつ!?!」

叫ぶように悲鳴をあげるデイブラをよそに、明日夏兄は雷ライトニングスラッシュ 刃を鞘にしまうと、右腕を引いて構える。

すると、それに合わせるように緋い龍気は明日夏兄の右手に集まりだす。

そして、次第にオーラがドラゴンのカタチを模していく。

それを見たデイブラは恐怖に顔を歪めながら、絶叫する。

「…………おまえは…………おまえはつ…………一体なんなんだああああつ!?!」

明日夏兄が拳を突き出すと、それに合わせてオーラのドラゴンが炸裂し、オーラの波動がデイブラを飲み込んだ！



「……………はあ、はあ……………」

いまの一撃で、体力をこつそりと消耗した俺は息を荒げていた。
ダメージも受けすぎた……………。
体もあつちこつちから悲鳴をあげていた。

「明日夏兄!」

そんな俺のもとに千秋が心配そうに駆け寄ってきた。

「……………大丈夫だ。少し疲れただけだ。それよりも、急いで教会に向かうぞ!」

教会に向かおうとする俺を部長が呼び止める。

「待つて、明日夏。何があつたのか教えてちょうだい」

俺は簡潔に教会であつたことを部長と千秋に話した。
それを聞いて、千秋も急いで教会に向かおうとする。

「待つて、二人とも。少し、様子を見させてもらえないかしら?」
「何言ってるんですか!?!」

部長の言葉に千秋がもの申すが、部長は千秋を落ち着けると俺に訊いてくる。

「明日夏、あなたは本当にイツセーセイクリッド・ギアの神トウワイス・クリティカル器が単なるの『龍セイクリッド・ギアの手』だと思つているのかしら?」

「——ツ!」

「あなたも知つてるわよね。イツセーを転生させる際、私が使用した『悪魔の駒イービル・ピース』は『兵士ポーン』が八つだということを」

それを聞いて、千秋は驚愕していた。

俺も気にはなつていた。

トウワイス・クリティカル『龍アグレッション・スカレットの手』は俺の『緋セイクリッド・ギアい龍衣』と同じドラゴン系の神セイクリッド・ギア器だった。ドラゴン

系の神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアというのは、共通して潜在的な力が高い。

だが、それでも結局はありふれた神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアだ。とてもじゃないが、複数使用することはあっても、八つすべての『兵士』ポーンの駒を使うほどのポテンシャルなんてあるはずがなかった。

だから、部長は考えた。

イツセーの『神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギア』はまったく別の何かだということ。

それを確かめるために、部長はあえてレイナーレと戦わせようというのだ。

「そんな?」

それを知って、千秋はますます部長に食ってかかる。

あたりまえだ。一歩間違えれば、イツセーは今度こそこの世からいなくなってしまうからだ。

俺も承認しかねる。

「わかってるわ。本当に危なくなったら、助けに入るわ。でも、私は信じているの。イツセーが件の墮天使を倒せると」

部長の表情は真剣そのもの、言葉からも決して軽く言ってるわけではないということも察せた。

「でも！」

それでも、千秋は部長の提案に乗ることはできなかつた。
そんな千秋の肩に手を置き、落ち着かせる。

「わかりました」

「明日夏兄?!」

「ただし、イツセーが本当に危ないかどうかの判断は俺たちがします。すぐに危ないと感じたら、たとえ部長がまだだと思っても、イツセーを助けます」
「ええ、それでいいわ」

部長もそれで了承してくれた。

千秋も俺の妥当案で渋々了承する。

そして、俺たちは改めて教会に向かうのだった。



地下の祭儀場から聖堂に戻った俺は、アーシアを長椅子の上に寝かせる。

「アーシア、しつかり!? ここを出れば、アーシアは自由なんだぞ! 俺や明日夏たちと、いつでも一緒にいられるようになるんだぞ!」

ゆっくりと目を開けるアーシア。

微かに上がった手を俺は両手で握りしめる。

握りしめた手は、とても冷たく、生気が感じられない。

「.....私、少しのあいだだけでも、お友達ができて幸せでした.....」
「何言ってるんだ! 全部終わったら、遊びに行こうって約束したじゃないか!? 連れていきたいところ、いっぱいあるんだからな! ゲーセンだろ、カラオケだろ、遊園地だろ、ボーリングだろ、他にはさ.....あれだよあれ、ほら! そうだ、明日夏以外の

ダチにも紹介しなきゃ！ 松田、元浜って、ちよつとスケベだけど、スツゲエいい奴なんだぜ！ 絶対、アーシアと仲良くなつてくれるからさ！ 皆でワイワイ騒ぐんだ！ バカみたいにさ！」

涙が止まらない。

笑いながら話しかけているはずなのに涙が止まらなかった。

わかっている。理解できている。この子は死ぬんだと。

それでも否定したかった。こんなことは嘘に決まっている、と。

「……………この国で生まれて、イツセイさんや明日夏さん、千秋さんと同じ学校に行けたら、どんなにいいか……………」

「行こうぜ！ いや行くんだよ！ 俺たちとき……………！」

アーシアの手が俺の頬を撫でる。

「……………私のために泣いてくれる……………私……………もう、何も……………」

アーシアは涙を流しながら微笑んでいた。

「……………ありがとう……………」

頬を触れている手が静かにゆっくりと落ちていった。

アーシアは微笑みながら、その言葉を最後に動かなくなった。

「……………アー……………シア……………」

アーシアが死んだ。

俺は呆然と彼女の死に顔を眺めていた。

「なんでだよ?　なんで死ななきゃなんねえんだよ?　傷ついた相手なら誰でも……………
悪魔だって治してくれるくれえ、やさしい子なのに!」

俺はアーシアを抱きしめ、教会の天井に向かって叫ぶ!

「なあ、神さま！ いるんだろう!? この子連れていかないでくれよ！ 頼む！ 頼みます!? この子は何もしてないんだ！ ただ友達が欲しかっただけなんだ！」

天に訴えかけても応じてくれる者はいない。

「俺が悪魔になったからダメなんスか!? この子の友達が悪魔だからナシなんスか!?
なあ、頼むよ、神さまアアアッ！」

悔しさに歯噛みした。

俺は弱い。俺は無力だ。

もつと力があれば………アシアを救えるだけの力があれば………!
いまさら後悔しても、アシアは目を覚まさない。笑わない。

「………悪魔が教会で懺悔？」

唐突に投げつけられる言葉。

「・・・・・・・・タチの悪い冗談ね」

振り向くと、地下の階段からレイナーレが上がってきていた。

その体はボロボロで、息遣いも荒く、肩にはナイフが刺さっていた。

「・・・・・・・・ほら、見てこれ。あなたのお友達にやられたのよ・・・・・・・・」

レイナーレは憎悪にまみれた表情をこちらに向けていた。

明日夏がやったのか、あれ？

ていうか、明日夏は!? 木場や小猫ちゃんは!?

レイナーレは、肩に刺さっているナイフをおもむろに掴む。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ッ!」

レイナーレは叫び声をあげながら、強引にナイフを引き抜き、ナイフを投げ捨てた。

「・・・・・・・・でも、見て」

く。
レイナーレが肩の傷口に手を当てると、淡い緑色の光が発せられ、肩の傷を塞いでい

「素敵でしょう？　どんなに傷ついても治つてしまう。神の加護を失つた私たち墮天使にとつて、これは素晴らしい贈り物だわ」

そう言いながら、他の傷も治療してしまふ。

おい、その光はアーシアのものだったんだぞ。なんで、おまえがそれを使つてるんだよ！

「これで私の墮天使としての地位は盤石に。ああ、偉大なるアザゼルさま、シエムハザさま。お二人の力になれるの。——だからこそ、許せないわ！　お二人の力になれる至高の墮天使たるこの私に、あそこまで傷を負わせ、屈辱を味合させたあの男を！　だから、あの男はただでは殺さないわ。私以上の屈辱を味合わせ、苦痛に苦しませ、この私に懺悔させてあげたところで、じっくり痛ぶつてから八つ裂きにしてあげるわ！」

レイナーレは明日夏に対する憎悪の感情を包み隠すことなく口にした。

レイナーレの言葉から察するに、明日夏たちは無事のようだ。ここに来ないのは、いまだにあの大勢の神父たちと戦っているからだろう。

「そのためにも、あなたを利用してもらうわ。彼はあなたのことが大事なようだからね。目の前であなたを痛ぶれば、大層苦しむでしょうね。そのためにも、抵抗できないように、あなたの手足を引き裂いてあげるわ。恨むなら、彼を恨みなさい。彼が余計なことをしなければ、あなたもそんなに苦しむこともなかったでしょうにね。安心して。あの男が苦しむさまを見たら、すぐにそこで寝ているアーシアのもとへ送ってあげるわ。アーシアも、天国で寂しくならないでしょ——」

「——うるせえよ」

俺はレイナーレの長つたらしい会話を遮った。

「………墮天使とか、悪魔とか、そんなもん、この子には関係なかったんだ!」

「セイクリッド・ギア神 器を宿した選ばれた者よ。これは宿命よ」

「何が宿命だ! 静かに暮らすことだってできたはずだ!」

「それは無理」

「何が!？」

セイクリッド・ギア

「神器は人間にとって部に余る存在。どんなに素晴らしい力であろうと、異質なものは恐れられ、そして爪弾きにされるわ」

アーシアの悲しげな表情と言葉が脳裏を過ぎる。

——悪魔も治療できてしまう力を持つような者は異教徒だと。

——私、友達がいないので……………。

「仕方ないわ。それが人間という生き物だもの。こんな素敵な力なのにねえ」

「でも俺は、俺と明日夏と千秋はアーシアの友達だ！ 友達としてアーシアを守ろうとした!」

「でも、死んじやったじやない! アツハハツ! その子、死んでるのよ? 守るとか、

守らないじやないの! あなたたちは守れなかったの! あのときも、そしていまも!」

「……………わかってるよ……………だから許せねえんだ……………! おまえも……………」

そして俺も！ 全部許せねえんだ！」

レイナーレへの、そして無力な自分への怒りが沸き上がるなか、部長の言葉が脳裏を過ぎる。

——想いなさい。 セイクリッド・ギア 神 器は、持ち主の想う力で動くの。

「——返せよ」

——その思いが強ければ強いほど必ずそれに——。

「アーシアを返せよオオオオオツツ!!」

——応えてくれる。

『ドラゴン Dragoon ブースター Booster!!』

俺の叫びに答えるように、

神セイクリッド・ギア器が動きだした。

Life. 15 元カノ、倒します!

『ドラゴンブースター!!』

いままで鳴っていたのと違う音声が鳴り、俺の左手から全身へと体に力が駆け巡る。

「うおおおおおおッ!」

力任せに、レイナーレに殴りかかるが、レイナーレは華麗にそれを避ける。

「だから言ったでしょう? 一の力が二になっても、私には敵わないって」

『ブースト!!』

再び音声が鳴り、俺の中の力がさらに高まる。

「でえあああああッ！」

もう一度殴りかかるが、これも避けられる。

「へえ、少しは力が増した？ いいわ。少し遊んであげるわ」

そう言いながら、レイナーレは光の槍を手元に作り出していた。

「ふッ！」

ズシヤアッ！

「がっ!？」

レイナーレの投げた槍が、俺の両足の太ももを貫いた！

貫かれた太ももが、内側から焼かれるように痛かった!

「光は悪魔にとつて猛毒。触れるだけで、たちまち身を焦がす。その激痛は悪魔にとつてもつとも耐え難いのよ。あなたのような、下級悪魔では——」

「——それがどうした?」

俺は光の槍を掴む。

光によって手のひらを焼かれるが、構わなかった。

「こんなもん、アーシアの苦しみに比べたらアアアツ——」

手を焼かれながらも、槍を引き抜いた。

「……………どうつてことねえんだよ!」

『ブー
ースト!!』

さらに籠手から音声が鳴り響く。

「たいしたものねえ？ 下級悪魔の分際でそこまでがんばったのは褒めてあげる。でも

——」
「——っ!?! 力がっ!?!」

全身から力が抜けていき、その場で尻もちをついてしまった。

「——それが限界ね。下級悪魔程度なら、もうとうに死んでもおかしくないのに。意外に頑丈ね？ でも、おかげで痛ぶりがいがあるわ！」

レイナーレの嘲笑いが耳に入るなか、俺は——。

「——神さま…….……じゃダメか、やっぱ」

いつのまにか、そう口に使っていた。

「……………悪魔だから魔王か? いるよな、きつと。魔王。俺も一応悪魔なんで、頼み聞いてもらえますかね?」

「何ブツブツ言ってるの? あまりの痛さに壊れちゃった?」

レイナーレの嘲笑を聞きながら、激痛に耐えながら足に力を入れる。

「……………頼みます。あとは何も……………いらないますから……………!」

そして、徐々にだが確実に立ち上がる。

「そんな、嘘よ!」

「……………だから、こいつを——発殴らせてください!」

レイナーレは立ち上がった俺をみて、信じられないものを目にしたような顔をする。

「立ち上がれるはずがない!? 体中を光が内側から焦がしてるのよ!? 光を緩和する能力を持たない下級悪魔が耐えられるはず——」

「ああ、痛えよ。超痛え。いまでも意識がどっかに飛んでっちまいそうだよ。でも…….そんなのどうでもいいくれえ——てめえがム力つくんだよオオオオオツ!!」

『E^エx^クp^スl^ブo^ロs^ジi^ョo^ン!!』

新たな音声が鳴り響いた瞬間、籠手の宝玉が光り輝き、籠手の形状が変化した。

先程までは手の甲から少し先までをおおう程度だったが、いまは左手全体と肘までを覆う形状になっていた。

そして、いままでにないほどの、強大な力が全身を駆け巡った。

「この波動は中級…….いえ、それ以上の!! あ、ありえないわ!! その神^{セイクリッド・ギア}器^器ただの『龍^{トウワイス・クリティカル}の手』がどうして!!」

なんのことだかさっぱりだが、レイナーレは酷く怯えているようだった。

「ひいっ!? うっ、うう、嘘よっ!?」

俺がレイナーレを睨んだ瞬間、レイナーレは慌てて光の槍を投げつけてきた。

バキーン!

俺はそれを、籠手を装着した左腕の横殴りで弾き飛ばした!

「——っ!? い、いやあっ!」

レイナーレはこちらに背を向け、逃げるように翼を羽ばたかせて飛び上がろうとしていた。

俺は一気に近づいて、そんなレイナーレの腕を掴む。

「ひっ!?!」

「逃がすか、バカ!」

「私は………私は至高の——」

「吹っ飛ばせ! クソ天使イイイイツ!!」

レイナーレの顔面に鋭く、拳を打ち込んだ！

「あああああああああつっ!?!」

後方に吹っ飛んだレイナーレは、教会のステンドグラスを突き破って、外まで吹っ飛んでいった。

「はあ、はあ、ざまあみろ——ぐっ」

レイナーレを殴り飛ばし、完全に力を使い果たした俺はその場に倒れこもうとした瞬間——。

「——つと。大丈夫か、イツセー?」

「……明日夏……?」

いつのまにか現れた明日夏が俺の肩を抱き、俺を支えてくれた。

見ると、かなりボロボロの姿だった。

「イツセー兄!」

「………千秋」

同じくいつのまにか現れた千秋が反対側から体を支えてくれる。

「イツセー兄、大丈夫?!」

「ああ、大丈夫だよ。この通り、生きているよ」

「………よかった………!」

うっ、また千秋が泣きそうになっちゃてるよ。ホント俺、千秋に心配かけっぱなしだな。

「一人で墮天使を倒しちゃうなんてね」

そこへ、地下から木場が階段を上ってやって来た。

木場も結構ボロボロだった。

「遅えよ、イケメン王子」

「キミの邪魔をするなって、部長に言われてさ」

「………部長に？」

「その通りよ。あなたなら倒せると信じていたもの」

声ができるほうに振り向くと、リアス部長が壁に背中を預けて佇んでいた。

「用事が済んだから、ここの地下へジャンプして来たの。そしたら、祐斗と小猫が大勢の神父と大立ち回りしているじゃない」

「部長のおかげで助かりました」

なんだよ、心配して損した。

「さすがは『べにがみ紅髪ルイン・プリンセスの滅殺姫』と呼ばれるだけありますよ」

「な、なんだ、そのルイン・プリンセスって？」

明日夏がなんか、ものスゴく物騒な名を口にした。

「部長の異名だよ。その一撃は、あらゆるものを滅ぼす。そこから、そう呼ばれるようになったんだ」

木場が説明してくれた。

そんなヒトの眷属になったんだ、俺……………。

「イツセー、その神セイクリッド・ギア器？」

「あつ、ああ。いつのまにか、形が変わってて」

「赤い龍……………そう、そういうことなのね」

「部長？」

部長が俺の神セイクリッド・ギア器を見て、何かを得心したようだ。

よくわからない俺に明日夏が言う。

「部長は、おまえの神セイクリッド・ギア器が『龍トウワイス・クリテイカルの手』ではなく、別のものだと踏んで、それを確認するために、堕天使との戦いを見守っていたんだ」
 「そうなのか!?!」

俺セイクリッド・ギアの神器が『龍トウワイス・クリテイカルの手』じゃないと。

「……………部長、持ってきました」

小猫ちゃんが外から何かを引きずってやってきた。

小猫ちゃんが引きずっている何かを見ると、それは俺が先ほど吹っ飛ばしたレイナーレだった。

ていうか、小猫ちゃん。持ってきたって、完全にもの扱いですか……………。

「……………うっ……………」

気がついたのか、レイナーレが目を開ける。

「はじめまして、墮天使レイナーレ」

「……………ううつ……………」

「私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ」

「……………グレモリー一族の娘か……………!」

「どうぞお見知りおきを。短いあいだでしょうけど」

レイナーレは忌々しそうに部長を睨むが、途端に嘲笑うかのように口元を歪ませる。

「……………してやったりと思っっているんですけど、私にはまだ協力してくれてい
る墮天使たちがいるわ! 彼らが来れば——」

「来ないわ」

部長はレイナーレの眼前に何かを放る。

それは黒い羽だった。

それを見て、レイナーレの表情が曇る。

「あなたのお友達は、そこにいる明日夏と千秋が片付けてしまったわ」

レイナーレは俺を支えてくれている明日夏と千秋のほうに視線を向ける。
その瞳は、部長以上に忌々しいものを見るかのようだった。

「……………たかだか人間風情の忌々しい兄妹が、よくも……………！」

「あなたたちの最大のミスは、人間だという浅はかな理由で明日夏と千秋の二人を甘く見すぎたことね。しかも、調子に乗って、二人の逆鱗に触れるという愚行まで冒したわ。その代償はその身で支払われることになったわ」

スツゲエ、俺がこんなにボロボロになってやつと倒した墮天使を倒しちまうなんて。千秋は無傷だし、明日夏もボロボロだが、俺に比べれば、全然たいしたことなかった。

「以前、ドーナシックにイツセーを襲われたときから、この町で複数の墮天使が何かを企んでいることは察してたわ。私たちに累を及ばさなければ、無視しておいたのだけけれど、調べてみると不審な点が目立っていたの。それで朱乃と共に直接確認してきたの。私たちを甘く見ていたのか、あなたのお友達があつさりと喋ってくれたわ」

「部長、じゃあ、俺のために」

部長が言っていた用事ってのは、それだったのか。

なのに俺ってば、部長に失礼な態度を取っちゃまったよ。

「そして、堕天使レイナーレ。あなたの敗因は、イツセーのことも甘く見すぎていたことよ」

「………なんですつて?」

「この子、兵藤一誠の神セイクリッド・ギア器は、単なる『龍トゥワイス・クリティイカルの手』ではないわ」

「何っ!？」

「持ち主の力を十秒ごとに倍加させる、魔王や神すらも一時的に超えることができる力があると言われている、十三種の『神滅具ロンギヌス』のひとつ——『赤龍帝の籠手ブリステッド・ギア』」

部長の言葉を聞いて、レイナーレは驚愕の表情を浮かべる。

「………神をも滅ぼすと伝えられている忌わしき神セイクリッド・ギア器が、こんな子供に………!」

俺の神セイクリッド・ギア 器ツテ、そんなにとんでもないものだったのか！

「どんなに強力ででも、パワーアップに時間を要するから、万能ではないわ。相手が油断してくれてたから勝てたようなものよ」

調子に乗らないように、部長に釘を刺された。

確かに、パワーアップに時間がかかるんじゃないか、万能じゃないか。強力だけど、弱点も多い、と。

「さて、消えてもらおうわ、堕天使さん」

部長はレイナーレに向き直し、冷酷に告げる。

「イツセーくん！」

「——っ!？」

突然、俺の耳に聞き覚えのある声が聞こえた！



墮天使レイナーレは、いつのまにか、俺と千秋にとつては忌々しく、イツセーにとつてはもつとも見たくない姿になっていた。

「イツセーくん、私を助けて！ この悪魔が私を殺そうとしているの！ あんなこと言ったけど、墮天使としての役割を果たすため仕方がなかったの！」

「………夕麻ちゃん………」

そう、その姿は、レイナーレがイツセーに近づくために演じた、イツセーの初めての彼女、天野夕麻になっていた。ご丁寧に、服装も、イツセーとの初デートのときのものだった。

レイナーレ………天野夕麻はイツセーに媚びるように命乞いを続ける。

「私、あなたのこと大好きよ！ 愛してる！ ほら、その証拠にこれ、捨てずに持っていたの！」

イツセーに見せたのは、腕にはめているシユシユ。それは、初デートのときにイツセーが買ってやったものだった。

「忘れてないわよね?!」 あなたに買ってもらった!」

イツセーが忘れるはずがないだろ……最悪な意味でな。

「……………っ……………なんでまだ、そんなもん持つてんだよ……………!」

それを見て、イツセーはとても辛そうに悲痛な表情を浮かべて顔をうつむかせる。

「どうしても、捨てられなかったの!」 だって、あなたが!」

イツセーは俺と千秋の支えから抜け、天野夕麻に歩み寄る。

それをどう捉えたのか、天野夕麻は表情を輝かせる。

「マズい! 明日夏くん?」

木場がイツセーを引き留めようとしたのを、肩を掴んで止める。

「必要ねえよ」

止める必要なんてないんだからな。

「私を助けて! イツセーくん!」

「……………おまえ……………どこまで……………!」

イツセーは踵を返す。ちょうど、部長と対峙するように。

「一緒にこの悪魔を倒しましょう!」

それを勝手にそう捉えたのか、天野夕麻はますます表情を輝かせる。

「えっ?」

だが、イツセーはただただ、部長の横を通り過ぎ、天野夕麻から離れるだけだった。それを見て、途端に天野夕麻……いや、墮天使レイナーレは顔を青ざめさせていく。

……バカな奴だ。レイナーレとして命乞いをしていれば、まだイツセーは迷っただろうにな。

ビュオオオオオオオツ!

そんなレイナーレを暴風が襲い、レイナーレは教会の壁に叩きつけられる。

それでも暴風は止むことなく、風の暴力はレイナーレを襲う。

これは——千秋の『ブラスト・ストライカー怒濤の疾風』か。

風が止み、風の暴力から解放されたレイナーレは、力なく床に落ちた。

「これ以上……これ以上イツセー兄の……イツセー兄の心を弄ぶなッ!」

千秋にとって、レイナーレの所業で許せないことは多々あるが、その中でもっとも許せないこと——それはイツセーの心を弄んだこと。

いまのレイナーレの行いは、千秋のその逆鱗に触れる所業だった。

俺はというと・・・もう怒りを通り越して、呆れしかなかった。

さんざんきき下ろした相手によくもまあ、何事もなかったかのように媚びへつらえたものだ。

千秋は鋭い形相でレイナーレを睨み、トドメをさそうと黒鷹ブラック・ホークを構える。

そんな千秋の肩に、部長は手を乗せる。

「もういいわ、千秋。こんな薄汚れた女のために、あなたが手を汚す必要はないわ」

千秋をなだめた部長は、レイナーレの前に立つ。

「・・・・・・・・ひっ・・・・・・・・!?!」

「・・・・・・・・私のかわいい下僕に言い寄るな。吹き飛べ」

「あああああ——」

ドンツ！

部長の破滅の魔力は、レイナーレの断末魔ごとレイナーレを跡形もなく消し飛ばした。

あとに残ったのは、飛び舞うレイナーレの黒い羽——そして、聖堂の宙に浮かぶ緑色の光を放つふたつの指輪、アーシアから奪った『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』だった。部長は『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を手に取る。

「これを彼女に返しましょう」

「………はい」



「………クソツ、クソツ、クソがッ！」

教会からだいぶ離れた場所で男性が悪態ついていた。

男性の正体は明日夏に倒されたはずのデイブラだった。

明日夏にやられる直前に転移を使い、明日夏の攻撃から逃れていたのだった。だが、完全に逃れることはできなかったようで、その身はボロボロだった。

「……こんなはずではなかった。」

少々煽って反応を楽しむはずが、それが手痛いしつぺ返しとなってしまうた。

「……『ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手』だど！ あのアホ女、とんだ見誤りしやがって！」

激怒しているデイブラ。いつもの丁寧な口調をかなぐり捨ててレイナーレを罵倒していた。

もともと、詰めが甘く、おつむが弱いバカ女だったが、それゆえに御しやすかった。だから、簡単に煽ててやれば、あっさりと自分を信じた。

そして、『トウライイト・ヒーリング聖母の微笑』を手にいれて有頂天になっているところを、いままでの所業を上バラすことでドン底に突き落として絶望するさまを楽しもうとした。

だが、その詰めめ甘さがとことん悪い方向に働いた。

兵藤一誠セイクリッド・ギアの神器の正体を見誤り、慢心してみすみすパワーアップさせてしまい負

けた。

おとなしく潜んでいればいいのに、部下たちを自由に行動させ、その結果、リアス・グ

レモリーに感づかれ、このような結末になった。

デイブラはレイナーレの軽率さに憤慨するが、デイブラもまた、慢心し、自分の趣味に走って明日夏を軽率に煽り、その結果がいまの姿であった。

「あのガキ、ただじゃおかねえ！」

怒りのあまり、冷静さを著しく欠いていたデイブラは、自分をこんな姿にした明日夏に報復することしか頭になかった。

あのガキの近しい人間どもを殺す。

デイブラはそうすることで、明日夏の苦しむさまを楽しもうとしていた。

この期に及んでもデイブラは自分の趣味を優先させていた。

もともと、デイブラはつまらない良心を優先させる『神の子を見張る者』のありかたに不満を持っていた。

おかげで、自分は大つぴらに趣味を楽しめない。

そのために、いつでも責任を押しつけられるレイナーレのもとへ行き、隠れてこっそりと趣味を楽しんでいた。

だが、そのレイナーレが死に、他の連中も死んだ。今回の件も上に確実にバレるだろ

う。そうなれば、自分もただでは済まない。責任を押しつける対象がいなくなったことで、言い逃れもできなくなった。

あとがなくなつたデイブラは、完全に精神の均衡を大きく欠いていた。そのため、歯止めも利かなくなつていた。

そんなデイブラはさつそく、駒王町に向かい始めた。

そんなデイブラの進行上に何者かが立ち塞がった。

「誰だ!？」

月明かりに照らされ、現れたのは、一人の少女。長い黒髪をポニーテールにし、少しきつめの目つきをしており、黒いセーラー服風の学生服を着た女子高生だった。

「はん、女か。ちょうどいい。いまムシヤクシヤしてるからな。スタイルもよさそうだから、ストレス発散の捌け口にしてやる!」

女を犯すときは、普段はレイナーレに付き従っていたときのように紳士然とした振る舞いで近づき、こちらを信用させたところで犯して絶望するさまを楽しんでいるのだ

が、いまは面倒な工程はなしだ。

冷静さ欠いていたデイブラは正常な判断ができなくなっていた。そのせいでデイブラは気づいていなかった。

こんな夜更けに女子高生が一人で出歩いていることの異常さ。——その少女の腰に差している日本刀の異常さに。

それらのことに気づかず、デイブラは醜悪な表情を浮かべ、口からヨダレを流しながら少女に近づいた。

「……ゲスが」

「あん、なんだあ?」

デイブラの手が少女に触れようとした瞬間だった。

「——へ?」

デイブラの視界から少女が消え去った。

「鬼刃一刀流・十の型——」

少女はいつのまにかデイブラの背後におり、腰に差した鞘から抜かれた日本刀を振りきっていた。

「——斬り嗣ぎ舞」

少女は日本刀を鞘に収める。

それと同時に、デイブラは首、胴体、腕、足とバラバラに切り裂かれた。

「どうやら、来て正解だったようだな」

少女の名前は夜刀神やとがみえんじゆ槐。

明日夏の兄——冬夜が寄越したハンターだった。

自分が到着したときには、決着がついており、自分が来るまでもないと思っていたが、明日夏の攻撃から逃れた墮天使が満身創痕ながら逃げてる姿を目撃し、接触してみれば、身勝手な復讐を企てていた。

非常に外道だったのも相まって、容赦なく斬った。

「それにしても——」

槐は教会のほうを見た。

様々な神セイクリッド・ギア 器を見てきた槐だったが、『神滅具ロンギヌス』を見たのは初めてだった。

「——思わぬ巡り合わせだな」

ドラゴン系の神セイクリッド・ギア 器を持った明日夏、『赤龍帝の籠手ブーステッド・ギア』を持った明日夏の友。偶然とは思えなかった巡り合わせだった。

Life. 16 新部員、入部します！

イツセーは部長から指輪を受け取り、長椅子に横たわるアーシアの指にはめる。

「……………部長、すみません。あんなことまで言つた俺を、部長や皆が助けてくれたのに……………！俺、アーシアを守つてやれませんでした……………！」

イツセーは涙を流しながら、謝罪を口にした。

「明日夏、すまない……………！おまえが色々してくれたのに、全部無駄にしちまつた……………！」

俺はイツセーの隣でしゃがみこんで、嘆き悲しむイツセーの肩に手を置く。

「……………謝るなよ。むしろ、謝らなきやいけないのは、俺のほうだ。俺の詰めが甘

すぎたせいで……!!」

アーシアを連れ出されたのは、俺の見通しの甘さが招いたことだ。

アーシアを守る気があるんだったら、常に彼女のそばにいるべきだった。

いや、それ以前に、『緋アグレッション・スカーレットい龍衣』の力を積極的に使っていれば、結果は変わってたかもしれない。

「……………明日夏は何も悪くねえよ……………! 悪いのは、弱かった俺のせいなんだ……………!」

「……………イツセー兄……………」

嘆くイツセーを慰めるように、千秋がイツセーの肩を抱く。

だが、イツセーの肩を抱く千秋も、アーシアの死に涙していた。

「……………いいのよ。あなたはまだ悪魔としての経験が足りなかっただけ。誰もあなたを咎めはしないわ」

「……………でもっ……………でもっ、俺……………っ!」

「……………そうだ。部長の言う通りだ。……………そうさ……………力を持ちながら、何も守れなかった俺のほうが罪深いんだ……………」

一度、おまえを死なせた。そして、今度はアジアを……………
また……………俺はダチを守れなかったんだ……………!

「……………明日夏もいいのよ。力を持つていようと万能じゃない。それは、誰でもそうなのよ。どうしても、及ばないところがあるものなの。だから、あなたも気に病むこととはないわ」

部長は俺のことも慰めてくれるが、俺たちのアジアの死による悲しみが癒えることはなかった。

たとえば短いあいだであろうと、アジアは俺たちの友達だったのだから。

「前代未聞だけど、やってみる価値はあるわね」

「「えっ?」」

部長はあるものを取り出した。

「これ、なんだと思う？」

「……………チェスの駒……………」

「……………正確には、『僧侶』の駒だ。そして……………『悪魔の駒』だ」

『イベル・ピース』
『悪魔の駒』 つて……………まさか!？」

『僧侶』の力は、眷属の悪魔のフォローをすること。この子の回復能力は、『僧侶』として使えるわ。だから、このシスターを悪魔に転生させてみる」

アーシアを長椅子から床に寝かせ、その胸の上に『僧侶』の駒が置かれる。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジエントよ。いま再びこの地に魂を帰還せしめ、我が下僕悪魔と成れ。汝、我が『僧侶』として、新たな生に歓喜せよ！」

イツセーのときと同じように、『僧侶』の駒がアーシアの胸に沈んでいった。

「ふう」

「部長、アーシアは？」

「黙って」

アーシアの神セイクリッド・ギア器も、アーシアの中へと溶けていくように入り込んでいった。

ピクリ。

僅かに体が動き、次に目蓋がゆっくりと持ち上がった。

「——んう………」

「アーシア！」

「……あれ？」

「——つ、部長！」

「私は悪魔をも回復させるその力がほしかったから、転生させただけ。あとはあなたが守っておあげなさい。先輩悪魔なんだから」

アーシアは何が起こっているのか、理解していない様子であたりをキョロキョロと見渡し、イツセーや俺たちを視界に捉えた。

「……イツセーさん？ 明日夏さんに千秋さんも？ あの、私——」

怪訝そうにしているアーシアをイツセーは抱きしめる。

「あとで説明してやる」

「ああ。だから、いまは帰ろう、アーシア」



アーシアを部長に預けることになり、すべてが終わった俺と千秋は家に帰ってきた。あと、お疲れのお茶でも出そうとイツセーも招いていた。

「上がらせてもらっているぞ」

「槐！」

リビングに入ると、なんとそこにはハンターの知り合いである夜刀神槐がいた。

「えっと、誰？」

「ああ、説明するから、とりあえず座っててくれ」

俺はイツセーと千秋を椅子に座らせ、俺はお茶の準備を始める。

「槐、おまえも飲むか？」

「ただこう」

すると、槐が俺の隣に来て言う。

「手伝うぞ、明日夏」

「いいよ。お湯沸かして、湯飲み出して、お茶淹れるだけだからな」

「勝手に上がってしまったのだから、これぐらいさせてくれ」

「兄貴に泊まっていけって言われてたんだろ？」

「そうだが、それでも礼儀というものがあるだろう」

やれやれ。相変わらず頑固だな。

「わかったよ。なら、人数分の湯飲みを出してくれ」

「承った」

俺と槐はちやちやつとお茶を用意し、皆の前に出すと、俺と槐も椅子に座った。

「紹介するよ、イツセー。こいつは夜刀神槐。たぶん、察してると思うが、賞金稼バウンティハンターぎだ」

「ああ、どうも」

「槐、こいつは兵藤一誠」

「ああ、冬夜さんからよく聞いている。よろしく」

イツセーと槐は互いにそれぞれ挨拶した。

お茶を一口飲み、槐に訊く。

「兄貴が寄越したのはおまえだったんだな？」

「ああ」

「つつても、無駄足踏ませたかもな」

「いや。おまえが倒した墮天使だが、おまえの一撃から逃れていたぞ」

「何？」

あの野郎、あの状況で逃げおおせてやがったのか。

「逆上しておまえに報復しようとしていたので、私が始末しておいた」

「悪いな。尻拭いさせるようなことを」

「気にするな。あのようなゲス、生かしておくわけにはいかなかったからな」

それには同意だな。

俺と槐のやり取りを見て、イツセーが訊いてくる。

「仲いいんだな？」

「ああ、付き合いはそこそこ長いからな。お互いの兄貴が親友同士だな」

「その縁で、明日夏や千秋、あと、千春さんとは付き合いがあるのだ」

俺は同じ年、千秋と姉貴も年が近いのもあって、わりとすぐに仲良くなったんだよな。

「それにしても……………」

俺はリビング内のとある場所に視線を移す。

「……………あの女、派手にやりやがって」

その場所は、大きな爆発があったかのような惨状になっていた。

レイナーレがアジアを連れ去る際に光の槍を盛大に炸裂させたようだ。衝撃の余波で、食器もいくつかダメになつてた。

まあ、あとで部長が元通りしてくれるけどな。

「ところで、明日夏……………その、大丈夫なのか？」

唐突に槐がそう訊いてきた。

槐が言ってるの俺の体のことではない。ダメージ自体は、アーシアが治してくれたからな。

では、何のことを言っているのかというと――。

「……………」

俺は自分の手を見つめる。――正確には、俺の中にある神セイクリッド・ギア 器を。

「何の話だ？」

イツセーはなんのことかわかっていない様子だったが、当然だ。俺の神セイクリッド・ギア 器の詳細を話していなかったからな。

余計な心配をと話さなかったが、ここは説明しておいたほうがいいかもな。

「俺の神セイクリッド・ギア 器はおまえの『赤龍帝の籠手』と同じドラゴン系の神セイクリッド・ギア 器なんだが、こいつ

にはとあるドラゴンが宿っているんだ」

「ドラゴン？」

「ああ。でな、こいつは少し厄介な存在でな」

「厄介？」

「………セイクリッドレギア神 器の力を引き出せば引き出すほど、俺に干渉してくるんだ」

「干渉？」

「……… 具体的に言うと、俺の肉体を支配しようとしてくる」

「なっ!？」

俺が初めて

『アグレッション・スカーレット緋い龍衣』

を発現させた際に、宿っているドラゴンに肉体を支配さ

れそうになった。

幸いにも、そのときは兄貴が介入してくれたおかげで、事なきを得た。

それ以来、俺は肉体を奪われるリスクを避けるために、『アグレッション・スカーレット緋い龍衣』の力を滅多な

ことでは使わなかった。

少し使う程度なら、ドラゴンからの支配をはね除けることはできるが——ディブラの
ときのような出力を出せば、正直、抗えなかった……はずだったんだが。

なぜかあのとき、ドラゴンからはなんの干渉もなかった。

「………一体どういふつもりなんだ？」

「明日夏？」

突然の俺の問いかけにイツセーは首を傾げていた。

当然、この場にいる者に言ったのではない。——俺の中にいるドラゴンに問いかけたのだ。

無反応を貫くかと思いきや、おもいのほか、あつさりと出てきた。

俺の体から緋い龍気が漏れ出てきた。

漏れ出たオーラは次第にドラゴンの姿を模し始め、オーラでできた小型の翼の生えた人型のドラゴンがそこにいた。

ドラゴンが口を開く。

『なんだよ？ おまえのほうから話しかけるなんてめずらしいじゃねえか』

ドラゴンから発せられる軽い口調な声。

こいつが俺が宿っているドラゴン——そいつが俺以外と話す際に作る仮そめの肉体

だった。

俺はドラゴンに再び話しかける。

「どういうつもりだつて訊いてるんだ？」

『どういうつもりつてのは？』

「とぼけるな！ 俺の体を奪う絶好のチャンスだっただろうが！ ドレイク！」

ドレイク——それがこのドラゴンの名前だった。

『そうピリピリすんなよ。禿げるぜ』

「誰のせいだ！」

軽口をたたくドレイクについ語気を強めてしまう。

千秋と槐も、目つきを鋭くしてドレイクのことを見ていた。

イツセーだけ戸惑ってる感じだった。

『ヘイヘイ、ちゃんと答えますよつと。で、質問の答えだが、おもしろそうだったからだ

よ
『』

「………なんだと?」

『そりやおまえ、普段は澄ました感じのおまえがあそこまで感情的になってたんだぜ? 邪魔しちやおもしろくねえだろ?』

………おもしろくないって………そんな理由でかよ………?

『それにおまえ、あのととき、俺が干渉しようとしたら、自害するつもりだったんだろ?』

「「なっ!」」

ドレイクの言葉に俺は無言になり、イツセーたちは驚愕していた。

こいつの言う通り、俺はあのととき、こいつが干渉してきたら、こいつの干渉になにがなんでも耐えながら、デイブラとレイナーレを倒したあとに自害するつもりだった。

俺を支配したこいつが皆に危害を加えない保証なんてなかったからな。

そうなるぐらいなら、この命を絶っていた。

『そんなことになつたら、せつかくの楽しめる環境が台無しになるだろうが』

「楽しめる環境だと?」

『ああ。俺は俺が楽しめればそれでいいロクデナシだからな。楽しくない環境だったら、干渉しておもしろおかしくするし、干渉しなくてもおもしろいのなら、傍観して楽しむってことだ。目覚めた当初は干渉しようと思ったが、ここ数年、おまえやおまえの周りを見て気が変わったんだよ。こりや、退屈しなさそうってな』

……とことん身勝手だな。

『はん、ドラゴンなんざ、基本的に自分勝手な存在だぜ。伝承とかに出てくる連中を見てみる？ どいつもこいつも好き勝手やって、滅ぼされた連中ばかりだろうが』

こいつの言う通り、伝承に出てくるドラゴンは大半が様々な被害を出しており、その報いとして英雄などに滅ぼされていた。

『つーわけで、もう俺は干渉したりしねえから、遠慮なく俺の力を使っただけ』

「信用できるわけないだろ！」

『信用ねえなあ』

「……おまえの所業と言葉を聞いて、信用できる要素なんてあると思ってるのか？」

『ごもつともで。まあ、好きにしろよ』

ドレイクはイツセーのほうに視線を向ける。

『おまえもよろしくな、イツセー』

「い、いきなり馴れ馴れしいな!？」

『そりや、俺の楽しみのひとつにおまえも入ってるんだからな』

「お、俺ええっ!？」

……こいつ、まさか——。

「……おまえ、イツセーに『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』が宿っていたことを知っていたのか?？」

『同族の気配を感じるくらい朝飯前だからな。そいつに宿っているドラゴンとはちよつとした知り合いでもあるしな』

「お、俺の神セイクリッド・ギア器にもドラゴンが宿ってるのか!？」

『そりや、おまえ、ドラゴン系の神セイクリッド・ギア器の共通の特徴はドラゴンが宿っていることなんだからな。ま、俺のように宿主とコミュニケーションをとるかどうかは別としてだが

な』

ドレイクに言われ、イツセーはまじまじと自身の左手を見ていた。

『まあ、とりあえず、今後とも、よろしく頼むぜ。チャオ』

言いたいことだけ言うと、ドレイクは消えた。

「・・・・・・・・・・イツセー」

「な、なんだよ?」

「・・・・・・・・・・お互い、めんどろな奴に氣に入られたな・・・・・・・・・・」

今日、初めて、ドレイクとまともに会話したが・・・・・・・・正直、疲れる相手だった。



「「ふわあ〜」」

旧校舎の廊下で、俺とイツセーは同時にあくびをしよう。

あくびをしようするのは、朝に弱い悪魔であるイツセーは当然として、俺も昨夜は体を酷使しすぎたのが祟ったのか、まだ体の疲れが抜けきっていないからだ。

アーシアの治療はケガは完璧に治すが、体力までは回復しないからな。

そんな疲れた状態にも関わらず、俺たちはいつもよりも早く登校していた。

部長に朝早くに部室に来てほしいと言われたからだ。

イツセーはわからなかったようだが、俺と千秋は、だいたい察せた。

何度もおくびしながら歩いていると、部室の前に到着した。

「おはようございまーす」

「おはようございませす」

ドアを潜ると、部長がソファアーに座って優雅にお茶を飲んでいた。

「あら、ちゃんと来たようね。傷はどう?」

「はい。アーシアの治療パワーで完治です」

「うふ、『僧侶』^{ベシヨツ}として、早速役立ってくれたみたいね。墮天使がほしがるのもうなずけるわ」

アーシアは部長が預かることになった。

おおかた、いろいろと手続きをするためだろう。

ふと、イツセーが部長に訊く。

「あの一、部長」

「なあに？」

「その、チェスの駒の数だけ、『悪魔の駒』^{イービル・ピース}ってあるんですよね？」

「そうよ」

「てことは、俺と同じ『兵士』^{ポーン}って、今後あと七人も増えるってことなんすか？」

ああ、なるほど。イツセーが気にしているのはそれか。

「あ、でも、これ以上、ライバルが増えるのは一なんてえ、あはは——あああつ、冗談つス！ ほんの冗談！」

本音を漏らしかけて、慌てて手を振るイツセーに言う。

「安心しろ。そんなこと気にする必要はねえよ」

「え？」

「明日夏の言う通りよ。私の『兵士』^{ポーン}はイツセーだけよ」

「えっ、それって……」

「人間を悪魔に転生させるとき、転生者の能力次第で、消費する『悪魔の駒』^{イレベル・ピース}の数が変わってくるの」

部長はイツセーの後ろに回り、イツセーの首に腕を回すように腕を組み、イツセーを抱きつく。

「私の残りの駒は、『騎士』^{ナイト}、『戦車』^{ルック}、『僧侶』^{ビショップ}がひとつずつ。あとは『兵士』^{ポーン}が八つ」

「その八つの『兵士』^{ポーン}で、おまえは悪魔に転生したんだ」

「お、俺一人で八個使ったんですか!?!」

「それがわかったとき、あなたを下僕にしようと思ったのよ。それだけのポテンシャルを持つ人間なんて、滅多にいないもの。私はその可能性に賭けた。『神滅具』^{ロンギヌス}のひとつ、

『赤龍帝の籠手』を持つイツセーだからこそ、その価値があったのね」

『赤龍帝の籠手』か。確かに、墮天使が危険視するだけの力を持った神器だ。な。

「……………」

千秋はどこか不安そうな表情をする。

『赤龍帝の籠手』は確かに強力だ。強力だからこそ、あらゆる危険が伴う。

千秋はそれを心配しているのだろう。

「『紅髪の滅殺姫』と『赤龍帝の籠手』、紅と赤で相性バツチりね」

部長はイツセーの顔を自分のほうに向け、その頬を撫でる。

「最強の『兵士』を目指しなさい。あなたなら、それができるわ。私のかわいい下僕なんだから」

「……………最強の『兵士』。くうう、なんていい響き！ これで野望にまた一歩——」

最強の『兵士』^{ポイン}という称号の響きに感慨ふけるイツセー。

「えっ?」

「あ」

「——っ!?!」

刹那、部長がイツセーの額にキスした。

「おまじないよ。強くおなりなさい」

「うおおおおッ! 部長、俺、がんばります!」

イツセーは部長のキスにテンションが高々になっていた。
ふと、隣にいる千秋を見る。

「.....うう.....」

若干、涙目になりながら不機嫌そうな表情をしていた。

「——つと、あなたをかわいがるのはここまでにしなないと。千秋と、それに新人の子に嫉妬されてしまうかもしれないから」

「嫉妬？」

「……………もう手遅れですよ、部長。」

千秋はすでに現在進行形で不機嫌ですし、途中から後ろにいる少女も不機嫌そうですよ。

「イ、イツセーさん……………」

「ア、アーシア！」

背後から声が聞こえ、振り向くと、千秋と同じように涙目で不機嫌そうにしているアーシアがいた。

「……………そうですね。リアスさん、いえ、リアス部長はお綺麗ですから。そ、そ

れはイツセーさんも好きになってしまいますよね……」

この反応に言葉、どうやら、そういうことみたいだな。

「ダメダメ！ こんなことを思っではいけません！」

あつ、マズい。

「待て、アーシア——」

「ああ、主よ。私の罪深い心をお許しを——あううっ!？」

「——遅かったか」

お祈りをしようとしたアーシアは、突然、悲鳴をあげて頭を抱えて蹲ってしまふ。

「ど、どうした!？」

「急に頭痛が……」

「あたりまえよ。あなたは悪魔になったのよ」

「悪魔が神に祈ったりすれば、そういうことになるから、今度からは気をつけろよ」
「うう、そうでした。私、悪魔になっちゃったんです」

ちよつと複雑そうなアーシア。

「後悔してる？」

部長が訊くと、アーシアは首を横に振った。

「いいえ。ありがとうございます。どんな形でも、こうしてイツセイさんや明日夏さん、千秋さんと一緒にいられることが幸せですから」

笑顔で言うアーシア。俺とイツセイは少し照れくさくなってしまう。
すると、千秋がアーシアの前に立つ。

「アーシアさん」

「どうしたんですか、千秋さん？」

「私たちは友達です。——だけど、イツセー兄のことはこれとこれで別です。負けませんから」

千秋の宣戦布告にアーシアは慄く。

「はううう、強力なライバルがもう一人……負けたくありませんけど……負けちゃいそうですうう……」

安心しろ、アーシア。たぶんだが、現状はおまえのほうが優勢だと思うぞ。

まあ、ライバルが増えれば、千秋も少しは積極的になるか？

「なあ、明日夏。二人はなんの勝負をしてるんだ？」

こいつは……と言いたいところだが、しばらくはイツセーにこつち方面のことに触れさせないほうがいいかもしれない。

こいつの心にはたぶん、まだレイナーレ——天野夕麻のことが楔となつて根づいてい
るかもしれないからな。

「それより、その格好……」

おそらく、さつきから気になっていたであろうアーシアの格好を指摘するイツセー。
アーシアの格好は、ここ駒王学園の制服姿だった。

「あつ、に、似合いますか？」

「ああ、似合ってるぞ！　なあ、二人とも？」

「ん、ああ、似合ってるぞ」

「うん。似合います」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、アーシアはこの学園に？」

「私の父は、この学園の経営に関わってるし、これくらいなんてことないわ」

最近になって、この学園が男女共学になったのも、木場のことを考慮したからなのか
もな。

「おはよう、イツセーくん、明日夏くん、千秋さん」

「……………おはようございます、イツセー先輩、明日夏先輩、千秋さん」

部室に木場と塔城も入室してきた。

あの戦い以降、二人とも、イツセーに言われた通り、イツセーのことを「イツセー」と呼ぶようになっていた。

俺たちだけに挨拶したってことは、俺たちが最後みたいだな。

「あらあら。皆さん、お揃いね」

副部長も入室し、これでオカルト研究部の部員が全員揃った。

「さあ、新人さんの歓迎会ですわよ」

副部長が押している台車には、豪華なホールケーキが乗せられていた。

その後、俺たちは時間ギリギリまでアジアの歓迎会で大いに騒いだのだった。

Life. Extra 友達と遊びます！

「わああー！」

アーシアが、目の前の光景を見て、驚きと憧憬が入り交じった表情で目を輝かせていた。

俺、士騎明日夏が現在いる場所は近所のゲーセンだ。

アーシアがオカルト研究部の部員となった数日後の休日、俺たちはアーシアとの約束通り、遊びに来ていたのだ。

俺とアーシア以外のメンバーは、あとき約束したメンバーのイツセーと千秋。そして――。

「いいのか？ 私まで同伴して？」

先日からうちで泊まってる夜刀神槐だった。

せつかくなのでと、俺が誘ったのだ。

アジアもイツセーも千秋も快くOKしてくれた。

本当は他のオカルト研究部の部員にも声をかけたのだが、あいにくと都合がつかなかったのだ。

「スゴいですうー！」

アジアはいまだに目を輝かせていた。

この反応だけでも、来たかいがあるな。

ちなみに、いまのアジアの服装だが、部長が用意してくれた私服姿だった。

部長がコーディネートしただけあって、よく似合っていた。

「それにしても、話には聞いて想像はしていたが……想像以上に騒々しいな」

槐がふと、そんなことを口にした。

「あれ、夜刀神さんって、ゲーセンに来たことないんですか？」

「名前で呼び捨てで構わないぞ、兵藤さん。敬語もいらない」

「じゃあ、俺もイツセーでいいよ」

「では遠慮なく。で、イツセー、おまえの質問の答えだが、近所にはこういうのはなくてな」

槐が通っている学校は山奥にある全寮制の学校なのだ。

買い物とかも、もっぱら通販らしい。

だから、こういうゲーセンとかに来ようと思うと、少し遠出しなければならぬ。

ハンターの仕事で都会に出ることはあっただろうが、そうまでして来たいと思うほど、槐も興味がなかったのだろう。

そんな槐に俺は言う。

「じゃあ、今日がゲーセンデビューだな？」

「ああ、そういうことになるな」

すると、槐が唐突にため息を吐いた。

「苦手か、こういうところ?」

俺が聞くと、槐は慌てて違うと手を振った。

「驚きこそはしたが、楽しそうだとも思っているぞ。いまのため息は……兄上がな……」

「なんか言われたのか?」

「いや、せつかくなのだから、めいっばい楽しんでこいとはしゃぐもので……」

「ああ……」

「……まったく、いつまでも子供扱いして……」

お互い、過保護気味な兄貴に苦勞してるんだな……。

「おーい、二人とも! 何してるんだ!」

いつのまにか、俺と槐以外のメンツがメダル交換所において、イツセーが手を振って俺

と槐を呼んでいた。

「ま、とりあえず、楽しもうぜ」

「ああ、そうだな」



「峠最速伝説イツセー！」

「速いです！ 速いです、イツセーさん！」

レーシングゲームで、見事なハンドル裁きで相手の車抜き去っていくイツセー。

『WIN!』

イツセーの勝利を告げる文字が画面に映し出される。

「——ああ、また世界の速度を縮めてしまった……」

「………何かツッコけてんだ、おまえは」

「スゴいです、イツセーさん！」

「へへへ。今度はアーシアがやってみろよ」

「えッ!? 私がですか? できますでしょうか?」

「まあ、やってみようぜ」

「は、はい！」

今度はアーシアがレースに挑戦する。

「ひゃああっ!? 危ないです!? きゃああああ、回ってしまいますううっ!?」

結果、他の車にぶつかりそうになり、慌てて避けたら壁にぶつかり、さらにスピントってしまった。

『LOSE!』

アーシアの敗北を告げる文字が画面に映し出される。

「ううう………」

「初めてだから仕方ないよ。俺も最初からあんなに速かったわけじゃないしな。アーシアも慣れれば速くなるさ。今度は——」

アーシアを励ましつつ、他のゲームの方に向かおうと、いろいろ廻る。
今度はガンシューティングゲームをやることにした。

「ひゃああああああああっ!?!」

画面に出てきた敵のゾンビを見て盛大に悲鳴をあげるアーシア。

「くっ………」

射撃が苦手なのか、悪戦苦闘する槐。

「なんか、新鮮だな、こういうのを見ると」

「そうだな」

「うん」

そんな二人の光景を眺めて微笑む俺とイツセーと千秋。

次のゲームをやろうと、廻っていると、アーシアがクレーンゲームの前に張り付いていた。中の景品を見てみると、人気キャラクターのラッチューくんの人形があった。ネズミがもとのかわいいマスコットキャラで、日本発ながら世界中で人気がある。

「ラッチューくん、好きなの？」

「えっ!? あの時……その……はい……」

イツセーの問いにアーシアは恥ずかしそうに頷いた。

「よし、俺が取ってやるよ!」

「えっ!? で、でも……」

「いいから、いいから」

そう言い、イツセーはコインを投入した。

「こう見えても、帰宅部のころは松田と元浜、明日夏と千秋で近所のゲーセンを駆け抜けたものさし！」

「わああ！」

見事、イツセーは一発ゲットでゲットした。

「ほら、アーシア」

「ありがとうございます！ このラッチューくんはイツセーさんたちとの出会いが生んだ宝物です！」

相変わらず大袈裟だな。

「ええい！ この！」

格ゲーでも悪戦苦闘している槐。

槐が使用しているキャラは、刀を武器にしてるキャラだった。自分も日本刀を扱うから刀を扱うキャラにしたのだろう。

「……でも、そのキャラ確か、コンボが繋げにくくて、かなり玄人向けキャラだったような。」

当然、初心者 of 槐に使いこなせるはずもなく、あっさりとCPUのキャラに負けた。

「ぐううう……」

「ま、初心者なんだから、そう気を落とすな」

「よし、次はあつちに行こうぜ!」

「はい!」

その後も、俺たちはいろいろなゲームをやりこんだのだった。



次にやって来たのは、ボーリング場だった。

「あのー、ボーリングってなんですか？」

イツセーが取ったラッチューくんのぬいぐるみを抱き締めながら、アーシアが首を傾げながら聞いてきた。

「ま、口で言うよりも、見たほうが早いな」

俺は手頃な重さのボールを持って構える。

「ふッ！」

勢いよく転がしながら投げられたボールは、真っ直ぐピンのもとに向かい、すべてのピンを薙ぎ倒していった。

『ストライク！』

戦績表にストライクの文字が映し出されたのを見たあと、アーシアのほうに向き直り言う。

「こうしてボールを投げて、ピンを倒し、倒したピンの数を競うスポーツだ」

その後、俺たちはボーリングで競いあった。

ただ、アーシアは運動神経がお世辞にもよくなかったため、ガーターを連発してしまい、槐は槐で変な回転をかけてしまったのか、これまたガーターを連発してしまい、二人の得点は0点となってしまい、結局、俺とイツセーと千秋の三人の対決という形になってしまった。

その結果、アーシアと槐は目に見えて落ち込んでしまっていた。
ちなみに勝負の結果は僅差で俺の勝利で終わった。

「ねーねー、カーノジョ♪」

二人組の若い男性が落ち込んでいたアーシアと槐に話しかけてきた。
二人とも、髪を染め、ピアスをして、派手な服装をしていた。

「もしよかったらあ、俺たちがボーリングのやり方を教えてあげようかあ？」
「ていうか、こっちの金髪の子、チョーかわいくね！」

やれやれ、ナンパか。

それを見たイツセーが四人の間に割り込む。

「おい、アーシアに手を出してんじゃねえぞ！」

イツセーが来たことで、困っている様子だったアーシアがイツセーの後ろに恥ずかしそうに隠れる。

「なんだ、このガキ！ 邪魔すんな！」

「そうそう、そんな冴えない奴なんかというよりも、俺たちといたほうが何万倍も楽しいぜ♪」

「そうだぜ。俺たちに教われれば、メキメキと上達するぜ♪」

男たちはアーシアと槐に言うが、アーシアはますます困惑するだけであり、槐は目に見えて嫌悪感を丸出しにしていた。

「結構だ。貴様らのような下心しかない軽薄な男に教授してもらいたいことなどいっさいない」

槐は淡々と告げた。

それでも、男たちは引き下がらない。

「そう言わずにさあ♪」

一人が槐に、一人がイツセーを押し退けようと手を伸ばす。
その手を俺は掴む。

「な、なんだ、てめえ!？」

「ツレが困ってるんだ。店側にも迷惑だし、とつとと失せろ」

そう言いつつ、男たちの手首を捻ってやる。

「いてててててててててつ!?!」

手首を捻られた男たちが悲鳴をあげ、しばらくしてから俺は男たちの手をはなしてやった。

「お、覚えてろ!?!」

「ちくしょお!?!」

捻られた手首を押さえながら、男たちは一目散に逃げ出していった。

「やれやれ」

「あのお、すみません。私たちのせいで……」

「アーシアたちのせいじゃねえから、気にするな。それよりも、気分転換するために、別のところに行くか?」

俺の提案に皆賛成し、俺たちはボーリング場をあとにした。



「あー、流石に遊びすぎた……」

「そうだな……」

あのあと、俺たちはカラオケに行き、時間が許す限り歌いまくった。

……一日中遊び倒して、すっかりクタクタになってしまった。

「でも、とても楽しかったです。こんなに楽しかったのは、生まれて初めてです!」

アーシアはラッチュークんのぬいぐるみを愛おしそうに抱き締めながら、目尻に涙まですて浮かべて笑顔で言った。

ま、アーシアのこの笑顔を見るためと思えば、心地のいい疲れか。

「私もとても楽しかったぞ。こうして友人たちとあのような施設に赴くことがこんなに

楽しいとはな。これなら、少し苦勞して遊ぶために遠出してみるのも悪くないかもしれないな」

槐も大變満足そうだった。

「それじゃ、私はここで。送っていただいて、ありがとうございます」
「ここでいいのか？」

イツセーがアーシアに訊いた。

なんせ、俺たちがいまいるのは、駒王学園の門の前なのだからだ。

「はい。いま、私は旧校舎に住んでまして。部長さんが私の入居先を用意するまでのあいだということだ」

なるほどな。

「アーシア。また遊ぼうな！」

「はいー!」

「私は明日にはこの町を去ってしまうが、機会があればまた。今度は私の学友も連れて
こよう」

そこで、俺たちはアーシアと別れた。

「さて、俺たちも帰るか」

「ああ、そうだな」

「うん」

「うむ」

帰り道、なんてことのないことを話していると――。

「あ、土騎くんに兵藤くん」

ばったりと霧崎と会った。

手には買い物袋を持っているので、買い出しの帰りなのだろう。

「明日夏、彼女は？」

「ああ、彼女は霧崎美優。俺とイツセーのクラスメイトだ」

「そうか。はじめまして、夜刀神槐という」

「あ、うん、はじめまして、夜刀神さん」

槐と霧崎が軽く挨拶をすると、霧崎が訊いてくる。

「士騎くん。もしかして、夜刀神さんって、士騎くんの彼女さん？」

「違う」

「……見事に息の合った即否定だね」

俺たちのあまりに息の合った即答ぶりに霧崎が苦笑していた。

「それよりも、こんな時間まで何してたの？」

「ああ、最近ダチになった子と一日中遊び倒してたんだ」

「子、ってことは、女の子？」

「ん、まあな」

俺と霧崎のやり取りを見ていた槐がふと訊いてくる。

「仲がいいんだな？」

「ん、ああ、家事好き同士で気が合ってるな」

「うん。学校でもよく意見交換するし、お買い物してるときにもよく会うんだよね」
「なるほど」

そんな感じで、他愛のない話をしながら、途中まで霧崎と一緒に帰った。

その際、槐と霧崎は気が合ったのか、すっかり仲よくなり、ケータイの番号やメールアドレスの交換をしていた。

こうして、俺たちの楽しい休日が終わった。



「こんな朝早くから行くのか」

「ああ、あまり長居しているわけにはいかないからな」

早朝、俺はこの町から去ろうとする槐を見送っていった。

「レンや桜花さん、竜胆さんによろしくな」

「ああ」

いま俺が口にした名前のヒトたちは槐の兄貴と姉貴たちのことだ。

むろん、三人とも槐と同じ賞金稼ぎパウンティハンターで、兄貴と竜胆さんは親友でもある。

「次に会うのはいつになるだろうな？」

「さあな」

住んでる場所がかなり離れているから、そう頻繁に会えるわけじゃないからな。

「ま、電話なんかでいつでも話しはできるけどな」

イツセーとも昨日の会合で仲良くなつて、番号とメアドを交換してたしな。

「おまえと千秋がハンターになった暁には、頻繁に会うことになるかもしれないな」
「まだまだ先の話だけだな」

「なに、おまえたちなら、すぐに上位ランカーになれるだろう」
「そうかねえ」

ま、上位ランカーのこいつが言うなら、そうかもしれないか。

「では、そろそろ行くぞ。昨日は本当に楽しかったぞ」

「ああ。また、機会があれば、皆で遊ぼうぜ。今度は部活の仲間も加えてな」
「ああ、そのときが来るのを楽しみにしているぞ」

俺たちは軽く握手し、槐はこの町から去っていった。

第2章 戦闘校舎のフェニックス

Life. 1 悪魔、やっています！

チャリン。チャリン。

早朝、走り込みをしていた俺の耳に自転車のベルの音が入ってきた。

「ほら、だらしなく走らないの」

「は、はい………！！ ハーレム王に俺はなる………！！」

俺の少し後ろには、息を切らせながら走るイツセーがおり、そのイツセーに、チャリンに乗った部長が気合を入れていた。

イツセーに「鍛えてくれ！」と言われてから、俺はイツセーに合わせたメニューを作り、イツセーは体力向上に励んでいた。

アーシアの一件以来、己の弱さを痛感したイツセーは、強くなるため、さらに特訓に取り組むようになった。

そこへ部長もイツセーを鍛えると言い出してきたので、現在のような状態になった。

「ゼーはーゼーはー……悪魔って、意外に体育会系……」

「ぼやかない。私の下僕が弱いなんて許されないわ」

「……が、がんばります……!」

ただ、部長は俺以上にスパルタらしく、イツセーは早くも虫の息だ。

そもそも、現在の時刻は朝五時前、特に鍛えていなかったイツセーにとっては、キツいものがあり、悪魔としての特性でさらに拍車をかけていた。

それでも、最初の頃に比べればだいぶよくなっている。

で、もともと、早朝特訓を日課にしていた俺と千秋もついでに付き合っていた。

そんな感じで、俺たちは二十キロ近く走り込むのだった。



「いい。悪魔の世界は圧倒的に腕力がものを言うの。イツセー。あなたの場合はとくにね」

「は、はい……!」

ゴールである公園に着き、ダッシュを百近くやった俺たちは、今度は筋トレに取り組んでいた。

「……………ぐつ……………ぐう……………」

部長に背中を押されて前屈をやっているイツセーはかなりキツそうだった。

かくいう俺は、それなりに体が柔らかいので、問題なかった——のだが、そろそろキツくなってきた。

「……………千秋……………気持ちには察するが、いまそれを行動に表さないでくれ……………」

俺は千秋に背中を押してもらっているのだが、その千秋が不機嫌になっているのだ。それが行動に表れて押す力が強まり、限界を超えて背中を押されてしまって、体が悲鳴をあげていた。

なぜ不機嫌なのかというと、イツセーがさつきから、背中を押している部長の胸が背

中に当たるといやらしくそうに反応するからだ。

「…….…….そんなにいやなら、おまえが押すのを変わればいいだろ…….…….」

俺がそう言うと、千秋は顔を赤くしながら、首を横に勢いよく振る。

イツセーと体が密着するのが恥ずかしい——からではない。そのぐらいのスキンシップなら、千秋も流石に大丈夫だ。

千秋が気にしているのは別のことで、それは汗の臭いだ。——イツセーではなく、自分の。

だから、千秋はいつも、以前までは早朝特訓を終えると同時に長い時間をかけてシャワーを浴びるようにしていた。

イツセーの早朝特訓に付き合うようになってからも、なるべくイツセーから距離を置くようにしていた。

「さて、次は腕立て伏せね」

「は、はいいいい…….…….」

前屈が終わり、ヘトヘトなイツセーに俺はある提案をする。

「なあ、イツセー。千秋の前屈を手伝ってやってくれないか？」

「ちよつ、明日夏兄っ!？」

「ああ、いいけど」

「ええっ!？」

俺の提案に千秋は顔を真っ赤にして慌て始め、イツセーが特に気にすることなく了承すると、さらに慌てふためく。

「どうしたんだ、千秋……あつ、そつか。いま俺、結構汗かいてたから、汗臭いかもしれないもんな……」

千秋の反応から、イツセーが自分の体臭を気にしだすと、千秋は慌てて否定する。

「だ、大丈夫だよ！ そんなの全然気にしないから！」

「そ、そうか……?」

「こいつもこう言ってるんだから、おまえも気にするな」

ということ、イツセーが押す形で千秋は前屈を始める。

そして終始、千秋は自身の汗の臭いを気にして、顔を真っ赤にしていた。その光景を眺めながら腕立てをする俺に部長が言う。

「あんまり妹をいじめるものじゃないわよ」

ちよつとした仕返しですよ。



「いいこと? あなたの能力は基礎体力が高ければ高いほど意味があるのよ」

そう言う部長は、腕立て伏せに臨む俺の背中に容赦なく座っていた。

マラソンやダッシュでヘトヘトであった俺は、正直言うと、腕が悲鳴をあげていた。でも——背中から伝わる部長のお尻の感触が最高だ!

それにきつき、千秋の前屈の手伝いで背中を押しするとき、チラツと千秋のうなじが目に入ったんだ。少し汗で濡れていて、なかなかの色香を放っていたので、思わず凝視してしまった。

べしっ！

「あうっ!？」

突然、部長にお尻を叩かれてしまい、その場に突っ伏してしまう。

「邪念が入っているわ。腰の動きがやらしいわよ」

「・・・・・・・・そんな・・・・・・・・この状況では、俺に潜むお馬さん根性がMAXになりますよ・・・・・・・・」

ふと、部長が何かを探して周囲をキョロキョロと見渡す。

「そろそろ来る頃なんだけど・・・・・・・・」

「へ? 誰か来るんですか?」

「すみませーん」

聞き覚えのある声が聞こえ、そちらを見ると、バスケットを抱えたアーシアが走ってきていた。

「イツセーさーん、皆さーん! 遅れてしまつて、本当に——あうっ!」

アーシアは、初めて会ったときと同じように、盛大に転んでしまった。

「……大丈夫かよ?」

すでにノルマを終えていた明日夏が、苦笑いを浮かべながらアーシアに駆け寄つて、手を差し出す。

「うううう……なんで転んでしまうんでしょうか」

・ ・ ・

そう嘆きながら、明日夏に手を引かれて立ち上がるアーシアの姿に、俺たちも苦笑いを浮かべてしまうのだった。



「どうぞ」

「ああ、どうも」

ベンチに座りながら、アーシアが持ってきてくれたお茶をもらって一息つく。

「アーシア、どうしてここに？」

「部長さんに来るように、と」

「え？ 部長、どうしてアーシアを？」

アーシアのことで部長に声をかけるけど、部長はなぜかあさつての方向を眺めながら、何かを考え込んでいる様子で、俺の声に気づいていなかった。

「部長?」

「えっ? あっ、ええ」

もう一度声をかけると、ようやく部長が反応した。

「どうしたんです、部長?」

気になって訊いてみるけど、部長は「なんでもない」と言うだけだった。

「それじゃあ、アーシアと一緒に行きましょうか」

「どこへ?」

「イツセーのお家よ」

へ? なんで俺の家へ?

わけもわからず、俺たちは特訓を切り上げ、俺の家へ向かうのだった。



「こ、これは一体……?」

「……段ボール箱だな」

イツセーの家に着いた俺たちの視界に入ったのは、積み重ねられた段ボール箱だった。

「……私の私物です」

「えっ!」

アーシアの一言に反応するイツセーと千秋。

俺はすぐさま、どういふことなのかをだいたい察した。

「……意外に多くなってしまって……」

「アーシアのつて!! 部長!」

「そうよ。今日からアーシアはあなたの家に住むの」

「はいいいっ!」

「ええええつ!?!」

驚くイッセーと千秋をよそに、アーシアはイッセーに頭を下げた。

「よろしくお願いします」



兵藤家のリビングにて、おじさんとおばさん——イッセーの両親と対面する部長。その両隣には、アーシアとイッセーがいる。

俗に言う、家族会議が行われようとしていた。

ちなみに俺と千秋は少し離れた場所で、目の前で繰り広げられる家族会議を見守っていた。

緊張した空気のなか、おじさんが口を開く。

「ア、アア、アーシアちゃ……アーシアさんだったね?」

「はい、お父さま」

「ホホ、ホームステイをするにしても、うちより、他の家のほうがいいんじゃないかねえ……?」

話をまとめると、アーシアはいままで旧校舎の一室で寝泊まりしていたのだが、流石にそのままなのもアレなので、部長がアーシアにどこかに下宿したいかと尋ねた結果、アーシアはイツセーのところへの下宿を希望し、部長がそのことで、いまおじさんとおばさんと交渉しているわけだ。

「イツセーさんは、私の恩人なんです」

「恩人?」

「はい。海外から一人でやってきて、一番お世話になった方なんです。そんなイツセーさんのお宅なら、私も安心して暮らせると。……でも、ご迷惑なら、諦めます……」
「ああつ! ダメって言うてるわけじゃないのよ!?! 部屋も空きがないわけじゃないし。……ただあ……」

おじさんとおばさんの視線が、イツセーへと向けられる。

「うちには、性欲の権化とでもいうような息子がいるからなあ……」
「そうそう!」

「なあっ!? 息子に向かってなんて言い草だ!」

実の両親からのあんまりな言い分に、イツセーが声を荒らげる。

まあ、実際、イツセーのようなスケベな男がいる家に、年頃の女の子をホームステイさせるのは、間違いが起きるかもしれないという危惧するのは当然ではある。

けどまあ、大丈夫だとは思うがな。流石のイツセーも、そこまでじゃない。もし、イツセーがそんな奴だったら、いまごろ、千秋とそうなってるはずだからな。

「では、今回のホームステイは、花嫁修業もかねて、というのはどうでしょうか?」

「「は、花嫁!」」

部長が口にした「花嫁」という単語に、俺とアーシア以外の全員が反応する。すると、途端におじさんとおばさんが涙を流しながら手を取り合う。

「か、母さん、こんな息子だから、一生孫の顔なんて拝めないと思っていたよ!」

「父さん、私もよ！　こんなダメ息子によくもまあ！」

すごい言われようだな。

仮にイツセーと千秋が結ばれたときも、こんな反応をされたんだろうか？

「お父さま、お母さま。イツセーさんはダメな方ではありません」

「——ッ!？」

感無量になっている二人に、アーシアは最後のトドメを加えた。

「な、なんていい子なんでしょう！」

「あ、ああ！　リアスさん、アーシアさんをお預かりします！　いえ、預からせてくださ
いいい!？」

「ありがとうございます。お父さま、お母さま」

ということ、アーシアの兵藤宅へのホームステイが決まったのであった。

ふと、隣にいる千秋を見る。

「.....」

なんか、真っ白になって固まっていた。

「ま、随分と差をつけられはしたが、まだ、チャンスはあるはずだ.....たぶん」

曖昧なフォローをしたら、怒って肘打ちを打ち込まれる。

打ち込まれた肘打ちを避け、いまだに困惑しているイツセーを連れて、アーシアの荷物の取り入れに取りかかるのだった。



「アーシア・アルジエントと申します。慣れないことも多いですが、よろしく願いします」

兵藤家へのアーシアのホームステイが決まった次は、アーシアが俺たちのクラスに転

入してきた。

『おおおおおおおおおつ!』

「金髪美少女ツ!」

「B^{バスト}82、W^{ウエスト}55、H^{ヒップ}81! グツツツド!」

『グツツツツド……!』

アーシアが自己紹介を終えるなり、俺とイツセー以外の男子たちが一斉に叫び声をあげた。

当然、松田と元浜も興奮していた。

女子たちも、男子たちほどではないが、アーシアに興味津々な様子だった。

「私はいま、兵藤一誠さんのお宅にホームステイしています」
『何っ!?!』

アーシアの言葉を聞き、男子たちが一斉にイツセーのほうを睨む。

これはイツセーの奴、あとで尋問まがいの問い詰めを受けそうだな。

「えー、実はもう一人転校生がいるのですが、本人の都合で明日、このクラスに転入することになります」

そんななか、担任の先生がそんな追加事項を告げた。
もう一人？

「先生、女子ですか!？」

男子の誰かが訊く。

「はい、女子です」

『おおっ!』

そのことに、男子たちは歓喜の声をあげた。



で、ホームルームが終わると、案の定、イツセーは松田と元浜を中心に男子たちに問い詰められていた。

元浜が羽交い締めにし、松田が締め上げながらイツセーを問い詰める。

「どういうことだっ!?　なんで金髪美少女とおまえがひとつ屋根の下につ!?!」

「なぜ貴様の鼻筋ばかりに、フラグが建つような状況がつ!?!」

「俺が決めたんじゃねえし!」

「じゃあ、誰が決めたんだよ!?!」

『そうだそうだ!』

他の男子たちも、いまにもイツセーに掴みかかりそうな勢いだった。

「落ち着けよ、おまえら。誰が誰の家に下宿しようが、それは当事者たちの勝手だろうが」

俺がそう言っても、男子たち——とくに松田と元浜は、怒りの矛を収めない。

「そんなことで納得できるか!？」

「そうだ!　なんであんな金髪美少女がイツセーなんかのところに!？」

それはアーシアがイツセーに想いを寄せてるからだ——なんて正直に言ったら、怒りで我を忘れて、弾みでイツセーを殺りかねないな。

まあ、本人のプライバシーもかねて言わないがな。

松田と元浜の怒声に、他の男子たちもヒートアップする。

「そうだそうだ!」

「あんな奴のところでもいいのなら、俺のところでもいいだろうが!」

「そうだ!　あんな奴でもいいのなら、俺でも!」

これは、治まりそうにねえな……。

それとおまえら、そこで都合よく「イツセーでも」なんて言ってるが、「イツセーだから」って考えつかないもんかねえ。……無理か。

件のアーシアは、女子たちに囲まれて質問を受けていた。

中には――。

「ねえねえ、アーシアさんの部屋って鍵付いてる？」

「はい」

「お風呂やトイレは嚴重にチェックするのよ」

「チェックですか？」

「そうそう。カメラとか仕掛けられてるかもしれないから」

「カメラ？」

なんて注意を促している者もいた。

イツセーも流石にそこまでしねえよ――といっても、日頃の行いでそう思われても仕方ねえか。

「クツソー！ 明日来る転校生は、イツセーとはなんの関係もありませんように！ ありませんように!?!」

松田がそんなことを祈り始めた。

そんな松田に元浜が言う。

「まあ、流石にそれはないだろう。これ以上、イツセーの周りに美少女が増えることはあるまい。だが、それはさておき、あの金髪美少女とひとつ屋根の下になったことについて、詳しく話してもらおうか!？」

この問い詰めは、休み時間にも行われ、結局、イツセーが解放されたのは、オカ研に向かう放課後になってからだだった。



今日の部活で、俺は木場に今日あった出来事を話した。

あのあと、男子たちによる問い詰めは、次第に学年全体にまで広がり、ついには俺にまで矛先が向けられた。

それを聞いて、木場は苦笑しながら言う。

「随分と大変だったみたいだね？」

まったくだ。おかげで、休まる時間さえ全然なかった。

その件のイツセーとアーシアはいま、外出している。

イツセーのときもやったチラシ配りを新人眷属であるアーシアもやることになり、イツセーはその手伝いで、自転車に乗れないアーシアのために、自分が運転を担当して後ろにアーシアを乗せているわけだ。

ふと、隣を見してみると、千秋が気が気じゃないといった様子で落ち着きがなかった。

墮天使たちがいなくなり、イツセーの身にもう危険はないだろうってことで、千秋の護衛は解任になったんだが、それでも、千秋は護衛を続けようとした——まあ、気になっているのは別のことなんだが。

「ただいま戻りました！」

イツセーとアーシアが、チラシ配りを終えて戻ってきた。

「やあ、お帰り。夜のデートはどうだった？」

木場が出迎えて、冗談めかしくイツセーに訊いた。

「最高だったに決まってるだろ!」

親指を立てて答えるイツセーを見て、千秋はうなだれてしまう。

「……深夜の不純異性交遊」

塔城の厳しい一言に苦笑しながら、イツセーは部長のもとへ足を向ける。

「部長。ただいま帰還しました」

イツセーは部長に帰還報告をするが、部長はポーっとしているのか反応がない。

「あのお、部長?」

「——ッ!? ごめんなさい、少しポーっとしてたわ。二人ともご苦労様」

またか……。

ここ最近、部長がいまみたいにボーっとしていることが多い。

何か悩みでもあるのだろうか？

そんなことを考えていると、部長がアーシアに言う。

「アーシア」

「はい」

「今夜はアーシアにデビューしてもらおうと思っているの」

へえ、もうか。随分早いな。

「デビュー？」

きよとんとしているアーシアにイツセーが説明する。

「魔方阵から契約者のもとへジャンプして、契約してくるんだ——つて、だいぶ早くないっすか!? アーシアはまだ悪魔になって数日しか経ってないのに」

「大丈夫ですわ。私が調べたかぎり、アーシアちゃんは眷属悪魔としては私に次ぐ魔力の持ち主ですもの」

「なっ!?! マジで!?!」

副部長の言葉にイツセーは驚く。

確かに、アーシアのあの回復能力の高さはなかなかのものだった。魔力の高さも領けるものだった。

アーシアは能力も含めて、『僧侶^{ベシヨッフ}』向きだったようだ。

「『僧侶^{ベシヨッフ}』としての器が存分に活かせるわね」

「スゴいじゃないか、アーシアさん!」

「そ、そんな!」

アーシアの能力の高さに、皆、アーシアを賞賛する。

イツセーも誇らしげだったが、若干、複雑そうな顔をしていた。

アーシアが優秀なのは素直に嬉しいが、先輩悪魔として複雑といった心境なんだろう。

「どうしたの、アーシア？」

「い、いえ。なんでもありません」

だが、アーシアは自信がないのか、不安そうな顔をしていた。

「………仰せつかったからには——」

「部長！」

「何？」

アーシアの言葉を遮り、イツセーは部長に言う。

「今回は俺に行かせてください！」

「イ、イツセーさん？」

「ほら、アーシアはこの国に来て日が浅いだろう？　もう少し生活に慣れてからのほうがいいんじゃないかな？」

確かにそうかもな。

アーシアは日本の生活に慣れてないうえに、教会出身で現代知識に欠けてるところがある。もう少し、自信が出るようになってからのほうがいいのかもしれない。

過保護かもしれないが、自信がないうちに、もし失敗でもしたら、ますます自信を持たなくなってしまうそうだからな。

まあ、イツセーが心配してるのは別のことだろうがな。

「そうね。あまり急過ぎるのもあれだし。わかったわ。イツセーに任せるわ」
「はい、部長！」

部長に言われ、イツセーは気合いを入れ、部室から飛び出していった。

Life. 2 転校生は幼馴染みでした！

アジアに代わって契約を取りに行ったイツセーだったが、結果は契約を取れなかった。

ちなみに依頼主がどういう人物だったかをイツセーから聞いたんだが、『ミルたん』という名の魔法少女の格好をした筋骨隆々の巨漢というすさまじく濃い人物だった。そして依頼内容は「魔法少女にしてほしい」だという。……いろいろな言いたいことはあるが、気にしないでおこう。

当然、イツセーに叶えられる願いではないため、契約は取れず、魔法少女のアニメの全話マラソンをして終わったらしい。

ま、この話はもういいだろう。

現在、教室で朝のホームルームが始まる直前。クラス全体がそわそわしていた。

理由は昨日、担任から告げられたもう一人の転校生のことだ。

そして、その転校生が女子だということもあって、男子たちはいまかいまかと待ち遠しそうにしていた。

「えー、昨日も言った通り、今日もこのクラスに転校生が来ます」

先生の言葉に男子たちはさらにテンションを上げる。

「じゃあ、入ってきて」

先生に促され、一人の少女が教室に入ってきた。

身長が高めで、珍しい青毛の長髪の少女。どこかのんびりそうな雰囲気を放っていた。

『おおおおおおおッ!』

少女を見た男子たちは歓喜の声を湧きあがらせる。

少女は黒板に自分の名前を書き、自己紹介を始める。

「かぜまつぐみ風間 鶴つぐみです。皆、よろしくね」

のんびりとした口調で言う少女——風間鶯。

少女を見てから啞然として硬直していた俺はさらに驚愕する。

見ると、イツセーも同じ反応をしていた。

少女はイツセーを視界に捉えると、パアアアツと目を見開いて嬉しそうな表情を作る
と——。

「イツセーく〜ん！ ひさしぶり〜！」

少女はイツセーのもとに駆け寄り、イツセーに抱きついた。

それを見て、周りの生徒たち、特に男子たちは驚愕の叫びをあげ、俺はこれから来るであろう質問責めを想像して、ため息を吐くのだった。

この少女——風間鶯は、実は俺たちの幼馴染みなのであった。



「どおおおういうことだああああっ!? イツセエエツッ！」

ホームルーム終了後、松田と元浜が血の涙を流さんばかりの勢いでまくし立てながらイツセーに詰め寄る。

「ああ、いや、これは——むぐっ!？」

「わっ! イツセーくっ!」

答えようとしたイツセーだったが、鵜によつて再び抱き締められたため、胸に顔を埋められてしまう。

それを見て、松田と元浜が再び叫び声があげ、周りの男子たちはイツセーに殺気まがいの視線を送る。

「はうううっ! 明日夏さん! これは一体!？」

アジアはアジアで、涙目で俺に問い詰めてきた。

「鵜。そろそろイツセーをはなしてやれ」

俺は鵜にそう促すと、ようやく俺に気づいたのか、鵜が話しかけてくる。

「あゝ！ ひさしぶり、明日夏くゝん！」

「ああ、ひさしぶりだな。そしていい加減はなしてやれ。苦しがつてるぞ」

胸に顔を押しつけられてしまっているので、イツセーは呼吸がしにくいのか、苦しそうだった。

「あゝッ！ ゴメン、イツセーくん!？」

俺に指摘されてようやく気づいた鵜は慌ててイツセーをはなす。

「ああ、大丈夫だよ、鵜さん。…………むしろ、あれで死んだとしても本望だったというか……………」

ぼそりとしたことつぶやくイツセーに呆れながら、俺は鵜に訊く。

「まさか転校生がおまえだとはな。おまえがいるってことは——」

「うん。燕つばめちゃんも来てるよ〜」

燕—— 鵜の妹の風間燕のことだ。

「おーい、イツセー?」

「そろそろ説明してほしいのだが?」

不気味な笑顔で訊いてくる松田と元浜。 目が全然笑ってないし、殺気が
ダダ漏れだった。

「えーつと、この子、鵜さんと俺たちは幼馴染みなんだよ」

そう言った瞬間、松田と元浜から、周りの男子たちから一斉にさつきまで以上の殺気
がイツセーに向けられる。

それを感じ取ったのか、イツセーは一瞬だけビクツと震え上がる。

「イツセーくん」

「ちよつとお話しようか」

「いや、怖えよ!?!」

松田と元浜のあまりに不気味な誘いに、イツセーは即座に断る。

だが、松田と元浜・・・というか、クラスの男子全員が有無を言わせず、イツセーに詰め寄る。

それを見て、イツセーは身の危険を感じ取り、一目散に逃げ出した。

「待てゴラアアアツ!」

松田と元浜も逃がすまいとイツセーを追いかける。

「イツセーくんたち、どうしたんだろ?」

この事態の原因の一端である鶴は、そんなこともわからず、首をかしげていた。



「つ、疲れた……」

放課後、オカ研の部室で俺は机に突っ伏していた。

あのあと、アーシアのときと同様、いや、アーシアの件があつたからこそ余計に休み時間のすべてをクラスの男子たちに追いかけて回され、鶴さんのことで問い詰められたもんだから、もうクタクタだよ。

結局、一年に転入したという燕ちゃんに会いに行けなかったし……まあ、行けたら行けたで、さらに追いかけて回されたかもしれないが……。

「大変だったみたいね？」

部長が苦笑いしながら言った。

まったくですよ。ここは、鶴さんに抱き締められたときに顔に感じた鶴さんのおっぱいの感触でも思い出そう！

鶴さんのおっぱい、柔らかかったなあ……危うく窒息しかけたけど、おっぱいで死ぬるなら本望——いやいや、やっぱり、エッチなことをしないと死ぬない！

「……イッサー先輩、顔がいやらしいですよ」

あううう。小猫ちゃんの容赦のないツツコミ。

それにしても——。

「二人が帰ってきたのは驚いたよな」

「そうだな」

「でも——」

大丈夫なのか、と続けようとすると明日夏が言う。

「おまえの心配はもつともだ。だが、二人のあの噂をあれ以来聞いたことあるか？」

うーん、そう言われてみればそうだけど。

「噂?」

俺たちの会話を聞いていた木場が訊いてくるけど、途端に俺たちは苦虫を噛み潰したような複雑な表情を作ってしまう。

それを見た木場は慌てて謝る。

「ゴメン! あんまり触れてほしくないことみたいだね……」

「ああ……」

「まあな……」

鶴さんと燕ちゃんと出会ったのは、俺たちが小学生になってから二年ちよつとぐらい経った頃かな。

実は当時、二人は周りから酷いいじめを受けていたんだ。

原因は二人の母親。どうにも、男遊びが激しいヒトだったみたいで、それを怒った二人の父親がそのヒトと離婚したんだけど、さらに父親は二人のことをそんなヒトから産まれたからって理由で勘当してしまったんだ。

そして、そんな母親の悪評やよくない噂が広まっていて、そのせいで二人は周りからいじめられていたんだ。

当時の二人といったら、本当に酷い状態だった。

鶴さんは人間不信になっちゃってたし、燕ちゃんも感情というものをなくしたような状態だった。

でまあ、いろいろあって、二人とは仲良くなつて、だけど、いじめは酷さを増すっぽうだったため、二人はこの街から去ってしまったということだ。

「・・・・・・・・酷い話ね」

二人の説明を聞いて、部長がそうつぶやく。部室内の雰囲気も暗くなりつつあった。

コンコン。

すると唐突に部室のドアをノックされた。

「はーい」

部長が返事をして、入るように促す。

「こんにちは〜」

「……………」

入ってきたのは、さつきまで話題になっていた鶴さん！そして、鶴さんの隣に一人の少女がいた。

小柄な体型で、赤毛の髪をツインテールにしたキツそうな雰囲気を持つ少女——鶴さんの妹の風間燕ちゃんだった。

—○●○—

突然来訪してきた鶴と燕の風間姉妹。

「ひさしぶりね。イッセー、明日夏」

俺たちを視界に捉えた燕が話しかけてくる。

「ああ。ひさしぶりだな、燕」

「ひさしぶり、燕ちゃん。ゴメン、せっかく帰ってきたのに、挨拶に行けなくて」「いいわよ。なんか大変そうだったみたいだし」

そんなふうにはイツセーと燕が話していると、部長が尋ねる。

「イツセーたちに会うためにわざわざ来たのかしら？」

「それもあるけど、せっかくだからイツセーくんたちと同じ部活に入ろうかなって」

まあ、二人が来る理由なんて、それぐらいしかないだろうからな。

なぜなら、二人は千秋やアーシアと同様にイツセーに想いを寄せているからな。

「……あたしは別にいいんだけどね」

そんなふうには素っ気なく言う燕に俺は言う。

「相変わらず素直じゃねえな」

「素直」つてところをあえてわざと強調しながら言つてやると、燕は少し慌てた様子を見せる。

「相変わらずも何も、昔からあたしは本当のことしか言つてないわよ!」

「どうだかな」

「……何よその顔……」

「じゃあ、おまえだけ入部しないんだな?」

「ちよつ……別に入らないなんて……ハッ!」

「やつぱりおまえも入部したいんじゃないか」

「ち、違つ……!」

燕は最初のキツそうな雰囲気はもう見る影もなく、誰が見ても微笑ましい顔をしてしまうような雰囲気放つていた。

このように、燕はだいぶ素直じゃない性格をしている。特にイツセーのことになる

と、露骨になる。

「ああ、久々に見たなあ」なんて言っているイツセーに木場が訊く。

「・・・・・・・・・・イツセーくん。明日夏くんが妙にイキイキとしてるんだけど・・・・・・・・・・
？」

「・・・・・・・・・・以外と明日夏って、誰彼構わずってわけじゃないけど、人をいじったりするの好きだったりするんだよ」

別に好きってわけじゃないぞ。単なるストレス発散だ。燕はいじりやすいしな。

「・・・・・・・・・・ちよつと黒いです」

塔城にまでそう言われてしまう。

そんなやり取りをしている俺たちをよそに、部長が淡々と告げる。

「ゴメンなさいね。二人の入部は認められないわ」

自分たちの裏の事情から一般人である二人の入部を認められないということだ。

むろん、そう告げるわけにはいかないため、適当な別の理由を述べ、納得しなかつたら、悪魔の力で引き下からせようと考えているのだろう。

だが――。

「部長。二人はすでに部長たちが悪魔だということを知ってますよ」

「えっ!?!」

俺の言葉に部長は一瞬だけ呆気にとられるが、すぐに持ち直して俺に訊いてきた。

「明日夏。彼女たちは一体……?」

その問いに答えたのは燕だった。

「あたしたちの兄が、そこですましてる奴の兄や姉とご同業っていうだけの話よ」

「それはつまり、あなたたちのお兄さんは賞金稼ぎバンディバンターだということ?」

二人の兄——風間雲雀^{ひばり}。兄貴たちと同様に鶉と燕を養うために賞金稼ぎ^{バウンテイハンター}になつたヒトだ。兄貴と同年代のハンターで、兄貴の親友でもある。

そのため、兄貴と雲雀さんはよく組んで行動することもあり、この町に留まっている俺たちとは違い、兄貴は二人とたびたび交流していた。

部長たちやイツセーのことは当然兄貴たちに伝えていたので、部長たちのことは兄貴から伝わっているのだ。

むろん、二人のことも兄貴を通じて、近況はあらかじめ伝えられていた。

……二人が帰ってくることは聞かされていなかったがな。……おおかたサプライズでことなんでしょう。

そのことを部長たちに簡潔に説明する。

「……まさか雲雀さんが。じゃあ、俺のことも……?」

イツセーが自身を指さしながら二人に問う。

「うん。イツセーくんが悪魔になっちゃたことも知ってるよ」

「ここにいるグレモリー眷属の一員になつたこともね」

当然だろう。イツセーのことは最優先で伝えられているはずだからな。
……流石に一度死んだ事實は伏せられているだろうが。

「悪魔になったつて聞いたときは驚いたけど、だからどうつてわけじゃないけどね。
イツセーくんはイツセーくんだし。ね、燕ちゃん？」

振られた燕は頬を赤くしながらも頷いて返す。

「ありがとう、鷓さん、燕ちゃん」

「お礼なんていいよ。それにこれは、イツセーくんが私たちにしてくれたことだもん」
「イツセーがあなたたちに何をしたの？」

イツセーが二人にしたこと——それは、悪評を気にせず二人を受け入れたことだ。

当時、俺は二人と知り合うまえから二人のことを把握していた。……把握していないながら、俺は二人を見て見ぬふりをしていた。

その頃の俺は、俺と千秋を養うために稼ぎに出ている兄貴たちの代わりに千秋を守る

ためと、だいぶ切羽詰まった思考しており、千秋やイツセーにいらぬ被害を被らないようにとなるべく他人の問題には関わらないようにしていた。むろん、二人にもそのようにさせていた。

そのため、鵜と燕のことは気の毒に思いながらも、他人というそれらしい建前を作つて見捨てた。

そんななか、イツセーは偶然にも鵜と燕に出会う機会ができてしまった。だが、そのときにはすでに人間不信になっていた鵜はイツセーを拒絶し、感情をなくしていた燕は相手にもしなかつた。

それを知つた俺はイツセーに、もう関わるなと言ひ聞かせていたが、結局そのかいもなく、イツセーは二人がいじめられている場面を目撃し、二人を庇つた。

それから俺たちは二人と交流するようになり、鵜と燕は二人を受け入れたイツセーに心を開き、見捨てた見捨てられたの間柄であり、そのことに罪悪感を持っていた俺も、最初こそは溝もあつたがいまではすっかり仲良くなつてゐる。

俺たちと二人が幼馴染みになつた経緯はそういう感じだ。

その旨を鵜は部長たちに話した。

「そう。イツセーと出会えたことで、いまのあなたたちがあるのね」

「うん」

「………まあね」

部長の言葉に鶴は嬉しそうに頷き、燕も顔を赤らめながらも頷いた。
ちなみに、二人はそのときにイツセーに好意を寄せるようになったのだ。

「それにしても……雲雀さんが冬夜さんたちと同じ賞金稼ぎだったなんてな。二人が悪魔のことを知っていたのはそういうわけか」

「いや。三人はもつとまえから——俺たちと出会うまえからすでに異能、異形の存在は知っていたぞ」

「えっ!？」

俺の言葉に、イツセーは今日何度目かの驚愕を露にする。

「明日夏。それはつまり、彼女たちは異能力者、もしくは異能力関係の家系の者だということかしら?」

部長の問いに答えたのは燕だった。

「そんな大それたものじゃないわ。ただの異能、異形の存在を知っていた、忍びの一家つだけよ」

「えっ!?! 忍びつて、つまり忍者つてこと!?!」

イツセーの言う通り、忍び——つまり、忍者。三人は忍者の家系の出身なのだ。それも、異能、異形の存在を専門とした諜報や討伐を生業とした一族なのだ。

ふと部長を見ると——なんか瞳を爛々と輝かせていた。

「NINJAですつて! あなたたち、もつと詳しく話を聞かせてちょうだい!」

「わく!?!」

「ちよっ!?!」

酷く興奮しながら食いつく部長に鶴も燕も慌てだした。

俺は慣れた様子で苦笑している木場に訊く。

「……おい、木場。部長つてもしや……」

「うん。部長は昔の日本の文化、とくに侍や忍者なんかがとても好きなんだ」

やっぱりか。外国人によくある日本の文化の愛好家か部長は。

「あたしたちは勘当された身なんだから、家のことなんてそんなに詳しく知らないし、技術なんて、護身術程度にしかな身につけてないわよ！ ていうか、なんで外国のヒトはただの諜報員集団にここまで情熱を寄せるのよ!? イッセー！ あんた、なんとかしなさいよ!?! あんたの主でしょ!」

「イッセーく〜ん！ 助けて〜!?!」

「ええっ!?! 俺?!」

二人はイッセーに助けを求めるが、若干、いや、完全に暴走している部長を止めるには荷が重かった。

「明日夏も明日夏よ! N I N J Aの知り合いがいたのなら、なんで黙っていたのよ!?!」
「ちよつ、それ理不尽過ぎませんか?! おい、木場! 塔城でも副部長でもいいから、部

長を止めてくれっ!？」

こんな騒動もあつたが、なんとか部長を宥め、鶯と燕はオカ研へと入部することができた。

まあ、その後も鶯がイツセーに抱きついたりしたせいで、千秋とアーシアとで修羅場になりかけたり、その光景を見て悶々としている燕をいじつたりと、別の騒動が起こつたんだがな。

ちなみに、二人はイツセーの家に住むことになり、千秋はますます落ち込むのであつた。

L i f e . 3 生徒会と顔合わせします!

「ちくしょう! ありえねえっ!」

「これは何かの間違いだあああっ!」

教会みたいな場所でパイプオルガンの音が鳴り響くなか、礼服を着た松田と元浜が何やら泣き叫んでいた。

「はあ? 何言ってるんだ——って、何だこれえっ!」

見れば、俺も白いタキシードを身に着けていた。

「イツセーが結婚なんてっ!」

「これは何かの陰謀だあああ!」

け、結婚!?

あまりの衝撃に狼狽していると、礼服を着た明日夏が現れ、いまだに泣き叫ぶ二人を諫める。

「おまえら、いつまで言ってる気だ？ 現実を受け入れて、素直に祝福してやれよ。というわけでおめでどう、イツセー」

いや、おめでどうって、まだ状況を把握できてないんだけど!?
うちの両親がハンカチを顔に当てて、泣きながら言う。

「イツセー! 初孫は女の子だよ! ううう」

「.....ううう.....! 立派になってえ.....! 性欲だけが自慢のどうしようもない子だったのに.....!」

おいおいおい! こんなときでも言いたい放題だな! うちの両親は!
ていうか、やっぱりこれって結婚式!? 俺の!? じゃあ、相手は誰!?

「きよろきよろしてはダメよ。イツセー」

「ぶ、部長!」

気がつくと隣にはウエディングドレスを着た部長が。

『キヤー!』

「リアスさま! お綺麗ですう!」

「ああ、リアスお姉さま! どうしてあんな男と……!」

お、俺と部長が結婚!?

———そ、そうか。これは、俺と部長の結婚式! いつのまにかそんな展開になっていったんだ!?

まあ、憧れの部長と結婚できるんなら、なんも問題もねえよな!
しかし、結婚といえは子作り! 子作りといえは新婚初夜!

『いらっしやい、イツセー』

頭の中で、裸の部長がベッドの上で手招きしてくる!

部長とエツチできるツ！

その結論に至った俺の脳内はもうお祭り騒ぎとなっていた。

「それでは、誓いの口付けを」

いつのまにか神父つぽいおっさんがさつさと事を進めていた。

そうだ、そうですよ、そうだった！　まずはこれだ！

部長とキス！

部長はこつちを向いて目を瞑り、顔をこちらに向けて唇を差し出してくる！

いいのか!?　いいんだよね！　よし！　よーし！　部長の唇、いただきます！

俺は荒い鼻息を何度も出しながら、唇を突き出して徐々に徐々に部長のほうへ近づけ

『随分と盛り上がっているじゃないか、クソガキ』

俺の頭の中に謎の声が響いた。

低く、迫力のある声だ。

いまの声、どこかで………?

聞き覚えはない………はずなのに、なぜか俺はその声を、声の主を知っているような気がした。しかも身近にいるような………。

『そうだ。俺はおまえの中にいる』

いつのまにか、周りにいた部長や明日夏、松田と元浜、父さんと母さん、参列者の人たちがいなくなっていた。

人だけじゃない。周りの風景も、教会だった場所が真つ暗な空間になっていた。何もかもが闇に消えた中でなかひとときわ輝く赤い光があった。

「だ、誰だ!？」

『俺だ』

その言葉とともに真つ暗闇に飲まれた空間が、灼熱の炎によって照らし出され、目の前にそいつは現れた。

赤い光だったものはそいつの大きな目の瞳だった。

耳まで裂けた口には鋭い牙が何本も生えそろっている。

頭部には角が並び、全身を覆う鱗は灼熱のマグマのように真っ赤だ。

巨木のような腕、足には凶悪そうな鋭い爪。

そして大きく広げられた両翼。

そんな巨大な怪物、それが俺の目の前に現れた存在だった。

俺の知っているものの中で一番似ているとしたら——ドラゴン。

俺の考えていることがわかったのか、目の前の怪物——ドラゴンが口の端を吊り上げたように見えた。

『そうだ。その認識でいい。俺はおまえにずっと話しかけていた。だが、おまえが弱小すぎたせい、声が届かなかったただけだ。やっつとだ。やっつとこうしておまえの前に姿を現すことができた』

「何わけわかんねえこと言ってるんだ!？」

ずっと俺に話しかけていた？ 姿を現す？ 知らねえ。そんなの知らねえぞ！

いったい俺に何をしようってんだ!？」

『挨拶をしたかっただけだ。これから共に戦う相棒にな』

「相棒? おまえはいつたい・・・!!」

『おまえはもうわかつているはずだ。そうだろう? 相棒』

途端に左腕が疼きだす。

左腕に視線を移すと、俺の左腕が赤い鱗に包まれ、鋭い爪むき出しの異形なものなっていた。

「う、うあ、うあああああああああああ!!」



「——っ!」

目を開けると、そこは自室の天井だった。

上半身だけ起こし、左腕に視線を向ける。ごく普通の人間の形をした俺の腕だった。夢、だったのか?

それにしても妙にリアリティがあつたけど。でも、こうして俺の腕はなんともないから夢なんだろう。

「大丈夫、イツセーくん？」

俺の隣で横になっていた鵜さんが心配そうに声をかけてきた。

「うん、大丈夫だよ。ちよつと変な夢を見ちゃつて」

それを聞いて鵜さんは安心したような表情をする。

——つて、ん？ ていうか——。

「なんで鵜さんが俺のベッドに!？」

夢の内容が衝撃的だったせいなのか、素でスルーしてたけど、別室にいるはずの鵜さんが俺のベッドにいるのはおかしいだろ！

「ん〜。イツセーくんと一緒に寝たかったから〜」

な、なるほど。そんな眠気を誘う日本語があつたのか。

よくよく思い出すと、昔から鶴さんはよく俺もしくは燕ちゃんの布団に潜り込むことがあつたな。

ただ、当時といまでは鶴さんはいろいろなところが大きくなってたいへんグラマラスな体つきになってるわけで、しかも相当な美少女なわけでした。そんな美少女と一緒に寝たいなんて言われたら、興奮しないわけがない！

それに、いまの鶴さんの格好はシャツにパンツというラフな格好！ グラマーな体型もあつて、たいへんエロい！

シャツを押し上げる胸もそうだが、パンツから伸びる太ももなんかもたいへん眼福だった。

そんなふうには鶴さんの体をついついガン見していた俺の顔を、鶴さんが体を起こして覗き込んでくる。

や、やばい！ 流石にガン見しすぎたか！

「イツセーくん、スゴい汗だよ？」

「え？」

まったく予想外なことを言われ、思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

左手で額を拭ってみると、確かにすごい汗だった。よく見ると、全身からもすごい量の汗をかいていた。

これもあの夢のせいなのか？

「そのままだと寝苦しいんじゃない？」

うーん、確かにこのままじゃ、ちょっと寝苦しそうだな。一回シャワーでも浴びてさっぱりしようかな？

「シャワー浴びるなら一緒に浴びる？ 背中流してあげるよ」

な、なんだって………っ!? そ、そんな眠気が吹っ飛ぶような日本語があったのか！

「い、いいの……?」

「うん、いいよ〜」

マジか! マジで一緒にシャワー浴びるのか!?

「じゃあ、準備してくるから〜」

そうやって鶴さんは俺の部屋をあとにした。

これ、今夜はもう興奮して寝られないかもしれない。

でも最高の夜を過ごせそうだ! 変な夢もばんばんざいだぜ!



「ふわあああ……」

「ずいぶん眠そうだな?」

朝のホームルームのまえ、教室であくびをする俺に松田と元浜が尋ねてきた。

「ああ……おかしな夢を見て寝不足でさ」

まあ、本当は昨夜のことで興奮して眠れなかったからなんだが。

あのあと、本当に俺は鶴さん（鶴さんは燕ちゃんのこととも誘ったみたいだけど、顔を真っ赤にして断られたとのこと）と一緒にシャワーを浴びて、背中を流してもらったのだった。

そのときの鶴さんは当然全裸だったので、その裸体は頭に焼き付いていた。当然、脳内メモリーに名前をつけて保存しましたとも。

しかも、その後は一緒に寝ることになってしまい、そのまま鶴さんは俺を抱きしめて眠ってしまった。

ただ俺は、脳内に焼きついた鶴さんの裸体と抱きしめられた際に感じた女体（特に胸とか太もも）のやわらかさに興奮して、結局眠ることができなかった。

まあ、それを言ったら二人から（下手をすればまた学校中の男子から）の殺意混じりの問い詰めが来そうだから言わないけど。

「エロい夢なら是非とも語るがいい！」

「………違えよ」

二人が目を血走らせながら迫ってくるのを俺は若干うんざりしながら違うと告げる。

「すみませんでした、イツセーさん。もう少し早く私が声をかけにいつていれば」

「いいんだよ、アーシア。寝坊した俺が悪いんだしさ」

眠れなかったと言ったが、実際は鶴さんが家の手伝いをしに起きてからは一応眠れた。……まあ、そのおかげで、寝坊してしまい、危うく学校に遅刻してしまうところだった。

アーシアが申し訳なさそうにしているが、アーシアが起こしてくれなかったら確実に遅刻してたのでそんなに気にしなくてもいいんだけどな。

「イツセー、貴様あ!？」

「アーシアちゃんにも起こしてもらっているのか!？」

松田と元浜がすごい形相で睨んできた。

俺はそれに勝ち誇ったような態度で返してやる。

「なーんだ、そのくらい当然だろ？ なにしろ、ひとつ屋根の下で暮らしているのだから」
♪

「イツセーさんはお寝坊さんですから」

ちなみに、元浜が言った「も」ていうのは、アーシアが来るまえは千秋が起こしに来てくれていたことを言っている。

いまでも、たまに千秋が起こしに来てくれるし、鶴さんや燕ちゃんるときもある。基本的にアーシアの日が多いかな。

「じゃ、じゃあ、ご飯をよそってもらったりとか………?」

「それは鶴さんのほうが多いかなー♪」

「イツセーくんはいっぱい食べるからね〜」

普段はのんびり屋な鶴さんだけど、意外と家事とかの作業がテキパキとしている。その腕前は明日夏がライバル視するほどだ。

「母さんも鶴さんの家事スキルには大変助かってるって言うってたし、アーシアは気が利く子だって褒めてたぞ♪」

「そんな………照れますよ」

「えへへ」

ちなみに、燕ちゃんはマッサージが得意で、どっちかというとうちの父さんのほうに絶賛されている。

俺も朝練のあとにやってもらっているけど、これが本当に効いて、疲れがあつというまに吹き飛んでしまう。

余談だけど、鶴さんから聞いた話によると燕ちゃんのそのマッサージ技術は、燕ちゃんが持っている忍の技術を応用したものらしい。

「なぜおまえの周囲にだけこんな美少女があああつ!？」

「美少女の幼馴染みの千秋ちゃんと千春さんに加え、うちの学校の二大お姉さまのリアス先輩に姫島先輩！ 小さなマスコットアイドルの塔城小猫ちゃん！ そこへ金髪美少女転校生のアーシアちゃん！ さらに幼馴染みの美少女転校生の鶴ちゃんと燕ちゃ

ん！ しかも、この転校生の三人とは同棲しているという始末！ この理不尽に俺は壊れそうだアアツ！」

あまりに付いてしまった俺と二人との差に二人は嘆き悲しむ。

「…………おまえらは何回同じことを嘆いている気なんだ？」

そんな二人を見て呆れた様子で嘆息する明日夏。

「なあ、親友。ものは相談だが……………」

そんな明日夏を無視して元浜がメガネをキラんと光らせて詰め寄ってくる。

「一人ぐらい紹介してもバチは当たらないと思うぞ？ ———というか、紹介してくれ！」

頼む！ 頼みます!？」

「おまえ、他にもいろんなかわいい子と知り合っているんだろ!? その中で誰でもいいから紹介しろ！ いえ、してください!? イッセーさま！」

手を合わせて頭を下げ、懇願してくる悪友の二人。

——つて言われてもな。女の子の知り合いなんて、さつき松田があげていた子たちしかいないんだけどな。

「もし紹介してくれたら、相応の礼はするつもりなのだが」

「——ッ！　そ、それはどういう!?!」

元浜が口にした「礼」という単語に思わず反応してしまう俺を見て、二人はニヒルに笑む。

「あえて言うなら——」

「紳士のVIP席」

それだけ告げると、二人は踵を返してどこかへと行こうとする。

「ちよ、ちよつと待てッ！」

思わず慌てて呼び止めてしまったけど、どうすればいいんだ!? 紹介できる子なんて

——ん? まてよ。あつ、一人いた。

でも、いいのかな? あの子紹介して?

だが、二人の言うVIP席が気になるのも事実。

俺はスマホ(レイナーレにケータイを壊されたので、新しくスマホに機種変した)を取り出し、とある人物に電話をかける。

ひと通り話し終えると電話を切る。

「一人大丈夫な子がいたぞ」

「マジで!?!」

『今日にでも会いたい』てき。向こうも友達連れてくるって」

「そ、それで、どんな子なんだ?」

「うっ。ま、まあ、乙女だなあ。間違いない」

「乙女ツ! 素晴らしい!」

舞い上がる二人に対して、俺は苦笑いを浮かべて汗をかいていた。

それを訝しんだのか、明日夏が訊いてきた。

「イツセー、一体誰を紹介したんだ？」

俺は歯切れ悪くもその子の名を口にしました。

「……………ミルたん」

それを聞いた明日夏も表情を引き攣らせる。

ミルたんというのは、先日、アジアの代わりに俺が赴いたときの依頼者の名だ。筋骨隆々とした体に魔法少女の衣装で身を包んだ乙女な巨漢だ。

そう、乙女な巨漢。心は乙女なのだ。だから嘘は言っていない。

「これ、その子の番号と、メアド。まずはメールで連絡取ったほうが幸せになれるぞ」「サンキューー!」

松田が速攻で俺のスマホを奪い、自分のケータイにすばやく番号とメアドを登録し

た。元浜も続いて自分のケータイに登録を行った。

「ああ、ありがとうございます、イツセーさま！ このご恩は一生忘れません！」
「俺らもソツコー彼女作るからな！ 今度、トリプルデートでもしようぜ！」

二人は春が来たが如くテンションMAXで自分の席に戻って行った。



「・・・・・・・・ううう・・・・・・・・痛い・・・・・・・・」

「大丈夫ですか、イツセーさん!？」

放課後、部室でボコボコに腫れ上がったイツセーの顔にアーシアはせつせと回復の力を当てていた。

「・・・・・・・・自業自得でしょ」

「・・・・・・・・まったくです」

なぜイツセーがこのようになったかというところ、元浜の言う紳士のVIP席とやらに行ったせいだ。

大層な名前を言っているが、その実態は女子更衣室のロッカーの中という、要するに覗きを行うための場所だったというわけだ。

で、そのとき更衣室を使用していたクラスっていうのが、一年、それも千秋のクラスだった。当然、塔城や燕もいる。つまり、イツセーは覗きがバレて塔城にボコボコにされたわけだ。

燕の言う通り、自業自得であった。

「まったく。あなたは どうしてそう……」

部長は呆れた様子で笑みを浮かべながら嘆息する。

「いやー、友人に誘われてつい……」

目を逸らしながら言うイツセーにアーシアがまくしたてる。

「イツセーさん！ そんなに裸が見たいのなら……わ、私が！」
「わああああ!!? 違うんだ、アーシア！ そういうんじゃないよ！」

顔を真っ赤にして自分の制服に手をかけるアーシアをイツセーは慌てて止める。

「そうだよ、イツセーくん。私に言ってくれたら、いつでも見せてあげるよ」
「えっ!?!」

「昨夜、もう見せてるしね」

「ええええええっ!?!」

鵜の爆弾発言に千秋とアーシアが悲鳴じみた叫びをあげる。

「ま、まあ、そうだね……って、いて、いてててっ!?!」

「もおおお！ イツセーさあぁあん！」

イツセーが顔をデレデレさせていると、アーシアが涙目でイツセーの頬を引っぱりだ

した。

その後、アーシアはすっかりむくれてしまった。

イツセーが鶴とアーシアで応対が違うのは、別にイツセーがアーシアに異性としての魅力を感じていないというわけじゃない。

イツセーの中では、アーシアは『守るべき存在』という意識が固められている。それは、一度アーシアを守ることができず死なせてしまったことが起因だ。

だから、アーシアがそういうことをするのは、イツセー的には興味あるが、理性が働いてブレーキがかかってしまうというわけだ。

むくれているアーシアをイツセーがなだめると、部長が手をパンパンと鳴らす。

「はいはい、痴話喧嘩はそんへんにして。イツセー。アーシア。あなたたち、そろそろ使い魔を持ってみない?」

部長は唐突にそう言った。

「使い魔、ですか?」

「そう、使い魔よ。あなたとアーシアはまだ持っていないでしょう?」

使い魔は悪魔にとって手足となる使役すべき存在だ。

情報伝達や偵察、他にも悪魔の仕事でも役に立つらしい。

「いままで修業の一環としてチラシ配りをやらせていたけれど、それはもう卒業ね。それは本来使い魔の仕事だから」

そう言いながら、部長はボンツと手元にマスコットみたいな赤いコウモリを出現させる。

「これが私の使い魔。イツセーと千秋は会ったことあるわね」

「えっ？」

イツセーと千秋が疑問符を浮かべていると、コウモリはウエイトレスのような服装をした少女に姿を変えた。

「ああっ！」

それを見て、イツセーと千秋は思い出したのか声をあげる。

俺もその少女には見覚えがあった。

イツセーが死ぬ間際に部長を呼び出した悪魔を召喚する魔法陣が描かれたチラシ、それをイツセーと千秋に手渡したのは他でもないこの少女だった。

「私のはこれですわ」

副部長が指を床に向けると、魔法陣を介して小さな小鬼が現れた。

「・・・・・・・・シロです」

そう言う塔城の腕に白い毛並みの子猫が抱き抱えられていた。

「僕のは——」

「ああ、おまえのはいいや」

「つれないなあ」

そう言いつつ、木場は苦笑しながら肩に小鳥を出現させていた。

「使い魔は悪魔にとって基本的なものよ」

部長が使い魔について説明していると、アーシアがおずおずと手を上げる。

「あのー、その使い魔さんたちはどうやって手に入れれば？」

「それはね——」

コンコン。

部長が使い魔の手に入れかたを説明してくれようとした瞬間、部室の扉がノックされる。

「はい」

「失礼します」

副部長が返事を返すと、扉が開かれ、メガネをかけた女子生徒二人が複数の女子生徒と一人の男子生徒を引き連れて入室してきた。

「なっ!?! こ、このお方は!?!」

イツセーは先頭のメガネかけた女子生徒の片割れを見て驚愕していた。

（あの、どちらさまですか?）

アーシアが小声で訊いてきたので、俺とイツセーも小声で返す。

（この学校の生徒会長、支取蒼那先輩だよ）

（隣は副会長の真羅椿姫先輩だ。そして、後ろにいるのが他の生徒会メンバーだ）
（ていうか、生徒会メンバー勢揃いじゃん!）

そんな俺たちをよそに、部長が前に出て会長と気安い感じで会話を始めた。

「お揃いね。どうしたの?」

「お互い下僕が増えたことだし、改めてご挨拶をと」

会長が口した「下僕」という単語にイツセーが反応する。

「下僕ってまさか!?!」

「この方の真実のお名前はソーナ・シトリー。上級悪魔シトリー家の次期当主さまですわ」

副部長が答えてくれたように、生徒会長の支取先輩は上級悪魔であり、生徒会は会長の眷属悪魔の集まりなのだ。

「へ、この学園に他にも悪魔が!?!」

驚くイツセーを見て、男子生徒が見下したような表情を見せる。

「リアス先輩、僕たちのことを彼らに話してなかったんですか？ 同じ悪魔なのに気づかないこいつらもどうよと感じですが」

「どうやら、俺たちのことまで悪魔だと思ってるな、こいつ。」

「サジ、私たちは『表』の生活以外ではお互い干渉しないことになっているのよ。兵藤くんが知らなくても当然です。それから、そこにいる兵藤くんとアルジエントさん以外の彼と彼女たちは悪魔ではありませんよ」

「えっ!?!」

男子生徒が驚いたように俺たちを見る。

「士騎明日夏。人間だ。こっちは妹の千秋だ」

「どうも、千秋です。兄と同じく人間です」

「風間鶯。こっちの妹の燕ちゃんと一緒に人間だよ」

「燕よ。人間だけど、よろしく」

俺たちは簡単に名乗り、人間であることを明かす。

「な、なんで人間の彼らがここに!?!」

「まあ、いろいろあつてね。皆、イツセーに付き添うカタチでオカ研に入部したのよ」

男子生徒の疑問に部長が答える。

「もちろん、私たちが悪魔であることも知っているわよ。たぶん、あなたたちのこともね。そうでしょう、明日夏?」

部長の問いかけに頷いて答える。

オカ研に入部する以前から部長たちのことを知っていて、生徒会のことを知らないはずはないからな。

「あつ、思い出した! おまえ、最近書記として生徒会の追加メンバーになった、確か、二年C組の——」

「匙元士郎。『^{ボーン}兵士』です」

「『兵士^{ポーン}』の兵藤一誠、『僧侶^{ビショツブ}』のアーシア・アルジエントよ」

イツセーの言葉を皮切りに部長と会長がお互いの新人下僕を紹介する。

「へえー、おまえも『兵士^{ポーン}』かあ！ それも同学年なんて！」

同学年で同じ駒であることにイツセーは少し嬉しそうにするが、それに対する匙はわざとらしく嘆息する。

「俺としては変態三人組の一人であるおまえと同じなんて、酷くプライドが傷つくんだけどな」

「なっ!? なんだと、てめえ！」

匙の挑発じみた貶しにイツセーは匙に食ってかかろうとする。

「おつ、やるか？ 俺は悪魔になったばかりだが、駒四つ消費の『兵士^{ポーン}』だぜ」

余裕そうにイツセーを煽る匙を会長が諫める。

「サジ、おやめなさい。それに、その彼は駒を八つ消費しているのよ」
「八つって、全部じゃないですか!？」

驚く匙はありえないものと目の当たりにしたような表情でイツセーを見る。

「信じられない！　こんな冴えない奴が!？」

「うっせー!」

第一印象から最悪な状態だな、この二人。

「ごめんなさいね、兵藤くん、アルジエントさん。よろしければ、新人悪魔同士、仲良くしてあげてください。土騎くんたちも悪魔、人間に関わらず仲良くしてあげてください」

若干困ったような表情で会長は微笑みかけてきた。

「サジ」

「あ、は、はい。よろしく」

会長に言われ、渋々と出された手をアーシアが取った。

「よろしくお願いします」

アーシアがにつこり微笑みながら匙の手を掴むと、匙はガシツとアーシアの手を握り返した。

「こちらこそ！ キミみたいなかわいい子は歓迎だよ！」

・・・態度が急変しすぎだろ。

案外、イツセーとこいつって似た者同士かもな。

そんなアーシアの手を握っている匙の手を、イツセーが強引に引き剥がし、握り潰す勢いで力をこめて握手しだす。

「ハハハハッ！ 匙くん、俺のこともよろしくね！ つうか、アーシアに手を出したらマジ殺すからね、匙くん！」

そんなイツセーの手を匙も負けじと力をこめて握り返す。

「ハッーハハッー！ 金髪美少女を独り占め気取りか？ 美少女幼馴染みをたくさん侍らせておいて、さすがエロエロな鬼畜くんだね！」

二人とも握手する手にさらに力をこめ、ぐぬぬと睨み合う。

「大変ね」

「そちらも」

そんな二人を呆れたような表情で見る部長と会長。

うーん、やっぱり似た者同士だな、こいつら。

「俺はデビューして早々使い魔を持つことを許されたんだ！ おまえはまだチラシ配りをしてるそうじゃないか？」

「バカにすんな！ 俺も部長から使い魔を持つようさつき言われたんだよ！」

「えっ、あなたどころも？」

「ええ。来週にはと思っていたのだけど」

「でも、彼は月に一回しか受け持ってくれませんし」

ん、何やら問題発生か？

「ならここは、公平に実力勝負というのはどう？」

「勝負？」

「勝ったほうが彼に依頼する権利を得るの」

どうやら、部長と会長との間でひと勝負が勃発しそうだな。

「もしかして、レーティングゲームを？」

「ふふ、まさか。まず許可してもらえっこないわ」

「そうですね」

レーティングゲーム。確か、上級悪魔同士で行う下僕同士戦わせる競技だっけ。

「それに、いまのあなたは大事な体ですから」

「……………関係ないわ」

会長の言葉に部長が急に不機嫌そうになった。

何かあるのか？ たぶん、最近の部長の様子とも無関係じゃないだろう。

当の部長はすぐさまいつも通りの雰囲気に戻った。

「ソーナ。ここは高校生らしく、スポーツで決めましょう！」

Life. 4 使い魔、ゲットします！

部長が会長に勝負を挑んだ翌日の放課後、学園のテニスコートで部長、副部長のタッグと会長、副会長のタッグがネットを挟んで対峙していた。

見ての通り、勝負内容はテニスのダブルス対決だ。

そして、どこで聞きつけたのか、学園のほとんどの生徒がテニスコートの周りに集まって観客と化していた。

スゴい熱狂になっていたが、学園で人気のあるメンツで勝負となれば当然の結果か。

「がんばれー！ 部長！ 朱乃さーん！」

「会長ー！ 勝ってくださいー！」

そんな生徒たちに紛れてそれぞれの主を全力で応援するイツセーと匙。

「朱乃。この勝負勝ちに行くわ！」

「はい、部長！」

「行くわよ、ソーナ！」

「ええ！　よくてよ、リアス！」

思った以上に燃えている部長と会長。

そして、そんな二人の対決の火蓋が切つて落とされた。

部長側と会長側、どちらも一進一退のラリーによる攻防で白熱していた。

「うまいもんだな」

四人とも、テニスの腕前はプロ級だった。

「なにせ部長と会長はグレモリー流とシトリー流の技をそれぞれ極めているからね」

隣にいた木場がそんな解説をくれた。

ていうか、そのグレモリー流とシトリー流の技ってなんだよ？　絶対二人のオリジナ

ルだよな。

「しかし、盛り上がってるな」

「いつのまにか、ギャラリーがいっぱいになってるからね」

「……これでは魔力は使えませんね」

「——つて、おい。魔力を使う気だったのかよ、二人とも!？」

「だって、さつき言ったグレモリー流とシトリー流の技は魔力ありきの技だからね」

おいおい……。スポーツぐらい、普通にやりましょうよ。

まあ、塔城の言う通り、こんだけ一般人のギャラリーがいれば、魔力なんて使わねえよな。

「おくらいなさい! シトリー流スピンスープ!」

会長がそんな技名を高々と叫びながらサーブを放つ。——つて、あれ。いま打った会長のボールに青いオーラが微かに……。

「甘いわ! グレモリー流カウンターをくらいなさい!」

部長が打ち返そうとした瞬間、ボールが部長の前でありえない方向にバウンドしていった！

ていうか――。

「魔力使ってんじゃねえか！」

「………しつかり使ってるね」

「………ちよつと熱くなり過ぎかもです」

「………おいおい、大丈夫なのかよ？」

「まあ、周りの人たちは魔球つてことで納得しているみたいだね」

「………いろいろ平和で何よりです」

「………いいのかよ、それで。どう見ても物理法則を無視してるぞ。本当に文字通りの魔球だぞ。」

「それでこそ私のライバル。でも、絶対に勝たせてもらおうわ！ 私の魔導球は百八あるのよー！」

「受けて立つわ、リアス！　それが私のあなたへの愛！」

いまの一球でさらに白熱した部長と会長の対決はもう俺の知っているテニスではなかった。

ボールが縦横無尽に物理法則を無視して暴れ回るテニスではない別のスポーツと化していた。

幸い、周りの連中は全て魔球つてことで納得していた。

・・・・・・・・・・・・・・・・塔城の言う通り、いろいろ平和で何よりだよ。



結局、テニス（もはや別のスポーツ）対決は、部長たちのいつまでも決着のつかない激しいラリー合戦にラケットのほうに耐えられなかったため、勝負は無効となった。

というわけで、今度は――。

「団体戦？」

「ということになったみたいだ」

むろん、俺や千秋たちも参加させてもらうつもりだ。
人間ではあるが、遅れをとるつもりはさらさらない。

「それでいま、部長と朱乃さんが生徒会と協議中なんだよ」

ガチャ。

と、噂をすれば部長と副部長が戻ってきた。

「種目はドッチボールに決まったわ。勝負は明日の夜、体育館で。イツセーとアーシアのためにがんばりましょう」

『はいー！』

部長の言葉にイツセーとアーシア以外の全員で力強く返事をする。
そんなじゃま、ダチ二人のために一肌脱ぐか。



翌日の夜、俺たちは体育館に来ていた。
今夜行われる対決の種目はドッチボール。

『いいなー。俺もやりてーなー』

・・・・てめえは黙ってる。

千秋に背中を押してもらって柔軟していると、ドレイクが棒読みで喚く。

あれ以来、こいつはやたらと話しかけてくるようになっていた。

とりあえず、無視してるがな。

「俺、ドッチボールなんて小学校以来だよ」

「勝負を着けるのが目的だからな。ルールは簡単なほうがいいってことなんだろう。
アーシアもすぐに覚えられたからな」

ドッチボール用のバレーボールで投げ合って練習したり、柔軟をしたりして準備万端

となったところで、イツセーが俺たちに渡したいものがあると言ってきた。

「ハチマキ？」

「ほお」

「へえ」

「あらあら、素敵ですわ」

イツセーが俺たちに渡したのは、『オカ研』と刺繍されたハチマキだった。

「徹夜して作ったんです」

「寝ないで？」

「俺たちのために部長と朱乃さんがあんなにがんばってくれて、今日は小猫ちゃんや木場、明日夏たちまで。だから、皆のためになんかひとつでもできたらなあ、なんて。……あのー、ハチマキなんてやつはダサいっすか？」

「ううん。よくできているわ。本当に素敵よ、イツセー」

部長の言う通り、初めてにしてはなかなか上出来だった。スジいいんじゃないか？

「い、いえ、そこまでのもんじゃ……」

「謙遜しなくてもいいんじゃないの? いい出来だと思うけど」

「そうだよ、イツセーくん」

「素敵だと思うよ、イツセー兄」

「……予想外の出来栄え」

他の部員の皆にも好評だった。

「これを巻いて、チーム一丸となって頑張りましょう!」

部長の言葉に俺たちは力強く頷いた。

そんななか、複雑そうな表情をする千秋と燕。

実は俺たちオカ研のほうに人数が二人多いため、悪魔以外のメンバーの俺たちから千秋と燕が抜けてもらい、審判をしてもらうことになっていたので。

「安心しろ。二人の分までやってやるからよ」

「安心して任せてよ〜」

俺と鵜にそう言われ、視線で「任せた」と言われ、より一層気合いを入れた。

「お待たせしました」

そこへ、ようやく生徒会メンバーのご登場だった。

ここに、オカルト研究部と生徒会による戦いの火蓋が切つて落とされた。



「ハッ！」

「——ッ!？」

「アウト！」

開始早々、生徒会側の外野の投げたボールが塔城にかするようになり、塔城がアウトになった。

「小猫ちゃん！」

「……問題ありません」

いきなり塔城がやられたか！ 生徒会もなかなかやる！

ちなみにこちら側の外野は木場とアーシアだ。木場はともかく、アーシアは運動神経がいいほうではないため、回避作業のある内野はキツいと判断されたためだ。

それにしても、塔城のボールが当たった部分の体操着が破れてたのが気になるんだが？ ……というか、いやな予感がするんだが？

「フツ。追憶の嘆き！」

副会長が高々と技名を叫びながら投げられたボールにそれはもう濃密な魔力を帯びていた。

ていうか、ドッジボールでも魔力かよ！

さっきの塔城をアウトにした投球も魔力を使ってたな！

「——ッ！」

部長へと投げられたボールを部長は見事キャッチした。が、衝撃でジャージがところどころ破けていた。

「流石ですね。椿姫の球を正面から」

「私を誰だと思っているのかしら！」

部長の前方に魔法陣が現れ、部長が投げたボールが魔法陣を潜ると、ボールは破裂して潰れ、副会長以上の濃密な魔力を帯びて生徒会メンバーの一人を吹き飛ばした。

そして、新しいボールに変えてからのこのドツチボール対決は、もう無茶苦茶だった。魔力を帯びたボールが縦横無尽に体育館内を暴れ回り、およそドツチボールでは聞かないはずのボールが当たった者（主に部長の投球による生徒会の被害者）の悲鳴が響き渡っていた。

ガシャン！

あ、副会長の投げたボールが窓を突き破ってどっかに飛んでいった。

……これで何球目だ、ボールがダメになるの？

「ドッチボールって怖いスポーツなんですね!？」

「……いや、アーシア。これはもうドッチボールじゃねえよ」

「もはやなんのスポーツなんだかわかんなくなってきた!？」

と、ここで生徒会側の外野の一人が鵜に向かってボールを投げた。

だが、ボールはそのまま鵜のことをすり抜けて行ってしまった。

ただ、本当にボールが鵜のことをすり抜けているわけではない。タネは至極単純。鵜のボールを避けてからもとの体勢に戻るまでのスピードが速すぎるのだ。それによって、ボールが鵜のことをすり抜けているように見えていたのだ。

のんびりそうにしていながらその実、忍びとしても俊敏なのだ。

むろん、避けるだけでなく、投球も力強く、なおかつ速くて鋭く、生徒会メンバーの一人を下していた。

「追憶の嘆きー!」

おっと、ここで副会長が俺に向かってきつきから猛威を振るっている必殺球が飛んできた。

「ふっ！」

俺はその一球に向けて猛虎硬爬山を放つ！

俺の一撃で勢いが多少衰えたところでボールを抱え込むようにしてキャッチし、その場で転がりながら勢いを逃す。

「ふう………」

「やりますね。まさか人の身で椿姫の球を止めるなんて」

ちなみに、いまのように八極拳の技をボールに打ち込んで打ち出し、生徒会メンバーの一人を下していたりする。

「よくやったわ、明日夏」

「部長ー！」

部長が視線でボールを渡すように伝えてきたので、部長にボールをパスする。

そして、部長が投げたボールが魔力で再びダメになりながらも副会長を下した。

これで残りは会長と匙の二人。こちらは部長、俺、イツセー、鵜の四人。残り時間もあとわずか。戦況はこちらに有利であった。

だが、会長も匙もまだ諦めてはいなかった。油断はできないな。

「会長。まずは兵藤を潰しましょう！」

匙の言葉に頷き、会長はメガネを光らせる。

「マズい！ 何か来る！」

「イツセー、逃げろ！」

「えっ!？」

「シトリー流バックスピンスhoot！」

妙に派手に動きながら魔力を帯びて放たれた会長のボールはまっすぐイッセーに向かっていく。

「何っ!?!」

イッセーは慌てて逃げるが、ボールは意思を持ったかのようにイッセーを追いかけていた!

「な、なんで!?!」

「イッセー、避けて!」

部長に言われながら、イッセーは必死になってボールから逃げる、避けるを繰り返すが、ボールはとことんイッセーを狙って追いかける。

「うわあああああ——っ!?!」

そして、とうとうボールは命中した。——イッセーの股間に。

イツセーは股間を押さえて倒れ込んだ。

「お、おい、イツセー、大丈夫か!?!」

慌てて駆け寄る俺。他の部員もイツセーに駆け寄る。

「……………お、終わった……………何もかも……………」

ヤベエ。やつぱりというか、当然というか、重傷だな、これは。

『『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』で治療を行いますので、ケガしたところを見せてください!』

アーシアの言葉にイツセーは痛みを忘れて慌てだす。

「い、いや、それは無理!」

「でも、患部を見ないと、ちゃんとした治療が……………」

「いやつ、患部つつうか、陰部はちよつと! いろいろとまづいから! お願い! マジ

で許して!？」

「仕方ありません。では、服の上から……………」

イツセーの必死の説得というか、懇願でアーシアに妥協してもらい、結果、なんとも言えない表情で座っているイツセーの股間に真剣な表情で回復の力を当てるアーシアという光景ができあがった。

「……………なんだこの絵面？」

「……………なんとも言えない場面」

「……………俺もそう思う」

塔城の言う通り、本当になんとも言えない絵面だなあ。

「アーシアはこのままイツセーの看護を」

「は、はい！」

アーシアの返事を聞いたあと、部長は他の部員に向けて告げる。

「皆、イツセーの弔い合戦よ!」

「ええっ! イツセーくんの死を!」

「無駄にはできませんね!」

「……もちろんです!」

「えーつとお……俺、死んだわけじゃ……」

なんで部長たち、イツセーが死んだようなノリになつてんだ?

なんて妙な展開になりながらもドタッチボールは再開された。

「えーと、ボールはどこかしら?」

ボールを探すと、鵜が持っていた。

——つて、ん? 鵜の様子がおかしいような——ツ!? まさか!

「行きなさい、鵜! ……鵜?」

部長の言葉に何も反応を示さない鵜にこの場にいる全員が怪訝そうにする。

その中で事情を知ってる燕はどこか呆れたような表情をしており、同じく事情を知ってる俺とイツセー、千秋は冷や汗を流していた。

「………よくも………」

ようやく発せられた鶴の声はいつもののんびりとした雰囲気は微塵もなく、ただ低く冷えたような声音だった。

そして、突如として火山の噴火のごとく爆発した。

「よくもイツセーくんをおおおおおおおおおつ!!」

咆哮のような叫びをあげながら放たれた鶴のボールは会長の頬をかすりながら後方の壁に激突し、壁を粉碎した!

その光景を見た事情を知らない皆は驚愕していた。特に頬をかすった会長なんかは表情を引きつらせて冷や汗も流しており、近くで見ていた匙なんかは驚愕と恐怖がごっちゃまぜになった変な表情をしていた。

「イツセー! もう動けるな!」

「お、おう! わかつてる!」

イツセーは慌てて立ち上がり、鵜の下へ駆け寄る。

「鵜さん! 俺は大丈夫だから! ほら、アーシアのおかげでこの通り、ピンピンしてるから!」

「………ホント?」

「ホントホント! 本当に大丈夫だから!」

「はあく、よかったよ」

イツセーの言葉を聞いて、鵜は落ち着き、いつもののんびりとした雰囲気に戻っていた。

「………明日夏、これはいったいどういうことなの?」

そこでようやく、驚愕の硬直から立ち直った部長が訊いてきた。

「えーつと、鵜は燕やイツセーが傷つくようなことがあると、いまみたいにキレて凶暴化するんですよ」

昔、燕をいじめてた連中をキレてぼこぼこにしたことがあった。他にも、そのいじめを行っていた連中のリーダー的な奴の兄貴が不良で、そいつが不良仲間を引き連れて鵜に仕返ししに来たときにイツセーが鵜を庇ってケガをした際にもキレて、不良たちを返り討ちにしたこともあった。

しかも、その状態の鵜は本当に凶暴で容赦がなく、倒れた相手にすら過剰に暴力を振るう。

止める方法はいまみたいに原因、つまり燕やイツセーが自分は大丈夫だということを伝えるのみだ。

それにしても、さっきの鵜の投球。ただボールを力任せに投げたわけじゃない。力が最大限に乗るように、そして速く、鋭くなるように投げたのだ。その結果がああ壁だ。キレながらもあれだけ繊細なことをやってのける鵜は大したもんだと感服するしかなかった。ちなみに、ボールは衝撃に耐えられずに破裂した。

もし、レイナーレの事件のときに鵜がああ場にいたら、レイナーレはもつと凄惨な死

を迎えていたかもしれなかった。

「ま、とりあえず、鵜が落ち着いたところで、ドッチボールを再開しますか」

俺は手を叩いてドッチボールの再開を促した。

今回の件は会長に悪気があったわけじゃない。だから、鵜もあつさりと落ち着いてくれた。

たぶん、もう大丈夫なはずだ。

再開されたドッチボール。ボールは塔城の手の中。狙いは匙。匙も受けて立つ気のないようだ。

「来いー!」

「……えい」

「——っ!?!」

あ、塔城の投げたボールが匙の股間に。

匙はイッセー同様、股間を押さえながら倒れた。

まあ、これで匙もアウトだな。
残るは会長一人。

「もうあなたひとりよ。覚悟なさい、ソーナ！」

「ふふ、勝負はこれからです！」

「オーバータイム！」

「えっ!？」

まだまだ諦めないと意気込む会長に無慈悲なタイムアップ宣言がされた。
この勝負、俺たちオカルト研究部の勝利に終わった。



『かんぱーい!』

生徒会との激闘を制した俺たちは部室でジュースを片手にささやかな祝勝会を行っていた。

「見事生徒会を撃破し、めでたく我がオカルト研究部が勝利を飾ったわ。これも皆のおかげよ」

ちなみに、鵜が壊した体育館の壁だが、原因は自分にあると会長のほうで修理してくれるようだ。

んでもって、塔城の一撃でダウンした匙だが、イツセーのように治療されることなく、生徒会メンバーの一人におぶられていった。

「さあて、ぐずぐずもしてられないわ。使い魔をゲットしに行くわよ」

「あの、いまからですか?」

「満月の夜じゃないと彼に会えないのよ」

なるほど。確かに今夜は満月だったな。

「彼?」

「使い魔マスターよ」

イツセーが訊くと、部長はそう答えた。

使い魔マスター？ そんなのがいるんだな。

たぶん、使い魔について詳しいんだろう。

「部長。俺たちも行ってもいいですか？」

ちよつと興味あるからな。

「いいわよ。あなたたちもいらつしやい」

そんなわけで、俺たちはその使い魔マスターなる人物のいるところまで転移するのだった。



部室からやってきたのは、とある森だった。

どうやらこの森には使い魔向けの魔物なんかがたくさん生息しているようだった。部長たちの使い魔もここでゲットしたらしい。

「ゲットだぜー！」

「「「「「——っ!?!」「」」」」」

突然の大声に俺たちは驚くなり、悲鳴をあげるなり、警戒するなりする。部長たちはとくに驚いている様子は見受けられなかった。

声がしたほうを見ると、木の上に帽子を深くかぶり、ラフな格好をしたおっさんがいた。

「俺は使い魔マスターのザトウジだぜ」

このおっさんが使い魔マスター？　なんか、ものスゴく胡散くさいな。いや、ヒトは見た目では判断できないが。

「んー、今宵もいい満月。使い魔ゲットに最高だぜ！　俺にかかれば、どんな使い魔も即

日ゲットだぜ」

本当に大丈夫なのか、こいつ？

いや、まあ、部長たちが頼るってことは、大丈夫なんだろうけど。

「彼は使い魔に関してはプロフェッショナルですよ」

副部長から補足説明を受ける。

副部長がそう言うってことは、たぶん大丈夫なんだろう。

「さあて、どんな使い魔がご所望なんだぜ？ 強いのか？ 速いのか？ それとも、毒持ちとか？」

「そうっすねえ、かわいい使い魔とかないですかねえ？ 女の子系とか？」

イツセーの要望にザトウージは指を振る。

「チツチツチツ。これだから素人はダメなんだぜ。使い魔ってのは有用で強いのをゲッ

トしてなんぼだぜ。すなわち、個体の能力を把握してかつ自分の特性を補うような――」

「ほお、意外と真面目なことを言っているな。胡散くさい格好の割に結構まともなものかも――。」

「あのー、私もかわいい使い魔が欲しいです」

「うん！ わかったよお！」

「ありがとうございます！」

「アーシアが頼んだ途端にあっさり態度を変えやがった。

前言撤回だな……。」



あのあと、イツセーはカタログらしきものでいくつかおすすを紹介されたのだが、なぜか魔王よりも強い龍王の一角、『カオス・カルマ・ドラゴン天魔の業龍』ティアマツトだったり、ギリシャ神

話のヘラクレレスで有名なヒュドラだったりと、一体何を基準にして初心者にすすめたのかわからない紹介をされていた。

そして、なぜか部長もノリ気になるので、俺とイツセーはやたらとツツコまされた。で、その後、真面目に初心者向けのをすすめてもらい、いま俺たちはウンディーネという水の精霊が現れる湖に来ていた。

ウンディーネっていうのはたしか、清い心と美しい容姿をした乙女だったな。

だからなのか、イツセーはいやらしい顔をしていた。おそらく、いろいろと卑猥な妄想してるんだろう。

それを察したのか、千秋、鶯、燕の三人が不機嫌になっていた。

「あつ、湖が」

木場が指さしているほうを見ると、湖が輝きだしていた。

「おつ、ウンディーネが姿を現すぞ」

それを聞いて、イツセーはますます鼻息を荒くします。

そして湖から現れた。長い金髪を持った巨躯の女性が。

『フンガアアアアアッ!』

咆哮のような雄叫びをあげるウンディーネ? を見てイツセーは驚愕する。

いや、俺や千秋たちも空いた口が閉じれないんだけどな………。

「……………なんだあれ?」

太い上腕に太い足、分厚い胸板、そして全身には歴戦の戦士のような傷跡が見られた。

「あれがウンディーネだぜ」

ザトウージが歴戦の戦士のような女性の正体を言う。

「いやいや、あれはどう見ても水浴びに来た格闘家ですから!」

うん、まあ、イツセーじゃなくても、あれがウンディーネだって言われてもそんな感想しか出ないよなあ。

「運がいいぜ、少年。あれはレア度が高い。打撃に秀でた水の精霊も悪くないぜ」

それ、もう水の精霊じゃなくて、打撃の精霊じゃないのか？

「悪い！ 癒し系つうより、殺し系じゃねえか!？」

「でも、あれは女性型だぜ？」

「……………もつとも、知りたくない事実でした……………」

イツセーは涙を流しながらその場に崩れ落ちた。

なんというか、現実はいろいろと変わってるんだな。

結局、イツセーの希望というか、懇願でウンディーネは却下された。

ちなみにあのあと、もう一体同タイプのウンディーネが現れて、湖をかけて殴り合いによるデスマッチが行われた。

んでもって、それをおもしろがったドレイクがノリノリで実況解説していた。

「でも、あの子たち、とても清い目をしていました。きっと心の綺麗な女の子に違いありません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれを女の子とか呼ばないで・・・・・・・・」

「ただだけショック受けてるんだよ。いや、まあ、気持ちはわからんでもないが。」

「待て」

急に先頭を歩いていたザトウウジが立ち止まった。

「見ろ」

ザトウウジが指さす方向を見ると、そこには木の上に何かが止まっていた。

蒼い輝きを放つ鱗で身を覆った、オオワシくらいの大きさの、ドラゴンみたいな生き物。というか、ドラゴンの子供だった。

「蒼雷龍」スフライト・ドラゴン 蒼い雷撃を使うドラゴンの子供だぜ」

「これはかなり上位クラスですね」

「私も見るのは初めてだわ」

「ゲットするならいまだぜ？ 成熟したらゲットは無理だからな」

ならなんでティアマットを紹介した？

「イツセーくんは赤龍帝の力を持ってますし、相性はいいんじゃないかしら？」

副部長はそう言うが、果たしてそんな簡単に行くかね？

「なるほど。よし！ 蒼雷龍」スフライト・ドラゴン キミに決め——」

「きゃっ!？」

突然のアーシアの悲鳴に顔を向けると、なんかゲル状の粘ついた物体がアーシアに降りかかっていた。

というか、よく見ると、他の女性陣にも降りかかっていた。

「スライムか!」

木場の言う通り、このゲル状の物体はスライム。まあ、RPGでよくいる魔物だな。

「うっ、うわっ!」

剣を振ろうとした木場だったが、目にスライムが張り付いて視界を塞がられていた。俺のほうにも来たが、なんとか避ける。

「……あらあら……はしたないですわ……」

「ちよつと!? こらっ!」

「ふ、服が!」

「……ヌルヌル……キモッ……」

「——っ!」

「わっ、服が溶けちゃうよっ!」

「こ、このっ!」

女性陣の声を聞き、そちらに顔を向ければ、スライムに服を溶かされていた。

「クソッ！」

木場は顔に張り付いたスライムを剥がそうと悪戦苦闘していた。

そして、イツセーはというと、あられもない姿になっていた女性陣をガン見していた。

「な、なんて素敵な展開——ぐおっ!？」

「………見ないでください」

ガン見していたイツセーが塔城に殴り倒された。

すると、今度は木の幹から蔓のようなものが女性陣を縛り上げた。

これ、触手だな。

「こいつらは布地を主食とするスライムと女性の分泌物を主食とする触手だぜ。コンビを組んで獲物に襲いかかり、スライムが女性の衣類を溶かし、触手が女性を縛り上げる

以外、特に害はないんだが」

スライムを顔に張り付かせ、鼻血を出し、腕組みしながら解説するザトウウジ。
ていうか、十分な害を出してるじゃねえか。

「服を溶かすスライムと女性を縛り上げる触手だど!? 部長、俺、このスライムと触手を
使い魔にします! こいつらこそ、まさに俺が求めていた逸材!」

あーあ、まーた始まった。

「あ、あのね、イツセー。使い魔は悪魔にとって重要なものなのよ! ちゃんと考えなさ
い!」

スライムと触手に悪戦苦闘している部長に言われ、イツセーが考え込むこと早三秒。

「考えました! やはり使い魔にします!」

そんなイツセーの主張を無視し、皆、触手の拘束を解き、スライムと触手を殲滅した。

俺もナイフでスライムと触手を切り裂き、木場もようやく顔からスライムを剥ぎ取ってスライムを切り裂いていく。

スライムと触手がやられるたびにイツセーは悲痛な叫びをあげていた。

残っているのは既にアーシアを襲うもののみとなっていた。

イツセーはスライムと触手を庇うようにアーシアを抱きしめる。

「どきなさい、イツセー。こんな生き物は焼いてしまうに限るわ」

「いやです！ このスライムと触手はまさしく俺と出会うため、この世に生を受けたに違いありません！ これぞまさしく運命！ もう他人じゃないんです！ ああ、スラ太郎、触手丸！ 我が相棒よ！」

もう名前までつけてるよ、こいつ。

ちなみにアーシアはイツセーに抱きつかれて嬉しそうにしていた。……まあ、それを見て千秋たちがまた不機嫌になっているんだが。

「森の厄介者をここまで欲しがる悪魔は初めてだぜ。まったく、世界つてやつは広いぜ」
「普段はいい子なのよ。でもあまりに欲望に正直過ぎる体質で……」
「ぶ、部長! そんなかわいそうな子を見る目をしないでください! こいつらを使つて、俺は雄々しく羽ばたきます!」

バチバチ。

ん? いつのまにか、スプライト・ドラゴン蒼雷龍がアーシアの上空で蒼い電気を迸らせていた。

バリバリバリバリバリバリツ!

「うがががががががががががががががが?!. な、何が……」

スプライト・ドラゴン蒼雷龍の放った雷撃がイツセーもろともスライムと触手を焼き払った。

「ああつ、スラ太郎、触手丸!?! てんめえ——」

バリバリバリバリバリバリッ！

「あががががががががががつ!？」

再び雷撃で感電したイツセーは完全にダウンした。

スフライト・ドラゴン

蒼 雷 龍はそのままアジアの肩に止まる。

「そいつは敵と認識した相手しか攻撃しないんだぜ。つまり、スライムと触手、そして少年が金髪美少女を襲ったと思っただんだぜ」

アジアを襲ってた奴ら（イツセーは違うが）を敵と認識したってことは……。

「クー」

スフライト・ドラゴン

蒼 雷 龍はアジアに頬ずりしだした。

完全にアジアに懐いてるな。

スフライト・ドラゴン

たしか、蒼 雷 龍は心の清い者にしか心を開かないって聞いたな。

「決まりだな。美少女、使い魔ゲットだぜ」



アーシアの目の前で展開する緑色の魔方陣の中央に蒼スプライト・ドラゴン雷龍が置かれ、アーシアの使い魔の契約儀式が執り行われていた。

「……ア、アーシア・アルジエントの名において命ず！ な、汝、我が使い魔として、契約に応じよ！」

アーシアの詠唱が終わると、魔法陣が消えた。

「はい、これで終了。よくできました、アーシアちゃん」

副部長のサポートありとはいえ、懐いていたこともあつてすんなりと終わったな。

契約が完了した蒼スプライト・ドラゴン雷龍はアーシアのもとに飛んでいき、じゃれだした。

「うふふ、くすぐりたいです、ラッセーくん」

「ラッセー？」

「はい。雷撃を放つ子ですし、あの、イツセーさんのお名前もいただいちゃいました」
「はは、まあいいや。よろしくな、ラッセー——あががががががががががが!!?」

イツセーが手を差し出した瞬間、いきなりラッセーが雷撃を放った。

そういうやあ、ドラゴンのオスってたしか、他のオスが大嫌いなんだっけか。

現にイツセーだけでなく、俺や木場、ザトウジにまで被害が及んで黒焦げになっていた。

結局、今回はアーシアだけが使い魔を手に入れ、イツセーはこの次ということになった。

Life. 5 喧嘩、売ります!

アーシアが蒼^{スプライト・ドラゴン}雷龍ごとラッサーを使い魔にした翌日の夜、俺はベッドの上で座禅を組んでいた。

というのも、先程風呂に入ろうとしたときだった――。

『あつ……………』

『なつ……………』

確認を怠ったせいで、アーシアと鉢合わせしてしまった。おまけにお互いいろいろ見ってしまった。

しかも、俺が出ようとしたら、アーシアが「裸の付き合い」をやりたいなんて言ってきたもんだから、俺の理性はいろいろと大変だった。

なんとか理性を保ちつつ、アーシアに裸の付き合いの意味を教え、女の子なんだから、男が入ってきたらもつと防衛的な行動をするようにと警告しようとしたタイミングで

母さんがやって来て誤解をされてしまい、俺は思わず逃げ出してきてしまった。

ただ、そのときのアーシアの裸やら裸の付き合い宣言が頭を離れなかつたので、こうして座禅を組んでアーシアに対する煩惱と雑念を払っていた。

「俺はエロくない。俺は変態じゃない。アーシアは守るべき存在。アーシアと暮らして
るけど、エッチなことは考えちゃいけない。南無阿弥——んぎやあああああつ!？」

そうだよ、悪魔がお経を唱えちゃダメだろ！

危うく自分で自分を成仏させてしまうとところだった。

俺は頭痛で痛む頭を押さえながら、とあるところに電話をかける。

『なんだよ、イツセー？　こんな時間に?』

通話先は明日夏のスマホだった。

「なあ、明日夏。悪魔でもできる煩惱退散法知らねえか？」

『は?』

スマホの向こうから、明日夏の素っ頓狂な声が聞こえてきた。

俺は先程あったこと説明し、アジアをエロい目で見ないようにしたい旨を伝える。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ブツツ。ツーツーツー。

「つて、無言で切るなよ!?!」

こっちは真剣なんだよ!

俺はもう一度明日夏にかけ直す。

『はつきり言うぞ。おまえには無理だ』

バツサリ言われてしまった。

『だいたい、おまえから煩惱を取ったら、思考回路の大半が停止するだろうが』

そこまで言うかよ！　そして、否定できない俺！

『ま、そういうことだ。諦めろ』

「そういうわけにはいかないんだよ！　アジアは守るべき存在なんだから、そんなことしちやいけいないんだよ！」

『………アジア的にはそのほうがいいんだけどな………』

「ん、なんか言ったか？」

『いや、なんでもねえ』

「ともかく、こっちは真剣で——」

カツ！

「えっ、魔法陣?!」

突然、部屋の床に魔法陣が出現した！

しかも、それに驚いて、スマホを落としてしまい、スマホはベッドの下に行ってしまった。

魔法陣のほうを見ると、見覚えのある図柄。これは、俺らグレモリー眷属の文様だ。つまり、誰かが転移してくるってことだ。

誰だ? てか、なんで俺の部屋に!?

いつそう強い光が部屋を照らし出した次の瞬間、魔方陣から一人の女性が現れた。

「部長!?!」

現れた女性は部長だった。

何やら思いつめたような表情をしていた。

「ど、どうしたんですか?」

部長は俺を認識するなり、ズンズンと歩いてきて、俺の目の前に来る。

「イツセー、私を抱きなさい」



一体何事なんだ？

いきなりのイツセーからの相談の内容に呆れていたら、いきなり誰かがイツセーの部屋に転移してきたみたいで、それはどうも部長みたいだ。

そこまではよかったが、そのあとの部長の言葉に思わずフリーズしてしまった。

『イツセー、私を抱きなさい！』

………本当に一体何事なんだ。

どうも、イツセーはスマホを落としてみたみたいで、それも部長の目が届かない場所に落ちたみたいで、いまだに通話状態になっているのに部長は気づいていない。

イツセーもイツセーで、パニックになって忘れてるようだ。

『私の処女をもらってちょうだい！ 至急頼むわ！』

スマホから聴こえてくる様子から察するに、頭の整理が追いつかないうちにどんどんことが進んでいるみたいだった。

『……いろいろ考えたけど、これしか方法がないの』

ん、方法？

『既成事実ができてしまえば文句ないはず』

既成事実……そうか、そういうことですか、部長。

イツセーが相手なのもそういう理由か……。

ここ最近の部長の様子、先日の会長が部長に呟いた言葉、頭の中でパズルのピースがすべて埋まった。

ゴトンツ。

「ん？」

背後で物音がしたので振り向くと、床に飲みかけのスポーツドリンクが落ちていた。幸い、キャップは閉められていたので中身はこぼれてなかった。

すると今度は玄関のほうから慌てたようにドアが開閉された音が聴こえてきた。

「千秋か。聞かれたようだな」

まあ、千秋の想いを考えれば当然の反応か。

「さて、これからどう転ぶのやら」



こ、これは一体!?

いきなり部長がやってきたと思つたら、「エッチしよう」と言い出したと思つたら服を脱ぎだし、何がなんだかわからないうちに俺はベッドに押し倒されていた。

「イツセー、あなたは初めて?」

「は、はい……?」

「お互い至らない点はあるでしょうけど、なんとかして事を成しましょう。大丈夫。私のここにあなたの取めるだけよ」

自分の下腹部に指を当てる部長。刺激的すぎて脳みそが弾けそうだよ!

次に部長は俺の右手を取ると……自分の胸に押しつけてたあああつ!

指から伝わる夢にまで見たおっぱいの感触に脳がパンクしそうだよ!

「わかる? 私だって緊張しているのよ」

確かに柔らかいおっぱいを通して右手にドクンドクンと高鳴りが伝わってきた。

「で、ですが、俺、ちよつと自信がないです……」

情けなくも、不安げで緊張に包まれた声をあげてしまった。

「私に恥をかかせるの!？」

部長のその一言で理性が弾け飛んだ。

俺は部長を押し倒そうと起き上がる!

バンツ!

次の瞬間、部屋のドアが勢いよく開け放たれた!

見ると、そこには切羽詰まったような顔をした千秋に鶴さん、燕ちゃんがいた!

ていうか、見られた! ベッドの上にいる男とほぼ裸の女。どう見ても、これからやろうとしている男女にしか見えないし、実際にやろうとしていました!

「……………迂闊だったわね。部屋に人が入れないようにしておくのを忘れるなんて」

さらにパニックになる俺に対し、部長は落ち着いていて、嘆息していた。

「……………部長、これはどういふつもりですか?」

すごく怒気を孕んだ声音で部長に尋ねる千秋。

「ごめんなさい。あなたたちの想いを考えれば、この状況を認めたくないのも仕方なの
——」

「……私が怒ってるのはそこじゃないです!」

「え?」

自分の言葉を遮って言われたことに、部長は怪訝そうにする。

「……二人がちやんとお互いのことを愛し合っているのなら、動揺はしてもここまで焦ったりしません。でも、いまのこれは、ただイツセー兄の性格に漬け込み、自分の都合から利用しようとしただけです。それはイツセー兄の心を弄ぶことと同じです。いまの部長はあの女と同じです!」

「——ッ!?!」

千秋の言葉に部長は目を見開いてショックを受けたようだった。

千秋がここまで怒りをあらわにする女——たぶん、レイナーレのことだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そう、ね。そのとおりね。本気でイツセーのことを想っているあなたからそう言われても仕方ないわね・・・・・・・・」

部長は何やらぶつぶつと呟いていた。

そこへ、再び部屋に魔法陣が出現した！

誰だ？ 朱乃さんか？ それとも木場？ もしくは小猫ちゃん？

だが、魔法陣から現れたのはまったくの別人で、銀色の髪をしたメイド服っぽい出で立ちの若い女性だった。てか、メイドさん？

メイドさんは俺と部長を確認するなり、静かに口を開いた。

「こんな下賤な輩と。旦那さまとサーゼクスさまが悲しまれますよ」

メイドさんは呆れたように淡々と言った。

「サーゼクス？」

「私の兄よ」

部長のお兄さん!?

驚く俺をよそに、部長は立ち上がってメイドさんと対峙する。

「私の貞操は私のものよ。私の認めたものに捧げることのどこが悪いのかしら? それから、私のかわいい下僕を下賤呼ばわりするのは私が許さないわ。たとえば、兄の『女王』^{クイーン}であるあなたでもね」

メイドさんの言葉に部長が不機嫌になり、俺のために怒ってくれる。

いつぼう、メイドさんは床に脱ぎっぱなしになっていた部長の服を拾いあげる。

「何はともあれ、あなたはグレモリー家の次期当主なのですから。ご自重くださいませ」

メイドさんは拾った上着を部長の体にかけて、視線を俺や千秋たちのほうに向ける。

「はじめまして。わたくしはグレモリー家に仕えるグレイフィアと申します。以後お見知りおきを」

「あ、はい！」

改めて見ると、本当に美人で綺麗なヒトだなあ。

ぎゆうううつ。

なんて見惚れてたら、部長に頬を引つ張られてしまった。痛い、痛いですよ、部長！
部長はすぐに手をはなすと、フツと微笑む。

「ごめんなさい、イツセー。私も冷静ではなかったわ。お互い忘れましょう」
部長はそう言うと、今度は千秋たちのほうに向き直る。

「あなたたちも騒がせてごめんなさいね。とくに千秋には非常に不愉快な思いをさせたわね」

そう言つて頭を下げる部長。

「イツセー? まさかその方が?」

「ええ。兵藤一誠。私の『兵士』よ」

「……『赤龍帝の籠手』を宿し、龍の帝王に憑かれた者。こんな子が……」

グレイフィアさんが俺のことを驚愕したような表情で見てきた。

な、なんなんだよ? なんの話だ?

「話は私の根城で聞いわ。朱乃も同伴でいいわね?」

「『雷の巫女』ですか? 構いません。上級悪魔たる者、かたわれに『女王』を置くのは常です」

そこでいったん話が途切れて、部長が再度こっちを向いた。そして、ベッドに腰掛ける俺に目線を合わせる。

「迷惑をかけたわね、イツセー」

「い、いえ……」

チュツ。

頬に触れる部長の唇。て、ええええええつ!? 俺、部長にキスされた!

「今夜はこれで許してちょうだい」

そう言うと部長はグレイフィアさんと一緒に魔法陣でどこかへとジャンプしていった。

い、一体なんだったんだ?



朝、今日は早朝特訓はなしになり、そのままイツセーたちと学校に向かっていた。

「なあ、明日夏」

「なんだ?」

「部長ってなんか悩みがあるのかなあ?」

まあ、昨夜のようなことがあれば、さすがにそう思うか。

「俺の推測でよければ聞くか?」

「ああ、聞くよ」

イツセーに俺の推測を話そうと――。

ドガツ!

――したが、突如、イツセーが背後から何者かによつて殴り倒されていた。

「イツセエツ!」

「貴様って奴はああッ!」

犯人は松田だった。その隣には元浜。二人とも何やら激しく怒りをあらわにしていた。

「な、何？ 朝から過激だねえ、キミたち？」

そして、当のイツセーも二人がそうなっていることに心当たりがあるのか、殴られたことに怒らず、ただ苦笑し、とぼけながら尋ねる。

「ふざけんなっ！ 何がミルたんた！ どう見ても格闘家の強敵じゃねえかあああつ！」

「しかも、なんでゴスロリ着てんだっ!? 最終兵器かあああつ!」

ああ、そういうことか。

先日、イツセーに女子を紹介してくれと二人にせがまれたときに紹介した人物がそのミルたんた。その容姿は筋骨隆々の体に魔法少女の格好と正直なんとも言えない人物なのだ。女子と紹介されてそんなのと会わされれば、二人じゃなくても怒って当然か。

「ほら、魔女っ子に憧れてるかわいい漢の娘だったろ？」

「男と合コンできるかあああつ！」

「しかも、女装した連中が集まる地獄の集会だったぞおおおつ！」

「怖かったよおおおつ!?! 死ぬかと思っただぞ、この野郎っ！」

その光景を思い出したのか、二人は涙を流してお互いに抱きつきながら震えていた。よつほど、恐怖を感じる集まりだったみたいだな。

「魔法世界について延々と語られたんだぞ！ なんだよ、『魔法世界セラビニア』ってよおおつ!?! そんなの俺知らねえよおおおつ!?!」

「俺なんて、邪悪な生物『ダークリーチャー』ムーンライトフラワーに出くわしたときの対処法なんて習ったよ………。死海から抽出した塩と夜中しか咲かない月見草を焼いて潰して粉にして作る特殊なアイテムで退けるらしいぞ……。どう考えてもミルたんの正拳突きの方が効果的だと思うんだ……。」

叫ぶ松田と呟く元浜は恨み節を叫び、呟きながらイツセーに迫る。

「う、うぎやああああああああああつ!？」

次の瞬間、イツセーは二人にぼこぼこにされたのだった。



「婚約騒動?」

放課後、オカ研がある旧校舎への道を歩きながら、改めてイツセーに部長の悩みに関する俺の推測を話していた。

「たぶん、部長は家族からどっかの御家の貴族との婚約を迫られているんだろう」

貴族社会じゃよくあることだし、そうじゃなくても、現代社会でも一部ではさまざまな理由で政略結婚なんてよくあることだからな。

「で、部長はそれをいやがっている。だから、昨夜のようなことをして強引にでも破談に

しようとしたんだろう」

それぐらい、切羽詰まっついていて、焦っていたんだろう。

「もつとも、これはあくまで俺の推測だ。必ずしもそうとは限らねえぞ」

とはいっても、正直、この可能性が一番高そうなんだけどな。

「木場はなんか知ってるか？」

イツセーは途中で合流した木場に訊く。

「僕は何も知らないけど、でも、僕も明日夏くんの推測が一番可能性が高いと思うよ」

木場も同意見か。

「朱乃さんなら何か知ってるかな？」

「あのヒトは部長の懐刀だから、おそろくは——ッ!？」

部室の扉を前にして、木場が突然立ち止まって目を細める。
かくい俺も、木場と同じ反応をしていた。

「……………ここに来て初めて気づくなんて……………この僕が……………」
「……………まったくだ……………しかも、自然体でこれか……………」

ここまで来て、ようやく、部室内に相当な力を持った存在がいることに気づいた。

これだけの力を持ちながら、ここまで近づかなければ気配に気づけなかった。しかも、気配の感じから、自然体な状態で気配を消していた。相当な実力者だな。

イツセーとアーシアはわけがわからないといった様子だったが、千秋に鶴、燕は俺たちと同じように気づいたようだ。

イツセーは俺たちの様子に訝しげになりながらも、部室の扉の取っ手を掴む。

「ちわーっス」

イツセーが扉を開けたことで、室内の様子が目に入ってきた。

部長、副部長、塔城と、あと一人——銀髪のメイドの姿があった。

メイドの正体は間違いなく、昨夜、イツセーの部屋に現れたメイド。名前はグレイ
ファイアさんだっけか。

部長は見るからに機嫌が悪く、副部長も表情こそいつものニコニコ笑顔だが、纏って
いる空気が冷たい。塔城も静かにソファーに座っていた。

「全員揃ったわね？」

俺たち、というより、イツセー、アーシア、木場を確認した部長が何かを話そうと立
ち上がる。

「お嬢さま、わたくしがお話ししましょうか？」

そう申し出るグレイファイアさんを部長は手で制する。

「実はね——」

カツ！

部長が口を開こうとした瞬間、部室に魔法陣が出現する。

部長たちが使っているのは紋様が違っており、魔法陣から炎が巻き起こって部室内を照らしだしていた。

「……………フェニックス……………」

木場の眩きと同時に炎がさらに燃え上がり、炎が収まると、そこには赤いスーツ姿の一人の男が後ろ向きで佇んでいた。

「ふう、人間界はひさしぶりだ」

男が振り返る。

その顔はなかなか整っていて、赤いド派手なスーツと相まって、なんかホストみたいな感じだった。

「会いに来たぜ、愛しのリアス」

男は部長を視界に捉えると、そんなことをのたまった。
だいたい把握したな、この男の正体を。

「誰だ、こいつ?」

「この方はライザー・フェニックスさま。純血の上級悪魔であり、フェニックス家の御三男。そして、グレモリー家の次期当主の婿殿」

イツセーの眩きにグレイフィアさんが答えた。

「グレモリー家の当主って、まさか!?!」

「すなわち、リアスお嬢さまのご婚約者であらせられます」

「どうやら、俺の推測はビンゴだったようだな。」



「いやー、リアスの『女王』^{クイーン}が淹れてくれたお茶はおいしいものだな」
「痛み入りますわ」

ライザー・フェニックスとか言う部長の婚約者が副部長の淹れた紅茶を誉めていたが、副部長は嬉しそうにしていなかった。

部長もかなり不機嫌そうだった。

ライザー・フェニックスはそんな部長にお構いもなく、さつきから部長の髪を弄くつたり、太股を擦ったりしていた。

ちなみに、イツセーはライザー・フェニックスのことを恨めしそうに見ている。

「いい加減にしてちょうだい。ライザー、以前にも言ったはずよ？ 私はあなたと結婚なんてしないわ」

部長が立ち上がり、ライザー・フェニックスにも申すが、当の本人はどこ吹く風という様子であった。

「だがリアス、キミの御家事情はそんな我儘が通用しないほど切羽詰まってると思うんだが？」

「家を潰すつもりはないわ！ 婿養子だって向かい入れるつもり。でも私は、私がいいと思つた者と結婚するわ！」

「どうやら部長は自由な恋愛をご所望のようだ。だからこそ、この縁談をいやがつてるわけか。」

「先の戦争で激滅した純血悪魔の血を絶やさないとというのは、悪魔全体の問題でもある。キミのお父さまもサーゼクスさまも未来を考えてこの縁談を決めたんだ」

確かに奴の言うとおり、先の悪魔、天使、墮天使による三つ巴の戦争でどの勢力も甚大な被害が出て、悪魔も大半の純血悪魔が死に絶えた。

そのことを考えれば、純血を絶やさないためのこの政略結婚も悪魔全体にとって種の存続に関わる重大なものなのだろう。

部長も頭では理解しているはずだ。だが、心では納得できないのだろう。

「父も兄も一族の者も皆、急ぎすぎるのよ！ もう一度言うわ、ライザー。あなたとは結婚しない——ッ!?!」

部長が拒絶を口にした瞬間、ライザーは詰め寄って、部長の顎を掴んだ。

「……俺もな、リアス。フェニックス家の看板を背負ってるんだ。名前に泥を塗られるわけにいかないんだ。俺はキミの下僕を全部焼き尽くしてもキミを冥界に連れ帰るぞ」

ライザー・フェニックスの言葉を皮切りに二人の魔力が高まりだす！

マズい！ 上級悪魔二人がこんなところでやりあつたら、周りがただじゃ済まない！

「お納めくださいませ」

誰もが身構えるなか、二人の間にグレイファイアさんの静かな声が割り込んだ。

「お嬢さま、ライザーさま。わたくしはサーゼクスさまの命を受けてこの場におりますゆえ、いつさいの遠慮は致しません」

平坦な落ち着いた声色。しかし、こめられた圧力はすさまじく重い。

なんてプレッシャーだよ………!

部長も表情を強ばらせ、冷や汗を流しながら魔力を落ち着けていた。

「……最強の『女王』^{クイーン}と称されるあなたにそんなことを言われたら、流石に俺も怖いよ」

ライザー・フェニックスはおどけた様子を見せてはいるが、おそらく内心では部長と同じ状態なのだろう。

「旦那さま方はこうなることは予想されておられました。よって決裂した場合の最終手段を仰せつかっております」

「最終手段? どういうこと、グレイファイア?」

「お嬢さまがそれほどまでにご意志を貫き通したいということであれば、ライザーさまとレーティングゲームにて決着を、と」

グレイファイアさんの言葉に、部長が言葉を失う。

「……………レーティングゲーム……………どこかで……………そう
だ、生徒会長が確かそんなことを！」

「ああ、言ってたな」

「明日夏、レーティングゲームが何か知ってるのか!？」

「爵位持ちが下僕同士を闘わせて競うチェスを模したゲームだ」

「私たちが『イヴイル・ピース悪魔の駒』と呼ばれるチェスの駒を模した力を有しているのはそのためです
わ」

俺と副部長でイッセーにレーティングゲームについて説明する。

「俺はゲームを何度も経験してるし、勝ち星も多い。キミは経験どころか、まだ公式なゲームの資格すらないんだぜ」

本来なら、レーティングゲームは成人しないと参加できない競技らしいからな。

例外なのがたしか、非公式の純血悪魔同士のゲームならば、半人前の悪魔でも参加できるんだったな。その場合、多くが身内同士、または、御家同士のいがみ合いによるものだそうだ。

つまり、部長のお父さんは最終的にゲームで今回の婚約を決めようというハラなのか。

しかも、未経験者に経験者、しかもフェニックス家の者をぶつけるこのセッティング、完全に出て来レースだな。

「リアス、念のため確認しておきたいんだが、君の下僕はその男とそこに並んでいる女三人を除くメンツですべてか?」

ライザー・フェニックスは俺や千秋たちを除いたメンバーを見ながら部長に尋ねる。

「だとしたらどうなの?」

「フハハハハッ!」

ライザー・フェニックスは滑稽そうに笑うと、指を打ち鳴らした。すると、魔方陣から再び炎が巻き起こり、無数の人影が出現する。

「こちらは十五名、つまり、駒がフルに揃っているぞ」

部長側は五名。『王』^{キング}の二人を加えて、六対十六。出来レースなのに加えて、完全に部長が不利だな。

「美女、美少女ばかり十五人だとツ!?　なんて奴だツ!　・・・・・・・・・・・・・・・・なんて漢だあああつ!」

まあ、そんなことはどうでもいいとばかりにイツセーが号泣してるんだけどな。イツセーの言うとおりに、ライザー・フェニックスの眷属は皆、女性だった。そして、イツセーの目標はハーレム王——つまり、複数の女性を侍らすこと。その目標の到達点を目撃して感無量になってるんだらうな。

「……お、おい、リアス。この下僕くん、俺を見て号泣してるんだが……」

ライザー・フェニックスも軽く引いてた。

「……その子の夢がハーレムなの」

部長も少し困り顔になって答える。

「……キモいですわ」

ライザー・フェニックスの眷属の誰かがそう呟いた。

「フツ、そういうことか。ユーベルナ」

「はい、ライザーさま」

ユーベルナと呼ばれた女性がライザーに歩み寄る。

ライザー・フェニックスはユーベルナの顎を持って顔を上に向かせ、そのままキスしました。

さらには、体までまさぐり始めた。

「おまえじゃこんなことは一生出できまい、下級悪魔くん？」

……趣味悪いな。

部長も嫌悪感を出していた。

「うるせえッ！ そんな調子じゃ、部長と結婚したあと他の女の子とイチヤイチャするんだろう!? この種まき焼き鳥野郎！」

「……貴様、自分の立場をわきまえてものを言っているのか？」

「知るか！ 俺の立場はな、部長の下僕ってだけだッ！ それ以上でも以下でもねえッ！」

イツセーは叫ぶと、『ブラステッド・ギア赤龍帝の籠手』を呼び出す。

マズい……。

「ゲームなんざ必要ねえ! この場で全員倒してやる!」

『ブースト!!』

「バカッ! イツセーッ!」

俺の叫びを無視して、たいして倍加も済んでない状態でイツセーはライザー・フェニックスに突っ込む!

「ミラフ」

ライザー・フェニックスが呼ぶと、奴の眷属の中から一人の少女がイツセーの前に飛び出してきた。祭り装束みたいな和服を着用し、棍を持った小柄な少女であった。

少女は淡々と棍を突き出した!

ドゴオッ!

部室内に鈍い激突音を響く。

「あ、明日夏!?!」

イツセーは自身の目の前で少女の突き出した棍を掴んで防いでいる俺を見て驚愕していた。

少女が前に出ると同時に俺は戦闘服を身にまとい、少女の棍が突き出される瞬間になんとかギリギリ二人の間に入って棍を防ぐことができた。

「………イツセー、下がれ」

「でもっ!?!」

「いまのおまえじゃ、誰にも勝てない。俺が見た限り、この子はいつの眷属の中でも弱い部類だ。おまえはこいつの動きが少しでも見えたのか?」

俺の言葉にイツセーは苦虫を噛み潰したような表情を作って顔をうつむかせる。

「そいつの言うとおり、ミラは俺の眷属の中じゃ一番弱い。そのミラを相手にこのざまとは。はんつ、凶悪にして最強と言われる『赤龍帝ブリス・テッド・ギアの籠手』の使い手がこんなくだらん男だとはな!」

ライザーの嘲りにイツセーはますます表情を曇らせ、血が滲むほど手を握りだす。

「わかったわ。レーティングゲームで決着をつけましょう」

部長は低く淡々と、しかし力強く宣言する。

「承知致しました」

グレイフィアさんの了承を聞いたライザーは不敵な笑みを浮かべる。

「ライザー……必ずあなたを消し飛ばしてあげる!」

部長の挑戦にライザーは不敵な笑みを絶やさず、真正面から受ける。

「楽しみにしてるよ、愛しのリアス」

ライザーとその眷属たちの足下で魔法陣が光り輝く。

「次はゲームで会おう。ハハハ、ハハハハハハハハハハハ！」

それだけ言い残すと、ライザーの笑いに合わせて魔法陣から炎が燃え上がり、炎が収まるとライザーとその眷属たちは消えていた。

Life. 6 修業、始めました

「はあ．．．．．ぜえ．．．．．はあ．．．．．」

「ほら、イツセー。早くしなさい」

「は、はい．．．．．」

部長とライザーとのレーティングゲームが決まった翌日、俺たちは現在、山道を歩いていた。

なぜこんなことをしているのかというと、昨日、ライザーが立ち去ったあとにまで遡る。

『期日は十日後と致します』

『十日後？』

『ライザーさまとリアスさまの経験、戦力を鑑みて、その程度のハンデがあつて然るべきかと』

『悔しいけど、認めざるを得ないわね。そのための修業期間として、ありがたく受け取らせていただくわ』

部長とグレイファイアさんとの間にそのようなやり取りがあり、十日後のライザーとの一戦までこの山で修業することになり、修業する場所である山奥にあるという部長の別荘に向かっていた。

眷属じゃない俺たちも、修業の手伝いができればと、自主的にやって来ていた。

「大丈夫か？」

俺は隣で虫の息になりかけているイツセーに話しかけた。

「……………正直、キツイ……………」

まあ、当然だろうな。

ただでさえ、なれない山道だったのに、自分の荷物しか持っていない俺と違い、イツセーは自分の分に加え、女性陣の荷物も持っているわけだからな。

これも一応、修業らしい。

「お先に」

イツセーの横を木場が素通りしていく。

木場もイツセーと同じくらいの荷物を背負っていたが、その表情は涼しいものだった。

「クツソオオオ．．．．．木場の奴、余裕見せやがつてー」

「．．．．．失礼」

木場の余裕な振る舞いに憤慨していたイツセーだったが、その横をイツセーの十倍以上の荷物を背負っている塔城が素通りしたことで、その光景に驚いて後ろに倒れた。

山道を登ること数十分。俺たちは目的の別荘に到着した。

なんでも、この別荘は普段は魔力で風景に溶け込んでいて、人前に姿を見せない仕組みらしい。

「さあ、中に入つてすぐ修行を始めるわよ」

「すぐ修業!? やつぱり部長は鬼です!」

「悪魔よ」

別荘の中に入つてリビングに荷物を置き、動きやすいジャージに着替えるために、女性陣は二階に上がり、男の俺たちは一階の適当な部屋で着替える。

着替えている途中で、イツセーがふと木場に訊く。

「なあ、木場。おまえさ、まえに教会で戦つたとき、堕天使や神父を憎んでるみたいなのを言つてたけど、あれって?」

アーシアを助けるために教会に攻めこむときに、「個人的に堕天使や神父は好きじゃないからね。憎いと言つてもいい」と木場は言つていたな。

「イツセーくんもアーシアさんも部長に救われた。僕たちだつて似たようなものなのさ。だから僕たちは部長のために勝たなければならぬ。ね?」

「ああ、もちろんだぜ!」

質問のほうははぐらかされていたが、木場の言葉に気合を入れるイツセーだった。



そして始まった修業。部長はとくに俺を中心に鍛えあげようとしてくれていた。

そのため、他の眷属とワンツーマンで修業させられた。

木場からは木刀を使って視野に関する指導を受けた。——結局、一太刀も浴びせられなかった。

小猫ちゃんからは打撃に関する指導を受けた。——その小さな手で何度も吹っ飛ばされてしまった。

朱乃さんからは魔力に関する指導をアーシアと一緒に受けた。魔力の塊作りでは、アーシアがソフトボール大の塊ができたのに対し——俺は米粒くらいのしか作れなかった。

部長からは体作りと称して、でっかい岩を背負わされた状態でダツシユや腕立てをやらされた。やっぱり、部長は鬼だ！

そして——。

「なあ、明日夏は何を教えてくださいるんだ？」

一抹の不安を覚えながら、木刀を片手に俺の前方に立つ明日夏に尋ねる。

「俺との修業は回避訓練だな」

「回避？」

「ああ。おまえの『赤龍帝の籠手』はブーステッド・ギアパワーアップに時間を要する。しかも、そのあいだに大きなダメージを受けると、強化も解除される。それを避けるための修業だ」

なるほどな。それ抜きにしても、ダメージはなるべくないに越したことはないしな。

「で、具体的に何するんだ？」

俺がそう訊くと、明日夏は木刀を構えだした。

「俺の攻撃を避ける。それだけだ」

「えっ?」

有無を言わず、明日夏が木刀を振るってきた!

慌てて尻もちつくようにして避ける。

「えっ、ちよっ、待っ!? な、なんか、避け方のコツとかは!」

「ん、そうだな。相手の動きを予測することだな」

「ど、どうやって!」

「木場に言われたように、視野を広げて相手をよく見ろ。視線の動き、行動に移る際の仕草などからある程度は予測できるはずだ」

そう言いつつ、明日夏は木刀を上段に構える!

「あぶねっ!」

その場で横に転がって上段から振り下ろされた木刀の一撃を躲す。

「そうだ。そんな感じで俺の動きをよく見ながら避ける。てなわけで、本格的に始めるぞ」

さつきまでよりも視線を鋭くして木刀を構える明日夏。

「ちよつ、ちよつと待つ——」

有無を言わず、明日夏の手握られた木刀が振るわれた！

「うわあああああつ!？」

木刀を打ち付けられた痛みによる悲鳴が山に響いた。



「相手から視線をそらすな！　ましてや、相手に背中を見せるな！」

背中に強烈な痛みが走る。

「避けたからって気を緩めるな！　　というか、戦闘中に気を緩めるな！」

避けたと思ったら、すぐさま別の一撃が振るわれる。

「フエイントにも細心の注意を払え！　誘導するためにわざと避けさせるための攻撃にも警戒しろ！」

見事フエイントに引っかけた俺は強烈な突きで吹き飛ばされてしまった。

「……木場にも小猫ちゃんにも全然敵わねえ。魔力もアーシア以下。明日夏の攻撃も全然避けられねえ。俺いいとこなしじゃん……」

「まあ、木場や塔城は鍛えているし、それなりに実戦を経験してるんだから、敵わなくても仕方ねえよ。魔力も一応、伸ばそうと思えば伸ばせるから、あんまり気に病むな」

地面に大の字になりながらぼやく俺に歩み寄ってきた明日夏がフォローしてくれる。

「回避訓練も別にすぐ避けられるようになれなんて思ってたねえよ。重要なのは相手をよく見て、先を読める目を養うことだからな。それさえできれば、訓練前よりは回避率がぐんと上昇するはずだ。実際、訓練開始直後の段階で俺は本気の三割でしか打ち込んでいないのに対し、さっきまでは四割ぐらい本気出してたからな」

うーん、素直に喜んでいいのか微妙な数字だな……。

「それに、人にはそれぞれ特性があるしな」

特性？ 特性ねえ。

「なあ、俺の特性ってなんだと思う？」

「どスケベ」

間を開けず、ズバツと告げられた！

身も蓋もないな、おい……。

「あと——」

「ん？」

「がんばり屋で諦めが悪い——要は根性がある」

そうなのか？

まあでも、長い付き合いのこいつにそう言われちゃ、がんばらないわけにもいかねえか！

「よっしゃ！ やってやるぜ！」

「いや、少し休め」

「だはあ!？」

せっかく出したやる気を削ぐように言われて、思わずずっこけてしまった。

「休むことも修業のうちだ」

そう言って、スポーツドリンクを手渡してくれる。

まあ、実際へとへとだし、言われたとおり、休ませてもらいますか。その場に座り、受け取ったスポーツドリンクをあおる。

「そうだ、明日夏」

「ん。なんだ？」

「明日夏はなんで賞金稼バウンティハンターぎになろうとしてるんだ？」

「なんだよ、やぶからぼうに？」

「いや、ふと気になってさ。あ、いや、言いたくないなら、別に——」

「いや、とくに隠すことでもないから、別にいいけどな。ただ、おもしろくもないと思うがな」

そう言って、明日夏は自分が賞金稼バウンティハンターぎになろうとした経緯を話し始めた。



俺が賞金稼ぎバウンティハンターのことを知ったのは父さんと母さんの死から二年経つか経たない頃だったかな。

当時、兄貴から生活費については、親戚に工面してもらっていると俺たちには伝えられていた。

だが、すぐに俺はそれが嘘だとわかった。

その話を聞いた日から兄貴は学校以外のことでよく家を空けることが多くなつたからだ。それだけで、兄貴が幼い身ながら出稼ぎに出ているのだと思つた。しかも、たまに傷だらけで帰ってくることもあつたので、相当に危険なことをしているのだと思つた。

だが、普通に問いただしても兄貴は口を割らないだろうと思つた俺はどうやって聞き出そうかと思案しながら二年近く経つたある日、あの事件が起こつた。

俺の神セイクリッド・ギア器リットに宿るドレイクが俺の肉体を支配して奪おうとしたのだ。

そんな俺を救つたのが当時の兄貴だった。

兄貴は何やら特別な力でドレイクを押しさえ込んだのだ。

そして、目の前で起こつた超常な出来事に混乱した俺たちは兄貴を問いただした。

兄貴は俺たちを落ち着かせるためにやむなしといった感じで話してくれた。異能、異形の存在について、そして、賞金稼ぎバウンティハンターのことを、兄貴がその賞金稼ぎバウンティハンターになつていたこと

を。

そして、そのあとすぐに姉貴は賞金稼バウンティハンターぎになった。

それを知った俺と千秋も賞金稼バウンティハンターぎになろうと兄貴に進言したが、姉貴のときと違って兄貴には猛反対された。とても危険だからと。

それでも食い下がった俺たちに兄貴は観念して、ハンターになるのは大学卒業後からということになった。

兄貴が大学卒業後という条件にしたのは、そのあいだに俺たちが別の道を目指すことを期待してのことだろう。

だが、千秋はわからないが、少なくとも俺はハンターになることをやめる気はない。

理由はある――が、ぶっちゃけると、そんな大それたものじゃないし、個人的なすごく矮小なものだ。

それは、俺が勝手に抱いた兄貴に対する罪悪感だ。

兄貴は俺たちのために、普通の一般人が歩むような『普通な日常』というものを捨て、命の危険がある非日常的な人生を歩むようになった。しかも、兄貴はあつというまに上位ランカーのハンターになってしまった。ランクB以上の上位ランカーにはギルドから依頼を任されることもある。そして、兄貴はかなりの実力と周りからの信頼を多く持つハンターになってしまった。そのせいで、兄貴に寄せられる依頼の量は多くなり、兄

貴は律儀にもその依頼をすべてこなすため、家を空けることが余計に多くなった。いまじゃ、ほとんど家にいることはない。

俺にはそんな兄貴を尻目に普通な人生を歩もうとは思えなかった。そんな兄貴に対して罪悪感を覚えてしまったからだ。

兄貴は気にするなと言うだろうが、それでも、俺は気にした。だから、俺はハンターを目指した。

「とまあ、こんな感じだ」

イツセーに俺が賞金稼バウンティハンターぎなろうと思った理由を聞いたイツセーが言う。

「おまえってさあ、必要以上に罪悪感を抱え込んでないか？」

「そうか？」

いや、もしかしたらそうかもな。

「ま、この話はもういいだろ？ そろそろ再開するぞ」

「お、おう………!」

若干腰が引けているイツセーに、俺はわりと容赦なく木刀を振るつた。



今度はさっそく習つた魔力を使つての料理を俺とアーシアは部長に言い渡された。

「もちろん、できる範囲で構わないわ。じゃ、頑張つてね」

そう言うと、部長はキッチンから出ていった。

「お湯さん、沸いてください」

アーシアは鍋の水に手をかざして魔力を放出すると、お湯は見事に沸騰した。
やっぱりアーシアは魔力の才能があるなあ。

いっぽうの俺は朱乃さんの授業じゃ、結局米粒程度の魔力を出すのが精々であつた。

それにしても、朱乃さんのおっぱいはなかなかのものだったなあ。

授業中、体操着を押し上げるあの豊満な胸についつい目がいつてしまった。

なんて、朱乃さんのおっぱいを思い出してエロ思考になりながらタマネギを手を取った瞬間、タマネギの皮だけが見事に弾けた。

今度はジャガイモを手に取り、もう一度朱乃さんのおっぱいを思い浮かべると、これまた見事にジャガイモの皮が勝手にシユルリと剥けてしまった。

へえ、ジャガイモも楽勝じゃん。

俺はふと、朱乃さんと明日夏の言葉を思い出す。

——魔力の源流はイメージ。とにかく頭に浮かんだものを具現化することが大事なのです。

——どスケベ。

そうか！ これはもしかして、俺は無敵になれるかも！

そう確信した俺は、次々と野菜の皮を同じように剥いていく。

そうだ、俺の考えが実現できれば、俺は無敵になれるかもしれない！

「イツセーさん……」

「えっ？」

「……これ、どうするんでしょう……」

「あ」

調子に乗って皮を剥きすぎたせいでキッチン内に皮が散乱していた。

ヤバッ、どうしよう、これ？

「……なんかスゴいことになってるな？」

「わく、スゴい」

そこに明日夏と鵜さんが現れた。

「二人ともどうしてここに？」

「今晚の夕飯の準備だ。二人が魔力でできることがなくなったのなら、あとは俺たちが仕上げようってな。にしても、ここまで見事に皮を剥いてくれるとはな。しかも、皮には身がいつさい付いてねえな」

「イツセーさんがやったんですよ！ スゴいですよ！」

「わー、イツセーくんスゴ〜い！」

アーシアと鶴さんが絶賛するなか、明日夏はなぜか微妙な顔をしていた。

「……………俺の考えが外れることを祈るよ」

むむ、どうやら明日夏は俺の考えに気づいてしまったようだな。これも付き合いの長さによる賜物かな。



イツセーが大量の野菜の皮を剥いてしまったために、今晚のメニューには野菜を使った料理をこれでもかと大量に作った。

特にジャガイモの量が多くて、ポテトサラダにマッシュポテトなどのジャガイモが主体の料理だけじゃ使い切れず、他のすべての料理になんとかジャガイモを使用した。

……………人生ではじめてだ、こんなにジャガイモだらけの食卓は。

「イツセー。今日一日修行してみてもうだったかしら？」

「……はい、俺が一番弱かったです」

食事中にされた部長の問いに、イツセーは気落ちしながら答えた。

「そうね、それは確実ね。でも、アーシアの回復、あなたの『赤龍帝の籠手』ブリステッド・ギアだってもちろん貴重な戦力よ。相手もそれを理解しているはずだから、仲間の足を引つ張らないように、最低でも逃げるくらいの力をつけてほしいの」

「りよ、了解っス」

「は、はい」

ま、ちょうど、俺との修業がその逃げる、正確には回避のためのものだった。

イツセーもその回避訓練の成果か、その重大性を理解しているみたいだった。

そんな感じで、それぞれの修業の近況報告をしながらの食事が終わり、部長が席を立つ。

「さて、食事も済んだし、お風呂に入りましょうか」

「お風呂おとおおおッ!?」

部長の一言にイツセーは過剰に反応する。

「あらイツセー、私たちの入浴を覗きたいの？ なら一緒に入る？ 私は構わないわよ。朱乃はどう？」

「うふふふ。殿方のお背中を流してみたいですわ」
「わーい。イツセーくん、また一緒に入ろうよ」

なぜか、一緒に入る方向に話が進み、イツセーが目に見えてテンションを上げていた。

「鶯もオツケOKね。アーシアと千秋と燕も愛しのイツセーとなら大丈夫よね？」

部長の言葉にアーシアと千秋は顔を赤くしながらもうなずいた。

おつ、千秋も結構大胆になってきたな。

燕は肯定も否定もせず、顔を真っ赤にして若干パニックになっていた。

「小猫は？」

「……いやです」

「じゃあ、なしね。残念」

塔城の即答と部長の笑顔の一言にイツセーは崩れ落ちた。

「………覗いたら恨みます」

そして、塔城はしっかりと釘を指すのだった。



別荘の風呂は露天風呂の温泉で、浸かっていると、疲れがいい感じ取れていった。

そんななか、イツセーは壁に手を当てて、壁を凝視していた。

その壁は男風呂と女風呂を隔てている壁だった。

「イツセーくん。そんなことをしてなんの意味が？」

「黙ってるッ！ これも修行のうちだ！」

木場の言葉にイツセーは怒気を含ませて答える。

「ねえ、明日夏くん」

「……なんだ？」

「イツセーくんは透視能力でも身に付けたいのかな？」

「……知らん」

俺は木場の問いに素っ気なく返し、温泉にゆつくりと浸かるのであった。

Life. 7 修業の成果

修業が始まってから一週間が経ったある日の夜、俺は夜中に別荘を抜け出して、イツセーに修業をつけていた場所に来ていた。

中心に立ち、目を瞑る。

「すう………はあ………」

深く深呼吸をし、目を開く。

すると、俺の体から緋色のオーラが放出され始めた。

——俺の神セイクリッド・ギア器、『緋アグレッション・スカーレットい龍衣』の緋い龍気だった。

俺は頭の中でさまざまなイメージをし、それに合わせてオーラが自在に動き始める。緋い龍気を扱うには、俺のイメージが重要なのだ。

強いイメージをすれば、オーラはそれに合わせて動き、形を変えるのだ。

そして、俺は右手にオーラを集約させる。

次第にオーラはドラゴンのカタチに形態変化し始める。

「はあッ！」

俺が右手を突き出すと、眼前でオーラのドラゴンが炸裂した。

デイブラとの戦いで無意識に放った攻撃だった。

ドラゴンのカタチをしているのは、緋い龍気はドラゴンのオーラだという強いイメージが反映されたからだろう。

「……………ふう……………やっぱり、消耗が激しいな……………」

俺はいままで、『緋アグレッション・スカレットい龍衣』の力をほとんど使ってこなかった……………宿っているドレイクを警戒してだ。

そのせいで、俺はこの力をうまく扱いきれておらず、無駄も多く、精度も低かった。おまけに体力の消耗も激しかった。

俺はこの修業合宿の間を利用して、精度を上げるために鍛練していた。

そのかいもあって、いまではだいたい消耗は抑えられるようになっていたし、精度も高

いものになつていた。

だが、この攻撃は威力こそ高いが、消耗が激しかった。

「……これは連発は無理だな。加減すればできないこともないが、全力だと一日二発が限界か」

しかも、二発目を撃てば、体力が尽きてしまうだろう。……実質、全力の一撃は一発しか使えないな。

これはここぞというときに使うべきだな。

「さて——」

俺はナイフを取り出し、とある木に向けて投擲する。

ナイフはそのまま木に刺さった。

その木に向けて俺は言う。

「——いつまで隠れてるつもりだ？」

俺がそう言うと、木の陰から人影が現れた。

「やあ」

「——またおまえか……」

木の陰から現れたのは、以前に会ったローブを着こんだ謎の仮面の人物だった。

「……今度はなんの用だ」

仮面の奴は木に刺さった俺のナイフを引き抜きながら言う。

「たまたま見かけてね。興味があつたからこつそり見させてもらつてんだ」

「……また興味か。」

「ところで、キミはなんでこんなことをやってるんだい。キミはたしか、その神セイクリッド・ギアの器の

力を使ったがらなかったはずじゃなかったのかい？」

「……おまえには関係ないだろ」

「つれないなあ」

そう言い、ナイフを投げつけてきたので、それをキャッチする。

「ところで、さっきの技、スゴかったね。技名はなんて言うんだい？」

「……別に名前なんてないし、必要ないだろ」

「いやいや、技名があつたほうが、よりイメージしやすくなって、より精度が増すんじゃないかなあ」

「……奴の言うことは一応一理あつた。」

『じゃあ、俺が付けてやるよ。そうだなあ……「スカーレット・ドラゴン・アタック」——略して「スカドラアタック」なんてどうだ♪』

「……ぞとばかりにドレイクがでしゃばってくるが、明らかにわざとふざけたネーミン

グだったので、無視した。

「……………なら、おまえが付けてくれよ。センスあつたら、採用してやるよ」

胡散臭いこいつに頼むのも不安だが……………たぶん、ドレイクに比べれば、だいぶマシだろう……………。

「そうだなあ。こんなのはどうかかな？」
『スカーレット・フレイム緋い龍撃』なんて?」

まあ、ドレイクのよりは全然マシか。

俺自身、そんなにネーミングセンスあるわけじゃないからな。

「……………じゃあ、ありがたく採用させてもらおうよ」

「はは、光栄だね」

奴は踵を返し始める。

「それじゃ、私はもう行くよ。もし、気配を感じても、いないものと思ってよ」

「……次は容赦なくおまえが命名してくれた技を叩き込んでやるよ」

「おお、怖い怖い」

微塵もそんなことを思っていなかった奴はそのまま闇夜に溶け込むように消えていった。



鍛練を終えた俺は水を飲みキッチンに向かっていた。

「あつ、明日夏」

「ん、イツセー?」

キッチンに入ると、そこには水の入ったコップを持っているイツセーがいた。

「おまえも水を飲みに来てたのか」

「とうとう、おまえも?」

「ああ」

コップに水を注ぎ、一気に飲み干し、もう一回注ぐ。

「修業の調子はどうだ?」

「まあ、ぼちぼちつてところかな」

そんな感じで、少し他愛のない話をしていると、キッチンに誰が入ってきた。

「明日夏兄? イツセー兄?」

入ってきたのは千秋だった。

「おまえも水か?」

「うん」

千秋は俺たちと同じようにコップに水を注ぎ、水を飲み始めたところでイツセーは踵を返す。

「じゃあ、俺は行くよ」

「待てよ」

俺はキッチンをあとにしようとするイツセーを呼び止める。

「悩みがあるのなら聞くぞ?」

「えっ?」

唐突な俺の言葉にイツセーは素っ頓狂な声を出す。

「別に悩みなんて……」

「そんな様子じゃ、俺の目は誤魔化せねえぞ」

イツセーの表情はどこか、気落ちしている様相を醸し出していた。

いまだけじゃない。修業四日目あたりから、徐々にその雰囲気は発せられていた。

千秋も気づいていたのか、少し苦い表情を作った。

ま、一応、理由は察してはいるんだけどな。

「木場たちと自分との諸々の差に打ちのめされているのか？」

俺の言葉にイツセーは目に見えて反応する。

「……………わかってるのなら訊くなよ……………ああそうさ。ここに来て、いやってほどわかったよ。自分が一番役立たずだつて……………！……………俺には木場みたいな剣の才能も、小猫ちゃんみたいな格闘術の才能も、朱乃さんみたいな魔力の才能もない。部長みたいに頭がいいわけじゃないし、アジアみたいな回復の力もない。圧倒的に俺は弱いんだ……………！」

イツセーはこの一週間の修業で、木場たちと自分とで、あらゆるものが劣っていることをいやでも感じ取ってしまった。

むろん、木場たちの実力が才能だけでなく、それ相応に努力によつて培ってきたものであることは理解しているんだろう。

それでも、圧倒的な差を感じてしまっている。同じぐらい、相応な努力をしても足元にも及ばないと思ってしまうほどに、いまのイツセーは自分に自信をなくしている。

「イツセー兄にだって、他の誰にも持つてないものが——」

千秋はそんなイツセーを励まそうとするが、千秋の励ましをイツセーは首を振って遮る。

「俺にはそれしかないんだよ、千秋！ 『ブリスステッド・ギア赤龍帝の籠手』以外、何も無い！ そのすごい神セイクリッド・ギア器だって、俺が持つてたんじゃ意味がない！ まさに『宝の持ち腐れ』、『豚に真

珠』つてやつだな……」

「そんなこと——」

どこまでも自分を卑下するイツセーに千秋は何か言おうとするが、俺はそれを手で制す。

いまのイツセーは、言葉でどう言おうと、自信をつけることはない。

かといって、このまま自信がない状態にし続けるのもよくない。

ならどうするか？

少し考えるが、やはりこれしかないか。

.....あとで部長にどやされるだろうな。

「イツセー。ちよつと顔を貸せ」

「えっ!？」

有無を言わずに、俺はイツセーの手を引っ張り、とある場所に向かう。



明日夏に連れられてやってきた場所は、別荘から離れたところにある開けた場所。

そこは俺が明日夏に修業をつけてもらっていた場所だった。

明日夏は俺の手をはなすと、少し離れ、俺と対峙する。

千秋も俺たちについて来ていて、少し離れた場所でハラハラした様子で俺たちのことを見ていた。

「明日夏。一体何を……?」

俺が問いかけると、明日夏は無言で手を横にかざす。

すると、明日夏の指にはめられていた指輪が光り、魔法陣が現れる。

魔法陣が明日夏のことを通過すると、明日夏はジャージ姿から戦闘時に着ているコート姿になっていた。

「イツセー、ブリステッド・ギア『赤龍帝の籠手』を出せ」

「えっ!?!」

明日夏言葉に、思わず俺は慌ててしまう!

「ま、待てよ、明日夏!?!」

俺が慌てているのは、部長にこの修業期間中はブリステッド・ギア『赤龍帝の籠手』を使うと言われていたからだ。

「部長には俺が事情を説明するし、お叱りも俺だけが受けるようにする。だから、気にせず使え」

明日夏はそう言うけど、俺はなかなか素直に使おうという気になれなかった。

「そもそも、使ってどうしようってんだよ!？」

明日夏の振る舞いから、薄々察してはいたけど、あえて訊いた。

「俺と戦え」

明日夏は間を空けず、即座に言い放った。

「なんでおまえと戦わなきゃならないんだよ!？」

明日夏はただ真剣な眼差しで答えた。

「おまえに自信をつけさせるためだ」

「えっ？」

明日夏は刀を抜き、切っ先を俺に向けながら言う。

「いまのおまえには圧倒的に自分に対する自信がない。だから、少し——いや、かなり強引な荒療治だが、この戦いでおまえに自信をつけさせる。おまえはおまえが思ってるほど弱くないってことをな」

真つ直ぐ真剣な眼差しで言い切る明日夏に俺は少しだけうつむく。

そしてすぐに明日夏と向き合う！

「わかったよ！ やってやるぜ！」

決心を固めた俺は『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』を出現させる。

「ブースト！」

『ブースト
Boost!!』

籠手の宝玉から音声が鳴り響き、俺の力が高まる。

「行くぞ！」

それを確認した明日夏は刀を逆手持ちに変えて斬りかかってきた！

「ぐっ！」

咄嗟に籠手で刃を止める。

そして、すぐさま後ろに飛ぶと、明日夏が蹴りを放ってきた。

「よく避けたじゃねえか」

「そりゃ、さんざん、おまえに痛い目にあわされたからな！」

とにかく、倍加中は重い一撃を受けると、強化が解除されちゃう。ここは、明日夏に言われたように、力が高まるまで逃げに徹する！

「なら、どンドン行くぞー！」

刀を通常の持ち手に変え、ナイフも取り出した明日夏は容赦なく斬りこんできた！刀、ナイフの斬撃をなんとか避け、時折打ち込まれてくる蹴りや裏拳もなんとか避ける。

『ブースト!!』

そのあいだにも、着々と俺の力が高まっていく。

『ブースト!!』

何回目かの音声が鳴ったところで、明日夏は攻撃の手を緩めた。

「ストップだ。そこで倍加を一旦止めろ」

「お、おう」

『エクスペロージョン!!』

いまの音声は力の増大を一旦止め、一定時間のあいだだけ、強化の状態を維持できるようになった合図だ。

こうすることで、ダメージなどによる強化の解除をある程度気にせずに強化の状態を維持したまま戦えるわけだ。

「ところで、いまおまえは何回力を増大させた？」

「えっ？」

正直、避けるのに必死になっていて、数える余裕なんてなかった。

「次からはちゃんと数えておけよ。最適な回数で倍加を止めることを意識しておけば、

ある程度体力を温存できるからな。ちなみに、いまのおまえは十二回パワーアップした状態だ」

十二回!?

その回数に俺は内心で驚愕していた。

力の増大も際限なく行われるわけじゃない。

トラックに例えるのなら、俺がトラックで、増大した力が載せている荷物。

荷物がどんどん倍になっていけば、トラックは速度を出せず、やがて止まってしまう。

つまり、力が増大しすぎると俺の体に負荷がかかり、やがてそれに耐えられずに倒れ

てしまうということだ。

そして、修業が始まるまえまでは、俺はここまでの力の増大に耐えられなかったはず

なのである。

「わかるか？ おまえにもちゃんと修業の成果が現れていることに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は内心で高まった自分の力に思わず放心してしまった。

「行くぞ」

「お、おう！」

明日夏が改めて構え、俺も身構える。

「ついでに修業の続きだ」

「え？」

「相手の攻撃を避け、力を高め、そして相手に隙をできたら、そこに全力を叩き込め。そうだな。この戦いで俺に隙ができれば、すかさず魔力の塊を撃ちだせ。いいな？」

「お、おう！」

俺の返事を聞くと、明日夏はいままでにならないほどの速さで斬りこんできた！

だが、俺はその斬撃を籠手で止め、すぐさま蹴りを放つ。

明日夏は後ろに飛んで俺の蹴りを避けるが、俺は飛んでいる明日夏に駆け寄り、拳を打ち出す！

「甘い！」

明日夏は飛びながら、刀を鞘に収め、ナイフを捨てた。

「A^アt^タt^タa^クc^クk^ク！」

次の瞬間、明日夏の体から電気が迸る。

そして、俺の拳の一撃を腕で逸らされ――。

「ふうッ！」

ドゴオッ！

「ぐふっ!?!」

強烈な肘打ちを食らってしまった！

そのまま後方に吹っ飛ばされたが、俺はすぐさま起き上がった。

肘を打ち込まれたところがめちやくちや痛えけど、動けなくなるほどじゃなかった。いまの俺は、これぐらい一撃でも耐えられるようになっていたみたいだ。だが、起き上がった俺の眼前にはすでに明日夏がせまってきていた！そのまま掌底の一撃が放たれるが、俺はそれを腕を交差させて防ぐ！腕に重い衝撃が走るが、なんとかその場に踏みとどまった。

「おらあッ！」

すかさずにまた蹴りを放つけど、また明日夏に後ろに飛ばれて避けられる。

だけど、この蹴りはフェイント！

すかさず、俺は明日夏の腕を掴む！

「——ッ!？」

驚く明日夏を引き寄せ、顔面に向けて拳を打ち込む！

「ぐうつ!？」

俺が掴んでいないほうの腕でガードされたが、俺は構わずそのまま明日夏を殴り飛ばしてやった！

いまだっ！

吹っ飛ばした明日夏に向けて、籠手を装着した左手を向け、魔力の塊を作る。できたのは、修業のときと変わらず、米粒程度の塊だった。・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりこれだけ・・・・・・・・・・！」

思わず撃ちだすのを躊躇してしまおうが――。

「撃てッ！」

「――ッ!? このおおおおおッ!!」

明日夏の叫びを受け、俺は魔力の塊を撃ちだす！

グオオオオオオオオオオオンッ！

次の瞬間、手から離れた米粒程度だった魔力の塊が巨大な塊となり、そのまま明日夏を飲み込んでしまった！

魔力の塊はそのまま遙か先に飛んでいって、隣の山に直撃した。

ドツゴオオオオオオオオオオオオオオンツ！

刹那、凄まじい爆音と爆風が撒き散らされた！

爆風が迫り、腕で顔を覆って爆風に耐える。

爆風が止み、視界を広げると――。

「なっ!?!」

視界に映ったのは、大きく抉れた形を残す山だった。

つまり、俺の魔力の塊が山を吹き飛ばしたのだ！

『R e s e t リセツト』

強化が解除された合図の音声が発せられ、体から力が抜けて膝をついてしまう。

「……………流石に力を使い切ったみたいだな」

声をかけられ、顔を上げると、そこにはボロボロな状態の明日夏がいた。

コートが右腕から全体の三分の一ほどなくなっており、そこから覗く肌には大きな火傷のような傷を負っていた！

「お、おい！ やっちまった俺が言うのもあれだけど、大丈夫かよ!？」

「ん？ ああ。ちよつとかすつただけだ。心配すんな」

どう見てもかすり傷ってレベルじゃないのに、明日夏は呑気そうに言う。

「あんな攻撃でこの程度ならかすり傷みたいなものだろ。避けきれなかった俺が悪いんだから、気にすんな」

「避けきれなかった、て……………どうやって避けたんだよ!? おもいつきり直撃した

ように見えたけど!」

「ああ、それか。こいつを爆発させて、その爆風で飛んでな」

そう言って、明日夏は一本のナイフを見せてくれる。

たしか、あれって爆発するナイフだったよな。

つーか、爆風を利用して避けるとか、無茶苦茶だな、おい!

「あんな一撃を放った奴に言われたくないけどな」

た、たしかにそうかもしれないけど——ていうか、これ、どうすりゃいいんだよ!?
部長になんて説明すればいいんだよ!?

「……これはどういうことかしら? イッセー、明日夏」

「ぎゃあああ、出たああああつ!」

突然の低い声音。間違いなく部長の声だったので、思わず情けない悲鳴をあげてしまった。

「出たとはご挨拶ね、イツセー？」

見ると、不機嫌ですよ、てオーラを放っている部長と他のオカルト研究部の皆がいた。



アーシアに傷を治してもらったあと、俺は部長に事情を説明した。

「まったく。アーシアのときといい、今回といい、あなたはいつも勝手なことを……」

部長は呆れたように息を吐く。

「まあ、もともと明日、イツセーの修業の成果を確認するために祐斗と戦わせてみるつもりだったからいいけど……」

言いながら、部長はイツセーが吹っ飛ばした山のほうを見る。

「どう見ますか？」

「そうね。間違いなく、上級悪魔クラスなのは確実ね。大抵のものなら、容易に消し飛ばせるでしょう」

俺も同意見だった。

「どう、イツセー？ 明日夏の話では、自信がなかったようだけれど？」

「正直、いまだに信じられませんよ。これを俺がやったなんて……」

イツセーは自分が吹っ飛ばした山を見て、いまだに信じられないといった様子で放心していた。

「おまえは『自分は一番弱く、才能もない』って言っていたな？ そして、そんな自分が

『赤龍帝の籠手』を持っていても意味ない、と」

「あ、ああ」

「だが、実際はどうだ？ その『赤龍帝の籠手』の力を得たおまえの強さは？」

イツセーは改めて、吹き飛ばした山を見る。

「倍加が完了してからの戦闘、俺は結構本気だったぞ。最初の肘打ちで倒すつもりだったし、ガードされた掌底もガードを崩すつもりだった。おまえの最後の拳の一撃も吹っ飛ばされずその場で耐えるつもりだった。だが、俺は結局どれもできなかった。しまいには、あの魔力による一撃でこの有様だ。断言してやる。おまえは弱くねえよ。そして、これからももっと強くなれる。自分を信じろ」

イツセーは自分の手のひらをしばらく眺めると、ギョツと握る。

「明日夏の言うとおりよ、イツセー。あなたはゲームの要よ。おそらく、イツセーの攻撃力は状況を大きく左右するわ。だから、自分自身を信じなさい」

「はい、部長！ 明日夏もありがとうな！」

「どういたしまして」

今夜の俺との手合わせからイツセーは自分に自信を持つようになった。

残りの期間も修業は順調に進み、十日間の修業は無事に終わりを迎えた。

Life. 8 決戦、始まります！

決戦当日。ゲーム開始時間が迫っているなか、グレモリー眷属の皆は各々で時間潰しをしていた。

木場は今回の戦闘で使う剣の状態を確認しており、塔城はソファアに座って読書をしていた。

イツセーとアーシアは緊張した面持ちで大人しくソファアに座り、部長と副部長は優雅に落ち着いてお茶を飲んでいた。

ちなみに、アーシアだけは出会ったときに着用していたシスター服を着ていた。

これは部長が「自分が動きやすい、やりやすい服装で来て欲しい」と言われたためだ。元シスターのアーシアにとつちや、あれが戦闘服みたいなもんなんだろ。

他の皆は駒王学園の制服。木場はその上に手甲と脛あて、手に持つてる剣用の鞘を装着しており、塔城はオープンフィンガーグローブを身につけていた。

「失礼します」

部室のドアを開けて会長が副会長を連れて入室してきた。

「こんばんは、ソーナ」

「いらつしやいませ」

「生徒会長と副会長? どうして?」

「レーティングゲームは両家の関係者に中継されるの。彼女たちはその中継係」

イツセーの疑問に部長が答えた。

「自ら志願したのです。リアスの初めてのゲームですから」

「ライバルのあなたに恥じない戦いを見せてあげるわ」

部長は会長に不敵な笑みを受かべる。

そのタイミングで魔法陣が輝き、グレイファイアさんが姿を現した。

「皆さま、準備はよろしいですか?」

「ええ。いつでもいいわ」

部長やイツセーたちが立ち上がる。

それを見て準備完了と捉えたグレイファイアさんがゲームに関する説明を始める。

「開始時間になりましたら、この魔方陣から戦闘用フィールドへと転送されます」

「戦闘用フィールド？」

「ゲーム用に作られる異空間ですわ。使い捨ての空間ですから、どんなに派手なことをしても大丈夫。うふふふ」

「は、派手……ですか……?」

副部長に笑顔でされた説明に、イツセーは軽く顔を引きつらせていた。

「私は中継所の生徒会室へ戻ります。武運を祈っていますよ、リアス」

「ありがとう。でも、中継は公平にね？」

「当然です。……ただ——」

踵を返して部室から退室しようとしていた会長はドアのところまで立ち止まり、視線だけを部長に向ける。

「……………個人的にあの方があなたに見合うとは思えないだけで」

会長はそれだけ言うと、今度こそ部室から退室していった。

会長も今回の婚約には個人的には反対というわけか。

だが、立场上、それを静観することしかできない。……………あの様子からして、たぶん、何もできないことがもどかしいんだろうな。

「ちなみにこの戦いは魔王ルシファアさまもご覧になられますので」

「——そう、お兄さまが……………」

部長とグレイフィアさんの会話を聞いていたイツセーの表情が驚愕に染まる。

「あ、あの……………いまお兄さまって? 俺の聞き間違い……………?」

「いや、部長のお兄さんは魔王さまだよ」

木場の言葉にイツセーだけでなく、アーシアも驚いてしまっていた。

「ま、魔王！ 部長のお兄さんって魔王なんですか!？」

イツセーの問いかけに部長は「ええ」と短く答えた。

『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』ことサーゼクス・ルシファー。それが部長の兄であり、大戦で亡くなつた前魔王ルシファーのあとを引き継いだ現魔王ルシファーだ。

本来なら、部長の家は長子である部長の兄が継ぐはずだったが、その兄が魔王を継いだことで、部長が次期当主となった。そして、いまの騒動に繋がったというわけか。

「そろそろ時間です」

グレイフィアさんが開始時間が迫ったことを告げた。

「行きましよう」

部長の呼びかけに従い、イツセーたちはグレイフィアさんが用意した魔方阵の上に乗る。

「それじゃ、明日夏たちは部室でソーナが中継する映像で私たちの戦いを見守っていてちょうだい」

「ええ。武運を祈ります」

眷属じゃない俺たちは、この部室で部長たちの戦いを映像で鑑賞することになっていく。

俺たちにできることはもうない。ここで部長やイツセー、木場たちの戦いを見守ることしかできない。

「四人とも、応援頼むぜ!」

「うん。イツセー兄も気をつけて!」

「がんばって〜!」

「……無茶はするんじゃないわよ」

転移の光に包まれるイツセーの言葉に千秋たちがそれぞれの言葉を発するなか、俺は拳を突き出し、笑みで応えてやった。

それを見たイツセーも笑みを浮かべ、拳を突き出したところでイツセーたちは転移していった。

そして、俺たちの眼前に空中投影されたいくつもの映像が現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・こいつは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・駒王・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・学園・・・・・・・・？」

映像に映し出されたのは他でもない、駒王学園の各所の光景であった。

映像を見る限り、俺たちの通う学園そっくりであった。

——唯一違うのは空の色ぐらいだった。

それからすぐに、グレイフィアさんのアナウンスが流れ出した。

《皆さま、このたび、グレモリー家、フェニックス家に審判役を仰せつかったグレモリー家の使用人グレイフィアでございます。今回のバトルフィールドはリアスさまとライ

ザーさまのご意見を参考にし、リアスさまの通う人間界の学舎、駒王学園のレプリカを用意しました》

「……これも部長に対するハンデなのかね？」

映像とグレイファイアさんのアナウンスから何気なしに俺が呟いたことは、十中八九、そのとおりなのだろう。

《両陣営、転移された先が本陣でございます。リアスさまの本陣は旧校舎オカルト研究部部室、ライザーさまの本陣は新校舎学長室。よって「兵士」^{ホーン}のプロモーションは互いの校舎内に侵入を果たすことで可能となります》

俺は学長室、つまり、ライザーがいる場所の映像を見る。

ライザーはソファアーに座り、両隣に眷属の女を侍らせて余裕そうな佇まいをしていた。

《それではゲームスタートです》

ゴーンゴーン。

学園のチャイムを合図にゲームが開始された。

部長たちのほうの映像に目を向ければ、テーブルの上にチェスの盤面に合わせたと思しき学園の全体図を広げて、今後の動きに関する話し合いをしていた。

「駒が不足しているぶん、部長たちには本陣を固めるような布陣はできない」

「そうなると、やっぱり……」

「ああ。速攻による各個撃破しかないだろうな」

俺と千秋とで部長たちの動きの予想を立てていると、部長たちの方針が決まったみたいだ。

木場と塔城、そして副部長が外に出ると、旧校舎の周りに何かを仕掛け始めた。

おそらく、トラップなどの類だろう。

いっほう、部室に残ったイツセーとアーシアだが――。

「あああつー!」

突然、鵜が悲鳴に似た叫びをあげた。

まあ、当然っちゃ当然か。

原因はいま俺たちが見ているイツセーたちがいる部室が映っている映像だ。

映像では、イツセーが部長の膝の上に頭を乗せてソファーに横になっていた。ようはイツセーが部長に膝枕をされていた。

それを見て、千秋と燕も驚愕するなり、不機嫌そうになるなどしていた。

あと、映像の中のアーシアも頬を膨らませて涙目になっていた。

そんななか、部長はイツセーの頭に手を乗せる。

『イツセー。あなたに施した術を少しだけ解くわ』

『え——ッ!』

部長の言葉を聞いたイツセーは最初訝しげにしていたが、途端に何かに驚いたような表情になった。

『あなたが転生するのに「兵士」^{ポーン}の駒が八つ必要だったことは話したでしょう？』
『は、はい』

『でも、転生したばかりのあなたの体では、まだその力に耐えられなかった。だから、何段階かに分けて封印をかけたの。いま、それを少しだけ解放させたわ』

そういうことか。合宿での特訓で、イツセーは『ブーステッド・ギア』の力に耐えられるようになったことで、その封印されていた力にも耐えられるようになったと。これはうれしい誤算だな。

……まあ、それはいいんだが――。

「……………」

この無言の圧力を放ってる我が妹と幼馴染み二人をどうにかできないものか？
まあ、ゲームが始まればそれに集中しだして、この空気も和らぐだろう……たぶん。



いよいよ行動開始となり、俺と小猫ちゃんが体育館に向かうことになった。耳に付けた通信機器から部長の声が聞こえてくる。

『いいこと。体育館に入ったらバトルは避けられないわ。くれぐれも指示どおりに』
「はいー!」

『祐斗、準備はいい?』

『問題ありません』

『朱乃は頃合いを見計らってお願いね』

『はい、部長』

部長が通信でそれぞれの配置の最終確認をすると、力強くかけ声をあげる。

『作戦開始!』

部長のかけ声と同時に俺達は行動を開始した。

『私のかわいい下僕たち。相手は不死身のフェニックス家の中でも有望視されている才児ライザー・フェニックスよ。さあ、消し飛ばしてあげましょう!』

部長の言葉に気合い入れながら俺と小猫ちゃんは体育館に向かう。そして、体育館に着くと裏からこつそり入り、演壇の裏側まで来た。

ふう、中まで完全再現かよ。

実は本物でしたと言われても信じるレベルまで再現されていた。

「……敵」

演壇の端から中を覗いてた小猫ちゃんが呟くと同時に体育館の照明が一斉に点灯した。

「そこにいるのはわかかっているわよ、グレモリーの下僕さんたち」

「こそこそやつても無駄なことか。」

俺と小猫ちゃんはずき合おうと、堂々と出ていく。

そこにいたのは中華服を着た人と双子の子、そして、部室で俺が倒されそうになった子がいた。

「『戦車』さんと、やたらと元気な『兵士』さんね。ミラに手も足も出てなかつたけど」

中華服の人の言葉を皮切りに自己紹介を始めました。

「ミラよ。属性は『兵士』」

「私は『戦車』の雪蘭」

「『兵士』のイルです」

「同じく『兵士』のネルです」

中華服の人を見た小猫ちゃんが目を険しくさせながら言う。

「……あの『戦車』……かなりレベルが高いです」

「……高いって?」

「……戦闘力だけなら『女王』レベルかも」

「…………マジかよ。ま、こっちの不利は端からわかかってたんだ。やるしかねえ！」

『Boost!!』

俺は籠手を出し、倍加を開始させる。

「……………私は『戦車』を。イツセー先輩は『兵士』たちをお願いします。最悪、逃げ回るだけでも」

小猫ちゃんが前に出ながらそう言うけど、俺は意気揚々と前に出る。

「俺の方は心配しないでもいい。勝算はある」

俺の言葉に小猫ちゃんは首を傾げるが、すぐに相手の方に向き直す。

「よっー…行くぜー」

俺のかけ声と同時に俺と小猫ちゃんはそれぞれの相手に向かって飛び出した。



体育館でのイツセーと塔城の戦闘が始まった。

まず塔城のほうを見る。相手の『戦車』が炎を纏った脚で蹴りを放っていた。スピードでは相手のほうが優っていたため、塔城は防戦一方であった。

『はッ!』

そして、相手の蹴りが塔城の腹にクリーンヒットした——が塔城はとくにダメージを負った様子はなく、相手の脚をガツチリと掴んでいた。

すかさず塔城は相手の脚を引っ張り、それにより体勢を崩した相手を殴りつけ、怯んだところをタツクルで吹き飛ばした。

スピードは負けているが攻撃力、防御力では共に塔城のほうが圧倒していた。

『……ぐう……あなたは一体……何者……!?!』

『……リアスさまの下僕です』

どうやら、こちらは塔城の勝ちで決まりだな。
いつぼう、イツセーのほうは——。

『うわあああああッ!』

『バーラバラ♪ バーラバラ♪』

チェーンソーを持った双子の『兵士^{ポーン}』に追いかけて回されていた。

『逃げてでも無駄です♪』

『大人しく解体されてください♪』

双子は見た目とは裏腹に物騒なことを言っていた。……どうという教育されてんだよ。親の顔が見てみたいもんだ。

そんな逃げ回っているイツセーに棍使いの『兵士^{ポーン}』が一撃を加える。

「何っ!?!」

だが、イツセーは棍の一撃を上に乗って飛んで躲していた。

その後も棍使いの『兵士』^{ポーン}は棍でイツセーに攻撃を加えていくが、イツセーはそのすべてを見事に回避してみせた。双子の『兵士』^{ポーン}の攻撃もまったく当たらない気がした。

『ああもう、ムカつく！』

『どうして当たらないのよ!?!』

『………掠りもしない………!』

『兵士』^{ポーン}たちは自分たちの攻撃が当たらないことに段々と焦りや苛立ちを見せ始めてきた。

『へへ、こんなの明日夏のに比べたら全然!』

どうやら、俺との修行の成果が出ているようだな。

合宿が終わるころにはイツセーの回避率は相当なものになっていた。あんな体型に合っていないチェンソーの大振りや単調な棍の突きや薙ぎ払いではいまのイツセー

には傷ひとつ付けられないだろう。

さて、他は――。

別の映像を見ると、ライザーの他の『ポイン兵士』三人が、別働隊となつて部長たちの本陣である旧校舎を目指していた。

『なんかやけに霧が出てきたわね？』

『ポイン兵士』三人のうちの一人が言うとおり、『ポイン兵士』たちの周りに霧が発生していた。

次の瞬間、霧の中から赤い光弾のようなものが飛んできた。

そう、この霧は自然発生したものではなく、副部長が発生させたもので、木場と塔城が仕掛けたトラップを隠していたのだった。

『トラップ？ にしても大したことはないわ』

『まあ、こんなの子供騙しよ』

『初心者らしいかわいい手だわ』

だが、『ポイン兵士』たちは木場と塔城が仕掛けたトラップを難なく躲してしてしまう。

『こんなトラップで守れるなんて、本気で思ってたのかしら?』

そのまま、『兵士』^{ポーン}たちはトラップゾーンを突破し、ついに部長たちの本陣である旧校舎の前に到達してしまう。

『あれが敵本陣ね——ッ!?!』

『どういうこと!?!』

だが、突如として旧校舎が霧に交わるように消失してしまったのだった。

『残念だったね』

そこへ、霧の中から木場が悠々と現れた。

『もう、ここから出られないよ。キミたちはうちの『女王』^{クイーン}が張った結界の中にいるからね』

『しまった！ トラップに気を取られすぎて!?!』
『人手不足は知恵で補わないと』

そう、あのトラップの本当の目的は相手の意識を釘付けにするためのものだった。
『兵士』たちは見事にそれにはまり、副部長の張った結界内に誘導されたのだ。

あの霧の正体も、副部長がはった幻術を内包した結界だったのだ。

だが、本当の罠にはめられた『兵士』たちは相手が木場一人だと分かった途端、余裕を取り戻しだす。

『わりと好みだから言いたくないんだけど、もしかして三対一で勝てると思っているの?』

『試してみるかい?』

『兵士』たちの内の一人の問いに対し、木場は不敵に笑む。

地の利は木場にあるし、ここも大丈夫だろう。

改めて、イツセーのほうの映像を見る。

こっちもそろそろ決着が着きそうな雰囲気だった。

『ブースト!!』

『よつしやあああッ! 行くぜ、「赤龍帝の籠手ッ!』

『エクस्पロージョン!!』

イツセーは倍加をストップさせ、強化された身体能力で一気に攻めだした。

『ひとつ!』

『きやつ!』

『ふたつ!』

『きやあ!』

あつというまに双子に一撃を入れて吹き飛ばした。

『たあッ!』

そこへ棍使いが突きを繰り出す、イツセーは体を捻って避け、棍を掴み、そのまま一撃を加えて叩き折った。

『なッ!!?』

『三っ!』

『きやあっ!!?』

そして、棍を折られ動揺していた棍使いにも一撃を入れて吹き飛ばした。

『……私の棍を……!!?』

『かああ、痛つてえ……』

どうやら、棍が頑丈だったのか、イツセーの棍を叩き折ったほうの手が赤くなっていた。

『……こんな男に負けたら……!!?』

『……ライザーさまに怒られちゃうわ……!』

『ポーン兵士』たちは負けられないとまだ立ち上がる。

そんななか、イツセーは決着がついたと言わんばかりの顔をしていた。

『もう許さない!』

『絶対にバラバラにする!』

『いまだ! くらえ! 俺の必殺技! 「ドレス・ブレイク洋服崩壊」ツ!』

パチン。

イツセーが指を鳴らした瞬間に起こったことは――。

『『いやああああああつ?!』』

『ポーン兵士』たちの着ている服が弾け飛ぶ光景であった。

「は」

開いた口が塞がらなかった。

『ふはははは！ どうだ、見たか！ 脳内で女の子の服を消し飛ばすイメージを永遠と、そう永遠と妄想し続け、俺は持てる魔力の才能をすべて女の子を裸にするために使いきったんだ！ これが俺の必殺技「洋服崩壊」ドレス・ブレイクだ！』

．．．．．最低な必殺技であつた。

おそらく原理は、女性に接触した瞬間、自らのイメージを魔力にして送り込んだのだろう。独創的で、イツセーらしい技だが——なんと言うか．．．．．我が友人ながら、なんとも酷い技だ。

『最低！』

『ケダモノ！』

『女の敵！』

『兵士』^{ポーン}たちが非難の声をあげる。まあ………当然の反応だな。

合宿のとき、あいつが魔力で野菜の皮を剥きまくっていたのを見て、もしやこんな技を生み出すのではないかと思っただが………現実になってしまったか。

見ると、燕は額に手を当てながら溜め息をついていた。千秋もなにやら複雑そうな表情だ。

「すごい！ 完成したんだ〜！」

「「はあっ？」」

そんななかで聞こえた鶴の言葉に俺たちはマヌケそうな声を出してしまい、開いた口が塞がらないでいた。

「ちよ、ちよつと、姉さん！ イッセーのあれ知ってたの!？」

「ん〜、知ってるも何も、アーシアちゃんと一緒に技の完成を手伝ったからね〜」

どうやら、あの技の完成にはアーシアも一枚噛んでいるようだ。

というか、何やってるんだ、二人とも………。

「完成の手伝いって、それって実験体になったってことじゃないの!? 何考えてるのよ!?」

「何って、イツセーくんのお手伝いしたかったから」

たぶん、本当に純粹にイツセーの手伝いをしたかったのだろう。おそらく、アーシアも。

たぶん、自主的にだろうな。恥じらいとかよりも、惚れた男の力になりたいという気持ちのほうが強かったのだろう。

まあ、とりあえず、『^{ポーン}兵士』たちも、あれではもう戦闘はできないだろう。

ちなみにイツセーは技が決まったことに悦に浸っていたため、『^{ポーン}兵士たちの非難の声はまったく耳に入っていなかった。

『……見損ないました』

塔城の容赦のない非難。さすがに仲間の塔城の声は来るものがあつたのか、イツセーもバツの悪い顔をしていた。

そんな塔城のほうも相手の『戦車』^{ルーク}を倒していた。

これにより、体育館は部長たちが手に入れた。

だが、その矢先にイツセーと塔城は部長の指示で体育館から立ち去った。

『逃げる気!?! まだ勝負はついていないわ!?!』

『重要拠点を捨てるつもりか!?!』

そんな二人の行動にライザーの眷属たちは驚愕していた。当然だろう。体育館は旧校舎と新校舎を繋ぐチェスでいうところの『センター』、つまり相手が言うように重要拠点なわけだが、二人は状況が有利とはいえ、決着がついていないにも関わらず、体育館から退いた。

一見、二人が重要拠点を捨てたように見える。

そして、二人が体育館から出て少し離れた刹那――。

カッ!

体育館に閃光が走った。

ドオオオオオオオオオオオンッ!

次の瞬間には体育館が轟音をたてて跡形もなく消し飛んでいた。

『撃破』
『テイク』

そんな跡形もなく消失した体育館の近くに副部長が悪魔の翼を広げて空に浮いていた。いまのは副部長が放った雷撃だったのだ。

《ライザーさまの『兵士』^{ボーン}三名、『戦車』^{ルーク}一名、戦闘不能》

その後、グレイファイアさんのライザーの眷属たちのリタイアのアナウンスが聞こえてきた。

「部長も大胆な作戦を立てたもんだ」

体育館が重要拠点であるということは、両チームともそこを押さえようと人数を集める。そう、人数が集まるのだ。だからこそ、部長は重要拠点をあえて囲にし、大技で一網打尽にしたのだ。これが部長の立てた作戦。別働隊の対処法といい、初めてとは思えないゲーム運びだった。

とはいえ、これでライザーのほうもおそらく、部長に対して本気を出すようになるだろう。

ゲームはまだ序盤。ここからが本当の戦いとなるだろう。

Life. 9 絶賛、決戦中です！

「……………ス、スツゲエ……………！」

部長の作戦で消し飛んだ体育館とそれをやった朱乃さんを見て、思わず唾然としてしまふ。

「……………朱乃さんの通り名は『雷いかづちの巫女』。その名前と力は知る人ぞ知る存在だそうですね」

『雷の巫女』、かあ……………。あんなのでお仕置きされたら確実に死ぬな。小猫ちゃん共々、絶対に怒らせないようにしよう。

なんて思っていると、部長から通信が入った。

『まだ相手のほうが数は上よ。朱乃が二撃目を放てるようになるまで時間を要するわ。』

朱乃の魔力が回復しだい、私たちも前に出るから、それまで各自、次の作戦に向けて行動を開始して』

次の作戦は陸上競技のグランド付近で木場と合流し、その場の敵を殲滅することであった。

にしても、木場の奴、大丈夫か？ ま、あいつのことだから、爽やかな顔をしてちゃんとやってんだらうけど。

「小猫ちゃん、俺たちも行こうぜ」

そう言つて、肩に触れようとしたら、さりと避けられた。

「……………触れないでください……………」

蔑んだ声と顔でジトと睨まれる。

どうやら、『洋服崩壊』ドレス・ブレイクを警戒されているようだ。

「だ、大丈夫だよ。味方に使うわけないだろ」

「……………それでも最低な技です」

どうやら、本格的に嫌われたような……………無理もないか。

「あ、待ってよ、小猫ちゃん!？」

俺を置いて行ってしまう小猫ちゃんを急いで追いかける。

ドオンツ!

「うわあああつ!？」

いきなり目の前で爆発が起き、俺は爆風で吹っ飛ばされてしまった!

「……………ぐうう……………つ、小猫ちゃん!？」

小猫ちゃんがいたところを見ると、爆発によってボロボロになった小猫ちゃんが横たわっていた!

俺は急いで小猫ちゃんに駆け寄り、抱き抱える!

「撃破^{ティク}」

謎の音が聞こえ、声が出た方を見ると、部室でライザーとキスをしていた女がいた。

「クツソオ! ライザーの『女王^{クイーン}か!?!」

「ふふふ」

たしか、あいつがライザーの『女王^{クイーン}』だったはずだ。俺は相手を睨みつけるが、ライザーの『女王^{クイーン}』は不敵に笑うだけであった。

「……………すみません……………」

「小猫ちゃん!?!」

「……………もつと……………部長のお役に……………」

「大丈夫だ！　アーシアがこんな傷、すぐに回復して——小猫ちゃん！　小猫ちゃんツ
!？」

俺の呼びかけも虚しく、小猫ちゃんは光の粒子となって消えてしまった。

《リアスさまの『戦車』一名、リタイヤ》

グレイファイアさんの無情なアナウンスが聞こえてきた。

「クツソオ！　よくも小猫ちゃんを！」

「ふふふ。獲物を狩るときは、何かをやり遂げた瞬間が一番やりやすい。こちらは多少の駒を『犠牲』にしてもあなたたちの一人でも倒せれば、人数の少ないあなたたちには十分大打撃ですもの。いくら足掻こうと、あなたたちにライザーさまは倒せないわ」

愉快そうに笑うライザーの『女王』に俺は怒りで体を震えさせる。

「降りて来やがれええツ!?　俺が相手だ！」

『………落ち着きなさい、イツセー』

俺を諫めるように部長から通信が入る。

『戦闘不能になった者はしかるべき場所に転送されて、治療を施されるわ。小猫は死んだわけじゃないの………冷静になりなさい………!』

顔は見えないし、冷静そうだけど、明らかに部長の声が震えていた。

「でもツ!?’

「諦めなさい坊や。いくら足掻いても私たちには勝てないわよ」

「——ツ!」

ライザーの『女王』^{クイーン}が手に持つ杖を構えたのを見て、俺は身構える!

「あらあら」

「あ、朱乃さん!」

そこへ、俺とライザーの『女王』^{クイーン}の間に朱乃さんが降り立った。

「イツセーくん。ここは私に任せて、先をお急ぎなさい。うふ、心配には及びませんわ。私が全身全霊をもって、小猫ちゃんの仇を討ちますもの」

「わかりました、朱乃さん！」

朱乃さんの言葉でようやく冷静さを取り戻した俺は、その場を朱乃さんに任せ、グラウンドに向けて駆けだした。

直後、背後で爆発音が鳴り響いた。



《ライザーさまの『兵士』^{ボーン}三名、リタイヤ》

グラウンド付近まで来たところでグレイファイアさんのアナウンスが聞こえた。

「三人!? ——つて、うわあ!?!」

いきなり誰かに引つ張られ、体育用具を入れる小屋の中に連れ込まれた!

「やあ」

引つ張った犯人は木場だった。

「おまえかよ! あつ、いまの三人つて?」

「朱乃さんの結界のおかげでだいぶ楽できたよ」

やっぱり、いまのアナウンスは木場がやったことだったのか。

「………木場、悪い。小猫ちゃんが………」

「聞いたよ。………あまり表に出さない子だけど、今日は張り切っていたよ。………
無念だったろうね」

俺はそれを聞き、木場の前に拳を突き出す。

「勝とうぜ、絶対！」

「ふ、もちろんだよ！」

俺が差し出した拳に、木場が自分の拳を当てる。普段は癪に障るイケメンだが、戦闘になれば頼りになる味方だ。

『祐斗、イツセー、聞こえる？』

そこへ、部長から通信が入る。

『私はアーシアと本陣に奇襲をかけるから、できる限り敵を引き付けて、時間を稼いでちょうだい』

「奇襲！」

『やむを得ないわ。朱乃の回復を待って、各個撃破する予定だったけど、敵が直接「女王」クイーンをぶつけてきてわね』

「しかし部長、『王』^{キング}が本陣を出るのは、リスクが大きすぎますよ!」
『敵だつてそう思うでしょう。そこが狙い目よ。いくらフェニックスの肉体が不死身だといつても、心まではそうじゃない。戦意を失わずほどの攻撃を加えれば、ライザーに勝つことができる。この私が直接ライザーの心をへし折つてあげるわ!』

部長の力強い宣言と共に、通信が途絶える。

部長の決意に満ちた言葉に、俺は腹を決めた。木場も同じ様子だ。

「そうと決まれば、オカルト研究部悪魔男子コンビで——」

「派手に行くかい!」

俺たちは小屋から一気に飛び出て、グラウンドの真ん中に立つと、大声で叫んだ。

「やい! どうせ隠れてるんだろ! 正々堂々勝負しやがれ!」

「ふふふふ……」

俺の声に應えるように、誰かの笑い声がグラウンドに流れる。声の方向へ視線を向け

ると、土煙の向こうに、甲冑を着込んだ女が立っていた。

「私はライザーさまに仕える『騎士』、カーラマインだ。堂々と真つ正面から出てくるな
ど、正気の沙汰とは思えんな。だが、私はおまえらのようなバカが大好きだ！」

そう言うのと、剣を抜き、炎を纏わせた。そして、こちらからは木場が前に出た。

「僕はリアスさまに仕える『騎士』、木場祐斗。『騎士』同士の戦い、待ち望んでいたよ！」
「よくぞ言った。リアス・グレモリーの『騎士』よ！」

直後、二人は一直線に突っ込むと、真正面から切り結び、すぐに離れ、火花散る凄まじい剣戟を繰り広げる。次第に二人の戦いは段々とヒートアップしていき、俺の目では追えない位の速さによる戦いになっていった。

「……………スツゲエ……………つか、俺の出番なくね……………?」

「そもそも限らないぞ」

「——ッ!？」

背後から声をかけられ、振り返ると、顔の半分には仮面を着けている女がいた。

「……カーラマインったら、頭の中まで剣、剣、剣で埋め尽くされているんですもの」

そこへもう一人、金髪のお嬢様風の子が現れた。

「駒を犠牲にするのも渋い顔をしてましたし。まったく、泥臭いっただら。しかも、せつかくかわいい子を見つけたと思ったら、そちらも剣バカだなんて。まったく、ついてませんわ」

さらに、その子の後ろに三人、別の方向からも一人現れて、俺は完全に囲まれていた。というか、残りの駒が全員現れた!

これで本陣はライザーだけになるから、部長の読みは当たったということか。

「それにしても、リアスさま——」

「ん?」

金髪の子が俺を品定めするように見てきた。

「殿方の趣味が悪いのかしら?」

「——つ、かわいい顔をして、毒舌キャラかよ! 『赤龍帝ブーステッドギアの籠手』 ツ!」

『ブースト
Boost!!』

俺は籠手を出し、金髪の子に対して構えた。

「あら、ごめんあそばせ。私は戦いませんの」

「はああ!」

「イザベラ」

金髪の子が呼ぶと、仮面を着けた女が近づいてきた。

「私はイザベラ。ライザーさまにお仕えする『戦車』^{ルーク}だ。では行くぞ、リアス・グレモリーの『兵士』^{ポーン}よ!」

そう言うと、殴りかかってきた!

「うわっ!?!」

俺は相手の攻撃を避けながら、思わず疑問に思ったことを訊いた。

「お、おい! あいつなんなんだよ!? 戦わないってどういうことだ!?!」

『僧侶』^{ベシヨツ}として参加はしているが、ほとんど観戦しているだけだ」

「なんだそりゃ!?!」

これ、おたくらにとっても大事なゲームなんだから! なんてそんなことになってんの!?

「彼女は——いや、あの方は、レイヴェル・フェニックス」

「フェニックス!」

「眷属悪魔とされているが、ライザーさまの実の妹君だよ」

「妹ッ!」

その子のほうを見ると、にこやかにして、こちらに手を振っていた。

「ライザーさま曰く『ほら、妹萌えって言うの？ 憧れたり、羨ましがる奴、多いじゃん。まあ、俺は妹萌えじゃないから、形として眷属悪魔ってことで』なのだそうだ」

あの鳥野郎、本当に変態でバカだったのか!?でも、妹をハーレムに入れたいっていうのは十分に理解できるぜ。

「——って、おわっ!」

などと考えているあいだに打ち込まれた『戦車^{クルマ}』のイザベラの拳の一撃をすんでのところまで避ける!

「思ったよりはやるようだな？」

「そりゃあ——おっと！俺だって、伊達に小猫ちゃんや木場、明日夏と修行してたわけじゃねえからな！　って、あぶねッ！」

攻撃の合間に蹴りを放ってきたが、後ろに思いつきり飛んでかわした。

うん、明日夏との修行で回避能力が格段とアップしているな。

「ほお、以前とはまったく違う。リアス・グレモリーはよく鍛えこんだようだな」

「そうだ、俺は部長にとことん鍛えられた、リアス部長の下僕だ！　だから、負けられねえ！　俺は部長のためにもあんたを倒すッ！」

とはいえ、一定以上パワーアップするまでは逃げの一手しかねえけどな。

『^プース^ト
Boost!!』

これで五回目のパワーアップ！　『^ホーン^ン兵士』相手なら十分かもしれねえが、『^ルック^ク戦車』相手じゃまだ心もとなない。

ここはまだまだ耐えるしかない！



イツセーと木場がグラウンドでライザーの眷属たちを引き付けているあいだに、部長はアーシアを連れて本陣に奇襲を仕掛けるため、新校舎に侵入していた。

『待っていたぜえ』

『——っ!?!』

そんな部長に声をかける存在がいた。いま、新校舎内でアーシア以外に声をかける人物は一人しかいない。

『ふふふふ、はははは、愛しのリ〜ア〜ス♪』

そこには部長が来ることがわかっていたかのように、余裕の表情見せながら、新校舎玄関ホールの上階の手摺に腰をかけながら見下ろしているライザーがいた。

『私が来るのはお見通しだったわけね?』

『初心者バージンが経験者をなめちやいけないよ、リクス♪』

『……相変わらず品のないヒトね』

『女王クイーン』の配置といい、やっぱり部長の手は読まれていたか。

「……読んでいたのなら、なんで眷属を全員、イツセー兄たちのほうに……?」

「簡単だ。部長のプライドをへし折るためだ。部長を手のひらで踊らせたうえで、真つ向から部長の作戦を潰すことで——」

「部長に圧倒的な実力差を見せつける……そうすることで——」

「ああ。部長の意思を挫くには効果的でもある。奴にはそれをやるだけの实力があるつてことだ」

今回の出来レースを組んだだけはあるってわけか。

『ここじゃなんだあ、もつと見晴らしのいいところでデートと洒落こもうぜ、リクス
♪』

『ふざけないで！　いいわ、あなたを消し飛ばしてあげるわ！』

ライザーの挑発に乗ってしまった部長はアーシアと共にライザーのあとについて
行ってしまう。

「……………見晴らしのいい場所って？」

「部長の様子がイツセーたちによく見える場所だろう。そうすることで、イツセーたち
を煽る気なんだろ」

完全に部長たちを潰す気だな。

バキイイイン！

突然、何かが砕け散る音が響いたため、そちらの映像を見ると、木場の剣が相手の
『騎士』^{ナイト}によって砕かれていた。

『ホーリー・レイザー
光喰 剣が!?!』

『残念ながら、その攻撃は私に通用しない』

あの剣は光を喰らう特性があつた。そのため、光を扱うフリードやはぐれ悪魔エクスシスト払い相手には有効だったが、いまの相手が扱うのは炎。その特性がまったく活きないのであつた。

だが、そんな状況にも関わらず、木場は不敵に笑んでいた。

『ならこれはどう? 凍えよ!』

次の瞬間、柄から氷が生成され、氷が砕けると、新たな刀身が現れた。

『——っ!? 貴様、セイクリッド・ギア 神 器をふたつも!』

相手の『騎士ナイト』は剣を振るうが、木場の剣の刀身に当たった瞬間、纏エっていた炎ごと刀身が凍り、砕け散った。

『——ッ！ なんの、我ら誇り高きフェニックス眷属は炎と風と命を司る！』

そう言うと、短剣を取り出し、炎と風を纏わせる。

『貴様の負けだあ！』

そして、短剣の一振りで木場の氷の魔剣が容易に砕かれた。

『フッ』

だが、木場はいまだに笑みを崩さなかった。

また柄から刀身が現れ、今度は先端に穴が開いた剣が現れた。

『——っ!?!』

『はッ！』

木場のかげ声と同時に魔剣の穴に短剣の風が炎ごと吸い込まれていった。

『貴様、一体いくつ神セイクリッド・ギア器器を持っている!?!』

相手の問いを木場は笑みを浮かべながら否定する。

『僕は複数の神セイクリッド・ギア器器を持っているわけじゃない。ただ作ったただけだ』

喋りながら振るわれた剣を相手は後ろに飛んで躲すが、木場は構わず地面に手を着ける。

『ソード・パース魔剣創造』。すなわち、意思どおりに魔剣を創りだせる』

相手がかげを察したのか、その場から飛び上がると同時に相手のいた地面から複数の魔剣が飛び出てきた。

駿足の足と多彩な魔剣——あれが木場の本領か。

木場はあの調子なら、なんとかなるか。

さて、イツセーのほうは——。



スツゲエ……あいつ、あんな力を……。
木場の戦いぶりを見て、思わず呆気に取られてしまった。

「おまえ！ 戦闘中によそ見をするなッ！」

「しまっ——ぐあぁっ!？」

木場のほうに意識を向けていたから、反応が遅れて初めて相手の攻撃をもらにくらってしまい、後ろに吹っ飛ばされてしまった。

クツソオ……明日夏に散々注意されたのに、やらかしちまった。
けど、そろそろなんだけどな……。

『ブースト
Boost!!』

「——っ、来たああッ!」

待ちに待った十五回目のパワーアップ! これで最大回数だぜ!

『エクスプロージョン
Explosion!!』

倍加を止めると同時に俺は腕を前に突き出す。

「ドラゴン波ならぬドラゴンショット!」

そして、魔力の塊を向かって来るイザベラに向けて撃ち出した。

グオオオオオオオオオオンッ!

「——ッ!?!」

イザベラは驚愕しながらもすんでのところ、俺の一撃を躲した。

避けられたドラゴンショットはテニスコートまで向かっていった。

ゴオオオオオオオンツツ！

次の瞬間、地を響かせる轟音が鳴り響き、巻き上がる突風と共に赤い閃光が俺たちを襲う！

爆風が止み、テニスコートのほうを見ると、テニスコートが跡形もなくなっており、巨大なクレーターができあがっていた！

だいぶセーブしたつもりだったのに………
にも関わらず、この威力である。

「………危険だ………！
あの神セイクリッド・ギア 器は！
ここで私が倒しておかねばツ
！」

俺のドラゴンショットの威力を見て、危険だと判断して焦ったのか、イザベラが一気に攻めてきた。

だが、焦っていたためか、攻撃が単調になっていた。

「しめた!」

俺はイザベラの拳を避け、逆に俺の拳を当てる。

「……………それで当てたつもりか?」

たいしたダメージになっていなかったからか、イザベラは訝しげな表情を作る。けど、当たれば十分であった。

「弾ける! 『洋服崩壊』!」

パチン。

俺が指を鳴らすと、イザベラの服が弾けとんだ。

「なっ、なんだこれは!?!」

イザベラは自分の身に起こったことに驚愕し、大事な部分を隠す。

その裸体はさっきの『兵士』の三人とは違い、見事なプロポーシオンであった。速攻でその光景を脳内の新種ホルダーに名前を付けて保存した！

「よし行くぜ！」

そしてすかさず、動きが止まったイザベラに向けて、もう一度ドラゴンショットを撃ち込んだ！

「——っ!？」

俺の魔力がイザベラを包み込み、イザベラは光の粒子となって消えた。

「イザベラが!？」

《ライザーさまの『戦車』^{ルーク}一名、リタイア》

ライザーの妹の驚きの声とグレイファイアさんのアナウンスが俺の耳に届いた。

「勝ったあつ!」

俺は自分の勝利に歓喜した。

「……………しかし酷い技だ。いや、女にとつて恐ろしい技と言うべきか……………」
「……………僕も初めて見たんだけど……………なんと言うか——うちのイツセーくんがスケベでゴメンなさい」

「——つて、こらあ! 見も蓋もない謝り方するなあ、木場あつ!」

「だけど……………」

「だけどじゃねえよ、イケメン!

「しかし、魔剣使い……………数奇なものだ。私は特殊な剣を使う剣士と戦い合う運命なのかもしれない」

「へえ、僕以外の魔剣使いと戦ったことがあるのかい?」

「いや、魔剣ではない。——聖剣だ」
「——っ」

その言葉を聞いた瞬間、木場の雰囲気がからりと変わった！

「その聖剣使いについて訊かせてもらおうか？」

「ほう、どうやらあの剣士は貴様に縁があるのか？　だが、剣士同士、ここは剣にて語ろう！」

「………そうかい。………口が動ければ、瀕死でも問題ないか」

二人の間の殺気がドンドン強くなっていく！　ていうか、木場の迫力がとんでもなかった！

いったいどうしたってんだよ、木場!?

「その『^{ポーン}兵士』さん」

「ん?」

木場の変化に戸惑う俺に、ライザーの妹が声をかけてきた。

「あれ、なんだかわかりますかしら?」

「え? はっ!? 部長おっ!」

彼女が指差す先を見てみると、新校舎の屋上に、部長とアーシアがいる! 対峙しているのはライザーだ!

直接仕掛けるっていつでも早すぎるだろ!

確かに、俺たちが敵を惹きつけているところを部長がライザーに奇襲する手筈だった。でも、俺たちが戦いを始めてから数分しか経っていないのに、いくらなんでも早すぎる! ましてや、あんな正面で向き合って対峙しているんじゃない。奇襲もなにもない。ああなってるってことはつまり――。

「……………こちらの手を読まれていたのか……………!?!」

木場が俺の考えていたことを代弁した。

やっぱりそうなるのかよ！

「『一滅殺姫《ルイン・プリンセス》、『聖母の微笑』、『雷の巫女』に『魔劍創造』、
 プリーステッド・ギア『赤龍帝の籠手』。御大層な名前が並んでいますけれど、こちらは『不死鳥』、不死なので
 すわ」

「——っ!？」

いつのまにか、残りのライザーの眷属全員に囲まれていた！

「おわかりになりますか？　これがあなた方にとって、どれだけ絶望的であるか？　ニイ

！　リイ！」

「にや」

その名が呼ばれると、獸耳を生やした女の子二人が構えを取った。

「この『兵士』^{ポーン}たち、見た目以上にやりますわよ」

「にや——」

獣娘二人が同時に飛び込んできた!

「——っ!? ブ、『赤龍帝の籠手』ッ!」

『ブースト!!』

慌てて倍加を開始して回避に専念しようとしたが、さっきの戦いの疲れで若干動きが鈍くなっているうえ、相手の動きがトリッキーで動きを追えないせいか攻撃を避けられないでいた。

「最低な技にや!」

「下半身でものを考えるなんて!」

「愚劣にや!」

「ぐはっ!」

言いたい放題言われてもの申したかったが、攻撃をモロにもらってしまったていて、そんな余裕はなかった。

「……………はあ……………はあ……………」

「決めなさい、シーリス！」

「——っ!？」

「ハアアアッ！」

ライザーの妹の指示で上からシーリスと呼ばれた女性が大剣を振り下ろしてきた！
俺はなんとか避けるが、たて続けに大剣を振り回してきた！

木場や明日夏、カーラマインに比べれば直線的だったが、威力は確実に上であった。

「マジヤバい!？」

ドゴオオオオン！

そんななか、新校舎のほう——部長とライザーが戦っている場所から爆発音が聞こえてきた！

「——っ！ 部長おおっ!？」

俺は通信機で部長に呼びかける。

『私は大丈夫。私のことよりも、いまは目の前の敵を』

『でもっ!』

『私はあなたを信じているわ、イツセー！ このリアス・グレモリーの下僕の力を見せつけておやりなさい!』

そうだ、俺は部長の下僕なんだ。

ガキイイイイン!

俺は籠手で相手の剣を止めてやった。

「シーリスの剣をつ!？」

「腕でっ!？」

何も考えることなんてねえ！ 部長のためだけに俺はおまえらを――。

「ぶっ倒すツ！」

バキイツ！

そのまま剣を掴み、握り砕いてやった！

「何!? きやつ!？」

怯んだところをさらに蹴り飛ばし、俺は籠手に語りかけた。

「赤い龍帝さんよ、聞こえてんなら応えろ！ 俺に力を貸しやがれ！」

『ドラゴンブースター!!』

籠手から力が流れ込んでくるが、こんなんじや足りない!

「もつとだ! もつと俺の想いに応えろ! 『赤龍帝の籠手』アアアツ!!」

『ドラゴン ブースター seccondo Liberation!!』

初めて聞く音声が発せられた瞬間、籠手から膨大な量のオーラが吹き溢れ、籠手の形が変化した。

「か、変わった!?!」

そして、籠手から脳内に情報が流れ込んできた。

そうか、これが俺の新しい力か。

なら!

「木場あつ! おまえの神セイクリッド・ギア器を解放しろ!」

「解放!?!」

「早くしろ！」

木場は当惑しながらもうなずき、剣を地面に突き刺した。

『ソードベース魔劍創造』 ツー！』

木場の神セイクリッド・ギア 器の波動が俺に向かってきた。

「うおおりやあああつ！」

『トランスファーTransferrer!!』

俺はその波動に俺の新しい力を使った瞬間、俺を中心に無数の剣が出現した！
 そして、ライザーの眷属たちは皆、出現した剣によって貫かれていた。
 そのまま、ライザーの眷属たちは光の粒子となって消えていった。

《ライザーさまの『ボーン兵士』二名、『ナイト騎士』二名、『ビショップ僧侶』一名、リタイア》

『ブレーステッド・ギア・ギフト
赤龍帝からの贈り物』だああつ!

グレイファイアさんのアナウンスを聞くと同時に、俺は新しい力の名称を勝利の雄叫びのように叫んだ。

Life. 10 決戦、終了です！

新しい力、『赤龍帝からの贈り物』。籠手で高めた力を他の者、もしくはものに譲渡し、力を爆発的に向上させることができる。この力で木場の神セイクリッド・ギアの力を高め、ライザーの眷属たちを一網打尽にできた。

この力があれば、部長や朱乃さん、いまみたいに木場、もしくはアーシアの回復能力を強化してもいい。皆の力を高めることができる。この力があればライザーに勝てる！

ドオオオオオオオオオンツツ！

心の中で俺たちの勝利を確信した刹那、聞き覚えのある爆発音が響き渡った！

「えっ?！」

爆発が起こったと思しき場所に視線を向けると、空中に爆煙ができていた。そして、爆煙から何かが飛び出てきた。

「——っ!？」

それは、光の粒子となって消えていくポロポロになった朱乃さんだった!

《リアスさまの『女王』^{クイーン}一名、リタイア》

朱乃さんが消える光景とグレイフィアさんのアナウンスに、俺は我が目と耳を疑った。

当然だろう! 信じられるか! 朱乃さんがやられちまうなんて!?

ドオオオオオオオンツツ!

「——っ!？」

再び起こった爆発音！ しかも、今度は近くで！
慌てて視線をそちらに向ければ、ボロボロになった木場がいた！

「木場ツ!? 木場ああッ!」

俺の叫びも虚しく、木場は小猫ちゃんや朱乃さんと同様に光の粒子となって消えていった。

《リアスさまの『騎士』^{ナイト}一名、リタイア

再び流れたアナウンスに俺は呆然と立ち尽くしてしまう。

「撃破」^{テイク}

悲嘆にくれていた俺の頭上から聞き覚えのある声が聞こえてきた！

「またおまえか!」

見上げると、ライザーの『女王』^{クイーン}がいた!

しかも、朱乃さんと戦っていたはずなのに、相手はダメージを負っているようには見えなかった。

朱乃さんと戦って無傷なんてありえねえ! どうなってやがる!?

「遅かったですわね、ユーベルーナ」

そこへ、ライザーの妹がライザーの『女王』^{クイーン}の傍らに現れた。

さっきの攻撃でやられなかったのか?

そういえば、アナウンスでも、『僧侶』^{ビショップ}一名、てしか言っていなかったな。

飛んで逃げた? いや、ライザーの妹ってことは、この子も不死身だから助かったのか?

「あの『女王』^{クイーン}、噂通りの強さでした。やはりこれの力を借りることに」

ライザーの『女王』^{クイーン}がそう言うのと、懐から空になった小さい瓶を取り出した。

「勝ちも勝ちですもの。やはりあなたが一番頼りになりますわ」
「では」

ライザーの『女王』^{クイーン}は新校舎のほうに飛んでいった。
クソツ、部長とアーシアのところに行く気か！

慌てて追いかけてようとしたところに、ライザーの妹から声をかけられる。

「まだ戦いますの?」

「うるせえ! 俺も部長もまだ倒れてねえぞ! それよりも、さっきの瓶はなんだよ!」

さっきから小瓶の正体が気になって仕方がなかった俺はさっきの小瓶のことをライザーの妹に尋ねる。

「フェニックスの涙。いかなる傷も一瞬で完治する我が一族の秘宝ですわ」

「そんなのありかよ!」

「あら、ゲームでの使用もちゃんとふたつまでは許されていますのよ。そちらだって
『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を持つ『ピシヨップ僧侶がいらっしやるでしょう?」

クソッ、戦闘中に回復されたんじゃ、いくら朱乃さんでも……!!
いや、悲嘆にくれている場合じゃない! いまは部長が最優先だ!

「うふふ。これはわたくしの一族にしか作れないので、高値で取り引きをされておりますよ。不死身に涙、レーティングゲームが始まってから、フェニックス家はいいこと尽くめなのですわ。おほほほほほ——ちよ、ちよつと、無視っ!?!」

ライザーの妹がなんか自慢げにペラペラと喋っていたが、ほっておいて俺は新校舎に向けて駆けだした。

新校舎に入ると、俺の中の駒が脈動する。敵本陣に来たことで条件が揃ったのだ。

「……………プロモーションだ! 俺に『女王^{クイーン}』の力を……………!」

プロモーションが完了し、体に力がみなぎってきた俺は、屋上を目指して廊下を走る。目指すは部長のもと。

脳内に、部長とのある会話を思い出す。

あれは、合宿で明日夏との一騎打ちが終わったあとのことだ。その後、俺は部長と二人きりで会話をする機会があり、俺はあることを尋ねた。

『どうして部長は今回の縁談を拒否しているんですか？』

すると、部長はこう答えた。

『私はグレモリー家の娘よ。どこまでいっても、個人のリアスではなく、あくまでもリアス・グレモリー。常にグレモリーの名が付きまるとしてしまふ。そのことは誇りではあるけど……やはり、せめて添い遂げる相手くらいは、グレモリー家の娘としてではなく、リアスとして私を愛してくれる人と一緒にになりたいのよ。矛盾した想いだけど、それでも、私はこの小さな夢を持っていたいわ。だから、勝つわ。相手が不死身のフェニックスだろうと、この小さな夢を守るために、そして、代々に培ってきたグレモリー一族の力を受け継いだ娘として勝つわ。勝つしかないのよ』

そんな些細な一人の女の子としての望みを、そして、ライザーとの対決に対する覚悟を口にした部長に俺はこう言った。

『俺、そんなの関係なく、部長のこと好きです。グレモリー家のこととか、悪魔の社会とか、正直さっぱりですけど、いまここに、こうして目の前にいるリアス先輩が俺にとつて一番ですから!』

ぶつちやけ、そんな気の利いたことを言えなかったけど、正直な想いを口にした。

『だから、絶対にライザーに勝ちましょう!』

そうだ、絶対に勝つんだ!

待っててください! 俺は必ず部長を勝たせてみせます!



『部長! 兵藤一誠、ただいま参上しました!』

『イツセー!』

『イツセーさん!』

屋上に現れたイツセーの姿を見て、部長とアーシアが歓喜の声をあげる。

『「兵士」の坊やと『僧侶』のお嬢さんは私が——』

『いや、俺がまとめて相手をしてやろう。そのほうがこいつらも納得するだろう』

一歩前に出る『女王』をライザーは手で制し、大胆不敵に告げる。

『ふざけないで！ それはまず、私を倒してからの話よ！』

ライザーの不敵な態度に激昂した部長が魔力を飛ばし、ライザーの腕を吹き飛ばした。

『ふふふ。投了しろ、リアス！ キミはもう詰まれている。こうなることは読んでいた。チエツクメイトだ』

だが、吹き飛ばされた箇所から炎が出て形を成していき、ライザーの腕はもとに戻つ

てしまった。

さつきから部長とライザーの戦いはこれの繰り返しだ。ただ、いたずらに部長の魔力と体力が消耗するだけだった。

『黙りなさい、ライザー！ 詰まれた？ 読んでいた？ 笑わせないで！ 「王」^{キング}である私は健在なのよ！』

それでも、部長は闘志を緩めることはなかった。

『やむを得ないな。あれをやれ』

ライザーは『女王』^{クイーン}に目配せをすると、ライザーの『女王』^{クイーン}は何かをしようと飛び上がる。

いつぼうその頃、イツセーはアジアに傷の治療をしてもらっていた。

『……あんなに激しい戦いだったのに、ここまで来てくださったんですね……』

爆煙が晴れると、アーシアを庇うように抱き抱えているイツセーがいた。

『悪いな。長引かせてもかわいそうなんで、回復を封じさせてもらおうと思ったんだが』

『すみません。まさかあの坊やが体で受けるとは』

爆撃を行ったのは、やはりライザーの『女王』^{クイーン}であった。

庇ったことで、ダメージを受けたのはイツセーだけで、アーシアはとりあえず無傷だった。だが、爆発のショックのせいで、意識を失ってしまっていた。

『まあいい。とりあえず、「聖母の微笑」^{トワイライト・ヒーリング}は封じた』

『てめえ!』

『私の直撃を受けたのに!』

アーシアを狙ったライザーにイツセーは激昂して起き上がり、自身の攻撃の直撃を受けたにも関わらず立ち上がったイツセーにライザーの『女王』^{クイーン}は驚愕した。

『「女王」^{クイーン}の防御力だな。プロモーションに救われたな』

ライザーは冷静に、その防御力が『女王』^{クイーン}になったことによる防御力の底上げだと分析した。

『部長！ 勝負は続行ですよね！』

『ええ！』

貴重な回復役のアーシアが封じられても、イツセーと部長の闘志は衰えない。

『俺、バカだから、読みとか詰んだとか、わからないけど……俺はまだ戦えます！ 拳が握れるかぎり戦います！』

『よく言ったわ、イツセー。一緒にライザーを倒しましょう！』

『はい！ 部長！』

イツセーは少し離れたところにアーシアを寝かせると、ライザーに向かって走り出した。

『ブースト!!』

『うおおりやああ——』

『Burst』

それは発せられてはいけない音声だった。

その音声が発せられた瞬間、イツセーは糸が切れた人形のように崩れ落ち、屋根から転げ落ちた。

幸い、その先も屋根だったため、地面に落ちることはなかった。

いまの音声は宿主の肉体の限界を知らせ、機能を停止することを告げるものであった。

そもそも、もともとある力を強引に強化する『赤龍帝の籠手』ブーステッド・キアは宿主への負担は計り知れない。たとえ、なるべくダメージを避けていたとしても、体力の消耗は激しいはずだった。むしろ、あそこまで何回も倍加を繰り返して戦えたあたり大したものである。

だがそれも、限界に近づいていたところをライザーの『女王』クイーンの一撃で完全に臨海点

に達したのであろう。

千秋たちのほうを見ると、三人ともどこか安堵の表情を浮かべていた。これ以上、イツセーに傷ついてほしくないし、戦つてほしくないのだろう。イツセーが戦闘するたびに心配そうに表情を曇らせていたからな。

『……………ぐっ……………かはっ……………』

「——っ、イツセー……………」

イツセーは立ち上がろうとするが、血を吐いてまた倒れ伏してしまう。

「……………イツセー兄……………もういいよ……………」

千秋は目元に涙を溜めながらイツセーに懇願していた。鶺鴒や燕もこれ以上イツセーの苦しむ姿を見たくないと訴えかけるように顔を背けていた。

『終わつたな』

『ライザー！』

部長は魔力でライザーの腕を再び吹き飛ばすが、ライザーの腕はすぐに再生した。

『リアス、キミだつてこの程度の魔力しか残っていない！ 素直に負けを認め、さつさと投了したらどうだ？』

『……誰が……!』

部長はまだ諦めていないが、事実上の下僕の全滅に心が折れかけていた。

『……大丈夫つすよ……部長……!』

さつきまで倒れ伏していたイツセーがふらふらになりながらも立ち上がっていた!

『……俺……どんなことをしてでも、勝ちますから……。……俺……最強の「ポーン兵士」になるんです……! そう、部長と約束、したんです……! ……部長が鍛えてくれたんだし……!』

うわ言のように言葉を発するイツセー。

『チツ。死に損ないが!』

『………まだ………戦えます………約束、守りますから——があっ!?』

「——っ、イツセー!?!」

『イツセーっ!?!』

「イツセー兄っ!?!」

「イツセーくんっ!?!」

「イツセーっ!?!」

いまだに倒れないイツセーにライザーは追い討ちをかけ始めやがった!

『………俺………戦います………。………俺………部長の「一兵士「ポーン」」ですから………。………まだ戦います………。………勝ちますから——ぐっ!?!』

ライザーは容赦なくイツセーを攻撃するが、イツセーは決して倒れなかった!

「イツセー兄っ！ お願いだから倒れてっ!？」

「もうやめてよっ！ イツセーくんっ!？」

「バカっ！ 死んじやうわよっ!？」

千秋たちは聞こえもしないにも関わらず、映像の中のイツセーに必死にやめろと呼びかける。

『イツセー、下がりなさい！ 下がって!？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・俺・・・・・・・・・・』

部長がいくら命令しても、イツセーはいっこうに下がろうとしなかった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・イツセー・・・・・・・・・・！ なぜ私の命令が——っ!？』

すると、部長は突然絶句してしまう。なぜなら、イツセーはすでに意識がほとんどないことに気づいたからだ。

『……………部長……………が……………笑ってくれる……………の……………なら……………』

それでも、イツセーは言葉を発し、ライザーに向かっていく。

「……………イツセー、おまえ……………!」

『……………イツセー……………あなた……………!』

イツセーの覚悟を、想いを垣間見た俺は息をのみ、部長は涙を流し始める。

「……………倒れて……………! お願いだから、倒れてよ……………!?! イツセー

兄……………!?!」

千秋はもう、傷ついていくイツセーの姿に、いまにも錯乱してしまいそうな勢いだつた!

『不愉快だ！ たかが下僕に分際で、あくまでこのライザー・フェニックスにたてつくか！』

すると、ライザーがイツセーの髪を鷲掴みにし、もう片方の手から炎の塊を作り出していった！

あの大きさはヤバい！ どう見ても、いまのイツセーがくれば確実に死ぬ威力はある！

『ライザー！ なんのつもり!?』

『なあに！ この男の意を汲んで、焼き尽くしてやるだけだ！ 治療などを意味を成さないほどに……ゲーム中の死亡は事故として認められるからな!』

野郎、本気でイツセーを殺す気か！

「……………死ぬ……………イツセー兄が……………」

イツセーが死ぬという状況を察し、千秋から表情が失われていく！

『・・・・・・・・・・・・・・・・ツ・・・・・・・・！』

そんななか、もう意識なんてないはずのイツセーの瞳が開いた！

「——っ!？」

その視線から俺は強烈なプレッシャーを映像越しにも関わらず感じてしまい、思わず萎縮してしまう！

見ると、ライザーも同様にプレッシャーを感じたのか、表情を強ばらせていた。

『・・・・・・・・貴様・・・・・・・・貴様あつ！』

そのことにライザーが激昂し、イツセーに炎の塊を当てようとする！

「——っ!？ やめ——」

『イツセエエエツ!？ お願い！ やめて！ ライザアアアツ!？』

千秋の叫びを遮り、部長の叫びが響いた。

部長はライザーに抱きつき、ライザーの攻撃を止めたのだった。

『……………私の負けよ……………リザイン投了します……………!』

……………そして、部長は降参の言葉を口にした。

『チエックメイトだ』

《リアスさまのリザイン投了を確認。このゲームはライザー・フェニックスさまの勝利です》

そして、ライザーのチエックメイトの言葉とグレイファイアさんのアナウンスが告げられ、部長の敗北が決定した。

バタツ。

その瞬間、イツセーが今度こそ糸が切れた人形のように倒れ込んだ。

『イツセー!? イツセーッ!』

倒れたイツセーに部長は慌てて駆け寄り、抱き起こす。

『……………部長……………俺……………負けませんから……………』

イツセーはうわ言を呟きながらまだ動こうとしていた。

そんなイツセーの頬に部長は手を添える。

『……………まだ魔力の使い方をろくに覚えていないというのに……………。実戦経験だつて皆無に等しいのに。私のために全力で駆け回つて……………バカね、こんなになるまで……………。ううん、バカなのは私ね……………。もう少しで、この子を失うところだつた。私のかわいい、大切な、そう、とても大切な……………』

部長は愛おしそうにイツセーの頬を撫でる。

『イツセー、よくやったわ。もう、いいわ、よくやったわ。お疲れさま、イツセー』

その言葉が聞こえたからなのか、とうとうイツセーは意識を手放した。

Life. 11 もうひとつの決戦、始まります！

「……おまえら、いい加減に休め」

俺はイツセーが眠っているベッドからいっこうに離れようとしないう千秋、鶯、燕に向けて言った。

現在、俺がいる場所はイツセーの自室だ。

レーティングゲームが部長の敗北で終わり、他の皆が治療を終えてピンピンしているのに対し、イツセーだけは傷が癒えても起きる気配がなく、ゲームが終了してから丸一日は眠ったままだ。

三人とアーシアを加えた四人はイツセーを必死に看病をしていた。アーシアはいまは休んでいるが、この三人は不眠不休で看護していた。食事すら摂らない勢いだっただが、さすがに食事だけは強引に摂らせることはできた。

だが、三人の顔には不眠不休の疲れが出始めていた。いくら鍛えているといっても、さすがに限界だった。

「はあ、おまえらまでぶっ倒れる気か?」

「・・・・・・・・大丈夫、平気だから」

「・・・・・・・・大丈夫だよ」

「・・・・・・・・平気よ」

何を言ってもこのありさまである。

「・・・・・・・・はあ、飲み物でも持つてくる」

仕方がない、せめて飲み物なんかで疲労回復を試みるしかねえか。

そう思い、立ち上がったところで、部屋のドアが開き、誰かが入ってきた。

「お茶でしたら、私がお持ちいたしました」

入室してきたのは、メイド服を着た銀髪の女性、グレイファイアさんだった。手には四人分の紅茶を乗せたお盆を持っていた。

「どうも」

俺は軽く会釈し、紅茶を口する。

こいつはハーブティーか？　メイドをやってるだけあって、かなりうまいな。

「あなた方もどうぞ」

グレイフィアさん言われ、千秋たちは渋々紅茶を手取る。せっかく用意してもらったものを無下にするのも気が引けたのであろう。

紅茶を口にした千秋たちの顔からさつきまでの張り詰めた感じの雰囲気が消えていった。

飲んでいて思ったが、非常にリラックスできる紅茶だったからな。

「それをお飲みになられたらお休みになったほうがよろしいかと。もし、あなた方が倒れられたら、彼は自分を責めることになりかねませんよ。ここは私と彼がお引き受けますので、お休みくださいませ」

グレイフィアさんはどこか圧力のある顔をして言った。

千秋たちはその圧力に気圧されてか、紅茶を飲み干した後、渋々部屋から出ていった。

「ありがとうございます。おかげであいつらを休ませることができました」

「いえ」

「ところでどうしてここに？」

素直な疑問だった。部長は現在、ライザーとの婚約のことで出払っていた。どうやら、明日の夜に婚約パーティーがあるらしい。

グレモリー家のメイドである彼女も、その準備などで忙しいと思っただが？

「彼女は私の付き添いだよ」

「——っ!？」

突然聞こえた男の声とその声の主の気配をまったく感じなかったことに驚愕する！
声が出たほうを見ると、紅色の髪を持った高貴そうな男がいた。

おいおい、まさか!?

「おっと、名乗りが遅れたね。私の名はサーゼクス。リアスの兄であり、魔王ルシファアの名を受け継いだ者だ」

「——っ!?!」

俺は再び驚愕する。サーゼクス・ルシファア、部長の兄であり、魔王の一人。突然の魔王の登場に俺は萎縮してしまう!

「そんなに固くならなくていい。楽にしてくれたまえ」

「……………そうは言いますがね……………」

とりあえず、言われるとおりに体の力を抜かせてもらった。

「友人のことはすまなかつたね。我々の事情に巻き込まれたばかりに」

「……………いえ……………それよりも、なぜここに?」

グレイファイアさんのとき以上に疑問だった。

「キミの友人に興味があつてね。是非ともこの目で見に来たのだよ」

「興味？」

「うむ。彼のような真つ直ぐにひた走る悪魔は初めて見てね。非常におもしろいと思つたのだよ」

「………本当にそれだけですか？」

正直、そんな理由だけで魔王が訪れるとは思えなかつた。

「もちろん、目的は他にもあるよ。明日の夜、私の妹の婚約パーティーがあるのは知っているね？」

「………ええ、まあ」

そのパーティーには多くの関係者が招待されており、部長の眷属である木場たちはもちろん、一応、俺たちにも招待状が渡されていた。

「ふふ、実はだね、かわいい妹の婚約パーティーを兄として盛り上げたいと思ってね。ひとつ余興を行おうと思っているのだよ」

「余興？」

「ああ。是非とも彼とキミとで、ひとつ会場を盛り上げてほしいのだよ」

「——っ!？」

おいおい、それって、まさか……………。

「……………それはつまり……………派手に盛り上げろと？」

「ふふ。是非とも頼むよ」

やはり、派手つてのは、俺の想像どおりのことのようなな。

だが、解せないな。

「……………なぜ魔王のあなたがこんなことを？」

この婚約は悪魔の未来のためと、半ば強引に推し進めたことには、このヒトも一枚嘴

んでいるはずなのにだ。

「言っただろう？　かわいい妹の婚約パーティーを兄として盛り上げたい、とね」

兄、という部分だけをさりげなく強調する魔王。

なるほどな。つまり、そういうわけか。

「では、そろそろ失礼するよ。彼が起きたら、グレイファイアから招待状をもらいたまえ」

そう言い、魔王は魔方陣の転移でこの場をあとにした。

「では、後ほど」

グレイファイアさんもあとに続くように、部屋から退室していった。

二人が退室したところで、全身から力が抜けてしまい、俺は床に尻もちをついてしまった。

……圧倒的な実力差のある存在を前にすると、ここまで緊張しちまうんだな。

「・・・・・・・・・・はは・・・・・・・・・・やれやれだぜ・・・・・・・・・・」

静寂なイツセーの部屋に俺の乾いた笑い声が流れる。

とはいえ、いつまでも腑抜けてられねえな。

「あとはおまえ次第なんだぞ？　いつまでも寝てるんじゃねえよ」



赤い夢を見ていた。

真つ黒な空間で、赤い閃光が走っており、周りでは炎が立ち上っていた。

俺はそんな空間の中を漂っていた。

——誰だ？

そんな俺に語りかける者がいた。

『いま揮っている力は本来のものではない』

——その声、どこかで？

『そんなんじやおまえはいつまで経っても強くなれない』

——そうかおまえ・・・・・・・・まえにも夢で・・・・・・・・。

『おまえはドラゴンを身に宿した異常なる存在。無様な姿を見せるなよ。「白い奴」に笑われるぜ』

——『白い奴』って誰だよ!?

『いずれおまえの前に現れる。そうさ、あいつとは戦う運命にあるからな。その日のために強くなれ。俺はいつでも力を分け与える。なに、犠牲を払うだけの価値を与えてやるさ。ドラゴンの存在を見せつけてやればいい』

ドラゴン！ おまえ!?

目の前に、以前夢に出てきた赤いドラゴンが現れた！

『ウエルシュ・ドラゴン赤い龍の帝王』 ドライグ』

ドライグ!?

『お前の左手にいる者だ』



目を覚ますと、そこは俺の部屋の天井だった。

——俺の部屋だ。

……あれ、俺、どうして……。

上半身だけを起こし、ボヤける記憶を必死にたたき起こす。

確か、部長とライザーのレーティングゲームで俺は戦っていたはずだ。

小猫ちゃんが、朱乃さんが、木場が倒されて、そして——。

段々と意識がハッキリしてきたところで、誰かに声をかけられる。

「起きたか、イツセー」

「……明日夏……」

声が出たほうに視線を向けると、壁に背中を預けながら腕組みをしている明日夏がいた。

「目覚めたようですね」

さらに、俺が起きるタイミングを狙ったかのように、グレイファイアさんが現れた。

「グレイファイアさん！ あつ、勝負は？ 部長はどうなったんですか!?!」

そうだ、皆が倒されて、そして、俺だけが部長のもとに駆けつけた！

そのあと、どうなったんだ!?!

「ゲームはライザーさまの勝利に終わりました」

「……………負けた……………」

部長が負けたという事実には俺は絶句してしまう。

「部長が投了^{リザイン}を宣言したんだ」

「そんな!？」

部長が降参した!？」

明日夏が告げた言葉を信じられなかった俺は明日夏に詰め寄った!

「嘘だろ! 自分から負けを認めるなんて! そんなの部長にかぎって!？」

「ライザーがおまえを殺そうとしたからだ」

「——え?」

「おまえ、何も覚えてないのか?」

「……………あのときのこと……………俺、よく覚えてなくて……………」

明日夏に言われ、俺は記憶を呼び起こすけど、やっぱり、部長のもとに駆けつけたと

ころからの先が思い出せなかった。

ただ――。

『イツセー、よくやったわ。もう、いいわ、よくやったわ。お疲れさま、イツセー』

涙を流している部長とその部長の言葉だけはうつすらとだけ覚えていた。

「おまえは何度もライザーに挑みかかり、そして、それに業を煮やしたライザーはおまえを殺そうとし、部長はそれを止めるために――」

じゃあ、部長のあれはそういうことだったのか……。

俺のせいだ！ あれだけ部長に大見得切っておきながら、目の前で無様にぶっ倒れて

あつ、そうだ、他の皆は!?

「明日夏、他の、他の皆は!?!」

「アーシア、千秋、鶯、燕、俺はおまえの看護に残り、他は部長の付き添いで冥界にいる」

「付き添い？」

「婚約パーティーです。ライザーさまと——リアスさまの」

「——っ!？」

グレイフィアさんの言葉に膝が崩れ落ちた。

「……すみません、部長……! ……俺、強くなれません
でした……!」

涙が止まらなかった。悔しくて、情けなくて。

「……弱え、なんで俺はこんなに弱えんだ……!」

「納得できないか？」

自分の情けなさに打ちひしがれていると、明日夏が訊いてきた。

「……頭じゃわかかってるよ。部長が自ら家の決まりに従っているのは。勝負の結果は部長が望んだことだったのは……それでも、俺はそれに嫌々従うしかない部長なんか見たくない……! 何よりも——」

「あいつなんか部長を渡したくない、か?」

「……これが嫉妬だってわかってるさ。笑いたきや笑えよ……」

けど、明日夏は笑わず、俺の目の前に立ち、俺を真っ直ぐ見据えていた。

「おまえはいま、何をしたいんだ?」

「え?」

「ここで泣くことか? 部長をお祝いすることか? どうなんだ?」

そんなこと——。

「……決まってるだろ! 部長を助けたい! どんなことをしてでも、部長を助けたいに決まってるだろ!」

俺は心の中にあることを大声で告白した。

「フッ」

「ふふふ」

「え？」

突然、明日夏とグレイファイアさんが小さく笑った。

「あなたは本当におもしろい方です。長年いろいろな悪魔を見てきましたが、あなたのように思ったことをそのまま顔に出して、思ったように駆け回る方は初めてです。サーゼクスさまもあなたをおもしろいとおっしゃっていましたよ」

そう言うと、グレイファイアさんは懐から一枚の紙切れを取り出した。そこには魔方阵が描かれていた。

グレイファイアさんはその紙を俺に差し出してきた。

「これは？」

「招待状だそうだ。婚約パーティーへのな」

「俺も部長に付き添えと！」

明日夏の言葉に、思わずキツク言ってしまう。

「話は最後まで聞け。なんでも、パーティー会場を派手に盛り上げてほしいらしい」

「え？ それって？」

「『妹を取り戻したいのなら殴り込んできなさい』。これを私に託したサーゼクスさまからの言葉です」

グレイフィアさんの言葉に、どう返したらいいのかわからないまま、俺は魔法陣が描かれた紙を受け取った。

よく見ると、裏にも別の魔方陣が描かれていた。

「そちらは、お嬢さまを奪還した際にお役に立つでしょう」

それだけ残すと、グレイフィアさんはこの部屋から魔法陣で転移していった。

俺は再び、魔法陣が描かれた紙を見る。

考える必要なんてない！

俺が立ち上がると、明日夏が声をかけてきた。

「行くのか？」

「ああ。止めたって無駄だからな。俺の心はさつき言ったとおりだ」
「だろうな」

明日夏は笑みを浮かべたまま、肩をすくめる。

「止めねえよ。つか、俺も行くぞ」

「え？」

その言葉に、思わず呆気にとられてしまう。

「い、いや、ちよつと待ってくれ！　これは俺の問題——」
「アーシアのときもそうだが、水くさいんだよ。部長を助けたいのは、俺も同じだ。あのゲームに参加できなかった俺の気持ち、参加してたおまえにわかるか？」

明日夏は真剣な眼差し言う。

そっか、明日夏は俺と違って戦えなかった。もしも俺がその立場だったら、本当に歯痒かったろうな。

「ああ、わかったよ。力を貸してくれ、明日夏」

「頼まれなくても行くつもりだ。そもそも、その招待状は俺の分も兼用してるんだからな」

えっ、そうだったのか。

まあ、とにかく、俺も明日夏も覚悟はもう決まっている。迷う必要はない!

ふと、机の上を見ると、新品の制服が置かれていた。

どうやら、初めから俺が迷わず乗り込むだろうと確信していた明日夏が用意してくれたらしい。ありがたいぜ、親友!

着ている服を脱ぎ、制服の袖に手を通したときだった。部屋のドアが開き、アーシアや千秋、鶴さんに燕ちゃんが入ってきた。

「イツセーさん?」

「イツセー兄?」

「イツセーくん？」

「イツセー？」

アーシアたちが俺の名を口にした次の瞬間、涙を流し始め、手に持っていた水の入った洗面器やタオルなどを落として、俺に向かって飛び込んできた！

「おわっ!？」

四人分のダイブなんて、当然受け止められるはずもなく、俺はそのまま後方に倒れ込んでしまう。

「よかった！ 本当によかったです！」

「イツセー兄！ イツセー兄っ！」

「よかったよ〜！ イツセーく〜ん！」

「心配させないでよ！ このバカ！」

アーシアたちは俺の胸で泣きだしてしまった。

「治療は済んでいるのに、二日間も眠ったままで！」
「もう目を覚ましてくれないんじゃないかって」
「うえ〜ん! 起きてくれてよかったよ〜!」
「まったくも〜!」

あー、また千秋とアーシアを泣かしちまった。しかも、今回は鶴さんや燕ちゃんまで。順番に頭をなでなでしながら、なんとか落ち着かせる。
なだめたところで、俺はアーシアたちに言う。

「聞いてくれ、四人とも。これから俺と明日夏は部長のもとへ行く」
「「「——っ!」」」

四人とも、俺の言葉に驚いていた。

「……………お祝い……………じゃ、ありませんよね?」
「……………部長を取り戻しに行くんだよね?」

「ああ」

アーシアと千秋の言葉に静かにうなずいた。

「私も行く！」

間髪入れずに千秋が言う。表情は真剣そのものだ。見ると、アーシアや鶴さん、燕ちゃんも同じ表情をしていた。

「ダメだ。皆はここに残れ」

千秋なら大丈夫かもしれないが、それでもやっぱり危険だ。アーシアや鶴さん、燕ちゃんならなおさらだ。

「私は戦える！ イッセー兄と一緒に戦えるよ！」

「私だつてイッセーさんと一緒に戦えます！ 魔力だつて使えるようになりました！ 守られるだけじゃいやです！」

「大丈夫。軽くライザーをぶん殴って、倒して——」

「大丈夫なんかじゃないよ——!」

「——ツ!?!」

鶴さんの怒声に思わずたじろいでしまう。

「ゲーム中、あたしたちがどれだけ心配したと思ってるのよ!?! あんたが傷つく姿を見るのが、あたしや姉さんにとってどれほど辛いか、あんた、わかってんの!?!」

燕ちゃんは再び泣きだしながら訴えてきた。

ああ、そういえば。鶴さんと燕ちゃんをいじめから庇ったときに、よく俺が傷ついて、そして、そのたびにいまみたいに二人は泣いてたっけ。だから、俺が傷つくところなんて見たくないんだろうな。

「ゲームのときも、本当に死にかけてたんだよ! あのととき、本当に怖かった! また、大好きなヒトが死ぬんじゃないかって!」

千秋が涙で顔をグシャグシャにしながら言う。

ライザーは俺を殺そうとしたらしい。その光景は、千秋にとっては本当に怖かったんだらうな。

「また血だらけでぼろぼろになって、ぐしゃぐしゃになって、いっぱい痛い思いをするんですか？　もう、そんなイツセイさんを見たくありません！」

アーシアも涙で顔をグシャグシャにしながら言う。

「……俺は死なない。ほら、アーシアを助けたときだって、俺、生きてただろ？　——って、そんなときは鶴さんと燕ちゃんはいなかったっけ……。とにかく、俺は死なない。生きて、皆と一緒にこれからも過ごすよ」

俺は笑いながら、真っ直ぐに言っただけだ。

「……それなら、約束してください」

「約束？」

アーシアが真っ直ぐ俺の目を見ながら言う。

「……………必ず……………部長さんと帰ってきてください!」

「もちろん!」

そう強く答えてやると、ようやくアーシアたちが笑顔になってくれた。

「わかりました。ここでイツセーさんの帰りを待っています」

「ああ。千秋たちも——」

「私は行くよ」

俺の言葉を遮り、千秋は真っ直ぐに俺を見据えながら言う。その眼差しは先ほどよりも強いものだった。

「諦めろ、イツセー。こうなった千秋の頑固さは筋金入りだ」

明日夏の言葉に俺は仕方なく折れるのだった。

「でも、鵜さんや燕ちゃんは——」

「私たちなら大丈夫だよ」

「余計な心配はいらないわよ」

俺の言葉を遮り、鵜さんと燕ちゃんは微笑んで言う。

「あたしも姉さんも、兄さんから風間流の忍の技を習得しているわ。言っておくけど、そこいらのはぐれ悪魔ぐらいなら打倒できるぐらいの実力はあるわ」

えっ、そうなの！

「もう、守られてばかりのあの頃のあたしたちじゃないわ」

「私たちの心配は大丈夫だよ」

鵜さんと燕ちゃんも、千秋と同じくらいの真っ直ぐな眼差しで言う。

結局、その真つ直ぐな眼差しと言葉に折れてしまうのだった。

「話はまとまったな？」

「ああ」

結局、アーシア以外の全員がついてくることになっちまったか。

その後、千秋、鶴さん、燕ちゃんは準備のためにいったん部屋に戻っていった。

あつ、そうだ――。

「アーシア、協力してほしいことがあるんだ」

「えっ？」

俺はアーシアにあることを頼む。

「これはアーシアにしか頼めないことなんだ。頼む」

「わかりました。イツセーさんがそう仰るのでしたら」

アーシアは訝しげになりながらも、すぐに了承してくれ、部屋に頼んだものを取りに戻ってくれた。

「いったいどうするつもりなんだ？ あんなものを頼んで？」

明日夏の疑問はもつともだろうな。使い道は予想できてはいるんだろうが、それ以前に俺には扱えない代物だからな。

「ああ、すぐにわかるよ」

俺は目を瞑り、俺の中にある存在に語りかける。

「おい、聞こえてるんだろ？ おまえに話がある。出てこい！ 赤龍帝ドライブ！」

呼びかけてまもなく、そいつは応えた。

『なんだ小僧？ 俺になんの話がある？』

「あんたと——取り引きしたい」



イツセーがグレイフィアさんからもらった魔方陣による転移の光が止み、周囲を見渡してみると、そこは広い廊下であつた。壁には蠟燭らしきものが奥まで並んでおり、巨大な肖像画がかけられていた。

廊下の先を見渡すと、かなり大きい扉が見えた。扉の前には衛兵と思しき男が三人いた。

「あの扉の先だな」

「みたいだな」

扉に向かって歩きながら、俺は隣にいるイツセーに言う。

「イツセー。邪魔する奴らは俺たちが引き受ける。だからおまえは、余計なことは考えず、あの焼き鳥をぶつ飛ばしてこい。そして、部長を奪い返してやれ」

「ああ! 頼むぜ、親友!」

イツセーが拳を突き出してきたので、俺はそれに自身の拳を当てた。そのタイミングで扉の前にいた衛兵の一人が尋ねてきた。

「招待客の方ですか？ でしたら、招待状を——」

ドゴンツッ！

「がはああっ!？」

衛兵が言い切るまえに、鳩尾に拳を叩き込んでやった。

「これが招待状だ」

「おいおい………」

俺の行いにイツセーは苦笑いを浮かべていた。

「何者だ貴様らは!？」

「返答次第では!？」

衛兵達が手持ちの得物を構え、その切っ先をこちらに向けてきた。

「お勤めご苦労さま」

「俺たちは特別ゲストですよ」

とくに打ち合わせもしていなかったにも関わらず、俺とイツセーは息の合った言葉を告げる。

「パーティーを派手に盛り上げるためのな!」

Life. 12 幼馴染みたち、暴れます！

「うふふ。お兄さまったら、レーティングゲームでお嫁さんを手に入れましたのよ。勝ちにはわかつている勝負ではございましたが、見せ場は作ったつもりですよ、うふふふ」

ライザー・フェニックス氏の妹であるレイヴエル・フェニックスさんが他の上級貴族の方々にゲームでの自慢話をしていた。

僕、木場祐斗は現在、朱乃さんと小猫ちゃんと共に部長とライザー・フェニックス氏の婚約パーティーに出席していた。

アーシアさんや明日夏くんたちはイツセーくんの看護に残って出席していない。

……それにしても――。

「言いたい放題だ……」

「中継されていたのを忘れていたのでしょう」

「ソーナ会長」

僕たちのもとに招待されたのであろうソーナ・シトリー会長が歩み寄ってきた。

「結果はともかく、勝負は拮抗——いえ、それ以上であつたのは誰の目にも明らかでした」

「ありがとうございます。でもお気遣いは無用ですわ」

朱乃さんの言葉にソーナ会長が首を傾げる。

「たぶん、まだ終わっていない、僕らはそう思ってますから」

「……………終わってません」

続けて言った僕と小猫ちゃんの言葉にソーナ会長はますます怪訝そうな表情をする。

確証もないし、なんとなくだけでも、僕たちはこれで終わったとは思えなかった。本当になんとかなくだけどね。

そんななか、急に会場がざわめきだした。ライザー・フェニックス氏が派手な演出で登場したからだ。

「冥界に名だたる貴族の皆さま！ ご参集くださり、フェニックス家を代表して御礼申し上げます！ 本日、皆さま方において願ったのは、この私、ライザー・フェニックスと、名門グレモリー家の次期当主、リアス・グレモリーの婚約という歴史的な瞬間を共有していただきたく願ったからであります！ それでは、ご紹介致します！ 我が后、リアス・グレモリー！」

ライザー・フェニックス氏の言葉と共に純白のドレスを着た部長が現れた。

バンツ！

だが、それと同時に聞こえた突然の衝撃音に会場の人たちは一斉に音の発生源の方に顔を向ける。

そこには、倒れた衛兵らしき人たちと衛兵を倒したであろう人物たちがいた。

「あらあら、うふふ。どうやら、間に合ったようですね」

「ええ」

「……遅いです」

その人物たちは、僕らがよく知る同じ部長の眷属の仲間であるイツセーくんと、その幼馴染みたちであつた。



さてと。派手に登場したせい、かなり視線を集めてるな。

まず大勢いる着飾つた悪魔たちの中にいた木場たちを見つけ、さらに奥のほうを見ると、そこにライザーと純白のドレスを着た部長がいた。

というか、部長のあの姿、あれじゃまるでウエディングドレスだな。一応これ、結婚じゃなくて婚約パーティーだろ？

まあ、別にいいか。

「イツセー!」

「部長!」

部長が真つ先にイツセーの名を叫び、イツセーもその叫びに応える。

「おい貴様ら、ここをどこだと——」

ライザーがもの申そうとするが、イツセーはそれを遮って、高々と叫ぶ。

「俺は駒王学園オカルト研究部の兵藤一誠！ 部長——リアス・グレモリーさまの処女は俺のもんだ！」

……最後にとんでもないことを高々と宣言したな、こいつ。

見れば、俺たち以外皆、呆気にとられていた。木場たちだけは面白そうに笑っていたが。

「なっ!? 貴様っ！ 取り押さえろ！」

ライザーの指示で多数の衛兵たちが俺たちの目の前に立ちはだかった。

それを見て、木場たちが動き出そうとするが、俺は視線で「手を出すな」と伝える。

「貴様ら! ここをどこだと——」

ドゴツ!

「ぐはあっ!?!」

俺たちに近づいた衛兵の一人を俺は掌底で吹き飛ばし、イツセー同様、高々と名乗った。

「同じく、駒王学園オカルト研究部の士騎明日夏だ! 親友、兵藤一誠の道を阻む者は容赦しない!」

俺は千秋たちに「お前らもせつかくだからやれ」と目配せをする。

「えっ!?! ええ! え、えつと、その、同じく、士騎千秋!」

まさか自分たちもやると思いきなかつたのか、それとも先ほどのイツセーの宣言

に動揺していたのか、かなりテンパりながら千秋は名乗った。

「え〜と。同じく、風間鵜だよ〜」

鵜は相変わらずののんびりとした普段の口調で名乗った。

「……同じく、風間燕よ」

燕は若干照れが混じった感じで低い声音で名乗った。

さっきの俺の宣言に衛兵たちは一瞬だけ怯んでいたが、すぐに持ち直して手持ちの得物を構え直してきた。

「怯むな！ かかれ！」

隊長格らしき男の指示と同時に衛兵たちは一斉に仕掛かっってきた。

それを見て構えるイツセーを手で制し、俺たちも仕掛けた。

繰り出される槍の攻撃を全て避け、衛兵の一人の懐に飛び込み、掌底で吹き飛ばす。

横合いから繰り出された槍を掴み、衛兵ごと引き寄せ、裡門頂肘を打ち込む。背後から来た攻撃は体を回転させて回避し、その勢いを乗せたまま背後にいた衛兵に鉄山靠を叩き込む。すぐさま右隣の衛兵に崩拳を当て、左隣の衛兵に体の捻りの勢いを乗せた拳を繰り出して吹き飛ばす。

「すううはあああああ——」

残心で呼吸を整え、改めて衛兵たちを睨む。

「もう一度言うぜ——邪魔する奴は容赦しない」

俺の圧力に衛兵たちが怯んでいるうちに千秋たちのほうを確認する。

千秋は大丈夫そうだな。

俺と同様に相手の攻撃を避け、隙ができた衛兵を蹴りで倒していた。避けられない攻撃も足技を駆使して捌いていた。

問題は鵜と燕だが……。

「そくれ〜！」

「うわあああつ!?」

「おいおい………」

鵜が豪快に衛兵の一人の足を掴んで振り回して衛兵たちを吹っ飛ばしていた。

そして、それに呆気にと取られている衛兵たちを燕は背後から不意打ちで倒していた。

どうやら気配を隠し、派手に暴れている俺と千秋と鵜を隠れ蓑に隙をついているようだな。流石は忍、といったところか。

さて、そうこうして戦っていると衛兵たちはほとんど倒されていた。残りの衛兵たちは完全に俺たちの戦いぶりに尻込みしている。

「ちっ！ おまえら！」

そんな衛兵たちを見かねたのか、ライザーが自分の眷属たちに指示を送った。指示を出されたライザーの眷属たちは『僧侶』の二人を残し、俺たちの前に立ち塞がる。

「行きなさい！」

『女王』のユーベルーナの指示で、『兵士』たちを先頭にいつせいに飛びかかってきた。
「鶇! 燕! 残りはおまえらに任せる!」

俺はそう言うと、千秋と共に駆けだす。

『兵士』たちは構えるが、千秋が風で攻撃すると、『兵士』たちは一目散に躲し、俺はそのまま突き進み、『兵士』たちの後方にいた『騎士』と『戦車』の四人目掛けて駆けだす!

『なっ!?!』

自分たちに仕掛けてくると思っていた『兵士』たちは自分たちが素通りされたことに一瞬呆気にとられるが、すぐに俺を追撃しようとする。だが、千秋がそれを風で妨害する。

そして、俺は『戦車』の一人、イザベラに拳を突き出す!

「くっ!?」

イザベラは即座に腕でガードする。

「はああッ!」

右側からもう一人の『戦車』が蹴りを放ってきたが、俺は右腕でガードする。

「はあッ!」

背後から『騎士』の二人が短剣で斬り掛かってきた。

俺はそれを背負っている雷ライトニングスラッシュ 刃の鞘で防ぐ。

攻撃を防がれた三人はすぐに距離を取り、同様に距離を取ったイザベラが言う。

「……まさか、『兵士』たちを素通りして、いきなり私たちのほうに来るとはな……」

続けて、『戦車』の一人、春蘭シュエランが言う。

「……まさかとは思うけど、『騎士』二人と『戦車』二人を一人でやるつもり？」

しかも、見たところ、あなたたち、人間でしよう？ あっちの子ども『兵士』^{ポーン}八人を一人でなんて。私たちをなめてるのかしら？」

「まさか。あんたらの強さはゲームでじっくり見させてもらったからな」

俺の不敵な物言いにイザベラが訊いてくる。

「何か秘策でもあるのかな？」

「さあな」

俺が口元をにやけさせながら言うと、イザベラも口元をにやけさせた。

「雪蘭^{シユエラン}、カーラマイン、シーリス——私たちのほうがなめてかからないほうがよさそう
だ」

「もちろんだ。その目は本気で私たちを倒そうとしている者の目だ。おそらく、その不敵な佇まいはハツタリではないだろう」

カーラマインも口元をにやけさせながら、短剣を構える。

ゲームでも思ったが、この二人は相手をきちんと評価したうえで戦いに臨むようだ。

「……俺的にはなめてくれたほうが楽なだけだな」

「あれだけの戦いぶりを見せたうえでその目だ。なめてかかるのは失礼というものだ」
「そりやどうも」

「無駄話もこのへんでいいだろう——では行くぞ!」

イザベラのかげ声と同時に四人は一斉に仕掛けてきた。



すごい。アーシアさんを助けるときの戦いのときも思ったけど、改めて素直にそう思えるほど、明日夏くんの戦いぶりはすごかった。

『騎士』二人、『戦車』二人の四人を相手に互角以上の戦いをしていた。

「ぐう、なんなのこいつは……!?!」

「……攻撃が通らない……!?!」

明日夏くんは攻撃のほとんどを完璧に受け流していた。たまに当たる攻撃もあるが、それも確実にガードして大きなダメージを避けていた。そのことに『戦車』の二人が焦燥に駆られた表情をする。『騎士』の二人も同様だった。

それにしても、少し疑問だった。いくら明日夏くんが強いといっても、ここまで相手の攻撃が通らないものなのか？

いまだに攻撃しない明日夏くんだが、攻撃できないというよりも相手の隙を伺って、あえて攻撃していないように見える。

「くっ！ ガードも崩せないか！ おまけに余裕さえも感じられるな……」

「別に余裕ってわけじゃないけどな」

「そのわりには苦を感じてなさそうだが？」

『戦車』のイザベラの言うとおり、本人の口ぶりに反して、明日夏くんからは余裕が感じられた。

「ま、あえて言うなら——状況が俺にとって有利だった、かな」

「何？」

「さつき言ったはずだぜ——あんたらの戦いをじっくり見たって」

「「「——っ!?!」」」

「イツセーが起きるまでヒマだったからな」

そうか！ 明日夏くんはゲームが終わってからの二日間を、ただ待っていたわけではなかったんだ。こうなることを予期して、彼女たちの戦いを研究し、彼女たちの戦いや僅かな癖などを調べてこの戦いに臨んだんだ。

「ついでに、いまのあんたらの服装はパーティー用の衣装。戦闘をするぶんには多少の動き難さもあるだろう？ さらに、そっちの『騎士』^{ナイト}の二人にいたっては、主武装の剣を持つてきていない。こっちの『騎士』^{ナイト}はともかく、そっちの『騎士』^{ナイト}に軽い短剣は合つてなさそうだしな」

明日夏くんの言うとおり、彼女たちはゲームのときほど動きはよくはない。

だが、そのことを差し引いても、四人を相手取れる明日夏くんの実力は間違いなく高い。

そして、千秋さんも明日夏くんに負けず劣らない戦いぶりだった。

「くっ！ 近づけない!？」

千秋さんが相手取っている『兵士』^{ポーン}の一人がそう漏らした。

スゴい暴風が千秋さんを中心に吹き荒れており、その風によつて、『兵士』^{ポーン}たちが千秋さんに近づけないでいた。魔力による攻撃もことごとく風によつて弾かれていた。

部長と朱乃さんから聞いた話だが、あの風の正体は千秋さんの神^{セイクリッド・ギア}器。風を発生させて操るシンプルなものだが、その強さはご覧のとおりだ。

強力な風の防壁に守られた千秋さんは、ときにはそのまま突っ込んで相手を蹴りや風で吹き飛ばし、ときには弓矢による攻撃を行っていた。

この弓矢による攻撃もなかなかの曲者で、風をまとわせて軌道を変更したり、矢自体が特殊なもので、鎌が拡散したり、爆発したりと多彩だ。

そして、猫耳を持った獣人の双子に矢が命中した。

「にやあああああつ!？」

次の瞬間には、獣人の双子が悲鳴をあげ、痺れたような様子を見せて倒れ伏した！

見た感じ、原因はあの矢に思えた。たぶん、あの矢は相手を感電させる、一種のスタンガンみたいな矢なのかもしれない。

『兵士』八人のうち、二人が倒れたところで、千秋さんの一方的と思われた戦況に変化が起きた！

千秋さんが発生させていた風が唐突に弱まったのだ！

まさか——いや、おそらく間違いない。あれだけの暴風を発生し続けるのは、相当な消耗だったんだ。千秋さんが息を荒らげているのが何よりの証拠だった。

その隙を『兵士』たちが逃すはずもなく、一斉に千秋さん目掛けて攻撃しようとする！

慌てて僕らが助けようとした瞬間——。

バタツ。

「「「えっ?」」」

「「「えっ?」」」

突然、双子の『兵士』がいきなり倒れたのだ。

倒れた二人の後ろには、燕ちゃんがいた。あの二人は燕ちゃんがやったのか!?

「きやつ!」

「つくまゝえた」

突然の出来事に唾然としていたら、いつのまにか、以前、部室でイツセーくんを攻撃しようとしていた『兵士』が鶴さんによつて羽交い締めになされていた!

「なつ、いつのまに!」

「あの二人は衛兵の相手をしてたはずじゃ!」

「いったい、どこから!」

突然現れた二人に僕が相手をした『兵士』三人は動揺を隠せていないでいた。

「「——つ!」」

そして、その隙を見逃さず、千秋さんが三人の懐に入り込んだ!

ビュオオオオオオツ！

「「きやあああつ?!」」

次の瞬間、千秋さんから膨大な風が発生し、『兵士』たちを吹き飛ばした。そのさまは言うなれば、風の爆弾ともいえるものだった。

「それ!」

ドゴオンツ!

「かはっ!」

そして最後に、鶴さんは羽交い締めにしていた『兵士』を床に叩きつけてしまった! もう、動ける『兵士』はいなかった。

おそらく、『女王』にプロモーションをしていたであろう『兵士』たち八人をたった三

人の少女たちが打倒してしまった。

その事実には僕たちは驚愕を隠せなかった。

「遅くなったわね」

「ごめんね」

「大丈夫。平気」

三人の会話から察するに、千秋さんははなから一人で『兵士』^{ポイン}たち八人を打倒するつもりじゃなかったみたいだね。たぶん、風が弱まったのも相手を油断させるためにわざと弱めたのだろう。

千秋さんたちの戦いが終わり、改めて明日夏くんのほうの戦いに視線を移すと、こちらでも明日夏くんの防戦一方かと思われていた戦いに変化が現れていた。

彼女たちの動きが少しずつ鈍くなっていたのだ。おそらく、身体的な疲れと攻撃が通らないことへの焦りから来る精神的な疲れが同時に襲ってきたのであろう。

それに対し、動きを最小限に抑え、なおかつ精神的に余裕を持っていた明日夏くんにはいまだに疲労の痕跡は見えなかった。

「『兵士』^{ボーン}たちが全滅しただど!？」

『兵士』^{ボーン}たちの敗北に動揺を隠せず、僕と戦った『騎士』^{ナイト}カーラメインが隙をさらした。当然、明日夏くんはその隙を逃すはずはなく、カーラメインに仕掛けた。

ドゴオオオン。

「!?!?!」

その瞬間、突然の爆発が明日夏くんを包み込んだ!

これは、まさか!?

僕たちはゲームでの苦い思い出し、上を見ると、ライザー・フェニックス氏の『女王』^{クイーン}がいた!

「うふうふう。撃破」^{テイク}

この光景は、僕たちのときと同じだ!

「残念ね、坊や。詰めが甘かったようね」

僕は目の前の状況にゲームのときの悔しさを思い出す。
次の瞬間だった――。

『――っ!?!』

いきなり爆煙から緋いオーラでできた腕が飛び出てきたのだ!

「なっ!?!」

その腕はユーベルーナをガツシリと捕まえ、爆煙のほうへと勢いよく引つ張り始めた

!

「言っただはずだ――あんたらの戦いをじっくり見たと」

そんな僕の耳に明日夏くんの声が聞こえた！

爆煙が晴れたそこには、緋色のオーラで身を包み、左手を突きだしてオーラの腕を伸ばしていた明日夏くんがいた！



今回のことを予期していたわけではないが、こうなつてもいいようにと、俺は修業合宿の合間を利用して、『緋アグレッション・スカーレットい龍衣』を使いこなそうとしていた。

イツセーとアーシアの件もあり、全力を尽くそうと思つたからだ。

『安心しろ。こんなおもしろそうな展開に水を差す気はねえよ』

以前言つたとおり、ドレイクは介入はしてこなかった。だからこそ、遠慮なく修業ができた。

……もつとも、警戒を緩める気はないがな。

オーラの腕で引き寄せたライザーの『女王クイーン』ユーベルーナが忌々しそうに俺のことを睨む。

「……あなたも神セイクリッド・ギア器を……！！ そのオーラで私の攻撃を防いだのね！
 いえ、それ以前に私の攻撃に対するその反応の速さ、事前に察知していたわね!?」
 「あなたのやり方はゲームで把握している。不意討ちを得意とするあんたを警戒しないわけがないだろ」

イザベラたちと戦いながらも、ユーベルーナから意識は外さなかつた。そして案の定、不意討ちの素振りが見られたので、爆破をくろう直前に緋い龍気で体を包み込んで爆発をガードし、勝ち誇って油断したところをこうして捕まえたのだ。

俺の目の前までユーベルーナを引き寄せた俺はユーベルーナを捕まえていた腕を形態変化させ、ロープ状にしてユーベルーナに巻き付けてユーベルーナの動きを封じた。

「——さて、いちいち横やりを入れられも面倒だ。先にあんたから確実にやらせてもらう」

そして、ユーベルーナを引き寄せているあいだに、俺の右手にはオーラのドラゴンが
 できあがっていた。

「させるか！」

イザベラたちがさせまいと妨害しようとしてくるが、もう遅かった。

「——塔城、副部長、木場の無念、味わいやがれ！ 緋スカーレット・フレイムい龍撃！」

拘束され、なすすべもなかったユーベルーナに緋スカーレット・フレイムい龍撃が決まり、ユーベルーナは会場の壁まで吹っ飛ばされた。

——加減もしたし、『女王クイーン』の防御力があれば、死んではないはずだ。

「あとはあんたたちだ」

俺を取り囲むイザベラたちに言った。

「終わらせる——Attack！」

鞘に収められた雷ライトニングスラッシュ 刃から電流が体に流れ込み、身体能力を向上させる。

「やばそうだな……! 何かするまえに仕留める!」

イザベラが危険を察知したのか、駆けだしてきた。
それに対し、俺もイザベラに向かって走り出す。

「なっ、速い!」

イザベラが俺の急激な走力の上昇に驚愕し、慌てて腕をクロスさせて、防御の姿勢をとる。

突然の速度の上昇に攻撃が間に合わないかと判断したからだろう。

だが、好都合だ!

「なっ!?! 私を踏み台にしただと!」

俺は勢いそのままにその場から飛び、イザベラのガードを踏み台にして後方に飛んだ

!

「「なっ!?!」」

俺の背後から仕掛けようとしていた雪蘭シュエラン、カーラマイン、シーリスの三人はそれを見て仰天していた。

俺は硬直している『騎士ナイト』の二人にバーストフアングを数本投擲する!

「しまっ——」

ドゴツドゴオドゴオオオオオン!

硬直から立ち直るヒマもなく、『騎士ナイト』の二人はバーストフアングの爆発に飲まれた。さらに、俺はそのまま雪蘭シュエランに飛び蹴りを打ち込む!

「かはっ!?!」

雪蘭シュエランも硬直から立ち直るヒマもなく、俺の蹴りを腹部にくらって後方に吹っ飛ぶ。

「くっ!!」

だが、雪蘭シュエランは腹部を押しえながらなんとか耐えていた。
だてに『戦車ルック』ではないか。

「もらった!」

背後からイザベラが仕掛けてきた。

俺はすぐさまイザベラに向けて背中を向けたままナイフを投擲した。

「あの程度の爆発など!」

爆発をくらうのを覚悟でイザベラはナイフを弾いた。

あんたなら、そうすると思ってたよ——。

カツ！

刹那、ナイフから強烈な閃光が発せられた。

「ぐあつ、目がつ!?!」

至近距離でまともに閃光をくらったイザベラは目を押さえて後ずさった。

そして、俺は同じく閃光で目をやられていた雪蘭シュエランに肉薄する！

「はあッ!」

鳩尾に猛虎硬爬山を打ち込む！

さらに体に流れ込んでくる電気と緋い龍気を混ぜ合わせ、俺の体に流れている電気が緋い電気となった。

「きゃああああああつ!?!」

そして、緋い電気をそのまま操って雪蘭シュエランの体に一気に流し込んだ!

「かはっ………」

口から煙を出しながら、雪蘭シュエランは意識を失い、後ろに倒れこんだ。

「なめるなッ!」

左右から爆発でポロポロになりながらも、『騎士ナイト』の二人が斬り込んできた!

「何っ!?!」

「——っ!?!」

だが、俺はすでにオーラで腕を作っており、その腕で『騎士ナイト』二人の手を掴んで動きを止めた。

「ふッ!」

「がはっ!？」

「はッ!」

「かはっ!？」

動きを封じたところをシーリスに掌底、カーラマインに裡門頂肘を打ち込んだ!

俺の一撃を受けて、『騎士^{ナイト}』の二人は後方に吹っ飛ばされた。

「クソッ!」

残るイザベラがフリツカーの動きで拳を打ち込んでくる。

だが、閃光のダメージから完全に回復していないのか、狙いが雑であり、容易に回避できた。

すべての攻撃を躲しながら懐に入り込んだ!

「ラストだ!」
スカーレット・フレイム 緋い龍撃!

スカーレット・フレイム
緋い龍撃が決まり、イザベラは後方に吹っ飛ばされた。

息を整え、五人の状態を確認する。

ユーベルーナ、イザベラは緋スカーレット・フレイムい龍撃をくらって意識を失っており、雪蘭シユエランも意識を失ったままだ。

カーラマイン、シリーズはまだ意識はあつたが、ダメージが大きいのか、動けずいた。

「ふうふうう………」

決着がついたことを確認した俺は息を吐く。

一日に二度しか撃てない緋スカーレット・フレイムい龍撃を連発してしまつたが、二発とも加減して撃つたので、体力は尽きてはいなかつた。

とはいえ、消耗が激しかったのは変わりなかつた。

………流石にしんどかつたが、どうにかなつたか。

「大丈夫か、明日夏？」

イツセーが千秋たちと木場たちを引き連れてやつてきた。

「……流石に疲れた」

苦笑しながら言い、拳を突き出す。

「あとはおまえ次第だ」

「ああ！」

イツセーも微笑みながら自分の拳を俺の拳に当てた。

部長とライザーのほうを見ると、何人かの貴族に言い寄られていた。

「どういうことだ、ライザー!？」

「リアス殿、これは一体!？」

貴族だろうと、悪魔だろうと、予想外の事態に直面して混乱するさまは普通の人間と変わらねえな。

「私が用意した余興ですよ」

そこへ、紅髪の男が現れ、その瞬間に会場にいる貴族たちが騒ぎだした。

「誰？」

「お兄さま！」

部長の口から出た単語にイツセーは驚愕する。

「——つてことは！」

「ああ。魔王さまだ」

「このヒトが魔王！ てか、なんで知ってるんだ!？」

「昨日会った」

「ええっ!？」

そのときはおまえ寝てたからな。

「サーゼクスさま、余興とはいかがな——」

「ライザーくん。レーティングゲーム、興味深く拝見させてもらった。しかしながら、ゲーム経験もなく、戦力も半数に満たない妹相手では些か——」

「……あの戦いにご不満でも？」

「いやいや、私が言葉を差し挟めば、レーティングゲームそのものが存在意義を失ってしまふ。まして、今回は事情が事情だ。旧家の顔が立たぬだろ」

なかなか食べないことを言うな。

「かわいい妹のせつかくの婚約パーティー、派手な趣向もほしいものだ」

魔王はイツセーのほうに視線を移す。

「その少年。キミが有するドラゴンの力、この目で直接見たいと思ってね。グレイフィアと彼の友人である先程見事な戦いを見せてくれた彼に少々段取ってもらったんだよ」

「なるほど。つまりは——」

「先程のは前座。本命として、ドラゴン対フェニックス、伝説の力を宿すもの同士で会場

を盛り上げる、というのはどうかな?」

「お、お兄さま!」

「流石は魔王さまですな。おもしろい趣向をお考えになる」

どうやら、ライザーもやる気になったようだな。

「ドラゴン使いくん」

「は、はい!」

「この私と上級貴族の方々に、その力をいま一度見せてくれないかな?」

「はい!」

イツセーは二つ返事をするが、部長が止めに入る。

「イツセー、やめなさい!」

そんな部長をライザーは手で制し、前に歩み出る。

「このライザー、身を固める前の最後の炎をお見せしましょう」

ライザーは大胆不敵に言った。

「さて、ドラゴン使いくん。勝利の対価は何がいいかな？」

魔王のその言葉に周りの貴族たちが非難の声をあげる。

「サーゼクスさま!？」

「下級悪魔に対価など!？」

「下級であろうと、上級であろうと、彼も悪魔だ。こちらから願い出た以上、それ相応の対価は払わねばならない。何を希望する？ 爵位かい？ それとも絶世の美女かな？」

さあ、なんでも言ってみたまえ」

イツセーの答えは決まっていた。

「……………部長を——いえ！ リアス・グレモリーさまを返してください！」

「ふふ、いいだろう。キミが勝ったら、リアスを連れていきたまえ」

L i f e . 1 3 約束、守りに来ました！

俺はいま、会場の外、中庭らしきところにいた。近くには千秋たちや木場たち、ソナ会長もいた。

周りにはパーティーに参加していた貴族たち、そして、上空には映像が映し出されていた。

映像ではレーティングゲームのときと同様の異空間に作られたフィールドでイツセーとライザーが対峙していた。

フィールドの特徴はシンプルなコロシウム風で、周囲には巨大なチェスの駒の像が壁のように並んでいた。

さらに、フィールドに部長、部長の兄である魔王、ライザーの妹の顔が映し出されていた。あのフィールドでは、三人の顔と音声映し出されるようになっていたのだ。

《では、始めてもらおう》

魔王の開始宣言により、戦いの幕が開かれた。

『部長、十秒でケリをつけます!』

唐突にイツセーはそんなことを告げた。

それを聞いたライザーの妹がイツセーの正気を疑いだす。

《お兄さまを十秒ですって! 正気で言ってるのかしら!?!》

『ふん。ならば、俺はその減らず口を五秒で封じてやる。二度と開かぬようにな』

そう言い、ライザーは炎の翼を広げて飛翔する。

『部長、プロモーションすることを許可願います!』

部長は何も言わずに頷いて答えた。

『プロモーション、「女王^{クイーン}」!』

『無駄だ!』

プロモーションしたイツセーに向けて、ライザーは炎を撃ち出すが、イツセーはそれを避け、高々と告げる。

『部長! 俺には木場みたいな剣の才能はありません。朱乃さんみたいな魔力の天才でもありません。小猫ちゃんみたいな馬鹿力もないし、アーシアの持つような素晴らしい治癒の力也没有せん! それでも俺は、最強の「兵士」^{ボーン}になります! 部長のたぬなら俺は、神様だってぶっ倒してみせます!』

高々と告げるイツセーの言葉に呼応するかのようには、籠手の宝玉がどんどん輝きを増していく。

『輝きやがれ! オーバーブーストオツ!!』

『^{ウエル}Welsh ^{ドラゴン}Dragon ^{オーバー}over ^{ブースター}Booster!!!』

籠手からその音声が発せられた瞬間、イツセーを赤い閃光が包みこんだ。

そして、光が止んだその場にいたのは、体の各所に宝玉が埋め込まれた赤い鎧を身に纏ったイツセーだった。

その全身鎧はまるで、ドラゴンの姿を模しているようだった。

『これが龍帝の力! 禁手、「赤龍帝の鎧」だ!』

『バランス・ブレイカー 禁手——セイクリッド・ギア 神器の力を高め、ある領域に至った者だけが発揮する神器の

最終到達点とされる現象。

「世界の均衡を崩す力」という意味でそう呼ばれ、禁じられし忌々しい外法とまで言われている。

『テン X』

籠手からカウントが発せられる。先ほどイツセーが言った十秒とは、勝利宣言ではなく、あの鎧を維持できる時間制限のことだったのだ。

イツセーは飛び上がり、魔力の塊を撃ちだす。

『ぐっ!?!』

ライザーが慌てて避けると、魔力の塊は像に当たり、激しい爆風がフィールドを包む。避けたライザーのもとへ、イツセーは背中の噴出口から魔力を噴き出させ、ライザーに突貫する。

『ここだッー!』

『うおっ!?!』

『^{ナイン}IX』

ライザーは間一髪のところ、イツセーの突貫を避ける。

避けられたイツセーはうまく減速できなかったようで、そのまま像に突っ込んでしまった。

『なんだ!?! この力と速さは!』

ライザーが驚くのも無理はない。それだけ、いまのイツセーの力と速さは驚異的なものだった。

「ですが、彼はどうやってあれほどの力を？」

会長の疑問はもつともだろうな。

むろん、俺は知っている。どのようにしてその力を得たのか。——そして、どれほどの犠牲があったのかを……。

『本当に不愉快なクソガキだ！　いまの貴様はただのバケモノだ、クソガキ！　火の鳥と鳳凰、フェニックス不死鳥と称えられた我が一族の業火、その身で受け燃え尽きろ！』

『エイトⅧ』

『てめえのチンケな炎で俺が焼かれるわけねえだろ！』

炎を纏ったライザーと赤い鎧を着たイツセーが激突し、赤いオーラと炎がフィールドを縦横無尽に駆け巡る。

『ぐあつ?!』

力の激突を制したのはライザーで、イツセーはフィールドに叩きつけられてしまった。

『………鎧がなかったら………これがあいつの力だっていうのか………』

『VII』
セブン

『怖いかな？ 俺が怖いかな？ おまえは「赤龍帝の籠手」ブーステッド・ギアがなければ、ただのクズだ!』

イツセーを見下ろしながら嘲笑うライザーは炎を撃ちますが、イツセーはすぐさま飛んで避ける。

「………イツセー兄………!」

「——信じろ、あいつを」

不安そうにイツセーを見ている千秋に、ただ、信じろと告げる。

『はあああッ!』

『でやあああッ!』

イツセーは籠手で、ライザーは炎を纏わせた拳でお互いに殴りあった。

『シツクス
VI』

『ぐっ………ふあっ………』

イツセーの兜から吐血による血が吹き出た。

相打ち。だが、ライザーには再生の力があり、実質はライザーが押し勝ったことにな
る。

『ふふ！ その程度——がはっ!?』

だが、ライザーも吐血をした。その事実はこの場にいる全員が驚愕していた。吐血するということは、ライザーの再生の力が働いていないということになるからだ。

『………き、貴様………！ 何をした——っ!?』

ライザーがイツセーの左腕を凝視し、驚愕する。
イツセーの左腕をよく見ると、何かを持っていた。

『………十字架!?』

そう、イツセーが持っていたのは十字架であった。

『があっ!?』

『ファイブ
V』

イツセーは像に叩きつけられ、そのままフィールドに倒れこむが、すぐに立ち上がる。ライザーはフィールドに降り立ち、そして膝を着く。

『……十字架……だど?!』

『……うちの「僧侶」^{ビショップ}は元シスターでね。奥にしまいこんでたのを、ちよつと借りてきたのさ』

そう、あのととき、イツセーがアジアに頼んで持つてこさせたのは、十字架であった。

『流石のあんたでも、^{セイクリッド・ギア}神器で高めた聖なる力は堪えるようだな!』

『フォー
IV』

確かに、いかに不死身とはいえ、悪魔である以上、聖なる力は効くだろう。イツセー

がアーシアに頼んだときも、新たに得た『譲渡』の力で十字架の聖なる力を高めようという魂胆はすぐにわかった。

『……バカな！ 十字架は悪魔の体を激しく痛めつける。いかにドラゴンの鎧を身に着けようと、手にすること自体……』

ライザーの言う通り、悪魔であるイツセーが十字架を持つことは本来できないはずである。譲渡の力で聖なる力を高めているのならなおさらだ。だが、イツセーは手にしていた。

そのことに、周りの皆も驚愕していた。

そして、ライザーがイツセーの左腕を見て、何かに気づいた。

『まさか！ 貴様、籠手に宿るドラゴンに自分の腕を!?』

『Ⅲ^{スリー}』

『ドラゴンの腕なら悪魔の弱点は関係ないからな!』

籠手に隠れてわからなかいが、よく見ると、籠手の隙間から見られた左腕が人のものではない異形なもの——そう、イツセーの左腕はドラゴンの腕になっていたのだ。

「どういふこと、明日夏兄!」

千秋が問い詰めるように詰め寄ってきた。

「……あいつが言った通りだ。イツセーはあの力を得るために、籠手に宿るドラゴンに左腕を差し出したんだ」

それを聞いた皆は驚愕し、千秋は涙を流し始めた。十字架を渡すときに事情を聞かされたアーシアも、同じように泣いていた。

そして、鶉と燕は何かを思い出している様子だった。おそらく、昔のことだろう。いまのイツセーに、身を挺して自分たちを守ってくれていた当時のイツセーの姿を重ねているのだろう。

『正気か貴様!? そんなことをすれば、二度と戻らないんだぞ!』

『Ⅱ』

『それがどうした!』

ライザーの言葉にイツセーは意にも返さない。

イツセーの覚悟はそれほどのものなのだ。

『Ⅰ』

『たかが俺の腕一本、部長が戻ってくるなら安い取り引きだあああつ!』

イツセーはライザーに向かって飛び出す。

ライザーは完全にイツセーの気迫に圧倒され、動けないでいた。

時間もない! これで決まれ!

『うおおおッ!』

『Count up』
カウント アップ

『えっ? え、あつ、うわっ!』

だが、そんな俺の思いやイツセーの覚悟を嘲笑うかのように、イツセーがライザーに肉薄する瞬間に無情なタイムオーバー宣言の音声が発せられ、鎧が消失してしまった。イツセーは突然の損失感に呆気にとられ、バランスを崩して地面に倒れ伏してしまっ

「そんな!? あとちよつとだったのに!」

「ここまでなの……!」

無情な現実には、千秋と燕が悲嘆する。

「……イツセーくんは頑張ったよ……! もうこれ以上戦わなくていい

よ………!」

鵜にいたつては、イツセーの腕の犠牲の事実のショックで完全にこのありさまだ。

木場たちも悔しさのあまり、拳を握り絞めていた。

周りの貴族たちの顔は完全に決着が着いたと考へてる顔をしていた。

『一応、鎧が解除される瞬間に宿つてるドラゴンが籠手に力を残したみてえだが、とてもじゃねえが、勝つのは無理だな』

ドレイクもこんな調子だ。

誰もが、この勝負がイツセーの敗北で終わったのだと思つていた。

「まだだ!」

そんな空気に我慢ならず、俺はらしくもなく、声を張り上げて叫んでいた!

「イツセーはまだ諦めてねえ!」

そんな俺の叫びに応えるかのように、イツセーは立ち上がろうとする。

『……………絶対に諦めねえ——ぐっ?!』

いまだに諦めずに立ち上がるイツセーの胸ぐらをライザーが掴んで持ち上げる。ライザーは鎧が消えたことをいいことに、余裕を取り戻し始めていた。

『さて、そろそろ眠ってもらおうか! 目覚める頃には、式も終わってるだろ——』

『……………まだ、だ……………』

『あ?!』

『……………火を消すには——水……………だよなあ!』

イツセーは懐から水の入った瓶を取り出し、ライザーに見せつけた。

「聖水!?!」

木場が瓶に入っている液体の名称を驚愕しながら口にした。

そう、イツセーがアーシアに持つてこさせたのは、十字架だけでなく、あの聖水もだった。

「ですが、ライザーほどの悪魔に聖水程度では……」

会長の言う通り、上級悪魔に聖水はそんなに効果がないらしい。周りの貴族たちもそれをわかつているのか、イツセーの行動に嘲笑していた。千秋たちや木場たちも訝しげに見ていた。

確かに、効かないだろうな——イツセーの左腕にあるものがなければだが。

どうやらライザーはイツセーの意図に気づいたようだが、すでに遅く、イツセーは口で瓶の蓋を取り、ライザーに聖水を浴びせていた。

『ブーステッド・ギア・ギフト
「赤龍帝からの贈り物」 ツ！』

『トランスファー!!』

『しまっ——』

聖水の聖なる力が強化された瞬間、聖水がライザーの身を焼いていく。

『ぎゃあああああつあああつ!!? ぐうっ……ぐっ……あつ……あつ……あ
ああつ!!? ああああつああつ!!?』

ライザーは聖水がかかった顔を手で押さえ、激しく絶叫する。

「ライザーの炎が!」

木場が指摘した通り、ライザーの炎の勢いが衰えていた。

「強化された聖水が、体力と精神を著しく消耗させているのでしよう」

会長がライザーの身に起こっていることを解説してくれた。

灰の中から復活する不死鳥フェニックスでも、精神だけは瞬時に回復できない。つまり、心までは

不死身ではなということだ。

『アーシアが言っていた！ 十字架と聖水が悪魔は苦手だつて。それを同時に強化して、同時に使ったら、悪魔には相当なダメージだよな！』

ライザーは無言で震えながら立ち上がり、震える手に炎を集め、イツセー目掛けて炎を撃ちますが、イツセーはジャンプして避ける。

『木場が言っていた！ 視野を広げて相手を見ろと！』

イツセーは着地すると、十字架に残りの聖水をかける。

『トランスファー!!』

『朱乃さんが言っていた！ 魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集める！ 意識を集中させて、魔力の波動を感じればいいと！』

十字架と聖水を同時に強化し、イツセーは左腕を前に突きだす。

『小猫ちゃんが言っていた！ 打撃は中心線を狙って、的確に決りこむように打つんだと！』

イツセーは合宿での木場たちの教えを高々と復唱する。おそらく、あれにはゲームで散り、無念の想いを抱いた木場たちの想いもこめて言っているのだろう。

イツセーの復唱に木場たちは笑みを浮かべていた。

『明日夏が言っていた！ 相手の隙を見つけたら、そこに全力を叩きこめと！』

さらに俺の教えまで復唱された。

あいつめ、俺がゲームに参加できず、歯痒かった想いもこめてくれるのか。

イツセーの気迫にライザーは焦り、慌てふためきだす。

『ま、待て！ わかっているのか!? この婚約は、悪魔の未来のために必要で、大事なもののなんだぞ！ おまえのように何も知らないガキが、どうこうするようなものじゃない

んだ!？」

ライザーはイツセーに命乞いのような説得をするが、イツセーが引き下がることはなかった。

『難しいことはわからねえよ！ 俺はただ、親友に言われたことをやるだけだ！ 余計なことは考えず、おまえをぶっ飛ばし、部長を奪い返す！ でもな、これだけは言わせてもらうぜ。お前に負けて気絶したとき、うつすらと覚えてたことがある。——部長が泣いてたんだよ！ 俺がためえを殴る理由は、それだけで十分だアアアツ!!』

ドゴオオンツ！

『があっ!？』

イツセーの渾身の左ストレートが、ライザーの腹部にめりこんだ。

ライザーは悲鳴をあげることなく、腹部を押さえながらあとずさる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・こ・・・・・・・・こんなことで・・・・・・・・お・・・・・・・・俺
が・・・・・・・・!?!』

ライザーはそのまま、前のめりに倒れこんだ。

『お兄さま!』

ライザーの妹が乱入し、ライザーを庇うように、イツセーの前に立ち塞がる。
イツセーは拳をライザーの妹の前に突きだし、高々と告げる。

『文句があるなら俺のところに来い! いつでも相手になってやる!』

『——っ!』

ライザーの妹がイツセーの気迫と言葉に顔を赤く染めていた。

あつ、あの反応はもしや。

まあ、ともかく、勝負はイツセーの勝ちで幕を下ろした。



イツセーが部長を連れ、俺たちのところまでやって来た。

「やったな」

「ああ」

俺たちは短い会話をし、ハイタッチをする。

「そういえば、もうひとつの魔方陣はなんなんだ？ 部長を助けたときに役に立って

言ってたが？」

「ああ、そういえば」

イツセーは魔方陣を取り出し、宙に掲げると、魔方陣が光りだし、魔方陣から何かが召喚された。

キュイイイイッ！

「な、なんだ!？」

召喚されたのは、獅子の体、鷹の頭と翼を持った獣だった。

「グリフォンね」

部長が現れた獣の名を口にする。

これがグリフォン。この目で実物を見るのは初めてだった。

たぶん、これに乗って帰れることだろうな。

——まさか、いざつてときの逃走用なんてことは流石にないはずだ。

「あらあら、うふふ。せっかくですから、イツセーくんが部長を送ってさしあげたら？」

「えっ? 俺が!」

「あたりまえだろ。今回、姫を助けた勇者さまはおまえなんだからな」

「そうね、お願いできるかしら?」

「ぶ、部長のご命令なら!」

イツセーはグリフオンの背に乗り、部長の手を取って前に乗せた。何気に絵になつてゐるじゃねえか。

「先に部室で待つてゐるから！」

イツセーの言葉と同時にグリフオンが翼を羽ばたかせ、上空へ飛び去つていった。

「あのグリフオン、最悪の場合の逃げ道として用意したんだが」

いつの間にか、俺の隣に来ていた魔王がそんなことを口にした。

——ていうか、おいおい、まさかが的中しやがつたよ……

「ほら、人間世界の映画にそのようなものがあつただろ？」

「……現実と映画を一緒にしないでくださいよ。もしそうなつていたら、あとが大変だつたでしょう？」

「なに、結果オーライというやつだ。今回の件で、私も父もフェニックス卿も、いろいろ

反省したよ。自分たちの欲を押しつけすぎたとね。残念ながら、この縁談は破談が確定したよ」

「残念ながら、ですか。——お顔はそうは見えませんか?」

とてもじゃないが、残念とは程遠いぐらい、穏やかな表情をしていた。

『ウエルシュ・ドラゴン赤い龍』がこちら側に来るとは思いもよらなんだ。『パニンダグ・ドラゴン白い龍』と出会うのも、そう遠い話ではないのかもしれないな」

「パニンダグ・ドラゴン白い龍……ですか」

魔王が口にした単語に、目的を達成して晴れやかだった俺の気分はすぐさま警戒色の強いもの変わってしまった。

できることなら、そいつとイツセーが無縁でいてほしいものだ。

おそらく、絶対ありえないことを願いながら、俺はイツセーが飛んでいったほうを見る。



「うはあああつ！」

上空から冥界の景色を眺めていると、部室の手が俺の頬に触れてきた。

「部長？」

「……バカね……こんなことをして。……私のなんかのために……」

部長が沈痛な面持ちで、異形なものに変わってしまった俺の左腕を擦っていた。

「お得ですよ。だって、こうして部長を取り戻せたんですから！」

「……今回は破談にできたかもしれない。でも、また婚約の話が来るかもしれないのよ……」

悲哀に暮れている部長に俺は笑って答える。

「次は右腕、その次は目——」

「イツセー!?!」

「何度でも、何度でも、助けに行きますよ! 何しろ俺、リアス・グレモリーの『兵士《ポーン》』ですから!」

そう言った次の瞬間、俺の唇が部長の唇で塞がれた!

えっ? ええっ? ええええっえええっ!?!

部長にキスされた俺の頭の中はパニックになっていた。

部長は唇を離すと微笑んだ。

「ファーストキスよ。日本では女の子が大切にされるものよね?」

「え、ええ、そうですけど——って、えええ!?! ファーストキス! い、いいんですか、俺なんかで!?!」

「あなたはそれだけの価値のあることをしてくれたのだから、ご褒美よ」

あー、このご褒美だけで頑張ったかいがあつたぜ!

「それから」

「はい！」

「私もあなたの家に住むことに決めたわ」

「はいいいっ!?!」

「下僕との交流を深めたいのよ」

マ、マジっスかあああつああつ!?!



「——と、そのような感じで、私、リアス・グレモリーもこの家に住まわせていただくことになりました」

現在、兵藤家にて、部長のホームステイ宣言がされていた。

ああ、おじさんとおぼさんの開いた口が塞がらないでいるよ。

そして、わかりやすいぐらいに頬を膨らませたり、不機嫌になっている千秋たちがいた。

その後、普通にOKとなり、いまは部長の私物を運んでいる真っ最中だった。

「そういうことだから、宣戦布告ってことでいいかしら、あなたたち?」

部長は千秋たちにあからさまな挑発をする。

要するに、部長もイツセーに惚れたってことか。千秋たちも大変だなあ。

「・・・・・・・・なあ、明日夏」

「・・・・・・・・なんだ?」

「・・・・・・・・俺たちの周り、どんどん賑やかになっていくな」

「・・・・・・・・そうだな」

Life. Extra 士騎兄妹の休日 明日夏篇

これは、俺、士騎明日夏のとある休日の話であった。

「う〜ん♪ 久々に肉体で活動できるぜ♪」

俺の視界内で、俺が嬉々とした表情でいまの言葉を口にした。

いきなり何を言ってるのか混乱したかもしれない。

端的に言えば、現在、俺の肉体の主人格がドレイクになっているのだ。

なぜ、このようなことになったかという点、いまから数日前、イツセーの家への部長のホームステイ宣言よりもまえに遡る。

イツセーがライザーを倒し、晴れて部長を取り戻せてめでたしめでたし——とはいかなかった。

イツセーはライザーを倒すために、一時的な禁^{バランス・ブレイカー}手の力を得た。その代償として、『赤龍帝の籠手』に宿るドラゴンに自分の左腕を差し出したのだ。結果、イツセーの左腕

はドラゴンの腕という異形のものになってしまった。

イツセー本人はそのことに対する後悔も左腕への未練はないようだ。

とはいえ、そのままの状態では、普段の生活がままならないということで、副部長とアーシアが魔力によって腕を元の姿に形状変化させたのだが、一時的な効果しかなく、すぐにドラゴンの腕に戻ってしまったのだ。

そこで、オカ研総動員でもとの腕に戻す方法の模索を始めた。

そして俺はドラゴンのことならドラゴンに訊くのが一番手っ取り早いだろうということ、リスクの大きさを覚悟しながら、ドレイクからイツセーの腕をもとに戻す方法を聞き出した。

結果、イツセーの左腕はもとに戻すことはできなかったが、定期的にある方法を行うことで、外見だけはもとの腕に戻すことはできた。

そして、その情報料として、今日一日だけ、ドレイクに俺の体を明け渡すことになったのだ。

むろん、このことは誰にも言っていない。余計な心配をかけるわけにはいかないからな。

ちなみに、俺の人格は神セイクリッド・ギアの内部に存在している。

以前、ドレイクが俺の肉体を奪おうとしたときは、自分の人格が消えかける感覚が

あつたが、今回はそういうのは感じなかった。あのときはドレイクが俺の人格を無理矢理に上書きしようとしたからそう感じたからで、今回は人格を入れ替える要領でやったため、そのような感覚は感じなかったわけだ。

いまの俺の視界に映る光景は、普段、ドレイクが見ている光景ということになる。

「安心しろよ。今日が終わるころにはちゃんと返すからよ」

いまいち信用に欠ける口調でドレイクは言った。

そっちも心配なんだが、正直、俺は別のことが心配だった。それは、こいつが俺の体で起こす行動だ。

どんな行動を起こすか、不安でしようがない。

「さてと、んじや服借りる——って、お前の体だから借りるってのは変か？」

そんなことを言いながら、ドレイクは俺の部屋のクローゼットを開ける。

「……しっかし、長年、おまえの中から見てて知ってたけど、改めて見ると地味

な服ばっかだな」

手持ちの服に文句を言われる。

確かに俺が所持している服はほとんどが機能的重視でオシヤレとは縁遠いものばかりであった。俺自身、オシヤレとかにあまり興味がなかったからな。

「しようがねえ。とりあえずこれでいいか」

そう言って取りだしたのは、黒系のシャツとジャケットにジーンズだった。俺がよく外出のときに着ていく組み合わせだった。

「……………俺的にはもつと派手なのがいいんだけどな」

……………はあ、少しだけなら俺の通帳からおろしてもいいぞ。

「マジで！ 気前がいいな、おい！」

・・・・・・・・グチグチと言われても喧しいだけだからな。

「んじや、まずは、銀行に出発といきますか♪」



・・・・・・・・まさか、十万もおろすとは思わなかった。

そんなに一体、何に使うつもりだ？

「別に全部使うつもりはねえよ。念のための予備金つてやつさ。つうか、あんだだけ大金があるんだからケチケチすんなよ」

俺と千秋は現在、兄貴と姉貴からの仕送りで生活をしている。しかも、兄貴に至っては生活費だけでなく、俺と千秋のお小遣いまで送ってきている。おまけに、一般的に比べればかなりの高額をだ。

俺のぶんはいらないと言ったが、兄貴も譲らず、高校卒業までのあいだということを決着をつけた。

そして、俺はそれを必要なふんど多少の余分なことへの出費程度にしか使わず、残りは貯金している——のだが、もらってる金額が金額なため、口座の金額が高校生が持つにしてはえらい額になっていた。正直、十万おろされてもとくに痛手にはならないぐらいには。

・・・・・久々に残高を見たが・・・・・金銭感覚が狂いそうだな・・・・・。そんな感じで、調子に乗ったドレイクが十万もの大金をおろしたわけだ。

「さてと、まずは服だな♪」

大金を手にしたドレイクは意気揚々と服屋に向かうのだった。



「悪くないな♪」

そう呟くドレイクが主人格の俺の服装は、派手な模様をあしらった赤のシャツ、今日着てきた俺のジャケット（どうやらこれは気に入ったらしい）、茶色のダメージズボンと

いうものだった。

さらにドレイクは服を購入したあと、アクセサリー屋に行き、いくつかのアクセサリを購入し、すでに身に付けていた。

身に付けているものは、右手の中指にドラゴンをあしらった指輪、その指輪と鎖で繋がっている大きめの指輪を小指に、右手の人差し指と薬指にシンプルな形をした銀色の指輪、右腕にドラゴンをあしらった腕輪、左腕にシンプルな形をした銀色の腕輪、首にドラゴンをあしらったネックレス、ベルトにドラゴンをあしらったバックル、ズボンの左側にチェーンというものだ。どれもこれも、無駄に派手なものばかりだった。

それにしても、アクセサリーにドラゴンがあしらわれているものが多いのは、自分がドラゴンだということへのこだわりなのか？

ただ、ひとつ言えることは……いまからこの格好で街中を歩くのだと思うと憂鬱だということだけだ。

別にダサイというわけじゃない。なんだったら、派手ながらもセンスがあると言ってもいいくらいには問題なかった。……俺の体じゃなければな。

……頼むから知り合いに出会わないでくれ……



「お、おまえ、明日夏か!？」

「……俺の望みは無惨に砕け散った。

運の悪いことに、知り合いこと松田と元浜と鉢合わせしてしまった。

二人とも、いまの俺の姿を見て啞然としていた。それなりに付き合いの長い二人からすれば、いまの俺の姿は驚愕ものだろうからな。

「よお、松田あ、元浜あ♪」

「……な、なんだよ、その喋り方……? おまえ、そんなキャラだったっけ……? その格好も普段のおまえならしないぞ絶対……」

「……なんか変なもんでも食ったのか……?」

松田と元浜は俺に指をさしながら顔を引き攣らせていた。

「ああ、今日はちよつと思いきってイメチェンを、な♪」

「……そ、そうか……」

．．．．．なんだか誤魔化したのか、誤魔化せなかったのか微妙な反応をしていた。

「．．．．．き、きつと、こいつにもいろいろあるんだろ．．．．．」

「．．．．．そ、そうだな．．．．．」

コソコソと話して無理矢理納得している二人にドレイクが訊く。

「ところで二人とも、何してんだ？」

「あ、ああ。あえて言うなら、紳士の必需品を買いに、か」

「うむ」

「あー、エロディスク買いに行くんだな！」

「失礼な言い方するな！」

「エロに失礼もなにもないだろ？」

「いや！ エロは偉大なものなのだ！」

「貴様には一生わかるまい！」

「ほー」

．．．．．なんだ．．．．．いやな予感がする．．．．．!

「なら、そのエロの偉大さを俺に教えてもらおうか」

「はっ?」

ドレイクの言葉に、二人はマヌケそうな顔をし、俺は驚愕してしまった。

おいっ! ふざけるな、てめえ!

俺はすぐさま、ドレイクに制止の声をかけるが、ドレイクに聞こえないふりをされてしまう!

「てなわけで、俺も連れてってくれよ?」

「本当にどうしたんだ、明日夏!」

「マジで大丈夫か!」

松田と元浜は本気で俺のことを心配そうに訊いてくる。

「言っただろ、今日は思いきってイメチェンしたって」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

松田と元浜は無言でお互いに向き合う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうする、元浜よ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、いいんじゃないか。こいつもきつと、いろいろと発散
したいんだろう」

おい! おまえらもなに適当に納得してんだ!?

「よし! ならばついてこい!」

「エロの偉大さを教えてしんぜよう!」

「おう! 頼むぜえ♪」

ふざけるなああつ!

俺の叫びはドレイク以外に聞かれることはなかった。



.....はあああ.....。

「溜め息すると幸せが逃げるぜ？」

.....誰のせいだ、誰の.....。

あのあと、二人に連れられてなにやら路地裏にあつた店に入り、そこで延々と二人にエロについて語られ、正直、俺はげんなりしていた。

ドレイクは二人の話をおもしろそうに聞いていた——というより、熱心に話す二人を見て楽しんでいた。

その後、ドレイクは松田と元浜と一緒にゲーセンに行ったりし、二人と別れた。

.....だが、俺の精神的に大変だったのはそれからだった。

髪を染めようとしたり、声をかけてきた不審な女性の誘いに乗ろうとしたり、顔に傷がある明らかにその手の集団に接触しようとしたりと、もうさんざんだった.....。

改めて周りを見ると、いつのまにか、すっかり夕暮れになっていた。

「いやあ、楽しい時間ってのはあつというまに過ぎちまうなあ♪」

ファストフード店で買ったハンバーガーを頬張りながら、嬉々とした表情でドレイクは言う。

「……………こっちは神経が休まらなかつたんだがな……………！」

「慌てるおまえは見てて飽きなかつたぜ♪」

「……………この野郎……………！」

「ははは♪」

のんきそうなドレイクの笑いに俺はうんざりになってきた。

「……………心底疲れた……………」

「ん、なんだ？」

話し声が聞こえ、ドレイクがそちらのほうを見ると、軽薄そうな五人組の男たちがひとりの女性を囲んでいた。

「ありやあ、ナンパかねえい？」

十中八九その通りだろう。

女性はいやがっており、男たちの間を縫って逃げようとするが、男たちはそれを逃さない。

ドレイク、替われ！

放っておくわけにもいかないと、ドレイクに人格の入れ替えを要求する。

「いいや、ここは俺にやらせろ♪」

予想外にドレイクが助けに行こうとしていた。

「ちよつと面白そうだからな」

そう言うと、ドレイクは駆けだした。

「あ、あの、やめてください．．．．．」

「いいからさあ♪ 俺たちといいところに——ぐへあっ!？」

「「「なっ!？」」」

ドレイクは女性に手を伸ばした男を助走を加えた飛び蹴りで吹っ飛ばした。

「俺、参上!」

意気揚々とポーズをとって名乗りをあげるドレイク。

なんだ、そのポーズと名乗りは．．．．．。

「なんだ、てめえ!？」

「なんのつもりだ!？」

「通りすがりの正義の味方だ、覚えておけ——なんつってな」

男たちの怒声にドレイクは飄々と答えた。

「ぎけんじゃねえぞ！」

「女の前だからってカッコつけてんじゃねえぞ！」

男二人が殴りかかってくるが、ドレイクはそれを易々と避ける。

「よっ！」

「があっ!？」

「ほいつと！」

「ごはあっ!？」

ドレイクはそれぞれの男の顔面に強烈な蹴りを叩き込み、男二人の意識を刈り取ってしまった。

「な、なんだ、こいつ!？」

「めちやくちや強え!」

「ん♪」

「ひ、ひいっ!?!」

残る男二人は、ドレイクの強さを目の当たりにし、一目散に逃げだした。

「おっい♪」

「ひっ!?!」

「忘れ物♪」

ドレイクは逃げようとする男二人を呼び止め、倒れている男たちを指差した。

その後、倒れた仲間を担いで、男たちは今度こそその場から逃げ出していった。

「なんでえ、大したことねえの」

「し、士騎……くん?」

「ん?」

女性が俺の名を口にしたので、ドレイクがその女性のほうを見る。

なんと、女性は霧崎だったのだ！

………ホント、こんなときに限って知り合いに会うな！

「よっ、霧崎」

途端にドレイクは明らかにおもしろがってる笑みを浮かべ、霧崎に声をかけやがった！

「ど、どうした………の………士騎………くん？」

霧崎はありえないものを見たかのような反応をして、なんとか言葉を絞り出していた。

「どうしたって、何が？」

「そ、その格好………」

霧崎は震える手で、ドレイクが着ている服を指差す。
．．．．．普段の俺を見ていれば当然の反応だよな．．．．．。

「イメチエン♪」

「え、えええ．．．．．」

霧崎は信じられないのか、なんとも言えないと言いたそうな表情をしていた。
そんな霧崎を見たドレイクがニヤツと笑う。

．．．．．いやな予感する！

「霧崎い♪」

ドレイクは唐突に霧崎に近づく！
おい！ てめえ、何する気だ!?

「し、士騎くん!?!」

いきなり近づいてきたドレイクに霧崎は驚き、顔を赤くしながら後ずさる。だが、霧崎はすぐに壁へと追い込まれてしまった！

ドン！

「——ツ!?!」

壁沿いに横に移動して逃げようとしていた霧崎だったが、ドレイクが壁に強く手を当てて退路を塞いでしまった！

「逃がさねえぜ♪」

「ひうつ!?!」

ドレイクは空いているほうの手で霧崎の顎をクイツと上げ、鼻と鼻が触れ合うぐらいまで顔を近づける！

霧崎は耳まで顔を真っ赤にしており、涙まで浮かべていた！

「フフフ♪」

「——ッ！」

そして、ドレイクはさらに顔を近づけ、霧崎は覚悟をしたかのように目をキュツと閉じてしまう！

それを見た俺は——。

ドゴオン！

ドレイクから体の主導権を奪い返し、自分の顔を思いつきり殴った！
顔に激痛が走り、顔を押しさえながら後ずさる……。

「し、士崎くん、大丈夫!?!」

霧崎はあんな目に遭わされたのにこちらの心配をしてくれる。

「……………へ、平気だ……………気にするな……………」

「で、でも!？」

「大丈夫だ! それよりも、きつきは悪かった! 今日の俺はホントにおかしくなつた! できることなら、忘れてほしい! それじゃ、気をつけて帰れよ!」

俺はその場から猛ダツシユで、その場から逃げ出すように駆けだした!



.....最悪だ。

明日から霧崎とどう顔を合わせればいいんだ.....。

『でも、あの女、最後までいやとは言わなかったぜ。脈ありなんじゃねえのか?』

.....こいつはあ.....!

こいつに直接手を出せないのが腹立たしい!

『そう、怒るなよ。よかつたじゃねえか。俺に肉体を奪われたときに奪い返せる目処が

たつて』

たしかに、それは非常に価値のある出来事だった。ただ、そのために払われた代償が大きすぎる！

『ていうか、いつまで顔を押しさえてる気だよ？ 知ってるんだぜ。もう痛みは引いて、手で押しさえてるのは照れて、赤くなってる顔を隠すためだつてのは♪』

くっ、バレてたか……。

『そりゃ、俺とおまえはある意味一心同体みたいなもんだからな』

至近距離で見た霧崎の顔に思わず見とれてしまい、顔が熱くなるのを感じて、あのときは思わず自分の顔を殴ってしまった。

「随分とおもしろいことになってたね？」

突然かけられる声。

見ると、仮面の奴がいやがった………。

………しかも、明らかにおもしろがってた。

「それにしても、随分とイメチェンしたじゃないか」

「これは………」

「なーんてね。知ってるよ。キミの神セイクリッド・ギア 器に宿ってるドラゴンが勝手にやったことな

んだろ。今日ずっと見てたからね」

『あー、なーんか視線感じるなって思ったが、やっぱりこいつだったか』

クソツ、相変わらず、俺のことは見てたのか………。

「ま、そんな格好も、彼女にしてあげたみたいなの振る舞いをするキミも、私は嫌いじゃないよ」

「………さっさと忘れろ！」

「やだ。帰ったあと、思い出してきゅんきゅんするつもりなんだから」

「——ッ！」

思わず殴りかかろうとしたが、すでに仮面の奴はいなかった。

「そんなに怒らないでよ」

声が出たほうを向くと、仮面の奴は屋根の上にあった。

「……………ていうか、今日のこいつ、やけにテンションが高いな？」

「今日はもう退散するよ。じゃあね」

言いたいことだけ言って、仮面の奴は闇夜に消えていった。

「……………もう、疲れた……………」

「……………さっさと帰ろう。」

「あ、明日夏!?!」

ああ、もう驚かん……………。

声がしたほうを見ると、イツセーと千秋がいた。

「……………ど、どうしたんだ、おまえ!?! 本当に明日夏なのか……………!?!」

「ああ、俺だよ、明日夏だよ……………」

「いやいやいやいや!?! 何があった!?! その格好も変だけど、いまにも死にそうな感じだぞー!」

「……………ああー、たしかに、精神的にはもう死んでるかもな……………」

「ホント何があった!?!」

俺は今日のことをイツセーと千秋に話した。

「……………なんと言うか……………お疲れさま」

事情を知ったイツセーの口から出たのは、劳いの言葉だった。

「そういえば、なんでおまえらは二人一緒にいたんだ?」

ふと、気になったことをイツセーと千秋に訊いた。

次の瞬間、千秋は顔を真っ赤にした。

こいつは——ますます気になるな？

「えーつと、ちよつと二人で買い物とかをな．．．．．」

イツセーが少し照れくさそうに言った。

へえ、デートかよ。

『へえ、デートかよ』

．．．．．心の声がドレイクとハモってしまった。

まあいい。こいつはますます、千秋からいろいろ訊き出さないとな。

その夜、俺は今日のことと抱えた多大なストレスを発散させるがごとく、千秋から今日、イツセーとあったことをいろいろと訊き出すのであった。

ちなみに、翌日、学校で霧崎と会ったが、いつもの俺に戻ってたことに安堵してくれた。

今日あったことは気にしていない——というよりも悪い夢を見てたことにしてくれ
たみたいだ。

Life. Extra 士騎兄妹の休日 千秋篇

ある日の休日。私、士騎千秋とはある場所で手鏡とにらめっこをしていた。

「ううー……」

前髪をいじりながら、低い唸り声をあげる私だけど、この唸りは髪型が決まらないことによるものじゃなかった。そもそも、髪型自体はもう整っているの、いじる必要など始めからないのだった。現にこうして前髪を指で軽くちよんと触れるというもはやいじっているとは言えないことしかやっていなかった。

この唸りの原因は、これから起こる行事に対する緊張によるものだった。

その緊張をまぎらわそうと、こうして変化も意味もない前髪いじりを私はやっているのだった。

そこまで私が緊張する行事——それは、イツセー兄とのデートだった。



私はイツセー兄こと兵藤一誠に恋をしている。

兵藤一誠。私を含め、兄の明日夏兄と冬夜兄、姉の千春姉の幼馴染みであり、明日夏兄にとつては親友とも呼べるヒト。そして——私の初恋のヒト。

いつもはエツチで、覗き行為などを行つてしまつており、そのことで学園で（主に女子生徒に）嫌われてしまつているヒトだけど、本当は誠実で、やさしいヒトで、私を救つてくれたヒト。

子供の頃、私の両親は私の目の前で壮絶な死を迎えてしまつた。

お父さんとお母さんの死に、私は酷いショックを受けてしまい、自分の部屋に引きこもつてしまつた。それどころか、下手をすれば生きる気力さえ、なくしかけていたかもしれなかつた。そのためか、ごはんもまともに食べずにいたし、明日夏兄たちの励ましの言葉なども全然耳に入つてこず、泣くか、ボーツとするかしかしていなかつた。

そして、いつのまにか、明日夏兄たちからの励ましがなくなつた。冬夜兄は私たち養うためにハンターになり、家を空けることが多くなつたため。私と同じようにお父さんとお母さんの死にショックを受けていた明日夏兄も千春姉も、その悲しみを抱きながら私を励まし続けることに限界を迎えたため。

そのことも別に恨まなかったし、いまでも恨んでない。．．．お父さんとお母さんを失った悲しみを何よりもわかっていたから。

そんなときだった。いつものように泣いていたある日、私の部屋にイツセー兄が入ってきたのだ。どうやら、偶然私の部屋の前を通ったときに私の泣き声を聞かれてしまい、気になったイツセー兄が部屋に入ってきたようだ。それが、私とイツセー兄の出会いだった。

イツセー兄のことは当初、明日夏兄の友達だという認識でしかなかった。私も子供の頃は人見知りだったこともあり、冬夜兄や千春姉とは違い、存在は知っていても、とくに関わることはなかったし、まともに出会うこともなかったから、ほぼ他人のようなものだった。

そんなイツセー兄との出会いに私は酷く驚いてしまい、イツセー兄を部屋から追い出してしまった。そして、そのヒトとはもうこれで会うことはないと思っていた。

けど、それ以来、イツセー兄は私を励まし続けてくれた。ときには他愛のない話を聞かされたりもした。

けど、私はそれを無視した。．．．そのうち、諦めるだろうと思いつながら。けれど、イツセー兄は諦めなかった。

そんなイツセー兄に、私は次第に興味をもち始め、いつのまにか、私はイツセー兄に

歩み寄っていた。

それを期に、私はイツセー兄を心の依るべにすることで立ち直ることができた。

そして、心の依るべだったイツセー兄のことを私は次第に想いを寄せるようになった。それが、私の初恋の始まりだった。



イツセー兄に想いを寄せるようになり、十年近く経ったけど、いまだにその想いはなかなか告げることはできず、アプローチも本当に些細なことしかできなかつた。

そんなふうにうだうだしていたら、イツセー兄に想いを寄せる人がたくさんできてしまった。

鶴さんや燕、アーシアさん、そして、最近になって、部長ことリアス・グレモリー先輩がイツセー兄に想いを寄せるようになった。

とくに部長は本当にきれいで、スタイルもよく、イツセー兄も毎日のように見惚れていた。

しかも、いまあげた四人はイツセー兄と同棲までしていた。おまけに、燕は素直じゃないから私とそう変わらないけど、鶴さんと部長は私とは大違いで、とても大胆で積極

的だった。アーシアさんも、私に比べれば積極的なほうだった。

このままだと、イツセー兄とお付き合いする以前に、想いを告げるまえにイツセー兄の気持ちが無言に聞いてしまう。

そう思った私は今日、勇気を振り絞ってイツセー兄をデートに誘ったのだった。

想いを告げる——まではできなくとも、せめて積極的なアプローチぐらいはしたかった。

そして現在、そのデートの待ち合わせ場所で私はイツセー兄が来るのを待っていたのだった。

家がお向かい同士なので、わざわざ待ち合わせする必要は本当はないんだけど、デー卜前日からすでに緊張で心臓が張り裂けそうな状態だったので、落ち着くための時間がほしかったため、このように待ち合わせをすることにし、二時間くらいまえから待ち合わせ場所に来ていた私だったが、結局、無意味な努力だった。

そんなふうに私が四苦八苦しているときだった——。

「カーノジョー♪」

二人組の若い男性が私に話しかけてきた。髪を染めており、耳にはピアスをしていたりと派手な格好をしていた。

「キミ、一人？ よかったら、俺たちとどっかいかない？」

男性の一人がそう言う。

ようするにナンパだった。

「……………いえ、ヒトを待っていますので」

さつきまで四苦八苦していた緊張はなくなり、私は淡々と返した。

「もしかして彼氏？ 彼女を待たせるような男なんて放っておいて、俺たちと遊ぼうぜ」

♪

「どうせ冴えない奴なんだろう？ 俺たちのほうが断然カッコいいぜ♪」

だけど、男性たちはなおも私に声をかけてくる。

その場から離れようにも、イツセー兄との待ち合わせ場所なのでそれもできず、私はただただ、男性たちの誘いを断るだけだった。

だけど、男性たちは構わず、なおも絡んでくる。

「まあまあ、そういわずにさあ——」

男性の一人が私の手を取ろうと手を伸ばした瞬間、私はその手を躲し、その隙だらけの足を払って男性を転ばせる。

「てめえ！　いきなり何しや——」

もう一人の男性が言い終えるまえにその顔面めがけて寸止めの蹴りを放つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「——次は当てます」

絶句している男性たちに低い声で言うと、男性たちは一目散に逃げていった。

「ふう」

男性たちが見えなくなったところで、私が息を吐いた瞬間――。

「千秋！ 大丈夫か!?!」

「えっ！ イッセー兄!?!」

慌てた様子のイッセー兄が駆け寄ってきた！

たぶん、さっきのやり取りを遠目に目撃し、心配して慌てて駆けつけてくれたんだらう。

そのことに少し嬉しい気持ちになったけど、突然のイッセー兄の登場にさっきまでの緊張が戻ってきて、それどころじゃなかった！

「お、おい！ 大丈夫か、千秋!?!」

緊張に固まっていた私を見て、イッセー兄はますます心配そうな表情を作って、私の肩

を掴みながら私の顔を覗き込んでくる。

ゴメン、イツセー兄！ 正直に言うとなんかそれ、顔が近くて余計に緊張しちゃって逆効果！ なんてことを言えるはずもなく、なんとかうなずいて答えた！

「よかった」

「……………大袈裟すぎるよ」

安堵するイツセー兄に私はなんとか言葉を発する。

「まあ、たしかに遠目でも、危なげなく追っ払ってたのは見えてただけだな。それでもやっぱり心配だったからさ」

「……………ありがとう」

ううう、嬉しいんだけど、顔が熱くなる。たぶん、いまの私の顔は真っ赤になってると思う。

「大丈夫か、千秋？ 顔が真っ赤だぞ？」

イツセー兄に指摘され、ますます顔が熱くなる。
深呼吸をして、なんとか心を落ち着ける。

「だ、大丈夫だよ。気にしないで」

なるべく平静を装いながら言う。

「それにしても、まだ待ち合わせ時間には早いよ」

時計を確認しても、待ち合わせ時間までにまだ三十分以上もあつた。

「いや、待たせちゃ悪いと思つてな。まあ、結局は待たせちゃったばいけどな……」
「ううん。そんなに待つてないから」

実際は一時間以上もまえに来ていたわけだけど、緊張を解すのに集中してて、正直そんな時間に経つていたとは思えなかつた。

「時間には早いけど、行くか？」

「うん」

一応、最初に比べれば緊張はだいぶ解れていたし、些細だけどデートの時間が増えるので、断る理由はなかった。

私とイツセー兄は待ち合わせ場所から移動を開始する。その際、私はドキドキしながらもイツセー兄の手を握る。イツセー兄も一瞬だけキョトンとしたあと、微笑んで手を握り返してくれた。

ううう、私と違って、イツセー兄はあまり緊張してなさそうだった。

イツセー兄にとっては、私は妹のような感じらしい。

せめて、このデートでもう少し私を異性として見てくれるようにがんばると誓う私だった。



「楽しかったな、千秋」

「うん」

洋服屋さんで洋服をみて回ったり、カフェで小休止をしながらいろいろ話をしたり、映画館で映画を観たり、ゲームセンターでつついっつい遊びすぎたりととても楽しいデートの時間を過ごし、いつのまにかすっかり夕暮れになっていた。

結論から言うと、私とイツセー兄の仲に進展は——特になかった……。

もちろん、少しは積極的なアプローチをしようとした——けど、すぐに恥ずかしくなつて実行に移せなかった。

そのたびに、脳内で明日夏兄から『ヘタレ』と言われたような気がした。

でも、楽しかったのは事実だし、勇気を出してデートに誘つてよかったと思えた。

「いやー、なんかこう、平和な日常的な一日はひさしぶりな気がするなあ」

イツセー兄が何気なしにそう言った。

イツセー兄は最近になって人間をやめることになつてしまった。

普通の一般人であつたイツセー兄のその身に神セイクリッド・ギア器、それも十三種しか存在しない

という神滅具ロンギナス、『赤い龍の帝王』と呼ばれるドラゴンが宿つた『赤龍帝の籠手』を宿して

いたことで、それを危険視した墮天使によつて殺された。そして、殺されたイツセー兄を部長こと上級悪魔であるリアス・グレモリー先輩に悪魔としてよみがえらせてもらった。

そのときの私は本当に大変だった。イツセー兄が死んだことに酷いショックを受け、悪魔として生き返ったことに心底安堵して泣いてしまった。悪魔になつてしまったことに関しても、生きていてさえいてくれるなら関係なかった。そして、私たち兄弟の秘密もイツセー兄に知られることになつた。

そこからは本当にいろいろあつた。

アーシアさんと出会い、そのアーシアさんを助けるために墮天使と戦つたり、部長の婚約者が現れて部長の婚約騒動に巻き込まれ、その決着をつけるためのレーティングゲームに備えて合宿して修業したり、そのレーティングゲームで激戦を繰り広げ敗北してしまい、その結果始められた婚約パーティーに乗り込んで部長を取り戻したりと本当にいろいろあつた。

イツセー兄がそう言つてしまうのも仕方ないかもしれないなかつた。

そうなる、今回のデートで安らげたのなら幸いだつた。

私はふと、イツセー兄の左腕に視線を向ける。見ると、イツセー兄も自分の左腕を見ていた。

イツセー兄は婚約パーティーに乗り込み、部長の婚約者であるライザー・フェニックスから部長を取り戻すために、『赤龍帝の籠手』^{ブリステッド・ギア}に宿るドラゴンに左腕を差し出して一時的に強大な力を手にした。

その結果、イツセー兄は部長を取り戻すことはできたけど、犠牲にした左腕はドラゴンの腕という異形なものになってしまった。

イツセー兄自身は後悔も未練もなく、明日夏兄が見つけてくれた方法でとりあえず見た目だけはもとの人の腕に戻っていた。

「千秋？」

イツセー兄に呼ばれてようやく、私がいつのまにかイツセー兄の左腕に手を伸ばして触れていたことに気づいた。

「……………もう、この腕はイツセー兄の腕じゃないんだよね？」

「……………ああ」

たぶん、いま私はとても辛そうな表情をしていたと思う。

「……………ねえ、イツセー兄……………」

「……………なんだ？」

「……………もし、部長や仲間の誰かが危険な状態になって、どうしようもなくなったら……………」

「また、あの鎧を着るよ」

ためらいなく答えたイツセー兄に私は泣きそうになってしまう。

イツセー兄はとても誠実なヒトだ。その誠実さは、ときに自分の身を犠牲にしても大切なものを守ろうとする。

鶴さんと燕がいじめられているときに、その身を挺して庇ったりした。そのときの私は泣きながら必死にイツセー兄のケガの手当てしたことを覚えている。

アーシアさんのときも、命を捨ててまで助けようとしていた。

そして、部長のためにレーティングゲームで戦い、危うく死にかけて、二日間も眠ってしまふことにもなり、目覚めたらすぐに部長を助けに向かい、左腕を犠牲にして部長を助けた。

「鎧を着ずに解決——ていうか、何事もないのが一番なんだけどな。でも、本当にどうしようもないとき、俺の体の一部であの力を手にいれて、部長や仲間を助けられるのなら、安いもん——」

「安くはないよ!」

あまりにも簡単に言うイツセー兄に思わず叫んでしまった!

「もう無茶はしないで! アーシアさんのときは命を捨てようとして、ゲームのときは死にかけて、部長のために片腕を差し出して!」

「………ゴメン、本当に心配かけて」

イツセー兄の服をギュツと掴み、泣きながら必死に告げる私にイツセー兄はやさしく頭を撫でてくれる。

「でも、心配かけちゃまって悪いけど、取り返しのつかないことになるのは本当にいやだから。もちろん、死ぬ気はねえよ。命は惜しいからな」

やさしく告げるイツセー兄に私は言う。

「——じゃあ、ひとつだけ約束して！ 死なないって約束して！ ずっと一緒にいるって約束して！ もう、大好きなヒトが死ぬのは……」

最後にまた泣きそうになってしまう私を安心させるようにイツセー兄は笑顔を浮かべる。

「ああ、約束するよ！ 俺は死なない！ ずっと千秋と一緒にいる！ ていうか、ハーレム王になるまで死んでたまるか！」

そう強く告げられた言葉を聞いて、私もようやくやく笑顔を浮かべられた。

「約束」

「ああ！」

強く約束をした私たちは手を繋ぎ帰路につく。

その途中、ふと私の脳裏にお父さんとお母さんがこの世から去ってしまった光景が浮かんだ。

あんな思いはもういやだ！ 大好きなヒトを守る力がほしい——そんな思いから賞金稼ぎになるために力を付けた。その想いに応えるように神セイクリッド・ギア器が目覚めた。

今後もイツセー兄が無茶をするのなら、私は命をかけてでもイツセー兄を守る。そのとき、私はそう強く誓った。



帰り道の途中、冷静なつた私はさつき告げた言葉を思い出していた。

『——じゃあ、ひとつだけ約束して！ 死なないつて約束して！ ずっと一緒にいるつて約束して！ もう、大好きなヒトが死ぬのは……』

こ、これつて、ほぼ告白同然なんじゃ!? そう思つた私は顔が火照つてきて、頭の中がパニックになり、心臓がバクバクと鳴り始めた！

な、なんとか落ち着いて、イツセー兄のほうを見る。

イツセー兄はとくに動揺している素振りは見受けられなかった。その事実にも内心で唸りながら、今日のデートの目的を思い出す。

「………ねえ、イツセー兄」

「ん、なんだ？」

「………イツセー兄は上級悪魔になって眷属をハーレムにするんだよね？」

「うん、そうだけど」

それを聞き、私は意を決して言う

「じゃあ——私が立候補してもいい？」

「えっ」

私の言葉を聞いてイツセー兄は素つ頓狂な声をあげる。

いつぼう、私はいまにも心臓が破裂しそうなほどバクバクと鳴っており、顔がスゴく熱くなっていた。

「え、えーと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私じゃ・・・・・・・・ダメ・・・・・・・・?」

すぐに答えないイツセー兄を見て、断られたらどうしようとする不安になった私は消え入りそうな声音でおそろおそろ尋ねた。

「いや、むしろ歓迎だけど——いいのか?」

歓迎と言い、照れながら訊いてきたイツセー兄に私は安心と嬉しさと恥ずかしさで頭がごちゃごちゃになる。

・・・・・・・・とりあえずよかった。それってつまり、イツセー兄は私のことを少しは異性として意識してくれてるってことだよな?」

「・・・・・・・・うん。それに一緒にいるって約束したし」

「えーと、それじゃあ、いつになるかわからないけど、上級悪魔になったら真っ先に千秋を眷属にするよ」

「うん。じゃあ、これも約束」

「ああ、約束だ」

思わぬ約束をしてしまった。イツセー兄、いまの約束のこと、どう思ってるのかな？もちろん、それを尋ねる余裕など私にはなく、火照った顔とバクバクと鳴る心臓の音をイツセー兄に悟られないように帰るのが精一杯だった。

余談だけど、このあと、明日夏兄と合流してしまい、今日のデートのことがバレていろいろ訊きだされるのでした。

そうなると思ったから明日夏兄には言わなかったのにいいいいっ！

第3章 月光校庭のエクスカリバー

L i f e . 1 不穏な気配再びです!

「お、おっばい!」

朝、目が覚めると、眼前におっばいがあった!

な、なぜ目覚めたらそこにおっばいがっ!?

「ううん………」

艶めかしい声が聞こえたと思ったら、おっばいの持ち主に抱き寄せられる。

よく見ると、おっばいの持ち主は部長だった。しかも、何も身に纏っていない素っ裸の状態だった!

……まあ、以前にも同じ展開を経験したことがあるんだけどな。ある日の学校の保健室で休んでいたところに、部長がいまみたいに裸で俺が寝ているベッドに潜り

込んできたのだ。部長曰く「裸じゃないと眠れない」とのこと。

部長が我が家で同居するようになってから早数日。このような素敵なイベントを堪能できるとは——最高だぜ！

「……………なぜこんなことになってるのかよくわからんが、せつかくなので、何気に触れる程度なら——」

俺はその見事なおっぱいに触れるため手を動かそうとする。

「ううん？」

「わっ!？」

だが、手があと少しでおっぱいに到達しそうというところで部長が起きてしまった。
残念無念！

「おはよう、イツセー」

「お、おはようございます……………。そ、それで、この状況は……………?」

「ゴメンなさい。あなたが就寝してたから、お邪魔させてもらったの」

「……………いえ、そういうことじゃなく……………」

「あなたを抱き枕にして寝たい気分だったの」

な、なるほど、気分ですか……………。部長の気分の基準がわかりませんよ。

「まだ時間もあるし、ちよつとエツチなことも下僕とのコミュニケーションかしら?」

チュツ。

俺に覆い被さった部長はそう言い、額にキスしてきた!

ライザーの一件以来、部長の俺への態度が変わったような……………。なんかこう、さらにかわいがられるようになったような気がする。学校への登下校も俺の隣を歩こうとするし、昼休みも俺と過ごそうとしてくるようになったんだ。

「あ、あの、部長……………。俺も男なんで……………」

「襲いたくなっちゃう? いいわよ。あなたの喜ぶことならなんでもしてあげるわ」

なんでもしてあげる!? そ、そんなみなぎる日本語があつたのか!

「ぶ、部長………!」

コンコン。

理性が壊れそうになった俺の耳にノック音が入ってきた!

「イツセーきーん。そろそろ早朝トレーニングの時間ですよー?」

廊下から聞こえてきたのはアジアの声だった。

「ア、アジア!」

「トレーニングのこと、すっかり忘れてたわ」

な、なんてタイミングだ! ヤ、ヤバい! こ、こんな場面をアジアに見せるわけ

には!?

部長が同居するようになってからアーシアは部長に対して、何やらライバル心を抱いている様子なんだ。部長も受けてたっているようだし。まあ、普段は普通に仲がいいので、ケンカではないのだろう。

「あつ、アーシアちゃん」

「あれ? 鵜さんに燕ちゃん?」

えええつ!? 鵜さんと燕ちゃんまで来ちゃったよ!

「……………む、アーシアちゃんの方が早かったか」

「……………負けたくありませんから」

……………なんだろう。扉の向こうでアーシアたちが火花を散らしてるような気がするのなんだろう……………。

なんでか、アーシアと鵜さんも何かを巡りあっているような気がするんだよなあ……………。まあ、こつちも普段は仲がいいのだが。

「それで、イツセーはまだ起きてないの？」

「あ、はい。呼びかけたんですけど、返事がなくて。それで、いま様子を——」

「ああ！ 起きてるから！ ちょっと待って——」

「三人とも、もう少し待ってなさい。私もイツセーも準備しなければならないから」

「ええっ!？」

俺の言葉を遮り、部長が扉の向こうにいるアジアたちにそう言ってしまおう！

ガチャツッ！

部屋の扉が勢いよく開け放たれた。

そこには涙目のアジアとジト目の鶴さんと燕ちゃんがいた！

「や、やあ、アジア、鶴さん、燕ちゃん……お、おはよう……」

「おはよう、アジア、鶴、燕」

俺と部長が挨拶をした刹那、アーシアと鶴さんが自分の服に手をかける!

「私も裸になりますううっ! 仲間はずれなんていやですううっ!」

「私もイツセーくんと裸で寝る〜!」

勢いよく服を脱ぎ出すアーシアと鶴さん!

「ほら、燕ちゃんも一緒に〜!」

「ちよっ、ちよっ!?」

さらに鶴さんは燕ちゃんの服まで脱がしにかかっていた!

ああ、今日も過激に一日が始まるようだ。



朝食の時間。今日の俺と千秋は兵藤家にて朝食を摂っていた。まあ、これは今日に限ったことではなく、こうして兵藤家に混ざって食事をするのはよくあることだった。

ただ、最近では兵藤家の住人が増えたことで、せっかくだから、もつとにぎやかにしてもいいだろう、とイツセーの両親から言われ、断る理由もなかったもので、最近はこのようにして兵藤家で食事をするのが日課になっていた。

「うまい。外国人なのに、たいしたものだねえ」

「日本の生活が長いもので」

おじさんが味噌汁を口にして感想を言うと、部長がそう答えた。

今日の朝食のメニューのうち何品かは部長が作ったものだ。お嬢さま育ちだから料理できないなんてことはなく、むしろ高水準な家事スキルを持っていたし、料理のレパートリーも和洋中なんでもござれだった。

俺も味噌汁をすすすが、出汁が利いていて、味付けも絶妙だった。日本での暮らしが長いだけあるな。

「いや、確かにおいしいですよ。部長」

「ありがとう、イツセー」

そんなイツセーと部長のやり取りを見ていたアーシアが頬を膨らませ、イツセーの腕をつねった。

今朝からどうもアーシアが不機嫌なんだが、大方、イツセーを巡って部長と何かしらあったのだろう。

そんなアーシアの家事スキルだが、部長に比べれば劣っているところが多々あるのが事実であり、そのことは本人も把握しているので、たびたび敗北感からガックリしている光景をよく見る。けど、それは部長と比べればの話であり、客観的に見れば普通に高い家事スキルを持っていたし、おばさんの教えでメキメキと上達しているので、そう遠くないうちに部長と並ぶんじゃないだろうか？

家事スキルといえば、鶴も高水準のスキルを持っていた。特に手際の高さに関しては部長以上だった。普段がのんびりな振る舞いをするせいで、初見の人はそのギャップに驚愕することだろう。実際、部長もかなり驚いてたからな。

俺も家事スキルには自信あるんだが……この三人を見てるとその自信が粉々に砕かれそうだ。

「アーシアちゃんに続いて、リアスさんまで下宿させてほしいときは驚いたけど、二人にこうして色々お手伝いしてもらってホント助かるわ。鶴ちゃんにも家事を手

伝ってもらってるし、燕ちゃんには効果抜群のマッサージをやってもらっちゃってるし」

「当然のことですわ、お母さま」

「お、お世話になってますし、当然のことです」

「おばさんには昔お世話になったしね」

「これぐらいしか取り柄がないですし」

おばさんにお礼を言われ、悠然と受け止める部長と頬を赤らめて嬉しそうにするアシア、はにかみながらのんびりと答える鶴に頬を赤らめながら謙遜する燕。

「あ、お母さま。今日の放課後、部員たちをこちらに呼んでもよろしいでしょうか？」

「ええ、いいわよ」

唐突に部長がそう言い、おばさんがそれを了承した。

「部長。なんでうちで？」

「旧校舎は年に一度の大掃除で、オカルト研究部の定例会議ができないのよ」

ああ、そういうえば、そんなことがあるって部長が言ってたな。確か、使い魔にやらせるんだっけか?

「お家で部活なんて、楽しそうです」

「たしかに。ちよつとわくわくするかも」

アーシアと鶴が楽しそうに言う。

「部長さん。私、お茶用意します」

「ええ。お願いね、アーシア」

「じゃあ、私はなんかお菓子でも作ろうかな」

「うふふ。鶴もお願いね」

そういうことなら、俺もなんか作るかな。部長たちに負けてられねえからな。



「ふう。にしても、今朝はえらい騒ぎだったなあ」

昼休み、机に体を突っ伏しているイツセーがそんなことを呟いた。

イツセーが朝起きたら裸の部長と一緒に寝ており、そこにアーシアたちが乱入してひと騒動があったらしい。

今朝、アーシアが不機嫌そうだったのはそれが原因みたいだな。

「ライザーとの一件以来、部長がますますかわいがってくれるんだけど、そのたびにアーシアはむくれるし……」

ライザーとの一件で部長もイツセーに想いを寄せるようになり、そのアプローチはさつき言った裸と一緒に寝るなど、鵜並、いや、それ以上に大胆で積極的だった。

同じくイツセーに想いを寄せるアーシアにとっては、相当焦らされる問題だろう。

「部長の影響か、鵜さんのスキンシップもさらに過激になってきたし、燕ちゃんもなかなか、触れ合いを求めているような気がするんだよなあ……」

へえ、鶴はともかく、燕もそんなことをしてたんだな。さすがの燕も、部長という強大なライバルの出現には思うところあったのかねえ？

「このあいだの千秋とのデートのときといい、女の子とのイベントが日に日に増えてきたよなあ」

ま、個人的にそのことには相当驚かされたな。このあいだの休日、千秋は俺に内緒でイツセーとデートしていたのだが、まさかそのときにイツセーが上級悪魔になって眷属を持つようになったら自分を眷属にしてくれと頼んでいたとはな。ある意味、告白に近いことをやっていたわけだ。そのことを知ったときは思わず、テンションが上がってしまった。

「……ただまあ、イツセーがそれをどう受け取ったのが不安要素なんだからなあ。まあ、少なくとも、千秋への見方にはいい方向に変化があったことを祈るばかりだ。」

「少しまえの俺じや考えられないくらいな状態だぜ。特に部長とのエッチなコミュニケーションは最高だなあ……」

そんな件のイツセーは、ここ最近の部長とのやり取りを思い出しているのか、デレデレと鼻の下を伸ばしていた。

……こりや、まだまだ前途多難だな、千秋。

「おい、イツセー。なに朝っぱらからニヤけてんだよ！」

「いでで!？」

そこへ、いつのまにか松田と元浜やって来ていて、松田がイツセーの耳を引っ張って体を起こさせる。

「おまえ、最近変な噂が流れてるから気をつけろよ」

「噂？」

「兵藤一誠が美少女を取っ替え引っ替えして、悪行三昧！」

「はあっ!？」

松田の言葉に疑問符を浮かべていたイツセーが元浜の言葉を聞いて驚愕する。

「リアス先輩と姫島先輩の秘密を握り、それをネタに鬼畜三昧のエロプレイ!」

「学園二大お姉さまのその姿を罵っては乱行につぐ乱行!」

「可憐な幼馴染みである千秋ちゃん、鶴ちゃん、燕ちゃん。関係を利用して油断させる狡猾な罠に陥れ!」

「自分なしでは生きられないようにさせる肉体開発!」

「さらにその毒牙は学園のマスコット塔城小猫ちゃんにも向けられ、切ない声も野獣の耳には届かず、未成熟の体を野獣の如く貪り!」

「そのうえ、貪欲なまでのイツセーの性衝動は転校したてのアーシアちゃんまで! 転校初日に襲い掛かり、日本の文化を教えると偽っては黄昏の時間で天使を墮落させていく!」

「ついには自分の家にまで囲い、狭い世界で終わらない調教が始まる! 鬼畜イツセーの美少女食いは止まらない! ——とまあ、こんな感じだ」

「.....マジか? お、俺、周囲にそんなふうに見られているのか!」

イツセーはそつとチラリチラリと周りを見渡す。俺も見渡すと、周囲の男女から共にイツセーに対する軽蔑と敵意の色が見えた。

ていうか、そんな根も葉もない噂が流れてたんだな。しかも、こいつの普段の行いと悪評から皆真に受けてしまっていた。

大方、イツセーの現状、ぶつちやければ、美少女に囲まれている状態を妬んだ奴の犯行だろうな。というか――。

「その噂の出所、おまえらだろ?」

俺は心底呆れながら、先程の噂を熱弁した松田バカと元浜ニ人に言う。

「よくわかったな」

二人は誤魔化すことなく、むしろ堂々と不敵に笑みを浮かべて肯定した。イツセーの現状を一番妬んでいるのは他でもない、この二人だからな。次の瞬間には、イツセーが二人の後頭部を思いつきり殴りつけていた。

「痛いぞ、鬼畜」

「俺たちに当たると、野獣」

詫びれもせず、堂々とのたまう二人にイッセーは激怒する。

「ふざけんな！ 俺の悪い噂なんぞ流しやがって！ いっぺん死んでみるか！」

「ふん！ これくらいさせてもらわんと、嫉妬で頭がイカれてしまうわ！」

「いや！ すでにイカれてるかもしれん！」

「……おまえらなあ」

逆ギレする二人にイッセーもさすがに呆れ始める。

「安心しろ。フフフ」

「ちやーんと、女子だけでなく、おまえと明日夏と木場のホモ疑惑も流しておいたから」

「多感な性欲はついに同性の幼馴染みやイケメンにまで！」

「一部の女子には受けがいらしいぞ」

「きゃー、受け攻めどっち——っ!？」

なにやらふざけたことを抜かしていたバカ二人だったが、いつのまにか俺が頭を即座

に握りつぶす勢いで掴んだことでもおもしろがっていた表情が驚愕のものに染まった。

「なあ、松田、元浜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・な、なんだ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうしたのかな、明日夏くん・・・・・・・・？」

冷や汗を流し始めるバカ二人に俺は冷淡に言う。

「俺たち、中学からの縁だよな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そ、そうでございませぬ・・・・・・・・」

「なら——俺がこの手の話題をあの件以来嫌悪してるのは知ってるよなあ？」

「あだだだだだだだだだだっ!? 頭割れるううっ!」

わりとガチで頭を割るつもりで力を込めてバカ二人にアイアンクローをかましてやると、二人は結構シャレにならなそうな悲鳴があがった。

あれは中学の頃、当時通っていた中学で一時期、俺とイツセーとのホモ疑惑が流れたことがあった。中学のころ、俺は周りからよく顔がいいと言われていたが、そんな俺が

よくイツセーといることが多かったことが原因だとイツセーから言われた。

当時のイツセーは頭を抱えて嘆いていたが、俺は「そんな噂、すぐ消えるだろ」と気にもしなかつたが、それがマズかつた。俺が否定しないもんだから、噂はどんどん広がり、流石に俺も頭を抱えたくなる状況にまで発展してしまつた。

俺はイツセーと協力して、なんとか誤解を解き回り、噂は眉唾物だということを認識させた。

ただ、本当に大変だつたのはそこからで、千秋がこの噂を真に受けてしまつたのだ。おかげで、千秋からあれこれと問い詰められてしまい、誤解を解くのが本当に大変だつた。

おまけに、兄貴と姉貴にはさんざんそのことでいじられてしまつた。

その結果、俺はわりと軽くそのことがトラウマみたいになつてしまつた。

そんな経緯があり、俺はこの手の話題には最大限に嫌悪を示すようになってしまつた。

個人の妄想ぐらいで済ますのならまだ譲歩はするが、このように噂となつてしまつような事態になるのなら看過はできない。ましてや、こんな悪意のあるものなら容赦はない。

「なあに？ 三バカトリオが性欲に任せてエロトック？」

一人の女子がアーシアを引き連れて話しかけてきた。

「桐生か」

俺たちに話しかけてきたのはクラスメイトの桐生藍華。アーシアと仲がいい女子生徒の一人だ。

「それとも、またなんかやらかしたの？ 三バカトリオのうち二名が士騎くんにはばかされてるみたいだし」

桐生が俺のアイアンクロウの餌食になっている松田と元浜のほうに視線を向ける。いつのまにか、バカ二人は白目向いて気絶していた。

俺が手をはなすと、二人はそのまま床に倒れ込んだ。

「アーシア。他にもいい男がいるのに、わざわざこんなのを彼氏にしなくなったって」

桐生がイツセーを見ながらアジアに苦言を呈した。

「か、かかか、彼氏いいっ!?!」

桐生の言葉にアジアががつかつてないほど動揺していた。

まあ、いきなりそういう関係になりたいと思っっている男子を彼氏だなんて言われれば、そりゃあ驚くわな。

「こんなのとはなんだ! それにアジアは日本に来たばっかだから、いろいろ面倒見でやってるんだ! 彼氏とかそういうのじゃ・・・」

「いつもベツタリくつついて、端から見てるとあんたたち、毎晩合体しているカップルにしか見えないよお」

「合体!」

気絶してた松田と元浜が「合体」の言葉に反応して復活して顔を合わせて叫んだ。

「合体？」

アーシアはそれが何を意味しているのかわからず、首を傾げていた。

「親公認で同居してんでしょ？ 若い男女が一つ屋根の下で夜にすることといたつたら、そりゃねえ。むふふ。ちなみに『裸の付き合い』を教えたのも私さ！ どう、堪能した？」

いやらしい笑みを浮かべてそう告げる桐生。

実はこの桐生という少女、イツセーたちに負けず劣らずなエロ娘だったりする。クラスメイトからは「匠」なんて呼ばれるぐらいだ。

「あれはやつぱりおまえか！ ていうか、合体って、おまえなんつうことを！ 巨大ロボじゃあるまいし、そんな簡単に——ッ!? あ、俺、ちよつと用事思い出した！」

突然、左腕を押さえたइटッセーがそう言つて立ち上がる。

(副部長のところか?)

(ああ)

(じゃあ、左手が)

(そういうこと。ちよつと行つてくる)

自分たちだけに聞こえるように俺とアーシアと会話したあと、イツセーはそそくさと教室から出ていった。

「ねえ、明日夏くん。イツセーくんどうしたの〜?」

イツセーが立ち去ったあと、さつきまで机に突つ伏して昼寝をしていた鶯が心配そうにしながら訪ねてきた。

「用事だとき——左腕のな」

最後のところだけを鶯にだけ聞こえるように言う。それを聞いた鶯もすぐにイツセーのことを把握した。

ライザーと戦うために一時的な禁パランス・ブレイカー手の力を得るために左腕を犠牲にしてドラゴンの腕になってしまったイツセーの腕だが、とある方法を行うことで一時的に元の姿に戻すことができた。現状、そのとある方法を行えるのは部長と副部長だけだった。イツセーが副部長のところに行ったのはそのためだ。

「なーんだ、別に付き合ってるわけじゃないんだ」

「んー、なんの話〜？」

桐生の何気なく呟いた言葉に首を傾げる鶯。

「兵藤とアーシアが付き合ってるかって話なんだけどさあ」

「むう……」

桐生の話を聞き、途端にムスツとしだす鶯。

「だつてさ、鶯っち。あいつとアーシアって、いつつもくっついてるし、何よりもアーシアってあいつのことが——ムグツ！」

「あああああつ！ 桐生さん、やめてくださいいいいっ！」

顔を真っ赤にしたアーシアが桐生の口を手で塞ぎ、言葉を遮った。

「うううううっ！ あいつばかりが！」

そんなアーシアを見て松田と元浜が号泣しながら慟哭していた。

「いますぐにこの怒りをイツセーにぶつけないのに、そのイツセーがいまここにいない！ この行き場のない怒りをどうすればいい、元浜よ！」

「あいつの悪評を流すだけではこの怒りは沈められん！ こうなればだ、松田よ！」

松田と元浜が俺を睨んでくる。

「………なんだよ？」

「玉碎覚悟でこの怒りをイケメンにぶつけるべし！」

「俺に八つ当たりするな！」

殴りかかってバカ二人を返り討ちにして望みどおりに玉砕させてやった！



俺がいるのは旧校舎の二階。朱乃さんが使用している部屋だ。畳が敷かれたりして、ほとんど和室と化している部屋にはあちこちに術式の紋様が印されていて、呪術グッズのようなものまで設置されている。そんな部屋の中央で、俺はシャワーを浴びてタオルを腰に巻いただけの状態で朱乃さんを待つ。

「お待ちせしましたわ」

そう言ってすつと入ってきたのは、白装束に身を包み、いつもはポニーテールにして
いる黒髪を下ろした朱乃さん。

「きゅ、急にすみませんね、朱乃さん……」

急に呼び出してしまつて申し訳なく思う。

「うふふ、イツセーくんのせいじゃありませんわ。さあ、始めますわよ?」

「お、お願いします……」

俺は左腕を前に出すが、つつい朱乃さんの格好を凝視してしまつていた。

「どうしたんですか?」

「い、いえ! ふ、服が……」

着ている白装束が濡れていて、長い黒髪が張りついていて官能的だ! ていうか、おもいつき肌が透けて見えていた! 胸のところを見ると、ピンク色の乳首が透けて見えていた! 下着も着けていない!

「ああ、儀式のために水を浴びてきただけですわ。今日は急でしたのでちゃんと体を拭く時間がなくて。ゴメンなさいね」

「い、いえ! 問題ありません! むしろ得した気分——ああいや、気にしないでください

いー」

「うーいふ」

朱乃さんは微笑むと俺の左手を手取る。

「イツセーくんのドラゴンになった腕はおもいのほか気が強くて、魔力で形を変えたただけでは一時的にしか効果がありませんでした。そこで、直接指から気を吸い出すことで溜まったものを抜き出しませんと」

ドラゴンと化した俺の左腕は、朱乃さんの言うとおり、ただ魔力で形を変化させたただけではすぐに元に戻ってしまった。だから、必要なのは腕のドラゴンの力を散らすこと。

その方法——それは高位の悪魔にその力を吸い取ってもらって、無効化してもらおうこと。一番簡単で確実な方法が直接本人の身体から吸い取ることらしい。

ちなみに、この方法を教えてくれたのは、明日夏の神セイグリッド・ギア器に宿るドレイクだ。ただ、その代償として、先日、さんざんな目にあつたみたいだ。

ちゅぷ。

「うあつ」

卑猥な水音を立てながら朱乃さんに指を吸われ、その感触に思わず声が出ってしまった

!

なんとも言えない感触が指を襲う。

しかも指先をチューチュー吸われて、その吸引がヤバい!

どうして、女の子の口の中ってこんなにぬるってして、温かくて、スツゴク気持ちい

い!

ヤバい! 頭の中がピンク色になりそうだあつ!

ドラゴンの腕になってよかった! ドライグ! 俺、いま、最高の瞬間を生きている

よおおおお!

明日夏! その身を犠牲にして、こんな素晴らしい方法を見つけてくれてありがとう
う、親友! おまえが大変な目に遭っていたのに、俺だけこんな幸せな気分を味わって
しまつて、本当に申しわけないぜ! 今度、なんか奢ってやるぜ!

「あらあら、そんなにウブな反応を見せられると、こちらとしてもサービスしたくなってしまうすわ」

「サ、サービス？」

「ええ。私が後輩を可愛がっても、バチは当たらないと思いますもの」

そう言うと、朱乃さんがしなだれかかってきた！

「私、これでもイツセーくんのこと気に入ってますわ」

「お、俺のことをですか……?」

耳元で囁いた朱乃さんが抱きついてきた！

朱乃さんの体、やわらけええええええ！

おまけに俺は上半身裸で、朱乃さんも薄い濡れた装束一枚だから、女体の感触がダイレクトに伝わるううう！

濡れた服は冷たいけれど、朱乃さんの体温が温かくて、温度差までエロく感じる！
おっぱいの感触が薄布一枚の差で……。

ブバツ。

鼻血が吹き出た！ 当然だって！ こんな鼻血が何リツトル出ても足りないわ！

ふと、朱乃さんの扇情的なお尻に目が行く。

やつぱり、下の下着も着けていなかった！

つまり、裸体にこの濡れた薄い白装束一枚だけ……。

ブツ。

想像しただけでまた鼻血が吹き出てきた。

ヤバい。俺、この調子だと出血多量で死ぬかも……。

「……でも、あなたに手を出すと、リアスが怒りそう。あのヒト、あなたのこと……。
うふふ、罪な男の子ですね……。」

そう呟いたあと、朱乃さんが再び俺の指を吸い始めた！

——って、朱乃さん、部長のこと「リアス」って呼んだり、もしかして、二人のとき

は名前で呼び合ってるのかな。眷族の中でも、一番付き合いが長そうだし。

そんなこと思いながら、朱乃さんのお口の中の感触とチューチューされるときの快感に身を任せる！

「ぶはあ。ドラゴンの気は抜きました。これでしばらくは大丈夫ですわ」

「……………ああ、ありがとうございます……………」

長かったような、短かったような快樂の波が終わり、快感の余韻でくたつとなつてしまった。

「フェニックスとの一戦……………」

「フェニックス？」

ライザーとのゲームのことをなんでいま？

「倒れても倒れても立ち向かっていくイツセーくんは本当に男らしかった。そして、婚約パーティーに乗り込んで部長を救うなんて、それも不死身と呼ばれたフェニックスを

打ち倒してまで。あんな素敵なお戦いを演じる殿方を見たら、私も感じてしまいますわ」
「うひひひー!」

指で胸元をなぞられて、また声を出してしまった。

「これって恋かしら?」

キーンコンカンコーン。

朱乃さんがその質問をすると同時に学園の予鈴が鳴った。

「うふふ、またご一緒しましょうね」

そう言い微笑んだ朱乃さんは部屋から出ていった。

……なんだったんだ、さっきまでの朱乃さんは?



「じゃあ、定例会議を始めましょう」

放課後、イツセーの部屋で始まったオカルト研究部定例会議。まず始まったのは、イツセーたちの悪魔の契約の計数発表だった。

「今月の契約計数は、朱乃、十一件」

「はい」

「小猫、十件」

「・・・はい」

「祐斗、八件」

「はい」

と、ここまでがベテランメンバーの成果であった。

「アーシア、三件」

「はい」

「スゴいじゃないか、アーシアさん」

「あらあら、うふふ、やりましたわね」

「……新人さんにしてはいい成績です」

「ありがとうございます!」

ベテランメンバーの好評にアーシアは嬉しそうだった。

「で、イツセー——」

さて、最後のイツセーはと言うと——。

「0件」

「め、面目ありません……」

とまあ、イツセーは一件も契約を取れていなかったのだった。ただ、依頼者に対するアンケートがあつて、そのアンケート評価に限れば、トップクラスだったりする。だが、契約を取ってなんぼなので、残念ながら評価対象にならない。

「がんばって契約を取らないと、上級悪魔への道はますます遠くなるわよ」

「わかってますとも！ 来月こそはトップを目指します！」

部長に言われ、イツセーが気合を入れたところで、部屋のドアが開けられた。

「お邪魔しますよー」

入ってきたのはおばさんことイツセーの母親だった。

その手には、下のキッチンでできあがりを待っただけだった俺と鶴手製のお菓子を乗せたお盆を持っていた。

そろそろできあがるだろうとは思っていたが、わざわざ持ってきてくれたのか。

「すみません。そろそろ取りに行こうと思ってたんですが……」

「いいのよ、明日夏くん。気にしないで、カルタ研究会の会合に参加してて」

カルタ研究会って、なんて微妙な間違い方を……。

「そうそう、それといいもの持ってきちゃった♪」

そう言っておばさんがノリノリで取り出したのはアルバムだった。

途端、イツセー以外の皆、とくに俺たちが入部する以前のメンバーとアーシアが興味津々でアルバムに入っている写真を見始める。なんせ、そのアルバムはイツセーの幼い頃の写真が入っている古いアルバムだからな。

「これが小学生のときのイツセーよ」

「あらあら、全裸で。ちっちゃくてかわいいですね」

「ちよつと、朱乃さん! 母さんも見せんなよ!」

「……イツセー先輩の赤裸々な過去」

「小猫ちゃんも見ないでええええええ!」

「これは幼稚園のとき。この頃から女の子のお尻ばかり追いかけてて」

「……最悪だ……」

幼い頃のイツセーの写真を見て盛り上がるメンバーに対し、イツセーはだいぶグロツ

キーになってた。

そりやそうか。過去の、とくに幼い頃の自分なんて、本人にとつてはいろいろと黒歴史なところがあるからな。かなり憂鬱な気分になってることだろう。

「小さいイツセー、小さいイツセー！ あああ！」

「部長さんの気持ち、私にもわかります！」

「アーシア、あなたにもわかるのね！ 嬉しいわ！」

「……………部長とアーシアが興奮しながらマジマジと幼いイツセーの写真を見ていた。」

なんか二人とも、ちよつと危ないヒトみたくなつてんな……………。

「あらあら、こちらに小さい頃の明日夏くんの写真もありましたわ」

ぐつ、副部長が俺の写真を見つけたしまった。

途端に部長たちが俺や千秋たちの写真を見始めだし、せつかくだから俺たちのアルバムも見せてくれとせがまれ、イツセーに「おまえも道連れだ！」と言わんばかりに睨ん

できたので、仕方なく俺は自宅からアルバムを持ってきた。ついでに鶴も自分たちのアルバムを自分の部屋からノリノリで持ってきた。

「あなたって若い頃から無愛想だったのね」

「・・・・・・ほっといってください」

部長に言われた俺は素っ気なく返す。

「あー、この頃の明日夏って、カツコつけて、やたらとクールに振る舞ってましたからね」

「おまえもバラしてんじゃねえよ、イツセー!」

おまえがその気なら、俺もいろいろと写真にないおまえのことをバラすぞ!

「あらあら、やっぱり千秋ちゃんはイツセーくんとツーショットが多いですわね」

「あううう・・・・・・」

副部長に指摘され、千秋は顔を赤く染める。

「特にこの写真なんて、こんなにイツセーくんにくつついちゃって。かわいいですわね」
「——つつつつ！」

その写真を見せられた千秋は顔を真っ赤にさせて、副部長から写真を奪い取ろうとする。

その写真は千秋がイツセーに結構ベツタリしていた頃のものだからな。当然、数あるツーションツの中でも一番ベツタリしている。いまの千秋からすれば、いろいろと恥ずかしい写真だった。

「……… 鶴先輩、この頃からもうすでに大きいのですね………
寝る子は育つ」

塔城が鶴の幼い頃の写真を見てブツブツと呟いていた。

確かに鶴は初めて会ったときから俺たちの身長を優に越していた。小柄な体型を気にしている節がある塔城にとってはいろいろとうらやましいんだろな。

ちなみにイツセーが鶴をさん付けで呼ぶのは、その身長の高さから年上だと勘違いし

たからだ。以来、それがクセ付いて、いまでもさん付け呼びなのだ。

「この写真、燕ちゃんがなんか明日夏くんに突つかかかってるね?」

木場が見ている写真には、小学生の頃の俺が笑みを浮かべていて、そんな俺に小学校のころの燕が顔を赤くして突つかかっていた。

「あー、それはアレだよ、木場」

「アレって、イツセーくん、もしかして?」

「そういうことだよ」

「明日夏くんって、この頃から燕ちゃんをいじってたんだね」

木場の言うとおり、俺はわりと昔から燕のことをいじってたりする。主にイツセーの
ことだ。

「・・・・・・・・・・思い出したら腹が立ってきたわ・・・・・・・・・・!」

当時のことを思い出したのか、燕が憎々しげに俺のことを睨んできた。

そんなこんなで、部長たちはイツセーや俺たちの写真を気恥ずかしさを覚える俺たちをよそに堪能しまくっていた。

ちなみに、鵜と燕は俺たちが小学校に上がるまえの頃と中学の頃の写真を興味深そうに見ていた。そのときは、鵜と燕とは出会うまえとこの町を去ったあとの頃の写真だから気になるのだろう。

「ね、イツセーくん」

すると、写真を見てた鵜が唐突にイツセーを呼ぶ。

「なに、鵜さん？」

「この猫ちゃんは？」

鵜が一枚の写真を指差しながらイツセーに訊いてきた。

鵜が指差す写真には、中学生のイツセーとそのイツセーに抱き抱えられてる一匹の子猫が写っていた。

「イツセー。あなた猫を飼っていたの?」

「ああいえ、その子猫、迷子猫で一時期明日夏の家で面倒を見てたんですよ」
「もう持ち主のところへ帰っちゃいましたけどね」

部長の問いにそう答えるイツセーと俺。

その話題はそれで終了し、再び幼い俺たちの写真で皆盛り上がり始めた。

「・・・・・・・・しかし、昔のアルバムでここまで盛り上がりとはな」

「・・・・・・・・まったくだぜ」

若干うんざり気に話す俺とイツセーに木場がアルバムを手に話しかけてくる。

「ハハハ。僕たちの知らないイツセーくんたちを楽しむことができるからね。僕も堪能させてもらってるよ」

「クソ! おまえは見るな!」

爽やかに笑う木場にイツセーアルバムを奪おうと飛びかかるが、木場は軽やかに躲けてしまう。

「………つたく、母さんも余計なものを持ってきやがって」

木場からアルバムを奪うことを諦めたイツセーがぼやき始める。

「いいお母さんじゃないか」

「どこがだよー！」

木場の言葉に再び突っかかり始めるイツセー。

「家族がいるって、いいよね」

突っかかってくるイツセーを捌いていた木場が途端に哀愁感を漂わせながらしみじみと言う。

家族がいる、か。まさか、こいつも俺や千秋みたいに家族を失ったことがあるのか？

父さんと母さんを亡くした俺は木場の横顔からなんとなくそんなことを思ってしまった。

「そーいや、木場。おまえんちつて——」

そんな俺と違つて純粹に気になったイツセーが木場の家族のことを訊こうとする。

「——ねえ、イツセーくん。明日夏くん。この写真なんだけど——」

そんなイツセーの問いかけを遮るように木場が一枚の写真を指差してきた。

俺とイツセーは互いに向き合つたあと、木場の手元にある写真を見る。

そこには、幼い頃の俺とイツセー、それから栗毛の子が写つていた。

「ああ、その男の子、近所の子でさ、よく一緒に遊んだんだ。親の転勤とかで外国に行つちまつたけど……うーんと名前はなんて言つたつけ? えーとたしか……」

思い出せないイツセーの代わりに答えようとした俺は、木場の視線が栗毛の子ではな

く、別のものを見ていることに気づいた。

「ねえ、二人とも。この剣に見覚えある？」

木場が見ていたのは写っている俺たちの後ろの壁に立てかけられている一本の剣だった。

「いや」

「俺も。なにしろガキの頃だし」

知らないと答えた俺だったが、ふと、その子の父親が聖職者だったのを思い出し、その剣の正体についてある可能性に至った。

「——こんなこともあるんだね……」

そのときの木場は表情こそ苦笑を浮かべたものだったが、その瞳には寒気がするほどの憎悪に満ちていた。

Life. 2 どうしちまったんだ、イケメン!

カキーン。

晴天の空に金属音が木霊する。

「オーライオーライ」

イツセーが飛んできた野球のボールをグローブでキャッチした。

「ナイスキャッチよ、イツセー」

ボールをキャッチしたイツセーに部長が笑顔で言う。

旧校舎の裏手にある草の生えていない少しだけ開けた場所で、俺たちオカルト研究部の面々は野球の練習をしていた。

来週、学園で球技大会があり、種目のひとつに部活對抗戦というものがある。なんの球技をやるかは当日発表で不明なので、目ぼしい球技をこうして放課後に練習しているのだ。んで、今日は野球なわけだ。

「次はノックよ！ さあ、皆！ グローブをはめたらグラウンドにばらけなさい！」

気合の入った部長の声に、俺たちはグローブをはめて散り散りになる。

部長はこの手のイベントが大好きなうえに、負けず嫌いでもある。

本来なら、悪魔であるイツセーたちや異形との戦闘のために鍛えている俺たちなら、よほどのヘマをしなければ負けることはない。実際、当日は加減をして臨むことになっている。

けど、球技のルールや特性を体で覚えておかないとダメだつてことで、こうして部長は俺たちに練習を促している。

部長が言うには、「頭でわかっても、体で覚えていないとダメよ」とのこと。

ま、実戦では何が起こるかわからないので、こうして練習するのはいいことだしな。

「行くわよ！ 明日夏！」

カーン!

「おっとー!」

部長が打ったボールが勢いよく飛んできて俺の横を通り過ぎようとしたのを横に飛んでグローブでキャッチする。そのまま地面の上で一回転して立ち上がり、部長にボールを返球する。

「いいわよ、明日夏! 次、アジア! 行くわよ!」

カーン!

次に部長が打ったボールがアジアのほうに飛んでいく。

「はう! あうあうあう……あつ!」

ボールはアーシアの股下を通って、後方へ行ってしまった。

アーシアはもともと、運動神経がお世辞にもよいほうではないからな。悪魔になって多少はマシになってもそこは変わらなかった。

「アーシア！ 取れなかったボールはちゃんと取って来るのよ！」

「は、はい！」

だからといって、部長は甘やかさない。

もともとスパルタ気質ではあるが、部長がこうも気合を入れているのは、先日のライザーとのゲームに負けたことに起因する。

経験や人数の差があったとはいえ、負けは負け。部長は心底悔しかったんだろう。その気持ちで勝ち負けに対して強い姿勢を見せているのだろう。

まあ、そのことは俺たち全員もわかっていることなので、こうして練習に取り組んでいる。

「次、裕斗！ 行くわよ！」

部長は木場に向けてフライ気味にボールを飛ばす。

あれぐらいだったら、木場なら余裕だろう。——いつもの木場ならな。

コン。

ボケーつと、うつむいていた木場の頭部にボールが落ちた。

「木場！ シャキツとしろよ！」

それを見て大声をあげるイツセー。

それに反応してイツセーのほうを見る木場だったが、その表情はきよとんとしたものだ。どうやら、何があつたのか気づいてすらないようだな。

「……あ、すみません。ボールとしてました」

ようやく気づいたのか、下に落ちているボールを拾い、作業的なフォームで部長のほうへ投げる。

「裕斗、どうしたの？ 最近ポケットとしてて、あなたらしくないわよ？」
「すみません」

部長の問いに、木場はただただ素直に謝るだけだった。

部長の言うとおり、木場はここ最近、ポケットとしてることが多く、球技大会の練習に限らず、オカ研の定例会議でもこのありさまだ。

「……………なあ、明日夏。木場がこうなったのって——」

「……………ああ。あの写真を見てからだ」

俺のもとに駆け寄って小声で訊いてきたイツセーに言ったとおり、木場がああなったのは、イツセーの家でアルバム鑑賞会をしたときからだ。

あのとき、木場は——。

『こんな思いもかけないとところで目にするなんて……………これは聖剣だよ。——いや、なんでもないんだ。ありがとう、二人とも』

そう言つて、笑顔でアルバムを返してきた木場だったが、それからだった。木場の様子がおかしくなり始めたのは。

——『聖剣』。写真に写っていた剣を木場はそう呼んだ。

「なあ、明日夏。聖剣つて——」

「おまえも物語やアニメ、ゲームなんかで聞いたことあるだろう？ 聖なる力を宿した剣とか魔を祓う剣なんて説明でな。実際にそのまんまで実在するんだよ。おまえら悪魔にとつては最も警戒し危険視する存在、教会の切り札としてな」

まさか、幼少の頃に身近にあったとはな。

「そういえば、ライザーとのレーティングゲームのとき——」

「ああ、あれか」

イツセーが呟いたのは、ライザーとのレーティングゲーム、木場が相対したライザーの『騎士^{ナイト}』カーラメインが、聖剣使いと相対したことがあることを知った瞬間、人が変

わったように憎悪を表したときのことだ。

「木場と聖剣、何かあるのか？」

「おそらく過去、それもたぶん、部長の眷属になる以前に何かしらの因縁があるんだろう」

「そういえば以前——。」

『個人的に堕天使や神父は好きじゃないからね。憎いと言つてもいい』

そんなことを口にしていたのを思い出した。今回の件と無関係ではないんだろう。

「まあ、木場の過去も知らない俺たちがああだこうだと予測を立てても仕方がねえし、かなりデリケートな事情みたいだからおいそれと訊くわけにもいかねえし、そもそも、聖剣なんてそうそう関わることはないだろう。木場のあの状態も時間が解決してくれるはずだ」

いまはそつとしいたほうがいいだろう。下手に追求すればかえって悪化するかもしれないからな。

「球技大会でもあの調子のときは俺たちでカバーするしかないだろう」
「そうだな。それはそれとしていまは球技大会だな」

ふと、おそらくオカ研で一番やる気を出しているであろう部長のほうを見ると、マニユアル本を熱心に読み込んでいた。

「そういえば、最近では恋愛のマニユアル本を読んでいたな」

何気なしに呟いた言葉を聞いて、イツセーがショックを受けていた。

「マ、マジか!? 部長が恋愛のマニユアル本! それって、部長に好きなヒトができたっていうのか!?!」

「……まあ、そういうことなんだろうな」

イツセーが頭を抱えて悩みだした。

この反応からして、だいぶ入れ込んでるな。

まあ、そうでなきや、婚約パーティーに乗り込むなんてしないよな。

「安心しろ。少なくともおまえの知らないところで部長に恋人ができるなんてことはあり得ねえよ」

「ほ、本当か………？ 信じるからな。ああ、部長に彼氏なんかできたら俺死んじまう………」

千秋も大変だな。この状態の奴を自分に振り向かせるなんて。

逆の立場になれば部長もこうなるんだろうけど。

ま、部長には悪いが、俺は身内のほうを応援させていただきますよ。

「さーて、再開よー！」

部長がバットを振り上げて、練習は再開された。



「今日こそ契約取らねえと! 木場どころかアジアにまで抜かれてるし!」

球技大会の翌日、俺は今日もチャリで依頼主のところに向かっていた。

昨日の球技大会は大変だったぜ。クラス對抗戦では野球だったこともあり、俺たちのクラスが優勝したけど、種目がドッチボールだった部活對抗戦ではそれはもう大変だった。俺以外の部員が学園アイドルだっていうことがあつて誰にもボールを投げられず、さらに俺がそのアイドルたちと一緒にいることに對する妬みもあつて、それはもう全生徒が俺に集中砲火だった。

おまけに大会中もボーツとしてた木場のカパーに入ろうとしたら、そのボールが生徒会との勝負のときみたいにまた股間に当たつてえらいダメージを受けてしまった。

「まったく。木場の奴、大丈夫なのかよ?」

明日夏は時間が解決してくれるって言つてたけど、こんな調子で大丈夫なのか? なんて考えてるうちに依頼主がいるホテルに到着した。

とりあえず、いまは契約を取ることに集中だ！

ピンポーン。

「また、『チャイム鳴らして現れる悪魔なんてあるか！』とか言われるんだろうなあ……」

ガチャ。

若干憂鬱な気分になりながら待つてると、ドアが開けられた。

「ちわーっす。悪魔を召喚した方ですよね？ ああ、おかしいと思つてますか？ 思つてますよね！ 本当はお配りしたチラシの魔方陣からドローンって現れるんすけど、ちよつと諸事情で——」

「まあ、入ってくれよ」

「え？」

「キミ、悪魔なんだろう？」

なんか、珍しくあつさり納得してくれて中に入れてくれた。

「うわっ、スツゲエなあ……」

中に入れられた俺はソファーに座るが、あまりにもフカフカなソファーに驚いてしまった。とても高そうだった。

部屋を見回すが、どの家具もソファー同様で高そうなものばかりであった。外国人みたいだけど、何やってるヒトなんだ？

ガチャ。

依頼主の人がお酒を持って入室してきた。

前髪が金髪の黒髪で顎に髭を生やしたワルそうな風貌なイケメン、いわゆるワル系イケメンな人であった。

外国人だが浴衣を見事に着こなしていた。

「まあ、やってくれ」

「ああ、俺まだ未成年なんで……」

「そうか。これはしまったなあ。酒の相手をしてほしかったんだがなあ……」

「依頼ってそれなんですか？」

「ダメなのか？」

「い、いえ、そちらの願いを叶えて、それに見合う対価を頂ければ契約は成立しますんで」

にしても、悪魔を召喚してまで叶えてほしい願いなのだろうか？

「あいにく、酒しかないんだ。氷水でいいかい？」

「あ、は、はい」

それから数十分後。

「フツハツハツハツハツハ！ 魔力が弱くて召喚された人間のところへ自転車でえ？」

「……はあ、まあ……」

「こりや傑作だ！ フハハハハハ！」

そんなに笑われると流石にムツとするが、これも契約のためだ、我慢我慢！
そう思い、怒りをグツと抑え、出された氷水を口にする。

「いやあ楽しかったよお！ で、対価は何かいいんだい？」

「え？ もう！」

「悪魔だから魂とか？」

「え、まさかあ。酒の相手くらいじゃあ、契約内容と見合いませんよお」

「ほお、意外に控え目なんだな？」

「うちの主は明朗会計がモットーなんで」

「じゃ、あれでどうだ？」

そう言つて、壁にかけてあつた絵を指差す。とても高そうな絵だった。

「複製画じゃないぞ」

「はあ、でも結構高そうなの……」

正直、酒の相手ぐらいの契約内容に見合つてるとは思えなかった。

「いま他に適当なものがなくてな。ダメなら魂しか——」

「え、じゃあ、絵で結構です!？」

それから、なんだかんだで契約は成立し、俺は代価として大きな絵をもらうことになった。

男性は俺のことを気に入ったらしく、今後も呼んでくれるそうだ。

「変なヒトだったな。ま、契約は成立したし、これで野望に一步近づいたぜ！　ハーレム王に俺はなる！」

契約を終わらせ、梱包した絵を背負った俺は帰路についていた。

「ん？」

すると、スマホの着信音が鳴った。部長のお呼びだしであった。

俺は部長に呼び出された場所にチャリを向かわせた。



部長に呼び出された場所とはある廃工場だった。

「イツセー、こつちよ」

「はい」

門のところに部長たちがいた。

絵を下ろして、部長たちのほうに駆け寄る。

「ゴメンなさい、呼び出してしまって」

「いえ。それで、あの工場の中に……………」

「……………間違いなく、はぐれ悪魔の臭いです」

小猫ちゃんが鼻を動かしながら言った。

そう、呼び出されたのは、はぐれ悪魔の討伐のためだった。

「今晩中に討伐するように命令がきてしまいました」

「それだけ危険な存在ってことね」

マジかよ。あのバイザーって奴よりも危険なのかよ？

「中で戦うのは不利だわ。アーシアは後方待機」

「はい」

「朱乃と私は外で待ち構えるから、小猫と祐斗とイツセーは外に誘きだしてちょうだい」

「はい、部長」

「……はい」

「了解！ 『赤龍帝の籠手』！」

俺は了承するとすぐに『赤龍帝の籠手』を出す。

「……祐斗？」

「あつ、わかりました」

反応がなかった木場を訝しげに思った部長が木場を呼ぶと、木場が慌てて返事を返した。……大丈夫なのかよ、そんな調子で。

「じゃあ、行くか！ 木場、小猫ちゃん」

「……………はい」

「……………ああ」

俺たちは廃工場の入り口まで来た。このメンツだと、アーシアを助けに教会に攻めこんだときのことを思い出すな。

「どんな奴かな？ また、バケモノみたいな奴だったら——」

「えい」

ドガアッ！

「ああ、やつぱいいきなりですか．．．．．」

．．．．．あのとときと同様、小猫ちゃんが問答無用と扉をぶち破ってしまった。

「．．．．．行きますよ」

「ああ」

「．．．．．」

俺たちは廃工場内に入り、辺りを見回すが何も見当たらなかった。

「何も見当たらないな——あ？」

小猫ちゃんが急に立ち止まった。

「小猫ちゃん？」

「．．．．．来ました」

小猫ちゃんの視線の先を見ると、パイプの陰にこちらを怯えた表情で見てくる女の子がいた。しかも全裸だと!

「・・・・・・・・・・・・・・・・あう——ギイシヤアアアアアツ!!」

可憐な少女の姿からいやな音を立てて頭から角が生やし、蜘蛛のような下半身をした化け物へと変異し、天井を這いだした!

「うわあっ!? やっぱバケモノじゃん!」

『ブースト!!』

俺は驚きながらも倍加をスタートさせる。

「祐斗先輩、お願いします!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

小猫ちゃんが木場に頼むが、木場はまたブーツとしていた！

「祐斗先輩！」

「あつ、ゴメン——」

小猫ちゃんが語気を強めて呼ぶとようやく木場が反応した。

ビュツ。

「うツ!?!」

「あつ!?!」

だがそこへ、はぐれ悪魔が下半身から液体みたいなのを飛ばし、それが小猫ちゃんに当たってしまった！

「ううう……」

液体が当たった場所がジューと溶けて、その痛みで小猫ちゃんねこちゃんが膝をついてしまった！

そんな小猫ちゃんにはぐれ悪魔あくまが襲いかかろうとする！

「野郎！」

『ブースト!!』

俺はすかさず小猫ちゃんねこちゃんの前に出る！

「ギイヤーアアアアツ!!」

『エクスプロージョン!!』

「ドラゴンショット！」

向かってくるはぐれ悪魔あくまに向けてドラゴンショットを放つがあっさりと弾かれてし

まった！

「チツ！ やっぱパワーアップが足りねえか！ 何ボオーツとしてんだ、イケメン！」

「あつ！」

俺の怒声でようやく木場が戦闘に集中しだし、はぐれ悪魔に向かって斬りかかる。

「はアツ!!」

ズバツ！

「ギイヤアアアアアツ!?!」

よっしや、腕を斬り落とし——つて、おい!?

木場がパイプに足を取られて膝をつきやがった！

そこへすかさずはぐれ悪魔が木場に襲いかかる！

「木場ああッ!?!」

「……………シヤアアア……………」

「……………ぐっ……………!」

はぐれ悪魔にのしかかられ、身動きがとれなくなった木場。
そんな木場にはぐれ悪魔が噛みつきこうとする!

ガシヤアアアン!

「「——ッ!?!」」

その瞬間、天窓を突き破って、人影がふたつ舞い降りてきた!

「明日夏! 燕ちゃん!」

人影の正体は明日夏と燕ちゃん、明日夏の両手にはナイフ、燕ちゃんの両手には忍者が持つクナイを持っていた。

「ふッ！」

ドスッ！

二人はそのまま落下の勢いを利用してナイフとクナイをはぐれ悪魔の背中に突き刺した！

「ギイヤアアアアッ!？」

はぐれ悪魔は突き刺された痛みから、木場に噛みつこうとした顔を引いて悲鳴をあげる。

「よっつ」

そこへいつのまにか現れた鶴さんがはぐれ悪魔のもう片方の腕を掴み、それを見た明日夏と燕ちゃんのはぐれ悪魔の背中から飛び降りる。

「そ〜れ〜!」

そのまま鵜さんはぐれ悪魔を背負い投げてしまう!

さらに投げ飛ばされたはぐれ悪魔に何かが飛来し、先端が弾けたと思つたら、そこから無数の何かが飛び散って、はぐれ悪魔の体中に突き刺さった!

飛来物が飛んできたほうを見ると、そこには弓を構えた千秋がいた。さっきのは千秋の矢か。

「ギシャアアアアアアッ?!」

苦痛に叫ぶはぐれ悪魔の足を小猫ちゃんが掴む!

「……吹っ飛べ!」

そのまま自慢の怪力ではぐれ悪魔の上に投げ飛ばし、はぐれ悪魔は天窓を突き破って廃工場の外へ出た。

バリイイイツ。

そこを待ち構えてた朱乃さんの雷が襲う！

俺たちはすぐさま廃工場の外へ出ると、部長がもはや虫の息であったはぐれ悪魔に近づいていた。

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすために暴れまわる不貞の輩。その罪、万死に値するわ！ グレモリー公爵の名において、あなたを吹き飛ばしてあげる！」

虫の息であったはぐれ悪魔を部長の魔力が包み込み、跡形もなく消し去ってしまった。

「やった！」

「心を完全に失っていました。もはや悪魔とは呼べませんわね」

俺の隣に降り立った朱乃さんがはぐれ悪魔のことをそう言う。

「ああはなりたくねえな……」

「緊急の討伐命令が出るはずですわ」

ああなると想像しただけでゾツとするぜ……

「小猫ちゃん、傷を」

「……すみません」

アーシアが小猫ちゃんの治療のために駆け寄ってきた。

「ところで明日夏」

「なんだ？」

「さつきは助かったけど、なんで皆ここにいるんだ？」

「ああ、それは——」

パンツ。

「——ッ!？」

「……ま、あれが理由だな」

突然の乾いた音に驚き、そちらへ顔を向けると、木場が部長に頬をひっぱたかれていた。

「少しは目が覚めたかしら？　明日夏たちが駆けつけたから事なきを得たものの、ひとつ間違えば、誰かが危なかったのよ」

「……すみませんでした」

明日夏が言うには、木場のいままでの状態を見て、戦闘中に何かやらかすんじゃないかと危惧して駆けつけたらしい。

実際そのとおりで、下手すれば木場自身や小猫ちゃんが危なかった。

「球技大会のことといい、いままでのこといい、本当にいったいどうしたの？」

「……調子が悪かったです。今日はこれで失礼します」

そう言つて木場はこの場から立ち去つてしまった。
俺は木場を追いかける。

「木場!」

俺は追いつくなり、肩を掴んで歩みを止めさせる。

「どうしたんだよ? おまえ、マジで変だぞ!? 部長にあんな態度なんて!」
「・・・・・・・・キミには関係ない」

俺が問うけど、木場は作り笑顔で冷たく返してくるだけだった。

「——ッ! 心配してんだろうが!」

「・・・・・・・・心配? 誰が誰をだい?」

「はあ!」

「・・・・・・・・悪魔は本来、利己的なものだよ?」

「……………おまえ、何言ってるんだよ？」

「……………ま、球技大会も、今回も僕が悪かったと思っているよ。……………それじゃ」

そう言つて、木場はまた立ち去ろうとする。

「待てよ！」

俺はそれ呼び止める。

「もし、悩みとかあるなら話してくれ！俺たち、仲間だろ！」

「仲間か。イツセーくん、キミは熱いね」

「なっ!？」

「僕はね、基本的なことを思い出したんだよ」

「……………基本的なこと？」

「生きる意味……………つまり、僕がなんのために戦っているかっていうことさ」

「……………そんなの、部長のためだろ？」

「……………違うよ。僕は復讐のために生きている」

「……………復讐?」

「……………聖剣『エクスカリバー』——それを破壊することが僕が生きる意味だ」

そう言つて立ち去る木場を俺は追いかけることができなかつた。

そのとき、俺は初めてこいつの本当の顔を見た気がした。



「聖剣は悪魔にとつて最悪の武器よ。悪魔は触れるだけで身を焦がし、斬られれば即消滅することだつてあるわ。そう、聖剣は悪魔を滅ぼすことができるの」

「明日夏から聞いてましたけど、改めて聞くと恐ろしい武器ですね」

あのあと、俺、アーシア、千秋、鶯さん、燕ちゃんは俺の部屋で部長から聖剣について聞いていた。

「でもたしか、扱える者が極端に限られているつて……………」

「ええ、そうよ、千秋。それが聖剣の最大の難点なの。だから教会は聖剣の一種であるエクスカリバーを扱える者を人工的に育てようと考えたの。．．．それが『聖剣計画』」

『聖剣計画』、か。

「私が教会にいた頃はそんなお話なんて聞いたことも．．．．．」
「でしょうね。もう随分まえの話よ。計画は完全に失敗したと聞いてるわ」

．．．．．なんだ、失敗したのか。それを聞いて安心した。

悪魔として、そんな恐ろしい計画が成功してたかと思うとゾツとするぜ。

「祐斗はその生き残りなのよ」

「え!?!」

「木場さんが!?!」

部長の言葉に俺とアーシアは声をあげて驚いてしまう。

まさか、木場がアーシアと同じ教会の人間だったなんて!

「あつ!」

「何?」

「ちよつと待つてください!」

俺はあるものを取ってきて、部長に見せる。そう、木場がおかしくなるきっかけになったであろうあの写真だ。

「木場がこの写真を見て聖剣だつて」

「「「ええッ!」」」

俺の言葉を聞いて驚くアーシアたち。たぶん、幼少の頃の俺と明日夏の身近に聖剣があつたことが驚きなのだろう。

「エクスカリバーほど強力なものではないけれど……間違いはないわ。これは聖剣よ。イツセー。あなたは、もしくはは明日夏の知り合いに教会と関わりを持つヒトがいるの

「？」

「いえ、俺も明日夏も身内にはいません。ただ、俺たちと一緒に写ってるこの子がクリスマスチャンで、この子の家族に誘われて何度か教会に行ったことがあるんですよ」

「そういうこと。ここの前任者が消滅したわけがわかったわ。でもたしか——」

「部長？」

部長は何か思い当たることがあるのか、独り言を呟きながら考え込んでしまった。

「ああ、ごめんなさい。祐斗のことはとりあえず少し様子を見ましょう。さて、もうこんな時間、そろそろ寝ましょう」

そう言うと、部長はおもむろに服を脱ぎ出した！

「ぶ、部長!?! なぜにここで服を!?!」

「なぜって、私が裸じゃないと寝られないの知ってるでしょう?」

「いやいやいやいや! じゃなくて、なぜに俺の部屋で!?!」

騒ぎつつも、部長のボディーを目で堪能する俺。

「あなたと一緒に寝るからに決まってるでしょう?」

「はあっ!」

当然のことのように言う部長。

「なら私も寝ます! イッセーさんと一緒に寝ます!」

「私もイッセーくんと一緒に寝る〜!」

アーシアと鶯さんまで服を脱ぎ出し始めた!

「姉さん、何やってるのよ!」

「せっかくだから、燕ちゃんも一緒に寝よ〜」

「ちよっ!?! 服に手をかけないで!?! 脱がすなああッ!?!」

鶯さんを止めようとしていた燕ちゃんだったけど、逆に鶯さんに服を脱がされそうに

なっていた。

「わ、私もイツセイ兄と一緒に寝る！」

とうとう千秋まで脱ぎ出したあぁッ！

ちよ、ちよつと、どういう状況ですか!? なんで女の子同士の戦いが俺の部屋で勃発してるの!?

皆裸で非常に眼副なのに、息苦しい！ ここは酸素が薄いよ！

俺は気まずい空気のなか、懸命に酸素を求めるのだった。



「……………何やってるんだか」

俺は嘆息しながら電話を切る。

千秋が部長の話スマホを通じて俺に聞かせてくれたのだが、深刻そうな雰囲気
が部長と一緒に寝る発言で見事に混沌とした雰囲気になってしまった。

「……………やれやれ」

俺はスマホをしまい、木場のほうに視線を戻す。

木場の様子が気になり、遠くからこのようにして俺は木場の様子をうかがっていた。

木場は一度、以前レイナーレと戦った廃教会に訪れると、あとはもう宛もなく歩き回っているだけだった。

「……………『聖剣計画』、か」

……………俺は木場の様子から頭の中で最悪のシナリオが思い浮かんだ。

「仮に的中したとしたら……………聖職者のやることじゃねえな……………」

いや、フリードみたいなイカレ神父がいたんだ。頭に浮かんだことをする奴がいても不思議じゃねえか……………。

「ん？ 降ってきたか……」

雲行きが怪しかったが、案の定雨が降ってきた。予報だと、本来は昨日降るはずだったのだが、結局降らず、代わりに今日降ってきたみたいだ。

木場は雨が降っても構わず歩き続けていた。いや、一旦頭を冷やそうとわざと雨に当たってるのか？

そういう思考ができるのなら、バカなマネはしないだろう。

とりあえず、ズブ濡れになるのはあれなので、いったん戻って、傘なり雨合羽なり持つてくるか。

そう思い、踵を返して急いで家に向かう。

「ん？」

帰路の途中、妙な臭いを感じて足を止める。

なんだ、この臭い？ 鉄みたいな——ツ！ まさか、血か!?

俺は慌てて周りを見渡す！ すると、路地裏から雨水で流されたと思しき赤い液体が流れ出てきていた！

「あそこかッ！」

俺はすぐさま路地裏に駆け込む！　そこで俺の目に入ったのは――。

「――っ!?!　な、なんだ、これは………!?!」

そこは圧倒的な赤。真つ赤な世界が広がっていた………。

おびただしい量の血が路地裏に散乱しており、何より――。

「うっぷ!?!」

何よりも目に入ったものを見た瞬間に強烈な吐き気が襲ってきて、思わず口を手で押さえる。

それは人――いや、人だったものだった。

四肢と首を胴体から切断されており、切断された四肢をさらに間接部分で切断されていた。それだけでは留まらず、さらに切断したものを均等に切り分けられていた。顔にいたつても、鼻、両耳、唇を切り落とされ、胴体も腹を裂かれ、内臓や腸も均等に切り

分けられていた。

バラバラにして惨殺された死体——それがそこにあつた。

「……いや、順序が逆だな。これはどう見ても、殺してからバラバラにしたんだ……」。普通の神経じゃ絶対できない仕打ちだった……。

「ぐっ……」

吐き気をなんとか抑え込み、改めて死体を見る。見た感じ、たぶん男性だ。

ふと、血溜まりに何か光るものがあるのを見つけた。

俺はそれを手に取る。

「……十字架?」

間違いなく、それは十字架。それも、アーシアが持っていたものと同じものだった。

つまり、この死体の正体は神父ということになる。

「……なんで神父が?」

レイナーレのところにはぐれ神父の生き残り？ それとも真つ当な神父？
前者はまだわかるが、後者だとしたら、なぜこの町に神父がいるんだということにな
る。

神父の正体をあれこれと考えているときだった――。

「――動くな」

「――ッ!？」

突然背後からそう告げられた。

そして、俺の首筋に刃物らしきものが突きつけられた。

Life. 3 エクスカリバーを許さない！

雨が降りしきるなか、僕は傘もささずに歩いていた。熱の上がつた頭にはちようどい
いぐらいだと思う。

——俺たち、仲間だろ！

脳内にイツセーくんの言葉が響き渡る。

．．．．．すまない。僕は本来、仲間と楽しく過ごしちゃいけないんだ。そんな資
格なんか僕には．．．．．。

恩がある部長にもあんな態度をとってしまった。．．．．．『ナイト騎士』失格だね。

バシヤバシヤ。

雨とは違う音を僕の耳が捉えた。

「あつ、ああつ! た、助けてえつ!」

「………神父?」

音がするほうを見ると、物陰から神父が出てきた。

何かに追われているのか、必死の形相で逃げるように助けを求めながらこちらに向かつて走ってきた。

「ああああああつ!」

神父が突然、悲鳴をあげてその場に倒れ伏した。

見ると、背中に大きな切り傷があった。

「——ツ!」

異常な気配を察し、顔をあげて神父の後方を見る!

「やあやあ、やつほー」

そこには長剣を持ち、神父服を着た白髪の少年がいた！　そして、僕はその少年神父を知っていた！

「おっひさだねー。誰かと思ったたらー、クソ悪魔のクソ色男くんではありませんかー」
「フリード・セルゼン！」

白髪のイカれた少年神父——フリード・セルゼン。以前、墮天使との一戦で僕たちとやりあったはぐれ神父であった。

「……まだこの町に潜伏していたのか？」

「すんばらしい再会劇に、あたしや、涙ちよちよぎれるまくりつスよ！　フツフツフー！」

……相も変わらず下品でふざけた言動だ。

「………あいにく、今日の僕は機嫌が悪くてね」

ちようどいい。この溜まりに溜まった鬱憤をはらさせてもらおう。そう思った僕は右手に魔剣を創りだした。

「ヒヤハハハハハッ！ そりやまた都合がいいねー！ ちようどオレっちも、神父狩りに飽きたところでさー！」

彼はそう言うと、手に持つ長剣を掲げてふざけたように振り回し始めた。

「——ッ!？」

彼の持つ剣を見て、僕は驚愕した！

「その輝き、オーラ——まさか!？」

「バツチグー！ ナイスタイミング！ 以前のお返しついでに試させてくんねえかなあ？ どっちが強いかー！ おまえさんのクソ魔剣と、この聖剣エークスカーリ

バーとさあッ！」

「——ッ！」

そう、彼の持つ剣は聖剣エクスカリバーそのものだった！

僕の中で憎悪が渦巻く。

僕は——エクスカリバーを許さない！



そこはとある廃教会。先日、アーシアを巡って墮天使とグレモリー眷属たちが相対した場所だった。

その廃教会にローブを纏った三人の少女と一人の少年と青年が訪れた。

「……随分と荒れ果てたものだ」

少女の一人が廃教会の惨状を見てそう漏らした。

「……破棄されたところとはいえ、これはちよつと……」

「つい最近、墮天使と悪魔がひと騒動したとは聞いてたけど」

もともと酷いありさまではあったが、フリードとグレモリー眷属たち、墮天使レイナーレとイツセーの戦闘でより酷い状態になっていた。

「……どうでもいい。潰し合いなら勝手にやってるだ」

少年が興味なさげに吐き捨てた。

少年にとって墮天使と悪魔が潰し合いをしようが、その果てにどうなるかが興味のないことだった。

「しかし、遅いな?」

最初に口を開いた少女がローブのフードを取る。前髪の一部に緑色のメッシュを入れた青髪で目つきが鋭い少女だった。

「待ち合わせ場所はここで合ってるのか？」

少年も少女の一人に訊きながらフードを取る。黒髪で青髪の少女よりも鋭い目つきをした褐色肌の少年だった。

「間違はずがないわ。ここは私が両親と過ごしたところよ。子供の頃にねえ」

少女の一人がフードを取る。栗毛の髪をツインテールにした天真爛漫そうな少女だった。

そして、懐から一枚の写真を取り出す。その写真はなんと、現在木場の様子を一変させた原因である幼いイツセーと明日夏、その二人と同一年ぐらいの子供が写った写真と同じものだった。そう、少女の正体はその写真にイツセーと明日夏と一緒に写っている栗毛の子供なのだった。

「あ、かわいい」

最後の少女が写真を見て感想を言いながらフードを取る。黒髪をポニーテールに

した人懐っこそうな少女だった。

「そっちの男の子たちは？」

「幼馴染みよ。よく一緒に遊んでたの。元気にしてるかなあ？　せつかくだからあとで顔を出しに行こうつと」

「そんなことより、先に来てる奴らは何やつてるんだ？　場所がここならすでにだいぶ過ぎてるぞ」

彼らがこの廃教会に訪れたのは、とある任務のための情報提供者たちとの合流場所がここだったからだだった。

だが、少年の言うとおおり、合流時間が大幅に過ぎても情報提供者たちがいつこうに訪れてこなかった。

「何かトラブルがあったと見るべきか？」

最後に青年がフードを取る。白髪をオールバックにした落ち着いた雰囲気を放つ青年だった。

「やむをえん。三手に別れて情報提供者の探索を行う。私は一人で、キミたちは二人ずつで探索に当たってくれ」

「わかった」

「はい」

「はい」

「了解」

「二時間後にここで落ち合おう」

青髪の少女と栗毛の少女、黒髪の少女と少年でペアとなり、少年少女たちは廃教会をあとにした。

「さて……最悪な事態になってなければいいが」

青年はほぼ確信じみた予感を覚えながら、情報提供者たちを探しに廃教会をあとにした。



首に刃物を突きつけられ、下手に動けずにいた俺はおとなしく手を上げる。

チラッと刃物を見てみる。形状と特徴的な刃紋から、おそらく刃物の正体は日本刀。

——つて、この刀、見覚えが。

そういえば、こいつの声にも聞き覚えが……。

「——ッ！ おまえ、槐か？」

「何？」

俺は振り向く。

「明日夏」

そこにいたのは、黒の雨合羽を着た槐だった。

槐は刀を鞘に納めると、笑みを浮かべて言う。

「また会ったな」

「ああ」

まさか、こうも早くまた会うとはな。

「なんでまたこの町に？」

いや、答えはわかりきっているか。

槐はハンター。その目的は賞金首。そして、賞金首は世界中のどこにでもいる。たま、この町に賞金首がいて、そいつを追ってこの町に来たつてところだろう。

「おまえが考えているとおりだ。この町にはある賞金首を追ってレン兄上と訪れたのだ」

「レンも来てるのか？」

レンこと夜刀神蓮火。れんか 槐の兄で、同じく賞金稼バンテイハンターぎだ。

それにしても、槐だけでなく、レンまでいるつてことは――。

「——おまえたちが追っている奴、相当ヤバい奴なのか？」

俺の問いに槐は表情を険しくする。

槐はCランクの上位ランカーだ。その兄、レンはその槐よりもさらに上のBランクだ。さらに二人の連携力もかなりのもので、総合的な戦闘力は相当高い。

そんな槐がレンと一緒に来ているのにも関わらず、ここまで表情を険しくするってことは、二人が追ってる奴は相当にヤバそうだな……。

「これをやったのもそいつか？」

「いや、そこまではわからない」

「そうか。なににせよ、犯人はこんなことをする奴だ。相当イカれてる奴なのは間違いないだろう。……わざわざ名前を残すような奴だからな」

「何？」

俺は槐にある場所を顎で指し示す。

それは壁に血で描かれた文字だった。雨で少し溶けてはいたが、まだなんとか読め

た。

その文字はこう書かれてた——。

「・・・・・・・・・・・・・・・・Bell^{ベル} the^ザ Ripper^{リップパー}・・・・・・・・だど？」
 「・・・・・・・・『切り裂きベル』・・・・・・・・『ジャック・ザ・リップパー』のマネのつもりか？」

壁の文字は『ベル・ザ・リップパー』——『切り裂きベル』と書かれていた。

ロンドンで有名な殺人鬼、「切り裂きジャック」こと「ジャック・ザ・リップパー」の真似事か？

「おまえが追ってる奴の名前か？」

「いや、違う名前だ」

つまり、槐が相当警戒するような賞金首とこの惨状を生み出したイカレ野郎という危険人物二人がこの町にいるってことになる。

「くっ!」

「あ、明日夏!」

俺は槐を置いてその場から急いで駆けだした!

槐も慌てながら俺のあとを追ってくる。

「いったいどうしたんだ、明日夏!」

「部活仲間が近くをうろついてんだよ! しかも、あんまり調子がよくない状態だな!」

「なんだと!」

雨が降りしきるなかを俺は全力疾走で駆けながら木場を探す。

クソッ! 最悪な展開にだけはなってくれなよ!



「ンン、ンフフ、フフン♪ 死ねってんだ!」

「ふッ！」

ガキイイイン！

僕の魔剣と彼の聖剣が激しくぶつかり合い、火花を散らした。

「ぐ、ぐぐつ．．．．．！」

そのままつばぜり合いになり、僕は彼の聖剣に憎悪の視線をぶつけながら折る勢いで剣を握る手に力を加える！

「売りの端整な顔立ちが歪みまくってますぜえ！ この聖剣エクスカリバーの餌食に相応しいキャラに合わせてきたあ？」

「ほぎくくな！」

「アアウツ!？」

彼のふざけたような言葉が癪にさわった僕は力任せに彼を押し返した！

「……イケメンとは思えない下品な口振りだ——なーんつつて♪」

以前、僕が彼に告げた言葉をそのままネる彼にさらに怒りを覚えさせられる!

「ホーリー・レイザー光喰剣ッ!」

魔剣から闇が伸び、聖剣に絡みつく。

だが、聖剣から発せられたオーラであっさりと闇は霧散してしまった。

「あー、それ無駄っすから。ザーンネーン♪」

魔剣の力が通じなかったことに嘲笑われた僕はむしろ嬉々として不敵に笑みを浮かべた。

「フツ、試ただけさ。その剣が本物かどうかをね。これで心置きなく剣もろとも八つ裂きにできるわけだ!」

「オオオウツ!？」

彼の持つ聖剣がエクスカリバーなのかどうか実は半信半疑だったからね。本物だとわかったのなら、遠慮なくやらせてもらう!

僕は連続で魔剣を振るう!

「ふッ! ふッ! はッ!」

「イタスッ! イタスッ! オオオウツ!」

ズバッ!

「ぐわああっ!？」

一方的に斬り込んでいたはずだったのに、一瞬で僕の腕のほうに斬られてしまった!?

「・・・・・・・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・」

傷自体はたいして深くはないのに、傷口から煙があがり、身体中を焼かれるような激痛が走った。

「言つてなかったけー? この聖剣はクソ悪魔キラー用の剣なんだよー。さーせん」

聖剣は悪魔を滅ぼす究極の武器。触れただけでも身を焦がす。それがエクスカリバークラスならたとえかすり傷でも深手になりかねない。

「………知ってるよ! 忘れたこともない!」

「ああっ!?!」

僕の顔を覗き込んできた彼の足払って後ろに転ばせた!

「あんっ!?! きったねー!」

「悪魔らしいだろ! ふうッ!」

「いんよっ!」

転んだところをすかさず斬りかかるが転がるようにして避けられてしまう。

「——ッ!?!」

僕は再び斬りかかろうとしたけど、突然体から力が抜けてしまう!?

これは……傷口から入った聖剣のオーラが悪魔の体である僕の体を蝕んで力を奪っているのか!

「アヒヤヒヤヒヤヒヤッ! さっすがクソ悪魔キラの聖剣さまだぜ!」

フリードは膝を着く僕を見て嘲笑いながら手に持つ聖剣を舐める。

こんな男が持ち主なんて、エクスカリバーも運がなかったね。……同情はないけど。

なんとか足に力を込めて立ち上がるけど、依然として体に力が入らない……。

「さーて、そろそろクソ悪魔キルを実行しましょうかねえ!」

「くっ……!」

フリードは聖剣を振りかぶって満足に動けない僕めがけて飛びかかってきた！
僕はなんとかその斬撃を防ごうと手に持つ魔剣を盾にする。

ガキイーン！

「あれえ？」

だが、彼の聖剣と僕の魔剣がぶつかることはなかった。

僕たちの間にふたつの人影が飛び込んできて、手に持つ何かで彼の聖剣を受け止めていた。

「無事か、木場?!」

いっぽうの人影の正体は明日夏くんだった。もういっぽうは見知らぬ女性だった。

「はあッ！」

「アアオ！」

明日夏くと女性はつばぜり合いになっていたフリードを押し返した。

「どこの誰かと思つたらあ、あんとときのガキじゃねえかよ。やつほやつほー、おっひさー」

「……まさか、またてめえに会うことになるとはな」

嬉々として挨拶する彼に明日夏くんは忌々しい者を見るような視線で睨みながら言った。

「ちなみにそつちのお嬢さん誰かなあ？　もしかしてえ、彼女さんですかあ？　ならあ、キミを動けなくしたあと、ゆつくり寝取つてやるよ！　お姉さん、いい体してるしい♪」

「……ゲスが」

体を舐め回すように見られた女性は心底嫌悪感を感じた様子で吐き捨てた。

「……………相変わらず、耳障りな奴だ」

「……………それよりも、明日夏——」

「……………ああ。あの剣——普通じゃねえな」

警戒心をあらわにしてフリードの持つ聖剣を睨む二人に僕は告げる。

「……………あれは……………エクスカリバーだよ」

「——ツ!？」

それを聞いた二人はさらに警戒心を上げてエクスカリバーを睨む。

「……………なんだってめえみたいなイカレ野郎がそんなもん持つてんだよ?」

「さーて、なんででしょうかねえ♪」

明日夏くんの問いに答えず、フリードは醜悪な笑みを浮かべて聖剣の切っ先を明日夏くんたちに向ける。

はなっから答えなど期待していなかったのか、明日夏くんはフリードの答えを気にす

ることなく手に持つ刀を逆手持ちに切り替えて彼の動向を警戒する。
女性のほうも日本刀を構え、同様に警戒する。

「——下がってくれ、明日夏くん」

僕は明日夏くんの肩に手を置きながら言う。

「——奴は僕の獲物だ」

「——そのザマで何バカ言ってるんだ？」

明日夏くんの言うとおり、時間が経って聖剣のオーラが弱まったのか少しはマシになつていたけど、それでも本調子とは程遠い状態だった。

だが、そんなことは関係ない！ あの剣は僕が折らなければ意味がないんだ！

「——どいてくれ」

僕は少し殺気混じりで冷たく言い放つ。本来、仲間である彼に向けるようなものじゃ

ないのかもしれないがこればかりは譲れなかった。

「やめて!? 私のために争わないで!」

いきなりオネエ口調になってそんなことをのたまうフリードに明日夏くんは「黙れ」と言わんばかりに殺気を向ける。

だが、殺気を向けられた彼はむしろ嬉々とした表情を浮かべるだけだった。

「安心しろよ。全員平等にキルキルしてやるからよお! ——つて言いたいところだけだよお、悪い。お呼びがかかっちゃたわあ。てーことで——はい、チャラバ!」

カツ!

「ぐっ!?!」

フリードが何かを地面に叩きつけた瞬間、眩い閃光が襲い、視界が潰される! 閃光が晴れると、そこにはもうフリードはいなかった。



チツ。ただでさえ厄介な奴なのに、それに加えてエクスカリバーを持つてるだと。クソツ、フリードの野郎、さらに厄介になりやがって。

槐が刀を振りながら言う。

「……言動はふざけているが、相当できる男のようだな」

よく見ると、槐の持つ刀の切っ先から血が滴っていた。おそらく、フリードの血。

あの視界を潰された状態でも的確にフリードの奴を斬りつけたのか。槐の言い分から斬り伏せるつもりだったんだろうが、フリードも対処したということなんだろう。

「くっ！」

「——ッ！ 待て、木場!？」

木場がフリードを追うように駆けだそうとしたのを見て、俺は肩を掴んで木場を制止

する。

「はなせ！ 奴は！ 奴はエクスカリバーを持っていったんだ！」

憎悪に歪ませた形相で俺を睨みつけながら叫ぶ木場。

「だつたらなおさらだ！ あのまま戦つていれば、死んでたかもしれないんだぞ！
いかげん、頭を冷やせ！」

俺は木場の胸ぐらを掴んで言い聞かせるように叫んだ。

「黙れ！ キミに何がわかる！ 僕の何が——」

「——おい」

俺の手を振りほどいて捲し立てる木場の肩に槐が手を置く。

「——っ!?!」

木場が振り向いた瞬間、槐の掌底が木場の鳩尾に打ち込まれた。

「ぐっ……き、貴様……！」

「おっと」

槐の一撃で意識を失って崩れ落ちた木場を慌てて支える。

「……容赦ねえな」

「言っても聞きそうになかったのぞな」

まあ、それはそうだな。

とにかく、こいつをこのままにしておくわけにはいかねえし、とりあえず、家に運ぶか。

「おまえはどうするんだ？」

木場を背負いながら槐に尋ねる。

「気になるところではあるが、兄上と合流するつもりだ。私もやらなければならないことがあるからな」

「わかった。じゃ、またな」

「ああ。もし、あの男やあの神父のことで何かわかったら連絡する」

「ああ。助かる」

そこで俺たちは別れ、俺は雨が降りしきるなかを木場を背負いながら全力疾走するのだった。



「成果は？」

「・・・・・・・・一人見つけたよ」

「・・・・・・・・すでに殺されていたがな」

「こつちも一人見つけたが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・二人と同じく殺されていたわ」

「・・・・・・・・こちらも一人見つけたが、状態はキミたちと同じだ」

「調査員は六人いたはずですよね？」

「ああ。だが、この様子ではおそらく・・・・・・・・。仕方あるまい。情報は改めて自分たちで集めるとして、当初の予定どおり、リアス・グレモリーに接触する」

「了解」

「わかりました」

L i f e . 4 聖劍、来ました!

「——ここは?」

目を開けると、見知らぬ天井が見えた。

「たしか、僕は——」

そうだ。はぐれ悪魔との戦いのあと、一人さまよい歩いていた僕はフリード・セルゼンと再会した。

——そして彼は聖劍を持っていた。

彼と戦い、僕は——。

「目が覚めたか?」

突然投げかけられた声に反応して声が出たほうを見る。

そこには壁を背にして、腕を組んで壁に寄りかかっている明日夏くんがいた。

そうだ。フリードとの戦いに明日夏くんを見知らぬ女性が乱入して、その後、フリードは呼び出しがかかったと言ってその場から去り、僕は彼のあとを追おうとしたけど、明日夏くんに引き留められて、それでも追おうとした僕を明日夏くんと一緒にいた女性が僕を気絶させたんだった。

ということは、ここは明日夏くんの家ということなのだろう。

そういうえば、彼と一緒にいた女性がいないようだった。

「槐なら、他に用があるからあの場で別れた。それよりも体調はどうだ？」

明日夏くんに言われ、体の状態を確かめる。

体を蝕んでいた聖剣のオーラはもうすっかり中和されたのか体調はひとまず良好だった。

「…….とりあえず、大丈夫だよ」

そう言った僕は、明日夏くんと視線を合わすことができなかつた。

冷静じゃなくなつてたとはいえ、僕を助けに来た彼に僕は邪魔だと言わんばかりの態度をとつたどころか、あろうことか殺気すらぶつけてしまった。

そのことが僕の中でうしろめたさとなつて、顔をうつむかせていた。

「気にしてねえから、顔を上げろ」

明日夏くんはそう言うけど、それでも僕は顔を上げられなかつた。

そんな僕を見たからなのか明日夏くんが嘆息した。

「とりあえず、今日は念のため学校を休め。部長には俺から言っておく」

それだけ言うと、明日夏くんは部屋から出ようとすする。

「——待ってくれ」

僕は明日夏くんを呼び止める。

「エクスカリバーのこと……部長には——」

「もちろん報告する」

「——ッ!? 待ってくれ!」

それはダメだ! 部長に報告すれば、部長は間違いなく勝手をするなど関わることを禁ずるはずだ。やっと巡り会えたのに、みすみす見過ごすことなど——。

「どうやら、まだ頭が冷え足りないようだな?」

明日夏くんは僕に冷たく言い放つ。

「奴の性格はもう把握できてるだろ? 奴はおまえたち悪魔を屠ることに一種の快楽を覚えている。そんな奴が対悪魔用の兵器ともいえる聖剣、それもエクスカリバーを手にした。有頂天になって以前の戦いの借りを返す意味で襲いかかつてきたっておかしくない。当然、おまえだけじゃなく、イツセーたちにもな。そんな情報を伏せれば、イツセーたちにどれだけのリスクが発生するか、考えるまでもないだろ?」

僕は明日夏くんの言葉に反論できなかった。

あの男が今度は他の眷属仲間を襲う可能性など、考えるまでもなかった。そして、情報が見えられていたことで対処が遅れて彼の凶刃の犠牲になる可能性も同様だった。

「聖剣計画のことは部長から聞いた。肝心なところは聞けなかったがな」

そうか。部長から聞いたのか。肝心なところというのはおそらく、僕の身に起こったことだろうね。……まあ、おそらく、明日夏くんはもう何があったかは察しているっぼいけどね。

「イツセーから聞いた。おまえ、エクスカリバーに復讐するために生きているんだってな?」

「……復讐は何も生まないなんて言うつもりかい?」

「いや。そんな言葉で収まるほど、おまえの憎しみは軽くないだろ? そもそも、俺もそんな綺麗事を言えるほどじゃないからな。やめろなんて言わねえよ。ただ——」

明日夏くんは真つ直ぐ僕を見据えながら言う。

「復讐と仲間——どつちを優先すべきかは考えるまでもないことだろ？」

明日夏くんの問いにうつむいてしまう。

「それとも、おまえとつて、部長たちのことはその程度の存在でしかなかったのか？」
「そんなことはない！」

明日夏くんの言葉に思わず叫んでしまう。

部長には大きな恩があり、僕にとつては姉のような存在だ！ 朱乃さんも小猫ちゃんも、それから、表に出てきていない彼も家族みたいなものだ！ イッセーくんやアーシアさんも大切な仲間だ！ 僕なんかにはもつたないほどの！

「でも、エクスカリバーに対するこの想いも忘れてはならないものでもあるんだ！」

睨みつける僕を見て明日夏くんはまた嘆息する。

「はあ。とりあえず、皆のことを蔑ろにする気はなさそうだな」

それを確認した明日夏くんは部屋から出ようとする。

「仲間も大切なら、報告はさせてもらおうぞ。しばらく冷静になってよく考えてろ」

明日夏くんの言葉に僕は無言になるしかなかった。

「それから、朝メシは作っておく。食う気になったら食ってくれ。食わないんなら冷蔵庫にしまっというてくれ」

それだけ言い残すと、明日夏くんは今度こそ部屋から退室していった。



「……うーん……体が重い」

朝になり、眠っていた意識が起きかけると、なんだか体が重く感じた。

「・・・・・・・・えっ」

目を開けると、部長、アーシア、千秋、鶴さん、燕ちゃんが俺のベットで寝ていた・・・・・・・・。しかもみんな裸で。

「なああっ!? うわああああああっ!」

一気に目が覚めて、俺は悲鳴に似た叫び声をあげてしまった。そしてその叫び声でみんなが起きだした。

「あっ・・・・・・・・」

ふと千秋と燕ちゃんと目が合う。

「……………ツッ! — ツツツ!? — ツツツツ!!」

二人とも顔を真っ赤にして声にならない悲鳴をあげながら部屋から飛び出していつてしまった。

「ふふ、二人とも恥ずかしがり屋ね。おはよう、イツセー」

「おはようございます、イツセーさん」

「おはよう、イツセーくん」

残った部長、アーシア、鷗さんは何事もなかったように挨拶をくれる。

「……………あ、あの、これは一体?」

「昨夜、イツセーさんが勝手にお休みになっちゃったので」

あれ、そういえば、俺、いつのまに寝てたんだ?

たしか、部長が裸で俺と一緒に寝るって言いだして、アーシアたちまでもが裸で一緒に寝ると言いだして……………そこからの記憶がなかった。

「それで公平にね」

「みんなで寝ようってことになったんだ」

俺がいつのまにか寝てたあいだにそんなことになってたのか……。

……何か間違ってるような。

「あつ、そろそろ朝食の支度をしませんと！」

「いけない！」

「わ〜！」

「じゃあ、イツセー。またあとでね」

「お邪魔しました、イツセーさん」

「下で待ってるね」

そう言い残し、三人は部屋から退室していった。

「だはああ……部長の影響でみんなエロくなってきたような……」

でも、それはそれで……いや、アーシアはダメだ!

アーシアは守るべき存在! 守るべき存在がエロエロになるのは……むしろよくね! ……イヤイヤイヤ!

かといって、部長をはじめ、他の子に何かすると、アーシアが怒りそうだし。

これじゃ生殺しだああ!

俺の完璧なシミュレーションでは――。

『フフフフ、ハーツハツハ! 今日ほどの子を喜ばせようかな?』

『イツセーさん! 私に! 是非とも私にご慈悲を! お、お願いします! 私にご慈悲を!』

『何を言ってるの! イツセー、よくお聞きなさい! 私はイツセーがいないと生きていけないわ! さあ、早く私を満たしてちょうだい!』

『ダメく! イツセーくんにかわいがつてもらうのは私と燕ちゃんだよ! ねく、燕ちゃん?』

『………お願い………します』

『………イヤ。イツセー兄、お願い。他の誰よりも先に私を滅茶苦茶にして』

『ハーツハツハ！ 参ったなー♪ 俺の体はひとつしかないんですよー♪ そうだ——
ジャンケンに勝った子からお相手をしてあげましょう』

『負けません！』

『私だって』

『絶対勝とうね、燕ちゃん！』

『ええ！』

『負けない！』

『『『『ジャンケン、ポン！ あいこで、しよー！』』』』

『ハハハ、ハーレム王になったぞー！』

——みたいな感じになるはずだったのに……。

現実には厳しい！ たしかに部長のおっぱいは見た、触れた！ だが、そこから先がラ
スボス並みの高難度！

「……………はあー、切ない」

うう、どうしてこんなことに……………。

『よう相棒。悩んでいるところ悪い』

「ん?」

突然の声に周りを見渡すが部屋には俺以外誰もいない。

『俺だ。相棒』

「ドライグ!」

声の出所は俺の左手からだった。

声の主は俺の『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアに宿る存在、『赤い龍の帝王』ウエルシュ・ドラゴン——ドライグだった。

『相変わらず頭の中はいかがわしいことではいっぱいだな』

「む、うるせえ! 多感な時期なんだよ! いきなり出てきやがつて!」

普段はこちらから話しかけてもシカトしやがるクセに!

『まあ、そう言うな。今回は逃げん。ちよいと話そうや』

俺はベッドに腰かける。

「——で、話つて？」

『そう不機嫌そうにするな。わざわざ警告に来てやったんだ』

「警告？」

『最近、おまえの周囲に強い気を感じるんでな。おちおち寝てもいられん』

「ああ、最近部長によく絡まれるからなあ」

肉体的な意味で！

『おまえさんの仲間のものならいまさら気にはしないさ』

ん、部長たちのじゃない？　じゃあ強い気つて——まさか敵つてことか!?

『とにかく気をつけることだ。色を知るのもいい年頃だ。念のため、そういうのを早め

早めに体験しておけ。「白い奴」がいつ目の前に現れるかわからんからな」

『白い奴』——まえにもそんなことを言ってたな？

「なあ、その『白い奴』ってなんだ？」

『——「白バニシング・ドラゴンい龍」だ』

——『白バニシング・ドラゴンい龍』……………。

『俺たちは二天龍と呼ばれているが、長年のケンカ相手だな。天龍を宿した者同士は戦い合う運命にあるのさ』

「者同士って、俺みてえな神セイクリッド・ギア器を宿した奴が——」

『——いる』

「……………俺はそいつと、いつか戦わなきゃならねえってこと？」

『そういうことだ』

勝手に宿つといて無茶苦茶だなあ、おい!?

『見返りとして、ドラゴンの力を与えてやっているじゃないか』

「うっ、忘れちゃいねえよ。おかげで部長も救えたわけだし。だがな、ドライグ。あらかじめこれだけは言っておく！」

『なんだ？』

「オホン。よく聞け。俺は上級悪魔に昇格して、ハーレム王になりたい！ 無数の女の子を眷属下僕にして、俺だけの美女軍団を作る！ それが俺の夢だああッ！」

『ハハハ！ そんな夢を持った宿主は初めてだ！』

「………やっぱ俺って変かな？」

『変ではあるが、異常ではないさ。それに叶わない夢でもないぞ。ドラゴンの力は周囲の者を圧倒し、魅了する。敵対する者も多いが、魅力を感じ、すり寄ってくる異性も多からな』

「なっ！ マ、マジっスかあっ!？」

「ああ。俺の宿主だった人間は皆、異性に囲まれてた」

「うおおおおおッ！ あなたさまはそんなにスゴい神セイクリッド・ギア器さまだったのですねえええッ！」

いつのまにか、俺は左腕に頭を下げ、敬意を払う言葉遣いになっていた。

『……………態度が急変し過ぎだぞ』

ドライグが呆れ声になっていたが、関係あるもんか!

「よーし! 当面の俺の目標は部長のおっぱい攻略っす! そこんとこよろしくっす!
!」

『揉むのか?』

「いや、吸う!」

『……………』

ドライグがなぜか黙りこんでしまった。俺の目標に言葉を失ったのか?

『……………はあ。女の乳を吸うサポートか……………。俺もずいぶん落ちぶれたもんだ……………。しかし、こういう相手もたまにはいい。ただし、俺の警告を忘れるな』

「——強い力つてやつか……」

『ああ。なんせ、現時点ですでに多くの力が相棒の周りにいるからな』

部長たちのことを言ってるのか？

『リアス・グレモリーたちもそうだが、個人的にはおまえさんの親友とその兄弟たちのほうが興味深い』

明日夏たちが？ まあ、たしかに明日夏と千秋は神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアを持っているし、明日夏は冬

夜さんと千春さんも神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアを持つてるって言ってたな。

『幼馴染みの兄弟姉妹全員に神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアが宿る。偶然にしてもそうあることではないぞ』

たしかにそうかもな。明日夏たちが神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアを持っているのは、おまえの力が引き寄せた結果だって言うのか？

『すべてではないが、要因のひとつにはなってるだろう。にしても、ドレイクの奴とまで

縁があるのは……ちよつと同情する』

ドレイク——明日夏の神セイクリッド・ギア器に宿る存在で、ドライグと同じドラゴン。

このまえ話をしたけど、結構変わった奴だったよな……。

「なあ、ドレイクってどんな奴なんだ？」

『ああ、そうだなあ……強いて言えば、遊び人ならぬ「遊びドラゴン」だな』

あ、遊びドラゴン？

『ドラゴンには宝や雌など特定のを求め、集める奴は多いが、あいつはその中でも変わっていてな。娯楽や遊びなんかを求めていたのだ。そんなもの心から求めるドラゴンなどあいつぐらいなものだろう。そのさまからあいつは「遊びドラゴン」なんて呼ばれていたのさ』

ドレイクのことを話してくれているドライグだったが、その声音が心底いやな相手を話しているかのようにだった。

いつたい、おまえとドレイクの間は何があったんだ？

『……あいつは状況をおもしろくするためならなんにだってちよっかい出してき
てな。おれと白い奴との戦いにちよっかいを出してきたのも一度や二度じゃない。そ
んなことをするものだから、ほとんどドラゴンはいつを嫌っていてな。「遊びドラゴ
ン」っていうのも、そんなあいつに対する蔑称だったんだ。……まあ、本人は
えらく気に入っていて、むしろ自称しているんだがな』

なんというか、本人も言ってたけど、自由に勝手気ままな奴なんだな。

『まあ、ドラゴンってのは基本的に勝手気ままなものだからな。ある意味ドラゴンらし
いとは言える。だがやはり、いろいろな意味で異質な奴ではあるな。そもそも、存在か
らして異質だ』

「存在？」

『ああ。なんせあいつは肉体がオーラだけで構成されたドラゴンだったからな。そんな
ドラゴンはおそらく、あいつだけだろう』

そんな特別なドラゴンなのか、ドレイクって。

『まあ、あいつに関してはとりあえず、基本的にハタ迷惑な奴と覚えておけばいい。とにかく、強い力には注意しろ』

「ああ」

再三告げるドライグの警告に俺はうなずいた。



「……それは本当なの、明日夏？」

朝食のあと、部長と二人きりになった俺は木場のこととフリードのことを部長に話した。

「ええ。奴自身がそう言っていましたし、俺から見てもあの剣は相当なものに見えました。何より——」

「――祐斗の反応がそれを物語っていたと」

部長はしばらくのあいだ、顎に手を当てて考え込んでから言う。

「とりあえず、祐斗には使い魔を付けるわ。一応、念のためね」

「それがいいでしょうね。で、フリードのことや殺された神父のことをイツセイたちに
は？」

「そっちは部活のときに話すわ。朱乃や小猫にも話さなきゃいけないしね。あのはぐれ
神父もこんな明るいうちに襲撃なんてしないでしよう」

まあ、流石のあいつもそこまでイカれてはいないだろう。

「殺された神父に関してはたぶん、はぐれを追って返り討ちにされたつてところかしら。
おそらく、目的はエクスカリバーの奪還。とりあえず、教会側に関しても警戒はするわ」

おそらく、エクスカリバーの奪還の可能性が高いだろうな。

そもそも、奴はどうやってエクスカリバーを手に入れたんだ？

使い手から奪ったのか、もしくは持ち主を選ぶ特性上から使い手がなく保管されていたものを強奪したのか?

まあ、悩んでもしょうがねえか。重要なのは、奴がエクスカリバーを持っているということ、奴には行動を共にしている存在がいることだ。そして、そのフリードの持つエクスカリバーの奪還のために教会側の刺客がこの町に潜伏している可能性があることだ。

……また不穏な気配が漂いだしたな。



「カラオケ?」

「ひさびさに行かぬ?」

教室の前の廊下で俺とイツセーは松田と元浜からカラオケに誘われた。とくに断る理由はないので、俺もイツセーも了承した。

「で、どこの店に行くんだ?」

「ああ、駅前のところにあるやつだ」

「あそこなら挿入歌はおろかキャラソンまでフォローしているぞ」

結構曲数が豊富そうだな。

「挿入がなんだって？」

「うおっ!？」

「桐生!？」

突然、松田と元浜の背後から桐生が現れた。その後ろにはアジアもいた。

「やだやだ、朝からまた土騎くんを巻き込んだのエロトーク？」

「カラオケ行こうって話してただけだ！」

「カラオケ！ いいじゃん、私も付き合おうかな♪ ね、アジア？」

桐生は後ろにいるアジアに尋ねると、アジアは笑顔で答える。

「はい、行きたいです」

「何いいいっ!」

アーシアが来るかもということで、松田と元浜がテンションを上げ始める。

「よし! イッセー、明日夏!」

「……………な、何だよ?」

「……………何だ?」

元浜がメガネを光らせながら呼んできた。

「この際だ——」

「——他のオカ研の女子を誘えってか?」

「話が早くて助かる」

というか、そもそも最初からそれが目的ってところもあつたんだろう。

「へいへい」

「断られても文句言うなよ」

「何がなんでも誘うんだ！ いいな！」

詰め寄りながら二人に叫ばれて、俺とイツセーは同時にため息を吐いた。

「それから、明日夏」

「なんだよ？」

「できることなら、霧崎さんも喚べないか？ おまえが一番仲いいからな」

「霧崎も？ まあ、誘うだけ誘ってみるが……」

といつても、あんまり目立つのを避けてる霧崎がカラオケに来るかねえ。

「皆、なんの話してるの〜？」

そこへ、鵜がやって来た。

「鵜、おまえ、カラオケ行くか？」

「いいよ〜」

鵜はのんびりと即答した。

それを聞いて、目に見えて騒ぐ松田バカと元浜二人。

そんな二人を尻目に、俺は霧崎のもとに行く。

「どうしたの、土騎くん」

「ああ、実は——」

霧崎にカラオケのことを話し、霧崎のことを誘ってみる。

「そうだね——せっかく誘ってくれたんだから、行くよ。もう、皆とも知らない仲じやないしね」

「そうか」

意外にも霧崎もOKとなった。

で、放課後、アーシアと鶴を先に行かせてからイツセーと一緒にカラオケのことを千秋たちに訊きに行ったが、千秋も燕も塔城も了承した。

意外にも塔城がかなり乗り気だった。

あとは部長と副部長か。

あとそれから、俺とイツセーは気分転換になってくれればと思つて木場のことも誘うことにした。



「ちわーっス」

千秋たちにカラオケのことを訊きに行ったあと、旧校舎にやつて来た俺たちは俺を先頭にして部室に入る。

「来たわね——つて、どうしたの、燕？ 顔が真っ赤よ？」

部長が入ってきた俺たちを見て挨拶をしたあと、燕ちゃんが顔を赤くしているのに気

づいて訊いてきた。

実は一年組をカラオケに誘ったあと、そのまま一緒にオカルト研究部に向かっていたんだけど、今朝のことで千秋と燕ちゃんが顔を赤くさせてよそよそしくなっていたんだ。で、その理由を知った明日夏がいつものように燕ちゃんをいじってたわけだ。

「えーと、いつものです」

「ああ、なるほどね」

俺がそう答えると、部長も察したようだ。

「あらあら、うふふ。私も参加しましょうかしら?」

朱乃さんがSな顔をしてそんなことを呟いていた。

「お願いだからやめてください!?!」

燕ちゃんは必死に朱乃さんに懇願する。

これ以上いじってくる相手が増えるのは勘弁願いたいようだ。ましてや、朱乃さんは究極のSだからな……。

「そうですよ、副部長」

なぜか、明日夏が朱乃さんに異を唱えた。

「こいつをいじっていいのは俺だけです」

——つて、そういう理由かい！

思わず心の中でツッコんでしまった。

「——つて、ざっけんじゃないわよっ！」

それを聞いて燕ちゃんが顔を怒りで真っ赤にして明日夏にハイキックを繰り出す。

で、明日夏は黒い笑みを浮かべながら蹴りを避けていた。うん、明日夏のいまの言葉、本音もあるけど、ほとんど燕ちゃんをいじるために言ったな。

「おい、燕」

蹴りを避けながら燕ちゃんを呼ぶ明日夏。

「何よ!?!」

捲し立てるように返事を返す燕ちゃんに明日夏は淡々と言う。

「その位置で蹴りを出せば、イツセーにスカートの中が丸見えだぞ?」

「——っ!?!」

それを聞いた燕ちゃんは慌ててスカートを押しさえる。

うん、実は明日夏の言うとおり、蹴りを出すたびに柄物のかわいらしいパンツが見えてしまっていたんだ。

今度は羞恥と怒りで顔を真っ赤にした燕ちゃんが涙目でこちらを睨んできた!

「・・・・・・・・・・・・・・・・見たの！」

「・・・・・・・・えーと・・・・・・・・」

・・・・・・・・うん、ここは変に誤魔化すよりも正直に言った方がいいだろう。

「・・・・・・・・うん、見た」

「——ッ!? ・・・・・・・・このお・・・・・・・・」

「ちよつと待って燕ちゃん！ いまのは不可抗力——」

「どスケベ！」

「ぐへあっ!？」

一気にジャンプで俺の目の前まで跳んできた燕ちゃんのジャンピングハイキックを
もろに顔面に喰らってしまった。

・・・・・・・・ちなみにこのとき、蹴りが当たる瞬間にまたスカートの中身が見えた。



「……………そういえば、部長。木場はどうしたんですか?」

燕ちゃんに蹴られたところをアーシアに治療してもらっていると、ふと木場が部室にいないことが気になったので、部長に訊く。

「……………祐斗は今日、学校を休んでいるわ」

「——ッ!? 部長、昨日の話と何か関係があるんじゃない?」

「ええ、そうね。関係はあるわね」

すると、明日夏が会話に割って入ってきた。

「イツセー。フリードの奴は覚えてるな?」

「あ、ああ……………」

な、なんでいきなりフリードの話を……………?

「この町にあいつがまた潜伏している」

「なっ!？」

あいつがまたこの町に!

見ると、アーシアもひどく驚いており、小猫ちゃんも表情を歪ませていた。

鵜さんと燕ちゃんはよくわかっていないのか訝しげにしていた。まあ、二人がこの町に帰って来るまえの話だからな。

「そして、奴は——エクスカリバーを持っていた」

「「「「「なっ!？」」」」」」

明日夏に部長、朱乃さんを除く皆がそのことに驚いた!

な、なんであいつがエクスカリバーを持ってんだよ!?! てか、なんで知ってたんだよ!?!

「そのはぐれ神父に祐斗が襲われたのよ」

「そこに俺が駆けつけたわけだ」

「な、なんだって!?! そ、それで、木場は!?!」

「幸い、軽傷だけで済んでる。いまは俺の家に——」

「いえ、もうあなたの家にはいないわ」

「なっ!! まさか!」

ひどく狼狽しだした明日夏を部長がなだめながら言う。

「大丈夫よ。ただ、町中をふらふらと歩いているだけよ。たぶん、頭の整理なんかをしているのでしょう」

「………そうですか」

部長の言葉を聞いて明日夏は安堵する。

にしても、明日夏あの慌てよう、気になるな。

やっぱり、木場と聖剣の関係が原因なんだろうか？

「教えてください部長! 木場と聖剣になんの関係があるんですか!」

部長は一度瞑目したあと、話し始めた。

「……祐斗が聖剣計画の生き残りということは話したわよね。祐斗以外にもエクスカリバーと適応するため、何人もの子供が育生されていたの。現在、聖剣エクスカリバーと呼ばれるものは七本存在しているからよ」

「七本!?!」

俺、それから明日夏もそのことに驚いてしまう。

見ると、アーシアや千秋たちも驚いていた。

ていうか、なんで伝説の聖剣が七本もあるんですか!?

「本来の聖剣エクスカリバーは大昔の戦争で四散してしまったの。その破片を教会側が拾い集め、錬金術で新たに七本の剣に作り替えたってわけ」

なるほど。それで七本もあるわけか。

「木場はその剣を扱えるってことですか?」

「……いや、使えないな」

「え?」

俺の問いを明日夏がバツサリと否定する。

「もし使えていたら、今頃教会の聖剣使いとして部長と敵対しているはずだ。そもそも、昨夜、部長が計画は完全に失敗したって言ってただろ」

そういえばそうだったな。

「てことは——」

「祐斗だけでなく、同時期に養成された全員がエクスカリバーに適応できなかったらしいわ。計画は失敗に終わったのよ。そして——」

「——計画の主導者は木場たちを処分した——ですね?」

「……そのとおりよ、明日夏」

処分って、まさか!?

「……おまえが考えてるとおりだ」

「——ッ!？」

「そんな!? 主に仕える者がそのような!」

ア—シアも俺と同じことを考えてたのか、ひどくショックを受けていた。目元も涙で潤ませていた。

「……悪魔は邪悪だつて言ってるくせに、自分たちがやってることのほうが邪悪じゃないのよ! それを棚にあげて!」

燕ちゃんが吐き捨てるように言った言葉を聞いて、明日夏が淡々と言う。

「——邪悪とか思っていないからだろ。それどころか、神に仕える自分たちの行いはすべて正義。木場たちの件も、主のための尊い犠牲、自分たちの正義のため、なんて本気で思ってたんじゃないか?」

なんだよそれ! なんの罪もない子供を殺すことが正義だつて!?

「……ヒトの数だけ正義があり、その正義は他人からすれば悪に見えることがある。だから、正義はときにもっともタチの悪い悪意になることがある。——兄貴の受け売りだ」

冬夜さんがそんなことを言ってたのか。いや、でもたしかにそのとおりかもな。

「……あの子を見つけたときにはすでに瀕死だったわ。でも、一人逃げ延びたあの子は瀕死の状態でありながら、強烈な復讐を誓っていた。その強い想いの力を悪魔として有意義に使ってほしいと私は思ったの」

「……それで部長が木場を悪魔に」

そして、ここ最近まではその部長の想いに応えて生きていたが、あの写真を見て、聖剣——エクスカリバーへの強い復讐心で再び心を満たしてしまったということか。

「昨日も言ったけど、しばらく見守りましょう。いまの祐斗はぶり返した復讐心で頭がいつぱいになってるでしょうから。ただ、問題はその件のエクスカリバーがこの町にあることよ」

そうだ。そのエクスカリバーをフリードが持つていて、そのフリードがこの町に潜伏している。そして、最悪なことに、そのフリードと木場が接触してしまった。復讐の対象が目の前に現れたら冷静でいられるはずがない！

「木場は本当に大丈夫なんですか!？」

「一応、使い魔に見張らせているわ。見た感じ、いまのところは落ち着いているわ」

なら、いいんですが……。

「祐斗も心配だけど、あなたたちのことも心配よ」

「フリードの奴は悪魔に関わることなら無差別に襲いかかってくるからな」

たしかに、あいつは契約しようとした人までも容赦なく手にかける。

俺の脳裏に依頼人が無惨に殺されていた光景が浮かび上がった。

「とにかく皆、今後はしばらく単独行動は控えてちょうだい。とくに夜は」

『はい!』

部長の言葉に全員が返事をしてうなづく。

「明日夏、千秋、鶴、燕。悪いけど、あなたたちにはしばらく悪魔活動をする子に付き添ってもらえるかしら。最低でも二人一組になるように」

「ええ、構いません」

「わかりました」

「はい」

「了解です」

だよな。とくにアーシアには絶対明日夏とかが付いて、最低でも三人一組になるようにしてほしいもんだ。

「それから、はぐれ神父が持つエクスカリバーの奪還のため、教会が刺客をこの町に潜伏させている可能性があるわ。そちらのほうにも気を配っておいてちょうだい」

なっ、マジか!? いや、むしろ当然か。自分たちの切り札をみすみす敵に渡したままにするわけがないし。

コンコン。

突然、部室のドアがノックされた。

「どうぞ」

「お邪魔します」

「生徒会長と副会長？」

部長が応じると、入ってきたのは会長と副会長であった。

「リアス、緊急の話があるの。いまから私の家まで付き合っただけませんか？ あそこなら誰にも干渉されることはありませんし」

会長の言葉を聞いて、部長が表情を険しくする。

「相当込み入った話のようね？」

「……ええ。相当に」

「わかったわ」



あのあと、部長と副部長は会長たちについていった。

そして、今日の部活はなしということになり、俺たち全員で帰路についていた。いまは塔城の滞在先に向かってる途中だった。

「緊急の話って、やっぱりエクスカリバーのことかな？」

帰路につくなか、イツセーが訊いてきた。

「さあな。ただ、厄介事なのは間違いないな」

「小猫ちゃんはどう思う？」

「……………別に。部長のすることには間違いはないですから」

「まあ、明日にでも部長が話してくれるかもしれないし、待つしかねえな」
「それもそっか」

とにかく、警戒しておかないとな。

ふと、塔城が口を開く。

「……………私は祐斗先輩のほうが少し気がかりです」

「……………実は俺もなんだ」

塔城やイツセーだけじゃなく、全員が木場のことが気がかりだろうな。

「部長はああ言ってたけどさ……………。なんか、少しでも助けになつてやれねえかなつて。眷属同士つつうより、友達としてさ」

「……………はい」

……………そうだな。とはいえ、何をしてやれるかというとな……………。

そんなことを思っていたら、塔城の滞在先に到着した。

「……………では、また明日」

「じゃあね、小猫ちゃん。気をつけて」

「……………イツセー先輩たちも気をつけてください」

「うん」

塔城と別れ、俺たちも家に向かう。

「……………小猫ちゃんも朱乃さんも……………」

「ん? どうした?」

イツセーが何か呟いていたので訊いてみた。

「いや、小猫ちゃんや朱乃さんにも悪魔になった事情とかあるのかなって。俺やアーシア、それから木場みたいにさ」

そういえば、合宿のとき、木場が自分たちもイツセーやアーシアと似たようなものつて言ってたな。

「——ッ!?!」

「イ、イツセーさん……」

家の近くまで来て突然、イツセーとアーシアが表情を強張らせた。

「どうした、二人とも?」

「……何か急に悪寒が……」

「……ああ。俺も感じた。おまえは感じなかったのかよ? このいやな感じ……」

「……いや」

見ると、千秋たちもそんなものを感じている様子はなかった。

悪寒? 俺たちには感じず、イツセーとアーシアだけが——ッ! まさか!

いやな予感を覚えた俺は急いでイツセーに訊く!

「いやな感じってどんなんだ!？」

「………なんていうか………体中から危険信号が出てる感じだ。………」
この感じ、前にも感じたことがある」

「………前にも?」

「アーシアと出会って、教会に案内したとき、それと、フリードと出会った——ツ?」

「イツセー!」

「母さん!」

俺とイツセー、俺たちの反応から事態を察した千秋はイツセーの家に向けて駆けだした!
!

イツセーとアーシアが感じてたのは悪魔の聖なる力に対する危険信号だ! つまり、いま、イツセーの家に教会関係者が来てる!

理由はさまざまだが、最悪なのはフリードの野郎が来てることだ!

脳裏にフリードと出会ったときに見かけた張り付けにされた男性の遺体を思い出す
!

そしていま、イツセーの家にはおばさんがいる!

クソツ! 頼む! 最悪な事態にはなるな!

俺たちは玄関のドアを開け、警戒しながら中の様子を伺う。すると、おぼさんの楽しく談笑する声が聞こえてきた。

俺とイツセーは怪訝に思いながらお互いに目を合わせると、警戒心を解かずおぼさんの声が聞こえるリビングに向かう。

リビングの様子を伺うと、おぼさんが見知らぬ三人の少女と談笑していた。

三人の特徴はそれぞれ栗毛のツインテール、前髪の一部に緑のメッシュを入れた青髪のシヨート、黒髪のポニーテールという髪型で、三人とも白いローブを着込んでいた。間違いなく教会関係者。

「あら、皆お帰りなさい。それからいらつしやい、明日夏くん、千秋ちゃん。どうしたの、皆？ 血相を変えて？」

俺たち全員、警戒心を抱いてるせいかなかなり強張った表情をしてるらしい。ま、当然警戒心を解けるはずもなく——なんて思っていると、栗毛の少女が口を開いた。

「ひゃしぐりだね、イツセーくん、明日夏くん」

「えっ？」

俺とイツセーは俺たちの名前を呼んだ少女を見るが、正直見覚えがなかった。

「あれ、覚えてない? 私だよ?」

そう言つて微笑む栗毛の少女。やっぱり見覚えが——いや、まてよ。

「えーつと……」

イツセーはいまだにわからないようだが、俺はなんとなく掴み始めていた。教会関係者で栗毛の髪……そんな知り合いは一人しかいない。

「おまえ……イリナか?」

「せいかーい♪」

「ええっ!? イリナって、紫藤イリナのことか!」

「そうだよ♪」

そう、彼女は俺とイツセーのもう一人の幼馴染みである紫藤イリナだった。おばさんが当時の写真を見せながら言う。

「この頃は男の子みたいだったけど、いまはこんなに女の子らしくなっちゃって。母さん見違えちゃったわ」

「……俺、この子のこと本当に男の子だと思ってた……」
「まあ、あのころかなりやんちゃだったし……」

「……たしかに、そこいらの男子よりやんちゃ坊主だったな、こいつは。イツセーじゃなくても間違えるほどに。……かくいう俺も、当時しばらくはそう思ってた。」

「でも、お互いにしばらく会わないうちにいろいろあったみたいだね。——本当、再会って何があるかわからないものだよ」

この言い方からして、イツセーが悪魔だということに気づいてるな……。

Life. 5 聖剣と交渉します！

その後、とくにこれといった事態に発展せず、しばらくするとおぼさんが「私はもう十分話したから」と言い、幼馴染み同士で積もる話もあるだろうと席を外した。

俺とイツセーは元シスターであるアーシアがいるのは危険だと判断し、アーシアだけを部屋に行かせ、他はリビングに残った。

俺は青髪の少女の横に置かれているものに目を向ける。見た感じ、布を巻かれた剣だ。そして、普通の剣じゃなかった。わずかだが、聖なるオーラが漏れ出ていたからだ。イツセーのほうを見てみると、イツセーもそれを見ていて、ものスゴい量の冷や汗を流していた。

おそらく、あの剣は聖剣なんだろう。あの布は鞘代わりで封みたいなものか？

そして、そのわずかに漏れるオーラがフリードの持っていたエクスカリバーのものと似ていた。つまり、この聖剣は七本あるエクスカリバーのうちの一本である可能性が高かった。

……家に木場がいなくてよかったな。もしまだいたら、確実に騒動に発展し

てたかもしれない。

「——で？」

「ん？」

「……わざわざ懐かしの幼馴染みに会うために日本に来たわけじゃないんだろ？ ——それも聖剣使いが」

俺の質問に青髪の少女が不敵な笑みを浮かべる。

「ほお、これが聖剣だと気づいているということは、キミはただの一般人というわけではなさそうだな？」

「そんなことよりも答える？ 目的はこの町にいるリアス・グレモリーか？」

俺がそう訊くと、黒髪の少女が若干オドオドしながら口を開く。

「えっと、あの、誤解しないでほしいんですけど、私たちは別にこの町にいる悪魔の方々を討伐しに来たわけじゃないんです」

「だろいな。——目的はエクスカリバーか？」

「——何？」

青髪の少女が途端に視線を鋭くして睨んでくる。

「——なぜエクスカリバーのことを？」

「仲間を襲つたはぐれ神父がそのエクスカリバーを持つてたんだよ」

「はぐれか。なるほどな」

あつさり納得してくれたな。

「ウソ！ 明日夏くん、エクスカリバーの使い手と戦つたの!？」

イリナが信じられないものを見るような視線を向けてくる。

俺がエクスカリバーの使い手と戦つて生き残つたことに驚いているのだろう。

まあ、正直言えば俺も運がよかつたなとは思つてるがな。

「で、そのはぐれ神父はどうしたんだ？」

「さあな。誰かに呼び出されてどっかに行つた。まあ、そのおかげで命拾ひしたんだけどな」

あのまま戦つていれば、誰かが死んでた可能性があつたからな。

それだけ、フリードとエクスカリバーの組み合わせは驚異だつた。

「まあいい。そろそろお暇するぞ、二人とも。いつまでも居座るわけにはいかないだろう。——それに、思わぬ拾い物もあつたからな」

そう言い、青髪の少女が立ち上がるのを見て、イリナと黒髪の少女も慌てて立ち上がる。

「あつ、待つてよ。じゃあね、イツセーくん、明日夏くん。縁があつたらまた。まあ、明日また会うと思うけど」

「えつと、お邪魔しました。あつ、待つて、二人とも！」

そして、三人はそのままイツセーの家から去っていった。



「よく無事だったわ！」

イリナたちが立ち去ったあと、とりあえずイツセーの部屋に集まったところに、血相を変えた部長が慌てた様子で部屋に駆け込み、俺たち、特にイツセーとアジアを見て安堵し、二人を抱き寄せる。

「ごめんなさい。私をもっと周囲に気を配っていれば……」。最悪のことも覚悟して戻ってきたのよ。本当によかったわ！ これからはあなたたちをもっともっと大切にするわ！」

どうやら、会長の話とはイリナたちのことだったみたいで、部長はそれを聞いていやな予想を立てて急いで帰ってきたみたいだ。

「部長」

「なあに？」

「おっばい」

「ええ、ええ、わかったわ。イツセー、あなたは本当に甘えん坊さんね」

「——つて、ストツプ！」

「ダメです！」

「ダメッ！」

「ダメ〜！」

「ダメでしょ！」

「あつ、やつぱり」

イツセーの要求を聞き入れて、自身の服に手をかけようとする部長を俺とアーシアたちとで慌ててやめさせる。

ここにはイツセー以外の男の俺もいるんですから、気をつけてください！
なんてやり取りして落ち着いたところでこの顛末を部長に話す。

「お母さまと話をしていただけ？」

「ええ。適当な理由をつけて、アーシアだけは部屋に逃げさせておいたんですけど」
「本当にただ単に懐かしの幼馴染みに会いに来てただけでした」

「まあいいわ。どういふつもりかはわからないけど、どうせ明日には会うわけだし」

そういえば、イリナが明日また会うとか言ってたな。

「明日の放課後、彼女たちが部室にやって来るそうよ。目的は私との交渉」

「それって……」

「ええ。おそらくあなたと祐斗が遭遇したはぐれ神父の持つエクスカリバー絡みなのは間違いないわね」

エクスカリバーという単語や俺の情報に対する青髪の少女の反応からしても間違いないだろうな。

悪魔を邪悪な存在と疑わない教会の者がその悪魔と交渉したいと要求してきた。となると、向こうは相当切羽詰まってるってことになるのか？

エクスカリバーが関わってくるのなら当然かもしれないが……。

とにかく、かなりの厄介事になるのは間違いないだろうな。

こうなると、一番の不安要素は木場だな……。

「部長。木場はどうしますか？」

「そうね。ただでさえ、エクスカリバーに対する憎悪を思い出したあの子にエクスカリバーの話題はタブーでしょうけど……」

「それに、教会の者の一人はエクスカリバーの使い手の可能性があります」

「なんですって!?! ソーナから聖剣使いだとは聞いていたけど、まさかエクスカリバーとは……」

俺の言葉に部長、それからイツセーたちもひどく驚愕する。

「そいつが持っていた聖剣のオーラとフリードが持っていたエクスカリバーのオーラが似ていたんです」

「まあ、エクスカリバーを奪還するというのなら、同等の武器として同じエクスカリバーを持ち出すのは当然よね。でも、だとしたらどうしたものかしら……」

部長は深く考え込み、やがて口を開く。

「仕方ないわ。どのみち話さなきやいけないでしょうし、もし知らないで遭遇でもしたら、斬りかかってしまう可能性もあるわ。だから、あの子もその場にいさせるわ。私が止めれば少しは落ち着いてくれるでしょうし、いぎつてときは、私になんとかするわ」

部長はそう言うが……大丈夫なんだろうか。

……揉め事にならなきやいいんだがな。



翌日の放課後。

いつものオカ研の部室は張り詰めた空気によって支配されていた。昨日、部長が言ったとおり、イリナたちを含んだ教会関係者が部室に訪れていたからだ。

ソファアに座る部長に向かい合う形でソファアに座る教会関係者が三人、その後ろに二人立っていた。座っている三人のうち二人は昨日イツセーの家に訪れたイリナと青髪の少女。もう一人は二十代ぐらいの男性だった。褐色肌をしており、白髪をオールバックにしていた。そして、この場の誰よりも静かに落ち着いており、相当な実力者の

貫禄を見せていた。

後ろで立っている二人のうち一人はイリナと青髪の少女と一緒にいた黒髪の少女。もう一人は俺と同じ年ぐらいの黒髪の少年で、こちらも褐色肌をしており、青髪の少女以上の鋭い眼差しで俺たちを敵意全快で睨んでいた。

イツセーたち部長の眷属たちは部長の後ろに控えており、眷属ではない俺たちは離れた場所からこれから行われる会談を見守っていた。

そして、肝心の木場だが、一応はおとなしくしてはいた。だが、明らかに憎悪の感情を隠していなかった。きっかけがあれば、すぐにでも斬りかかる姿勢だった。

緊張した空気のなか、最初に話を切り出したのは白髪の男性だった。

「このたび、会談を了承してもらって感謝する。私はアルミヤ・A・エトリア」

「私はゼノヴィアだ」

「紫藤イリナよ」

「神田ユウナです」

「……ライニー・デイランディ」

教会関係者たちの自己紹介に部長も応じる。

「私はグレモリー家次期当主、リアス・グレモリーよ。それで、神の信徒が悪魔に会いた
いだなんてどういふことかしら?」

部長の質問に白髪の男性——アルミヤ・A・エトリアが逆に問いかける。

「理由はもう察しているのではないかね?」

「エクスカリバーね?」

部長の言葉にイリナが答える。

「元々行方不明だった一本を除く六本のエクスカリバーは教会の三つの派閥、カトリック
教会本部ヴァチカン、プロテスタント、正教会がそれぞれ保管していましたが、その
うち三本が墮天使の手によって奪われました」

『——ッ!?!』

イリナの言葉に俺たちは驚く。

はぐれであるフリードが持ったことから強奪されたのだとは予想できてはいたが、まさか三本も強奪されていたとは。

「私たちが持っているのは残ったエクスカリバーのうち、『破壊の聖剣』と」
エクスカリバー・テストラクション

青髪の少女——ゼノヴィアが布に包まれた聖剣を見せるのに合わせて、イリナが腕に巻いていた紐をほどいて手に取ると、紐がうねうねとカタチを変えて一本の日本刀と化した。

「私の持つこの『擬態の聖剣』の二本だけ」
エクスカリバー・ミニッツク

イリナのエクスカリバーは名前のとおり、擬態の能力を持つてるのか。持ち運びに便利そうだな。

てことは、それぞれのエクスカリバーには名前にちなんだ固有の能力を持っているのか。

そして、木場からより殺意と憎悪が放たれる。

……頼むからおとなしくしていてくれよ。

「残る一本は正教会が管理しているのだが、すべて奪われることを危惧し死守するため、今回の奪還任務に持ち出されていない。よって、正教会からの人材派遣はない」

殺意と憎悪を撒き散らす木場を一瞬だけ一瞥し、アルミヤ・A・エトリアが残りの一本のエクスカリバーの捕捉説明をしてくれる。

「我々がこの地に来たのはエクスカリバーを奪った墮天使がこの町に潜伏しているという情報を掴んだからだ——どうやら情報は正しかったようだ」

「ええ。先日、私の下僕とそこにいる彼がエクスカリバーを持ったはぐれエクソシストに襲われたのよ。それから、そのはぐれエクソシストが教会関係者たちを殺し回っていたのだけれど——」

「ご推察のとおり、その者たちは情報収集のためにこの町に潜り込ませていた調査員だ。……おそらく、全員殺されたがね」

それにしても、なぜエクスカリバーを奪った奴らはわざわざ部長が管理するこの町に？

首謀者が墮天使なら、自分たちの領域に持っていけばいいものを。それとも、レイナーレみたいな独断専行者なのか？

「それで、聖剣を奪った墮天使、何者なのか判明しているの？」

「『神の子を見張る者』の幹部、コカビエルだ」

『——ッ!?!』

アルミヤ・A・エトリアの答えに三本ものエクスカリバーが強奪された事実以上に驚愕する俺たち。

『神の子を見張る者』は墮天使の中核組織で、その幹部であるコカビエルは聖書に記されているほどの存在だ。

……相当な大物が来たな。

「幹部クラスを五人で？ 無謀よ。それに見たところ、彼女たち以外はエクスカリバーどころか、聖剣すら持っていないじゃない？」

部長の疑問ももつともだろう。墮天使幹部のコカビエルがどれほどの存在かは知ら

ないが、少なく見積もっても俺たちが束になっても勝てる可能性が限りなく0と言っていいほどの存在なのは間違いないはずだ。

部長の言うとおり、エクスカリバーの使い手がいるとはいえ無謀に近かった。

「このヒトに関してはそんな心配はいらないよ。悔しいが、エクスカリバーを持った私とイリナが二人がかりで挑んでも相手にならないからね」

「教会の若手剣士の中でもトップクラスの实力があるのは間違いないわね」

アルミヤ・A・エトリアを見ながら告げられたゼノヴィアとイリナの言葉を聞いて、俺は改めてアルミヤ・A・エトリアを見る。

エクスカリバーの使い手にここまで言わせるとは。雰囲気からタダ者じゃないとは思っていたが、そこまでとはな。

「後ろにいる二人に関しても、エクスカリバーがなくても十分な実力者と言えるよ」

さらにゼノヴィアは神田ユウナやライニー・ディランデイについてもそう評する。

全員がそれなりの实力があるのは間違いないみたいだな。

「大した自信ね。でも、やはり無謀と思えるわ」

「かもしれないな」

部長の言葉にアルミヤ・A・エトリアは淡々と答えた。

「死ぬつもりなの？」

部長の問いにイリナが答える。

「そうよ。我々の信仰をバカにしないでちょうだい、リアス・グレモリー。覚悟の上よ。ね、皆？」

「聖剣を堕天使に利用されるくらいならこの身と引き換えにしても消滅させる」
「……………フン、そのつもりだ」

「……………覚悟はあるんですけど、本音を言わせてもらえば、できることなら、死にたくもないし、皆も死なせたくないんですけどね」

「ま、そういうことだ。相手が相手であるのでね。全員覚悟はできているというわけだ」

全員が覚悟を口にし、アルミヤ・A・エトリアはそうまとめた。

「あなたたちの覚悟はわかったわ。それで、私たちにどうしてほしいの？」

「我々の要求は——」

「簡単だ。俺たちの戦いに手を出すな——それだけだ」

「ちよつ、ライくん！」

アルミヤ・A・エトリアの言葉を遮り、ライニー・デイルランデイが高圧的に言った。

それを聞いて、神田ユウナは慌て始める。

「まあ、そういうことだ。今回の件は我々と墮天使の問題だ。ライニーの言うとおり、私たちの要求は私たちと墮天使のエクスカリバー争奪の戦いに悪魔が介入してこないこと。——つまり、今回の事件で悪魔側は関わるなということだ」

「ああもう、ゼノヴィアまで！」

ゼノヴィアの物言いに神田ユウナはさらに慌てだし、部長も眉が吊り上がる。

「ずいぶん言い方ね。私たちが墮天使と組んで聖剣をどうにかするとでも?」

「悪魔にとつても、聖剣は忌むべきものだ。利害は一致する。墮天使と手を組んでも破壊する価値はあるはず。もしそうなら、我々はあなたを完全に消滅させる。たとえば、魔王の妹だろうとな」

ゼノヴィアの言葉にアルミヤ・A・エトリアが額に手を当てて嘆息する。

「……ライニー、ゼノヴィア。キミたち、少しは言葉を選べないのかね……。いくら敵とはいえ、こちらが一方的に要求をしているのだから、少しは穏便に発言したまえ」

「俺は別にここでこいつらと戦っても問題ないぞ」

「ああもう、ライクんのバカ!?!」

「……ハア」

ライニー・デイランデイが不敵に笑みを浮かべながらの発言に神田ユウナは涙目になり、アルミヤ・A・エトリアは深いため息を吐いた。

「……申し訳ない、リアス・グレモリー。こちらにキミたちと争う気はない。だが、ゼノヴィアが言っていたことを上も危惧しているのは事実だ。実際、私もまったく疑っていないと言えば嘘になる。——もし、本当にそのつもりがあれば、我々は矛をキミたちにも向けるつもりだ」

「ならば、言わせてもらうわ。グレモリー家の名において、魔王の顔に泥を塗るようなマネは絶対にしない」

部長がそう言い切ると、アルミヤ・A・エトリアはフツと笑みを浮かべる。

「それを聞けただけで十分だ。ライニーはともかく、ゼノヴィアも、あくまで上の意向を伝えたただけだ。……物言いに関しては大目に見てくれると助かる」

アルミヤ・A・エトリアの言葉に部長も表情を緩和させる。

「まあ、いいわ。ただし、そちらが一方的に要求してきたのだから、こちらからも条件を出させてもらうわ」

「——何かね？」

「あなたが追っているエクスカリバーの使い手に私たちはすでに襲われているわ。今後は襲われなくても限らない。もし、そうなったら——」

「応戦してかまわない。なんなら、エクスカリバーを破壊しても結構だよ」

アルミヤ・A・エトリアの言葉にゼノヴィアとイリナが難しい表情をして訊く。

「………いいのかい、アルさん」

「………悪魔の人たちにそんなことを許しちゃって」

「仕方あるまい。襲撃されて命が危険にさらされても手を出すななどと言えるはずもないだろう」

確かにそうだ。もし言われたら「ふざけるな」と言いたくなる。

「それに——そちらにも少々事情もあるようだしな」

アルミヤ・A・エトリアは木場を一瞥しながら言った。

このヒトもしかして、木場が『聖剣計画』の犠牲者だということに気づいたのか？
部長の言った条件も、木場を納得させるための妥協点として提示したのだから
な。

「ただし、やむを得ない状況を除いて我々の戦いに一切介入しないことは守ってもらう。
そして、仮にエクスカリバーを破壊したとして、聖剣の芯となっている『かけら』だけ
はこちらに返還してもらう。——いいかね？」

アルミヤ・A・エトリアは視線を鋭くしながら部長に問いかけた。

その雰囲気から「もしそうしなければ矛を交えることになる」と、暗に告げていた。

「ええ、それでいいわ。了解したわ」

部長が了承したところで、部室を支配していた空気が若干和らいだ。

「時間を取らせて申し訳ない。本日は面会にに応じていただき、感謝する。そろそろお暇
させてもらうよ」

「せっかくだからお茶でもどう？」

「悪魔と馴れ合うわけにもいかないだろう。キミの眷属たちにとつても精神衛生上よくないだろうからね」

「それもそうね」

「では、失礼する」

アルミヤ・A・エトリアが部長と軽口を叩き合ったあと、ゼノヴィアとイリナと共に立ち上がり、後ろに控えていたライニー・デイランデイと神田ユウナを連れて部室から立ち去ろうとする。

フウ、どうにか揉め事にならずに済んだか……。懸念材料である木場も、いまだに殺意と憎悪を撒き散らしながら不服そうにしてはいるが、立ち去ろうとする彼らに手を出そうとはしていないかった。

だが、ここで俺はうっかりしていた。——懸念材料はもうひとつあったことを。

「——兵藤一誠の家を訪ねたとき、もしやと思ったが——アジア・アルジエントか？」

アジアを視界に捉えたゼノヴィアが立ち止まり、アジアに問いかけた。

「えっ、あつ、はい」

「まさかこんな地で『魔女』に会おうとはな」

Life. 6 聖剣と戦います！

『魔女』と呼ばれたアーシアは体を震わせていた。その単語はアーシアにとって、辛い思い出を思い出させるものだった。

「あー、あなたが魔女になったという元『聖女』さん？ 堕天使や悪魔をも癒す能力を持つたために追放されたとは聞いていたけど、悪魔なっていたとはね」

「……あ、あの……私は……」

イリナにも言い寄られ、アーシアは体を震えせながらスカートの裾をギュツと掴む。そんなアーシアにゼノヴィアはさらに無情な言葉をかける。

「しかし、『聖女』と呼ばれていた者が悪魔とはな。堕ちれば堕ちるものだ」

「てめえ！ いい加減にしろおまえ——」

「……イツセー先輩」

ゼノヴィアの言い分に思わず突っ掛かろうとするが、小猫ちゃんが手で制してくる。わかってる！　ここであいつらとやらかしたらマズイってことぐらい！　頭ではわかってるけど、沸き上がる感情が抑えられなかった！

「そこまでにして、ゼノヴィア。彼女はもう追放され、そしていまや悪魔の身。もう我々とは関係はないし、我々も彼女にとやかく言う権利はない」

「いや、そういうわけにはいかないよ、アルさん。神の信徒として、彼女を無視するわけにはいかない理由がある」

アルミヤってヒトがゼノヴィアを諫めようとするけど、ゼノヴィアは止まらず、アーシアに問いかける。

「まだ我らが神を信じているのか？」

ゼノヴィアの問いにイリナが呆れた様子で言う。

「ゼノヴィア、彼女は悪魔になったのよ」

「いや、背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら信仰心を忘れられない者がいる。その子にはそう言う匂いを感じられる」

「へー、そうなんだ。ねえ、アーシアさんは主を信じているの？　悪魔の身になってまで？」

イリナの問いにアーシアは震えながら弱々しく答える。

「……す、捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたのですから……」

それを聞き、ゼノヴィアはアーシアに聖剣を突きだす。

「ならば、いまずぐ私たちに斬られるといい。キミが罪深くとも、我らの神は救いの手を差し伸べてくれるはずだ。せめて私の手で断罪してやる。神の名のもとに」

「てめえ——」

「そのくらいにしてもらえるかしらー！」

思わず飛び出そうとするが、先に部長が言葉に怒気を含ませて割り込んだ。

「私の下僕をこれ以上貶めるのは」

「貶めているつもりはない。これは信徒として当然の情け——」

「——ッ!」

ついに我慢の限界が来た俺は小猫ちゃんの手を振り払い、庇うようにアーシアの前に立つ!

「アーシアを『魔女』と言ったな!」

「少なくとも、いまは『魔女』と呼ばれる存在だと思うが?」

ゼノヴィアはあたりまえのように言った。

「ふざけるなッ! 自分たちで勝手に『聖女』に祀り上げといて! それで少しでも求めていた者と違ったから見限るのか!?! そりやねえよ。そりやねえだろう!?!

アーシアはなあ ずっと一人ぼっちだったんだぞ!」

俺は溜まっていたものを止められなかった。ずっと、ずっと神さまに関わる者に言うてやりたかったんだ。

『聖女』は神からの愛のみで生きていける。愛情や友情を求めるなど、元より『聖女』になる資格などなかったのだ」

当然だというかのようにゼノヴィアは口にした。

クソツ！　なんだ。なんなんだ、こいつらは！

理解できねえ！　理解なんてしたくねえ！

「その神さまはアーシアがピンチだったときに何もしてくれなかったじゃないか！」
「神は愛してくれていた。何も起こらなかつたとすれば、彼女の信仰が足りなかつたか、もしくは偽りだつただけだよ」

ゼノヴィアは冷静にそう答えた。

こんな奴ばかりなのか、教会の連中は!?　ふざけんな。ふざけんなよ！

「何が信仰だ！ 神さまだ！ アーシアの優しさを理解できない連中なんか皆バカ野郎だ！」

「……キミはアーシア・アルジェントのなんだ？」

「家族だ！ 友達だ！ 仲間だ！ おまえらがアーシアに手を出すのなら、俺はおまえら全員敵に回しても戦うぜ！」

ゼノヴィアの問いに俺はハッキリとそう告げてやった！

「ふん、なるほどな」

突然、嘲笑うかのような言葉が紡がれた。その言葉を発したのは、今まで会話に参加せず黙っていたライニーと名乗った男だった。

「何かなるほどなんだよ！」

「家族、友達、仲間、なるほど、愛情や友情を求めたそいつにはうってつけのたぶらかし文句だったわけだ」

「何ッ!？」

「そう言つてそいつをたぶらかして悪魔に仕立てあげたんだろう？　悪魔の誘惑つてやつか？　悪魔らしいかぎりだ」

「ちよ、ちよつと、ライくん!」

嘲笑を浮かべながら好き勝手言うライニー。そんなライニーを神田ユウナがあわあわしながらも諫めようとする。

「そんなんじやねえ！　俺はアーシアと友達になりたいって思つただけだ!」

「そりや、悪魔を癒す力は何がなんでもほしいだろうからな」

「そんなの関係ねえ！　悪魔もシスターも癒しの力なんかも関係ねえ！　俺はそんなも
の抜きでアーシアと友達になろうとしたんだ!」

「そう言つてたぶらかしたんだろう？　悪魔はそういう口がうまいからな」

なんなんだよ、さつきからこいつはよ!?

「ん？　なんだ。おまえらもこいつにやられた口か?」

そう言ったライニーの視線の先には、スゴい形相でライニーを睨んでいる千秋、鶴さん、燕ちゃんがいた。三人とも、明らかに怒っていた。

「哀れだな。悪魔に魅了されるなんてな。一体どんな手口にやられ——ッ!？」

ライニーの言葉を遮って拳が打ち込まれた!

ライニーは驚きながらも、的確に拳を掴んで受け止める。

「明日夏!？」

拳を打ち込んだのは、明日夏だった。

「……………なんのつもりだ?」

「……………それはこっちのセリフだ」

ライニーの問いに明日夏は拳を突き出したまま答える。

「連れはアーシアを貶めたかと思えば、くだらねえ理由で斬ろうとする。おまえはおまえでいきなり好き勝手言ってる。イツセーを侮辱する。．．．いい加減、我慢の限界なんだよ！」

相当頭に来ている様子で明日夏はゼノヴィアとライニーを睨む。

「アーシアに手を出し、その口も黙らせねえのなら、俺も黙ってねえぞ！」

明日夏はゼノヴィアとライニーを睨みながら、拳を突き出して言った。

「そつちがその気なら受けてたつよ。先ほど盛大に喧嘩を売られたからね」
「俺も別に構わないぜ」

ゼノヴィアもライニーやる気満々だった。

「ちよっ!? 二人とも——」

「止めなさい! 二人とも——」

「——ちようどいい。僕も混ぜてもらおうか」

神田ユウナと部長が俺たちを止めようとするけど、木場がその制止の声を遮った。

「……誰だキミは?」

「キミたちの先輩だよ。——失敗作だったそうだけどね」

ゼノヴィアの問いかけに木場は不敵に笑みを浮かべて答えた。



「……我ながら短慮な行動だった。」

つい先程の自分の行動を反省しながら、現状を確認する。

イツセーは本来、言いたいこと言いたかっただけで、実際にやり合うつもりはなかったみたいだ。

俺も止められたら一応は引き下がるつもりだった。

だが、木場が俺たちの口論に乗っかって教会の連中に殺意全快でケンカを売りやがった。それをゼノヴィアとライニーも買いだして一触即発の空気となって、完全に収まりがつかなくなってしまった。

それを察したアルミヤ・A・エトリアが部長にお互い上に報告しない非公式の手合わせを渋々ながら提案してきた。部長もその提案に渋々乗り、俺、イツセー、木場のオカ研側とゼノヴィア、イリナ、ライニーの教会側の対決と相成った。

対戦カードは俺とライニー、イツセーとイリナ、木場とゼノヴィアという形となった。そして俺たちはいま、球技大会の練習をしていた場所に立っていた。俺から少し離れたところにはイツセーと木場がおり、さらに俺たちと対峙するようにゼノヴィア、イリナ、ライニーがいた。その俺たちからさらに離れたところに残りのオカ研のメンバーとアルミヤ・A・エトリア、神田ユウナがいた。

そんな俺たちの周辺を囲い込むように紅い魔力の結界が張られる。これで多少の無茶をしても周囲に影響が出なくなるらしい。

「では、始めようか」

ゼノヴィアの言葉を皮切りに教会側の三人がローブを脱ぎ、黒い戦闘服姿になった。

ゼノヴィアとイリナのは体の線が浮き出でて、正直眼のやり場に困るものだった。ライニーのは俺の戦闘服のコートがないバージョンって感じで、グローブが手首の先まで覆うタイプだった。

「上にバレたらお互いマズいわね！」

そう言いながらも人数合わせの割に結構ノリノリなイリナは腕に巻いている紐を掴むと、紐は形状を変化させ、日本刀の形になった。

「殺さない程度に楽しもうか」

ゼノヴィアの持つ剣の布が取り払われ、破壊の名前に恥じない破壊力重視と思われる刀身が太い剣が現れた。

「フン」

ライニーはグローブの両手首の部分を開く。すると、そこから腕にかけられた十字架

が現れる。

次の瞬間、十字架が光り輝き、十字架がグリップの部分に十字架をあしらった刻印がされた白銀の拳銃に変わっていた！

「じゅ、十字架が!?!」

十字架が拳銃に変化したことに元シスターであるアーシアが驚愕していた。

「武器に変化する十字架——聞いたことあるな。確か、『武装^ク十字器^{ロス・ギア}』って名前だったか?」

聞いた話によると、最近になって教会が^{セイクリッド・ギア}神器を参考^{セイクリッド・ギア}に開発した、言わば、人工の^{セイクリッド・ギア}神器と呼べるもの——それがあの聖なる武器に変化する十字架『武装^ク十字器^{ロス・ギア}』だった。

「よく知ってるじゃねえか」

ライニーは銃口をこちらに向ける。

武装十字器は、エクスカリバーなどの聖剣と比べれば、性能は大きく劣るし、人工のセイクリッド・ギア神器と呼ばれながらも、その神器セイクリッド・ギアみたいな能力はないらしい。けど、誰でも扱え、

持ち主の扱いやすい武装に変形するという特徴があり、利便性においては圧倒的に優れていた。そして、悪魔などの聖なる力を弱点として存在にとつては十分に驚異となる代物でもあった。

何より、使い手によつては、既存の聖剣や神器セイクリッド・ギア並みに性能を發揮するらしい。

そして、エクスカリバーの奪還という任務でやつて来たこいつだ。それぐらい、いや、それ以上の実力はあると想定して臨むべきだな。

そう分析しながら戦闘服に着替え、ライトニングスラッシュ雷刃ライトニングスラッシュを手に構える。

やめるつもりだったとはいえ、あいつらの言葉に腸が煮えくり返っているのも事実だった。木場ほどじゃないが、やる以上はぶちのめす!



うーん、明日夏の奴、止められたらやめるつもりだったとは言っていたけど、結構やる気満々じゃねえかよ……。木場もはなつからやる気満々——ていうか、相手

を殺しそうな勢いだぞ!?

おいおい、殺し合いは禁止だぜ？ わかってんのか、木場？

「……………ふふふ」

当の木場は不気味なほどの笑みを浮かべていた。薄ら寒くなるほどの笑顔だ。

「……………笑っているのか？」

「ああ。倒したくて、壊したくて仕方なかった物が目の前に現れたんだからね——」

ゼノヴィアの問いに木場が答えた瞬間、木場の周囲に複数の魔剣が出現した。

「……………『魔剣創造』ソード・パースか。思い出したよ。聖剣計画の被験者で処分を免れた者がいたという噂をね。それはキミか？」

今度のゼノヴィアの問いに木場は答えない。ただただ、殺気を向けているだけだ。

「兵藤一誠くん！ 士騎明日夏くん！」

いきなり紫藤イリナがなぜか瞳をキラキラさせながら俺と明日夏のことを呼んだ。

「な、なんだよ？」

俺も明日夏も訝しげにイリナのほうを見る。

「再会したら懐かしの男の子たちの一人が悪魔になっていただなんて!? もう一人の幼馴染も悪魔と一緒に行動しているだなんて!? なんて残酷な運命のいたずらあ！」

「はあ？」

イリナの言葉に俺も明日夏も思わず呆気にとられてしまう。

「聖剣の適正を認められ、はるか海外に渡り、晴れてお役に立てると思ったのに!? ああ、これも主の試練？」

悲しそうに言ってるけど、言葉に反して振る舞いがぜんぜん悲しそうじゃないよ！

「でも、それを乗り越えることで私はまた一歩、真の信仰に近づけるんだわあ！ ああああ
！」

ちよつと、この子、何言ってるの!? 完全に自分に酔っちゃてるよ！ 関わってはい
けないタイプの子になっちゃてるよ!?

「さあ、イツセーくん、明日夏くん！ 私がこのエクスカリバーであなたたちの罪を裁い
てあげるわあ！ まずはイツセーくんから！ アーメン！」

そう言つて、イリナは勢いよく斬りかかってきた！

「なんだか、わかんねえが、『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』ッ！」

『ブーストBoost!!』

籠手を出現させて、斬りかかってきたイリナの斬撃なんとかかわすけど、制服が少し斬られた!

あつぶね! 何が手合わせだ! ぜんぜん本気じゃねえか!?

「イリナちゃん!? これ手合わせ! 手合わせだよ!」

神田ユウナも慌てて叫んでいた。

仲間にも言われてんぞおい!

「あああ、ひさびさの故郷の地で昔のお友達を斬らねばならない! なんて過酷な運命!」

ダメだ、この子!? 完全に自分の世界に入っちゃてるよ!

「……イツセー。いまのイリナに何を言っても無駄だ、諦めろ。とりあえず、さつき言ったとおり、必死で避ける。悪魔のおまえはかするだけでも大ダメージだからな」

バトル前に明日夏に言われたことを思い出し、気を引き締める。

聖剣に斬られた悪魔は光の攻撃を受けたときと同様に完全に消滅する。下手すると、光の攻撃以上のダメージが発生するらしい。絶対に斬られたくないな！

ブリステッド・ギア
「『赤龍帝の籠手』か。アーシア・アルジェントの『聖母の微笑』といい、キミの『魔剣創造』といい、異端の神器がよく揃ったものだ」

ブリステッド・ギア
俺の『赤龍帝の籠手』を見て、ゼノヴィアが興味深そうに呟いていた。

「……僕の力は同士の恨みが産みだしたものでもある。無念の中で殺されていった者たちのね！」

木場は地面に生えた魔剣を一本手に取り、ゼノヴィアに斬りかかる。

「この力で持ち主と共にエクスカリバーを叩き折る！」

木場は一心不乱に魔剣を振るうけど、ゼノヴィアは易々と木場の攻撃を防いでいた。すると木場は『騎士』の特性の足の速さで縦横無尽に駆け回ってゼノヴィアに斬り込

む。

だけど、神速の動きによる四方八方から来る斬撃をゼノヴィアは最小の動きだけで的確に受け流していた。

木場の速さがぜんぜん通用してねえ!? マジかよ!

「クソツッ!」

明日夏の苦悶の声が聞こえ、明日夏のほうを見る。

ライニーが両手の拳銃を絶えまなく撃ち、撃ち出された弾丸を明日夏は必死に動き回って避けていた。でも、ときどき避けきれずに当たり、苦悶の表情を作っていた。当たっても、着ているコートのおかげで傷ができることはなかったけど、衝撃や痛みまで防いでいない様子だった。そのせいで、明日夏はいまは完全に避けることに徹していて、攻めあぐねていた。

木場と明日夏、あんなに強い二人が、一向に攻めきれずにいた。それだけ相手がめちゃくちゃ強いってことかよ!

「イツセーくん。よそ見してる余裕なんてあるのかな?」

イリナの言葉を聞こえ、慌ててその場から飛び退くと、さつきまで俺がいたところにイリナが斬り込んでいた！

クソツッ！ イリナだつて弱いはずはねえ。他の二人と同じくらい強さなはずだ。ちきしよう、実戦経験が少ないうえに、聖剣との戦いが初めてだから、どれくらい倍加すればいいのか目安がわからん。さつき明日夏に言われたとおり、できるだけ避けて、上げれるだけ上げるしかねえ！

「こうなつたらやるしかねえ！ いや、やっておかないと気がすまねえ！ いや、やらねえと損だ！」

『ブースト!!』

——隙を見て、洋服崩壊かましてやる！

紫藤イリナ。昔は男の子だと思つていた。けど、いまはその体のラインがはつきりわかる戦闘服から見てわかるとおり、すっかり美少女に成長して、出るところが出ていい体つきをしているぜ！

成長したその裸体、いまからたつぷり挿んでやるぜ!

「……な、なあに、そのいやらしい顔?」

怪訝な顔つきになるイリナ。ふふふ、わかるまい。俺が何を考えているのかを――。

「……気をつけてください。イツセー先輩は手に触れた女性の服をすべて消し飛ばすことができます」

「服を!」

小猫ちゃんの言葉を聞いて、イリナと神田ユウナが驚愕し、神田ユウナは反射的に自分の着ているものを守るように自身の体を抱いていた。

ていうか――。

「小猫ちゃん! なぜに敵にネタバレしますか!」

抗議の眼差しを向ける俺に小猫ちゃんはズバリと言う。

「……………女性の敵です」

……………あう！……………痛烈なツツコミ！

「なんて最低な技なの、イツセーくん!? 悪魔に堕ちただけでは飽きたらず、心までもが邪悪に染まってしまふなんて！ 神よ！ この罪深き変態をお許しにならないでくださいー！」

悲哀に満ちた表情でお祈りをあげるイリナ。

そんなかわいそうな奴を見る目で見えるな！

「なるほど。性欲の塊か。欲望の強い悪魔らしい行動だと私は思うよ」

ゼノヴィアは俺に軽蔑な視線を向けて嘆息しながら言った。

「ゴメン」

なに謝ってんだ、木場あああ!

「悪魔らしい限りだ。そんな悪魔のために戦うなんてな」

ライニーが俺に侮蔑の視線を向けると、呆れたように明日夏に言った。

「いや、イツセーの性欲の強さは悪魔になるまえからだ」

それフォローなのか、明日夏!?

「……お、お多感なんだね」

神田ユウナがなんとも言えない表情で苦笑いを浮かべていた。

そうなんです! 多感な時期なんですよ!

「……個人の性癖にとにかく言う気はないが………戦闘中にそれを持って

くるのはどうなのか。ある意味、肝が座っているというか……」

アルミヤ・A・エトリアさんは呆れた表情で言った。

「……とにかく、最低です」

小猫さまがまとめるように言った。エロくてゴメンね！

そんななんとも言えない空気の中、木場は手に持っていた魔剣を地面に刺し、別の魔剣を二本手に取った。

「燃え尽きろ！　そして凍りつけ！」

片方の魔剣からは業火が渦巻き、もう片方の魔剣からは冷気と共に霧氷を発生させ、木場は二刀流でゼノヴィアに斬りかかる。

「甘いッ！」

ゼノヴィアの一振り、木場の二本の魔剣を粉々に砕いてしまう!

「はあッ!」

ゼノヴィアは聖剣を器用にくるくる回したかと思うと、高々と持ち上げて天にかざし、地面に振り下ろした。

ドオオオオオオオオオオオンツツ!

突然、足場が激しく揺れて、地響きが発生する!

体勢が崩れ、俺はその場で膝を着いてしまい、目の前のイリナも尻餅を着いていた。さらに周囲に土煙が巻き起こり、俺にも土がかかってきた。

「なっ!?!」

土煙が晴れ、視界に入ってきた光景に俺は我が目を疑った。

『破壊の聖剣』の名は伊達じゃない！』

ゼノヴィアが振り下ろした聖剣を中心に巨大なクレーターが生みだされていた！
一撃でこんなクレーターを作ったのかよ!? 剣の一振りで!?

「……七つに分けられて、なおこの破壊力……。フツ、七本全部消滅させるのは修羅の道か……」

木場はこの光景を見て、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべるけど、その瞳に映る憎悪の影はいまだに消えていなかった。

「はあ、ゼノヴィアったら。突然、地面を壊すんだもの……」

立ち上がったイリナは土を払いながら毒づく。

「さてと、そろそろ決めちゃいましょうか!」

再び聖剣をこちらに向けて斬りかかってくるイリナ。

『ブースト
Boost!!』

よし! いまだ!

『エクスプロージョン
Explosion!!』

俺の中を力が駆け巡る。十分かどうかわからないけど、ここで攻める!

「ドレス・ブレイク
洋服崩壊!」

斬り込んでくるイリナに俺も飛びかかる!

「ツ!?! 卑猥な!」

俺の目的に気づいたイリナは慌てて俺の突進を避ける。

「まだまだッ！」

「イヤッ！」

「ふッ！」

「やめてッ！」

「でああッ！」

「ダメーッ！」

チッ！ 身軽だな！ だが諦めん！ 変態でもいい！ 俺はたくましく生きていき
たいんだ！

イリナの服を弾け飛ばすのに夢中になっていた俺は、イリナの動きに徐々に順応して
いった。

「イツセーくんの動きが急にしなやかかつ機敏に！」

「イリナちゃんが一方的なんて!？」

俺の動きのよさに驚く朱乃さんと神田ユウナ。

「ヒトは何かに夢中になると、自然と集中力が高まる。集中力が高まれば、動きのパフォーマンスもまたよくなる——とは言うが……」

「……………単なるスケベ根性です」

アルミヤ・A・エトリアさんの解説を聞いて、小猫ちゃんがバツサリと告げた。

エロくて、ゴメンなさいね！ だけど、いまの俺を止められるの者などいるはずがない！

「なんなのもう！ ヒツ?!」

逃げ回るイリナだったが、ついにその動きを捉え、逃げる方向に先回りした！

「俺のエロを甘く見るなアアツ！」

指をわしやわしやと動かし、スケベな笑みを浮かべながら間合いを詰め——ダイブす

るように彼女へ飛び込んでいく！
イリナに手が届こうとした瞬間――。

「――ッ！」

彼女は咄嗟の動きで身を屈めてしまった！

勢いが止まらない俺はそのまま前方に飛んでいき、結界を抜けてイリナの後方にいた
鶴さんと燕ちゃん、小猫ちゃんのもとへ――。

「あ」

そして、鶴さんと小猫ちゃんの肩へ俺の手がそれぞれ触れてしまい――。

「きゃっ!?!」

「わっ!?!」

燕ちゃんを勢いそのまま押し倒してしまった！
むろん、手は触れている。

次の瞬間、三人の制服が弾け飛んだ。そう、下着すら容赦なく。三人は丸裸となつていた。

鶴さんの部長や朱乃さんに並みの大きさを誇る生乳、小猫ちゃんのロリロリで小ぶりな生乳、同じくらい小ぶりで、小猫ちゃんとは違った魅力がある燕ちゃんの生乳が俺の眼前であらわになる。

それを目にした俺の鼻から勢いよく鼻血が噴き出た。

ありがとうございます！——つて、そうじゃなくて!?

全裸の年下の幼馴染みを押し倒しているこの絵面はいろいろとマズい!

「わあー! ゴメン、燕ちゃん!」

慌てて起き上がる俺!

当の燕ちゃんも全身を真っ赤にさせていて、いまにも火が噴き出そうな様子だった。

そして、なぜか姉である鶴さんは怒るでもなく、なぜか目を輝かせて俺と燕ちゃんのことを見ていた。なんで?

「とりあえず、ありがとうございます!」

とりあえず、声に出してお礼を言う俺。

「いや、違う！　これは——」

慌てて弁明しようとした瞬間、俺は突然の浮遊感に襲われた。

「……………どスケベ」

怒った小猫ちゃんに殴り飛ばされたのだ。

そのまま重力に従い、俺は地面に叩きつけられた。

ちよ、超痛い……………。

「あのね、これは天罰だと思うの。だから、こんな卑猥な技は封印すること、いい？」

倒れ伏している俺にイリナが棒か何かでつつきながら言ってくる。

「………だ………」

「はえ?」

「………いや、だ………! ……魔力の才能をすべて注ぎ込んだんだ………。女子の服が透明に見える技とどっちにするか、真剣に悩んだうえでの決断だったんだぞ………! もっと、もっと女の子の服を弾け飛ばすんだ! それで、そして、そしていつか、見ただけで服を壊す技に昇華するまで俺は戦い続ける!」

「思いの丈を高々と宣言しながら気合を入れて俺は立ち上がる!」

「………そんなことまで戦えるなんてどうかしてるわ!」

「………ある意味スゴいね………」

俺の宣言にイリナは異質なものを見る目をし、神田ユウナはなんとも言えないような表情を浮かべていた。

「エロッそ力! エロッそ正義だあッ!」

俺は体勢を低くして、一気に飛び込む。
イリナはそれを軽くジャンプして避ける。

「でやあああッ！」

そこへアッパー気味に攻撃するが、それも後ろに飛んで躲された。

「ふッ！」

「——ッ！」

イリナが横なぎに聖剣を振るってくるが、咄嗟にそれを籠手でガードする！

「あなたを少し見くびっていたようね。いい動きだし、いまのもいい判断よ。避けようとしたら確実に避けきれなかったはずだもの。悪魔のあなたに聖剣の一撃はかすり傷でも致命的なものですもの。その瞬間に勝負はついていたでしょうね」

そ、そうだったのか？ 最初は避けようと思ったんだけど、体のほうが咄嗟にガード

してしまったんだ。結果的にそっちのほうがよかったか。

「その様子じゃ、体が咄嗟に反応したって感じね？ どうやら、避け方に関して徹底的によく鍛えられているみたいね。その経験が体が咄嗟に反応させたのよ」

そういうことか。鍛えてくれた明日夏に感謝だな。ホント徹底的に容赦なく打ち込んできたからな。必死に避けようと頑張ったよ。

「でも——」

『Rリeセツsトeトt』

「——ツ!?」

『ブリステットド・ギア』の能力解放の時間が終わってパワーアップが解除され、体中から力が抜けていく！

「実戦経験の少なさがあだになったようね。いまの戦い、あと一度パワーアップしていたら、いい勝負になったはずよ。——あなたの敗因は、相手との力量差がわからずにセイクリッド・ギア神器を使っていること。読み間違いは真剣勝負の場では致命的よ」

クソツ！ いけるかと思ってたけど、経験のなさがここできたか！

「悪いけど、もうパワーアップの時間は与えないわ。急な力の減少に体の動きも鈍っているでしょうしね」

イリナの言うとおり、たぶんパワーアップの時間はもう与えてもらえないだろう。

「やあああッ！」

イリナはさつきより素早い動きで斬り込んでくる！

けど——。

「なっ!?!」

イリナが驚愕の表情を浮かべた。

その原因は俺の左手。俺の左手はイリナの聖剣をガッチリと握っていた。

「おりやあああッ!」

「——ッ!?!」

武器を捕まれて動きが止まった隙を逃さず、イリナに向けて拳を打ち出す!

「くっ!」

だけど、拳が当たる瞬間に聖剣が紐の形に変わってしまった! 擬態の能力か!

紐状になった聖剣は俺の手からするっと抜けてしまう。イリナはそのまま後方に飛び、俺の拳はイリナにかすっただけで大してダメージを与えられず、距離を取られてしまった。

イリナの表情はいまだに信じられないものを見るようなものだった。

「どうして?! どうして、悪魔であるあなたが聖剣を握れるの?!」

そう、イリナが驚愕したのは悪魔である俺が聖剣を握ったことだ。悪魔は聖剣に触れるだけでも危険。それを握るなんて自殺行為である。

「悪魔なら聖剣に触れることさえできない」

「そうよ! いかにかに『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアがあろうと、聖なる波動を完全に防ぐことなんて——」

「だけど、悪魔の腕じゃなかったら?」

「えっ!?!」

そう、俺の左腕は悪魔の腕じゃない——ドラゴンの腕だ。だから、悪魔の弱点は関係ない。ライザーとの戦いのにときに使った戦法を応用したんだ。

もつとも、このドラゴンの腕で聖剣を掴むつてのを教えてくれたの明日夏なんだけだな。

『強化が解除されたら、イリナは間違いなくパワーアップの時間を与えないために速攻

で決めてくるはずだ。だが、そこにつけ入る隙がある。あとはおまえ次第だ」

ホント、避け方といい、いまのといい、明日夏には感謝だぜ。

「なるほどね。たしかにドラゴンの腕になっているのなら、聖剣の波動も効果は薄いわ。いま思えば、さつきガードされたときに疑うべきだったわ。イツセーくんのクセに生意気よ!」

ドラゴンの腕のことを説明してやったら、ムスツとした表情を作るイリナ。でも、すぐに余裕そうな表情に戻す。

「でも、せっかくのチャンスも逃したわね。そうとわかっていれば、もう驚かないわ」

「いいや。もう勝負はついたぜ」

「えっ!?!」

イリナは俺の言葉に訝しげな表情になる。

イリナの一撃は悪魔である俺にとってかすただけでも致命的。だけど、それは俺も

同じだぜ！

俺の必殺技は触れるだけ発動条件が整う。たとえそれがかすただけでも！

「弾けろ！ ドレス・ブレイク 洋服崩壊！」

刹那、イリナの着ていた戦闘服がバラバラに弾けた。

おお！ 服の上からでもわかっていたが、見事なプロポーション、そして、おっぱい！ 脳内メモリーに保存保存！

「いやあああああつ!?!」

自身の服が弾け飛んだことにイリナは一瞬だけ呆けるけど、すぐに現状を認識して、悲鳴をあげてうずくまった。

「わわわッ!? イリナちゃん！」

神田ユウナが慌ててイリナに駆け寄り、自分の着ていたローブをイリナに着せてあげ

た。

神田ユウナもイリナやゼノヴィアと同じ戦闘服を着ていて、その体のラインがよくわかる。

おお！ この子もイリナやゼノヴィアに負けず劣らずのなかなかのプロポーション！

そんな神田ユウナがなんとも言えないような表情を作りながら訊いてきた。

「あ、あのー……」

「ん？」

「さすがにこんな状態じゃ、イリナちゃんも戦えないと思うから、これ以上の戦闘は……」

「ああ。いいよ。もともと、俺は言いたいことを言いたかっただけで、正直、やり合う気はなかったんだよ」

それに、大変素晴らしいものを拝ませてくださいましたからね！

脳内に保存したイリナの裸体を思い出して、つつい笑みを浮かべてしまう。

「最低よ！ イッセーくん！」

それを見て、涙目で恨めしそうな視線を向けて非難するイリナ。ふふふ。いまの俺にそれは心地のよいものにしか感じられなかった。

「……………最低です」

あう、小猫さまの容赦ないツツコミ。

というわけで、俺とイリナの戦いは無効試合みたいな感じで終わった。

「はあああああああッ！」

木場が気合を発し、手元に何かを創りだしていく。それは巨大な一本の剣だった。その大きさは木場の身長をはるかに越していて、二メートル以上はあった。

「その聖剣の破壊力と僕の魔剣の破壊力！ どちらが上か勝負だ！」

木場は巨大な魔剣を手にゼノヴィアに斬りかかる。

「——こつちも勝負ついたね」

「——ええ。選択ミスよ」

木場の行動に神田ユウナとイリナが淡々と告げた。
どういうことだ？

「——残念だ」

ゼノヴィアは酷く落胆した表情をしていた。

「でやあッ!」

木場は勢いよく魔剣を振るうけど、ゼノヴィアは難なくそれを躲し、聖剣の鏢と思しきところを木場の腹部に抉り込ませた!

「ガハツ!？」

それだけでも相当な破壊力なのか、木場は血を吐き、その場に崩折れた。

「……………キミの武器は多彩な魔剣とその俊足だ。巨大な剣を持つには力不足な上に、自慢の動きまで封じることになる。そんなことすら判断できないとはな」

倒れた木場を一瞥して淡々と告げるゼノヴィア。

「たとえ、彼がああのだ大な魔剣を扱えるだけの筋力を持っていたとしても、創造系のセイクリッド・ギア神器で創られた魔剣とオリジナルの聖剣とじゃ、強度も能力も比べるまでもない差があつたから、打ち合いになつてもゼノヴィアの圧倒だったよ」

神田ユウナは淡々と解説してくれた。

どう転んでも、木場がああのだ大な魔剣を創りだした時点で勝負は決していたのか。

「……………ま、待て……………」

木場から離れようとするゼノヴィアに木場は手を伸ばすけど、勝負が決しているのは誰が見ても明らかだった。

「次はもう少し冷静になって立ち向かってくるといい。『先輩』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ・・・・・・・・」

ゼノヴィアの言葉に木場はただただ憎々しげに睨むだけだった。

Life. 7 意地、ぶつけます！

「さて、残るはライニーのほうか」

ゼノヴィアが明日夏たちのほうに視線を向けると、釣られて俺もそちらに視線を向ける。

「………はあ、はあ、はあ、はあ………！」

「ふん」

そこには息を切らして刀を構える明日夏と余裕の佇まいをして拳銃を構えるライニーがいた。

明日夏は額からスゴい量の汗を流しており、表情から疲労も感じられた。戦闘服もボロボロだった。対して、ライニーは涼しそうな表情であり、いまだに無傷だった。

「ふむ、こちらもそろそろ決着がつきそうだね」

ゼノヴィアの言うとおり、どう見ても、明日夏の敗北で決着がつきそうな状況だった。あの明日夏が手も足もでないなんて!?

「明日夏がああなったのも、相性が悪かったのもあるわ」
「相性、ですか?」

部長の言葉に俺は訝しげに訊き返す。

「明日夏の戦い方は超至近距離での接近戦。小猫と同じタイプね。でも、それに対して相手は銃使い。しかも、狙いは正確で、なおかつ二挺拳銃なのを活かして、確実に明日夏の逃げ道を塞いでいるのよ。そのせいで、明日夏は相手に近づけない。裕斗みたいな速さもないから、動きで翻弄することもできない。完全にジリ貧状態よ」

部長の解説を聞いて、俺は改めて明日夏のほうを見る。

明日夏はもう完全に満身創痕といった感じだった。でも、その目はいまだに諦めの色

は見えなかった。

「もう決着ついただろうが。なぜ、そんな状態になっても戦う？」

ライニーの問いに明日夏は鼻で笑う。

「ダチを侮辱された——理由はそれで十分だろうが」

明日夏はなんてことのないように言った。けどまあ、俺だって、ダチを侮辱されたら、侮辱したそいつになにがなんでも一発かましたい理由はわかる。

「そいつは悪魔だろうに？」

ライニーは俺のことを一瞥して、再度明日夏に訊いた。

「関係ねえよ。悪魔になってようがなつてなかるうが、イツセーがダチであることに代わりねえよ」

答えた明日夏が今度はライニーに訊く。

「随分と悪魔を嫌悪してるな? 敵だから、つてだけじゃねえな。悪魔によつて人生を狂わされたくちかか?」

明日夏の問い返しにライニーは一瞬だけ表情を歪ませる。悪魔に人生を狂わされたつて、どういうことだ?

「凶星か?」

「——おまえには関係ないだろう」

歪ませた表情はもとに戻ったけど、明らかにライニーの声音は不機嫌そのものだった。

「そう訊くつてことは、おまえも把握はしてるんだな。悪魔がどんな存在なのか」

ライニーは俺たちのことをもう一度一瞥して当然のこのように言う。

「傲慢で強欲、人間なんて道具にしか思っていない。それが悪魔だろ？ とくに純血の上級悪魔なんてそんなんだろ？」

な、何言ってるんだよ、こいつ!?

「てめえ、ふざけたこと言ってるじゃねえぞ！ アーシアだけじゃなく、部長のことまで侮辱するならマジで許さねえぞ！」

ライニーの言葉に純血の上級悪魔である部長のことを侮辱されたと思い、思わず殴りかかりそうになる。

部長はそんなヒトじゃないぞ！ ソーナ会長だって、部長の親友だったことと、匙の様子からそんなヒトじゃないのはわかるし、ライザーだって鼻につく奴だったけど眷属から慕われてる感じだった。これ以上、ふざけたことをぬかすならマジで許さねえ！

叫ぶ俺を見てライニーは嘆息する。

「どうやら知らないみたいだな? なら、教えてやるよ。おまえが見てきた純血の上級悪魔はあくまで例外みたいなもんだ。ほとんどはさつき言ったとおりの奴らだ。とくに転生悪魔に関してはな」

転生悪魔に関しては?

「自分の下僕が自身のステータスになるから能力がある奴を手段を選ばず、言葉巧みに不利な条件、不本意な形で悪魔に転生させる奴。中には本人の意思を無視して無理矢理悪魔に転生させる奴もいるんだからな」

なっ!? ライニーの言ったことに絶句してしまふ。

「……残念ながら、彼が言ったことは事実よ。実際にそういうやりかたで下僕を増やす上級悪魔は多いわ」

部長も苦虫を噛み潰したかのような表情でライニーの言葉を肯定した。

マジかよ……。下手すると、『赤龍帝の籠手』ブリスケットキアを持つてた俺も、そんなふう

下僕にされてたかもしてなかったのかな？ つくづく、部長の下僕になれて幸せだぜ！

「ま、転生悪魔になった奴もなった奴で急に得た力に溺れて問題を起こしてるがな」

はぐれ悪魔のことを言ってるのか？

「そいつも、いずれそうなるんじゃないかねえのか？」

ライニーは俺のことを見ながら、明日夏にまた問いかけた。

なるかよ！ あんなバケモンによ！

「ましてや、そいつは赤龍帝だろ？」

なんだよ、赤龍帝だからなんだってんだよ？

「……ずいぶんとごたくを並べるが、つまり、おまえはこう言いたいのか？ 歴

代の赤龍帝は皆、その強大な力に溺れて暴走した。悪魔になったイツセーはさらに力に

溺れて暴走しやすいと? それではぐれ悪魔になると?」

なっ!? 歴代の赤龍帝って、皆、力に溺れて暴走したのかよ!? 俺もそうなっちまうって言うのかよ!?

「まあ、もつと悲惨なのは、その暴走に巻き込まれる奴だな。実際、歴代の赤龍帝に関わった者はろくな生きかたができなかつたみたいだからな」

!? ライニーの言葉にショックを受ける。せ、赤龍帝って、そんなに危険な存在なのかよ!

「……だから、いまのうちにイツセーと縁を切つとけっか?」
「ま、おすすめはするかな」

それを聞いて、俺は明日夏のほうを見るけど、明日夏は心底呆れた様子で嘆息していた。

「随分とバカらしいこと訊くんだな」

「——何？」

「歴代の赤龍帝の顛末はもちろん知ってる。だから何だ？ 歴代は歴代だろ？ イッ

セーはイツセーだ」

「そいつが力に溺れないっていう根拠はあるのか？」

「根拠なんて別にないし、そもそもいらねえよ。ま、あえて言うならダチだからか」

明日夏の言葉を聞いたライニーは信じられないものを見てるかのようだった。

「………そんなの根拠でもなんでもないだろうが」

「だろうな。ただダチを、イツセーを信じてるだけだからな」

明日夏はなんてことのない、あたりまえのように言った。

「………なぜそこまで言える？ さつきからそいつの言動を見ても、ろくな奴には

見えないが？」

「まあ、たしかに。そいつはどうしようもないほどバカで、ドスケベで、教室で堂々とエ

口関連のものをさらすわ、覗きはするわ、女性の服を弾け飛ばす技を開発するわと、悪いところをあげれば、キリがないかもな」

ボロクソ言うなあ、おい！ いやまあ、事実ですけど……。

「けどそれはあくまで、表面的なものにすぎねえよ。そいつの本質は、どうしようもないほど、いい意味でバカな奴さ」

あのー、明日夏さんや。それ、フォローしてるんですか？

「ま、他人のおまえにはわからないだろうし、悪魔だからわかるつもりもないんだろうかな」

不敵に笑みを浮かべる明日夏。

「……仮に——」

「おまえが言うようなことになったら、なったらでそんときだ。ぶん殴って、目を覚まさ

せる。やることはそれだけだ」

ライニーの言葉を遮って、不敵に笑みを浮かべながら断言する明日夏。

「——そんなざまになるほど弱い奴が随分とぬかすな？」

「たしかにそうだな。ダチを侮辱した奴をぶつとばせないのは情けないな。だから——」

明日夏は刀を鞘に収めて構える。

「なにがなんでも、勝つつもりだ！」

次の瞬間には、明日夏はその場から駆けだしていた！

「チツ！」

ライニーは即座に突っ込んでくる明日夏に拳銃を撃つ。

「Attack!」

明日夏は刀の機能で電流によって身体能力を強化し、顔を腕で覆いながら、当たることなんかお構いなしに銃弾の雨の中を突っ切る。

そして、ライニーに肉薄した瞬間、拳を打ち出した!

「甘いな」

「なっ——ぐうっ!」

だけど、ライニーは明日夏の拳を難なく躲し、持ってた銃を十字架に戻して、逆に明日夏の腹に拳を打ち込んでいた!

「銃だけの能なしだとも思ってたか?」

野郎、格闘術も使えるのかよ!

「——くッ！」

明日夏はナイフを取り出して斬りかかる。

だけど、ライニーは難なく明日夏のナイフを持つ手を掴み、そのまま明日夏にナイフを向けて押し込む。

「ぐあっ!？」

ナイフは深々と明日夏の肩に突き刺さってしまふ!

さらに明日夏はそのままライニーによつて蹴り飛ばされてしまった!

「——ッ！」

吹っ飛ばされてる状態から無理矢理地面に着地しながら明日夏は肩からナイフを抜き、そのままナイフを投擲するけど、ライニーは即座に銃で弾き飛ばしてしまった。

「まだだ!！」

再び駆けだす明日夏。

ライニーはさっきのことから、銃撃は無駄だと判断したのか、もう片方の銃も十字架に戻し、格闘戦の構えを取る。

「はあッ!」

「ふッ!」

明日夏が掌底を放ち、ライニーはそれを腕で逸らし、回し蹴りを放ち、明日夏はそれを腕で防ぐ。

二人はそこから同じような感じで拳と蹴りのラッシュをお互いに放ち、腕で逸らすなり防ぐなりする。

ス、スツゲエ! さっきまで、明日夏は満身創痕な感じだったのに、ライニーと互角に接近戦をこなしていた!

「……彼はさっきまで満身創痕だったはず。急にどうしたと言うんだ?」

ゼノヴィアが明日夏の現状を見て、怪訝な表情を作っていた。

「意地、というやつだろう」

ゼノヴィアの疑問にアルミヤさんが答えた。

「意地というものは案外バカにならないものだ。とくに追い詰められた状況のときは、自分を奮い立たせるものとなる。それが例え、すべての力を出し切った状態でも前に進ませるほどにな」

それはなんとなくわかるかも。

俺もライザーとのレーティングゲームのときに、最後は『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』の力も使えないほどにまで追い詰められ、満足に動けず、意識も朦朧とした状態になったけど、部長のために勝つという意地だけでライザーに立ち向かえた。

「それに、そういう状態で放たれる一撃にはなにかかしらがこめられているものだ。そういう『こもった一撃』というのは、破壊力が大したことがなくとも、当たれば肉体的

なダメージとは別のダメージを芯に与える。ライニーは表面上はなんてことのないようにしているが、士騎明日夏の一撃一撃に驚異を感じていることだろう」

俺は改めて明日夏を見る。

あいつはいま、どんな気持ちで戦ってるんだ？



俺とライニー、お互いの回し蹴りが激突する。

クソツ！ 格闘術も一級品だな！ エクスカリバー奪還の任務に就いてるだけはある！

ライトニングスラッシュ

雷 刃の身体能力の強化を何回も使ったため、体のほうも限界だった。

けど、それでも意地でも負けたくなかった。

イツセーを侮辱されたこともそうだが、俺の決意が本気だということを示したかった。

確かに、歴代の赤龍帝は力に溺れて暴走した。信じていたとしても、イツセーがそうならないとは限らないかもしれない。実際、そのことを想像してしまったこともある。

だから、イツセーと距離を置けつてか？ ふざけんな！ そんなくだらねえ理由でダチを見限るなんてするかよ！ 仮に暴走したとしても、ぶん殴つてでも止めてやる！ 力を付けてきたのは賞金稼パウンティハンターぎになるためつてもある。けど、何よりも、大切なものを守りたかつた！

俺は一度、千秋を見捨てたことがある。父さんと母さんが死に、引きこもり、俺たちの声が届かなくなっていた千秋を、自分も父さんと母さんが死んで辛いなんて都合のいい言い訳を作つてな。それだけじゃねえ、本当は助けたかつたのに千秋やイツセーに迷惑をかけられないなんてこれまた都合のいい言い訳を作つていじめられていた鶴と燕を見捨てた。

・・・なんというか、自分が情けなく思えた。本人たちや周りに仕方なかつたなんて言われても。

そして、そんな三人を救つたイツセーの誠実さと真つ直ぐさに憧れた。そうありたいと思つた。そのために強さもほしいと思つた。

だから力を身につけてきた！ 千秋を、兄貴を、姉貴を、ダチを、仲間を守る力を！

だが、ここ最近でのイツセーやアーシアを墮天使に殺されたこと。そのときは本当に自分の未熟さを思い知つた。

もう二度とそんな無様はさらさねえ!

ああ、奴との戦いで追い詰められ、問答してよかつたぜ。この決意を改めて確認するのに一役買ってくれたからな。

あとはこの決意を示すだけだ!

「Attack!」

おそらく、体の限界からして、これが最後の身体能力の強化。

「チッ!」

ライニーは十字架を拳銃に戻して撃ってくる。

俺は顔を腕で覆いながら突っ込む。

戦闘服で防ぎきれなかった衝撃と痛みが限界の体に致命的なダメージを与えるが、意地で突っ込む!

「うおおおッ!」

そのまま、突進の勢いを乗せて拳を打ち出す。

こんな単調な攻撃が当然、野郎に当たるはずもない。だから、避けられた瞬間が勝負だ！

ズドムツ！

「ぐうツー！」

「何っ!?!」

だが、奴はなぜか俺の拳は避けず、俺の拳は野郎の鳩尾に深く突き刺さった!?!
まさかっ!?!

俺は慌てて腕を引こうとするが、ライニーによって腕を捕まれてしまった!

やっぱり、これが狙いか!

そして、奴の銃の銃口が俺の肩に押しつけられた。そう、俺のナイフで奴によってつけられた肩の傷に。

次の瞬間、俺の耳に一発分の銃声が入ってきた。



「明日夏!?!」

肩の傷に銃撃を受けた明日夏は大きく仰け反ってしまおう!

まさか、ライニーの野郎があえて明日夏の一撃を受けて動きを封じるなんて!

「終わらせる!」

ライニーは銃を十字架に戻して、明日夏に肉薄する!

傷に銃弾を受けたら、おそらく滅茶苦茶な痛みが発生して、満足に動けないはず。明日夏にはもうあの状態から反撃するなんて――。

「――ッ!」

次の瞬間、明日夏の目が一際鋭くなった。そして――。

「——ふうッ!!」

「ぐあっ!?!」

明日夏が体勢を立て直し、その勢いを乗せた掌底でライニーを吹き飛ばした!

マジかよ……。絶対、とんでもない痛みですぐには動けなかつたはずだつたのに!?

驚く俺は明日夏の肩の傷を見る。

そして気づいた——。

明日夏の肩の傷を緋色のオーラが覆っており、そのオーラが銃弾を止めているのを。

あれって、明日夏の神セイクリッド・ギアのオーラ! あれで銃弾を止めたから、すぐに動けたのか

!

「クソッ——っ!?!」

吹っ飛ばされたライニーはすぐに体勢を立て直そうとするけど、明日夏はオーラを腕の形にして伸ばし、ライニーを捕まえていた!

明日夏はそのままオーラを引っ張り、ライニーを引き寄せた!

「——今度のは結構効くと思うぜ」

明日夏がそう言う明日夏の右手にオーラでできたドラゴンがいた!

次の瞬間、明日夏の右腕が突き出される!

「——スカーレット・フレイム緋い龍撃!」

「——ツ!?!」

明日夏の必殺技をくらい、ライニーはさつき以上に後方に吹っ飛んだ!

明日夏はさらに追撃しようと突っ込む!

「ぐっ!」

ボロボロになったライニーは苦悶の表情を浮かべながら十字架を銃に変える!

それを見た明日夏は自身の体に電気を流し続けている刀を鞘から抜いた!

だけど、電気が流れてる状態で強引に抜いたせいなのか、電気がものスゴいバジバジツと迸って、明日夏の手を焼いていた！

それでも構わず、明日夏は刀を振るう！

そして、ライニーも銃の銃口を明日夏の顔面に向けていた！

ちよつ、ヤバツ!?! 二人とも、相手を殺すつもりで攻撃してないか!?

そう思っているあいだに明日夏の刀の刃が吸い込まれるようにライニーの首筋へ、ライニーの指が銃の引き金を引いて――。

「――そこまでだ」

刹那、二人の間にアルミヤさんが現れ、片方の手で刀を持っている明日夏の手を受け止め、もう片方の手で銃を持っているライニーの手を押して銃口を明日夏の顔から逸らされ、銃弾が明後日の方向に飛んでいった。

「――少々、やりすぎだ。これはあくまで手合わせのはずだ」

ていうか、あのヒト、いつのまにあそこまで移動したんだ!?

さつきまで、部長たちのそばにいたのに!?

「私が止めなければ、キミたちは二人とも命を落としていた。よつてこの勝負は引き分けた。それでいいかね?」

アルミヤさんに諫められた二人はお互いの武器を引く。

これにより、俺たちと教会の戦士たちとの戦いが終わった。



「……まさかこのような結末になるとはね。先輩はともかく、彼と兵藤一誠は侮れないね」

戦況を見て、ゼノヴィアはそう呟いた。

それを聞いて、木場は憎悪の視線をゼノヴィアに向ける。

おい、木場! 決着はついたんだから、落ち着けよな!?

ライニーも明日夏のことスツゴい睨んでるし、明日夏も明日夏でライニーほどじゃな

いけど睨み返してるし。

「さて、これで手打ちとさせてもらってよろしいかね、リアス・グレモリー」

「ええ、もちろんよ」

「では、今度こそお暇させてもらう。先程の話、よろしく頼む」

「そちらこそ」

アルミヤさんと部長が確認を取ると、アルミヤさんはゼノヴィアたちを引き連れて立ち去ろうとする。

「では、失礼する」

「機会があったら、また手合わせをしよう」

「イツセーくん、私の服を弾け飛ばしたことを懺悔なさいね！　もし裁いてほしかったら、いつでも言ってね。明日夏くんもじゃあね」

「えっと、失礼します」

「……ふん」

五人各々で別れの挨拶をして、教会から来た戦士たちはこの場から立ち去っていった。



「……………いっつっつ……………」

「大丈夫ですか?」

「……………ああ」

アーシアが明日夏の体に手を当てて、
セイクリッド・ギア 神器で回復させていた。

「無茶したな、おまえ」

「……………あんまりおまえには言われたくないな」

俺と明日夏は軽く軽口を叩き合う。

「おまえのアドバイスのおかげでなんとかなったよ」

ホント、明日夏のアドバイスのおかげでなんとかなったし、いいものも見れた！

「そりゃ、よかったよ。けど、イリナの言った通り、あと一段階パワーアップしてれば、普通に勝てたかもしれないなかつた」

「……………それがわからないのは修業と実戦不足です」
「今後は相手の力量を測る目も養わないとな」

明日夏と小猫ちゃんの言葉を聞いて、自分はまだまだ弱いと改めて実感する。また新しい課題が出てきたな。

「待ちなさい!?! 祐斗!」

部長の制止する声が聞こえてきた。

そちらへ顔を向けると、その場から立ち去ろうとしている様子の木場と激昂している部長の姿があった。

「あなたの思いを果たすチャンスはあるわ! そのための条件もこちらから要求したのだから!」

「……でも、確実にチャンスが訪れてくれる保証ありません。下手をすれば、向こうがすべてのエクスカリバーを処理してしまう可能性もあります。ですから……」

「私のもとを去ろうなんて、許さないわ! あなたはグレモリー眷属の『騎士』^{ナイト}なのよ!」
「……部長……すみません」

「祐斗ッ!」

木場は部長の制止の言葉に耳を貸さず、部室から立ち去った。

「祐斗……どうして……」

部長は木場が消えたほうを見ながら悲しそうな顔をしていた。
そんな部長の悲しそうな顔を俺は見えていられなかった。

Life. 8 共同戦線です！

「カラオケの話、付き合ってあげることにしたわ」

「アーシアちゃんも！」

「はい、ぜひ」

「明日夏！」

「・・・・・・部長と副部長以外は来るぞ。あと、霧崎もOKだ」

「うおおおおおおおっ！」

「桐生はともかく！」

「アーシアちゃん含むオカ研のマドンナたちの参加で！」

「テンションマックスだぜえええッ！」

マックスを振り切る勢いでテンションを上げる松田と元浜。そんな二人の頭をはたく桐生。

「悪かったわね、私も行くことになって」

「ふっ。おまえはアーシアちゃんのオプシヨンさ」

桐生とバカ二人の言い合いをよそに、一人難しい顔をしてため息を吐いているイツセー。

木場のことで悩んでいるんだろう。教会の戦士たちとの戦いのあと、木場はエクスカリバーの使い手に敗北したことが引き金になったのかより復讐心が高まってしまい、部長の提案した妥協案でも止まらずエクスカリバーを追って部長のもとから立ち去ってしまった。

このまま行けば、最悪、木場ははぐれ悪魔になってしまいかねない。木場自身もそうなっても構わない覚悟で行動するつもりなのだろう。

そんなことはイツセーはもちろん、俺も部長もオカ研の皆も望まない。だから、イツセーはそんな木場をなんとかしようとおれこれ悩んでいるのだろう。俺もどうにかしたい。

とはいえ、これはなかなか複雑な問題だ。一步間違えれば、悪魔と教会、つまり神側との争いに発展しかねない。

「リアス先輩と姫島先輩がいないのは残念だが……」
「この際、贅沢は言わん！」

そんな俺たちの悩みのことなんて露知らず、はしやぎまくる松田と元浜。事情を知らないから仕方ないが、呑気なもんだぜ。

「こんな奴らと一緒にいると汚れてしまうよ」

突然、一人の男子生徒がアーシアの手を取って現れた。

生徒会の書記であり、上級悪魔である支取蒼那生徒会長ポーンの『兵士』の匙元士郎であつた。

「ああ、匙さん。こんにちわ」

「やあ、アーシアさん。御機嫌よう」

若干戸惑いながらのアーシアの挨拶に妙にカッコつけて返す匙。

「黙れ!」

「生徒会の書記ごときに言われる筋合いなどないわ!」

さっきの匙の言葉に声を荒げる松田と元浜だったが、匙はそんな二人のことを適当に流していた。

「フツ。じゃあ、諸君、失敬するよ」

終始カツコつけてこの場から去っていく匙。

結局何しに来たんだアイツは? 通りかかったから挨拶したのか、アーシアの前でカツコつけたかったのか——おそらく、両方だろうな。

「そうだ。あいつがいた」

そんな匙を見たイツセーのその眩きを俺は聞き逃さなかった。



放課後、駅前のカフェでジュースを飲みながら俺はある人物たちと待ち合わせしていた。

そして、俺のもとに待っていた二人の男が歩み寄ってきた。

「イツセー」

「兵藤」

「お」

やって来たのは明日夏と匙。俺があることを頼むために呼び出して待ち合わせしていたのだ。

「よう、悪いな、二人とも。呼び出しちまって」

「気にするな」

「同じく。で、呼び出した理由は？」

とりあえず二人を座らせ、あること、つまりこれから俺がしようとしていることを告

げ、その協力を頼む。

「聖剣の破壊に協力しろ!? しよ、正気かおまえ!？」

匙がものスゴく驚いていた。

「なあ頼む! この通り!」

俺は二人に頭を下げる。

「ふざけるな!」

「匙、少し落ち着け。周りの視線を集めてる」

立ち上がって捲し立てる匙を明日夏が諫めさせて座らせる。

怒鳴り散らす匙とは違い、明日夏は非常に落ち着いていた。たぶん、なんとなく呼ばれた理由を察していたのだろう。

「聖剣なんて関わっただけでも会長からどんなお仕置きされるかわからないってのに、それを破壊しようだと！ それこそ会長に殺されるわ！ おまえんところのリアス先輩は厳しいながらも優しいだろうが、俺んところの会長は厳しくて厳しいんだぞ！ 絶対に断る！」

そうか、会長は厳しいか。そして、匙の反応からして、滅茶苦茶怖いんだろうな。

「まあ、正直おまえが考えてる手しか思いつかないしな。俺はかまわないぞ」

「悪いな、明日夏。本来は俺たち眷属の問題なのに」

「気にするな。木場をどうにかしたかったのは俺も同じだ。おまえが行動を起こさなくても、俺が起こしてただろうからな」

「サンキュー。頼りにしてるぜ！」

快く承諾してくれた明日夏と拳を合わせる。

「ああ、はいはい。友情ごっこは二人でやってくれ。俺は帰る」

そう言つて匙は立ち上がり、この場を立ち去ろうとする——が、植物の仕切りを丁度通り過ぎたところでなぜか歩いているのに全然進まなくなつた。

「あれ?」

「ん?」

怪訝に思い、匙は隣を、俺と明日夏は仕切りの向こうを覗く。

「・・・・・・・・・・やっぱりそんなことを考えていたんですね」

「・・・・・・・・・・イツセーらしいけど」

「・・・・・・・・・・私のことも頼つてほしかった」

そこには大盛りのパフエを食べながら匙の服の裾を掴んでいた小猫ちゃんとし不機嫌そうな顔をしてジュースを飲んでいる千秋と燕ちゃんがいた。

どうやら俺が不振な行動をしていたからつけて来たらしい。バレちゃつてるのなら仕方ないので、三人にも俺の話を聞いてもらふことにした。



「……ううう……やっぱり帰——あうっ」

話の途中で立ち上がって帰ろうとする匙を小猫ちゃんが服の裾を引っ張って強引に座らせる。

「教会側に協力を？」

「あいつら、堕天使に利用されるくらいなら消滅させるとか言ってただろ」

「ああ。最悪、破壊してでも回収する気みたいだからな」

「木場はエクスカリバーに打ち勝って復讐を果たしたい。あいつらはエクスカリバーを破壊してでも奪いたい。目的はちがっても結果は同じ」

「だから、こつちから協力を願いでると」

「そういうことだ」

三本も奪われたんだから、一本くらい俺たちが奪還、もしくは破壊してもかまわないだろう。

「……………素直に受け入れるとは思えませんが」

「……………あのライニーってのは特にね」

小猫ちゃんと燕ちゃんの言うことももつともだ。断られる可能性が高いだろう。

「当たって砕けろだ! 木場がいままで通り、俺たちと悪魔稼業を続けられるんなら、思いつくことはなんでもやってやる!」

部長のあんな悲しそうな顔は見えないし、木場には何度も助けてもらっている。できることはなんだってやってやるぜ!

「……………当然、部長たちこの場にはいないメンバーには内緒なんだろう?」

明日夏の言う通り、このことは部長や他の部員の耳に入れるわけにはいかない。

「部長は立場上、絶対に反対するだろうからな。副部長もしかり。アーシアと鵜は協力

してくれるかもしれないが、アーシアは嘘がヘタだし、あの昼寝好きでのんびり屋の鶴も嘘は得意なほうじゃないから、そこからバレかねない。何より寝惚けた鶴がうっかり口を滑らせかねないからな」

「……おまけに部長に思いつき迷惑をかけることになりかねない。それでも木場は大事な仲間だし、何より部長のあんな悲しそうな顔を見たらいてもたつてもいられないからな！」

俺がそう言うと千秋と燕ちゃんが笑みを浮かべる。

「イツセー兄らしい」

「まったく」

そして、二人は婚約パーティーのときと同じような強い眼差しで俺のことは見てくる。

「私たちにも協力させて」

「足を引っ張るつもりはないわ」

不敵に笑みを浮かべて言う二人。これは、来るなって言っても来そうだな。

「……まず、あのヒトたちを探さないといけませんね」

「小猫ちゃん？」

「……部長たちに内緒で動くのは心が痛みますが、仲間のためです」

小猫ちゃんって、いつも無表情だけど、熱いところがあつて本当に仲間思いだよな。

「……そお……」

ガシツ!

ここそと逃げようとした匙を明日夏と小猫ちゃんが腕を掴んで捕まえた。

「俺関係ねえだろおおっ! おまえらグレモリー眷属の問題だろう! なんで俺を呼んだあっ!?!」

「他に協力を頼める悪魔がおまえしかいなかったんだよ。危なくなったら逃げていいからさ」

「いま逃げさせろおおおつ！ 協力なんてしたら絶対に会長の拷問だあああ！ 会長に殺されるううううう！」

泣き叫ぶ匙に明日夏が冷徹に言う。

「悪いが匙、このことは会長にもバレるわけにはいかないからな。話を聞いたおまえをみすみす帰すわけにはいかねえ」

あ、言われてみるとそうだな。

「しない！ 告げ口なんてしないから帰してくれええええええええええつ！ 誰かあああ！ 助けてくれええええええええええつ！ 会長おおお！ お助けをおおおおつ！」

匙の助けを呼ぶ叫びは俺たち以外に聞かれることはなかったのであった。



「……トホホホ……。……なあ、俺はいなくなつていいだろ？ 頼りになりそうな幼馴染みや無敵の『戦車^{ルック}』が参加してくれたんだしさ……」

街中を歩いていると匙がぼやいてきた。

「戦力が多いほうがいいんだよ」

実際、匙は悪魔に転生する際に『兵士^{ポーン}』の駒を四つ使つたつて言うしな。

さて、協力を頼むために教会から来た戦士たちを探しているわけだけど——。

「簡単には見つからねえだろうな。第一、こんな繁華街に白いローブを着た五人組なんて——」

「……イツセー」

「なんだ、明日夏？」

「……ん」

「ん？」

明日夏が指差す方向を見る。そこには――。

「えー、迷える子羊にお恵みをー」

「天の父に代わって、哀れな私たちにお慈悲をおおおお！」

「お願いします！　せめて食べ物をおおおお！」

白いローブを着たお鉢を手に物乞いしている三人の女性と『愛の手を』と書かれた紙を持って不機嫌そうに立っている男性一人がいた。

「……………普通にいました」

「……………ああ」

俺も明日夏もなんとも言えなくなってしまう。

「……………なんだあれ？」

さつきまでぼやいていた匙もなんとも言えないような表情をしていた。
よく見ると、アルミヤつてヒトだけその場にいなかった。別行動してるのか？

「なんてことだ。これが超先進国であり経済大国日本の現実か。これだから信仰の匂いもしない国は嫌なんだ」

「それ以前にさ、私たちが浮きすぎてるせいじゃないの？ 周りの人たち、スゴい怪しい人を見るような目をしてるよ？」

「………なんでこんなことしなきゃならねんだ………」

「三人とも毒づかないで。路銀の尽きた私たちはこうやって、異教徒どもの慈悲なしでは食事も摂れないのよ。ああ、パンひとつさえ買えない私たち！」

「どこにも泊まれないから、お風呂にも満足に入れないもんね」

「いい加減、水浴びで済ますのも限界よ。ああ、これも神の与えたもう試練なのですね！」

「………何が試練だ。もとはと言えば、おまえとユウナが悪いだろうが！」

「ライニーの言う通りだ！ おまえたちが勝手に滞在費のすべてを詐欺まがいの変な絵画の購入に充てたからだろうが！」

ゼノヴィアが指差すほうに聖人らしき者が書かれたへ々な絵画があった。

「何を言うの！ この絵には聖なるお方が描かれているのよ！」

「展示会の人もそう言ってたよ！」

「……じゃあ誰だよ？」

「……私には誰一人脳裏に浮かばない」

「……たぶん、ペトロ……さま？」

「違うよ、パウロさまだよ！」

「どっちも違う！ まったくおまえたちは……」

ゼノヴィアは頭を抱えながらため息を吐く。

「ああ、どうしてイリナみたいのが私のパートナーなんだ……。主よ、これも試練ですか？」

「ちよつと、頭を抱えないでよ。あなたって、沈むときはとことん沈むわよね」

「うるさい！ これだからプロテスタントは異教徒だというんだ！ 我々カトリックと

価値観が違う!」

「何よ! 古臭いしきたりに縛られてるカトリックのほうがおかしいのよ!」

「なんだと、異教徒め!」

「何よ、異教徒!」

ついには頭をぶつけながらケンカを始めるゼノヴィアとイリナ。

「二人とも! ケンカしないで、落ち着いてよ!」

そんな二人を慌てて止めようとする神田ユウナ。

「……教会の切り札たる聖剣使いが揃いも揃って無様だな」

「なんだと!」

「なんですって!」

「ちよつと、ライくん! 火に油を注がないでよ!」

現状に対する不満が溜まりまくってるのか、ライニーが毒を吐きまくっていた。

「そもそも、おまえの買い食いも路銀が尽きた原因の一端でもあるんだぞ！ わかつてるのか、大食いエクソシスト！」

「ちよつと、ライくん！ その呼び方はやめてよ!? ……それは、たしかに私も使すぎかなあとは思ってるんだけど。日本にはとてもおいしいものがいっぱいあつて、つい……………」

「……………食い気エクソシスト」

「うっ。ライくん、あの戦いから機嫌悪すぎだよ？ あのヒトとああいう決着になったの気にしてるの?」

「……………そんなわけないだろうが。——デブエクソシスト」

ライニーの心ない言葉に神田ユウナが顔を真っ赤にさせて涙目になる。

「太ってないもん！ 大食いだったり、食い気がありまくるのは認めるけど、太ってないもん！ ライクんのバカ！ 女の子になんてこと言うのよ!?!」

ライニーと神田ユウナまでケンカを始めちゃったよ。

「な、なあ。あれが教会から来た戦士……なんだよな?」

匙がゼノヴィアたちを指差しながら訊いてきた。

あんなのが教会から来た戦士って言われても信じられないよな。

ぐううううう……。

少し離れてる俺たちのもとにも届くほどの盛大な腹の虫。

腹が鳴るなり、四人は力なくその場にくずおれる。

「……………まずはどうにかして腹を満たさないと。エクスカリバー奪還どころではない」
「い」

「……………そうね。こうなったら、異教徒を脅してお金をもらおう? 異教徒相手なら主も許してくださるはず……………おそらく」

「……………ならば、寺の賽銭箱とやらを奪うという手もあるな」

「ああ! そのほうが簡単ね!」

なにやら物騒なことを言い始めるゼノヴィアとイリナ。

「ちよつと！ それ犯罪だよ、二人とも！ 人としてやっちゃいけない領域だよ！」

「……………そうだな。やめておこう……………」

「……………そうね。やめておきましょう……………」

ユウナの言葉で思いとどまる二人。

なんとというか、昨日やり合った者たちとはとても思えなかった。

「なあ、兵藤。俺、教会の戦士だっていうのとは別の意味であいつらと関わり合いたくないんだが……………」

匙の反応はわかる。俺だって、いろいろな意味で関わり合いたくないよ。

「……………別の意味で不安があるな」

額に手を当てている明日夏に内心で同意する。

とはいえ、頼れるのは彼女たちだけだ。

意を決して、彼女たちに近づこうと——。

「我々に接触して、何をしようというのだね？」

『——っ!?!』

突然、背後から声をかけられ、俺たちは慌てて振り向くと、ゼノヴィアたちのところにいなかったアルミヤってヒトがいた!

「さて、一体どういう理由があつて、我々に接触を図ろうとしたのかね？」

再度の問いかけにどう答えようか思慮していると——。

「とりあえず——食事でも奢るか？」

明日夏が再び言い合いを始めているゼノヴィアたちを指差しながら答えた。

そして、ケンカしているゼノヴィアたちを見たアルミヤさんは額に手を当てて嘆息した。というか、本気で頭痛を感じてそうだった。



「うまい！ 三人とも、日本の食事はうまいぞ！」

「これよこれ！ ファミレスのセットメニューこそ私のソウルフード！」

「クソツ！ なんでこんな奴らに……！」

「ライくん、ごちそうされてもらってその言いくさはダメだよ！」

ファミレスの席で運ばれてくる料理を片っ端から平らげていくローブを着た四人の男女。

ものすごい食べっぷりだな。よっぽど腹が減ってたんだな。ライニーですら、ガツガツいってるよ。

そして、ユウナの食べっぷりはすさまじいの一言だった。ゼノヴィアたちの三倍以上は食べてるよ。

俺たちは彼女たちの向かい隣の席でそれぞれジュースなどを飲んでいた。

「……………なんというか……………申し訳ない」

こつちの席でアルミヤさんが本当に申し訳なきそうに言う。

「……………悪いな、明日夏。ほとんど出してもらって……………」

「……………気にするな」

食事は俺が払うつもりだったけど、あの食べっぷりじゃ俺一人ではどうても無理なので、明日夏からも出してもらった。というか、ほとんどは明日夏に出してもらった。

「……………なんということだ。信仰のためとはいえ、悪魔に救われるとは世も末だ……………」
「私たちは悪魔に魂を売ってしまったのよ!」

食べ終わると同時にそんなことを言うゼノヴィアとイリナ。

「奢ってもらつといてそれかよ！」

「………イツセー」

思わず叫んでしまう俺を明日夏が諫めてくれる。
落ち着け、俺。怒らせたら元も子もないからな。

「主よ、この心優しき悪魔たちと人たちにご慈悲を」

胸で十字を切るイリナ。

「だああああっ!？」

「うううううっ!？」

「うっつっつ!？」

その瞬間、俺を頭痛が襲い、小猫ちゃんと匙も同様に頭へ手を当てていた。どうやら、目の前で十字を切られて、俺ら悪魔は軽くダメージを受けたようだ。

「痛たたたた!? 神のご慈悲なんかいらねえよおっ!」

「あら、ごめんなさい。つい癖で」

てへつとイリナはかわいらしく笑う。普通に見るぶんには美少女なんだけどな。

「で、私たちに接触してきた理由は?」

コップの水を飲み干したゼノヴィアは改めて俺たちに訊いてきた。

「交渉したいそうだ」

先にこちらの事情を説明していたアルミヤさんが答えた。

「交渉?」

「エクスカリバーの破壊に協力したい!」

「何?」

俺はアルミヤさんにした説明をゼノヴィアたちにも聞かせる。

「ふざけるな！ こちらのやることに一切介入しないことになってるはずだぞ！」

やっぱりというか、当然というか、ライニーがあからさまに表情を歪ませる。

「落ち着いて、ライくん。それで、どうする、皆？」

ライニーを諫めながら、ユウナはゼノヴィアたちに訊いた。

「話はわかった。一本くらいなら任せてもいい」

意外にも、ゼノヴィアからあつさりと許可が下りてしまった。

マジで！ 言ってみるもんだな！

「……くう、あつさり断つてくれると思っただのに！」

まあ、そう言うな匙よ。巻き込んだ俺が言うのもあれだが。

「ちよつと、ゼノヴィア!」

「どういうつもりだ!」

異を唱えるイリナとライニー。

まあ、ライニーはもちろん、イリナも普通はそんな反応だよな。

「イリナ、ライニー。向こうは墮天使の幹部、コカビエルも控えている。正直、私たちだけで聖剣の三本を回収するのは辛い」

「それはわかるわ! けれど!」

「最低でも私たちは三本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰ってくればいい。私たちのエクスカリバーも奪われるくらいなら、自らの手で壊せばいいだろう。でだ、アルさん。私たちが任務を終えて、無事に帰れる確率はどれくらいあると思う?」

問われたアルミヤさんは淡々と答える。

「そうだな。キミが奥の手を使つたとしても、おそらくよくて四割だろう。むろん、状況によつては変動する可能性もあるが」

「だそうだよ、イリナ」

「それでも十分に高い確率だと私たちは覚悟を決めてこの国に来たはずよ!」

「ああ。私たちは端から自己犠牲覚悟で上から送り出されたのだからな」

「それこそ信徒の本懐じゃないの。アルさんもいいんですか?」

イリナに問われたアルミヤさんは冷静に言う。

「私としては最悪の展開を回避したいところなのでね」

「最悪の展開?」

「私たちが任務に失敗し、全滅。これも十分最悪だが、一番の問題は、キミたちのエクスカリバーまでもが堕天使に奪われることだ」

「それは……」

「むろん、私は戦力的な観点から彼らの要求を呑んだのではない」

「どういうことですか?」

アルミヤさんは指を一本立てて俺たちのほうを見る。

「まずひとつは彼らが行動を起こす要因となった木場佑斗。私には彼がこのまま黙っているとは到底思えない。おそらく、なんらかの形で私たちの戦いに介入してくるだろう」

「……仮にそうなったら、そいつごとやればいい話だろうが」

ライニーの言葉に思わず声をあげそうになるけど、なんとか抑える。

「だが、我々が相手にするのは墮天使の幹部と、おそらく使い手を得たであろうエクスカリバー三本。これらを相手にしながら、そのような介入を受けるのは好ましくない。できれば避けたいところである。ならいつそのこと、彼らと共闘関係になることで彼の行動をある程度コントロールする」

アルミヤさんは二本目の指を立てる。

「次に彼らから提供してもらおうものだ」

「戦力としてですか？」

イリナの言葉にアルミヤさんは首を振る。

「先程も言ったが、私は戦力的な観点で彼らの要求を呑んだのではない」

「では何を？」

「情報だ」

アルミヤさんの代わりに明日夏が答えた。

「聞けば、おまえたちは情報提供者としてこの街に潜り込ませていたエージェントを皆殺しにされたんだろ？」

明日夏という言葉にイリナたちは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「代わりに私が情報収集してはいるが、めぼしいものは手に入っていないのが現状だ。我々は圧倒的に情報不足な状態にある。そこで――」

「俺が情報の提供といい情報屋を紹介する」

そう。実は交渉材料として、明日夏が情報の提供といい情報屋を紹介してくれることになっていったのだ。

「そういうことだ。情報不足の我々にとつては情報は貴重なものだ。それを得られるだけでも、彼らの要求を呑む価値はあると思うが? ましてや——」

真面目そうに話してたアルミヤさんだったが、途端に半眼になって呆れたような表情を作る。

「詐欺にあつて路銀をすべて失い、敵対している悪魔に食事を提供されている体たらくの我々にはこの街での長時間の滞在は不可能なのは考えるまでもない事実だがね」

「「うっ」」

アルミヤさんの言葉にゼノヴィアたちはばつが悪そうな表情になる。

「上に追加の滞在費の催促するにはどう言えばいいだろうな？ 教会の者として、必要最低限の生活をしていければそれなりの長い期間を滞在できる路銀をたつた数日で使いきつた理由を？」

うん。俺でもわかる。どう言っても、上からどやされる未来しか見えないな。

「いや、それは、イリナとユウナが……」

「できれば、その二人の手綱をしつかり握っていてほしかったところなのだがね……」
「うっ」

「まあ、目を離して、キミたちだけで行動をさせたり、滞在費をこの街で生まれたということと土地勘のあるイリナに持たせてしまった私にも落ち度があったのも確かだが……」

あー、なんか、このヒト。いろいろ苦労してそうだな……。

「さて、いろいろと話を脱線させてしまったが、彼らの要求を受け入れるということ、三本のうちの一本を彼らに任せるといふことかまわなにかね？」

「私はもとよりかまわないと思っっているよ」

「わかりました」

「私も反対するつもりはもともとありませんでしたから」

「・・・・・・了解した」

「ということで、話はまとまったよ」

よっしや! なんとかなつたぜ!

「ただし、私たちとキミたちが繋がっていることを上や墮天使に悟られるのは避けたい。そのへんを注意して行動してほしい。まあ、そのへんのカバーストーリーは私が作っておこう。いろいろと屁理屈を並べることも可能みたいだからな。あと、領収書はとっておいてくれ。あとで私のポケットマネーから食事代を払おう」

よし! 何はともあれ、交渉成立! あとは木場にこのことを伝えるだけだな!
俺はスマホを取り出し、木場と連絡を取った。



「……………なるほど。でも正直、エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だね」

「ずいぶん物言いだね？ キミはグレモリー眷属を離れたそうじゃないか。『はぐれ』とみなして、ここで斬り捨ててもいいんだぞ？」

「……………そういう考えもあるね」

「待てよ！ 共同作戦前にケンカはやめろつて！」

木場と連絡を取り、公園の噴水前でさっきの話を聞かせたまではいいんだが、木場とゼノヴィアいきなりやり合おうとしたので慌てて止める。

「キミが『聖剣計画』を憎む気持ちは理解できるつもりだ。あの事件は私たちの間でも最大級に嫌悪されている。だから、計画の責任者は異端の烙印を押され、追放された」

アルミヤさんがゼノヴィアに続いて、その責任者について話してくれる。

「その責任者の名はバルパー・ガリレイ。『皆殺しの大司教』と呼ばれた男だ」

「……バルパー。その男が僕の同士を」

「情報では墮天使のところを身を寄せているらしい。そして、今回の事件には聖剣も関わっている。今回の事件に参与している可能性は0ではないだろう」

「それを聞いて、僕が協力しない理由はなくなつたよ」

木場の瞳に新たな決意みたいなものが生まれていた。目標がわかつただけでも木場にとつてみれば大きな前進か。

「話をついたな。では、後ほど、改めて。情報提供はそのときに」

「食事の礼はいつか返すよ」

「ごちそうさまでした。お礼は必ず」

「ありがとうね、イツセーくん、明日夏くん」

「……邪魔だけはするな」

五人はそれぞれ挨拶をして、この場から去つた。

五人を見送り、俺たちはたまらず、大きく息を吐いた。

「ふう。よかったな、おい」

「よかったじゃねえ！」

終始、ビクビクしていた匙の肩を叩くと匙が捲し立てる。

「斬り殺されるどころか、悪魔と神側の争いに発展したっておかしくなかったんだぞ！」

まあ、実際、匙の言う通りなんだよな。我ながら大胆すぎる作戦だったぜ。無茶な作戦だと思っただけど、意外にできるもんだぜ。アルミヤさんとかが結構話のわかるヒトだったことと、明日夏の情報提供のおかげかな。

「イツセーくん。キミたちは手を引いてくれ」

「え？」

「この件は僕の個人的な憎しみ、復讐なんだ。キミたちを巻き込むわけには——」

「俺たち、眷属だろ！ 仲間だろ！ 違うのかよ！」

「………違わないよ。でも——」

「大事な仲間を『はぐれ』になんてさせられるか！」

木場の両肩を掴んで言葉を遮り、真つ正面から思いの丈をぶつける。俺に続いて明日夏も言う。

「言つとくが木場。こうなったイツセーは絶対に止まらねえよ。むろん、俺たちもな」

明日夏の言葉に千秋と燕ちゃんも強くうなずいた。

「それに俺だけじゃねえ! 部長だつて悲しむぞ! いいのかそれで!」

「……リアス部長……そう、あのヒトと出会つたのは『聖剣計画』が切つ掛けだった」

そこから木場の口から、当時の思いと記憶が語られる。それは当人の口から出たせい
か、部長から聞いたとき以上に残酷な話だった。

剣に関する才能と聖剣への適性を見出されて集められた子供たちが来る日も来る日も辛い実験の毎日で、自由はおろか人間としてさえ扱われず、それでも誰もが神に選ばれた者だと信じ、いつか聖剣を使える特別な存在になれると希望をもって耐えた。

「……でも、誰一人として聖剣に適應できなかった。実験は失敗したんだ」

計画の失敗を悟った責任者は計画の全てを隠匿するために毒ガスによる処分を実行した。

「……血反吐を吐きながら、床でもがき苦しみながら、それでも僕たちは神に救いを求めた」

でも、結局救いはなく、それどころか、神の信徒に殺された。そんな中、同士たちが必死の抵抗を行い、木場だけを研究施設から逃げ出させることができた。

でも、毒ガスによって木場の命はもう長くはなかった。

それでも追っ手から必死に逃げていたが、結局限界がきて倒れる。

そして、倒れてもなお、強烈な無念と復讐の念を抱えたまま生きあがこうとしていた木場を救ったのが当時の部長だった。そして、木場は悪魔になり、現在に至る。

「眷属として僕を迎え入れてくれた部長には心から感謝しているよ。でも、僕は同士た

ちのおかげであそこから逃げ出せた。だからこそ、彼らの恨みを魔剣に込めて、エクスカリバーを破壊しなくちゃならない。これは一人だけ生き延びた僕の唯一の贖罪であり、義務なんだ」

……改めて聞くと、すさまじく残酷な話であり、木場の覚悟が伺える話だった。

アーシアも悲しい過去を持っていたけど、木場も想像を遥かに越えた過去を過ごしてきたんだな……。

「うおおおおおおお！」

木場の話を聞いて匙が男泣きしていた。

「木場！ おまえにそんな辛い過去があつたなんて！ 辛かつただろう！ キツかつただろう！ 正直言うと、俺はイケメンのおまえがいけすかなかつたが、そういう話なら別だ！ こうなつたら会長のお仕置きがなんだ！ 兵藤！ 俺も全面的に協力させてもらうぜ！」

俺の手を取って、ブンブンと振りまくる匙。ついさっきまであんなにぼやいていた、ビクビクしていたとは思えないほどやる気と気迫に満ちていた。

「そ、そうか、サンキュー」

その勢いにちよつと戸惑ったけど、こいつも結構熱くていい奴だな。

「……………私もお手伝いします」

「小猫ちゃん？」

「……………祐斗先輩がいなくなるのは寂しいです」

木場の袖を掴み、本当に寂しそうに瞳を潤ませながら言う。

ヤベエ。小猫ちゃんの訴えに木場じゃないのに俺がきゅんきゅんときちやつたよ。

「まいったな。小猫ちゃんにまでそんなことを言われたら、僕一人で無茶なんてできるはずないじゃないか」

「じゃあー！」

「本当の敵もわかったことだし、皆の厚意に甘えさせてもらおうよ」

おお、木場も俺たちの協力を受ける気になってくれたか!

「ふう。いろいろ懸念材料があつたが、なんとかなつたな、イツセー」

「ああ。結構おまえのおかげなところがあるから、本当にサンキューな、明日夏」
「礼を言うのはまだ早いぞ。これからが大変なんだからな」

明日夏の言う通りか。大変なのはここからだよな。

「よし! いい機会だ、皆に俺のことを話すぜ!」

そんな中、匙が意気揚々と自分のことを話し始めた。

「聞いてくれ! 俺の目標は——ソーナ会長とデキちゃった結婚をすることだ!」

匙の告白に俺は心の奥底から込み上げてくるものがあつた!

気づけば、俺の双眸から大量の涙が流れ出していた。

「同士よー！」

俺は匙の手を取り、力強く言った。

「匙、聞け！　俺の目標は部長の乳を吸うことだ！」

「なっ!?　おまえ、わかつているのか!?　上級悪魔の、しかもご主人様の乳を吸うなんて!?　いや、吸う以前に触れること自体——」

「匙、触れるんだよ！　俺はこの手で部長の胸を揉んだことがある！」

「なっ!?　嘘じゃないよな!？」

「嘘じゃない！　ご主人様のおっぱいは遠い。けど、追いつけないほどの距離じゃない！　そして、俺は揉んだ！　そして次は吸うんだ！」

一拍あけ、匙の目からも大量の涙が流れだす。

「兵藤！　俺は初めておまえがスゴいって思ったぜ！」

俺たちは固く握手をする。

「匙! 俺たちは一人ではダメな『兵士』^{ポーン}かもしれない! だが、二人なら違う!」

「おう! 同士よ!」

「二人でならやれる! 二人でなら戦えるんだ!」

俺と匙はそのとき、魂で何かを通じ合い、感じ合い、繋がりが合った!

「..... やっぱりこの二人、似た者同士だったな」

「..... あはは」

「..... 最低です」

「..... やれやれね」

Life. 9 情報、求めます！

ゼノヴィアたちと共同戦線を張った夜、ゼノヴィアたちと合流するために家を出ると、アーシアが見送りに来てくれた。

「こんな時間にお疲れさまです」

「緊急で召喚されちゃったからな。部長が帰ってきたら、よろしく言っておいて」

アーシアには緊急の召喚で出かけるということの説明している。

「はい。お得意さまができて、よかったですね」

うっ。屈託のない笑顔を向けられて、罪悪感を感じてしまう。

とはいえ、アーシアに本当の事情を説明するわけにもいかない。ゴメンな、アーシア。

「じゃあ、行ってくる」

「はい。いってらっしゃい、イツセーさん」

見送ってくれたアーシアが家に戻ると同時に向かいの士騎家から明日夏と千秋が出てきた。

「さて、行くか」

「ああ」

「うん」

ちなみに燕ちゃんは家に残ってもらってる。部長を見張ってもらうためだ。部長にバレるわけにはいかないからな。

「——つと、そのまえに——」

実はアーシアに言った緊急の召喚つてのは本当で、ちょうどいい建前になっていたのだ。

もちろん、本来の目的のために、断らせていただかないといけないわけだが。

その旨を伝えるために、依頼者のスマホに電話をかける。ちなみに、依頼者はここ最近、俺のお得意さまになった、先日、酒の相手で俺を召喚したヒトだ。

「……………依頼者のヒト、怒るかなあ？ せっかくお得意さまになつてくれたのに、これでもう呼ばないなんてことにならないかな？」

不安を感じながらコールすると、すぐに出てくれた。

「あ、もしもし。兵藤です」

『よお、悪魔くんか。どうしたんだい？』

「すみません。今日の召喚、お休みさせてもらいたいんですけど？」

『おや、なんでだい？』

「実はどうしても外せない急な用事ができてしまいました……………」
『なるほどねえ。急用じゃ仕方ない』

文句を言われることなく、あっさりと納得してくれた。

「本当、すみません」

『いやいや、気にしなくて結構だ。また改めて指名させてもらうよ。じゃ』

向こうから切られたけど、怒ってるってわけでもなかった。

「向こうはなんて?」

「特に怒ることなく、仕方ないってあっさり納得してくれた」

とにかく、改めて指名してくれるみたいだし、ホントよかったよ。

「さて、改めて行くか!」

俺の言葉に二人はうなずき、合流場所に向けて駆けだした。



今夜、イツセーを指名した依頼者は堤防で釣りの準備をしていた。今夜はここでイツセーに釣りの相手をしてもらおうつもりだったのだ。

「はあ、悪魔がドタキャンねえ」

本人は特に気にはしていなかったが、一人で釣りをすることに若干の寂しさを感じていた。

「よお」

依頼者は自分以外には誰もいないはずなのにも関わらず、暗闇に向けて呼びかける。すると、そこにはいつのまにか、ダークカラーの銀髪をした少年が降り立っていた。そして、少年の周りには光る粒子がわずかに舞っていた。

そのことを気にすることなく、依頼者はロットを振りながら少年に語りかける。

「一人寂しい俺に付き合ってくれよ」

依頼者の言葉に少年は鼻で笑う。

「フツ。寂しがるようなタマか？ あんたが？」

少年の皮肉に依頼者は不敵な笑みで返した。



「来たか」

ゼノヴィアたちとの合流場所——以前、アジアを助けるために乗り込んだ廃教会で俺たちは一堂に会していた。

まさか、またここに来ることになるなんてな。しかも、ご丁寧に明日夏に木場や小猫ちゃんも一緒というあのときの再現である。今回は千秋や匙、ゼノヴィアたちもいるけどな。

「さて、まずはキミが持っている情報を頼む」

「ああ」

アルミヤさんに促され、明日夏は俺たちが現状知っていることを話します。

「まず、奪われたエクスカリバーのうちの一本の所有者についてだが、名前はフリード・セルゼン」

明日夏の言葉にゼノヴィアたちが同時に目を細める。

アルミヤさんがフリードについて説明してくれる。

「フリード・セルゼン。教会のとある機関出身で、元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。悪魔や魔獣を次々と滅していく功績は大きかった。だが、彼の中にあっただのは信仰心ではなく、異形存在に対する敵対意識と殺意、そして異常なまでの戦闘執着のみ。それを妨げるのであれば、同胞すらも手にかけてほどの男だ。すぐに異端にかけられたが、天才といわれ十三歳でエクソシストになった実力は本物で、いまのいままで、処理班の手から逃れられていた」

天才、か。たしかに、あいつの強さは凄まじかった。天才と言われても納得できた。そんな奴がエクスカリバーを持つてるとか、悪い冗談だぜ。

「もう一人、エクスカリバーの使い手になってるか不明だし、本名じゃないのは確かだが、この名前に覚えはあるか？」

一拍あけて、明日夏がその名を口にした。

「——ベル・ザ・リップー」

「——っ!？」

「ベルだと!？」

明日夏が口にした名にユウナとライニーが激しく反応していた。

な、なんだ、そいつのこと、なんか知ってるのか？

だけど、ユウナは辛そうに、ライニーは腹立たしそうに顔を背けるばかりで、二人とも何も言おうとしない。

「本名はベルティゴ・ノーティラス。『ベル・ザ・リップー切り裂きベル』の異名を持った元エクソシストだ」

そんな二人を見かねて、アルミヤさんが代わりに話してくれた。

「もとは親に捨てられた孤児で、妹と一緒に路頭に迷っていたところをとある教会の神父が拾い、その神父が教会で兼任していた孤児院で過ごし、エクソシストになった男だ。そして……」

アルミヤさんはライニーとユウナに一瞬だけ視線を移して言う。

「二人もその孤児院で過ごし、エクソシストになった者たちだ」

えっ。それって、つまり――。

「……ベルくんと私たちは、その孤児院で他の孤児たちと家族同然に過ごししていたの」

ユウナが辛そうにしながらも、ようやく話し始めた。

「……私もライくんも、ベルくんと同じように親に捨てられた孤児でね。ベルく

「んとはほぼ同時期にその孤児院を兼任していた神父さまに拾われたの。そこで、本当の家族のように、拾われるまえの辛さを忘れるぐらい、楽しく過ごしたの。そして、私たち三人は教会のためにエクソシストになった。でも……」

「……そのときから、奴は変わった」

そこからはライニーも話し始めた。

「……孤児院で過ごしたときは、ただ悪戯好きでやんちゃな奴だった。だが、教会の戦士になってからは、その性格は過激なものに変わった。手にした武器で、敵を必要以上に切り裂き、惨殺しては悦に入っていた。その姿からいつしか、周りの連中は奴を『切り裂きベル』と呼ぶようになった。そして、そう呼ばれるようになって、しばらくしたあとだ。奴は俺たちを拾ってくれた神父を……恩人に手をかけた……！」

ライニーの言葉に俺たちは驚愕してしまふ。

だって、親に捨てられて路頭に迷っていた自分を拾ってくれて育ててくれた恩人とも言えるヒトを手にかけたなんて……。

「あとからわかったことだが、彼は『サイコキラー』であったのだ」

アルミヤさんが追加の情報をくれる。

それってたしか、変な理由と目的で人を殺しまくる奴のことを言うんだっけ？

「……彼は人を殺すこと、とりわけ切り裂いて殺すことに異常なまでの衝動を持ち、興奮を覚える男だったのだ。おそらく、戦いの中に身を置いたことで、その衝動が目覚めたのだろう。そして、最初はそれを教会の敵にしか向けなかったが、徐々にそれを同胞にまで向けるようになった。その果ての結果が恩人である神父の殺害だ。……その後、彼は妹を連れて、どこかへ姿を消し、我々もいまだに消息を掴めていない状態だった」

アルミヤさんの言葉に何も言えなくなってしまう。

いや、ライニーやユウナのシヨックはもつと大きいはずである。家族同然に一緒に暮らしてたのに、それが異常殺人者になっちゃうんなんで……。

「……今回の事件に関わってるのならちようどいい。野郎との因縁にケリを着けてやる!」

ライニーは決意を決めた表情をしていたけど、ユウナはどこか迷ってるような表情をしていた。

「……悪いが、俺たちが知っているのはこれだけだ」

「……そうか。情報提供を感謝する」

二人のことを想ってなのか、明日夏とアルミヤさんが話を切った。そして、話題を変えようとした瞬間――。

「——おいおい、なんだあ? 悪魔とエクソシストが教会で一堂に会して仲良くおしゃべりとはなあ」

『——ツ!?!』

突然かけられた声に俺たちは驚き、身構えながら声がしたほうを見る。

そこには、ローブをまとい、フードをかぶった者が扉に背を預けていた。フードで顔は見えないけど、声からして、たぶん男だ。

「何者だ？」

ゼノヴィアがエクスカリバーを包んでいる布を取りながら訊く。
ゼノヴィアの問いに男は不敵な笑みを浮かべる。

「敵だ——て言ったら、どうする？」

そして、男はローブから何かをチラつかせる。

それは——刀だった。

同時にただならぬプレッシャーを感じてしまう！

「——ッ！」

次の瞬間、男を敵だと判断したライニーが銃で男を撃ち抜く！

「ただ、撃ち抜かれたのはローブだけで、男はその場にいなかった！ど、どこ行っただんだ!」

「——遅いな」

『——ッ!?!』

いつの間にか、俺たちの背後にその男はいた!

「くっ!」

ゼノヴィアがすかさず振り返りながらエクスカリバーを振るうけど、男は体を少しずらしただけでゼノヴィアの斬撃を避けてしまう!

「やあっ!」

そこへ、エクスカリバーを持ったイリナと十字架を刀に変えて手に持ったユウナが斬りかかる!

「だから、遅えぜ」

だけど、男が居合の構えを取った次の瞬間――。

「――っ!?!」

男の手元が一瞬ブレたかと思ったら、激しい金属同士がぶつかり合った音が響き、イリナのエクスカリバーとユウナの刀が弾かれていた！

なんだよいまの!?! おそらく、居合でイリナとユウナの攻撃を弾いたんだろうけど、その太刀筋が全然見えないどころか、男の手の動きすら見えなかった！

「チッ！」

ライニーが銃で撃つけど、男はそれさえも体を少しずらしたただけで躲してしまふ！

「くっ！」

木場が魔剣を手に『騎士^{ナイト}』のスピードを駆使して斬りかかる。

「お、少しは速いな。『騎士^{ナイト}』の特性か？」

「だけど、男は木場の速さに余裕で対応して、木場の斬撃を鞘でいなしていた。

「……………潰れて」

小猫ちゃんがフリードのときのように長椅子を男に投げつける。

「よっ」

「けど、男は小猫ちゃんが投げまくる長椅子をなんてことのないように刀で切り裂いてしまう。」

「ちつちえくせに、スゲエバカ力だな。『戦車^{ルーク}』か？」

「……………」

男の言葉に小猫ちゃんが不機嫌になるけど、男はそれを見てもへらへらするだけだった。

そして、男はアルミヤさんのほうに視線を動かした。

次の瞬間——男がその場から消えたと思つたら、アルミヤさんに肉薄していた！

男は刀を鞘から抜いて振るうけど、アルミヤさんは黙つて見てるだけだった。

そして、男の刀がアルミヤさんの首を跳ねようとした瞬間——刀の刃がアルミヤさんの首のところで寸止めされていた。

「——俺の動き、見えてたんだろ？　俺が刃を止めなかったら、首と胴体がおさらばしてただろうに、なんで避けなかった？」

男の問いにアルミヤさんは肩をすくめる。

「——相手を斬る気のない斬撃を避ける必要があるのかね？」

アルミヤさんの答えを聞き、男は——。

「プッ！」

アルミヤさんの首筋から刀を離し、腹を抱えて大笑いしだした。

「アツハツハツハツハ！ さすがは『劍聖』と呼ばれるだけはあるぜ！ わりとマジに刀を振ってるように見せかたつもりだったんだけどな！」

な、なんだ!? どうなってるんだ、一体!?

俺たちが困惑していると、明日夏が大笑いしている男に飛びかかっていた！
そして、明日夏は腕を振るいあげ——。

スパンツ！

「いてっ」

手に持っていたハリセンで男の頭を叩いていた。——って、ハリセン！

「……なにやってんだよ——レン？」



「どうも、はじめまして。賞金稼バウンティハンダーぎやってる、夜刀神蓮火つてもんだ。気軽に『レン』って呼んでくれや」

突如として現れた男——夜刀神蓮火がへらへらと笑いながら自己紹介をする。

赤みがかかった茶髪をポニーテールにしており、結構なイケメンだ。どこか不良っぽさがあって、なんか、イケメンな不良って感じだ。

フード付きのパーカーを前を全開にして着ており、首にはヘッドホンがかけられている。そして、腰にはさっきまで振るっていた日本刀が吊るされていた。よく見ると、鞘が機械的な見た目をしており、銃のマガジンみたいなのが付いていた。

なんか、少し明日夏の刀に似ているな？

その刀を見て、なんとなくそう思った。

そんな夜刀神蓮火の頭を明日夏がもう一回、ハリセンで叩く。

「痛えな。紙でもそこそこ痛えんだぞ」

頭を擦りながら夜刀神蓮火が抗議をするけど、明日夏はそれを無視してため息を吐く。

そんなやり取りを行う明日夏と夜刀神蓮火に困惑する俺や木場、小猫ちゃん、匙。事情を知ってる様子な千秋は明日夏と同じ反応をしていた。

で、さっきの襲撃まがいのことをやられたゼノヴィアたちはアルミヤさんを除いて、夜刀神蓮火を警戒心全快で見ていた。

「——って、ん？ 夜刀神、って？」

も、もしかして！

「………ああ。このバカは槐の兄貴だ」

「どもお」

こ、このヒトが槐のお兄さん!

当の夜刀神蓮火は、バカと言われても特に気にする様子を見せず、へらへらと手を振ったあと、俺のことをまじまじと見つめてくる。

「な、なんだよ?」

男なんかそんなふうに見つめられたくないんだけど……。

「おまえがイツセーこと兵藤一誠だろ?」

「そ、そうだけど」

「おまえのことは冬夜さんや明日夏たちからよく聞いてるぜ。大層気に入られてるみたいだからな」

俺のことを興味津々になって見てくる夜刀神蓮火を明日夏が肩を掴んで自分のほうに向かせる。

「で、あんなことをしたわけは?」

ふざけた回答をしようものならいつでも手に持つハリセンを振るえるようにしながら明日夏は訊く。

「へいへい、真面目に答えますよつと。かのエクスカリバーの使い手とその同行者の実力を見てみたかったのさ。いち剣士の端くれとしてな」

夜刀神蓮火の回答に明日夏はまたため息を吐く。

「だからって、あんなことを——」

「あと、これから行動を共にする身としてな」

「——何?」

明日夏の言葉を遮って出た夜刀神蓮火の言葉に明日夏は困惑した表情を見せた。

「同行って、どういう意味だ?」

「そのまんまの意味だぜ。おまえたちと行動を共にすることにしたんだよ」

「どういうこと——まさか！」

何かを察した様子の明日夏。

「ああ。おまえが考えてるとおりだぜ」

「……………そういうことか」

一人納得している明日夏だったが、こちらとしては、まったく話が見えてこなかった。

「お、おい。何一人だけで納得してんだよ!？」

「そうだな。我々にも事情を説明してほしいのだがね？」

俺もアルミヤさんも、明日夏に説明を求めろ。

見ると、他の皆も同じような反応だった。

ただ、千秋だけは明日夏と同じ考えに至ってみたいだった。

「レンがこの町に来たのは、ある賞金首を追つてだ。で、その賞金首が——」
「なるほど。その者が今回の事件に関わっているというわけか」

明日夏のわずかな情報からすぐさまアルミヤさんが事情を察して説明してくれた。

つまり、この夜刀神蓮火が言うには、追っていた賞金首が今回の事件、墮天使によるエクスカリバー強奪事件に関わっていると。つまり、そいつとエクスカリバーを奪った連中とグルになつてゐることか。

「そういうことだ。それぞれが狙つてゐる獲物が一緒にいるんだ。なら、こつちも一緒に行動しようと思つてな。で、行動を共にする連中の実力を測ろうと思つてな」

さつきのはそういうことだったのか。だからつて、わざわざあんなふうにする必要あるか？

「普通に手合わせしてもよかつたけど、あつちのほうが緊迫感があつて、実力を見極めやすいかと思つてな」

俺の疑問を察したのか、夜刀神蓮火がそう言う。

「……手合わせ、ねえ。どっちかというと思ふぎけだったんじゃないのか？」

明日夏の言葉に夜刀神蓮火はわざとらしく「バレたか」みたいな反応をする。

えっ、さっきの思ふぎけだったのか!?

「にしても、いくら不意打ちだからって、ああまで簡単に手玉に取られるってのはちよつと不甲斐ないんじゃないかねえのか？　もし、俺がガチで敵だったら、誰かやられてたかもしれなかったぜ？」

なんかわざとらしく挑発してきた。それを聞いて、木場、小猫ちゃん、ゼノヴィア、イリナ、ライニーはあからさまに不機嫌そうになる。ユウナだけは素直に受け取って少し落ち込んでいた。全然動けなかった匙は悔しそうに歯軋りしており、俺もなんとも言えなかった。

「ま、それはいいとして。とりあえず、ここで立ち話してるのもあれだから、さっさと行

「こうぜ——情報をくれるところにさ」



「ところで、レン。おまえたちが追ってる賞金首はいったい何者なんだ？」
情報屋のところに行く途中で、俺は気になっていたことをレンに訊く。

「俺たちが追ってる奴の名前はカリス。カリス・パトウーリアだ。おまえも聞いたことあるだろ？」

レンに言われ、無言でうなずいた。カリス・パトウーリアか……。……。

厄介な奴がこの町に来たもんだ。

「そのカリスってのはどんな奴なんだ？」

イツセーの質問にレンが答える。

「罪のない人々を殺しまくった最悪な男。『はぐれ賞金稼ぎ』さ」

「はぐれ？ 賞金稼ぎにも『はぐれ』っているのか？」

「ああ。他人の手柄を奪ったり、手柄のために不必要な殺しをやったりした奴がはぐれに認定されるんだぜ。まあ、そんなにいないんだけどな」

「なんでだ？」

レンの言葉に首を傾げるイツセー。

「はぐれに認定されれば、ハンターの仕事ができなくなるのは当然として、多額の賞金をギルドにかけられて、全ハンターに狙われるからな」

そのことが抑止力になって、はぐれになる奴は少ない。

「もつとも、目先の欲にかられて、魔が差す奴もそれなりにいるんだけどな」

だが、それでもあくまで少ないだけであり、レンの言ったように、はぐれになる奴は

確実にいる。

賞金稼ぎはその仕事柄、ハンターになる奴の理由が大抵は金銭欲からくるものだ。パウンティハンターそして、そういう奴にはわりと金に執着して問題を起こすようなならず者みたいなものが多い。そういう奴の中から、本当に問題を起こす奴が出てきて、はぐれになるのだ。

だが、カリス・パトウーリアははぐれになる奴らの中で例外なタイプだった。普通のはぐれハンターが金への執着からはぐれになるのに対し、カリス・パトウーリアには賞金に関して無頓着だった。賞金のことは二の次で、賞金首の遺体そのものを目的にして行動している節があった。実際、他のハンターが目をつけられないような大した賞金をかけられていない賞金首を進んで狩っていたしな。

「カリス・パトウーリアはどうやら研究者みたいだな。なんらかの研究のために遺体を回収してたみたいなんだ」

なんらかの研究。それがどういうものかはさておき、賞金首には人間もいる。つまり、人の死体を使った研究をしていたのだ。それだけでも、カリス・パトウーリアが非人道的な奴なのは明らかだった。

「そのことに関しては、賞金をかけた奴を積極的に狩ってくれてくれることで、ギルドはあまり気にしなかつたんだよな」

賞金首になるのは一般人に被害を及ぼす存在だ。それを積極的に狩ってくれるのなら、多少の非人道的な研究を行っている可能性についてギルドは目を瞑った。

「だが、いつからか罪のない一般人にまで手を出し始めたんだよ。……把握できてる限りだと、累計五万はいつてるぜ」

『——っ!?!』

レンの言葉にイツセーたちは絶句する。

そう、カリス・パトゥーリアは累計五万人ものの罪のない一般人を殺してる。老若男女問わずな。しかも、これはあくまで罪のない人々での数だ。犯罪者なんかも含めれば、さらに増えるだろう。

「そして、殺した人間のほとんどの遺体はやっぱり回収してる。一体どういう研究をするつもりなのかはわからないが。ま、ろくでもないことなのは間違いないと思うけど

な」

さつきからへらへらしていたレンだったが、いまの話をしてるときだけは目を細めて嫌悪感を出していた。

悪戯好きで悪ふざけがすぎるこいつだが、それなりの正義感を持っている。特に、カリス・パトウーリアみたいな罪のない人を手にかける輩には最大級の嫌悪を示す。

「しかも、カリス・パトウーリアは自ら進んではぐれになった可能性もある。そりやそうだろうな。研究のために必要な材料が向こうからやってくるんだからな」

はぐれになれば全ハンターから狙われる。つまり、自身を狩りにきたハンターを返り討ちにするのを繰り返し返してれば、自然と研究のための材料を手でできる。そのために進んではぐれになった可能性があった。そして、実際にカリス・パトウーリアによつて返り討ちにあつて帰つてこなかったハンターは多かつた。つまり、カリス・パトウーリアはそれだけのことを行える実力、もしくは戦力を持つてる可能性があつた。ゆえにカリス・パトウーリアに与えられたランクは最上級の『S級』だつた。かけられた賞金も膨大だ。

おまけに、なかなか所在を掴ませない男でもあった。

そんなカリス・パトゥーリアがこの街にいて、なおかつ、エクスカリバーを奪った連中と行動を共にしている。

いつたい、どういう目的があつて？

「お、そういうふうしているうちに着いたぜ」

俺たちがたどり着いたのは、繁華街の一角に位置する地下バーだった。

地下への入口の上に店の名前が書かれた看板があつた。店名は『JB』。

「ここに情報提供者がいるのかね？」

アルミヤさんの質問にレンがうなづく。

「ああ。ここはその情報提供者である情報屋が経営してる店なんだよ」

この店のマスターが俺たちがこれから会おうとしている情報屋。そして、このバーは

マスターから情報を買うために集まるハンターたちの溜まり場にもなってる。むろん、普通のお客のためのバーでもある。

「……なあ、学生の俺らがこんな時間にいちやヤバい場所じゃないのか?」

匙の言う通り、本来なら、この時間に学生である俺たちがこんなところにいるのは問題があるのだが、幸い、このバーが位置してる場所は比較的人通りが少ないから人目にはついてない。そして、このバーのマスターも、顔見知り相手ならそういうことを気にしないヒトだ。

「じゃ、早速入るとするか」

レンが俺たちを引き連れて入ろうとするが、イリナが入口の前に立ててある看板を見てレンに訊く。

「ねえ、これに『貸し切り中』って書いてあるわよ?」

「ああ、それ、俺たちのことだから、気にしなくていいぜ」

あのヒト、わざわざ俺たちのために貸し切りにしてくれたのか。

入口を通って階段で地下一階に下りる。

シックな感じな扉を開けるとベルが鳴り、髪を後頭部でまとめて結び、バーテンダーの格好をした女性がカウンター越しに出迎えてくれた。

「いらっしやい、レンくん。明日夏くんに千秋ちゃんも」

挨拶をくれた女性の名前は番場樹里ほんぼしゆりさん。このバーのマスターである。この店の名前も、このヒトが自分の名前のイニシャルからつけたものだ。

樹里さんはシェイカーを振りながらイツセーたちやゼノヴィアたちの初対面組に視線を向けて挨拶する。

「それから、はじめましてね。グレモリーとシトリーの眷属悪魔や教会の戦士の皆さん。私はこのBAR『JB』のマスターをやってる番場樹里よ。立ち話もなんだから座って座って」

樹里さんに促されて、俺たちはカウンター席に座る。

「何か飲む？ 私の奢りよ。お酒はダメでしょうから、ジュースかノンアルコールカクテルを作つてあげるわ」

そう言われ、俺たちはそれぞれ別の果物ジュース（ライニーはいらなと言っていたが、ユウナが勝手に頼んだ）、アルミヤさんはミルクと答える。

レンは樹里さんがいましたがた作つたノンアルコールカクテルを出してもらつて飲んでいた。レンが来るのに合わせて作つてみたいだな。

そして、黒のセーラ服風な制服の上からエプロンを着けた少女が俺たちの頼んだジュースやミルクを持ってきた。

「あつ、槐」

「このあいだぶりだな、イツセー」

イツセーが頼んだリングジュースをイツセーの前に置いた槐がイツセーと軽く挨拶し合う。

槐が他の飲み物を置いたところで、レンが槐のことを知らないメンツに紹介する。

「こいつは俺の妹の夜刀神槐だ」

「はじめまして」

槐は木場のほうに視線を移すと、頭を下げる。

「あのおときはすまなかつた」

頭に血が昇つて暴走する木場を止めるために一撃かましたときのことだな。

そのことを思い出した木場は気にしてないように手を振る。

「気にしないでください。僕もあのおときは冷静じゃなかつたから。強引にでも止めてくれて感謝してますよ」

そんな木場と槐のやり取りを怪訝そうに見ていたイツセー、千秋、塔城、匙に俺が事情を説明してやる。

そのあと、木場たちも槐と樹里さんに軽く自己紹介する。

「さて、早速本題に入りましょうか」

「すみません。ハンターでもない俺たち相手に」

「いいのよ」

俺と樹里さんの会話を訝しんだイツセーが訊いてくる。

「どういうことだ、明日夏」

「樹里さんはハンター相手専門の情報屋なんだよ」

だから、本来はハンターでもない俺たちに情報を売らないはずなんだ。

「明日夏くんたちなら、別にいいわよ。知らない仲じゃないから、特別に情報は売ってあげるわよ」

樹里さんはそう言うけど……。

「……あんまり、俺たちのことを特別視すると、樹里さんにまでいらぬ被害を受けますよ」

「どういうことだ、明日夏？」

「兄貴たち、それにレンや槐は他のハンターにあんまり好かれてないからな」

樹里さんが俺に続いて言う。

「ただの大人気ない妬みよ。最近、この子たちのような若い子のハンターが活躍しまつてくるもんだから、大人気ない大人たちが妬んでるのよ」

そう、どういうわけか、最近では若手のハンターが台頭しており、いまじや、活躍している上位ランカーのほとんどが若手だったりする。

おまけに政府やギルドも若手を優遇気味なところがあつた。

そのことが大人のハンターたちにとっては気に入らなく、妬んでいるのだ。

しかも、その若手ハンターの台頭の煽りを食って、大人のハンターが仕事にあぶれることが多くなり、大人たちはますます若手ハンターのことを目の敵にしているのだ。

「特に数年で最高ランクのAランクになった明日夏さんと千秋ちゃんのお兄さんの冬夜くんとか、レンくんと槐ちゃんのお兄さんのリンくんみたいな子のことを目の敵にしてる人が多くてね」

そして、そんな兄貴の弟、妹だつていうことで、ハンターでもないにも関わらず、俺や千秋のことまで目の敵にしたり、陰口を叩く奴がいる。

別に俺も千秋もそのことは気にしてないが、その矛先が他の誰かに向くのは我慢できなかつた。

そして、樹里さんは顔馴染みを優遇する傾向があり、おまけに細かいことを気にしない性分なヒトなので、ハンターでない俺や千秋のことも優遇してくれるのだが、そのせいで俺たちに向けられる敵意が樹里さんに向くんじやないかと心配になってしまう。

「気にしなくていいわよ。そうなつても私は気にしないし、そんなヒトと商売もしたくないしね。もし、妙なことをしてくるような輩がいても、自力でぶちのめせるし」

樹里さんは屈託のない笑顔で物騒なことを言う。

このヒト、実は元Aランクのハンターで、結構な実力者でもあったらしい。

情報屋になつたいまでも、その実力は衰えていないみたいで、仮にそのようなことをしてくる輩がいても返り討ちにしてしまうだろう。

「さて、このお話はおしまい。これを見てちょうだい」

樹里さんはカウンター下から数枚の写真を取り出す。

「これらの写真に写ってるのは、今回のエクスカリバー強奪事件に関わっている人物で私が把握している者たちよ。まず、こつちがレンちゃんと槐ちゃんが追ってるS級賞金首のはぐれハンター——カリス・パトウーリアよ」

その写真には、メガネをかけた若い男性が写っていた。いかにも研究者つて風貌だった。

「そして、これが資料だけど……ゴメンなさい。あなたたちがすでに知ってるような情報しかないわ」

渡された資料に目を通すが、ここに来るまでに話した内容しか書かれていなかった。よっぽど、隠れるのがうまいみたいだな。

そのへんも含めて、S級に認定されているのだろう。

「さて、次は——」

樹里さんが次に見せた複数枚の写真。どうやら、今回の事件に関わっているはぐれエクスシストの写真のようだ。そのうちの一枚にはフリードが写っていた。

「——ッ！」

そして、ある一枚の写真を見て、ライニーとユウナが目を見開く。

その写真には、俺たちとそう変わらない年齢と思しき少年が写っていた。

二人の反応からして、おそらく、こいつがベルティゴ・ノーティラス。二人にとって、因縁浅からぬ男。

そして、ある写真を指差しながら、樹里さんは木場に言う。

「この男の名前はバルパー・ガリレイ。あなたが復讐相手として追い求める男よ」
「——ッ！」

それを聞いて、木場は瞳を憎悪の色に染めあげて、鋭い視線でバルパー・ガリレイの写真を睨む。

こいつがバルパー。メガネをかけた初老の男性で、見た感じは好好爺然とした風貌だ。

「そして、最後に——」

樹里さんが最後に一枚の写真を取り出す。

「この男がコカビエル。墮天使の組織、『神の子を見張る者』の幹部であり、今回の事件の首謀者よ」

樹里さんの言葉に俺たちは目を細める。

こいつがコカビエル。ウエーブのかかった長い黒髪と長い耳を持った男だった。

「間違いなく、戦ったら一番危険な相手よ。かつての大戦を生き残った、墮天使の中でも武闘派の幹部なのだから」

その情報だけでも、いまの俺からしたら、天上な存在なのは確かだった。

「残念だけど、コカビエルに関してはそんなに情報がないの。ゴメンなさいね」

まあ、俺たちの目的はエクスカリバーを木場に破壊させること。コカビエルと戦うことじゃない。エクスカリバーを破壊したら、希望的だがコカビエルが戦わずにこの町から去る可能性だってあるからな。

「尋ねるが、彼らが潜伏している拠点などの情報はないのかね？」

アルミヤさんがそう訊くと、樹里さんは新たに三枚の写真を取り出した。

「その三ヶ所で彼らがときおり出入りしているのが確認できたわ」

出された三枚の写真をみると、どれも見覚えのあった場所だった。

以前、俺がはぐれ悪魔を退治した廃工場。イツセーたちがバイサーというはぐれ悪魔を退治した廃屋と理性を失くしたはぐれ悪魔を退治した廃工場だった。

人気がない場所だから、おそらく、前線基地的な場所として利用していたのだろう。

「残念ながら、潜伏場所まではわからなかったわ」

なんも手がかりがないのに比べれば全然マシだった。

写真を見て、アルミヤさんは顎に手を当てて言う。

「ふむ。となると、その場所に何かかしらの手がかりが残っているやもしれん。三手に別れてそれぞれの場所を調べるのがいいだろうな」

「なら、俺と槐はここ。明日夏たち悪魔組はここ。教会組はここ。それでいいか？」

レンの言葉に誰も異論は唱えなかった。

「何かあったら、俺のスマホに連絡をくれ」

「では、そちらは私のスマホに」

レンとアルミヤさんはそれぞれのケータイ番号を交換する。

「じゃあ、こっちは——」

「あつ、こっちはイツセーくんのスマホに連絡を入れるわ。番号ならおばさまからいた
だいてるから」

「なっ!? マジかよ! 母さん! 勝手なことを!」

勝手なことをされて憤るイツセー。

おばさんのことだから、昔馴染みが現れたから、「電話でもしてみれば?」的な感じ教
えたのだろう。

「じゃあ、俺たちはおまえのスマホに連絡を入れるぞ?」

「ええ。はい、これ番号」

イリナから番号が書かれたメモ用紙を受けとる。

「じゃあ、こっちは明日夏のスマホに連絡を入れるぜ。そっちらからは槐に」

今後の方針が決まり、『JB』をあとにしようと立ち上がる。

「じゃ、あとで情報料をはいつもの場所に振り込んでおきますよ」

今回の情報料は俺が全部払うことにしていた。

「ええ。それよりも、気をつけてね。コカビエルもそうだけど、他の面子も危険なのばかりだから」

樹里さんの言葉に軽くうなずき、店を出ようとする。

「あつ、そうだ！ 兵藤一誠くん！」

扉の前に来たところで、樹里さんが思い出したようにイツセーのことを呼び止める。

「えっと、どうかしましたか？」

「サービスよ。『パニシング・ドラゴン白い龍』はもう目覚めてるわ」

「——っ！」

それを聞いて、イツセーは緊張した面持ちになる。

『パニシング・ドラゴン白い龍』——二天龍の片割れ。イツセーがいざれ出会い、戦う宿命にある存在、『白龍皇』。

イツセーの様子からして、もう知ってるみたいだな。籠手に宿るドライグにでも教えてもらったのかもな。

「しかも、グリゴリに属しているわ」

「なっ?!」 つまり、ヘタをすれば、今回の騒動に介入してくるかもしれないってことか
!

イツセーもその考えに至ったのか、神妙な面持ちになっていた。

「とにかく、気をつけてね」

樹里さんのその言葉を最後に、俺たちは『JB』をあとにし、それぞれの担当の場所に向かった。

Life. 10 行動、バレました!

樹里さんからの情報で、連中がここ最近出入りしていたという三ヶ所の場所を知った俺たちは、三手に別れてそれぞれの場所を調べることにした。

そして、俺、イツセー、木場、千秋、塔城、匙はそのうちのひとつ、以前、はぐれ悪魔バイサーが潜伏していた廃屋のところまでやってきた。

「さて、例のはぐれ神父たちはまだいるかねえ?」

廃屋を見ながら、匙が呟く。

「……できることなら、いてほしいね。他の二ヶ所のほうにいて、僕が相手をする前に彼らに倒されるなんてことがあつたら困るからね……特にバルパー・ガリレイ! 彼だけは僕の手で……!」

「落ち着け、木場」

いまにも駆けだしそうな勢いの木場を諫める。

木場は同士の真の仇といえるバルパー・ガリレイが今回の事件に関わっていることを知ってから、気持ちが悪く先走り始めていた。しかも、真の仇を知っても、それはそれでエクスカリパーに対する憎しみも健在だ。正直、バルパー・ガリレイとエクスカリパーが同時に現れたら、今度こそ本当に暴走しかねないほどの危うさがあった。事前情報なしで遭遇したら確実に暴走していただろう。

「まだ潜伏している可能性はあるんだ。慎重に行くぞ？」

俺は皆に、とくに木場に言い聞かせるように言う。

イツセーたちがうなずき、木場もとりあえずうなずいてくれた。

俺と木場が先頭になって進む。

俺たちの目的は木場に想いを果たしてもらうこと。そうなると、必然的に木場を中心に、俺たちはそのサポート。ただし、自分の力だけで決着をつけたいのが本人の意向なので、サポートは必要に迫ったときだけだ。

俺が木場と一緒に先頭にいるのは、いざつてときの木場のストップパー役だ。

「——ッ!?」

突然、俺と千秋以外の皆が表情を険しくした!

同時に上から殺気が!

「上だ!」

俺が叫び、全員が上を見る!

「イヤッホー!」

長剣を構えた白髪の少年神父が木場に斬りかかってきた!

「ガキイイイン!」

「ぐっ!」

瞬時に魔剣を創りだした木場はその斬撃を魔剣で受け止めると、少年神父——フリードを上弾く。

「よっつ」

フリードは弾かれた勢いを利用して、宙返りをしながら廃屋の屋根に着地する。

「このあいだはどーもー」

フリードは俺と木場の後ろにいるイツセーと塔城を視界に捉える。

「おんやあ。いつぞやのガキとチビ——あわわ!? 小柄のお嬢さん!」

フリードはあのとときと同じように塔城のことを「チビ」と呼ぼうとしたが、塔城の一睨みで慌てて訂正した。

「へへ、待ってたぜ。まさかこっちに来たのがおまえらだとはな」

「………何?」

ふざけた口調に嫌気がさして思わず聞き逃しそうになったが、奴はいま「待ってた」と言った。さっきの奇襲といい、いまの言葉といい、つまり――。

「待ち伏せされたか!」

『――ッ!?!』

俺の言葉にイツセーたちが驚愕する。

「あのとぎのメンバーが来るなんて、これはまさしく、運命の赤い糸で結ばれちゃってるのかなあ! きやあああ!」

ふざけた言動にイラツとしつつも、俺は現状の把握に努める。

待ち伏せされたつてことは、こちらの動向を把握していたことになる。

なぜ把握された?

まさか、ゼノヴィアたちを監視していたのか?

「待ち伏せされていようと関係ない。この場でキミをエクスカリバーもろとも切り捨てることに変わりはない！」

木場は勇ましく魔剣を構える。

イツセーも『ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手』を、俺は雷ライトニングスラッシュ 刃を構える。

「千秋、塔城！ 他の場所に向かったメンバーに連絡を！ おそらく、そっちも待ち伏せされてる！」

「うん！」

「はい！」

俺は改めて、フリードのほうを見る。

奴はテンションが上がっている様子で、手に持つエクスカリバーの刀身を舐めていた。

「おやあおやあ、六人がかりい？ いやいやあ、人気者は辛いつスねえ♪」

「誤解するな。僕ひとりが相手だ!」

木場がフリードに向かって飛び出した!

「まあ、クソ悪魔共とクソ人間共が何人来ようとお、このエクスカリバーちゃんの相手にはなりませんぜ!」

フリードの体が一瞬ブレたと思った瞬間、フリードが消え去った!

「もらったあああッ!」

いつのまにか木場の頭上に現れたフリードが木場に斬りかかる!

「ぐっ!」

木場はなんとか、手に持つ魔剣でフリードの斬撃を防ぐ。

「これが、聖剣エクスカリバー！　人呼んで、『天閃エクスカリバー！ラビッドリイの聖剣』！　俺呼んで、ちよつぱやの剣！」

再び、フリードが消え去った！

違う！　あれは消えたんじゃないやなく、目に見えないほどの速さで動いてるのか！

「——ッ！」

木場も対抗して『騎士ナイト』の速さで応戦する！

「チツ、木場と同じ速度で動いてやがる！」

「これじゃ、『騎士ナイト』のスピードが封じられたも同然じゃねえか!？」

イツセーの言うとおり、木場にとって、持ち味のひとつである速さを実質封じられたのは痛い！

なんとかして、フリードの動きを止めねえと！

「あ、そっちのキミたちい。もしヒマなら、彼らの相手をしてあげてくれないかなあ♪」
「何!?!」

すると、廃屋からぞろぞろと神父たちが現れた。

ざっと、二十人はいるな……

神父たちは一様にエクソシスト用の光の剣ではなく、木場の魔剣のような形状の剣を手にしていた。

「「なっ!?!」」

すると、神父たちが持つ剣を見たイツセー、塔城、匙が表情を険しくした!

「どうした!?!」

「ヤバいぞ、明日夏……あいつらが持つてる剣、エクスカリバー程の悪寒は感じないけど、間違いない! 全部聖剣だ!」

「なんだと!?!」

俺は改めて神父たちの持つ剣を見る。

たしかに、波動がエクスカリバー程の強さじゃないが、エクスカリバーと同種のものだった！

あれが全部聖剣だ?!?

奪われたのは、エクスカリバーだけじゃないのか！

だが、そんなことを気にしている余裕はない！

……マズいぞ。エクスカリバーを持ったフリードだけでも厄介なのに、さらに聖剣を持った神父が複数！

俺や千秋はともかく、悪魔であるイツセーたちにとっては最悪すぎる状況だ！

「僕に構わず、イツセーくんたちは自分の身を守ることを優先するんだ！」

木場がフリードと斬り結びながら叫ぶ。

だが、木場だけでフリードを倒すのは厳しい。

こんな状況じゃ、撤退もできない。何より、木場と同等の速さで動くフリードに背中を見せるのはリスクが高すぎる。

こうなったら……！！

「イツセー! あの神父たちは俺と千秋が食い止める! おまえはそのあいだにパワーを溜めて、隙を見て『譲渡』で木場のサポートをしろ!」

「なっ、明日夏!?!」

「塔城、匙! おまえたちはイツセーの護衛を頼む! もし、俺と千秋を抜けた奴がいたら、対処してくれ」

「明日夏先輩!?!」

「ちよっ、おい、土騎!?!」

「行くぞ、千秋!」

「うん!」

何か言いたそうな三人を置いて、千秋と共に聖剣を持った神父たちに向けて駆けだした!



クソッ! 二人だけで聖剣を持った神父たちを相手にするなんて、無茶だ!

だけど、悪魔である俺たちが聖剣を持った神父たちと戦うのもリスクがありすぎるのもたしかだ。

それに、一番ヤバいのは木場のほうだ。相手はエクスカリバーだからかかるだけでもヤバいのに、自慢のスピードを実質無効にされてるし、多彩な魔剣もエクスカリバーと打ち合うだけで破壊されるし、何より相手のフリードが強い。正直、俺たちがサポートしないと、ヤバいのはたしかだ。

「はあッ！」

「——ッ!？」

千秋が発生させていた風が神父のひとりを持つ風を発生させている聖剣で切り裂かれた！

「トドメだ！」

神父が千秋に斬りかかる！

「——ッ！」

だけど、千秋はバク転で神父の斬撃を躲した！

「たあッ！」

「ぐあっ!?!」

千秋はそのまま逆立ちの体勢から体を回転させて神父の首筋に蹴りを叩き込んだ！
明日夏も体に電気を流す身体強化で動き速くすることで聖剣による剣戟を掻い潜りながら、ナイフで着実に神父たちを倒していた！

「悪魔め！」

「滅してくれる！」

すると、神父が二人、明日夏と千秋を抜けてこちらに向かってきた！
小猫ちゃんと匙が俺の前に出て身構える！

「ぐあっ!？」

「何っ!？」

だけど、明日夏が後ろにオーラの腕を伸ばして神父二人を捕まえた!

そんな明日夏を狙って神父たちが斬りかかるけど、明日夏は後方に飛んで躲す!

「ふうううッ!」

『グアアアアアッ!』

明日夏はオーラの腕を振り上げ、自分に斬りかかってきた神父たちに捕まえた神父二人を叩きつけた!

この調子なら、明日夏と千秋は案外大丈夫かもしれない。

これなら、木場のサポートに集中できる!

そう思った瞬間――。

「悪魔め! 覚悟しろ!」

「なっ!？」

「——ッ!?!」

背後から五人の神父が聖剣を手に斬りかかってきた!

こいつら、後ろに潜んでやがったのか!

「クソッ!」

俺は慌てて斬りかかってきた神父の斬撃を籠手で防ぐ!

だけど、さらに他の神父も斬り込んできた!

ヤバい! 斬られる!

そう思った瞬間——。

「え?」

神父たちの後方から誰かがものスゴいスピードでこちらに向かって走ってきていた

!

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

神父たちの聖剣が俺に届くまえに走ってきた誰かが神父たち全員をすれ違いざまに切り裂いた！

「無事か、イツセー！」

「槐!？」

俺を助けてくれたのは、別の場所に行っていたはずの槐だった！

「槐！　なんでここに!？」

「ああ、実は兄上が私たちを監視している者がいることに気づいていてな。おそらく、待ち伏せされているだろうと、兄上におまえたちのところに援軍に行けと」

それで急いで駆けつけてくれたわけか。

「もう後方に神父は潜んでいないのは確認した。おまえたちはあいつのサポートを！」

明日夏たちのほうは私に任せろ！」

そう言つて、槐は明日夏たちのもとまで駆けだしていった。

「兵藤、大丈夫かよ！」

「ああ、なんとかな」

槐が来たことは予想外だったけど、頼りになる援軍が来てくれたぜ。

見ると、槐は明日夏と千秋と抜群の連携で神父たちを薙ぎ倒していた。

これなら、明日夏たちの心配はいらないな。これで木場に集中できる。

木場のほうを見ると、木場の攻め方に変化が出てきていた。

周囲から様々な形の魔剣を出現させてフリードを攻撃し、さらにその魔剣を足場にしながら縦横無尽に動き回り、魔剣から魔剣へ移動するときに魔剣をフリードに投げつけながら斬り込んでいた！

「甘えよー！」

「だけど、フリードもだんだんと木場の動きに対応して、飛んでくる魔剣を一本一本確実に落とし、木場の斬撃も防いでいた！」

『ブースト!!』

「そうこうしているうちに着々とパワーが溜まってきていた。」

「だけど、二人の動きが速すぎて、全然譲渡できるタイミングがない！」

「クソッ！　なんとか奴の足を止められりや、木場に力を譲渡してやれるのに！」

「すると、匙が言う。」

「兵藤、足を止めればいいんだな？」

「え？」

「ラインよ！」

匙の手が光輝き、手の甲にかわいくデフォルメ化されたトカゲの頭らしきものが装着

されていた!

「いまだ! 行け、ライン!」

トカゲの頭から黒く細い舌がフリード目掛けて飛んでいく!

「うぜえッス」

フリードがそれをエクスカリバーで薙ぎ払おうとするが、トカゲの舌は途中で軌道を変え、ピタッとフリードの左足に張りつき、そのままグルグルと巻きついた!

「おわあっ!?!」

足を引っ張られたことでバランスを崩したフリードはその場に倒れこんだ!

「見たか! 俺の神セイクリッド・ギア器、『黒い龍脈』だ!」

「おまえも神セイクリッド・ギア器を!」

「ああ！ ついでに、おまえのと同じドラゴン系だぜ！」

やるじゃねえか！ それも、俺と同じドラゴンって！ どこまで俺たちは似てるんだよ！

「そおりやあ！」

匙はトカゲの舌を引っ張り、フリードの動きを封じる。

「クソ！ クソツ！ クソオツ!？」

フリードはトカゲの舌を斬ろうとするが、ビクともしていなかった。

「ク、クソツ．．．．．なんだよ、力が．．．．．」

すると突然、フリードが目に見えて疲労感をあらわにし始めた。

「へっ、どうだ！ こいつにはラインを繋げた相手の力を吸いとる能力があるんだぜ！」

相手の力を吸いとるか。相手の動きも封じれるし、エクスカリバーでも斬れないし、かなりスゴい神セイクリッド・ギア器を持つてるじゃねえか。

「う、うわあッ!?!」

突然、俺は浮遊感に襲われた！

見ると、小猫ちゃんが俺を持ち上げていた!?!

「……行きますよー！」

「え、えっ、ちよ、ちよつと!?!」

俺は小猫ちゃんによつて豪快に投げだされた！

「うわあッ!?! 小猫ちゃああん!?!」

「なんだあ?」

悲鳴をあげながら飛んでくる俺を見たフリードは流石に呆気に取られていた。俺はそのまま弧を描きながら真っ直ぐ木場に近づいていく。

「イツセーくん!?!」

「木場あああッ!」

『トランスファー!!』

木場に飛びついた瞬間、木場に力を譲渡した!

「ドラゴンの力、たしかに送ったぞ!」

高めた力が木場に譲渡され、木場のオーラの質が格段に上がった。

「……………受け取ってしまったものは仕方ないな。ありがたく使わせてもらうよ!」
「なあにイツ!」

「行くぞー!」

「——ッ!」 このベロベロがあー!

『ソード・パース
魔劍創造』 ツ!」

無数の魔劍が出現し、足を封じられたフリードに一気に襲いかかる。

フリードもエクスカリバーによる斬撃で対処するが、その表情は焦りに満ちていた。
このまま行けば押し切れるか!

「フツ、『ソード・パース
魔劍創造』か。使い手の技量次第では無敵の力を発揮する神
器」
セイクリッド・ギア

突然、この場に第三者の声が届いた。

「誰だ!」

木場が呼びかけると、廃屋から一人の初老の男が現れた。

「何っ!?!」

木場が老人を見て仰天した！

なぜなら、俺たちはこの老人のことを知っていたからだ！

「バルパー・ガリレイツ！」

木場が憎悪に満ちた声で老人の名を叫んだ。

そう、この男がバルパー・ガリレイ。アルミヤさんが言っていた、聖剣計画の首謀者！

樹里さんに見せてもらった写真と同じ顔だから間違いない！

「いかにも」

バルパーは堂々と肯定すると、木場からフリードのほうを見て言う。

「フリード、まだ聖剣の使い方が十分ではないようだな？」

「おおお！ バルパーの爺さん！ そうは言うがねえ、爺さん！ このクソトカゲのベ

ロベロが邪魔で邪魔でえー！」

「身体に流れる因子を刀身にこめろ」

「——流れる因子を刀身にねえ」

言われたことを実行したのか、聖剣の波動が強くなり輝きが増していた！

「気をつけろ！ ヤバいぞ！」

ものスゴい悪寒を感じた俺は思わず叫んだ！

「おお！ オツホオオオツ！」

ズバツ！

「うわツ!?!」

さつきまでびくともしていなかったトカゲの舌があっさり斬られ、抵抗力を失ったせ

いで匙は後ろに倒れてしまった！

「なるる♪ 聖なる因子を有効活用すれば、さらにパワーアップてか。それじゃ——」

フリードの視線が木場を捉える。

マズい！ いまの奴の力はさつきとは比べ物にならない！

「俺さまの剣の餌食になってもらいやスカああッ！」

フリードが木場に斬りかかる！

「はあッ、死ねええええッ！」

ガキイイイイン！

「ありがたいい？」

誰かが木場とフリードの間に割って入り、フリードの剣を止めた!

「ゼノヴィア!」

割って入ったのはゼノヴィアであった!

「ヤッホー!」

そして、この場にイリナを先頭にアルミヤさんを除く残りの教会のメンバーが現れた!

「なんでここに!?!」

別の場所に向かっていたはずのゼノヴィアたちがここにやって来たことに驚愕しながら訊いた。

すると、イリナが言う。

「ゴメンなさい。実は私たちが監視していたヒトたちのことには気づいていたの。だから、待ち伏せされることは予測してたの。だからあえて監視させ、別れたように見せかけて、裏をかいてここにやって来たってわけ」

マジか！ 槐と同じ理由かよ！

「アルミヤさんは？」

「アルさんはそのまま、私たちが向かうはずだった廃工場に行ってるわ。大丈夫。アルさんなら、一人でも大丈夫よ」

イリナがそう断言するのなら、大丈夫なのだろう。

「それにしても、まさかこれ程の聖剣使いがいるなんて……」

イリナは聖剣を持った神父たちを見て、我が目を疑っていた。

「バルパー・ガリレイ、この大量の聖剣はどうしたの！」

イリナがバルパーに聖剣のことを問い詰めた。

「協力者が快く提供してくれたのだよ。聞けば、独自の情報網を駆使して発掘した聖剣を錬金術で複製したものらしい」

奪われたわけじゃなく、誰かが提供したのか。

「叛逆の徒、フリード・セルゼン、バルパー・ガリレイ！ 神の名のもと、断罪してくれるー！」

「ハッ、俺たちの前でその憎たらしい名前を出すんじゃないやねえ！ このビッチがあー！」

斬戟を繰り広げ始めるゼノヴィアとフリード。

「はあああッ！」

そこに木場も斬りかかり、フリードは上に飛んで躲す！

フリードはそのままバルパーの隣に着地する。

「フリード」

「んあ?」

「待ち伏せを読まれたうえにエクスカリバーを持った者が二人も現れては部が悪い。ここは退くぞ」

「合点承知の介!」

バルパーはゼノヴィアたちを見据えながら言う。

「教会の犬共よ。その聖剣だが、ほしければくれてやるぞ。少々、粗悪品なのでな。それに提供された聖剣はまだまだある」

なつ、まだ聖剣があるのかよ!?

「行くぞ、フリード」

「あいよ」

フリードが懐から何かを取り出した！
あれは！

「はい！ ちゃらば！」

カツ！

『——ッ!?!』

フリードが地面にそれを叩き着けると、辺り一面を閃光が包んだ。
閃光が止むと、フリードとバルパーがいなくなっていた。

「追うぞ、皆！」

ゼノヴィアを筆頭に教会組の四人がこの場から駆けだした。

「——ッ！」

木場も四人のあとを追うように駆けだした!!

「お、おい！ 待ってくれ、木場あ!?!」

「あのバカ！ イッサー、木場は俺に任せろ！ おまえらは一旦退け！」

「私も行くぞ！」

そう言うと、明日夏と槐は木場を追いかけていつてしまった！

「お、おい、明日夏と槐まで！ たくつ、なんなんだよ、どいつもこいつも！」

取り残されてしまった俺は毒づく。

「まったく、困ったものね」

「えっ!?!」

聞き覚えのある声に俺たちは振り返ると――。

「部長!？」

「会長!？」

険しい表情の部長と生徒会長の姿があつた!

「……………ゴメン、バレたわ」

部長の隣には申し訳なさそうにしている燕ちゃんとニコニコフェイスで困り顔になつていた朱乃さん、会長の隣には会長と同じく険しい表情の真羅副会長もいた!

「これはどういうことなのかしら、イツセー?」

「説明してもらえますね、サジ?」

「ひえええええっ!?!」

俺と匙は一気に青ざめた!



「………エクスカリバーの破壊って、あなたたちね」

額に手を当て、極めて機嫌のよろしくない部長。

あのと、俺、千秋、小猫ちゃん、燕ちゃん、匙の五人はバイサーがいた廃屋の中で正座させられていた。

「いくら不干渉とはいえ、事態の把握だけはしておきたいから、教会の五人を朱乃たちに見張らせていたのよ」

「えっ!?!」

それじゃ、最初から俺達の計画、部長にバレてたってことじゃねえかよ!

「サジ」

「ヒイツ、は、はい!」

「あなたはこんなにも勝手なことをしていたのですね?」

「ヒツ!」

「本当に困った子です」

「あうう……。す、すみません、会長……」

会長のほうも冷たい表情で匙に詰め寄っていた。

匙の表情が危険なほど青い。よほど怖いんだろう。

「それじゃ、祐斗はそのバルパーを追い、明日夏は知り合いの子と一緒に祐斗のブレーキ役として祐斗を追って行ったのね?」

「はい。ゼノヴィアたちと一緒に。何かあったら、連絡くれると思うんですが……」
「そうね、復讐で頭がいっぱいの祐斗はともかく、明日夏なら連絡をくれるでしょうね」

たしかに、木場のあの様子じゃ、悠長に連絡なんて寄越さないだろうな。

そうになると、ブレーキ役として明日夏と槐が行ったのは正解だったのかもしれない。

「小猫」

「……………はい」

部長の視線が小猫ちゃんに移る。

「あなたもどうしてこんなことを？」

「……………私も、祐斗先輩がいなくなるのはいやです……………」

「千秋、燕、あなたたちや明日夏も？」

「……………はい」

部長の問いかけに千秋と燕ちゃんはうなずいた。

「……………木場先輩を放っておけませんでしたし、木場先輩のためにはがんばるイッセー兄のお手伝いをしたかったです」

「……………私や明日夏も同じ思いです」

小猫ちゃんも千秋も燕ちゃんも、それぞれ自分の思いを口にした。

「…………ふう、過ぎたことをあれこれ言うのもね。ただ、あなたたちがやったことは、悪魔の世界に影響を与えるかもしれないなかったのよ。それはわかるわね?」

「…………はい」

俺たちは同時にうなずいた。むろん、承知だった。けれど、やっぱり、浅はかだったかもしれないなかった。

「…………すみません、部長」

「…………すみません」

俺たちは深々と頭を下げた。

スパアアアーン!

「ひいあああああつ!?!」

！
突然の轟音と匙の悲鳴が聞こえ、そちらを見ると、会長に尻叩きされている匙がいた

「あなたには反省が必要ですね！」

「うわあああん！ ゴメンなさい！ 会長、許してください！」

「ダメです。お尻叩き千回です」

よく見ると、会長の手に魔力が帯びていた！

「尻叩きにまで魔力を!? 効きそー．．．．ハッ、まさか、部長も!?!」

俺は部長の方を見る。

「イツセー、小猫」

部長が立ち上がり、俺と小猫ちゃんに近づくと！

やられる!　なんて思っていたら、部長が俺と小猫ちゃんを強く抱きしめた。

「・・・・・・・・バカな子たちね。本当に心配ばかりかけて・・・・・・・・」

やさしい声音で言う部長。

うう、部長おおお!　そこまで俺たちのことを心配してくれたんですねえ!

俺はやさしい主さまに心底感動していた。

「うわあああん!　会長おおお!　あっちはいい感じで終わってますけどおおお!」

「よそはよそ、うちはうちです!」

匙の尻叩きはいまだ終わりを見せなかった。

はあああ、俺、本当に部長の下僕でよかったあああ!

「さて、イツセー。お尻を出しなさい」

「・・・・・・・・へ?　部長、許してくれるんじや!?!」

「そうはいかないわ。下僕の躰は主の仕事。あなたもお尻叩き千回よ」

「せ、千回!？」

部長は手に魔力を帯びさせ始めた!

「さあ、イツセー! お尻を出して!」

「待っててください、部長」

部長を制止する千秋と燕ちゃんと小猫ちゃん。

「・・・・・・・・悪いのはイツセー先輩だけじゃありません」

「・・・・・・・・この計画に賛同したあたしたちにも責任はあります」

「・・・・・・・・だから、四分の一ずつ、私たちにお仕置きしてください」

「千秋、燕ちゃん、小猫ちゃん!？」

「わかったわ。三人とも、お尻を突き出しなさい」

「・・・・・・・・はい」

部長に言われ、お尻を突き出す三人。

「ぶ、部長! 三人は許してやってください! そもそも、この計画を考えたのは俺だしさ! 三人までお仕置きされることないって!」

「……………でも!」

「部長。どうぞ、俺の尻を存分に叩いてください! お願いします!」

俺は三人の前に立ち、部長に尻を突き出す!

「どきなさい、イツセー」

「部長!?!」

部長は俺にかまわず、三人の後ろに立つ。

「行くわよ、三人とも」

「……………はい、部長。お願いします!」

部長は手を振り上げ、勢いよく振り下ろした!

ピタツ。ピタツ。ピタツ。

——かと思ったら、直前で勢いが止まり、やさしく触れるだけだった。

「はい、これでおしまいよ」

「……………え？」

「小猫、千秋、燕。あなたたちの自分の行いを反省する態度は立派よ。だから、その気持ちに答えて、このぐらいで許してあげなくてはね」

「……………ありがとうございます、部長」

さつすがリアス部長。厳しくてやさしいよなあ。

「さあ、次はイツセーの番ね」

「よろしくお願いしまーす！」

俺は意気揚々と尻を突き出す。

「じゃあ、残り全部行くわよ!」

「残り全部!」

部長の言葉に仰天する俺!

「千回のうち、一回ずつ三人が替わってくれたのだから、残りは997回ね」

997回!?

「ぎゃああああああ!」

その日、俺の尻は死んだ。

Life. 11 カリス・パトウーリア

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ痛つつつ・・・・・・・・」

・・・・・・・・先程、お尻が死んだ兵藤一誠です・・・・・・・・。
部長のお仕置きが終わったあと、俺たちは帰路についていた。
そして、俺はいまだに痛む尻を押さえていた。

「・・・・・・・・大丈夫、イツセー兄？」

「・・・・・・・・・・見てるこっちも痛かったわよ・・・・・・・・」

千秋と燕ちゃんもなんとも言えないって顔をしていた。

「おかえりなさい」

俺たちが玄関で靴を脱いで上がろうとしたところで、アジアが出迎えてくれた。

「なっ!？」

だが、俺の口から出たのはただいまの挨拶ではなく、驚きの声であった。

アジアが俺たちを出迎えてくれた。それに関しては何も問題はない。問題はその格好であった。

アジアはいま、エプロンを身に付けている。これも別に問題じゃない。

問題はなぜか肌の露出が必要以上に多い!

ぶっちゃけ裸エプロンであった!

尻の痛みが一気に吹き飛んだぜ!

「遅くまでおつかれさまです。いますぐお夕飯の支度をしますので」

アジアも恥ずかしいのか、少しもじもじしながらも台所のほうに行こうとしていたので、俺は思わず訊いてみる。

「アーシア……その格好は？」

「……えーと……クラスメイトの桐生藍華さんに、疲れた殿方を癒すにはこの格好が一番だと……は、恥ずかしいですけど、に、日本の文化にとけ込まないとダメですから……もちろん、下に下着は着けていません」

訊いていないことまで話してくれるアーシアちゃん。

ていうか、またあのエロ眼鏡女か……

クソ！ 桐生め！ このあいだの裸の付き合いのことといい、どんどんアーシアにかがわしいことを吹き込みやがって！

「いい仕事した！ よくやった！」と感ずる気持ちがあるのが我ながら情けないが、一度注意したほうがいいな！

「なるほど。そういう手があったわね。アーシア、あなたは魔性の女悪魔になれるわ。エツちな子ね」

「ええっ!? 私、エツちな悪魔になりたくないですうっ！」

部長の言葉に涙目で困惑顔になるアーシア。

「と、とにかく、着替えないと！　こんなの母さんに見られたら——」
「あーら、母さん、こういうの大賛成よ♪　うふふ、おかえり♪」

台所から母さんが顔だけ出してきた。

「——つて、違うんだ母さん！　これは——」

「私がお手伝いしてあげたのよお♪」

「え？」

「ああ、若い頃を思い出すわあ．．．．．」

母さんツ！　なんてことを！　てか、父さんとそういうことしてたのかよ!?　やっぱ
り、あんたは俺の親だよ！　エロいよ！

てか、親のそういう話は聞きたくなかったよ！

「あ、イツセーくん、おかえり〜」

母さんの言葉に呆気にとられていると、キッチンから鶴さんが出てきた。
ていうか！

「姉さん！　なんて格好してるのよ!?!」

「うん？　裸エプロンだよ」

そう、鶴さんも裸エプロン姿になっていたのだった。しかも、アジアよりもだいぶきわどい格好であった。

大事なところがギリギリ隠れている程度で、なんとかエプロンだと認識できる代物だ。

「お母さま！　私にも裸エプロンをお願いします!」

「おばさん！　私にも!」

それを見て部長と千秋が母さんに言った。

「ええ、もちろん♪　さあさあ、奥へいらっしやい♪」

「失礼します！」

「はい！」

部長と千秋は母さんに招かれるままに家の奥のほうへと連れてかれていった。

「せつかくだから、燕ちゃんも〜」

「なっ!? なんで私まで!? ちょッ!? やめて!? 引つ張るなああッ！」

絶叫をあげながら燕ちゃんが鶴さんに連れさられてしまった。

……なんなんだ、この空間は……。

「……イッセーさん、あの、ご迷惑でしたか？」

アーシアが不安そうにして訊いてきた。

「ああ、いや、似合ってるよ。似合ってる！ うん、とりあえず、それだけは言いたい！」

ちょうど二人つきりだし、言いたいと思つたことも言つちまうか。

「それに、このあいだの教会の連中が来ても、俺が守つてやるから。アーシアが怖いと思つたものは全部俺が追い払つてやる」

俺の思いを聞いて、アーシアは少し驚いていた。

俺もこの状況で言うのはどうかとは思つたけど、この思いは伝えておきたかった。

「………イツセーさん。私、悪魔になつたこと、後悔してません」

「え？」

「信仰は忘れられませんけど、いまは主への想いよりも大切なものが私にもありますから。部長さん、部員の皆さん、学校のお友達、イツセーさんのお父さま、お母さま、そして、イツセーさん。皆、私の大切な方々です！ ずっとずっと一緒にいたいんです。もう一人は嫌です」

そう言い、アーシアが静かに抱きついてきた。

千秋は恥ずかしいのか顔を赤くし、手を後ろで組んでもじもじしていた。

「見て見て、イツセイ君♪」

「——ツツツ！」

鶯さんに背中を押されて現れた燕ちゃんは恥ずかしさで顔を真っ赤にして、エプロンの裾をギユツと掴んで涙目になっていた。

ブツ！

皆の裸エプロン姿を見て、盛大に鼻血が吹き出てしまった。

その後、皆そのままの姿のまま夕飯の支度を始めた。

……父さんが見たら卒倒するな、確実に。

なんて思いながら部長達をチラツチラツと見てた俺はふと、窓から外のほうを見て思う。

明日夏たちは大丈夫なんだろうか？



俺は現在、町から少し離れた森を疾走していた。

俺の前方では木場、ゼノヴィア、イリナ、ライニーが走っており、隣では槐とユウナが並走していた。

フリードとバルパー追いかけて、こうして走っているのだが――。

「……おい、木場！ 深追いしすぎだ！」

俺は前にいる木場に向けて叫んだ！

ただでさえ、周りが見通しが悪い森の中だつてのに、夜の暗さもプラスして、見通しの悪さは最悪だった。

待ち伏せなんてされたら、もつと最悪だ。

ただでさえ、ついさつき待ち伏せをくらったばかりだつてのに。

「……まで来て、みすみす逃がすわけにはいかない！」

だが、木場は聞かず、どんどん進んでいってしまふ。

クソツ、エクスカリバーだけでなく、真の仇であるバルパーまで目にして、また冷静じゃなくなつてやがる！

「ゼノヴィアたちも流石に深追いしすぎだよ！ アルさんにも電話は繋がらないし、一旦、アルさんのところに行こうよ！」

ユウナもゼノヴィアたちを諫めようとするが、こつちも言うことを聞かなかつた。

「アルさんは自分と連絡がつかなくなつたら、独自で判断しろと言つた。ここでみすみす逃がせば、またふりだしに逆戻りだ。なんとしても、ここでけりをつける！」

「私もゼノヴィアと同意件よ！」

「可能なら、残りのエクスカリバーの所在も吐かせる！」

木場と違つて、冷静ではあるのだろうが、やはり突つ走りすぎだつた。

「槐、レンとの連絡は？」

「ダメだ、こちらでも連絡がつかないどころか、電波も届いていない」

レンのほうもか。

アルミヤさんのほうも、電波が届かないらしい。明らかにおかしい。

はぐれハンターのカリスが絡んでいるからなのか、電波をジャミングされてるのか？
通信の妨害ははぐれハンターたちの常套手段だからな。

レンのことだから、心配はいらないと思うが……。

「——ッ、おまえたち、止まれ！」

当然、槐が前にいる四人に向けて叫んだ！

「くどいぞ！ そんなに自分の身がかわいいのなら——」

「囲まれていることに気づかないのか!？」

『——ッ!?!』

ライニーの言葉を遮った槐の叫びを聞いて、俺たちは慌てて立ち止まる！

落ち着いて気配を探ると、確かに複数の気配に囲まれていた！

クソツ、言わんこつちやねえ！

俺たちはそれぞれの得物を構える。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

すると、木の陰からふらふらとした足取りで神父たちが現れた。

・・・・・・・・数は・・・・・・・・二十人はいるな。

神父たちにゼノヴィアがエクスカリバーの切っ先を向ける。

「墮天使に組する異端者ども。神の名のもとに断罪してくれる！」

「あの世で懺悔なさい！ アーメン！」

イリナもエクスカリバーの切っ先を向けるが、神父たちは何も言わず、光の剣や拳銃を取り出す。

・・・・・・・・なんだ？

俺は神父たちに何か妙な違和感を感じていた。

「………明日夏、おまえも感じたか？」

槐がそう訊いてきた。てことは、槐も何か違和感を感じたということか………。

俺は改めて神父たちを見た。

すると、よく見ると、神父たちは全員白目をむいており、口からよだれをたらし、明らかに正気とは思えない形相をしていた！

「はあッ！」

ゼノヴィアとイリナが飛び出した！

「待て、ゼノヴィア、イリナ！ こいつら、何かおかしい！」

俺は慌てて叫ぶが、二人は聞き耳持たず、神父に斬りかかる。

神父たちは光の剣で二人の斬撃を受け止めるが、エクスカリバーに歯が立つわけなく、あえなく光の剣ごと二人のエクスカリバーに斬られた。

あつけない……。なんだ？俺と槐が感じた違和感の正体はなんだ？

「はッ！」

イリナがエクスカリバーを紐状にして鞭のようにならせ、神父の一人に向かって伸ばす！

そのままイリナのエクスカリバーは神父の胸を貫いた。

胸を貫かれた神父はそのままガクツと崩れ、倒れようとした瞬間――。

「なっ!?!」

『――っ!?!』

胸を貫かれた神父が突然立ち上がってイリナに飛びかかった！

「ぎゃっ!?!」

！
予想外のことで呆気にとられていたイリナはそのまま後ろに押し倒されてしまった

「なんで!? 急所を貫いたはずなのに——ッ!?」

わけもわからず叫ぶイリナを狙って、神父の二人が拳銃の照準を合わせていた！
その瞬間、イリナを狙っていた神父二人の額がライニーの銃撃で撃ち抜かれた！

「なっ!?!」

ライニーが驚愕の声をあげた。

当然だ。額を撃ち抜かれた神父が何事もなかったように動いていたからだ！

「どうなってやがる!?!」

ライニーの叫びはこの場にいた誰もが胸に抱いた疑問だった。

「くっ！」

ゼノヴィアがイリナを助けようと駆け出す！

ガシッ！

「何っ!?!」

だが、ゼノヴィアに斬り殺されたはずの神父たちがゼノヴィアの足を掴んでゼノヴィアの足を封じた！

「クソッ！」

さらに神父の一人がゼノヴィアに組み付き、ゼノヴィアの動きを完全に封じてしまった！

「はあッ！」

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

槐とユウナが飛び出し、ユウナが十字架を刀に変えてイリナを狙っていた神父二人の首を撥ね飛ばし、槐はゼノヴィアの動きを封じていた神父たちはバラバラに切り裂いた！

「A t t a c k！」

俺も身体強化をして飛び出し、イリナに覆い被さっていた神父を蹴り飛ばした！

「『ソード・パース魔剣創造』！」

すかさず、木場が魔剣を地面に突き刺し叫ぶと、無数の魔剣が出現し、神父たちを貫いた！

「嘘!?!」

すると、ユウナの驚愕した声が聞こえ、俺たちは一斉にそちらに視線を向ける！
なんと、ユウナに首を撥ね飛ばされたにも関わらずに動く神父二人がユウナに銃口を向けていた！

「一の型——疾風！」

そこへ槐が斬り込み、神父二人の腕を斬り飛ばした！

「二人とも離れろ！」

俺は叫ぶと同時にありつたけのバーストフアングを神父二人に投擲した！

槐とユウナが神父二人から離れると同時に神父二人をバーストフアングの爆発が襲う！

爆煙が晴れると、そこには首を失い、爆発で無惨な姿になってもいまだに動き続ける神父二人がいた！

木場の魔剣で貫かれた神父たちも平然と動いていた。

「どうなってるの!?!」

イリナがエクスカリバーを構えながら叫ぶ。

神父たちの正気とは思えない姿、明らかに死んでるはずの状態になっても動き続ける異常さ。

まさか!

「こいつら、はなっから死体なのか!?!」

『——ッ!?!』

俺の言葉を聞き、皆ハッと驚いた。

それしか考えられなかった。こいつらは元々死体で、誰かによって操られてるのだとしか……。

パチパチパチパチ。

当然、拍手音が俺たちの耳に入った！
音が聞こえたほうに視線を向けると、暗闇からゆつくりと拍手しながらこちらに歩いてくる男がいた。

「ご名答ですよ」

男は拍手しながら俺を称賛した。

野戦服の上から白衣を着たメガネをかけた若い男性だった。

こいつは！

「——カリス・パトゥーリア！」

槐が男の名を憎々しげに叫んだ。

樹里さんが見せてくれた写真と同じ顔なので間違いないかった。

こいつがS級はぐれハンターのカリス！

「はじめまして。私はカリス・パトゥーリアといいます。以後、お見知りおきを」

丁寧にお辞儀して挨拶をするカリス。
俺はカリスに訊く。

「こいつらを操ってるのはおまえか!？」
「いかにも」

肯定したカリスにイリナが怒りを露にする。

「死者を操るなんて、命の冒瀆だわ！」

イリナの怒りを受けてもカリスは肩をすくめるだけだった。

「とは言いますが、この死人を操るすべは、あなた方が崇める神がもたらしたものです」
「よ」

「なんだと!？」

「嘘よ!！」

カリスの告げた言葉が信じられなかったゼノヴィアとイリナが驚愕した。
俺はその正体を口にする。

「……………セイクリッド・ギア神器か……………」

「ご名答。『ゴルフス・マリオンネット死の傀儡』——死者を操る能力の神器ですよ」

死者を操る——胸くそ悪い能力だな！

「嫌悪感を表しているようですが、私はこの能力はとても素晴らしい能力だと考えてますよ」

カリスが自身の考え語り始めた。

「どんなに優れた人間も死んでしまつたらおしまいです。そんなのもつたいないじゃないですか。優れた能力が死によってあっさり無価値になつてしまうなんて。中には『イビル・ピース悪魔の駒』によって悪魔へ転生する人もいるかもしれませんが、全員がそうなるわけ

じゃない。ですが、この能力を使えば、死したあとでもその能力を活用できます。こんな素晴らしいことはないじゃないですか」

死した者の能力を無駄にしないなんて聞こえのいいことを言っちゃいるが、やってることは死んだ者の意思を無視して神セイクリッド・ギア 器の名のとおり、傀儡、操り人形にしてるだけだ。

「——とは言っても、完全に生前の能力を發揮できるかと言うと、残念ながらできていないんですがね。なにせ、彼らの肉体を動かすのはあくまで私ですからね。操作系ゆえの欠点ですね。ですから、私は彼らが完璧に生前の能力を發揮できる方法を模索しているのですよ」

「………じゃあ、そのために!？」

俺の問いかけに、カリスはうなずく。

「ええ。私が多くの人々に手をかけたのは、そのための実験体にするためですよ。おかげさまで、実験の過程でこのような能力に目覚めました」

そう言うと、カリスは指を鳴らした。

すると突然、神父たちがうめき声のような叫びあげ始めて苦しみだしていた！

「――バランス・ブレイク
禁手化」

カリスが静かにつぶやいた瞬間、神父たちの体に異変が起こった！

ある者は上半身が異様に隆起しだし、逆に下半身が異様に隆起した者がいたり、ある者は片腕だけが膨れ上がったりと身体に異様な変化が出始めていた！

「………バランス・ブレイカー
禁手………！」

以前、イツセーがライザーとの一騎討ちの際に見せた神セイクリッド・ギアの奥の手！

イツセーは左腕を犠牲にすることで一時的に発現させていたが、こいつのは紛れもなく本当の禁手！

「これが私の禁手。バランス・ブレイカー『死傀儡師による狂演劇』。死者を操るだけでなく、このように、

死体の改造、さらには——」

見ると、神父たちの傷が塞がっており、斬り飛ばされた腕や首さえも切り口から肉がせりあがって再生していた！

「このように、失った部位さえも容易に修復することができるようになりました」

まるで子供が自分の自慢なおもちゃをみせびらかすかのように振る舞うカリス。

狂ってやがる！

明らかに倫理観が破綻している目の前の男に対して俺は迷わずそう思った。

他の皆も同様の思いを抱いていそうな表情をしていた。

「さて、雑談はこのへんでいいでしょう。あなた方は皆、能力が高い。能力が高い実験体は多くても困りませんからね」

『——ッ！』

俺たちは一斉に身構える！

それと同時に、異形な変異を果たした神父たちが一斉に襲いかかってきた！

Life. 12 他でも待ち伏せ、されてました!

明日夏がはぐれ悪魔を討伐した廃工場。夜刀神蓮火ことレンは、自分たちを監視していたはぐれエクソシストを斬り伏せ、槐を明日夏たちのほうへ向かわせると、一人でここにやって来ていた。

「オラ、のこのこやって来てやったぜ。とつとつ、出てこいよ」

レンは呼びかけると、陰からぞろぞろと人が現れた。

「あん?」

現れた者たちを見て、レンは首を傾げた。

はぐれエクソシストが現れると踏んでいたレンだったが、現れたのは野戦服を着た明らかに聖職者とは思えない風貌の男たちだった。

「おまえら、はぐれハンターか？」

レンの問いかけに答えず、はぐれハンターたちはヒソヒソと話し始めていた。

「おい、こいつ……」

「……ああ、ガキのくせにBランクになんてなりやがった生意気な奴だ」

『閃刃』なんて呼ばれて、調子づきやがって……」

「しかも、あの『風の剣帝』の弟らしいぜ……」

「生意気な奴の弟も生意気だな……」

ヒソヒソと小言を言うはぐれハンターたちをレンは冷めた目で見ていた。

「聞こえてるぞ。言いたいことがあるんなら、ハッキリ言やいなえか。——このはぐれ共」

レンの安い挑発に乗り、男たち捲し立て始める。

「うるせえ! 俺たちがはぐれになったのは、てめえらみたいな生意気なガキ共がいるせいだろうが!」

「そうだ! てめえらさえいなければ、こんなことになってねえんだよ!」

みつともないことこの上なかつた。

罪を犯し、後悔も反省もするどころか、罪を認めず、あげくのはてには、その責任を転嫁し、あたかも自分たちは被害者だとのたまう始末。

そんな情けない姿をさらす大人たちにレンは侮蔑の視線を向ける。

「——黙れよ、クズ共。ハンター界は実力主義。俺らが強くて、おまえらが弱かつた。——それだけだろうが」

明日夏たちの前で見せていたおちやらけた雰囲気を感じさせず、レンは冷たく言い放つ。

自分たちのような若手ハンターが台頭したせいで仕事にあぶれたことには同情するし、悪いなどは思っている。だが、だからといって、罪を犯していい理由にはならない。

「——おまえ、見覚えあるな」

レンがはぐれハンターの一人を指差して言った。
以前、資料でその男の顔を見たことがあったのだ。

「——おまえ、追っ手のハンターから逃亡する際、まだ幼い子供を人質にして逃亡したらしいな？」

「それがどうした!」

「——その子供、どうしたんだよ？」

資料によると、その子供は行方不明となっていた。

「ああん、殺して、そのへんに捨てたよ。ギヤーギヤーやかましかったからな」

予想どおりの言葉が帰ってきて、レンははぐれハンターたちを睨む。

レンは腰に吊るした太刀の鞘を掴み、腰を落としながら言う。

「——てめえらみたいなのを見てると、虫酸が走るんだよ。——とつとと消えろ!」

啖呵を切ったレンに向けて、はぐれハンターたちは自動拳銃、短機関銃、突撃銃とさまざまな銃を各々で構えていた。

はぐれハンターたちの持つ銃はどれもハンター用にと術式や特殊な加工を施されたものだ。その威力は表の世界で使われている一般的なものとは比べるまでもなかつた。

「向こうは鉄屑一本だ!」

「楽勝だぜ!」

「何がBランクだ!」

「くたばりやがれ!」

はぐれハンターたちは太刀一本しか持たないレンを嘲笑う。

剣と銃、普通に戦えば、勝負にすらならないのは誰もが思うことだつた。普通ならばだ——。

『死ねえええッ!』

はぐれハンターたちが引き金を引くと、廃工場内にけたましい銃声が響き渡る。
だが――。

「ど、どうなってやがる!？」

「な、なんで当たらねえ!？」

はぐれハンターたちが放った銃弾は一発もレンにはかすりもしていなかった。

レンは縦横無尽に駆け回り、すべての銃弾を躲していた。

「――師範の剣戟のほうが全然おつかねえよ」

銃弾の雨を掻い潜り、レンははぐれハンターの一人（子供を殺したと言っていた男）の横を走り抜けた。

チン。

鞘と鏢が当たる音が鳴り、レンが横を過つたはぐれハンターの首が宙に舞っていた。

『——っ!?!』

それを見たはぐれハンターたちは慌てて振り返つて銃を構え直す。

「——次はてめえらの番だ」

レンの鋭い視線に射ぬかれ、はぐれハンターたちは萎縮してしまっていた。

「怯むんじゃねえ! こっちにはあれがあるんだ!」

はぐれハンターのひとりがそう言うと、はぐれハンターたちは武装指輪アームズリングからひと振りの西洋剣を取り出した。

「ん?」

レンははぐれハンターたちが持つ剣を見て、視線を鋭くした。それを見たはぐれハンターのひとりが勝ち誇ったかのように言う。

「どうだ、見たか！ こいつは聖剣だぜ！ てめえが持つてるなまくらとはわけが違うぜ！」

はぐれハンターたちが持つ剣はすべて聖剣であった。

なぜこんな連中が聖剣を持つている？ そもそも、こいつらはどういう経緯で今回の件に荷担している？

レンの頭の中は疑問しかなかった。

はぐれになったハンターの取る行動は二つあり、ひとつは追っ手のハンターから身を隠すため、どこかに潜伏する。ひとつは非合法な犯罪組織などに雇われて行動するの二通りだ。目の前の男たちもちろん後者だった。

だが、レンは解せなかった。

後者の場合はある程度の実力がなければできない。実力の低い者を雇っても、役に立たず、報酬の無駄払いになるからだ。最低でも、下位ランク最高のDランクはなければ、

たいていの組織ははぐれを雇わない。

ましてや、こういう男たちは基本的に報酬は前払いを要求するため、後払いにして捨て駒にするというやり方もできない。

レンの見立てでは、この男たちはよくてFランクと、最底辺の実力しかなかった。

こうなつてくるとやっぱり、今回の騒動は冬夜さんの読み通り――。

考え込んで黙っているレンを見てはぐれハンターたちが言う。

「へっ、こいつビビってやがるぜ!」

「そりやそうだ! なんせこっちは聖剣さまだからな!」

「しよせん、いい気になつてたガキだつてことだ!」

「クツソ、こいつさえありや、俺たちは今頃、上位ランカーの仲間入りしてたつてのに!」

まったく検討はずれなことを言うはぐれハンターたちに、レンは呆れていた。

「言つとくが、泣いて謝つたつて、許さねえからな! おとなしく、この聖剣さまの錆になつちまいな!」

はぐれハンターのひとりのその言葉を皮切りに、はぐれハンターたちは一斉にレンに斬りかかる。

「はあ………」

レンは嘆息すると、居合の構えをとる。

「鬼刃一刀流・四の型——」

レンの腕が一瞬ブレた瞬間——。

「——落葉切り！」

廃工場内けたたましい金属同士がぶつかり合った音が響き渡った。

はぐれハンターたちが持つ聖剣が弾かれ、はぐれハンターたちは皆、驚愕の表情で尻餅をついていた。

「な、なんで、聖剣がただの鉄屑に負けんだよ!？」

「クソ! あの野郎、騙しやがったな!」

はぐれハンターたちは自分たちの持つ聖剣が偽物だと思い、乱雑に床に叩きつけていた。

そんなはぐれハンターたちをレンは呆れた表情で見下ろしながら言う。

「安心しろ。そいつらは全部聖剣だぜ」

それを聞き、はぐれハンターのひとりが捲し立てる。

「嘘つくんじゃないやねえ! だったら、なんでてめえの持つなまくらに負けんだよ! なまくらに負けるってことは、偽物ってことじゃねえか!」

はぐれハンターの言葉にレンは嘆息し、はぐれハンターたちに冷たく言い放つ。

「まさかとは思うが、強力な剣を持てば、それだけで強くなれると思ってるのか?」

劍の世界をなめてんじゃねえぞ」

劍は持つだけでは意味がない。それを使いこなす技術があつて初めて意味がある。

ろくに劍の扱い方を知らない素人であるはぐれハンターたちが強力な聖劍を持つとうが、劍術を極めているレンに劍で勝てる道理など初めからなかった。

ましてや、はぐれハンターたちがさんざんバカにしたレンの持つ太刀——『暮紅葉』くれもみじはただの刀ではなかった。異形を切り裂くことを目的に鍛えられた『鬼斬り』、『異形殺し』の異名を冠する名刀たちの中のひと振りであり、その強度と切れ味はそこいらの並の聖劍に劣らないものだった。

はぐれハンターたちはここに来てようやく、自分たちとレンとの間に圧倒的な実力の差があることを認識したのか、皆一様に戦慄していた。

「鬼刃一刀流・十の型——」

レンは静かに呟きながら、居合の構えをとる。

それを見たはぐれハンターたちは必死に命乞いをする。

「ま、待ってくれ!? お、俺たちが悪かった!」

「反省してる! だ、だから、命だけは!」

レンはそれを一切聞き入れず、なんの躊躇いもなく刀を握る。

『ク、クソがあああああああつ!』

それを見たはぐれハンターたちは一斉に銃を取り出し、レンに向けて撃つ。

だが、レンはそのすべての銃弾を躲し、流れるような斬撃ではぐれハンターたちを斬る。

「――斬り嗣ぎ舞」

チン。

刀が鞘に収められた瞬間、廃工場内に鮮血が舞い、一人を除いて男たちは皆一斉にくずおれた。

「懺悔は地獄の閻魔の前でしてな」

レンは息を吐き、一人だけ生き残った、いや、あえて斬らず生かしておいたはぐれハンターに向き直る。

「こんな奴らを雇わなければならないほど人手不足つてことは、冬夜さんの読みどおり、今回の騒動はゴカビエルの独断なのかねえ？ そこんところどうなんだ？」

レンははぐれハンターに問いかけた。

レンに問いかけられたはぐれハンターはぶるぶると震えるばかりで、何も答えなかった。

「——今後の振る舞い次第では命は取らないでやるぞ」

レンにそう言われた途端、はぐれハンターは慌てて答えだす。

「し、知らねえよ！ お、俺らはカリスの野郎に連れられてやって来ただけだ！」

はぐれハンターの言葉を聞き、レンが鋭くはぐれハンターを睨むと、はぐれハンターは後ずさりながら言う。

「ほ、本当に何も知らねえんだよ！ 墮天使どもが何をたくらんでようが、俺たちにはどうでもよかつたからな。今回の騒動に手を貸せば、報酬をたんまりくれるって、カリスの野郎に言われたんだよ！ 前金の段階でもたんまりもらえたから、いざってときは、そのまんまとんずらしようと思ってたんだよ！」

必死にしやべってるさまから、嘘はついていようだった。

「カリス・パトウーリアはなんらかの組織を率いてる、あるいは所属してるのか？」

「あ、ああ、なんかの組織に所属してるみたいだったぜ！」

「その組織の名は？」

「え、えつと、たしか、C——」

はぐれハンターが答えようとした瞬間、はぐれハンターの胸部が背後から見えない何かによって貫かれた。



リアスたちグレモリー眷属と明日夏たちが協力してはぐれ悪魔を討伐した廃工場。

廃工場内では、あたり一面に血が飛び散っており、大勢の神父たちが倒れ伏していた。その中心にアルミヤが立っていた。

倒れている神父たちは皆、コカビエルに協力していたはぐれエクソシストであり、全員が聖剣を持っていた。

一人でやって来たアルミヤを待ち伏せ、一斉に襲いかかったのだが、アルミヤはそのことごとくを返り討ちにしたのだった。

「——私たちが待ち伏せていたにしては、ただただ有象無象を配置するだけとはな」

アルミヤたちを監視し、この場所に来ることを予期していたにしては、はぐれエクソシストを大量に配置するだけの雑な配備をしていたことにアルミヤは訝しげにしてい

た。

統率もとれておらず、それをする立場の者もない。あまりにもお粗末だった。

「……いや、そういうわけか——」

突然、アルミヤの背後から何者かが戦斧を手に飛びかかってきた。

ガンツ!

振るわれた戦斧が工場の床とぶつかり、けたましい金属音が廃工場内に響いた。

襲いかかってくる者の気配を察知していたアルミヤは危なげなく戦斧による攻撃を
躲していた。

「むっ?」

だが、完全に避けきれなかったのか、着ていたローブの端が斬れていた。

「——おひさしぶりですね、アルミヤ殿」

突然現れた謎の人物がアルミヤの名を口にしました。

アルミヤは謎の人物を視界に捉える。

二メートル近い大柄な体躯に法衣を纏い、片目に眼帯をした金髪を短く刈った男だった。眼帯の下には、剣で斬りつけられたような縦長の傷痕があった。

そして、アルミヤも男の顔に覚えがあった。

「キミは——セルドレイ・スミルノフ」

セルドレイ・スミルノフ——元教会エックソシストの戦士の敬虔な信徒であり、数多の悪魔を屠ってきた凄腕の戦士だった。

とある問題行為を咎められ、教会を追放されたあと、神の名のもとに断罪されたはずだった。

「……番場樹里のもとでキミの写真を見たときはにわかに信じがたかったが、本当に生きていたとはな」

「かろうじて、どうか。．．．．あなたにつけられたこの目の傷、いまでも疼きますよ」

そう、セルドレイに手をくだしたのは他でもない、アルミヤであった。眼帯の下の傷もアルミヤがつけたものだった。

「まさか、キミが墮天使に協力しているとはな．．．．」

「勘違いしないでもらいたい。罪深き悪魔を滅ぼすために苦汁をなめる思いに耐えながら一時的に組んでいるに過ぎません。悪魔を滅ぼしたあとは、同じく罪深き彼ら墮天使も滅ぼすつもりですよ」

過激なことを口にするセルドレイ。

そんなセルドレイにアルミヤは訊く。

「なぜ、彼らを見捨てた？ 志を共にする仲間ではないのかね？」

セルドレイはアルミヤとはぐれエクソシストたちの戦いを陰から一部始終を見てい

た。

やられていく神父たちを、セルドレイは助けようとも、指示をすることもなく、ただ傍観していただけだった。

「彼らは本来滅ぼすべき墮天使になんの罪悪感も持たずに与した。そのような罪深き者たちのことを助ける義理などありません」

さも当然のように言うセルドレイはさらに続ける。

「悪魔と墮天使、この二種族を滅ぼすことこそ、我々神の信徒が成すべき正義。私はそれを忠実に行ってきた。だが！ 上層部は私を異端扱いにし、私を教会から追放した！」

自身に異端の烙印を押し、追放した教会に怒りをあらわにするセルドレイにアルミヤは言う。

「……罪のない人々を殺すことが、主に仕える者の正義だとでも？」

セルドレイが教会を追放されることになった問題行為、それは、悪魔と契約を交わしていた一般人を手にかけてのことだった。しまいには、その家族、親族にまで手にかけて。そのことが問題視され、異端の烙印をおされ、教会を追放されたのだった。

「悪魔と契約するなど万死に値する大罪！ むろん、その家族、親族も同罪！ 等しく断罪されるべき者たちなのだ！ 上層部はそれをわかつていない！」

強く持論を語るセルドレイ。その表情は憤怒の形相となっていた。

「そもそも、この停戦状態も気に入りません！ 上層部はこれ以上の犠牲を考えて、やむを得ずそのような方針にしたそうですが、そのような振る舞いこそ信徒として恥ずべき行為！ 数多の犠牲を出し続けてでも、悪魔、堕天使、特に悪魔を滅ぼすまで戦争を続けるべきだったのだ！ それこそが、主のお望みであり、我々のなすべきことなのだ！ 私はそれを、軟弱な者どもと違って、教会を追放されたいまの身でも変わらさず果たしているのだ！」

セルドレイは自分の行いは間違いではない、それを咎めた教会の者たちこそが間違っ

ていると叫ぶ。

「キミのやっていることはただの身勝手な殺戮だ」

「黙れ！」

アルミヤの言葉にセルドレイは怒気を込めて答えた。

「もはや問答は無用！ この目の傷の借り、返させていただきます！」

セルドレイは戦斧型の武装クロスギア十字器を掲げる。

それに対し、アルミヤはローブを脱ぎ捨てる。

ライニーと同じ戦闘服を着たアルミヤは両手の手の平を開く。すると、アルミヤの手に二本の剣が出現した。

アルミヤは両手でそれぞれ出現した剣を握り、二刀流で構える。

『フレッド・ラックスマス聖剣創造』——アルミヤが持つセイクリッドギア神器。その能力はあらゆる属性を付与した聖剣を生みだせるという木場の持つ『ソード・ベース魔剣創造』の聖剣バージョンとも言うべきものだ。た。

一度対峙したことのあるセルドレイはその光景に驚きはせず、不敵に戦斧を構える。

「我に主のご加護があらんことを！」

そう叫び、セルドレイが駆けだした。

それに合わせて、アルミヤも駆けだす。

アルミヤの聖剣とセルドレイの戦斧が交差し、廃工場内に火花が散った。

L i f e . 1 3 破壊の肉宴

「くっ！」

上半身が肥大化した神父が飛びかかってきたのを見た俺は慌ててその場から飛びのく！

ドゴオオオン！

地面に拳が叩きつけられた瞬間、そこにはそこそこの大きさのクレーターができあがっていた。

チツ、見た目どおりのパワーだな！

「はあああッ！」

ゼノヴィアがエクスカリバーを豪快に振るい、上半身が肥大化した神父を真つ二つに両断する。

だが、カリスがすぐさま新たに神父ではない死人（服装からして元はただの一般人と思われる）を呼び出して変異させる。

クソツ、生半可なダメージではすぐにカリスによつて修復され、なんとか倒してもすぐに死人が補充される。

ならばと、本丸のカリスを狙おうとしても、死人たちに阻まれて近づくことさえできなかつた。

当のカリスは、離れた場所で木に寄りかかりながらタブレットPCを片手に俺たちの戦いを見ていた。

時折、タブレットPCのほうに目をやっては、何やらデータを記録していた。
……完全に実験に付き合わされてるな。

ガシッ！

「しまっ——」

死人の肥大化した右腕が伸びてきて、反応が遅れた俺は体を掴まれてしまった！
そのまま引つ張り寄せられ、上半身が肥大化した死人に殴り飛ばされた！

「がはっ!？」

木に叩きつけられ、背中から激痛が走る……。

「……………ぐっ……………」

激痛に耐えながら立ち上がり、変異した死人に視線を向ける。

変異した死人の形態は四種類。まずは上半身が肥大化した形態（A型と仮称）。こいつは単純なパワー特化で一撃一撃が重く、戦闘服の防御力を容易に突破してきやがる。そのぶん、動きが鈍いので回避はそこまで苦労しないのが幸いだった。次は片腕だけ肥大化した形態（B型と仮称）。こいつの腕は伸縮自在で捕縛能力が高く、ちよつとでも気を抜くとあっさり捕まってしまう。いまみたいに、A型をサポートをしていて厄介だった。次は下半身が肥大化した形態（C型と仮称）。こいつはスピードが速く、その足から繰り出される蹴りも威力がバカにならない。スピードがあるぶん、A型とB型の組み合

わせよりも厄介だった。最後は全身が変異した形態（D型と仮称）。こいつは他の三種類と比べると特出した部分がない代わりに安定した能力を持っており、一番厄介だった。幸い、他の三種類よりは数が少なく二体しかおらず、カリスの護衛に徹していたので、他の三種類のほうに集中できていた。

俺は他の皆のほうに視線を向ける。

教会組は二人一組になって立ち回っていた。

「いまよ、ゼノヴィア！」

「ああー！」

イリナが擬態のエクスカリバーを紐状にして死人を拘束すると、ゼノヴィアが破壊のエクスカリバーで神父を両断した。

ライニーとユウナも前衛と後衛に別れてうまく立ち回っていた。

『ソード・パース
『魔剣創造』！』

「はあッー！」

木場は多種多様な魔剣による手数ของ多さと自慢の俊足で、槐も乱戦慣れしてるためか、二人とも一人でもうまく立ち回っていた。

「クソツッ！ これじゃキリがねえぞ！」

ライニーが死人たちを銃撃しながら毒づく。

この変異した死人たちはその身体能力も厄介だが、一番厄介なのは、損傷するたびに即座にカリスによって修復されてしまうことだった。しかも、修復するのをいいことに平然と捨て身で襲いかからせてくる。そして、いざ倒したとしても、すぐに代わりの死人が補充される。

こういう場合、イツセーの最大まで倍加したドラゴンショットや部長の魔力のような高火力で一気に押しきるのが最適なんだが、俺たち全員そういう戦闘スタイルじゃなかった。

一応、俺にも緋スカレット・フレイムい龍撃という高火力技はあるが、いまだに撃てば消耗が激しいので連発はできず、こんな状況では使えなかった。

早くどうにかしないと、ジリ貧で俺たちがやられるのも時間の問題だった。

俺は変異した神父たちを警戒しつつ、カリスのほうに視線を向ける。

これだけの数の神父たちを一斉に操作し、絶え間なく修復作業をやっているれば、体力と精神力が相当消耗してもおかしくないのに、奴には疲弊の色はまったく見えていなかった。

俺が何を思っているのかを察したのか、カリスが言う。

「こう見えて、体力には自信あるんですよ」

カリスはタブレットPCの電源を落として武装指輪アームスリングに収納すると、怪しく笑みを浮かべて俺たちを見据える。

「さて、データはあらかじめ取れましたし、そろそろ、本格的に取りに行く方向に集中しますか」

カリスの周りに複数の魔方陣が出現した。

魔方陣が輝くと、魔方陣からさらに死人が現れた。その数はざっと十体。

「……マズいな。あの様子からして、さっきまではデータ収集のために本気でやっていたなかったみたいだな……」。

この調子じゃ、さらに数が増える可能性もあった。
どうする？ このままじゃ、確実にやられる。

撤退しようにも、こうも囲まれている状況じゃ、それも難しい。下手したら、背中を見せた瞬間にやられかねない。

！
……こうなったら、強引にでも奴らを突破して、カリスを直接叩くしかない

「……出し惜しみしてる場合じゃねえか——」

俺は緋い龍気を全力で放出し、全速力で駆けだす！

「突貫ですか。はたして、私に届きますかね」

カリスは受けて立つと言わんばかりに、最低限の数の死人たちを他の皆のところに残し、他の死人全員を俺に襲いかからせてきた！

上等だ！ 押し通る！

B型が伸ばしてきた腕をオーラの腕で受け流し、接近して変異した腕を雷ライトニングスラッシュ刃で

斬り飛ばす！

A型が放った拳の一撃をスライディングで躲し、そのまま両足を両断する！

飛びかかってきたC型の飛び蹴りをオーラの腕で受け止め、そのまま足を斬り飛ばす

！

いちいち倒してる余裕はない！ 大きいダメージは修復に時間がかかるのはさつき

までの戦闘で把握していた。なら、必要最低限のダメージで動きを阻害することにとどめる。

「——っ!？」

背後からB型の腕が伸びてきて俺を捕まえる。

俺は即座にB型の腕を斬り裂く！

「ぐあっ!？」

その隙をつかれてA型の拳の一撃を受けて吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ！」

オーラの腕で強引にバランスをとって体勢を立て直す！

激痛も耐えられないほどじやなかった。俺は構わず突っ込む。

そのまま、ときに死人たちの攻撃をくらいながらも着々と死人たちを突破していき、カリスに近づいていく。

カリスはそんな俺を余裕の表情で眺めているだけだった。

そしてついに、俺に襲いかかってきていた死人たちの包囲網から突破する！

そこへ、カリスを護衛していたD型が立ち塞がる。

だが、そう来ることは予測できていた俺は既に右手にはオーラが集約させていた。

「——吹っ飛べ！」

全力全開の緋い龍撃が炸裂し、立ち塞がっていたD型を跡形も残さず消し飛ばす！

さらにその余波で俺に近づいてきていた死人たちも吹き飛ばし、カリスも顔を腕でおおい、木に背中を預けることで余波に耐えていた。

「……はあ、はあ……」

全力全開の緋スカーレット・フレイムい龍撃ライティングスラッシュによって、体力がごっそり持つていかれ、疲弊で息も荒くなる。

それでも、雷スカーレット・フレイム刃ライティングスラッシュを手にカリス目掛けて駆けだす！

カリスはいまだに緋い龍撃の余波で怯んでいた。やるならいましかない！

俺は勢いそのままにカリスの心臓目掛けて雷ライティングスラッシュ刃ライティングスラッシュで刺突を放つ！

「——っ!？」

眼前に迫る刃を見て、カリスは初めて驚愕の表情を見せた。

「うおおおおおおおッ!」

カリスが何をする間もなく、雷ライティングスラッシュ刃ライティングスラッシュの切っ先がカリスの胸を貫いた！



明日夏くんによって胸を貫かれたカリス・パトゥーリアは弱々しく明日夏の刀の刃を掴むけど、やがて息絶えたのか糸が切れたように手が落ちていった。

「…….…….はあ、はあ…….…….これで終わりだ…….…….」

息を荒げながら明日夏くんは眩き、刀を抜こうとした瞬間――。

「――ええ、少しまえまでの私でしたらね」

ガシッ！

「なっ!?!」

『――っ!?!』

カリス・パトゥーリアの手が突然動きだして、明日夏くんの腕を掴んだ！

「惜しかったですね」

「どうなってやがる!？」

明日夏くんの動揺は当然だった。僕たちも目の前の光景に驚愕を隠せなかった。

明日夏くんの刀はカリス・パトゥーリアの心臓を完全に貫いていた。

そのような状態で生きているはずがなかった。

だけど、現にカリス・パトゥーリアは平然としているし、彼が操る死人たちも動き続けている。

「疑問にお答えしますよ。いまあなたたちの前にいる私は私ではありません。正確には、肉体が違うですかね」

「まさか!」

「ええ。この肉体は私が操る死人と同じものですよ。操る死体に私の五感などのすべての感覚をリンクさせ、本来の私は安全な場所にいる状態でこのようにして自分の肉体のように動かし、見聞きや触った感触も感じられることができますよ。最近になってできるようになったことですよ」

「感覚をリンクしてると! だったら!」

「ええ。この胸、心臓を貫かれている激痛はいまも感じていますよ」

明日夏くんの言葉にカリス・パトゥーリアはあっさりと肯定する。

痛みを感じていると言われても信じられないほど、カリス・パトゥーリアは涼しい顔をしていた。

僕が何を思っているのかを察したのか、カリス・パトゥーリアがこちらを見て言う。

「昔から痛みに強いんですよ。さて——」

カリス・パトゥーリアは拘束している明日夏くんのほうに視線を戻す。

「キミたちに朗報ですよ。実はこの状態、開発したばかりで粗も多く、そのため、そんなに長い時間維持できないんですよ。しかも、彼らを操るための中継点の役目も兼任していますから、もうすぐ、彼らも停止しますよ」

それを聞いても、僕たちはまったく気が抜けなかった。

わざわざ敵である僕たちにそんなことを伝えるなんて、何かあるとしか思えなかったからだ。

そんな僕たちの予感は当たっていた。

「まあ、彼らは停止すると自爆するように改造を加えていますけどね」

『——ッ!?!』

カリス・パトゥーリアの言葉を聞いて、僕たちは慌てて死人たちのほうに視線を向ける！

瞬間、死人たちの肉体が膨張して大きな肉塊へと成り果てていた！

肉塊はいまだに膨張し続けて、いまにも破裂しそうだった！

「クソッ！」

明日夏の声が聞こえ、そちらに視線を向けると、明日夏を拘束していたカリス・パトゥーリアの肉体も膨張を開始していた！

「明日夏くん！」

「明日夏！」

それを見て、僕と槐さんが慌てて明日夏の助けに向かおうとしたけど、膨張を続ける死人たちに阻まれて明日夏くんのもとまで近づけないでいた！

「来るな！」

明日夏くんは助けに行こうとしている僕たちに叫ぶと、全身を緋いオーラでおおう。

あれで防ごうとしているのだろうけど、明らかにオーラの波動が全開のときよりも弱かった。

自爆の規模はわからないが、とてもじゃないが、耐えられるとは思えなかった。

「でも、明日夏くん!？」

「俺は平気だ！ おまえらも自分の身を守ることだけを考えろ！」

叫ぶ明日夏くんをカリス・パトゥーリアの膨張する肉体が包み込み始めていく。

「いい覚悟ですね。では、私も最後まで付き合いましょう」

カリス・パトゥーリアがそう言うと同時に明日夏くんが完全にカリス・パトゥーリアだった肉塊に包み込まれてしまった。

「明日夏くん！」

なおも明日夏くんのもとへ駆けだそうとする僕の肩を槐さんが掴んだ。

「明日夏を信じるしかない！ このまでは私たちも危険だ！」

そう言う槐さんも手が震えていた。

でも槐さんの言うとおりだった。僕たちは明日夏くんのように防衛できるすべがない。そういう点で見れば、明日夏くんよりも僕たちのほうが危険だった。

見ると、教会組の皆は既にこの場から離脱していた。

クソッ！ 明日夏くん、絶対に生き残ってくれ！

あれだけ僕に言ってくれたんだ。生きてまた会えなかつたら、許さないからね！

僕と槐さんは明日夏くんのもとへ行きたい気持ちを抑え、その場からの離脱を始め

る。

肉塊はまだ膨張を続けていた。次第に他の肉塊同士が混ざりあい、さらに膨張していく。

ここまで来ると、規模は相当なものになるはずだ。その爆心地に取り残された明日夏くんは大丈夫なのだろうか？

「クソッ！」

明日夏くんが心配だけど、槐さんの言うとおり信じるしかない！

とにかく、離れないと！

僕は『騎士^{ナイト}』の速さを駆使して全力で膨張を続ける肉塊から離れる。

そして、ようやく十分に離れられた瞬間――。

ドゴオオオオオオオオオオオン！

肉塊が破裂し、大規模な大爆発が起こった！

「うわっ!？」

十分に離れられたと思っていた僕に爆風が襲いかかってきた。

「うわあああっ!？」

そのまま僕は勢いよく吹き飛ばされてしまった。

Life. 14 アルミヤ・A・エトリア

「ふうん！」

セルドレイは力任せに戦斧を振るい、アルミヤはその力に押し負けて後方に押し出された。

「——以前よりも力が増しているか」

「あたりまえです。悪魔を滅ぼすために、日夜研鑽を積むの当然のことです！」

セルドレイはその大柄な体型に似合わぬ素早さで縦横無尽に駆け抜け、アルミヤに斬りかかる。

セルドレイの武器はその大柄な体軀から繰り出されるパワーとその体型からは想像もできない速度で動けるスピードだった。そのふたつを駆使することで、これまで数多の悪魔をセルドレイは屠ってきた。その実力は本物だった。

だが、そんなセルドレイを瀕死に追い込んだアルミヤもまた、実力者であった。

アルミヤはセルドレイに負けないスピードで駆け回り、セルドレイの一撃一撃を真っ向から打ち合わずに確実に受け流し、受け流し切れない攻撃も確実に回避していた。

「あなたも相も変わらず見事な身のこなしと剣技。敵でありながらも惚れ惚れいたしますよ。さすがは『錬鉄の剣聖』と呼ばれるだけありますね」

セルドレイは敵でありながらも、アルミヤのその技術を素直に評価した。

「ですが、以前の私ならいざ知らず、いまの私はあなたよりも上です！」

そう言うと、セルドレイはさらにスピードを上げてアルミヤに斬りかかる。

「せえいー！」

セルドレイが渾身の力を込めた横薙ぎを振るう。

それをアルミヤはバク宙で躲した。

「——っ！」

だが、躲し切れなかったのか、腕に小さな斬り傷ができていた。それを見て、セルドレイは不敵な笑みを浮かべる。

「さあ、行きますよー！」

そう言うと、セルドレイは怒濤の勢いで戦斧を振るう。

アルミヤもセルドレイの猛攻を聖剣で受け流し、受け流し切れない攻撃はその身のこなしで躲していく。

だが、躲した攻撃はいずれも躲し切れておらず、アルミヤの体の各所に傷が生まれていく。

アルミヤは確実に戦斧の間合いとセルドレイのスピードを見切つて攻撃を回避していた。なのに、それにも関わらず、アルミヤの体には傷がどんどん生まれていく。

第三者の視点で見れば、このまま行けばアルミヤがギリ貧になるのは明白だった。

「——なるほど！」

だが、アルミヤは至つて冷静で、何かを察していた。すると、アルミヤは構えを解き、無防備な姿をさらした。

「むっ？」

アルミヤの突然の行動にセルドレイは怪訝に思い、動きを止めてアルミヤから距離を取った。

一瞬、実力差を認識して諦めたのか、という考えが頭を過つたセルドレイだったがすぐにそれを否定した。目の前の男はそんな生易しい男ではないと。

セルドレイは自身を断罪しに現れたアルミヤとの戦いを思い返す。自分の攻撃が一切通用せず、逆に向こうの攻撃でどんどん追い詰められていく。そして、片目を斬られた隙を衝かれて最後には瀕死に至る一撃をくらってしまった。生きていたのは正直、奇跡だつたと思えた。

セルドレイはその経験から一寸の油断も抱かず、警戒心を引き上げる。

「何をするつもりかは知りませんが、無駄な足掻きです！」

セルドレイはアルミヤに一瞬で近づき、戦斧を振り下ろした。

ズバツ！

セルドレイの一撃を避けようとしたアルミヤだったが、肩を大きく斬られてしまった。

だが、アルミヤはそのことに動揺は見せず、むしろ、何かに合点がいったような様子を見せていた。

「やはり、そういうことか」

アルミヤは肩の傷を見て、何かを確信したあと、手に持つ聖剣を床に突き刺し、手元に一本の短剣を生み出した。

アルミヤは短剣を逆手持ちで掴むと、おもむろに肩の傷に突き刺した。すると、短剣が光輝き、アルミヤの傷を治癒していった。

「………治療の聖剣ですか。本来は創りだすのがとても困難だというのに、さすがですね」

さまざまな属性の聖剣を創りだす神セイクリッド・ギア 器である『聖剣創造』ブレイド・ブラックスミスだが、創りだすのが難しい属性があった。そのひとつが治療の力だった。

それを即座に創りだしたアルミヤに、セルドレイは素直に称賛を送るが、アルミヤは肩をすくめる。

「………あいにく、そこまで能力は高くないのだがね」

アルミヤの肩の傷が完全に塞ぎきるまえに、治療の聖剣が輝きを失って儂く砕け散った。

アルミヤの言うとおりに、アルミヤが即座に創りだせる治療の聖剣ではこの程度の治療力が限界だった。

「まあ、これで十分だがね」

アルミヤは塞ぎきっていない傷の痛みを感じていないかのように肩を回すと、床に突き刺した聖剣を手を取った。

「ですが、その様子では、あなたのジリ貧になるのは明白ではありませんかな？」
「心配には及ばんよ。——もうくらうことはないからな」

セルドレイの挑発にアルミヤが不敵に返すと、セルドレイは視線を鋭くした。

「その法衣の下に隠したものを出したらどうかね？」

「……やはり、気づいていましたか。先程のはわざとくりましたね？」

セルドレイの質問にアルミヤは不敵な笑みで返した。

それを見て、セルドレイは観念したかのように嘆息すると、法衣の下に手を入れ、何かを取り出した。

それは、細長い刀身を持ち、柄頭から刀身の半ばまでを巻きつくような螺旋状の形状の装飾が施された聖剣だった。

「これこそがあなた方が求める聖剣、『エクスカリバー・ナイトメア夢幻の聖剣』ですよ」

セルドレイが手に持つものこそが七本あるエクスカリバーのひと振り、コカビエルに奪われた三本のうちの一本だった。

その能力は相手を幻術で惑わせ、眠っているあいだにその夢を支配したりすることができるという魔法的側面の強い能力だった。

そして、アルミヤがセルドレイの攻撃を躲しきれなかったからくりも、その幻術の能力によるものだった。

セルドレイは以前戦った経験をもとに、アルミヤが自分の攻撃の躲そうとするわずかな素振りを見切り、そのタイミングで本来の戦斧を幻術で隠し、幻覚で虚像の戦斧を作りだした。それも、本来の戦斧と虚像の戦斧の位置がほぼ同じになるように。それにより、アルミヤが見切った間合いと実際の間合いとでズレが生じたため、アルミヤはセルドレイの攻撃を躲しきれなかったのだった。

エクスカリバーの奪還任務のために訪れていたアルミヤはすぐにその可能性に至り、先程の攻撃をわざとくらくらうことで、傷のでき具合から間合いにズレが生じていることを突き止めた。

「先程言いましたね？ もうくらわないと」

「ああ。からくりがわかれば、ただの子供騙しだからな」

「言いますね。では、そのお手並み、拝見させてもらいましょうか」

セルドレイはそう言うと、エクスカリバーを法衣の下に戻した。

「せっかく手にいれた聖剣を使わないのかね？」

「ご冗談を。剣技において圧倒的な差があるあなたに剣で挑む愚行などしませんよ。幻術の力だけで十分です。では、いきますよ！」

セルドレイは戦斧を構える。

「バレてしまったのなら、もう隠す必要はありませんね。ここからは全力で行かせてもらいます！」

セルドレイがそう言った瞬間、その身が八人に分身した。幻術による分身だった。

分身したセルドレイたちは一斉に駆けだし、縦横無尽に駆け抜け、四方八方からアル

ミヤに斬りかかる。

「せえいー」

セルドレイのひとりが戦斧を振るうが、戦斧はアルミヤをそのまますり抜けていった。幻術でできた分身だったからだ。

その後もひとり、またひとりとセルドレイたちが戦斧を振るうが、アルミヤは微動だにせず、戦斧はそのまますり抜けていった。

そして、六人目のセルドレイが戦斧を振るった瞬間、初めてアルミヤが動いた。

さすが、勘も鋭いですね、とセルドレイは内心でアルミヤを評価する。アルミヤほどの戦士なら、その研ぎ澄まされた感覚と勘で幻術でできた分身を見破ることなど造作もないことだと。現にいま斬りかかっているセルドレイは本物だった。

だが、セルドレイはアルミヤを評価すると同時に内心でほくそ笑んだ。いまアルミヤに見えている戦斧は幻術でできた幻であり、本来の戦斧は幻術で姿を隠して振るわれていた。それも、アルミヤの回避先を読んで振るわれており、確実にアルミヤを捉えていた。

取った！ とセルドレイが確信した瞬間――。

「——それも子供騙しだな」

アルミヤは即座に姿勢を低くすることで幻術で隠された戦斧を躲した。

「ぐおっ!？」

すかさず、アルミヤはそのままセルドレイの足を払い、セルドレイの体勢を崩した。

「ふッ!」

「なんの!」

アルミヤは体勢を崩されたセルドレイを狙って聖剣を振るうが、セルドレイは戦斧を床に突き刺して支柱にすることでアルミヤの斬撃を躲し、即座に距離を取った。

「ぬう、さすがですね……。なら、これならどうですか!」

セルドレイが叫び、さらに分身を生みだした。

「いかがですか？ 幻覚でも、視覚を通じて脳に入ってくる情報は現実です。たとえ幻覚だと認識していても、その情報に対して反射的に行動することを止めることは困難です」

そう言うと、セルドレイたちは再び縦横無尽に駆けだして四方八方からアルミヤに斬りかかる。

「何っ!？」

アルミヤは目に見えるセルドレイたちを無視して、あらぬ方向に駆けだし、セルドレイはそんなアルミヤの行動に驚愕した。

そのままアルミヤは虚空に向けて聖剣を振るう。

ガキイーン！

金属同士が擦れ合う音が廃工場内に響いた。

アルミヤが斬りつけた空間が揺らめきだし、そこにアルミヤの聖剣を戦斧で防いでいたセルドレイが現れた。

セルドレイが分身を出現させると同時に分身の陰で幻術で姿を隠し、アルミヤが分身たちの中から本体を見つけようとした隙を衝こうとしていたのをアルミヤは見通していた。

「なぜわかった!？」

「キミの殺気はわかりやすすぎる。それでは、自分の場所をわざわざ教えているようなものだ」

セルドレイは敵意と殺気を包み隠すことなく放っていた。そのため、本体と分身たちとで、敵意と殺気の有無が顕著になっていた。

研ぎ澄ました感覚で敵意と殺気を感じることが出来るアルミヤに対して、それは致命的だった。

「くっ、ならば、こうだ！」

アルミヤから距離を取り、セルドレイは法衣の下から夢幻のエクスカリバーを取り出して床に突き刺した。

すると、周囲の風景が歪みだし、床が盛り上がったたり、陥没したりし、あげくには上下左右が反転しだした。

「どうですか！　このような光景を目にしては、まともな平衡感覚を維持できまい！　これであなともおし——」

セルドレイの視界に幻覚に惑わされずにまっすぐ自身に接近したアルミヤの姿が映った。

「はあッ！」

セルドレイが反応するまもなく、アルミヤの双剣がセルドレイの胸をX字型に切り裂いた。

「むっ？」

アルミヤの双剣がセルドレイを切り裂いた瞬間、アルミヤは手応えに違和感を感じ、即座にセルドレイから距離を取った。

「……まさかこれほどとは」

アルミヤに斬られても平然としていたセルドレイはおもむろに法衣を掴むと、破りながら脱ぎ捨てた。

あらわになった法衣の下には、金属製の装甲があった。

全身を黒いスーツで覆われ、その上から胴体、腕、足が金属製の装甲で覆われたSFものに出てくるワードスーツのようなものをセルドレイは着込んでいた。

「いかがですか？ カリス・パトゥーリアから提供してもらった強化装甲服です。その防御力は見てのとおりですよ」

アルミヤは手に持つ聖剣に目をやる。よく見ると、セルドレイを斬りつけた箇所が欠

けていた。

アルミヤは手に持つ聖剣を床に突き刺すと、新しい聖剣を手元に創りだす。

「まったく動じませんか。ですが、この強化装甲服、ただ頑丈なだけではありませんよ！」

そう言うと、セルドレイは姿勢を低くし、胸の前で腕を交差させて全身に力を込める。

「ぬううううううつ……」

唸り声をあげながらセルドレイの腕、足と順番に筋肉が膨張していく。

「はあああああ……」

全身の筋肉が膨張し終え、セルドレイは息を吐くと、アルミヤを見据える。

「行きますよ」

次の瞬間、セルドレイはアルミヤの眼前まで接近を果たしていた。

「——ッ！」

「ぬうん！」

セルドレイが戦斧を振り下ろし、アルミヤは咄嗟に二本の聖剣で受け止める。だが、アルミヤの聖剣を容易に碎かれながら後方に吹き飛ばされた。

「チツ」

どうにか空中で体勢を立て直して着地したアルミヤにセルドレイが言う。

「いかがですか？ この強化装甲服の力は」

セルドレイが装着している強化装甲服には人工筋肉が内蔵されており、身体能力を高める機能が備わっていた。これは、もとの身体能力が高ければ高いほど効果を発揮し、

もともと常人離れをしていたセルドレイが使用することで、人間離れした動きを可能にしていた。

セルドレイは戦斧の武装十字器（クロスギア）をもう一本取り出すと、本来は両手で扱っていたそれを、片手で持ち、戦斧による二刀流の出で立ちとなった。

「行きますよー！」

セルドレイは幻覚による分身も生みだし、強化装甲服によって高められた身体能力を駆使して分身たちと共に縦横無尽に廃工場内を駆け抜ける。

同時に再び周囲の風景も幻術によって歪みだした。

強化された身体能力によるパワーとスピード、幻覚による分身と風景の歪み、これらを一瞬で対処するのは不可能。さらに、セルドレイは先程アルミヤに言われたことを反省し、今度は敵意や殺気をできる限り抑える。今度こそ取った！ とセルドレイが確信した瞬間――。

「なっ!?!」

セルドレイの周囲に無数の聖剣が空間に揺らめきを残しながら出現した。それらの聖剣はアルミヤが創りだした剣自体を透明にする能力を持った聖剣だった。

「い、いつのまに!?!」

セルドレイは驚愕を隠せなかった。

アルミヤから一切目を離していなかった。新しい聖剣を作って、自分の周囲の床に突き刺す暇などなかったはずだった。

「——幻術を使えるのはキミだけではないということだよ」

「まさか、いまあなたが持っている聖剣は!?!」

アルミヤがいま持っている聖剣はセルドレイの持つエクスカリバーと同じ幻術の能力を持った聖剣だった。

エクスカリバー程の力はなくとも、透明化の聖剣を創り、透明化させて投擲する一瞬の動作を行うあいだだけ幻術で隠すことはできるぐらいの力があった。

「くっ！」

セルドレイは慌ててその場から離れようとする。

一見すれば、ただ床に無数の聖剣が突き刺さっているだけの状況でしかなかった。

だが、セルドレイにとってはそうではなかった。

セルドレイの脳裏にはかつてアルミヤと戦ったときのある光景が鮮明に浮かび上がっていた。アルミヤが放った聖剣使いとしては邪道の剣技を。

「ブローケン・ブレイド
壊れた聖剣」

アルミヤがボツツとその名を口にした瞬間、アルミヤの聖剣がすべて激しく光り輝き――。

カツ！

一際激しく輝いた瞬間、アルミヤの聖剣が聖なる波動を発して大爆発した。

Life. 15 憎しみの末路

壊れた聖剣——アルミヤが開発した聖剣の秘技。聖剣の聖なるオーラを聖剣内で暴走させることで、聖剣を自爆させて聖なるオーラによる爆撃を行う攻撃。威力も並みレベルの聖剣の自爆でも『破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣』の斬撃に匹敵するほどの破壊力を誇る。欠点として、その性質上、聖剣を使い捨てにするため、アルミヤの『聖剣創造ブレード・ブラックスミス』のような自前で聖剣を用意する方法があつて始めて使える技だった。

複数の聖剣の壊れた聖剣の爆発によって、廃工場内は見るも無惨な光景ができあがっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐううう・・・・・・・・」

その中心にセルドレイが夢幻のエクスカリバーを支えに膝をついていた。

「あれに耐えるとはな。その強化装甲服とやら、なかなか頑丈だな」

セルドレイの身を守っていた強化装甲服の装甲もそのほとんどが破損しており、スーツが破れた箇所から覗く皮膚は酷い火傷を負っていた。

「……………おのれエエエエエエッ！」

絶叫をあげるセルドレイは懐から小瓶を取り出すと、乱雑に蓋を開けて中に入っていた液体を自身の体に振りかけた。

すると、セルドレイのダメージが煙を立てながら完全に回復してしまった。

「……………フェニックスの涙か」

小瓶に入っていた液体の正体はフェニックスの涙。元72柱の悪魔であるフェニックス家が生み出した、いかなる傷もその場で癒すことが可能なアイテム。

「……………なぜキミがそれを持っている？」

フェニックスの涙は悪魔でも手にできるのは上流階級の者だけで、魔術師でもそう簡単には入手できない希少で高価な代物だった。はぐれエクソシストであるセルドレイが手にできるものではなかった。

「……これもカリス・パトウーリアが提供してくれたものですよ。私は必要ないと言ったのですが、無理矢理渡されましたね。使うまいと思っていたのですが……」
「なるほど。しかし、悪魔が生み出したものがキミを助けるとはな」
「黙れええッ！」

アルミヤの皮肉にセルドレイは絶叫をあげる。

「業腹です！ 非常に業腹ですとも！ 忌々しき悪魔の力を借りることになるなんて！
しかし、私は真なる神の信徒として、死ぬわけにはいかぬのです！ そのためなら、恥辱にまみれようと、生き残りますとも！ 主のために、私は悪魔を、悪魔の力を平然と借りる異端共を滅ぼさねばならないのですから！」

立ち上がり、思いの丈を叫ぶセルドレイ。

「——違うな」

アルミヤはセルドレイに冷徹に告げる。

「キミは主の名で自分の行いを都合よく正当化しているだけにすぎない。キミはただ——復讐をなしたいだけだろう」

アルミヤの言葉にセルドレイは押し黙ってしまった。

セルドレイがそこまで悪魔と堕天使、特に悪魔に対し、異常なまでの敵意をむき出しにする理由——それは復讐だった。

セルドレイには愛する妻がいた。だが、自分の留守を狙ってはぐれ悪魔が妻を襲った。セルドレイが駆けつけたときにはもう、凄惨な姿で殺されたあげくに食われている最中だった。

それを境に、もともと強硬派寄りな思考だったセルドレイの中で何かが壊れ、信仰心が歪んだ。

悪魔への激しい憎悪を抱き、悪魔を滅ぼすためなら手段を選ばず、悪魔と関わる者は

一般人であろうと手にかけた。そして、セルドレイはその行いを主が望んでいると疑っていなかった。

だが、実際は「主の名のもと」という言葉で自分の非道な復讐を都合よく正当化しているにすぎなかった。それをセルドレイは自覚していないだけだった。

それを看破していたアルミヤは冷徹にそのことを指摘したのだった。

セルドレイは憤怒の表情を浮かべる。

「黙れ！ あなたは自分の大切な存在が妻と同じ目あつても、同じことが言えますか!?

あのとときの私の怒りと嘆きがわかりますか!?! いいえ、わからないでしょうね！ 戦

災孤児であり、天涯孤独のあなたには大切な存在などいやしないでしょうからね!」

セルドレイの言葉にアルミヤは何も言うことなく、ただ冷静に瞑目するだけだった。

「覚悟しろ、セルドレイ・スミルノフ。神の名のもと、キミを断罪する」

聖剣を構え、淡々と告げるアルミヤ。

「くっ！」

セルドレイは賞金稼ぎバウンティハンターが使う武装指輪アームズリングで強化装甲服を新しいものに変えて戦斧を構える。

「ちいっ！」

そして、セルドレイはおもむろに眼帯を乱雑に取り払う。

眼帯の下にあったのは、アルミヤに斬られた目ではなく、瞳がレンズになった機械仕掛けの眼球だった。

「これはとっておきでしたが、あなたが相手では致し方ありません！」

アルミヤはその機械仕掛けの眼球に警戒しつつ、セルドレイの出方を窺う。

「はあッ！」

セルドレイが斬り込むと、アルミヤはセルドレイの斬撃を躲そうとする。

「フッ」

「——ッ!？」

セルドレイの戦斧がアルミヤの動きに合わせて合わせるように振るわれる。

アルミヤは咄嗟に聖剣で受けるが、戦斧の一撃を受けて聖剣が砕かれ、アルミヤは後方に吹き飛ばされる。

アルミヤは即座に新たな聖剣を創りだすが、その悉くがセルドレイに砕かれ、弾かれていた。

「いかがですか、この義眼の力は！」

セルドレイの義眼は、義眼で見た相手の動きを演算し、予測した結果を脳に伝達させ、装着者に擬似的な未来視をできるようにする装置だった。

これにより、セルドレイはアルミヤの動きを先読みすることで、アルミヤの回避を封じていた。

着々とアルミヤは追い詰められていた。だが、アルミヤは至つて冷静だった。

「これで終わりです！」

セルドレイの戦斧が聖剣ごとアルミヤの胴体を両断した。

「何っ!?!」

だが、すぐにセルドレイの表情が驚愕に染まった。

斬られたアルミヤは甲冑騎士へと変貌し、儂く碎け散ったからだ。

「——ッ!?!」

背後から気配を感じ、慌てて振り向くセルドレイ。

セルドレイの視界に入ったのは、聖剣を持った複数の甲冑騎士たちを従えるアルミヤだった。

「――バランス・ブレイク禁手化、『ブレイド・ナイトマス聖輝の騎士団』」

『ブレイド・ナイトマス聖輝の騎士団』――『ブレイド・ブラックスミス聖劍創造』の禁手であり、その能力は聖劍を持った甲冑騎士を複数創りだして使役するというもの。

先程までセルドレイが戦っていたアルミヤは擬態の能力の聖劍を持った甲冑騎士であり、擬態の能力でアルミヤに化けていたのだ。

「……い、いつから……?!」

「ブローケン・ブレイド先程の壊れた聖劍のときにだよ。気配から、まだ倒れていないことは察していたからな」

アルミヤが手を振ると、甲冑騎士たちは一斉に四方八方からセルドレイに斬りかかる。

「くっ!」

セルドレイは義眼の機能で甲冑騎士たちの動きを先読みして対処するが――。

「ぐっ!？」

対処しきれず、甲冑騎士たちの斬撃をくらっていた。

義眼が捉えられる視界には限界があり、死角からの攻撃に対応できないのが義眼の欠点だった。

アルミヤは即座にそれを見破り、手数で押してきたのだ。

ましてや、甲冑騎士たちはアルミヤの技術をほぼ完璧に反映されており、実質、複数のアルミヤと戦っているのと同義だった。

「なんのこれしきー!」

セルドレイは強化装甲服の防御力を駆使して、あえて斬撃を受けることで甲冑騎士の動きを封じて甲冑騎士たちを破壊する。

そして、すべての甲冑騎士たちを破壊すると、セルドレイはアルミヤのほうに視線を向ける。

「なっ!？」

セルドレイの義眼が捉えたのは、反りがある二本の聖剣の柄同士を繋げて弓のようにしたものに聖剣をつがえていたアルミヤだった。

「——終わりだ」

射たれた聖剣は真っ直ぐにセルドレイめがけて高速で飛翔する。

その速さは、セルドレイに回避する隙さえ与えず、装甲を貫き、セルドレイの断末魔をかき消しながら炸裂した聖なるオーラがその身を焼いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・なぜだ・・・・・・・・・・」

全身を聖なるオーラで焼かれ、もはや虫の息な状態で仰向けに倒れていたセルドレイは自分が置かれている状況が信じられなかった。

「その義眼の力を過信したな。視野が狭まっていたぞ。片目のときのキミならば、いま

の一撃はまともにくらつていなかったはずだ」

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

指摘されたセルドレイは悔しそうに齒噛みしていた。

「いま樂にしてやろう」

セルドレイに近寄ったアルミヤはとどめをさそうと聖劍を振りかぶる。

「——ッ!？」

アルミヤはその場から咄嗟に飛ぶと、アルミヤがいた場所で劍が振るわれた。

「・・・・・・・・どういうことだ?」

アルミヤを狙って劍を振るつたのは、アルミヤが斬り伏せたはずだったはぐれエクソシストだった。

いつのまにか、アルミヤが倒した神父たちが全員起き上がって、アルミヤを囲んでいた。

そして、神父の一人がセルドレイを回収し、魔方阵による転移でこの場から離脱しようとしていた。

「チツ！」

アルミヤは逃がすまいとセルドレイを追おうとするが、神父たちに阻まれてしまう。そして、セルドレイを連れした神父は転移によって廃工場から消え去ってしまった。



「大丈夫ですか、セルドレイさん？」

自身の能力によって操った神父を使ってセルドレイを回収したカリス・パトウーリアは自分の目の前で倒れているセルドレイにフェニックスの涙をかける。

フェニックスの涙によってダメージを回復したセルドレイは起き上がり、忌々しそう

に煙を立てている自身の体を睨む。

「……………また悪魔の力で！」

「命あつての物種でしょう」

「……………くっ……………」

セルドレイは拳をわなわなと握ると、やがて短く嘆息する。

「……………いいでしょう。この恥辱も力に変えて、憎き悪魔どもにぶつけるとしまし
う」

セルドレイは立ち上がると、カリスのほうを向く。

「……………ひとまず礼を言いますよ、カリス」

「どういたしまして——と言いたるところですけど、あなたに残念なお知らせがありま
す」

「……………何？」

「まずはこれを」

カリスはタブレットPCをセルドレイに渡す。

タブレットPCを受け取り、画面を見たセルドレイがカリスに訊く。

「………なんですかこれは？」

「あなたの生体パラメーターを表している画面ですよ。そして、刻一刻と減少を続けている数値がありますね？ それはあなたの生命力を表している数値ですよ」

「なんだと!？」

セルドレイは慌ててもう一度画面を見る。

セルドレイの生命力を表している数値はなおも減少を続けていた。

それ以前に、表示されている数値も決して高くなかった。

「どういうことですか!?! なぜ、こんなことが!?!」

「原因は、バルパーさんがあなたを聖剣使いにするために与えたものですよ。それにあなたの体がついていけず、あなたの体を蝕んでいるのですよ」

「なっ!?!」

セルドレイは信じられないといった表情で震え、手に持つタブレットPCを落としてしまう。

「あの異端者め!」

そして、この場にいないバルパーに向けて怒りを露にする。

「生命力の減少スピードからして、あなたの余命はあと数時間といったところですかね」

カリスの言葉を聞いたセルドレイは絶望の表情を浮かべて膝をつく。

「主よ! なぜですか!?! 私はあなたのために尽くしてきた!なのに、そんな敬虔な信徒に与えるものがこんな残酷なものなのですか!?!」

天を仰ぐセルドレイにカリスは言う。

「そんなものですよ、神なんて。だから、こうして残酷な運命をあなたに突きつけているのですよ」

力なくうなだれるセルドレイにカリスの言葉は聞こえていなかった。

もともと壊れかけていたセルドレイの心が完全に壊れてしまったのだ。

「セルドレイさん。私があなたを助けましょうか？」

「……………何……………」

「私があなたに悪魔を滅す機会をあげますよ」

「本当ですか!？」

「ええ。機会だけでなく、力も差しあげますよ」

「は、はは!」

セルドレイは歓喜の表情を浮かべて立ち上がる。

「何から何まで、本当に感謝しますよ、カリス！ 待っている、悪魔ども！ 妻を奪われ、

主にさえ裏切られたこの私の怒りと悲しみを味わうが——」

バンツ！

セルドレイの叫びを遮り、一発の銃声が鳴り響いた。

「——は？」

セルドレイは銃声が鳴ったほうに視線を向ける。

そこには拳銃の銃口をセルドレイに向けているカリスがいた。

そして、セルドレイの胸には小さな穴が空いており、そこから血がどくどくと流れ出ていた。

「あなたには一度死んでいただきます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・カ、カリス・・・・・・・・・・き・・・・・・・・・・きさ・・・・・・・・・・ま・・・・・・・・・・」

胸を押さえながら、憤怒の表情でカリスを睨みながらセルドレイは力なく崩折れた。

「さて——」

カリスは命を落としたセルドレイにセイフリッド・ギア神器の力を解放した。

Life. 16 夜刀神 蓮火

「……なんだ？」

レンが目の前の光景に訝しんでいると、見えない何かが先端から徐々に姿を現し始めた。

それは一本の剣だった。

剣の姿が完全に現れると、次に持ち主の姿が現れ始めた。

剣の持ち主は黄緑色で特徴的な髪型をした若い男性だった。前髪がほぼ両目を隠すほどまで長く、レンが倒したはぐれハンターたちと同じような格好をしていた。

「シシシ」

男の姿が完全に現れると、男は独特な笑い声をあげてはぐれハンターを貫いている剣を抜いた。

剣を抜かれたはぐれハンターはそのまま崩折れた。

レンははぐれハンターには目をくれず、男の持つ剣に視線を向けていた。

シンプルな形状をしており、鐔と刀身の間が細長い形状の装飾に施されていた。何より特徴的だったのが、剣から発せられる波動。はぐれハンターたちが持っていた聖剣と似ていながら圧倒的に強い波動を放っていた。

「確か、エクスカリバーの中に透明化の能力を持ったやつがあるって聞いたことあったな。そいつはそれか」

レンの言うとおり、男の持つ剣こそが、教会がコカビエルに奪われた聖剣エクスカリバーのひと振り、透明化の能力を持った『エクスカリバー・トランスベアレンシー透明の聖剣』だった。

レンはエクスカリバーを持った男のほうに視線を移す。

「おまえ確か——元Cランクの名前は……シャルトだったか？」

レンは男の容姿を見て、以前資料で見かけたことがあったことを思い出す。

男の名前はシャルト。元Cランクのはぐれハンター。はぐれになった原因は他ハンターを殺して手柄を奪った罪であった。

「シシシ。俺もおまえのことを知ってるぜ。Aランクハンター、『風の剣帝』こと夜刀神竜胆りんとうの弟、Bランクの『閃刃せんじん』の夜刀神蓮火。さっきの見てたけど、異名に違わねえ速さだったぜ」

「そりやどうも」

レンはシャルトが殺したはぐれハンターのほうに視線を移して訊く。

「なんで殺したんだ？ 一応、俺は生かすつもりだったんだがな」

「でもギルドにつき出すつもりだったんだろ？ だったらどうせ、殺処分になってたんだから、変わりねえだろ」

「……そうかもしんねえけどよ」

「ま、こんな奴のことは放っておいて、俺と遊ぼうぜ」

そう言うと、シャルトの体が消え始めた。

「一応、おまえは俺より上のランクだからな。これくらいのハンデはつけさせてもらう

ぜ。ゲームはフェアプレイが大事だからな」

完全に姿を消したシャルトに、レンは焦ることなく鞘を手に構える。

「——ッ！」

ガキイイイン！

レンは振り向きざまに放った居合いで何かを弾いた。

「おつとととー！」

透明化して背後からレンに斬りかかろうとしていたシャルトはエクスカリバーを弾かれた勢いでバランスを崩さないように後ずさったあと、透明化を解除して姿を現す。

「ちえつ、やっぱBランクなだけあって、姿が見えなくても気配とか殺気でバレるか。せっかくエクスカリバーっていうレア武器手に入れたから、こいつでおまえのことを

斬って見たかったけど、剣じゃおまえに勝てねえか」

シャルトはそう言うと、一目散にこの場から逃げだした。

「チツ！」

レンはすぐさまシャルトを追う。

「………また消えたか」

シャルトを追って廃工場を出たレンだったが、透明化で姿を消されてシャルトを見失ってしまった。

「——ツ!?!」

突如、レン目掛けて黄色に光り輝く物体が飛来してきた。

レンは即座に飛来してきた物体を居合いで弾いた。

「……ちよつとめんどうだな」

自分が陥った状況にレンは軽く舌打ちをした。



「シッシン」

レンから三百メートル以上も離れた場所でシャルトが端末の映像を見ながら独特の笑い声をあげていた。

その端末にはシャルトが飛ばしているドローンから送られてくるレンの姿を俯瞰した映像が映っていた。

そして、シャルトの手には黄色に光り輝く弓矢が握られていた。

光攻撃系 セイクリッドギア 神器、『黄光矢』——シャルトの持つ黄色の光の矢を放つ セイクリッドギア 神器。

シャルトはこのドローンの映像で相手の位置を確認しながら光の矢で安全なところから相手をいたぶりながらじわじわと攻めたてて倒すスタイルを得意としていた。そ

の姿から周りのハンターは彼をハンターではなくあえて『狩人』と呼んでいた。

「さーて、今日もハンティングゲームの始まりだ」

命の取り合いをゲーム感覚で楽しむシャルトは上空に向けて光の矢を射った。

放たれた光の矢は空中で軌道を変えた。『黄^{スターリング・イコロ}光^矢』の光の矢はこのように軌道変更が可能で、同じ場所にながら様々な方向から相手を狙撃できる神^{セイリッド・ギア}器だった。

軌道が変わった光の矢は建物の間を縫ってレン目掛けて飛翔する。

レンは即座に反応して光の矢を弾いた。

「シシシ。じゃあ、次は二本だ」

シャルトは光の矢を三本つがえ、同時に射ってそれぞれ別の方向に軌道変更してレンを攻撃する。

だが、レンはそれにも反応して対処した。

「シシシ、さすがだな。だけど、いつまでもつかない」

その後もシャルトは連続で光の矢を射っていく。

軌道変更によって自分の位置はバレルことはない。こちらから一方的に攻撃できる。いずれ、集中力に限界が来て終わる。こっちはただ矢を射っていくだけの簡単なゲーム。そんな優越感に浸りながらシャルトはひたすら光の矢をレンに射ちこんでいく。

「……おいおい、マジかよ」

だが、シャルトが射った矢が百発に到達しそうなところでシャルトは表情を歪ませた。

シャルトが射った光の矢をレンは悉く弾くか躲かしていた。

しかも、その集中力は衰えるどころか、疲弊の色さえまったく見せていなかった。

逆にシャルトのほうが光の矢の連発と軌道変更のための集中力で疲弊していた。

「あーあ、つまんねー。もう飽きたぜ」

シャルトはうんざりした様子で愚痴る。

シャルトはもともと堪え性がなく、非常に短気だった。

はぐれになった原因のハンター殺しも、些細なことによる癩癩によるものだった。

「ちようどいいや。新技の実験体になつてもらうぜ」

そう言うと、シャルトは透明のエクスカリバーの能力で姿を消して建物の屋根に昇る。

望遠の魔術でレンを捉えながら一本の光の矢を弓につがえる。その矢もエクスカリバーの力で透明化していた。

「シシシ。とっておきの最速の矢だ。しかも、透明化のおまけつき。これで終わりだぜ」

これで終わりという確信を持って、シャルトは光の矢を射った。

放たれた光の矢は超高速で飛翔し、レンへと迫る。

「たか」

だが、シャルトの口から出たのは勝利の歓声ではなく、素っ頓狂な声だった。なぜなら、シャルトが放ったほぼ不可避と思われた矢の一撃をレンはただ身をそらすだけで躲してしまったからだ。

そして、レンは望遠の魔術越しにシャルトのほうを真っ直ぐ見ると、不敵な笑みを浮かべて口を動かした。

——そこか。

そう言われた気がしたシャルトは心臓を鷲掴みされたような感覚に陥っていた。

そして、レンはナイフを取り出し、上空に向けて投擲した。

「な、何を——まさか!？」

シャルトは慌てて、ドローンからの映像が送られてくる端末を見る。しかし、端末に映っていたのは、映像が途切れた画面だった。

レンが投擲したナイフによってドローンが撃墜されたのだ。

「う、嘘だろ!？」

シャルトはもう一度、望遠の魔術でレンのほうを見る。
レンはすでにシャルト目掛けて疾走していた。

「ひっ!？」

シャルトは初めてレンに対して恐怖感を覚え、一目散にその場から逃げだした。

「ちくしよちくしよ!？」 何がどうなってやがる!？ なんでバレた!？ どうやって俺を見つけた!？」

シャルトはわけもわからず、ただひたすらレンから離れようと全力で走る。

距離はあった。いまは透明化もしている。追いつけるわけがない。そう思い込んで走っていたシャルトの頭上を何かが飛び越え、シャルトの前に降り立った。

「——よう」

「ひいつ!？」

シャルトの前に降り立ったレンが呼びかけると、シャルトは情けない悲鳴をあげる。

「ど、どうやって俺を見つけた!? それ以前に、どうやってあの矢を避けやがった!?」
「聞いた」

シャルトの問いかけに、レンは自身の耳を指差しながら言った。

「俺も神セイクリッド・ギア器持ちでな。『龍サウンド・レシーバーの耳』。ま、聴覚を高めるだけのありふれたもんだよ。

でも、この高められた聴覚は結構いろいろ聞こえるんだぜ。たとえば、矢が空気を裂く音とかな」

「——ツ!？」

「気づいたか」

矢が空気を裂く音、それを捉えたことで、姿を消していようとレンはシャルトの最後の矢を避けることができた。同時に、その音は矢が飛んできた方角、つまり、その方角

の先にあるシャルトの狙撃地点もわかったというわけだった。

「だ、だが、そいつでわかるのは方角だけだろうが!? あのあと、俺はすぐに移動して――」

「だからこそさ」

「何?!」

「俺の『サウンド・レシーバー』の『耳』が音を正確に聞き取れる範囲は約半径一キロだ。ま、距離が遠くなるほど神経使うから、普段は三百メートルくらいだけだな」

レンが口にした数値にシャルトは啞然としていた。

「方角がわかれば、あとはその方角に意識を集中して、場所がバレて移動しようとするおまえの音を聞き取ればいいだけだ。この時間帯だから、あっさり見つけられたぜ」

レンから逃げようとしていたシャルトだったが、実際は自分の居場所をレンに教えていたも同然だった。

「ちなみにおまえが最後の矢を射たなかったとしても、徐々に範囲を広げていた聴覚に

結局捕まっていたぜ」

それを聞き、自分が狩人、レンが獲物で徐々に追い込んでいたと思っていたシャルトは、実際は自分のほうが獲物で追い込まれていた事実を認識した。

「……チートじゃねえかよ、それ……」

「これでもガキの頃は苦労したんだぜ。雑音がうるさくてうるさくて、夜もまともに寝られなかったからな。この音を完全遮断するヘッドホンが手放せなかったからな」

レンは首にかけているヘッドホンを指でトントンとつつきながら言う。

「ま、もうコントロールできるから必要ないんだけど、なんか首にかけてないと落ち着かなくてな。さてと——」

レンは鞆を手につくりとシャルトに歩み寄る。

「ま、待てよ！」

それを見てシャルトは両手を前に突き出してレンを制止する。

「な、なあ、取引しねえか？」

「……取引？」

「あ、ああ！ 俺を保護観察ハンターにしてくれるようにおまえの兄貴に頼んでくれねえか！」

保護観察ハンター——保護観察の賞金首バージョンとも言うべき制度。賞金首、はぐれハンターの中でも、やむを得ない事情などがあり、丈領酌量の余地がある対象に対して、一時的に討伐対象から外され、Aランクハンターの監視下で賞金稼パウテイーハンターぎ稼業に勤しむ制度だ。稼ぎの九割が損害賠償として費やすことになっている。そして、犯した罪に値するだけの賠償が支払われた場合に賞金首認定が解除される。

「……おまえに丈領酌量の余地があるとは思えねえけどな」

シャルトの罪はハンター殺しに始まり、多数の罪のない一般人を手にかけたことだつ

た。やむを得ない事情があったわけでもなく、ただの快樂殺人だった。レンの言う通り、丈領酌量の余地などなかった。

「だから取引だよ。俺にはやむを得ない事情があつて、丈領酌量の余地があつたつてでっち上げてほしいんだよ」

「んなこととして、俺たちになんのメリットがあるんだ？」

監視役のハンターには報酬が支払われることになつてはいるが、監視対象が問題を起こした場合、監視不行きとして相応のペナルティが課せられる。最悪、ライセンス剥奪となることがあつた。だからなのか、監視役を引き受けるハンターは少なく、引き受けのようなハンターは物好きしかいなかった。

ましてや、シャルトが言つたような不正をしてバレようものなら、はぐれ認定される。

「まず、俺の知つてる情報は洗いざらいおまへたちに話す。それをギルドに売れば結構な金になるぜ！」

「で？」

「保護観察ハンター時の俺の残った稼ぎをおまへにやるし、賞金首認定が解除されたあ

とでも稼ぎのほとんどをやるよ」

「話になんねえな。デメリットと釣り合わねえ」

レンの言葉に、シャルトはむしろ笑みを浮かべていた。

メリットがデメリットを上まればいいのだと思ったのだ。

「安心しろよ。俺が所属してる組織『C B R』がいろいろやつてくれるからよ」

『C B R』——シャルトを初め、カリスや先程レンが戦ったはぐれハンターたちが所属している闇の組織。シャルトに殺されたはぐれハンターが口にしようとしていた組織の名前だった。

「へえ、そいつはおもしろいことを聞いたな」

「だろ！ 小耳に挟んだことなんだが、組織のボスが結構いろんなところと繋がりあるらしいんだ。聞いて驚け。なんと、一部のギルドや政府とさえ繋がりがあらしいぜ」

「何？」

「そのコネを使って、はぐれの情報を掴ませないようにしたり、本来ははぐれに認定され

るハンターの罪を揉み消したりな」
「——っ!？」

シャルトの言葉に驚愕するレン。

「さっき言った取引も結構やつてる奴いるらしいぜ。そのボスがいい感じに誤魔化してくれるらしいからな」

「なるほどね」

「最近は何れが多いだろ? 皆、そのボスの恩恵にあやかろうとしてるのさ。なんせ、そっちのほうが、好き勝手やって金が手に入るわけだからな。しよせん、ハンターは金がすべてな連中ばかりだからな」

レンは少しの間思案したあと、シャルトに訊く。

「そのボスの名前はわかるのか?」

「いんや、知らね。でも、異名は知ってるぜ。おまえも知ってる名だぜ」

「まさか!？」

「ああ、あの『災禍の凶王』カラミテイ・キングだぜ」

「——ッ!？」

その名を聞き、レンはここに来て初めて大きな驚愕をあらわにした。

『災禍の凶王』——表の世界でも裏の世界でも知られている裏社会でさまざまな悪事に手を染めている謎の人物の異名であった。その悪事の幅は広く、中には、テロ行為、紛争への支援などもあった。

にもかかわらず、その異名以外はまったく尻尾を掴ませない人物だった。

「なるほどねー」

「な、悪い話じゃないだろ？ 俺は命が助かるし、おまえたち兄弟も懐が温まるしで、一

石二鳥だ——」

「知ってそうな情報はそんなくらいか」

「——へ？」

シャルトの言葉を遮り、レンは居合いの構えをとる。

「ちよ、ちよつと待てよ!？」 話が違うだろ!？」

「何言ってるんだ。俺は了承した覚えはないぜ」

「だ、だって、どう考えてもメリットのほうが多いし、デメリットだって、ほとんどないに等しいだろ!？」 断る理由なんて……」

「メリットデメリットは関係ねえよ。はなつから話を聞くつもりはないんだからな」

レンは初めからシャルトから情報を引き出すことしか考えていなかった。

おもわせぶりの反応したのは、そうすれば、いろいろ話すと思つたからだつた。

結果、シャルトはレンの狙いどおりどころかそれ以上の情報をペラペラと話してしまつた。

「ま、待てよ!？」 おまえもハンターなんだから、金がほしいだろ!？」

「勘違いすんなよ。俺がハンターになつたのは金のためじゃねえ」

「じゃ、じゃあ、なんだよ!？」

「てめえみてえなクズ野郎どもを斬るためだよ」

レンはシャルトに対する最大級の嫌悪感をあらわにして言う。

「てめえが殺した奴の中に子供がいたよな？ しかも、遺体からは痛めつけられ、なぶられた痕跡があつた。なんでんなことした？」

「・・・・・・・・そ、それは・・・・・・・・」

言い淀むシャルトにレンが言う。

「おもしろかつたからだろ？ てめえみてえなクズ野郎どもは皆そうだ。おもしろ半分
で子供を殺す。そういうクソ野郎は例外なく斬る！ 俺たち兄弟の暗黙の了解だ」

レンの言葉を聞き、シャルトは必死に命乞いを始める。

「わ、悪かつたよ！ 反省してる！ だから殺さないでくれ！」

シャルトの命乞いにレンは冷めた視線を向けて言う。

「——おまえが殺したヒトたちや子供たちだって同じ気持ちだったんだぞ。それをおま

えはどうした？」

「は、はは……うおあああああつ！」

シャルトは絶叫をあげ、光の弓を出すと、先端が無数に枝分かれした光の矢をつがえた。

「くたばれええええええつ！」

シャルトが矢を射つと、光の矢は無数の矢になってレンに向かって飛翔した。

バチチチチチチチ！

だが、レンの体から紅い雷が放電され、光の弓をすべて薙ぎ払った。

「なっ!? う、うあああああああつ！」

シャルトはレンが放った紅い雷に驚愕し、背中を見せて一目散に逃げだした。

「一の型——疾風」

レンが居合いの構えで飛びだすと、シャルトに一瞬で追いつき、そのまますれ違いざまに放たれた神速の居合いがシャルトの首を両断した。

Life. 17 墮天使の目的

「さて、結構思わぬ情報が手に入ったな。『CBR』か。なんかの略なんだろうけど、いまの段階じゃ、検討もつかねえな」

レンは顎に手を当てながらシャルトから聞き出した情報の整理を行っていた。

「——にしても、『カラミティ・キング災禍の凶王』が関わってるとはな……。冬夜さんが今回の件に絡んでるかもしれないって予想たてたけど、ビンゴだったとはな。こうなってくるのと、カリス・パトウーリア討伐はヘタするとAランク案件かもな……。もしくはそれ以上か——。こりゃ、槐が関わるにはキツいな。渋るだろうけど、あいつは下からせるか」

今回の件が槐には荷が重い案件と判断したレンは槐にそのことを伝えようとスマホを取り出す。

「……案の定、通信妨害されてるか……」

だが、通信妨害をされていたために槐たちと連絡が取れなかった。

「じゃあねえ。ひとまず、樹里さんのところに行つてから探しに行くか。もしかしたら、向こうも樹里さんところに行つてるかも知れねえしな」

レンはひとまず、シャルトから得た情報を樹里に伝えに行くことにした。

「このエクスカリバーも樹里さんに預けとくか」

レンはシャルトが持っていたエクスカリバーを手に取りろうと近寄る。

「——ッ!?!」

レンは高められた聴覚で何かを捉え、その場から勢いよく後方に飛んだ。

同時にレンがいた場所に数本の光の槍が突き刺さった。

レンが視線をあげると、上空に一人の墮天使がいた。

黒いトレンチコートのようなものを着用した長身でウエーブかかった金髪の男だった。何よりレンの目についたのは、その背中に生えた八枚の漆黒の翼だった。

「——翼が八枚とはな」

少なく見積もっても、上級墮天使上位クラス。

めんどろな相手が出てきたなど、はぐれハンターたちやシャルトのときとは違い、レンは警戒心最大で身構える。

「お初にお目にかかります。私はコカビエルさまの右腕を務めております、ジブラエルと申します」

丁寧にお辞儀をして挨拶するジブラエル。

「これは、丁寧。俺も一応名乗っておくぜ。夜刀神蓮火だ」

「ええ、『閃刃』殿のお噂はかねがね」

「そりやどうも」

互いに挨拶を終えると、ジブラエルは地面に降り立ち、シャルトが持っていたエクスカリバーを回収した。

「ちようどよかったぜ。期待しないで訊くが、おまえら墮天使の目的はなんだ？　なんでそんなにエクスカリバーにこだわる？」

レンは警戒しながら答えを期待せずとも、ジブラエルに墮天使が今回の騒動を起こした目的を訊いた。

「そうですね．．．．別に隠すほどでもないですかね。いいでしょう、お教えしますよ。この騒動はコカビエルさまの独断で起こされたものであり、グリゴリは一切関与していません」

思いのほかあっさりと答えてくれたジブラエルに怪訝そうにしながらも、レンはさら

に訊く。

「なんだってんなことしてんだ？ 下手すれば、かつての大戦が再開するぜ？ グリゴリは一応、非戦の構えなんだろう？」

「むしろ、願ったりかなったりですよ。かつての大戦の再開、それこそがコカビエルさまの、ひいては我々の目的なのですから」

ジブラエルたちの目的を聞き、レンは内心で嘆息する。

「……冬夜さんの推測どおりかよ。なんで戦争なんて起こすかねえ。割り食うのは巻き込まれる無関係な奴らだつてのに」

レンはかつて、紛争地帯に赴いたことがあり、その経験からジブラエルたちの目的に内心憤慨する。

「あなたの言うとおり、先の大戦後、グリゴリはもう戦争は起こさないと非戦の構えを取りました。コカビエルさまにはその方針が大層気に入らないのですよ。あの方は酷い

戦争狂でいらつしやいますからね。たとえ自分一人でもあの戦いの続きをすると、今回の騒動を引き起こしたのですよ」

最悪だった。御大層な大義も、目的もなく、ただただ自らの欲求を満たすためだけに戦争を起こす。レンにとっては最悪の部類だった。

「あんたはどうなんだ？ 自分の意思なんて関係なく、ただただ、上司に従ってるだけか？」

レンはジブラエルの真意を訊き出そうとする。

「まさか。私も自らの意思でこの騒動に関わっています。私とて、いまのグリグリには思うところがありますからね。確かに、先の大戦で、多くの同胞が亡くなりました。これ以上、戦争を続けるのは種の存続に関わるかもしれない。だが、だからこそ我々は勝たねばならなかったのです！ でなければ、死んでいった同胞たちの死が無駄死になつてしまいます……。同胞たちも、こんな中途半端な結果のために命を散らしたわけではないはずですから……」

悲痛な面持ちで話すジブラエル。

「……………嘘は言つてねえみたいだな」

レンの高められた聴覚は、相手の体内から発せられる音から嘘を見抜くことができた。

ジブラエルは大勢の同胞たちの死を本気で嘆いており、その死に報いるためにも、大戦を再開させ、堕天使が勝利を手にしなければと考えていた。

「けど、はつきり言つて、無謀なんじゃねえのか？ 悪魔と天使が手を組んで、おまえたちを振り返りにするかもだぜ。ヘタをすれば、そこにグリゴリの連中も加わるかもだぜ？」

「……………かもしれませぬね。ですが、コカビエルさまはともかく、私はこの身が滅びてもかまわないのです。戦争さえ、起こつてしまえば」

「本当に戦争が再開するんです？」

「ええ」

ジブラエルは確信を持って言う。

「停戦してると言っても、悪魔側にも神側にもこの状況に不満を持っている者は多いでしょう。その不満をどうにか抑えつけることでギリギリで均衡を保っているのが現状です。少しでも火種を投入すれば、あっさりこの均衡は崩れ、戦争が再開されることでしょう」

教会の切り札であるエクスカリバーを奪い、悪魔が管理するここ駒王町に潜伏して問題を起こしているのは、悪魔側と神側の抑えつけられている不満を刺激するための両勢力に対する挑発行為だったのだ。

ギリギリで均衡を保っているいまの停戦状態はその程度の挑発でも崩れてしまいかねないほど脆い状態であった。

「グリゴリも、戦争が再開してしまえば、腹を括らざるを得ないでしょう」

コカビエルはともかく、ジブラエルの目的は停戦状態の脆い均衡を崩せる火種を作る

ことで大戦を再開させ、墮天使側が勝利することで死んでいった者たちに報いること。その代償として自分の身が滅ぼうと、ジブラエルに悔いはなかった。

「……仮に戦争が再開したとして、グリゴリに勝算なんてあるのか？」

「ええ、もちろん。グリゴリには他の二勢力にはない膨大な知識と技術力があります。ゆえに、他の二勢力に比べて圧倒的に数が少ない我々は彼らに拮抗できたのです。戦争が再開したとしても、必ず勝利を手にするでしょう」

「……ありがた迷惑な信頼だな」

レンは少しグリゴリに対して同情して嘆息する。

「……にしても、まさか、そこまで冬夜さん推測どおりとはな。」

明日夏たちの兄、士騎冬夜は今回の騒動に対する推測をレンに伝えていた。そして、そのほとんどが推測どおりだった。

冬夜の持つ先見の明にレンは内心で苦笑しながら呆れに似た思いを抱いていた。

「さて、問答はこのへんでよいでしょう。あなたには彼女たちの相手をしていただきませよ」

ジブラエルが指を鳴らすと、ジブラエルの背後に魔方陣が出現し、一人の女性墮天使と男性墮天使が数人現れた。

女性墮天使は胸元が大きく開いたボディスーツを着ており、ウエーブがかかった朱髪をした女性で翼が六枚もあった。女性墮天使が引き連れている墮天使たちも四枚の翼を持っていた。

「彼女たちは少々血の気が多い者たちでして、早く暴れたくて暴れたくて仕方がないようなのです」

ジブラエルの言葉どおり、現れた墮天使たちは皆、闘争心をむき出しにしていた。

「では、アズリール。私はエクスカリバーを回収します。暴れるのもほどほどにですよ。それから、くれぐれも油断して足下をすくわれないように」

「はい、ジブラエルさま」

ジブラエルは墮天使たちを残し、エクスカリバーを持ってこの場から転移で去って

いった。

「さてと」

アズリールと呼ばれた女墮天使が品定めするようにレンをまじまじと見始める。

レンはアズリールの視線に嫌悪感を覚え、不快感をあらわにする。

それを見て、アズリールは嗜虐的な笑みを浮かべて言う。

「ねえ、あなた。私の奴隷ものにならないかしら？　そうしたら、殺さないでかわいがってあげるわよ」

予想どおりの言葉を言われ、レンは不敵に笑みを浮かべて返す。

「お断りだね。第一、俺の好みは年下だし、あんたみたいな性格の女は願ひ下げだ」

レンの回答にアズリールはさらに笑みを浮かべる。

「いいわあ。そういう反抗的な反応。屈服させがいがあるわあ。あなたたち——」

アズリールが呼ぶと、アズリールの背後にいた墮天使たちがアズリールの前に躍り出る。

「殺さない程度に痛めつけてあげなさい」

アズリールの指示を受け、墮天使たちは手に光力を発生させ始める。

「この子たちは私の奴隷ベットの中でも選りすぐりよ。いますぐ私に傳いて私の奴隷もになるつて言えば、苦しい思いをしなくて済むわよ」

レンは舌を出し、アズリールを小バカにするように言う。

「やだね、このドSビッチ」

「あつそう。じゃあ、この子たちに痛めつけられて、情けなく跪いて、這いずりなさい」

その言葉を合図に墮天使たちが一斉にレンに襲いかかった。



「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐつ・・・・・・・・ぐうう・・・・・・・・」

カリスの操る死人たちの大爆発に吹き飛ばされた俺は体を起き上がらせようとしたが、体中に走る激痛で動くことさえままならなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クソっ・・・・・・・・あれからどれぐらい経った?」

どうやら、しばらく意識を失っていたようだった。

どうにかして首だけ動かしてあたりを見る。周りにあつた木々は爆発によって跡形もなく吹き飛ばされており、おそろく爆発によってできたクレーターらしきところに俺は寝そべっていた。

戦闘服もボロボロで、上着のコートに至ってはほとんど原形をとどめていなかった。

・・・・・・・・我ながらよく生きていたものだ。

「明日夏!」

槐が俺を呼ぶ声が聞こえ、そちらに視線を向ければ、槐がこちらに向かって疾走してきていた。

「無事か、明日夏!?!」

「……………あ……………ああ……………なんとかな……………」

槐の姿を見ると、爆発で吹き飛ばされたからなのか、制服の一部が破れており、土まみれだった。

「……………動けるか?」

「……………うう……………つつつつ?!」

槐に言われて動こうとしてみるが、途端に激痛が走って声にならない悲鳴をあげてしまった。

「少し待っている」

槐はそう言うと、アームズリン武装指輪からコンパクトケースを取り出した。

「……………槐、他の皆は？」

「……………わからない。私もあの爆発に吹き飛ばされて気絶していたようだな」

槐はケースから小型の注射器を取り出しながら答えた。

「……………おまえが無事なら、生きてはいるはずだ」

木場は足が速いし、ゼノヴィアたちも槐たちよりも速く離脱していたからな。

「そうだな」

槐も同意しながら、俺に取り出した注射を打った。

「——ッ！」

一瞬の激痛と体が痺れる感覚を感じたが、そのあとは体が楽になり、痛みも引いた。

「どうだ？」

「ああ、だいぶ楽になった」

起き上がり、手を閉じたり開いたりを繰り返し、体を少し動かして見るが、体に痛みが走ることはなかった。

槐がいま俺に打った薬剤は『ブーステッド・ドラッグ』といい、いわゆるドーピング薬だった。

集中力や視力、神経の反射速度や反応速度を一時的に高めることで身体能力を向上させる作用がある。多くのハンターがよく利用している薬だ。何より、疲れや痛みを一時的に誤魔化せるところが一番注目されている。いまの俺みたいに激痛で満足に体を動かせないときに役立つ。

ただ、この使い方はいろいろ危険があつた。まず、誤魔化すだけであつて、体力やダ

メージが回復するわけじゃないし、そんな状態の体を強化することによる肉体的負担もバカにならない。過去にそんな状態で戦闘を続行して再起不能になったハンターがいたぐらいだ。

だからなのか、兄貴からはこの薬の使用は禁止されている。使うとしても、よほどの非常事態のとき限定だ。

「おまえはひとまず離脱しろ。木場祐斗のことは私に任せ——」

槐から離脱の進言を受けていたときだった。

俺たちの周囲が急に暗くなったのだ。

俺と槐が慌てて視線を上げると——。

「——ッ!?!」

巨大な何かが上空から降ってきていた!

俺と槐は慌ててその場から飛び退いた!

ドオオオオオン!

降つてきた巨大な何かが地面に激突して大きな地響きを鳴らした。

「な、なんだこいつは!?!」

俺は思わず叫ぶと、巨大な何かが立ち上がった。

そいつは歪な皮膚をした体長十メートルはあつた人型の巨人だった。

「——ッ!?!」

俺と槐は巨人の皮膚を見て、表情を強ばらせる。

巨人の皮膚には人の顔面や手形なんかが浮かび上がっていたからだ。

「こいつもカリスの野郎の悪趣味な操り人形か!」

「らしいな!」

おそらく、複数の死体を強引に合成して作られた存在なのだろう。あの皮膚はその名残ってわけだ。

「……………明日夏、おまえは逃げろ！ 私が足止めする！」

「……………そうしたいところだが、そうもいかないようだ……………」

「——ッ!？」

いつのまにか、俺たちの背後にはカリスの操る死人たちが陣取っていた。

「……………どうする?」

「……………くっ!」

俺と槐は齒噛みしながら思索する。

どうする!?! この状況!?!

「……………明日夏、辛いところ申し訳ないが、うしろの連中を任せていいか?」

「……………構わないが、勝算はあるのか?」

俺が問いかけると、槐は不敵に笑みを浮かべた。

「……………フツ、『鬼刃』の使い手をなめるな」

「……………そうかよ。なら、そっちの木偶の坊は任せた！ おまえの背中には任せろ！」

「ああ、頼むぞ！」

俺と槐は背中を合わせ、それぞれの相手に向けて刀を構える！

「行くぞ！」

「鬼刃一刀流、夜刀神槐——参る！」

俺たちはかけ声を出し、それぞれの相手に向けて同時に駆けだした！

Life. 18 『鬼刃』の使い手

「はあああッー！」

俺はカリスの操り死人に一瞬で近づき、その胴体を両断する。

続けざまに背後から斬りかかってきた死人の光の剣による斬撃を ライトニングスラッシュ 刃の鞘で防

ぎ、そのまま回し蹴りで吹っ飛ばした。

ブーステッド・ドラッグのおかげで、肉体の疲れやダメージを気にせず、いつもよりも動けて戦っていた。

……だが、それも薬の効果が続いているあいだけだ。薬が切れれば、再び肉体の疲れとダメージが体を襲う。さらに、薬の副作用とそんな状態で戦っていた反動で今度こそ動けなくなる。

薬の効き目に個人差はあるが、平均で十分はある。それまでにこいつらを倒す！

幸い、こいつらの肉体が修復されることはなかったし、動きも単調だった。肉体が変異する気配もない。おそらく、近くにカリスがないからだろう。こいつらはカリスが

操作しているわけではなく、入力した命令に従って動いているだけなのだろう。

それなら、葉が効いてる間になんとかなるだろう。

死者たちを相手にしながら、槐のほうに視線を向ける。

「二の型——螺旋撃！」

槐は体の捻りを加えた回転斬りで巨人の腕を斬り払っていた。

だが、巨人の腕はすぐに修復されてしまった。

クソツ、あつちはこいつらと違って、自動修復能力を持っているのか……。おまけに、巨体ゆえに力は絶大だし、しかも、その巨体に似合わず、動きも速い。

……動きが単調なのが幸いだが、それでも、槐一人じゃ厳しいかもしれない。早急にこいつらを倒して槐の援護をするしかない！

「はあッ！」

槐が巨人の拳による一撃を巨人の腕に飛び乗って避け、そのまま巨人の腕を足場に駆

け上がったていく。

「八の型——獣爪撃！」

巨人の肩まで駆け上がった槐はそのまま巨人の顔を三連続の斬撃で技の名前のおり獣の爪に切り裂かれたかのような切り傷を残して斬り払った。

だが、斬られた箇所は即座に修復されてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふうふう・・・・・・・・」

苦い表情を浮かべた槐は一度深呼吸をして呼吸を整え始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・しいしいしい・・・・・・・・」

槐は巨人を見据えながら正眼で構え、独特な呼吸音を発しながら呼吸を行い始めた。

——あれをやる気か・・・・・・・・

だが、それには、少し長い時間をかけて集中力を高める必要があった。

あの巨人を相手にしながらのそれはかなり致命的な隙だった。槐もそれはわかってはいるはずだが、あれをやらないとあの巨人を倒しきれないということなのだろう。

ガシツ！

「なっ、しまった!?!」

倒したと思っていた死者が突然起き上がり、俺の体を拘束されてしまった！

「クソツツ!?!」

なんとか振りほどこうとするが、ガツシリと拘束されていて振りほどけなかった！

そうこうしているうちに、何体かの死者たちが一斉に飛びかかってきた！

やられる！ そう思った瞬間、けたたましい銃声が響き、飛びかかってきた死者たちが撃ち抜かれた！

ザツ！

そして、俺の前に人影が舞い降り、手に持つ拳銃で俺を拘束していた死者たちを撃ち抜いた。

銃撃に怯んだ隙に死者たちを振りほどき、ライティングスラッシュ雷刃で斬り払った。そして、俺は突如乱入してきた人物のほうに視線を向ける。

「……随分なざまだな？」

そう挑発的に発するライニー。

その背後では死者がライニーに飛びかかろうとしていた！

「やあああああッ！」

そこへ、ユウナが現れ、ライニーに飛びかかろうとしていた死者を斬り払った。

「大丈夫、士騎明日夏くん！」

「ああ、なんとかな。そっちも無事でなによりだ。木場にゼノヴィアとイリナは？」

「・・・・・・・・爆風に吹き飛ばされてはぐれちゃったの」

確かに、二人を見ると、槐と同じような状態だった。

「たぶん、無事だとは思うけど・・・・・・・・」

二人が無事なら、ユウナの言う通り生きてはいるだろう。

「・・・・・・・・二人とも、悪いがここは任せるぞ！」

「え、ちよっ!？」

「・・・・・・・・チツ」

一刻を争うので、二人には悪いが、この場を強引に任せて、俺は槐のもとへ駆けだした！

槐は集中力を高めながらも、巨人の攻撃をなんとか回避していた。

「はあッ！」

俺はオーラの腕で巨人の拳を受け止め、巨人を押さえつける。

「明日夏！」

「俺が時間を稼ぐ！ その間に！」

「——わかった」

槐は頷くと、目を瞑ってより深く集中力を高め始めた。

「ぐっ！」

巨人が強引にオーラの腕を押し返そうとしてきた。

このバカ力が……！！

「……………おとなしく……………してろおおっ！」

俺はオーラの腕を引き、巨人の体勢を崩してやった！

「スカーレット——」

オーラの腕を消し、右手にオーラを集約させる！

「フレイムウウウッ！」

前のめりに倒れてくる巨人めがけて、スカーレット・フレイム 緋い龍撃を叩きこんだ！
スカーレット・フレイム 緋い龍撃をくらった部分を大きく抉られ、巨人が大きく怯んだ。

「ふッ！」

さらに残りのバーストファングをすべて投擲し、爆発によって巨人が尻餅をついた。
だが、抉られた箇所が即座に修復され、起き上がり始めた！

「クソッ！」

その光景に思わず舌打ちをしてしまう。

「スラッシュ！」

巨人の攻撃に備え、刀身強化したライトニングスラッシュ雷 刃を構える。

巨人が立ち上がり、拳を打ちこんできた！

「くっ！」

拳を迎え撃とうと、ライトニングスラッシュ雷 刃を強く握った瞬間――。

「――待たせたな……」

槐が俺の前に躍り出て、巨人の拳を迎え撃つ。

「二の型――螺旋撃！」

体の捻りを加えた回転斬りが巨人の腕を難なく両断した！

槐を見ると、瞳からハイライトが消えていた。だが、決して虚ろ目というわけではなく、巨人を鋭く見据えていた。

間に合ったか！

鬼刃一刀流——槐たちが扱う異形を斬るための剣術。その秘技——『錬域』。

人間が異形の力に頼らず、剣の力のみで人間よりも圧倒的に強大な存在である異形に立ち向かうために生み出された極度の集中状態になることで至る境地、それが『錬域』だ。

スポーツで起こる『ゾーン』に似た状態で、それを剣術を扱うことに特化させたものらしい。

槐が言うには、この領域に至ると、視界から入る不必要な情報がカットされ、そのぶん、動体視力や洞察力が高まる。さらには反応速度や身体能力も上昇するみたいだ。

槐は流れるような動作で霞の構えを取る。

そんな槐に巨人が修復された拳を突き出した。

「——ッ！」

槐はそれに合わせるように駆けだすと、巨人の拳を難なく両断した。

だが、槐の攻撃はそれで終わらなかつた。拳を両断した斬撃の勢いを衰えさせることなく、流れるように斬撃を繋げるように連続で放つていく。

巨人の肉体は斬られると、即座に修復されていく。だが、槐の斬撃のほうがそれよりも速く、巨人の修復力が追いついていなかつた。

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

槐の連続の斬撃が巨人の肉体をどんどん斬り裂いていく。

そして、とうとう巨人の足が両断され、巨人が自重に耐えられず前のめりに倒れこんだ。

「はあああああああッ！」

なおも槐の斬撃が続く。

腕、胴体、首、顔と次々と槐の斬撃によって斬り裂かれていく。

レンが言うには、普段の槐はCランク相当の実力だが、『鍊域』に至ることでその実力

はBランク相当になる。

現にいまの槐の動きはさつきまでとは比べものにならなかった。

そして、とうとう槐の斬撃が止まった。

残ったのは肩で息をしている槐と修復が追いつかず、バラバラに斬り裂かれたさつきまで巨人だった肉塊だけであった。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・くっ・・・・・・・・・・」

肩で息をしていた槐が膝をついてしまった。

「槐!?!」

俺は慌てて槐のそばまで駆け寄る。

「・・・・・・・・・・大丈夫か、槐?」

「・・・・・・・・・・ああ、ただ疲れただけだ」

『鍊域』は確かに身体能力などを大きく高められるが、同時に負担と消耗も大きい。時間にして一分足らずだったはずだが、それでもこの消耗具合だ。

「……まだまだ未熟だな」

槐は悔しそうに齒噛みしていた。

「俺からしたら、十分スゴいんだがな……」

「……鬼刃の使い手からしたら、全然未熟だ。『鍊域』は本来なら鬼刃一刀流の基本なのだから」

あれが基本とはな……。

槐は『鍊域』に入るために少し長い時間をかけて集中する必要があるんだが、本来は自由にその領域に入れ、常にその状態を維持するのが基本らしい。

実際、レンはそれができるんだから……。



レンが向かった先である廃工場内、そこでは五人の墮天使たちが険しい表情を浮かべていた。

「ど、どうなってやがるんだよ!？」

「あいつは人間のはずだろ!？」

「セイクリッド・ギア神器だつて大したことないもんなんだぞ!？」

墮天使たちの視線の先にはレンが不敵な笑みを浮かべていた。

そして、その瞳からはハイライトが消えており、その様子から『鍊域』に入っていた。『鍊域』状態のレンの戦闘力はずば抜けており、すでに五人の墮天使たち以外の墮天使はレンによって斬り伏せられていた。

そんなレンに対して、墮天使たちは戦慄していた。

「ク、クソツッ!」

墮天使たちは一斉に光の槍を投擲する。

「一の型——疾風」

レンはその場から目にもとまらない速さで駆けだして光の槍を避けると、廃工場内を縦横無尽に駆け回る。

『疾風』は高速の踏み込みで相手に一瞬で接近して斬りこむ剣技であり、同時に高速で移動する歩法。連続で使用することで、長距離を短時間で走破したり、レンのように高速で移動して相手を攪乱することもできた。

そのあまりの速さに墮天使たちはレンの姿を目で追えていなかった。

「五の型——天翔脚！」

レンは高速移動しながら飛び上がり、墮天使の一人の首をすれ違いざまに斬り払った。

さらにレンは壁や天井を足場に連続で『天翔脚』を繰り返すことで三次元的に縦横無尽に駆け回る。

「九の型——双龍撃！」

ほぼ同時に放たれた二つの斬撃がさらに墮天使二人を斬り払った。

残った墮天使二人は即座に地上に降りると、壁際まで移動すると、壁を背にしてレンを迎え撃つ姿勢を見せる。

一見、退路を自ら絶ったように見える墮天使の行動だが、墮天使の狙いは、レンの動く範囲を狭めることだった。

実際、レンは墮天使を斬るためには真つ正面から接近するしかなかった。

だが、レンは構わず、墮天使二人の思惑に乗って『疾風』で接近しようとする。

来る方向がわかっていたためにレンの動きをどうにか追えていた墮天使がレンの動きを見切つて光の槍を振るつた。

「なっ!?!」

レンは光の槍を足場にして飛ぶことで光の槍を躲した。

「六の型——飛燕兜割り！」

そのまま落下の勢いを乗せた唐竹割りが墮天使を両断した。

「もらった!」

レンが着地をした隙をついて最後の墮天使が光の槍を振るつた。

「何っ!?!」

だが、墮天使の光の槍はレンの体をすり抜けて空振つてしまった。

「七の型——陽炎」

墮天使が斬り払つたのはレンが極限の緩急で生み出した残像であり、本物のレンは姿勢を低くして光の槍を躲していた。

「三の型——」

低くした体勢のまま、レンは刀を持った腕を引いた。

「零一穿！」

打ち出すよう放たれた神速の突きが墮天使の頭部を貫いた。

レンは墮天使から刀を抜き、刀に付いた血を払うと、刀を鞘に収める。

パチパチパチパチ。

廃工場内に拍手音が鳴り響いた。

レンが拍手音がしたほうに姿勢を向けると、そこにはアズリールが足組みをして宙に浮いて拍手をしていた。

「やるやるう。選りすぐりのあの子たちをあっさり倒しちゃうんなんて」

仲間たちを倒されたというのに、アズリールはむしろ、そのことに歓喜していた。

そして、アズリールは墮天使たちの亡骸を一瞥すると、まるでゴミを見るような目になった。

「それにしても、つつかえないわねえ」

「……仲間だつてのに、ずいぶん言い草だな？」

「だって、私、弱い子なんて大っ嫌いだから。それに勘違いしないでほしいわね。この子たちは仲間じゃなく、私の奴隷よ。私の手足となつて使い潰されるだけの存在でしかないのよ」

アズリールの言葉に、レンは不敵な笑みをやめ、嫌悪感を露にする。

「ねえ、あなた。やっぱり、私の奴隷もにならないかしら？　大丈夫よ。私、強い子は好きだから。特別待遇でかわいがってあげるわよ」

アズリールの誘いを受け、レンは嘆息して言う。

「さつき言ったはずだ。てめえみてえな女は願ひ下げだつて」

「あっそう。じゃあ——」

アズリールは足組みを解くと、手に光力でできた鞭を生みだした。

「生意気な子にはちよつとお仕置きしてあげるわよ！」

そう言うと、アズリールは光の鞭をしならせ、レンに向けて振るった。

レンは危なげなく光の鞭を避けると、その場から駆けだす。

「逃がさないわよ！」

アズリールが再び鞭を振るうと、光の鞭が無数に枝分かれし、四方八方からレンに襲いかかる。

「チツ！　十の型——斬り嗣ぎ舞！」

レンは『鍊域』による身体能力と反射速度を最大限に駆使し、ほとんどの光の鞭を躲

し、躲しきれない光の鞭を流れるような連続の斬撃ですべて斬り払った。

「あははははは！　いつまで持つかしら！」

アズリールが光の鞭を振るうたび、光の鞭はさらに枝分かれを繰り返し、次第にその数は廃工場内を埋め尽くすほどになっていた。また、アズリールの光力は上級悪魔でさえも軽く屠れるほどであり、廃工場内のあらゆるものを抉っていた。

「——ッ！」

とうとう、その膨大な数の光の鞭を捌ききれず、レンの肩、脇腹、足を掠る。

「ほらほら、言いなさい！　私の奴隷もになるって！」

アズリールの命令に対し、レンは不敵な笑みを浮かべて言う。

「死んでもごめんだね」

レンの言葉を聞き、アズリールは笑みを消す。

「あつそう。じゃあ、死になさい」

アズリールのその言葉と同時に、光の鞭がレンを包みこんだ。

「バカな子。私の奴隷ものになれば、死なずに済んだのに。あーあ、もったいな——」

バツ！

「——え？」

レンを包みこんだ無数の光の鞭が、内側から弾けるように斬り払われた。

「肆ノ型——烈風嵐刃」
れつふうらんじん

そこには、体を思いつきり前のめりにして刀を完全に振り切った体勢のレンがいた。それを見て、アズリールは驚愕の表情を浮かべる。

「あ、あなた、一体何をしたのよ!?!」

アズリールの問いかけに、レンは刀を鞘に収めると、不敵に笑みを浮かべて言う。

「——斬った」

レンはアズリールのほうに振り向く。その際、レンの瞳から鋭く赤い眼光が尾を引くように残像を残していた。

レンの瞳には、『錬域』状態に入ったことで消えていたはずハイライトが戻っており、逆により鋭い眼光となっていた。

アズリールはその姿から静かで鋭いただならぬ威圧感を感じ、体を震えあがらせる。

「鬼刃一刀流・奥義——」

レンは体を前のめりにした体勢で居合いの構えを取る。

「ハ、ハのー」

アズリールは何かをされる前にと、再び無数の光の鞭を作りだして、レンに向けて振るう。

「式ノ型——雷切」

光の鞭がレンを捉えようとした瞬間、レンの姿が掻き消え、光の鞭は空を斬った。

「き、消え——」

次の瞬間、アズリールの首が音もなく一閃されていた。

何が起こった!? と、あまりの速さのために、首を斬られてもまだ意識を残していたアズリールは必死に自分の身に起こったことを理解しようとしていた。

「ふうう………」

宙にいたレンは刀を鞘に収めると、息を吐く。

そして、そのまま落下すると、身を翻して床に着地した。

「あ、あなたは本当に人間なの!？」

首だけの状態でアズリールは異形な者を見るような目でレンを見ながら叫んだ。

「ああ、人間だけ。弱っちいながらも、おまえらみたいな奴を斬れるように努力したな」

アズリールはレンの言葉を最後まで聞くことができず、その意識は闇の中へと消えていった。

L i f e . 1 9 血の悪魔の子供たち（ブラッド・チルドレン）

「立てるか、槐？」

「ああ」

膝をつく槐は差しのべた俺の手を取って立ち上がる。

俺も槐もだいぶ消耗してしまったな……。槐はさっきの戦いで疲弊、俺もいつブーステッド・ドラッグの効果が変わるかわからない。薬の効果が変われば、俺は確実にダメージと反動で動けなくなるだろう。

これは、一時退却もやむを得ないか。木場が心配だが、無事に生き延びてくれるのを祈るしかないか……。

「……。……。……。……。……。……。……。」

俺と槐のもとにライニーとユウナがやって来た。

ライニーは見るからに不機嫌そうであった。

どうやら、俺が押しつけてしまった奴らを倒してくれたようだな。

「……………非常時だったとはいえ、悪かったな」

「チツ」

俺が謝罪の言葉を口にする、ライニーは舌を鳴らしてそっぽを向いてしまう。

「うつ……………」

突然、ユウナがうめき声をあげた。

！
見ると、ユウナは脇腹のあたりを手で押さえており、手の隙間から血が漏れ出ていた

「ケガをしたのか、ユウナ!？」

「……………ちよつと撃たれちゃってね」

場所からして、内臓を貫通してる可能性があった。

敵を押しつけた責任もあり、俺はユウナの手当てをしようと駆け寄ろうとする。

「必要ねえ。行くぞ、ユウナ」

だが、そんな俺を淡々と制し、ライニーは構わずユウナを連れてどこかへ行こうとする。

「おい、どう見ても内臓を貫通してるぞ！」

「問題ない」

「ふざけるな！」

明らかに重傷なユウナをどうとも思っていないような態度を示すライニーに詰め寄ろうとすると、ユウナがケガをおして俺を制止する。

「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫だよ。ライクんの言うとおり、問題ないか

ら

「おまえも何言ってるんだ!? どう見ても重傷——」

「だって——もう少しで塞がるから」

「——は?」

ユウナの言葉に困惑した俺は慌てて、ユウナの撃たれた箇所を見る。

「なっ!?!」

ユウナの傷を見て、俺は言葉を失う。

ユウナの傷がすでに塞がりかけていたのだ。

アーシアと同じ回復系の神セイクリッド・ギア器か?」

「ユウナ、それは——っ!?!」

俺はユウナの顔を見て再び言葉を失う。

「おまえ……その眼」

ユウナの瞳が赤く染まり、発光していたからだ。

「そんなことよりも、自分の身を心配したらどうだ？」

ユウナの瞳をまじまじと見ていると、唐突にライニーにそう言われた。

「ぐあっ!？」

同時に、体中を想像を絶する激痛と疲労感が襲い、俺はユウナのほうに倒れ込んでしまう。

「士騎明日夏くん!？」

ユウナに支えられ、俺はその場に横たわらせられる。

「明日夏!？」

槐も血相を変えて駆け寄ってくる。

「どういうからくりで誤魔化してたかは知らないが、それも限界のようだな」

ライニーの言うとおり、ブーステッド・ドラッグの効果が切れたことで、誤魔化していた痛みと疲労が戻ったのだ。さらに、薬の副作用とそんな状態で無理をしたツケも回ってきていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クソツ・・・・・・・・」

体を動かそうとするが、さらに激痛が酷くなり、まとも動かせなかった。体どころか、指一本も満足に動かせなかった。

そんな俺を見下ろしながらライニーは言う。

「随分なザマだな」

軽口のひとつでもつきたかったが、それすらもキツかった。

「チツ」

ライニーは唐突に舌打ちをすると、暗闇に向けて拳銃を構えた。すると、暗闇からカリスの死人たち再び現れた！

「・・・・・・・・しつこい野郎だ」

苦言を呈しながらライニーは死人たちを撃ち抜くが、死人たちは怯むだけで、構わず向かってくる。

「クソツ・・・・・・・・ぐうつ・・・・・・・・!?!」

俺は慌てて起き上がろうとするが、相変わらず激痛で体が動かなかった。

「——ッ！」

槐とユウナも刀を構えて、俺を庇うように前に出る。

三人が死人たちを迎え撃とうと構えた瞬間——。

「——ッ!?」

突然、死人たちが全員、何かによって撃ち抜かれた!

撃ち抜かれ箇所では向こう側が見えるほどの穴が空いており、死人たちは皆、その場に倒れ伏した。

「——ッ! 誰だ!？」

ライニーが何かが飛んできた方向に銃口を向けた。

俺たちもそちらの方向を見る。

「せっかく助けてあげたのに、随分な対応だね」

木の上にあの仮面を着けたローブの奴がいた。

「——おまえか……」

「ヤッホー」

俺の方を見て手を振る仮面の奴から銃口を離さず、ライニーが訊いてきた。

「……知り合いか？」

「……知り合いつてほどの奴じゃねえよ」

俺の言葉に仮面の奴は不服そうな反応を見せる。

「酷いなあ。キミの技の名付け親じゃないか」

「……そう言うんだったら、名前ぐらい明かしたらどうなんだ？」

「あつ、そういえば、名乗ってなかったね。こりや失敬」

しまったと言わんばかりにわざとらしいリアクションをすると、仮面の奴は名乗った。

「私はM×M^{エムエム}。今後とも、よろしくね」

M×Mと名乗った仮面の奴だったが、俺はそれが本名だとは思ってなかった。

「……で、今度はなんの用なんだ？」

「えー、せつかく助けに来たのに、その言い方は酷いなあ」

それを聞き、俺たちは倒れた死人たちのほうに視線を向ける。

死人たちは一向に起き上がる様子はなかった。完全に沈黙していた。

「その死体たち、弱点があつてね。カリス・パワーリアの神^{セイクリッド・ギア}の力を受信するための受信機の役割をしている箇所を潰せば、動かなくなるよ」

それを聞き、俺たちは改めて死人たちに空いた穴の位置を確かめた。

「脳に心臓、あの位置は他の五臓か。それからあの場所は丹田か？」

ライニーが穴の空いた位置を口にすると、M×Mは正解とばかりに拍手をした。

「そつ、脳と五臓と丹田、この七ヶ所の内ひとつをカリス・パトゥーリアは神セイクリッド・ギア器の力の受信機にしてたんだよ」

なるほど。いままで俺たちが倒した奴も、偶然、その受信機になつてる場所を潰してたからか。

それを聞くと、ライニーはM×Mに銃口を向けながら訊く。

「なんでそれをおまえが知ってる？」

「そのまえにそろそろ銃口を離してほしいんだけどなあ」

「てめえみてえな胡散臭い奴を信用できるわけねえだろうが」

「えー、私、そんなに胡散臭いかなあ？」

「………鏡見ろ………」

俺は思わずそう呟いてしまった。

「酷っ!? この格好気に入ってるのに。まあ、いいけどさ。で、なんで私が弱点を知ってたかだけど、知ってるも何も、見たらわかるじゃん」

「——ッ!?!」

驚く俺たちをよそにM×Mは続ける。

「かなり見えにくくしてるけど、目を凝らしてよく見れば、受信機になってる場所から僅かにオーラが漏れてるのがわかるよ。私が撃ち抜いたいまでも、僅かにオーラの残滓が見えるはずだよ」

俺たちは再び、目を凝らして死人たちのほうを見るが、正直、俺には何も見えなかった。

他の皆も似たような反応だった。

「うーん、そうだなあ。あ、キミとキミ」

M×Mはライニーとユウナに指差して言う。

「キミたちが本来の能力を発揮すれば見えるはずだよ、『悪魔の子』くんたち」

「——っ!?!」

M×Mが口にした単語を聞き、ライニーとユウナは目に見えて動揺をあらわにした。
悪魔の子？ どういうことだ？

「てめえ………!! チッ！」

ライニーはM×Mを鋭く睨むと、舌を鳴らす。

すると、ライニーの瞳がユウナのとときと同じように赤く染まり、発光していた。
目の色が戻っていたユウナも再び、瞳の色が赤く染まって発光していた。

そして、二人は死人たちのほうに視線を向ける。

「チツ」

ライニーは再び舌打ちし、ユウナが言う。

「そのヒトの言うとおりだったよ。僅かだけど、オーラの残滓が見えたよ」

それを聞き、いつのまにか木から地面に降りてたM×Mが仮面の上からでもわかるほど誇らしげにしていた。

「さて、次はキミのことだね、士騎明日夏くん」

そう言うと、M×Mは懐から何かの液体が入った小瓶を二つ取り出した。
あれはまさか！

「はこ」

「なっ!?!」

M×Mは小瓶を槐に投げ渡す。

慌てて小瓶を受け取った槐は小瓶を見て驚愕する。

「これはまさか!？」

「うん、フェニックスの涙だよ」

やっぱりか。以前の部長たちとライザーのレーティングゲームで、ライザー側が使っていたフェニックスの涙が入っていた小瓶と同じものだったから、まさかとは思ったが、そのとおりであったか。

「……なぜ貴様がこんなものを持っている?」

槐の疑問はもつともだろう。

フェニックスの涙は大変高価なものであり、こいつみたいなの胡散くさい奴が持つていることに疑問を抱かずにはいられなかった。

「偶然、異能・異形絡みのブラック・マーケット市で見つけてね。たぶん、裏ルートで横流しされたもの

がたまたま流れ着いたんだろうね。せっかくだから、買ったんだ。……結構、値が張っちゃったけど」

さらつとんでもないことを言うM×M。

「まあ、入手経路はどうでもいいじゃん。早くそれで彼を回復させてあげなよ」

M×Mはそう言うが、槐は信用できないのか、警戒してM×Mとフェニックスの涙を視線を歩き来させていた。

「……なぜ私たちを助ける？」

「ふふふ、それは私が彼のことを気に入ってるからだよ」

M×Mは初めて会ったときと同じ理由を述べた。

だが、槐はそれを聞いてますます警戒心をあらわにしていた。

「まあ、キミみたいな子は私みたいなのは信用できないだろうね。だから——」

M×Mは左腕に右手の手刀を当てる。

ズバツ！

「「「なっ!?!」」」

次の瞬間、M×Mの左腕が手刀によって切り裂かれた！
血の出方からしても、義手でもなかった。

「渡した涙のどっちかをちょうだい。そうすれば、中身が本物かどうかわかるだろ」

こいつ、そのために二つ渡したのか。

二つ用意して自分が先に使ってみせるにしても、俺に使うほうが偽物である可能性が残る。

だが、一旦槐に渡すことで、どちらを自分が使用するかは完全にランダムな状態にした。これでは片方を偽物にするというやり方はできないというわけだ。

「・・・・・・・・・・槐」

「・・・・・・・・・・わかった」

槐は片方をM×Mに投げ渡し、片方の蓋を取って、中身の液体を俺に振りかけた。

すると、たちまち煙をあげて俺の体中のケガが治り、体中を襲っていた激痛や疲労感も嘘のように消えた。

「どうやら、本物ようだな。」

「これで私のことは信用してくれたかな」

M×Mの左腕も煙をあげながら完全に切り口が繋がっていた。

「それじゃ、私はもう行くよ。ちよつと用事があるからね」

踵を返したM×Mは顔だけこちらに向けながら言う。

「コカビエルと戦うことになったら気をつけてね。彼はキミたちが戦ってきた誰よりも圧倒的に強い存在だからね」

それだけ言うと、M×Mはいつものように闇夜に溶け込むようにこの場から去っていった。



M×Mと別れた俺たちは木場たちを探して、森の中を走っていた。

あのあと、ライニーはユウナを連れて俺と槐を置いて行こうとした。俺たちも木場を探さなければならなかったので、同行を申し出た。

てつきり、断ると思っていたが、ライニーは何も言わなかった。勝手にしろということなのだろう。だから、勝手に同行させてもらった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

走りながらも、俺はあることが気になって、ライニーとユウナのほうに視線を向けて

いた。

俺の視線に気づいたのか、ライニーが言う。

「……そんな気になるか？」

「……まあな。あいつが言っていた『悪魔の子』ってのはどういう意味なんだ？」

少なくとも、二人から感じる気配は悪魔のものとは違っていた。

すると、ライニーとユウナが立ち止まったので、俺と槐も立ち止まる。

そして、ライニーとユウナはこちらに向き直る。——もとに戻っていた瞳を再び赤く発光させながら。

「………土騎明日夏くん。キミは『ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たち』って知ってる？」

ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たち——聞いたことのない単語だった。

槐のほうを見ると、槐も知らない様子だった。

ブラッド・チルドレン「血の悪魔の子供たちっていうのはね、この赤い瞳と人間離れた治癒力と身体能力を

持つ突然変異した人間たちの総称なの」

「突然変異？」

「うん。私もライくんもある日、突然、この眼と体質を持った体に変異したの。しかも、変異した人たちに共通点はなし。異能・異形とまったく関わりのない一般家庭の幼い子供ということ以外は」

「……なんだよそりや？ 異能・異形とまったく関わりがないのにそんな変化があり得るのか？ しかも、話を聞く限り、セイリッド・ギア 神器でもない。」

「ちなみに、身体能力をセーブすると、こんなふうに輝きを失うの」

補足説明をするユウナの瞳から輝きが失われ、もとの瞳に戻った。

つまり、二人はあの戦闘力で手加減していたということになる。

もしライニーとの戦いとき、ライニーが全力を出していたら、俺は手も足もでなかったんじゃないのか……」

「だが、なんで『悪魔の子』なんだ？ それに『血の悪魔』ってのも？」

「……単純な話だよ。とあるカルト教団の人たちが私たちのこの人間離れした体質を忌み嫌った結果、私たちは悪魔が産み出した忌み子だって吹聴しまわったの。『血の悪魔』つてのは、私たちのこの眼の色が血を連想させるから。それで『血の悪魔』が産み出した忌み子で、『ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たち』つてわけ」

説明するユウナはどこか辛そうだった。

「……たしか、二人は親に捨てられたつて言つてな。ということは……」

「……想像どおりだよ。私たち、そして、ブラッド・チルドレン私たちがいた教会にいる子供は皆、血の悪魔の子供たちであることを忌み嫌われ、捨てられたりした子たちなの」

「……やっぱり、そういうことなのか。」

「……滑稽か？ 『悪魔の子』なんて呼ばれてる俺たちが教会の戦士をやつてるのが」

ライニーがこちらに背を向けながら言う。

「別に思わねえよ。だいたい、そんなの周りが勝手にそう呼んでるだけで、二人やその教会の子供たちは人間には変わりないんだろ？」

別に特別な身体的特徴、身体能力を持った人間なんて、この異形や異能がはびこる世界じゃ珍しくもなんともない。その世界側の存在である教会でだって、それは同じだろう。中には、よく思わない奴もいるかもしれないが、それでも、エクスカリバー奪還という重要な任務を任されていることから、教会から信頼されているのは間違いないさそうだった。

俺の言葉に対し、ライニーはボソツと言う。

「——それはどうかな……」

「それはどういう——」

「無駄話はここまでだ。さっさと行くぞ」

ライニーの言葉の意味を確かめようとしたが、ライニーは話を打ち切り、再び走り出した。俺たちも慌ててライニーを追うように走り出した。



「——ッ、止まれ！」

しばらく走っていた俺たちだったが、突然、ライニーに制止され、俺たちは立ち止まる。

「どうしたの、ライくん？」

「……見ろ」

ライニーに促され、俺たちはその方向に視線を向ける。

「「——ッ!?!」」

そこにはバラバラに切り裂かれた人間だったと思しきものが散乱していた！

「・・・・・・・・・・明日夏」

「・・・・・・・・・・ああ、この手口・・・・・・・・・・」

俺と槐は先日目にした惨殺された神父のことを思い出す。

「・・・・・・・・・・ライくん！」

「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・」

ライニーとユウナも、この惨状を生み出した元凶に思い至っていた。

「出てこいッ！ ベルッ！」

ライニーは張り裂けそうな声で叫んだ。

そして、木の陰から一人の少年が姿を現した。

片眼が隠れるような髪型の白髪をしており、年は俺たちと変わらなそうだった。

ライニーと同じ戦闘服を着ており、その姿は血まみれだった。・・・・・・・・おそらく、
返り血だろう。

右手にはユウナが持つつ刀に似た装飾のナイフが握られていた。ライニーとユウナが持っているものと同じ武装十字器クロス・ギアだろう。

そして、左手に持つものを見て、俺は表情を歪ませる。なにせ、それは人間の生首だったからだ。

「よお、ひさしぶりだなあ、ライ、ユウちゃん」

血まみれの少年は子供のよう^にに再会を喜んでライニーとユウナを呼ぶ。

「・・・・・・・・ベル！」

「・・・・・・・・ベルくん！」

ベルティゴ・ノーティラス——樹里さんが見せてくれた写真にあったライニーとユウナにとつて因縁のある、『切り裂きベルベル・ザ・リップパー』の異名を持つはぐれエクソシスト。

「まったく待ちくたびれたぜ。ここを通るだろうと、待ってたけど、なかなか来ないんだからよ。退屈で仕方なかったから、暇潰しでこいつらを斬ってたぜ」

「……相変わらずのようだな」

「まあな。なんせ、俺は定期的に人斬らねえと、落ち着かなくなるからな。人斬り中毒なのなかねえ、俺？」

ライニーに睨まれてもどこ吹く風といった様子の子のベルティゴ・ノーティラスは手に持っている生首をボールのように手の中で何回も弾ませながら、笑えない冗談を口にしていた。

「……いや、案外冗談じゃなく、本気なのかもしれなかった。……それこそ、笑えないが。」

「そういうおまえはちよつと変わったのかねえ」

ベルティゴ・ノーティラスはライニーから俺と槐に視線を移して言う。

「人嫌いのおまえがユウちゃんたち以外と仲良くしてるなんてな」

それを聞き、ライニーは忌々しそうに表情を歪ませた。

「……勘違いするな。成り行きで共闘するはめになっただけだ」
「だろうな。やつぱ、おまえも相変わらなずか」

敵意剥き出しなライニーに対し、ベルティゴ・ノーティラスはまるでひさしぶりに再会した親友に接するかのごとく振る舞っていた。

「ライと一緒にいると大変だろ？ そいつ、基本的に人嫌いだから、誰に対してもつんけんするからな」

ベルティゴ・ノーティラスは俺と槐に対しても、フレンドリーに接してくる。

「知ってるだろうけど、一応、名乗っておくぜ。俺はベルティゴ・ノーティラス。ライやユウちゃんのようにベルって呼んでくれや。よろしくな」

無邪気に笑みを浮かべて自己紹介するベルティゴ・ノーティラスことベル。

ライニーは赤くなった瞳でベルを鋭く睨み、銃口をベルに向けた。

「すっかり嫌われたもんだ。まあ、無理もねえか。ノモア神父を殺し、しかもそのせいでもともと悪かった教会での立場がさらに悪くなったんだからな」

教会での立場が悪くなった？ それも『もともと』から『さらに』？

ベルの言葉に訝しげにしていると、ユウナがあたりをキョロキョロしながらベルに訊く。

「……ベルくん。サラちゃんはどうしたの？ 一緒じゃないの？」

サラ？ そういえば、奴には妹がいるんだったな。その妹の名前か？

「あいつなら、どっか行つちまったよ。大方、俺と一緒にいるのが怖くなったんだろうよ。今度は自分が殺されるかもってな。実際、俺もいつかは殺したいとは思っていたからな」

妹に手をかけようとしていたことを、笑顔でなんてことのないように言うベルに、俺

は戦慄してしまふ。

「もちろん、二人のことも、あの頃からずっと、殺したいって思ってたぜ」

なんなんだ、こいつは………。恩人を手にかけてたことをなんとも思っていないし、家族に、仲間に手をかけることを、まったく躊躇いが無い。むしろ、楽しんでさえいた。

「……ベルくん、どうしてそんなことするの?! 昔はそんなことをするような酷いヒトじゃなかったのに! それとも、あの頃の話は、全部嘘だったの!」

ユウナに悲しそうに訊かれたベルは一瞬だけキョトンとすると、再び無邪気に笑みを浮かべて言う。

「いや、そんなことないぜ。あの頃は楽しかったし、いまでも大切な思い出だぜ。ノモア神父には感謝してもしきれない恩があつたし、サラのことも、二人のことも、いまでも大切に思ってるぜ」

「……ふざけてるのか?」

ベルの言葉に、ライニーは憤怒の形相で言う。

当然だ。言つてることと、やつてることに矛盾がありすぎる。

「そういや、教会でのいまの俺に対する認識は、人を斬り殺すことに快楽を覚えるサイコキラーだったか？ ま、間違つちやいな。人を斬り殺すことは、楽しいぜ。死んでる奴をバラバラにするだけでもな」

俺は再び、奴の周囲に転がるバラバラ死体に視線を向ける。

「けどな——」

ベルは一拍置いて言う。

「俺の異常性はそんなもんじゃないぜ！」

ベルの表情が狂気で彩られる。

「冥土の土産に教えてやるよ！ 俺の異常性をな！」

ベルは自身の異常性を嬉々として語り始めた。

Life. 20 ベルティゴ・ノーティラス

ベルことベルティゴ・ノーティラスとサラことサラステイ・ノーティラスのノーティラス兄妹がノモア・ライラックが神父を勤める教会で拾われるまでの境遇は、ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たちだった二人を忌み嫌った両親に捨てられたというものだった。だが、実際は違った。

二人の両親は二人を忌み嫌ってはおらず、むしろ、愛情を注いでいた。

では、なぜ二人は路頭に迷うことになったのか。——それはベルが自身の両親を手にかけたからだ。

ベルも両親の愛情を感じていた。だから殺した。

ベルの異常性、それは——心を許した相手に対して殺人衝動が沸くことであった。

心を許し、大切に想えば想うほど、愛情を与えられ、与えるほど、ベルはその存在に對して殺人の衝動がどんどん増していく。

もともと、殺人に快楽を覚える性分だったベルにとって、この衝動は苦悩するどころか、嬉々として受け入れるものだった。

そして、教会に拾われ、拾ってくれたことをノモア神父に感謝すればするだけ、ライニーやユウナと楽しく過ごし、二人を大切に想えば想うだけ、その殺人衝動は強くなつていった。

そして、ついに衝動が最高潮に達したことで、ベルはノモア神父を手にかけて。これがベルがノモア神父を殺した事の顛末であり、ベルの異常性だった。



ベルが語った自身の異常性について聞かされ、俺たちは戦慄した。

俺は思わず訊く。

「……おまえはなんとも思つてないのか？　衝動に身を任せるままに大切な存在に手をかけることを？」

「もちろん、辛いぜ。ノモア神父を殺したときも、めっちゃくちや悲しかったぜ……」

ベルは一瞬だけ、悲しげな表情をする。

「——けどな」

次の瞬間、ベルは狂気に彩られた笑みを浮かべた。

「それで得られる最つ高の快感に比べれば、そんなの、些細なことなんだよ！ むしろ、その悲しみも辛さも、俺にとつちや、快感なんだよ！」

「……完全にイカれてやがる。人としてのタガやらネジやらが完全に外れてやがる。」

「……いや、もともとから欠如していたのかもしれないなかった。」

まさかの真実にユウナは信じられないものを目撃したような表情を浮かべていた。

「……いまさらおまえの性癖なんざ、どうでもいいことだ。敵には変わりねえんだからな」

それに対し、ライニーは冷静にベルに銃口を向けていた。

ユウナも辛そうにしながらも続いて刀を構える。そして、二人の瞳が赤く染まる。

ベルもそれを見て笑みを浮かべると、持っていた生首を放り、ナイフを構えた。俺と槐も構えるなか、ユウナが言う。

「……………気をつけてね、二人とも。見てのとおり……………」
「……………ああ」

俺はベルの瞳に目が行く。

その瞳は、会ったときからずっと、ライニーとユウナと同じく赤く染まって発光していた。

つまり、こいつも二人と同じ、血ブラッドの悪魔チルドレンの子供たちということだ。

「……………しかも、ベルくんは私たちの中でも一番強かったの」
「——ツ!?!」

俺と槐はそれを聞き、もともと高かった警戒心をさらに高める!

力をセーブしてたライニーで俺はようやく戦っていた。ゆえに本来の力を解放したライニーは俺よりも圧倒的に強い。おそらく、ユウナも同等。エクスカリバー奪還の任

を与えられるだけはあるということだ。

だが、そんな二人よりも、こいつはさらに強いとのこと。

おそらく、ハンターでいうところのBランク上位クラス、ヘタすればそれ以上だ……。

フェニックスの涙でダメージは回復したとはいえ、消耗したいまの状態で勝てる見込みはほぼなかった。

槐に至っては、錬域の消耗がまだ回復しきっていない。

内心で齒噛みしている俺にライニーが言う。

「……これは俺たちの問題だ。部外者は邪魔だから引っ込んでろ。——手を出すのは勝手だがな。だが、言っておくぞ。足手まといになるようなら、容赦なく切り捨てる」

ライニーは冷徹に言うが、それはライニーの余裕のなさを表していた。

「……ああ、構わねえよ。ユウナも俺らのことは気にするな」

ユウナはライニーとは違い、おそらく、余裕がない状態にも関わらず、俺たちが危なくなれば、フォローに回ろうとするだろう。奴を相手にその隙は致命的すぎる。

それをわかっているからか、ユウナは一瞬、申し訳なさそうな表情をする。

「……ついでに言っておく。血ブラッドの悪魔ドの子供ドたちは確かに高い治癒力を持つているし、生命力も高い。それでも、人間には代わりない。治癒力も意味をなさないほどの大きい致命傷を与えれば殺せるぞ」

ライニーからの意外なアドバンスに俺と槐はうなずいて答える。

「話し合いは済んだか？　なら——」

刹那、ベルから濃密な殺意を向けられた！

同時に俺たちは散開する！

「おつ始めようぜ！」

最初にターゲットにされたのは俺だった。

「くっ！」

一瞬でベルに接近された俺は、ライトニングスラッシュ雷刃でベルのナイフを防ぐ。

速い！ 木場ほどじゃないが、それでも十分に速く、おまけに緩急の入れ方も絶妙だった！

「チッ！」

「おっと」

すかさず、ライニーが銃撃を加えるが、ベルは即座に後方に飛んで銃弾を躲す。

なおもライニーは銃撃を続けるが、ベルは銃弾のすべてをナイフで叩き落としてしま
う。

「一の型——疾風！」

そこへ、槐が斬りかかる。

「よっ」

ベルは槐の斬撃を身を捻るだけで躲す。

すかさず、ベルはナイフで横風ぎの一閃を振るう。

「——ッ！」

槐も屈むことでナイフを躲し、腕を引いた構えをする。

「雫一穿！」

そのまま槐は高速の突きを放つ。

それに対し、ベルは不敵に笑みを浮かべると——。

ザシユッ！

「——ッ!？」

ベルは手のひらを貫かせることで突き技の狙いを反らし、なおかつ、そのまま槐の手を掴もうとする。

「くっ!」

槐はすかさず、刀から手を離し、刀が刺さっていないほうの腕に組ついて飛びつき十字固めを決めようとする。

ゴキヤツ!

「なっ!？」

だが、ベルは肩と肘の関節を外して、槐の関節技を強引に緩めた!

「あーらよつと！」

そのまま、ベルは関節が外れた腕を振り回して、槐を遠心力で投げ飛ばす！

「ぐっ！」

俺は慌てて槐を受け止めるが、そこへすかさず、ベルが手から引き抜いた槐の刀を投げつけてきた！

「——ッ！」

俺は槐を庇うように抱きしめつつ、ライトニング・スラッシュ 雷 刃で飛んできた槐の刀を弾く。

「へえ、それぐらいはやれるか」

ベルが関節の外れた腕を振り回すと、回転に合わせて外れていた関節が強引に戻っていった。槐が貫いた手の傷も、もう血が止まりかけているほどに塞がっていた。

強い！ おまけに、傷の治りが速いせいで、生半可なダメージじゃ倒れない！ しかも、それをいいことに、平然と捨て身で来やがる！

「ふッ！」

ライニーがベルに一瞬で接近して蹴りを放つ。

「おらよっ！」

対するベルも蹴りで迎え撃つ。

蹴り同士がぶつかり合い、その反動で二人は距離を開ける。

そこへ、いつのまにかベルの背後に回っていたユウナがベルに斬りかかる！

「——つと」

背後からの完璧な奇襲だったにも関わらず、ベルはユウナの刃をわずかに身をそらすだけで躲してしまった！

「よっ！」

「うっ!?!」

そのままユウナはベルに蹴り飛ばされるが、ユウナは飛ばされながらもなんとか空中で体勢を整えて着地する。

「相変わらず優しくくて甘いなあ、ユウちゃんは。敵意も殺意も中途半端だし、太刀筋にも乱れがありまくりだぜ」

ベルに言われたユウナは、複雑そうに表情を歪ませる。

ユウナには、明らかに動きのキレが悪かった。

ユウナにベルを殺すことへの躊躇いがあるのは明白だった。今回の件にベルが関わっていると知ったときの様子からしても、そのことは薄々と感じさせていた。

無理もないかもしれない。長年、共に家族同然のように過ごしていれば、割り切れない思いはあるだろう。

「——もうさがつてろ、ユウナ」

ライニーは足手まといに感じたのか、ユウナをさがらせようとする。

「……大丈夫だよ、ライくん。私はやれるから——」

「——ユウ」

「——え？」

ライニーの口からベルみたいに愛称らしきもので呼ばれ、ユウナは呆気にとられる。

そして、いままでからは想像できないほどの優しい声音でライニーは語りかける。

「無理をするな。おまえにはこういう役回りは徹底的にむいてない。あんな奴でも、敵対していたとしても、おまえにとつちや、あいつはいまでも大切な仲間で家族なんだと割り切れないんだろ？　なら、無理に手を下す必要はない。そういう汚れ仕事は俺に任せればいい」

「でも！　ライくんだって、本当はベルくんのことを！」

ユウナに言われたライニーは自虐的な笑みを浮かべる。だけど、その表情はとても優しいものだった。

あいつ、仲間や家族にはあんな表情できるんだな。身内には情愛が深いというわけか。

「はは。ライ、おまえも相変わらずだな。人嫌いで、他人には無関心を貫こうとするおまえだが、いざ心を許した相手には普段はぶつきらぼうにしながらも、いざつてときは優しくなるし、守るためなら、簡単に非情になれる。平然と自分を犠牲にする。その様子じゃ、ユウちゃんほどじゃなくても、俺のことは、まだ仲間だと、家族だと思ってくれてるみてえだな？」

「だからなんだ？ 俺はユウナと違って甘くない。知ってるだろう？」

「まあな。おまえのそのへんの冷徹さはよく知ってるよ」

ライニーはいつもの表情で俺と槐を一瞥して淡々と言う。

「……おまえらもさがってる。邪魔だ」

くつ、反論したいが、正直、邪魔になりそうなのは事実だった。それほどまでにベルは強かった。

それでも、つけ入るスキがあつたらいつでも割って入れるように、俺と槐は歯噛みしつつも身構える。

そんな俺たちを置いて、ライニーはベルにゆっくりと近づいていく。

「へっ、上等だ」

それに合わせて、ベルもゆっくりとライニーに近づいていく。

そして、一メートルもない距離まで近づくと、二人は立ち止まった。

「こうして対峙するのは、本部での模擬戦でやりあつて以来か？」

「………どうでもいいことだ」

「さよですか——つと！」

ベルが上段蹴りを放つのと同時にライニーも上段蹴りを放ち、激しい音を鳴らしながら蹴り同士がぶつかりあう。威力は互角だった。

ライニーは足を引くと、即座に銃撃を行う。

ベルは至近距離にも関わらず、最小限の動きで銃弾を躲し、ナイフでライニーに斬りかかる。

ライニーはナイフの一撃を拳銃で防ぎつつ、そのまま銃撃を行う。

ベルも即座にナイフや手を使って銃口を反らして銃弾を躲す。

は、入り込める余地がなかった。それほどまでに、二人の攻防は高度なものだった。

「……嘘。ライくん、いつのまにあそこまでの動きを……!?　ベルくんも、想定以上の!?!」

ユウナは二人の攻防を見て驚愕していた。

「どうやら、ユウナからしても、二人の戦闘力の高さは予想だにできなかったことだったようだ。」

「いい動きじゃねえか!　その感じからすると、俺たち血ブラッドの悪魔の子供たちの特性に気づいたみてえだな!」

ブラッド・チルドレン
血の悪魔の子供たちの特性？ 身体能力の高さ以外に何かあるのか？

ユウナのほうを見ると、ユウナもベルがなんのことを言ってるのかわからないよう
だ。

「ユウちゃんは知らないみたいだな？ なら、こいつも冥土の土産として教えてやるよ」

「——ツツ！」

ベルが俺たちにブラッド・チルドレン
の形相でそれを止めようとする。

「必死だな。そりゃ、そうか。ユウちゃんには教えたくねえよな」

ベルは止めようとするライニーに組みついて動きを封じると、改めて語りだす。

「俺たちブラッド・チルドレン
ダメージが大きければ大きいほど、そこから回復すると、それに応じて強くなる。ただ
し、自然治癒じゃないと効果は落ちるがな」

ダメージを負って、回復するだけで強くなるだと！　なんだ、そのでたらめな特性は！

「あるとき、偶然この特性に気づいてな。あとはもうやることは決まっていた。ただひたすら自傷しては治癒させるを繰り返す。死ぬか死なないかのギリギリのラインを見極めてな。ライ、おまえもそうしたんだろ？」

「本当なの、ライくん!？」

二人に問われたライニーは何も答えなかった。だが、それが肯定の意を表していた。ライニーとベルの戦闘力が抜きん出てるのもそれが理由か。

「このことをライがユウちゃんに教えなかったのは、教えれば、ユウちゃんも自主的にやることは明白だからだ。ユウちゃんのことを大切に想ってるライがそれを望むわけがないからな。むしろ、ライが自傷行為をやらうとするのを止めることも視野にいれてな」

さつきの二人のやりとりや関係性を見れば、その光景は容易に想像できた。

「それに、万が一にも本部の連中に知られるリスクを避けたかつたてのもあるんだろうがな。ユウちゃん、腹芸が苦手だからな。信仰のためなら平然と命を捧げる、捧げるなんて言うような連中だ。二人を強くするために自傷行為を強要するのは明白だ。いや、二人だけで済めばまだいいほうか。ライにとつてさらに最悪なのは、教会の戦士になる気のない他のガキどもにまで自傷行為を強要して、戦士に仕立てあげようとする事だな」

「……聖剣計画で木場や木場の同士たちにした仕打ちのことを考えれば、そういう連中が出てきてもおかしくはないか。」

「——もつと最悪なのは、強くなったことを口実に、わざと危険な任務につかせられることだな。いまの二人のようにな」

わざと危険な任務につかせる？ どういうことだ？

「——お喋りが………すぎるんだよ！」

組みつかれて動きを拘束されていたライニーだったが、強引に拘束を振りほどいて、ベルを蹴り飛ばす。

だが、ベルはすかさず、蹴り飛ばされながらもナイフを投擲する。

「ぐっ！」

投擲されたナイフはライニーの左肩を貫く。

ライニーも負けじと、銃撃を行う。

ベルは右腕を盾にして、銃弾の急所への命中を避ける。

「いつてえな」

「くっ………」

ベルは撃たれた右腕をだらんとさせながらぼやき、ライニーは左肩に刺さったナイフを抜き捨てる。刺されどころが悪かったのか、ライニーも左腕をだらんとさせていた。

だが、ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たちである二人にとっては、そんなのはかすり傷みたいなものだった。すぐに、傷が塞がって――。

「――何？」

――俺はすぐに違和感に気づいた。

ベルの刀傷も、ユウナの銃創もそんなに時間もたたずに塞がっていた。なのに――。

「――治らない？」

いつまで経っても、二人の傷が治る気配がなかった。



「はあ、はあ、はあ………！」

闇夜の林の中、紫藤イリナは何かから逃げるように一人で疾走していた。

カリスによる死人の爆発から逃れたら彼女は共に爆発から逃げ延びたゼノヴィアと一緒に、はぐれたライニーとユウナを探すことよりも、フリードとバルパーのあとを追うことを優先した。ようやく掴んだ敵の足取りを逃すわけにはいかなかったからだ。

だが、追った先で二人を待っていたのは、フリードとバルパー、そして大勢の聖剣を持ったはぐれエクソシストやはぐれハンター、カリスの操る死人、上級を含んだ複数の墮天使だった。

すぐに圧倒的な戦力差を痛感した二人は即座に撤退を選択した。

だが、フリードたちの執拗な猛攻にイリナは逃げ遅れ、ゼノヴィアとはぐれてしまった。

それでも、どうにか逃げ延びたイリナはゼノヴィアたちを探して一人さまよっていた。

カツ！

「——ツ！ きゃああああああつ!？」

そこへ、複数の光の槍が投げ込まれ、その波動によってイリナは吹き飛んでしまう。

「うっ……」

「きやは♪ 見つけたってか♪」

「——ッ！」

背後から声をかけられ、振り向くと、フリードがおり、上空には複数の墮天使がいた。

「ははーん。逃げたはいいが、お仲間さんとはぐれたっつーわけ？ かわいいこちゃーん

♪」

フリードは醜悪に笑みを浮かべ、手に持つ『エクスカリバー・ラビッドリイ天閃の聖剣』の刀身を舐める。

「はああああッ！」

イリナは『エクスカリバー・ミニムック擬態の聖剣』を鞭のようにして攻撃するが、フリードは天ラビッドリイ閃のスピードで容易に躲す。

『擬態の聖剣』エクスカリバー・ミミック ちゃあん、そいつもほしかつたんすよねえ!

「うあああああああああつ!」

フリードは天ラピッドレイ閃のスピードでイリナを殺さず、痛ぶるように斬りつけていく。

「ううっ!? ああつ!? うっ!? ああああつ!」

イリナはなすすべもなく、フリードによって痛めつけられていく。

「……………ううっ……………うっ!」

気が済むまでイリナを痛ぶったフリードは、イリナの首を掴み、木に押しつける。

「……………離してよ……………この背信者……………!」

「さあて、どうしやすかねえ?」

「おい、フリード」

「あん?」

墮天使の一人がフリードに言う。

「楽しむのなら速くしてくれよ。俺らも楽しみてえんだからよ」

その墮天使の言葉を皮切りに、墮天使たちはゲスな笑みを浮かべる。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

イリナはこのあと、自分の身に起こることを想像し、身震いする。

こんな奴らにこの身を汚されるくらいなら、イリナは舌を嚙んで自決しようとするが、フリードが即座にイリナの口に指を入れる。

「おっとお、自害しようたって、そうはいきやせんぜえ♪」

もうどうすることもできず、覚悟を決めてイリナは目をキツク閉じる。

「飛電ひでんの太刀——」

フリードや墮天使たちの嘲笑いの中、静かに発せられた第三者の声。

この場にいた全員が声のしたほうを見る。

そこには、月をバックに空中で居合いの構えをしたレンがいた。

「紅雨べにさめ——」

鞘のトリガーを引きながら振るわれた居合いの刃から無数の紅い雷の刃が放たれ、フリードや墮天使たちに飛来する。

「チイツ！」

フリードは天ラレツドカイ閃のスピードで即座にその場から離れて雷の刃を躲し、墮天使たちは雷の刃を飛んで躲し、あるいは防御障壁で防ぎ、あるいは光の槍や剣で迎撃する。

そんな中、雷の刃の雨が飛び交う中を疾走する人影が一人いた。

人影は即座にイリナを回収すると、雷の刃の雨の中から離脱し、レンの隣に降り立つ

た。

「——生きてるかね、イリナ？」

「……アル……さん……」

イリナを回収したのはアルミヤであった。

「——キミのおかげで、最悪の事態は免れたようだ」

「——ギリギリ間に合ってよかったぜ」

アズリールを倒したレンは、強化した聴覚を頼りに、襲いかかってきた敵を排除していたアルミヤと合流していた。そこで情報交換をしたあと、レンの聴覚でイリナの危機を察知し、こうしてギリギリのところまで駆けつけたのであった。

「彼女を頼む」

「任された」

アルミヤはイリナをレンに預け、聖剣を二刀流で構える。それを尻目に、レンはイリナを担ぎ、強化した聴覚で捉えた明日夏たちのもとへ向かって駆けだす。

「逃がすか！」

墮天使たちはこの場から離脱しようとするレンにめがけて光の槍を投擲する。

「させん」

アルミヤは即座に飛来する光の槍と同じ数の聖剣を創りだし、投擲して光の槍を相殺する。

そのスキにレンは、疾風を連続で行うことで、この場から離脱した。

「——キミたちの相手はこの私だ」

アルミヤは不敵に笑みを浮かべ、
バランス・プレイヤー 禁手で出現させた聖剣でできた騎士たちを従

え、墮天使たちを迎え撃つ。

「……おつとお、さすがにこのお兄さんと戦うのは勘弁だねえ」

フリードは即座に自身とアルミヤの実力差を把握する。

「せっかくゲットしたこれを奪い返されてもやだから、僕ちん、離脱しまーす！」

そう言うフリードの手には、イリナから奪った紐状になった『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』が握られていた。

「——てなわけで、はい、ちやらば」

フリードは閃光弾を炸裂させ、ラビットドリイ天閃のスピードでこの場から離脱した。

「チッ」

アルミヤはすぐにフリードを追おうとしたが、いつのまにかこの場に集合していたはぐれエクソシストやはぐれハンターたち、カリスの操る死人たちに阻まれてしまう。

「チツ、勝手な野郎だぜ」

墮天使たちはフリードの身勝手さをぼやきながらも、アルミヤの実力を即座に感じとり、アルミヤに対して警戒を緩めない。

そんな実戦経験豊富そうな様子を見せる墮天使たちにアルミヤもまた、警戒心を強める。

そして、一拍置いたあと、アルミヤと聖剣の騎士たち、墮天使たちと従えるはぐれたちと死人たちが激突した。

Life. 21 血の悪魔

ライニーとベルの傷が治らないことに困惑する俺。

「不思議がつてるな？ まあ、俺たちの傷の治りの早さのことしか知らなければ、そういう反応になるか」

なんだ？ 血ブラッド・チルドレンの悪魔の子供たちには、まだ他にも特性があるのか？

「なあ、おまえ。名前なんつーんだ？」

「………土騎明日夏だ」

「じゃあ、明日夏って呼ばせてもらおうぜ」

………いきなり馴れ馴れしいな。
おそらく、そういう性分なんだろうが。

「なあ、明日夏。俺とライのこの傷。共通点はなんだ？」

共通点？ どっちも、武装十字器ククロス・ギアでできた傷だ。だが、武装十字器ククロス・ギアに治癒阻害の能力があるなんて聞いたことない。

「おまえが考えてる通り、武装十字器ククロス・ギアに治癒阻害の能力なんてねえ。ただし、俺らにとっちゃ、話は別なんだよな」

「………どういう意味だ？」

「わかんないかねえ？ なら、俺らはなんて呼ばれてる？」

なんて、て………血ブラッドの悪魔ドの子供トルたち？ —— ツ！ まさか………！

「ようやく気づいたか。そうだ、聖なるものでつけられた傷は、治りが遅いんだよ。しかも、常人よりもな。おまけに痛みも数倍だ」

それじゃ、まるで——。

「本当に悪魔みたい——だろ？」

ライニーとユウナのほうを見るが、二人とも、顔をしかめるだけで、ベルの言葉を否定しなかった。それだけで、二人も自分たちのことをそう見てるってことを表していた。

——それはどうかな……。

あのときのライニーの言葉は、このことを表していたのか。

「こんな体質だ。本部の連中が俺たちをどう見るかは考えるまでもないだろう！」

たとえば、俺たちがよく知る悪魔と違うところがあったとしても、人間の突然変異による体質だとしても、聖なるものを苦手とするという事実だけで、教会の者たちにとっては容認できないことだろう。

「それでも、俺たちを世話してくれたノモア神父やシスターたちが、俺らのことは人間だって本部に主張してくれた。実際、傷つけられるのがダメなだけで、触れもできるし、お祈りだってできたからな。おかげで、俺やライ、ユウちゃんはこうして教会の戦士になることができた」

ライニーたちの背景にそんなことがあったのか。

「けど、そのノモア神父は俺が殺しちゃった」

ベルはまったく悪びれる様子もなく言う。

「シスターたちも、全員死んだってな？　俺がいなくなった後で起こったあの事件で」

「——ツ!?!」

ベルの言葉にライニーとユウナが目を見開いていた。

「二人とも、なんで知ってんだって顔してんな。偶然、知る機会があったとしか言いよう

「がねえけどな」

「事件？ 一体、何があったんだ？」

「俺が訝しげにしてるのに気づいたかベルがその事件のことを話し始めた。」

「とある悪魔が教会を襲撃したのさ。悪魔はライが倒したが、残念なことにシスターが全員殺されたのさ」

「そうか、ライニーのあの悪魔に対する敵意はそれが理由か。」

「幸い、ガキどもは生き残ったがな。だが、それは同時に教会の不信感を煽る結果になったけどな」

「………どういう意味だ？」

「簡単な話さ。ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たちだけが生き残った。この事実を、本部の連中はこう思ったのさ。『悪魔の子だから生かされた』てな」

「なんだよ、そのふざけた話は！」

「ふざけた話だろ？　で、後ろ楯を失ったライたちは、俺の件とその件が重なり、本部の連中からは酷く不信感を抱かれ、毛嫌いされるようになってしまったってわけだ」

ベルが立場が悪くなったって言ってたのはそういうことか。

「それでも、そんな扱いをされながらも、ライとユウちゃんが頑張って功績を立てた。それが功をそうして、ライたちが教会から追い出されることはなかった。あと、ブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たちのことを知ってるのが、一部の連中だけだったのもあるがな。だけど、本部の連中はさっさとライたちを教会から追い出したい、あわよくば、悪魔として滅したいとしか考えてない。たとえば、今回のエクスカリバー奪還みたいな危険な任務につかせたりとかな。成功するのなら御の字、戦死するのなら厄介者を排除できるとしか考えてねえのさ」

聖なるものに傷つけられるのがダメな二人を聖なる武器の中でも最強クラスと言ってもいいエクスカリバーの奪還任務につかせるなんて、確かに、死に行けと言ってるようなもんだ。

ライニーやユウナの反応からしても、ベルが言つてゐることは、本当なんだろう。

「………本当にお喋りが過ぎるな」

ライニーは片腕が動かないことを気にすることなく、拳銃を構える。

対するベルも、動かない片腕を気にする素振りを見せず、ナイフを構える。

一拍置いて、ライニーは銃撃を行うが、ベルは相変わらず俊敏な動きで銃弾を躲し、ライニーに一気に接近する。

「ヘッー」

「チッー」

ベルのナイフをライニーは拳銃で防ぐ。

ライニーが明らかに不利だった。片腕が使えないために、得意の二丁拳銃ができず、近接戦じゃ、銃とナイフではほとんどの場合、ナイフのほうが速い。

ライニーも体術で対応はできるだろう。だが、血の悪魔の子供たち^{ブラッド・チルドレン}に体術によるダメージは期待できない。つまり、接近戦ではライニーのほうに決定打がない。

対するベルはナイフ主体、しかも、そのナイフは武装十字器だ。血の悪魔の子供たちであるライニーとっては、かすり傷でさえも無視できない。

俺たちも援護に入りたかったが、片腕同士でも、二人の攻防に入り込める余地がなかった。

「くっ！」

ライニーは拳銃の銃身部分を持って、鈍器のように扱いだす。

ベルも受けてたつと言わんばかりに、拳銃による打撃をナイフで迎え撃つ。

拳銃による打撃とナイフによる斬撃の攻防が目で追うのが厳しくなるほど速く、そして激しくなっていく。

「オラッ！」

「ぐっ!!？」

ライニーの拳銃がベルによつて弾き飛ばされた！

まずい！

「終わりだ！」

「ライくん!？」

ベルは勝負を決めようとどめの斬撃を放つ。
クソツ、助けようにも間に合わない！

ライニーが斬られる——そう思った瞬間——。

バキンッ！

「——あり？」

ライニーの拳がベルのナイフを殴り折った！
そして、ライニーは腕を引き——。

ドゴンッ！

「——っ!？」

ライニーの拳がベルの顔面に突き刺さり、ベルを後方に大きく吹き飛ばした。

「——ようやく、その軽薄顔に一発入れられたぜ」

「……………ぐううう……………いつてええつ……………!」

ベルは殴られた顔面を押さえながらよろよろと立ち上がる。

「……………この痛み……………おまえ、その腕なんだ?」

鼻血を手で拭いながら、ベルはライニーの右腕を睨む。

俺たちも、ライニーの右腕に視線を向ける。

すると、ライニーの右腕が白く燃え上がる!

見ると、右脚も同じように燃えていた!

「……………おいおい、その腕と脚はまさか!？」

炎が消えると、そこにあつたのは、十字架をあしらった刻印がされた白銀の腕と脚だつた！

「……武装^{クロス・ギア}十字器の義肢とはな。洒落たもん持つてんじやねえか」

ベルの言うとおり、ライニーの右腕と右脚は武装^{クロス・ギア}十字器だつた。

「俺が教会にいた頃にはなかつたもんだな。技術の進歩つてやつか？ それとも、実用段階じゃなく、試験運用中か？ まあ、別にどうでもいいか。それにしても、おまえ、知らないあいだに隻腕と隻脚になつてるとはな。任務先で失くしたのか？ んで、体のいい被験体にでもされたか？」

「……おまえには関係のないことだ」

「さよですか——ペツ！」

ベルは口をもごもごさせてから血を吐き、口から出てる血を手で拭う。

あの感じ、かなりダメージが入ってるようだな。

「義肢型の武装^{クロス・ギア}十字器は義肢になる都合上、通常の武装^{クロス・ギア}十字器よりも頑丈に作られてるの。それに伴い、聖なる力も通常よりも高いの」

ユウナが義肢型の武装^{クロス・ギア}十字器について説明してくれた。

なるほど。だから、一方的にベルのナイフを折れたし、ベルにかなりのダメージを与えられたわけか。

「そんな状態になりながらも戦い続けるなんて。健気なもんだねえ」

軽口を叩くベルだが、キツイ一発をもらって追い詰められているのは確かだった。実際、少しふらふらだった。

「ふッ！」

ライニーは一気にベルの懐に入り込み、拳を打ち出す。

「チッ！」

ブラッド・チルドレン
 血の悪魔の子供たちであるベルはガードすることができず、ふらふらなために避けることもできないため、ライニーの攻撃を受け流すしかなかった。

ドカッ！

「はっはっ！」

そのスキをついて、ライニーは武装十字器の脚でベルの顎を蹴りあげる。それによつて完全に怯んだベルを、ライニーに武装十字器の腕で執拗に殴っていく。

「……………ぐっ……………さすがに……………やべえか……………！」

「はあ、はあ、はあ……………」

ベルは満身創痍になっており、ライニーは息を切らしながらも、まだ余力を残している様子だった。

「……………終わりだ……………」

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

ライニーは義手の手を力強く握って拳を作る。とどめをさすつもりのようなだ。ユウナはその瞬間を見たくないのか、きつく目を閉じて、顔をそらしていた。

「ふうッ！」

そして、ライニーはとどめをさそうと、拳を打ち出す。

拳がベルの顔を捉えようとした瞬間――。

ザシュツ！

「があっ!？」

「なっ!？」

「え？」

突然、赤い無数の槍のようなものがライニーの至るところを貫いた！

その光景に俺と槐は驚愕し、顔をそらしていたユウナは予想外の展開に困惑していた。

「——惜しかったな、ライ」

ライニーを貫いた赤い槍のようなものは液体状に変わり、ベルの周りを漂い始めた。
あれは——血か？

「かはっ!？」

ライニーは血を吐き、貫かれた箇所から鮮血を噴き出せながら力なく倒れた。

「ライくん!？」

それを見たユウナが血相を変えて飛び出した！

「待て、ユウナ！」

俺の制止の声も届かず、ユウナはベルに斬りかかる。

「なっ!?!」

ベルの周りを漂っていた血が壁のようになってユウナの斬撃を止めた。

「がっ!?!」

そのままベルは、ユウナの首を締め上げる。

俺と槐は二人を助けようと左右からベルに斬りかかる!

だが、血が今度は鞭状の刃物のようにになって俺と槐に斬りかかってきた!

「ぐっ!?!」

「くっ!?!」

俺と槐は刀で血の斬撃を受け止めるが、凄まじい力で後方に吹き飛ばされた!

吹き飛ばされながらも、なんとか空中で体勢を整えて着地する。
 なんなんだ、あれは!?

当のベルはしてやったりとした顔をしていた。

「驚いたか。こいつも血の悪魔の子供たちの力だ。これはさすがに知らなかったようだな、ライ?」

問われたライニーは倒れた状態でベルを睨むだけだった。

「俺も最近この力に目覚めたんだよ。見てのとおり、自身の血を自在に操れるんだよ。俺はこれをとりあえず、『^{ブラッド・アーツ}血の力』って呼んでるぜ。それにしても、カルト教団の連中、本当はこれを見て、俺たちを血の悪魔の子供たちなんて呼び始めたのかねえ?」

血を自在に操る——まさに血の悪魔ってか!

「おまけに、この^{ブラッド・アーツ}血の力でできたダメージ、なぜか聖なる武器と同じ効果を俺たち^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちに残すんだよなあ」

なっ!? だとしたら、いまのライニーは大変危険な状態だ!

見た感じ、急所は外れてるようだが——おそらく、ベルがわざと外したんだろう。この力を見せびらかすために。

「……………ぐっ……………ユ……………ユウ……………ッ!」

ライニーはユウナを助けようとしているのか手を伸ばしていた。

「そんな状態でもユウちゃんを守ろうとするなんて、ホンット、健気だな——つと!」

ドガツ!

「がっ!?!」

ライニーがベルによって蹴り飛ばされる!

「……………ライ……………くん……………」

ユウナはベルの手を掴んで抵抗を見せるが、ユウナの首を締め上げる力は緩むことはなかった。

ベルは血で短剣を三本創り、親指を除く四本の指の間で挟むようして持つ。

「他人の心配をしてる余裕なんてあんのかよ、ユウちゃん？ それに、さっきの攻撃、まあ躊躇ったろ？ この期に及んでも甘いなあ、ユウちゃんは。——だからこうなる」

そう言うと、ベルはユウナの首から手を離すと、ユウナの口を押さえるように掴み、溝尾に血の短剣を突き刺した！

「——つつつ!!」

ユウナがぐもった悲鳴をあげ、ベルの手の隙間から血が溢れ出た！

「ほらよ」

ベルはライニーに向けてユウナを投げつける！

「……………くっ……………！」

ライニーは傷ついた体で無理を押しつけてユウナを受け止める。
だが、同時にベルは血の短剣を投擲していた！

「——ッ！」

ザシユツ！

「があっ!?!」

ライニーはユウナを庇い、背中で血の短剣を受ける！

「ほーら、追加だ」

ベルはさらに血の短剣を投擲するが、俺がライニーとベルの間に入り込んで血の短剣
ライトニングスラッシュ
を雷 刃で弾く！

「明日夏、後ろだ！」

槐に言われ、すぐに振り向くと、ライニーとユウナに刺さっていた血の短剣が俺に向
かって飛来してきていた！

「くっ!？」

俺は即座に緋い龍気で防ぐ！

さらに、オーラで血の短剣を包み、完全に消し飛ばす！

「いい判断だな。斬ろうが、吹っ飛ばそうが、元は液体だから関係ないからな。蒸発させ
るか、消し飛ばすかしないってわけだ」

俺はベルの向き直りつつ、二人の容態を見てる槐に訊く。

「槐、二人の容態は!?!」

「………危険な状態だが、まだ息はある」

二人のほうに視線を向ける。

ユウナは意識を失っており、息も荒かった。

ライニーのほうはまだ意識はあるが、気力で無理くり意識を保ってるような状態だった。

二人とも、かなり傷が酷い。特にユウナのほうは深刻だ。むしろ、生きてるほうが不思議だった。

「心配しなくても、^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちの生命力ならかうじて息長らえると思うぜ」

皮肉にも、二人を苦しめた^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちの特性が二人を生かしていた。

「槐、二人を連れて、急いでアシアのところに向かってくれ！」

このまま放っておけば、二人の命が危ないことに変わりはない。

「——ッ！ 明日夏、おまえはどうする気だ!？」

「俺は奴を食い止める！」

消耗してる槐では荷が重いだらう。

俺は雷ライトニングスラッシュ 刃を逆手持ちにして構える。

「俺とライの戦いに着いてこれなかった奴がほざくじゃねえか？ ——と、言いたいとこだが………さすがにやられ過ぎたか………」

気丈に振る舞っていたベルだったが、ダメージでふらつき始めていた。

「………つたく、義肢型の武装クロスギア十字器は予想外だったぜ。こんなことなら、なめプなんてするんじゃないかな………」

ライニーが与えたダメージは決して軽くない。足止めは問題ないはずだし、倒すことも不可能じゃないはずだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・引っ込んでろ・・・・・・・・奴は俺が殺す・・・・・・・・！」

ライニーが無理矢理立ち上がり、俺の肩を掴んでさがらせようとする。

「・・・・・・・・そんなザマでどうする気だ？」

ライニーは俺の肩を引っ張ろうとしていたが、手からはほとんど力を感じられなかった。もう、立ってるだけでやっとなのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・黙れ・・・・・・・・！・・・・・・・・てめえには・・・・・・・・関係のないことだ・・・・・・・・！」

なんだ？ なぜこいつはここまでする。恩人の仇、かつての仲間、そういつた愛憎が

入り交じった感情があることは察せるが、それだけじゃないような気がしてならない。俺の疑問に感づいたのか、ベルが答える。

「そいつがそんなに必死なのは、自分の手で俺を殺すことで、本部の不信感を少しでも払拭してえのさ。いままでもそうさ。汚れ仕事を積極的に受けて、教会に対する献身さをアピールして、^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちに対するイメージを払拭しようとしてきた。そのためなら、どこまでも冷徹になれる。本人は信仰心なんてないのにな」

それはなんとなく察していた。おそらく、ライニーは^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちのことで受けた数々の扱いが原因でかなりの人間不信に陥ってる。そんな奴が、自分たちを冷遇する教会に対し忠誠心なんて抱くわけがない。すべては、ユウナや同じ^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちの子供たちのため。路頭に迷わせず、居場所を作るため。

そのためにこいつは自分を殺してきた。人間不信だからこそ、心を許した相手にはどこまでも献身的になる。いまままでのことから、ライニー・デイランデイという男はそういう人間なんだと感じた。

だからだろうな——。

「いまの俺たちは協力関係だ。おまえのやろうとしていることを邪魔する気はないが、みすみす死なせる気もない」

「……バカが……そんなもん、形だけのものだろうが……！」

今回の件が終われば、ただの他人だ……！」

「それでもだ」

大切なもののために戦うこいつをみすみす死なせたくなかった。

仮にこの先、敵になるのだとしてもだ。そのときはそのときだ。

だからいまは——。

「——休んでろ」

「——っ!？」

俺はライニーの首筋に当身を当て、ライニーの意識を刈り取る。

「頼むぞ、槐」

「……わかった」

槐も消耗したいまの自分では足手まといになると感じたのか、素直に従ってくれ、ライニーとユウナに肩を担ぐ。

女一人にかなり無理させることになってしまいが、奴の相手をするよりは負担は軽はずだ。

二人を槐に任せ、俺はベルに備えて構える。

「おまえ、悪魔側の人間なんだろう？ いいのかよ？ 本部から冷遇されているとはいえ、一応は教会の戦士にそんなに肩入れして？」

「勘違いするな。俺は別に悪魔側というわけじゃない。俺がイツセーたちといっているのはイツセーたちだからだ。そこに悪魔だとか人間だとかは関係ない。そして、俺はこいつらを死なせたくないと思った。それも教会の戦士だとかは関係ない。こいつらだからだ」

俺はなんてことのないように言う。

「——なるほどねえ」

それを聞いて、ベルは軽く微笑むと、俺のことを興味深そうに見てくる。

「どうりで、人嫌いのライが雀の涙ぐらいには気にかけてるわけだ。俺、おまえのことを気に入ったぜ。その証拠に、いま、おまえのことを滅茶苦茶殺したいと思ってるからな」

ベルから強烈な殺意を向けられる！

だが、奴の意識が俺に集中するのなら、足止めをするのに好都合だ。

「そういえば、おまえ、さっきライのやることを邪魔する気はないって言ってたな？」

「……それがどうした？」

「——それが、実の姉を殺すこと、でもか？」

Life. 22 強敵、現れました!

「——何?」

俺はベルの言葉に衝撃を受けてしまう。実の家族を手にかけるなんて、俺からしたら、とても信じられない話だからだ。

「そいつには姉がいてな。名前はエイミー・デイランデイ。もちろん、俺たちと同じくブラッド・チルドレン血の悪魔の子供たちだぜ。ノモア神父に拾われるまえまでは、ライは姉と肩を寄せあつて、必死に支えあつて生きてたみたいだぜ」

そんな姉をなんで——いや、待て。そもそも、ライニーの姉は教会に拾われたのか? いや、たぶん、あの言いかたから察するに、教会にライニーの姉はいない。そして、死んでるわけではない。いま現在、殺そうとしてゐるわけだからな。

ならなぜ、生き別れることになつた? 殺そうとするつてことは、そうしなければ、教

会に悪い印象を与えることになるということだ。

「なあ、ライの奴、初めて会ったときに悪魔のことをとことん扱き下ろしてなかったか？」

——ッ！ まさか！

「そうだ。ライの姉貴は悪魔に転生してるのさ。しかも、本人の意思を無視して無理矢理にな」

………やっぱりか。

「せつかくだから話してやるよ。まあ、俺もライから聞いた話だな」

そして、ベルはライニーとライニーの姉に起こった出来事を語り始めた。



ライニーとエイミーのデイランデイ姉弟は、母親から虐待を受けていた。それも、^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちになるまえからである。

二人の母親は遊び人で、二人の父親であり、当時付き合っていた彼氏と毎日酒を飲んでは情欲に更ける毎日を過ごしていた女だった。そんなある日、母親はエイミーを身籠ることにした。そして、エイミーが誕生し、さらに一年後にライニーが誕生した。そして、二人が物心がついた頃、父親は三人を残してどこかへ蒸発してしまった。実は父親は母親と付き合っていた当時から借金にまみれており、初めから母親に借金を押しつけて逃亡するつもりだったのだ。母親はそれに怒り、絶望した。借金に借金を重ね、酒浸りになり、自堕落な生活を送るようになり、そして、腹いせに二人を虐待するようになったのだ。

二人が^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちになると、体が頑丈になったことをいいことに、母親の虐待は日増しに酷くなっていった。

そして、ついには二人を殺そうとする状況にまで発展してしまった。

それまで、ずっと耐え続けていたエイミーはそこで初めて母親に反抗した。反撃で母親を昏倒させ、そのスキにもう母親とは暮らせないとライニーを連れて家を出たのだ。

そこからの二人の生活は悲惨なものだった。ストリートチルドレンの二人を気にか

けてくれる者はおらず、むしろ、血の悪魔の子供たちの身体的特徴を忌み嫌われ、蔑まれていた。飢えをしのぐために生ゴミを漁り、渴きを癒すために泥水を啜って生きてきた。幸いにも、血の悪魔の子供たちになったことで二人はなんとか生き長らえることができていた。

そんなある日、二人はとある上級悪魔に出会った。上級悪魔は人のいい笑みを浮かべて二人を自身の眷属に誘った。そうすれば、おいしいものも食べられ、暖かい場所で暮らせる。もう、こんな生活をしなくてもいい。

だが、エイミーはそれを断った。なぜ断ったかは定かではないが、このあと起こったことを考えれば、その上級悪魔の本性を本能的に感じとっていたのかもしれない。

誘いを断られた上級悪魔はとたんに豹変し、二人を無理矢理眷属にしようとした。上級悪魔は初めから、二人の血の悪魔の子供たちとして力に目をつけていたのだ。

二人はすぐさま逃げたが、血の悪魔の子供たちといえども幼い子供、しかも、いままでの劣悪な生活で弱っていたこともあって、当然逃げ切れるはずもなかった。

そこで、エイミーは自分を囚にすることで、ライニーだけでも逃がそうとした。

結果、エイミーは上級悪魔に捕らえられ、ライニーは偶然にも近辺に訪れていたノモアに保護された。

ノモアはすぐさま、エイミーのことを救出しようとしたが、時遅く、エイミーは転生

悪魔となっていた。

立場上、エイミーのことを助けられることができなかったノモアはライニーだけでも守るため、上級悪魔も教会とことをかまえるわけにいかないことと、エイミーだけでも満足していたことで、ノモアと上級悪魔はお互いに手を引いた。

これが、デイランディ姉弟が生き別れるまでに起こったことの顛末だった。



「——とまあ、こんな感じだ。ま、そんな珍しい話でもないな」

・・・・・ライニーにそんな過去が。

ライニーが悪魔を憎むのも、他人を信じれないのも、家族同然のように想うユウナたちのために自分を犠牲にするのもそのことが理由か。

「当時のライはそれはもう、ノモア神父を責めてたぜ。なんで姉を助けてくれなかったてな。ノモア神父も、言い訳することなく、ライに何度も謝罪し、ライの責めを甘んじて受け入れてた。そのときのノモア神父の行動が原因なんだろうな。ライが姉とユウ

ちやんたちを天秤にかけちまったのは」

姉とユウナたちを天秤にかけた結果、ライニーはより確実に守れるほうを取った。

立ち位置的にそれしかできなかったんだろう。姉を上級悪魔から連れ出すことはもちろん、出会うことがあれば、教会の戦士として見逃すわけにはいかない。もし見逃したりすれば、それが原因で余計に立場が悪くなりかねない。最悪、教会から追放されかねない。自分一人で済むのなら、ライニーはそれでもかまわないだろうが、ユウナたちのこともあり、それはできなかつた。

「ま、その役目は俺が引き受けてやるさ。だから、安心して俺に殺されてろつてな。——って、聞こえてねえか」

「——ッ！」

ベルの殺気が意識を失つてるライニーとユウナに向けられる。

「槐、早く行け！」

俺は槐に叫んで促し、

ライトニングスラッシュ
雷 刃を構える。

「——女一人に荷物持ちさせると、男としてどうなんだ?」

「——ッ!」

突然の第三者の声! そして、眼前に紅い雷をほとばしらせた誰かが一瞬で現れた!

「レン!」

現れたのは別行動をしていたレンだった。

よく見ると、誰かを担いでいた。

「こいつを頼む」

レンは担いでいた誰かを俺に投げ渡してきた。

俺は慌ててそれをキャッチする。

「イリナ！」

投げ渡されたのは、ボロボロで血まみれのイリナだった！

こちらもかなりの酷い傷だったが、息はまだあった。だが、その息もライニーとユウナと同じくらい荒かった。こっちもすぐ治療しないと危険だな。

「ここは俺に任せて行け！　そして、リアス・グレモリーと樹里さん、可能なら教会本部に伝えろ！　今回の事件は、コカビエルを始めとした一部の墮天使が独断で起こしたもので、グリゴリは関与していないこと。そして、独断専行の目的は、かつての悪魔、神、墮天使の大戦を再開させることだっけな！」

「な、なんだと!?　じゃあ、エクスカリバーを奪ったのも、この町に潜伏してるのも!?!」
「神側と悪魔側への挑発らしい！　詳しい説明はこいつに録音しといた！」

そう言つて、レンはスマホを投げ渡してきた。

「他のメンツは無事だ！　だから早く行け！　ヘタすれば、一刻を争う事態になるかも
しれないぞー！」

今回の事態の大きさを把握し、俺はうなずく。

木場たちが心配だが、レンが無事というなら大丈夫なんだろう。レンの能力なら、それを把握することは可能だからな。

「ライニーは俺が運ぶ。ユウナを頼む」

「わかった」

ユウナを槐に任せ、俺はイリナとライニーを担ぐ。

「気をつけろ、レン！ そいつは——」

「聴いてたから知ってる！」

レンは自身の耳を指で軽く叩きながら言う。

レンの能力ならそれも可能か。

「おっと、行かせねえよ！」

そう言い、ベルが血の短剣を投擲してきた！

「飛電の太刀——紅ベにみだ乱れ！」

レンの居合いと同時に広範囲に放出された紅い雷によって血の短剣が消し飛ばされた。
た。

「早く行け！ 複数の墮天使やはぐれどもがやって来てる！ ケガ人を抱えながら戦うのはさすがにキツイ！」

レンの言葉に俺と槐はうなずき、即座にその場から走りだす。

レンが心配だったが、レンならうまく立ち回るだろう。

とにかく急いだほうがよさそうだ！

俺と槐はライニーたちにできるだけ負担をかけないように急いで来た道を駆け抜けていった。



傷ついたライニーたちを運びつつ、俺と槐は林の中を突っ切っていく。

走りつつ、後方を確認するが、俺たちを追ってきたる存在はいなかった。レンがうまく足止めしてくれてるようだな。

そうこうしていると、カリスが操る死人の自爆でできたクレーターがある場所に着いた。

「あれは?」

クレーターの中心に団体の人影が見えた。

敵かと警戒するが――。

「ツ! 部長、皆!」

そこにいたのは部長たちオカ研の皆だった。

アーシアもいるな。ちょうどよかった!

「アーシア！ 治療を頼む！ 急いでくれ！」

「は、はい！」

アーシアは返事をする、急いで駆け寄ってきた。

俺と槐はライニーたちをその場に寝かせると、アーシアはライニーたちの状態に酷く驚きながらもすぐに治療を開始してくれた。

イツセーが訊いてくる。

「一体、何があつたんだよ!? 木場やゼノヴィアは!?」

「二人とははぐれちまって、どこにいるかは……」

そこへ、部長が歩み寄ってきた。……見るからに不機嫌そうだった。

あー、これは勝手したことがバレてるな……。

イツセーが言うには、ゼノヴィアたちと会った時点ですでにバレていたみたいだ。

「——明日夏。イツセーと一緒に勝手なことをしたことについていろいろ言いたいこと

はあるけれど、いまは置いておくわ。一体何があったのかを詳しく話してちょうだい」

俺はイツセーたちと別れてから起こった出来事を話した。

「祐斗の行方は依然として不明だけど、ひとまず無事なのね?」

「はい。レンが言うにはですが」

俺は一応、レンの能力について話し、遠く離れた人物の状態を確認できることを伝えた。

それを聞き、部長たちもひとまず安心してくれた。

「——それよりも部長。今回の事件、思った以上に大事です……」

「大事? どういうことかしら?」

「詳しくはこれに」

俺はレンのスマホのボイスレコーダーに録音されていたレンの話を再生する。

レンの話によると、今回の事件は、三大勢力間の争いに消極的なグリゴリの方針に業

を煮やしたコカビエルを筆頭とするタカ派の墮天使たちが独断で起こしたもので、教会からエクスカリバーを奪ったのも、部長の縄張りであるこの町に潜伏していたのも、二勢力への挑発であった。しかも、独断で戦争を起こそうとしただけあり、『CBR』なる謎の組織からカリスを始めとした大勢のはぐれハンターたちが派遣されていたり、大量の聖剣を提供されており、さらにはフェニックスの涙まで用意しているみたいだ。フェニックスの涙の入手経路はおそらく、M×Mと同じ裏ルートで手に入れたものだろう。

「戦争を起こすことが目的だなんて……」

墮天使たちの目的を知り、部長は眉をひそめる。

「部長、事態は一刻を争います！　すぐにでも魔王に援軍を要請すべきです！」

これはもう、個人でことに当たるレベルを越えている。戦力的な観点から見ても、魔王に援軍を要請すべきだ。

だが、部長は苦い表情を浮かべていた。

「——部長。先日の婚約騒動で迷惑をかけたことを気にしてるんですけど、これももう、個人で対処できるレベルではありません!」

俺がもの申していると、副部長が部長に言う。

「リアス。明日夏くんの言うとおりですわ。相手は墮天使の幹部よ。あなた個人で解決できるレベルをはるかに超えているわ。——魔王さまの力を借りましょう」

部長は何か言いたげそうにするが、大きく息を吐き、静かに頷いた。

「——そうだ。そうしてもらわないと困る」

『っ!?!』

突然、上空から第三者の声が聞こえ、同時に、とてつもないプレッシャーが重くのしかかってきた!

この重圧……まさか!

俺たちは上空を見上げる。

月をバツクに漆黒の翼を生やした男が浮いていた。長身でウエーブのかかった長い黒髪をしており、装飾の凝ったローブを着用していた。そして、その翼の数は——十！樹里さんが見せてくれた写真と同じ顔！間違いない！こいつが！

「はじめましてかな、グレモリー家の娘。我が名はコカビエル」

大胆不敵に名乗る墮天使の幹部——コカビエル！

感じる重圧はレイナーレたちとは比べるのもおこがましいほどのレベルだった。

「ごきげんよう、堕ちた天使の幹部さん。私はリアス・グレモリー。どうぞお見知りおきを」

部長も怯まず名乗る。

「紅髪が麗しいものだな。紅髪の魔王サーゼクス、おまえの兄にそっくりだ。忌々しくて反吐が出そうだよ」

コカビエルの挑発的な物言いにも、部長は冷静に振る舞い、コカビエルに訊く。

「それで、戦争を起こそうとしているのは本当なのかしら?」

「ああ、そうだと。エクスカリバーでも奪えば、ミカエルが仕掛けてくるかと思ったのだが、よこしたのはザコの悪魔祓いと聖剣使いが三匹、悪魔もどきが二匹だ。つまらん。あまりにもつまらん。——だから、今度はおまえの根城である駒王学園を中心に、この町で暴れさせてもらおうと思つてな。そうすれば、いやでもサーゼクスは出てこざるを得ない。だろう?」

なつ、駒王学園で暴れるだど!?

「サーゼクスの妹の根城で暴れるんだ。それなりに楽しめそうだろう?」

完全に戦争狂だった! 独断で戦争を起こそうとするわけだ!

「そうだ。そうだと! 俺は三つ巴の戦争が終わつてから退屈で退屈で仕方がなかった! アザゼルもシエムハザも、次の戦争には消極的だな。それどころか、そのアザゼ

ルは戦争に消極的どころか、セイクリッド・ギア 神 器とかいうわけのわからんものを集めだし、研究に没頭し始める始末だ」

「おまえらは聖剣だけでなく、セイクリッド・ギア 神 器もゴ所望なのかよ！」

イツセーが震えながらも強気の姿勢を崩さずコカビエルに訊く。

「貴様の持つ『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』クラスなら武器にもなろうが、あいにく俺には興味がない。アゼルならほしがるかもしれんが。あいつのコレクター趣味は異常だからな」

そういや、兄貴がそんなこと言ってたな。アーシアみたいな、セイクリッド・ギア 神 器のせいで、居場所を失くした人間の保護も積極的にやっているとか。

「墮天使、神、悪魔はギリギリのところまで均衡を保っているだけだ。ならば、この手で戦争を引き起こしてやればいい。だから、今度は貴様ら悪魔に仕掛けさせてもらう！ シファアの妹リアス・グレモリー、そして、レヴィアタンの妹ソーナ・シトリー、それらの通う学舎なら、さぞや魔力の波動が立ち込めていて、混沌が楽しめるだろう！ 戦場としては申し分あるまい！」

無茶苦茶だ! こいつ、マジで頭がイカれてやがる!

「ヒヤハハハハッハハ!」

突然の笑い声!

笑い声がするほうを見ると、そこにいたのは盛大に笑い声をあげているフリードだった。

「やあ、やあ、やあ♪ ご機嫌麗しゅう、クソ悪魔ども♪ うちのボス、このイカれ具合がステキで最高でしょお♪ 俺もついつい張り切っちゃうわけさ♪ こーんなご褒美まで頂いちやうしさあ♪」

そう言うと、フリードは神父服を前を開く。そこには左右に一本ずつ、剣が帯剣しており、手に持つエクスカリバーを加えて合計三本の剣をフリードは見せびらかす。

おいおい、あれはまさか全部エクスカリバーなのか!?

レンの話では、フリード以外の使い手は倒したということだったが、そのままフリードが所有者になったのか!

「むろん、もちろん、全部使えるハイパー状態なんですよ♪ 俺って最強お♪ ウフフフ
フフ♪ ああ、この『擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣』もツインテールのお姉さんからゲットさせていた
きやしたんで♪」

そう言つて腕に巻いていた紐を見せびらかしてきた。

よく見たらあれつて、イリナが腕に巻いてたやつじゃねえか！

エクスカリバー四本の使い手とか、どこまで面倒になる気だこいつ！

「そろそろ行くぞ、フリード。ジブラエルとバルパーが準備を終えている頃だろう」

「はいな、ボス！」

「戦争をしよう、魔王サーゼクス・ルシファアの妹、リアス・グレモリーよ！」

そう言うと、コカビエルが光の槍を無数に撃ち込んできた！

「皆、私と朱乃の後ろに！」

言われるがまま、俺たちは防御魔方陣を展開する部長と副部長の背後に飛び込む!

光の槍が止むと、すでにコカビエルとフリードはその場にいなかった!

駒王学園に向かったのか!

「あいつら、マジで学園を!?!」

「……いいえ、イツセー。学園を中心にと言っていたから、それだけではすみません。いいでしょうね……」

「……そうですわね。あのクラスの墮天使なら、この地方都市程度、滅ぼすことなど容易いでしょうね……」

——ッ! 俺の脳裏に吹き飛ばされる駒王町、イツセーの両親、松田や元浜たちがそれに巻き込まれてしまうイメージが浮かんでしまった!

「くっ! ふざけんな。ふざけるなよ、クソ墮天使! てめえの好き勝手にさせてたまるか!」

イツセーは戦争を起こしたいがためだけにこの町を破壊しようとするコカビエルに

怒りを募らせていた。

イツセーだけじゃない。この場にいる全員がコカビエルに怒りを抱いていた。

「朱乃。彼女らをソーナのところに連れて行って、事情を説明しつつ、彼女らをソーナに預けてちょうだい！ その後、すぐにお兄さまに打診を！」

「はい、部長！」

「他の皆は学園に向かうわよ！」

『はい、部長！』

ライニーたちを副部長に任せ、俺達は部長に続いて急いで学園に向かった！

L i f e . 2 3 決戦、駒王学園!

俺たちは現在、校門の前にいた。

そして、学園では副会長を除く生徒会総動員で学園全体に結界が張られていた。

「学園全体を結界で覆いました。よほどのことがない限り、外への被害は食い止められるはずですよ」

この結界は学園外への被害を抑えると同時に、これから起こることを外に出さないためのものだった。

「ありがとう。助かるわ、ソーナ」

「……ただし、現状が維持されていければの話です」

「……そうね」

部長と会長が苦い表情を浮かべていた。

実際、コカビエルクラスが暴れることを考えたら、正直心もとなかった。それでも、ないよりはマシだが………。

そこへ、医療設備のある会長の家で傷ついたライニーたちを診てくれていた副会長が戻ってきた。

イツセーがライニーたちの容態について訊く。

「副会長、イリナたちは!？」

「命に別状はありません。アルジエントさんの治癒のおかげです」

「………よかった」

副会長の報告にアーシアも安堵していた。

「明日夏」

「戻ったか、槐」

樹里さんにこの事態を報告に行っていた槐も戻ってきた。樹里さんを通じて、ギル

ドにも同様のことが伝わっているだろう。

「樹里さんはなんて?」

「……あまり増援は期待できないそうだ」

「……そうか」

原因はレンの情報にあつた『CBR』のせいだろう。この組織のせいで、はぐれになるハンターが増加傾向にある。しかも、そのボスがあつた『カラミティ・キング災禍の凶王』だという。その『カラミティ・キング災禍の凶王』がギルドや政府と繋がりとのことだ。そのせいで、本来ならはぐれ認定されるような奴らがはぐれ認定されずにいるみたいだ。そのことがあり、派遣できるハンターは信用における人物に限られてくる。だが、そういうハンターに限って、増加傾向にあるはぐれの対処で引つ張りだこなのが現状だ。

イリナ、ライニー、ユウナは眠っており、ゼノヴィア、アルミヤさんは行方知れずなために、教会側にこの事態を伝える者がいないので、教会側からの援軍も期待できない。

墮天使側も独断先行しているコカビエルを止めようとしている素振りもない。

こうなると、魔王が派遣してくれる援軍だけが頼りか……。

「私と眷属総動員でできるだけ結界の維持に努めます。……学園の崩壊は免れないかもしれないですね。耐え難いことですが……」

会長は目を細め、学園のほうを憎々しげに見つめる。

学園に被害が出るのは確定事項か……。

「そんなことはさせないわ。朱乃、お兄さまはなんて？」

「サーゼクスさまの軍勢はおよそ一時間程度で到着する予定だそうですわ」

「……一時間ね」

「一時間……。わかりました。その間、私たち生徒会はシトリー眷属の名にかけて、結界を張り続けてみせます」

会長の決意を聞き、部長も肚を決めた様子だった。

「さて、私の下僕悪魔たち。私たちはオフエンス、学園内に飛び込み、コカビエルの力の解放を阻止すること。ライザーとの一戦とは違い、命をかけた戦いになるでしょう。でも、私たちに死ぬことは許されないとわ！」

「「「はいー!」」」

イツセーたちの力強い返事を聞くと、部長が俺、千秋、鵜、燕、槐に言う。

「明日夏、千秋、鵜、燕、それから、夜刀神槐さん。本来ならこれは悪魔と堕天使の問題。だけど、正直に言うのと、あなたたちに力を貸してほしい。でも、敵の戦力は強大。もし、いやだと言うのなら、無理強いは——」

「——部長」

俺は部長の言葉を遮って言う。

「皆まで言わないでください。いまさら水くさいですよ。仲間がこの町のために戦っているのに、自分だけ逃げるなんてできません。覚悟はできてます」

千秋たちも強くうなずいて覚悟を示す。

「私もこんな事態見過ごせません。同じく覚悟はできてます」

槐も同様の覚悟のようだ。

俺たちの覚悟を聞くと、部長は学園を見据えて言う。

「皆、もう一度言うわ！ 死ぬことは許さない！ 生きて帰って、あの学園に通うわよ

！」

『はい！』

俺たちは部長の言葉に気合いの入った返事をし、結界の内側に入り込み、駒王学園に乗り込んだ！



校舎内を進んでコカビエルたちがいるというグラウンドに向かっている途中、部長が俺に言う。

「イツセー。あなたにはサポートに徹してもらおうわ」

「サポート?」

「高めた力をギフトの能力で譲渡してほしいの」

「そうか、素の俺がパワーアップするなんかよりも、俺よりも遥かに強い部長たちに譲渡したほうがずっといいからな。」

「なるほど、了解です」

「イツセーが力を譲渡できるようになるまで時間を稼ぐわよ」

部長が皆に言う。皆うなずいて了承した。

「イツセー」

「は、はい?」

「当てにしているわよ」

「はい!」

部長に力強く返事した俺は『女王』^{クイーン}へとプロモーションする。

グラウンドに着いた瞬間、俺は異様な光景に言葉を失った。

陸上競技場の中央に四本の剣が神々しい光を発しながら宙に浮いている。それを中央に怪しい魔方陣が陸上競技場全体に描かれており、四本の剣の近くにバルパー・ガリレイの姿があった。離れた場所では、フリードと、顔に見覚えのある男性が二人いた。確か、樹里さんに見せてもらった写真に写っていたカリス・パトゥーリアとベルティゴ・ノーティラスって奴だった。

それにしても、気になるのはあの魔方陣だ。一体、何をするつもりなんだ？

「四本のエクスカリバーをひとつにするのだそうだ。あの男の念願らしくてな」

上空から俺の疑問に答える声が聞こえ、俺たちは一齐に上空を見る！ そこには、なんらかの術で浮いた椅子に座ってこちらを見下ろしているコカビエルがいた！

その傍らには翼が八枚もある墮天使もいた！

「お初にお目にかかります。私はコカビエルさまの右腕を務めておりますジブラエルと申します」

丁寧にお辞儀をして挨拶するジブラエルと名乗った墮天使。

こっちもコカビエルに負けず劣らずのプレッシャーを放っていた！
だけど、墮天使は二人以外にはいなかった。

レンからの情報じゃ、結構な数の墮天使がこの件に関わっているって言うてたのに。
それに、フリードたち以外のはぐれたたちの姿も見えなかった。

俺の疑問に感づいたのか、ジブラエルが言う。

「他の者たちは、総力をあげて『閃刃』殿と『鍊鉄の劍聖』殿の相手を任せております。
現状、一番の脅威になり得るのはあのお二方ですからね」

閃刃？ 鍊鉄の劍聖？ もしかして、レンとアルミヤさんのことか？

「そんなことよりも、サーゼクスは来るのか？ それともセラフォルか？」
「お兄さまとレヴィアタンさまの代わりに私たちが——」

パチン。

だった。

う、嘘だろ……。あ、あんなのまともにくらったら……。

『ビビってるのか、相棒?』

ドライグが茶化すように語りかけてくる。

あんなデケエ光の槍、見たことねえぞ! 次元が違うじゃねえか!

『ああ、次元が違うさ。あいつは過去の魔王たちと神を相手に戦い、生き残った男だからな』

……そんな奴に勝てるのか?

『いざとなったら、おまえの体の大半をドラゴンにしても勝たせてやるさ。倒せないまでも一時間動けないぐらいのダメージは残してやる。あとは魔王に任せればいい』

大半ねえ……。そういうレベルってことかよ……。

部長が忌々しそうに言う。

「え？」

「冥界の門に生息する地獄の番犬ですわ！ 人間界に持ち込むなんて！」

朱乃さんの説明を聞き、身震いする。

「彼らともぜひ遊んであげてください」

カリスがそう言うのと、複数の魔方陣が展開され、そこから明らかに正常じゃない人々が現れた！ その数は三十は下らない！

あれが明日夏たちが言っていた動く死体ってやつかよ！

「ケルベロスの相手は私と朱乃と小猫がするわ！ 行くわよ、朱乃、小猫！」

「はい、部長！」

部長は朱乃さんと小猫ちゃんを連れてケルベロスに立ち向かっていく。

「イツセーは神セイクリッド・ギア器ステッド・ギアでパワーの強化を！」

「はい、部長！ 『赤龍帝の籠手』 ツ！」

『ブースト
Boost!』

籠手を出し、倍加をスタートさせる。

「アーシアは後方で待機しつつ、傷ついた者の治癒を！」

「わかりました！」

「明日夏たちにはあの死人たちのことをお願いするわ！」

『了解!』

明日夏たちは散開して死人たちに向かっていく。明日夏が言うには、あの死人は五臓と丹田の六ヶ所どれかがカリスの神セイクリッド・ギア器ステッド・ギアの力を受信しているの、そこを叩けばいいらしい。でも、そうしないと、倒してもすぐにカリスに修復されてまた動きだしてしまふとのこと。もし、俺のほうに来たら、そこを気をつけないとな。

「アーシア、下がってろ！」

「は、はい！」

アーシアを守るように俺の後ろに下がらせる。

なーに、大丈夫。あんなワン公、部長と朱乃さんがすぐに躡ってくれるし、あのゾンビたちだって、明日夏たちの敵じゃねえよ。

ケルペロスが口から炎を吐いて、飛んでいる部長と朱乃さんを狙い撃ちする！

「はッー！」

朱乃さんが瞬時に炎を凍らせた。

「はあッー！」

すかさず、部長の滅びの魔力がケルペロスに放たれ、ケルペロスが吹っ飛んだ。

もう一匹のケルペロスが部長に飛びかかるが、小猫ちゃんがカバーに入り、ケルペロ

スに踵落としを叩きこんだ。

「もう一撃！」

小猫ちゃんの攻撃で怯んでいるケルベロスに朱乃さんの雷が命中する。

だけど、部長の魔力をくらった奴も朱乃さんの雷をくらった奴も、ピンピンしていた。なんてタフな奴なんだ！

明日夏たちのほうは、危なげなく、死人たちを倒していた。こっちはなんとかかなりそうだな。

「では、少し手を加えますか」

そう思った俺の安心を打ち砕くように、死人たちの肉体が変異し始めた！

これも明日夏から聞いてたけど、実際に見ると、気持ち悪いな……。

変異して手強くなった死人たちだったが、やはり弱点がわかってることが大きいのか、明日たちが苦戦することはなかった。だけど、いかんせん、数が多い！

倒しても倒しても、すぐさまカリスによって新しい死人たちが追加されてしまう。そ

の追加はとどまることを知らない。どんだけいるんだよ!

『ブースト!』

まだだ。譲渡するには全然足りねえ! クソツ、俺がもつと強ければ、あつというまにみんなを強化できるのに!

「きゃあああああつ!?!」

アーシアの悲鳴が聞こえ、慌てて振り向くと、俺とアーシアを睨んでいるケルベロスがいた!

ケルベロスがアーシアに向けて炎を吐く!

「くっ!」

俺はアーシアを抱えて間一髪でその場から飛び退いた。

もう一匹いたのかよ!

『ブースト！』

クソツ、戦おうにも、攻撃しても、されてもパワーの倍増がリセットされちゃうし………。他のみんなは自分の相手で手一杯だろう……。……。だけど、このままだとアーシアが危険だった。だったら――。

「俺が引き付ける！ アーシアは逃げる！」

「え、イツセーさん！」

攻撃を受けないように引きつける、これしかねえな！

俺はケルベロスに向かって駆けだす。

ガアオアアアアツ！

咆哮をあげて前足の爪で攻撃してきた！

「——ッ!」

なんとか飛んで避け、アーシアのいる方向とは逆の方向に向かって走ろうとすると、そこへ、小猫ちゃんがケルベロスに殴りかかってきた!

「小猫ちゃん!」

小猫ちゃんはケルベロスの首のひとつにしがみつきながら言う。

「ここは任せてください!」

「でも、小猫ちゃんだけじゃ!」

「……時間稼ぎくらいならできません!」

「小猫ちゃん……。わかった。頼む、小猫ちゃん!」

ケルベロスをお猫ちゃんに任せてその場から離れる。

ケルベロスがしがみついている小猫ちゃんを振り払おうと首を振るけど、小猫ちゃんも『戦車』の力であつしりと離れなかった。

すると、他の首が小猫ちゃんに噛みつこうとしたけど、小猫ちゃんの抵抗で誤って首に噛みついてしまい、それに怒った首同士でケンカを始めていた。

「——つて、うおっ!?!」

死人が俺の前方に回り込んで襲いかかってきた！ その数は五！
なんとか攻撃は避けるけど、数がいるぶん、ケルベロスよりもキツかった。

「イツセー兄、伏せて！」

「——ッ！」

言われるままに伏せると、風を纏った千秋が風を纏わせた回し蹴りで死人たちをまとめて吹っ飛ばした！

「大丈夫、イツセー兄!?!」

「ああ、大丈夫だ！ ありがとう、千秋！」

千秋が吹っ飛ばした死人たちが起き上がり、また襲いかかってきた!

「はぁあッ!」

千秋は手元に風を集め、それを一気に放って、死人たちをまとめて遠くまで吹っ飛ばす。

吹っ飛ばされた死人たちの先には刀を構えた槐がいた。

「十の型——斬り嗣ぎ舞!」

槐の連続の斬撃が死人たちの弱点を正確に切り裂いた。

「ああっ!?!」

「——っ! 小猫ちゃん!?!」

ケルベロスの首にしがみついていた小猫ちゃんが振り落とされ、そこを別の首に噛みつかれた!

さらに別の首によって、小猫ちゃんがケルベロスの口の中に!

だけど、小猫ちゃんはなんとか足でケルベロスの口を強引にこじ開ける。

「……………うううっ！」

なんとか耐えていた小猫ちゃんだったが、傷の痛みがひどいのか、いつもの力があまり発揮されてなかった。

「させないー！」

千秋がすかさず、小猫ちゃんを食べようとしているケルベロスの目を矢で射る。

それに怯んだスキをつけて、小猫ちゃんがケルベロスの口から脱出し、仕返しとばかりにもう片方の目に蹴りを入れた。

さすがに三つある首の中のひとつだけとはいえ、両目を潰されたのが堪えたのか、ケルベロスが倒れこむ。

「小猫ちゃんー！」

そのスキにアーシアが小猫ちゃんのもとに走ってきて、小猫の傷の手当てをする。

「ここからは任せろ！ アーシア、小猫ちゃんを頼む！ 千秋は二人の護衛を！」

俺はケルベロスの前に躍り出て挑発してやる。

グルルルッ！

お、怒った怒った。

俺はそのままアーシアたちから引き離すようにケルベロスを引きつける。

あとは時間まで俺がこいつを誘き寄せとくしかねえな！

途中、死人たちも襲いかかってきたけど、ケルベロスが敵味方区別することなく攻撃してくるので、死人たちがケルベロスに吹っ飛ばされていた。おかげで、死人たちのことはあんまり気にせずに済んだ。

『ブースト！』

これで九回目！ だけど、まだ足りない！ もっともっとパワーを溜めねえと！

「イツセーさん、危ない！」

「——ッ!?!」

アーシアの叫びが聞こえてくると同時にケルベロスが俺を飛び越して先回りしやがった！

マズい！

「イツセー、かまわずに一度自分の力を高めなさい！」

部長の指示が飛んできたけど、すでにケルベロスが飛びかかってきていて間に合わない！

覚悟を決めたときだった。

ズバツ！

ケルベロスの首がひとつ宙に舞った!

「加勢に来たぞ」

「ゼノヴィア!」

首を斬られたケルベロスの背後にエクスカリバーを振るっていたゼノヴィアがいた。そのままゼノヴィアは首をひとつ失って絶叫をあげているケルベロスの胴体を両断した。

斬られたケルベロスは塵となって霧散してしまった。

「流石、魔物に無類のダメージを与える聖剣ですわね」

「悔しいけど、来てくれたのはありがたいわ」

部長も朱乃さんもゼノヴィアの加勢に嬉しそうな表情を浮かべていた。

ゼノヴィアはそのまま部長と朱乃さんが相手している二匹のうちの一匹のケルベロスに一気に近づく。

「はあああッ!!」

ズバアッ!

ケルベロスはゼノヴィアによって頭から真つ二つに切り裂かれた。

ス、スゲエ……。改めて、エクスカリバーのスゴさと恐ろしさを実感しちまつた。

「——ッ! なんだ!?!」

突然、籠手の宝玉が点滅する!

『戦闘中の適正な倍加が完了した合図だ』

俺の疑問にドライグが答えてくれた。

そんな便利機能があったのかよ! いままでそんなのなかったぞ!

『おまえも神セイクリッド・ギア 器も日々成長する。おまえの望むことを実現してくれたのさ』

確かに、イリナとの戦いのあとに、どこまで倍増すればいいかわからないことに悩んでたけど、その想いに『赤龍帝の籠手ブーステッド・ギア』が答えてくれたってことか。そりゃ、結構なことだ。

俺は部長と朱乃さんに向かって叫ぶ。

「部長！ 朱乃さん！ 行きますす！」

「イツセー！」

「イツセーくん！」

部長と朱乃さんも待つてましたつと言わんばかりの顔をして俺のほうに飛んできてくれた。

『ブーステッド・ギア・ギフト
赤龍帝からの贈り物』！』

『トランスファー
Transfer!!』

部長と朱乃さんに力が譲渡され一気にオーラが膨れ上がった！

「——いけるわ！」

「ええ！」

「朱乃！」

「はい！ 天雷よ！ 鳴り響け！」

朱乃さんの手元にとてつもない雷が立ちのぼる。

ヤバいと察したのか最後のケルベロスが逃げだした！

ザシュザシュツ！

逃げだしたケルベロスだったが、突然地面から生えだした複数の剣によって串刺しにされ、動きを封じらてしまった。

「逃がさないよ」

そこに現れたのは俺たちの『騎士^{ナイト}』だった。

ゼノヴィアといい、おまえといい、グッドなタイミングで駆けつけやがって!

「きゃああああつ?!」

またアーシアの悲鳴が聞こえ、アーシアたちのいるほうを見ると、ケルベロスが一匹アーシアたちに襲いかかろうとしていた! まだいんのかよ!

千秋と小猫ちゃんがアーシアを守ろうと前に出たときだった。

「——もう見飽きてんだよ! 緋^{スカレット・フレイム}い龍撃!」

上空から明日夏がオーラの一撃でケルベロスを地面に叩きつけた。

「いまだ、鵜、塔城! やれ!」

「りよ〜か〜い!」

「はい!」

叩きつけられたケルベロスを鷲さんと小猫ちゃんが協力して持ち上げる。

「やあああああッ！」

二人はそのまま剣で串刺しにされているケルベロスのところまで投げ飛ばしてしまった！

「朱乃！」

「はい、部長！」

二匹のケルベロスの頭上からレーティングゲームのとき以上の特大の雷が降り注いだ！

ケルベロス二匹は断末魔をかき消され、跡形もなく消し飛んだ。

ついでにあの死人たちも何体か巻き込まれて一緒に消滅していた。

「なかなかいい見世物だったぞ」

朱乃さんのあの一撃を見ても、コカビエルは余裕そうだった。

「くらいなさい!」

部長の手から強大な魔力が撃ちだされた! デカイ!
強大な部長の魔力がコカビエルに迫る。

「フッ」

強大な部長の魔力をコカビエルは片手であっさりと受け止め、薙ぐだけで軌道を逸らされてしまった!

軌道をずらされた魔力はテニスコートに直撃する。

ドゴオオオオオン!

テニスコートが消し飛んで、巨大なクレーターができてしまった。

嘘だろ！ 部長のあんなにデカイ魔力を片手だけでなんて！

「なるほど。赤龍帝の力があれば、ここまで力が引き上がるか。おもしろい。これは酷くおもしろいぞ」

コカビエルは手のひらから立ちのぼる煙を見て楽しそうに笑みを浮かべて哄笑をあげていた。

「——完成だ！」

陸上競技場の中央にあった四本のエクスカリバーから眩い光が発せられた！

「ハハハハハ！ これでついに！」

四本のエクスカリバーが光の中でひとつに重なっていく。

「四本のエクスカリバーがひとつに！」

陸上競技場の中央にあったのは青白いオーラを放つ一本の聖剣だった。

さらに、光が陸上競技場全体に描かれていた魔方阵に流れこみ、魔方阵が輝き始めた。

「剣が統合されるときに生じる膨大な力を俺が頂く。そういう取引でな」

「……………その力を利用して大地崩壊の術をかけた!」

俺たちは部長の言葉に衝撃を受ける!

マジか! マジで俺の町が! 俺たちの住む町まちが消えちまうつてのかよ!?

「ハハハ、ここから逃げるがよい。あと二十分もしないうちにこの町は崩壊する」

さらにバルパーが衝撃の事実を口にした!

そんな、あと二十分つて、サーゼクスさまの援軍が間に合わねえじゃねえか!?

「防ぎたかったら、俺を倒すしかないぞ。どうする? リアス・グレモリー!」

Life. 24 エクスカリバーを折れ！

己が座っていた椅子を消し、十枚の黒い翼を広げたコカビエルは部長を挑発する。

「さあ、どうするのだ、リアス・グレモリー！」

「知れたことを！」

「はッ！」

部長はもう一度魔力を放ち、反対の方向から副部長が雷撃を放つ。イツセーの『譲渡』の影響でどちらも十分強大だった。

「フッ」

だが、コカビエルはまたしてもそれを片手で受け止めてしまう。さらには二人の攻撃を無理矢理融合させてひとつの強大な魔力の塊にしてしまう！

「バカめ!」

コカビエルはその魔力を部長に向けて投げつける!

「部長!」

副部長が部長の前に出て防御魔方陣を展開する。

「きゃあああああっ!?!」

だが、もともと強大だった二人の攻撃を融合させた魔力の塊のパワーは副部長の防御魔方陣を易々と突破してしまう!

幸い、部長は防御魔方陣で威力を落とされたことと副部長が盾になったことで軽傷で済んだ。

だが、盾になった副部長は重傷を負い、上空から墜落してしまう!

「朱乃さあぁん！」

間一髪のところまでイツセーが副部長を受け止めたことで大事に至らなかった。

「ほい、まずは二匹」

そこへ、ベルが二人に斬りかかる！

「ふっ！」

「おっと」

すかさず、俺はイツセーとベルの間に入って雷ライトニングスラッシュ 刃でベルのナイフを止める！

「イツセー、こいつは俺に任せて、早く副部長をアーシアのところに行！」

「わかった！」

イツセーは副部長を抱きあげ、アーシアのところまに向かってこの場から離れる。

「よー、ライとユウちゃんは元気か？ それとも、死んじゃったか？」

「……よく休んでもらってるよ！ おまえのおかげでな！」

「そうかよー！」

俺はベルを押しだし、体勢を崩してやる！

すかさず、俺は斬りかかるが、奴の血が刃の鞭となつて襲いかかってくる！

初見ならともかく、種がわかつてれば！

俺はオーラで奴の血を消し飛ばす！

「ちえ、おまえといい、あの剣士といい、ブラッド・アーツ血の力と相性が最悪だな。しかもあの剣士に

いたつてはなんなんだよ、あのでたらめな強さ？ 人間のレベルを軽く越えてるぞ？

俺、思わずヤバそうだって逃げ帰っちまったんだからな」

普段は飄々としてたベルがレンの強さに軽く戦慄していた。

こいつと共感したくはないが同感だな。俺から見ても、レンの実力はでたらめに感じる。あれでBランクなんだから、Aランクはどんだけバケモンなんだって話だ。

「ま、おまえ相手なら血ブラッド・アーツの力なしでもやれそうだがな！」

ベルはナイフ二刀流で緩急を入れた素早い動きで斬りかかってくる！

「Aアtタtタaクcクkク！」

ライトニングスラッシュ

雷 刃で身体強化し、こちらにもナイフ二刀流で迎え撃つ！

なめられた言い分だが、実際のところ身体強化してもベルの動きのほうが圧倒的に速かった！

クソツ！ 鍛え、強化してると言っても、こちらはただの人間に対し、向こうは真偽はともかく悪魔と呼ばれる存在。技術はともかく、身体能力の差がデカかった！

一対一サシで戦えばな——。

「一の型——疾風！」

斬り合いのなか、初っぱなから『鍊域』状態の槐が斬り込んできた！

「危ね！」

首を狙った斬撃を身を捻るだけで躲すベル。
だが、『錬域』状態の槐の猛攻は止まらない。

「二の型——螺旋撃！ 八の型——獣爪撃！ 九の型——双龍撃！」
「結構キツっ！」

怒涛の連続剣技にベルは防戦一方だった。

「なめんな！」

ベルは槐の斬撃を防ぎつつも血の刃で反撃する。

「させるか！」

「げっ！」

俺はオーラでベルの血の刃を消し飛ばす！

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

槐が怒涛の連続斬りを繰りだし、俺も槐の動きに合わせてナイフで斬りかかる！

狙うは首！

高い生命力と治癒力を持つ^{ブラッド・チルドレン}血の悪魔の子供たちであろうとも、首を切り落とせば関係ない！

「チイツ！」

ベルは血の刃で斬りかかってくるが、俺もナイフで斬りかかりながらもオーラで奴の血を消し飛ばす！

『へへ、初めての共同作業ってやつだな』

ドレイクが茶化すように言う。

黙ってオーラの操作に集中してろ！

『ちえ、俺のサポートを受けておいて偉そうにしやがって』

ドレイクの言う通り、いまの段階の俺ではこんな芸当はできない。ドレイクにオーラの操作を任せることでできた芸当だった。

この間のように代償を支払わせられるかもしれないが、状況が状況だ。そのへんの覚悟を決めて、戦闘前にドレイクと取引していた。

おかげで余分な消耗が抑えられて、さつきもそこまでの消耗もなくスムーズにスカーレット・フレーム緋い龍撃を撃てた。

——ついでにドレイクに奥の手も用意してもらった。

………俺、この戦いが終わったあと普通に生活できるのか………。

先の不安があるが、いまは置いておく。目の前の敵に集中だ！

槐の『錬域』状態はそんなに長くはもたない。前の戦いの消耗も完全に回復してないからな。

だが、この際消耗覚悟で速攻だ！

高い生命力と治癒力を持つベルを相手に長期戦は不利。現にベルは防戦一方だが俺たちの猛攻を最低限のレベルでしのいでいる。温存を気にしてはかえって消耗する。速攻で行ったほうが結果的に消耗は抑えられるはずだった。

「おらよッー！」

「——ッ!?!」

ベルの体の至るところから血の刃が生えてきた！

「くっー！」

俺と槐はかろうじて血の刃を防ぎつつ後退する。

「いつてえええつ．．．．．。これやると結構キツツいんだよなあ．．．．．」

ベルはふらふらになりながらぼやいていた。

奴の血の力は血の悪魔の子供たちにも聖なる武具と同じダメージを与える。自分の

身だろうと、それは例外ではないというわけか。

「——つたく、ライとの戦いのダメージが回復しきってないのが痛いな」

やっぱりか。どうもライニーと戦ったときのような動きのキレがないなどは思っていたが、やはりライニーとの戦いのダメージが回復しきっていなかったのか。

「・・・・・・・・フェニックスの涙を使わないのか？」

「・・・・・・・・残念ながら、数に限りがあるからって、コカビエルとジブラエルの旦那方とエクスカリバーの使い手に一個ずつしか配られなかったんだよ」

奴の言うことを信じれば、フリード、ジブラエル、コカビエルは確実に持っているというわけか。複数持つてることを想定していたこともあり、ひとつしか持っていないことは少し朗報だな。・・・・・・・・一番厄介な奴がフェニックスの涙を持っているという事実は変わらないが。

とりあえずいまは、弱ってるうちにこいつを仕留める！

俺と槐は同時に飛び出す！

「……さすがにこの状態で接近戦はキチーからな」

ベルがそう言った瞬間、地面から血の刃が顎のように襲いかかってきた！

「なめるな！ スカーレット・フレイム 緋い龍撃！」

自在に操れる以上、こういう仕掛けをしてくることを想定していた俺は地面に向けて
スカーレット・フレイム 緋い龍撃を叩きこみ、周囲の地面ごとベルの血を吹っ飛ばす！

そして、スカーレット・フレイム 槐は緋い龍撃の衝撃を突き抜けて一気にベルに接近する。

「おらよー！」

ベルは血の刃で槐を迎撃する。

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

槐も剣技で血の刃を迎撃する。

だが、槐の剣技ではベルの血を消し飛ばすことができないため、さらにはベルのナイフによる追撃で槐は防戦一方になってしまふ。

俺もすぐに加勢しなかったが、かなりの量の血を地面に仕込んでいたのか、さつきから血の刃が地面から襲いかかってきて、その対処に追われていて槐の援護ができなかった。

槐は一度態勢を立て直すために距離をとる。

そして、ベルは槐を逃がさんと追撃しようとする。

——想定内ということが進んでくれたな。

ズバツ!

「——ッ!？」

いつの間にかベルの背後に現れた燕がクナイでベルの両脚の腱を斬った!

事前にアイコンタクトでベルを奇襲してもらった算段をつけていたのだ。

腱を斬られたベルは立っていらなくなり、その場に膝をつく。さらに、血の刃の猛

攻も緩んだ。

その隙を逃さず、俺と槐は駆けだす！

「チツ！」

ベルは再び血の刃で俺と槐の進撃を阻む。

「スカーレット・フレイム緋い龍撃！」

俺はその攻撃をスカーレット・フレイム緋い龍撃で一気に吹き飛ばす！

「一の型——疾風！」

槐は高速でベルの背後に回った。

正面から斬りかかってくると踏んでいたであろうベルは意表をつかれ、致命的な隙を槐にさらした。

「二の型——螺旋撃！」

槐の回転斬りがベルの首を捉えた。

「——ッ!?!」

だが、ベルは血で首を覆っており、槐の刃が阻まれてしまった。
だが——。

「スカーレット——」

「——ッ!?!」

最大限にまでオーラを溜めた緋いスカーレット・フレイム龍撃を視界に捉え、ベルは初めて驚愕の表情を浮かべた。

既に槐と燕は離脱済みだった。

「やべ——」

「フレイム！」

最大パワーの緋スカレットい龍撃の直撃を受けて、ベルは彼方まで吹っ飛ばされ、校舎にの壁に激突した。

壁は崩れ、ベルはその瓦礫に埋まってしまった。

俺たちは警戒を解かず、ベルが埋まった瓦礫を注視するが、瓦礫からベルが出てくることはなかった。

手応えは十分。並みの異形でも確実に死んでる威力なのは間違いないかった。

それでも、俺たちはベルを警戒する。

ふと、俺の視界の端に死人たちを突破し、バルパーにゆっくり近づくと木場の姿が入った。

「——バルパー・ガレイ。僕は聖剣計画の生き残り——いや、正確にはあなたに殺された身だ。悪魔に転生したことでこうして生き永らえた。僕は死ぬわけにはいかなかったからね。死んでいった同士の仇を討つために！」

怒りと憎しみを吼え、木場はバルパー目掛けて駆けだす。

だが、そんな木場めがけて、ジブラエルが光の槍を放った！ マズい！

「危ない！ 祐斗！」

「避ける、木場！」

俺と部長の叫びもむなしく、木場の周囲を爆発が包みこんだ！

「スキだらけだったので、攻撃しましたが……直撃は避けましたか」

巻きあげられた粉塵の中で木場がうつ伏せで倒れているのが見えた。どうやら大事には至っていないようだ。

おそらく、『騎士^{ナイト}』のスピードでギリギリ致命傷は避けたのだろう。

「ジブラエル。おまえは手を出すな。カリス、おまえの趣味の悪いおもちゃも下がらせろ」

「ハッ」

「仰せのままに」

コカビエルの命令を受け、ジブラエルは礼をしつつ下がり、カリスは死人たちを転移でこの場から退去させる。

「フリード」

「はいな、ボス」

「最後の余興だ。四本の力を得たエクスカリバーでこいつらをまとめて始末してみせろ」

「へへーい」

コカビエルの命令を受けて、フリードがわざとらしく恭しい動作でエクスカリバーを両手に取る。

「チョー素敵仕様になったエクスなカリバーちゃあん、確かに配慮しましたでございませう。さーてー、誰から殺つちやいましょうかねえ？」

フリードは値踏みするように俺たち一人ずつ交互に視線を向ける。

「ムヒヒヒ！ んじゃ、ちよつくらクソビッチ信徒でもチョッパーしますかねえ！」

最初にターゲットにされたのはゼノヴィアだった。

「はあッ！」

ターゲットにされると同時にゼノヴィアはフリードに斬りかかる。

「ぎくんねん♪」

「——ッ!？」

だが、ゼノヴィアが斬るかかる瞬間、フリードの姿が消えた。

「ご存知、ちよつぱや天ラビッドリィ閃ちやんっスよお♪」

高速で動くフリードをゼノヴィアは追いきれていなかった。

「できたてホヤホヤの超スゲエクスカリバーちゃんなんでもありありい♪」

ゼノヴィアの背後にフリードが現れ、フリードはゼノヴィアに斬りかかる！

「あれえ!？」

だが、ゼノヴィアも即座に反応して前方に飛んで倒立しつつフリードの斬撃を躲した。

「だあッ!」

「オホアアアッ!？」

ゼノヴィアはそのまま倒立の体勢のままフリードの顔面に蹴りを入れた。

「カアアアッ! こんのクソビッチ! よくもよくもよくも、俺さまの顔を足蹴にしやがったなあ! ぜってえてめえをひん剥いて素肌をズタズタにしてやるう!」

怒ったフリードのエクスカリバーの刀身が伸び始めた！ あれはイリナのエクスカリバーの力か！

統合された四本のエクスカリバーの能力をすべて使えるってわけか！

ゼノヴィアは伸びてきた刀身を飛んで躲す。

「擬態^{ミミツク}だけじゃねえんだよ！ 透^{トランスペアレンシー}！ イヤッホー♪」

伸びていた刀身が無数に枝分かれし、さらには刀身が透明化した！

「十の型——斬り嗣ぎ舞！」

ゼノヴィアの前に槐が降り立ち、刀を振るうと、激しい金属音が連続で鳴り響いた！

「おいおい、マジですかあ!?! 透明なのに見えるのかよ!?!」

「貴様の殺気はわかりやすいからな」

「だったらこれでどうだあ！」

フリードが叫ぶと、フリードが無数に分裂した！

『エクスカリバー・ナイフ・トムヤ夢幻の聖剣の力っス！ ババンバンバン♪』

夢幻——幻術による分身か！

「ズキューン！」

だが！

「俺たちを——」

俺は分身すべてにナイフを投擲する。

ナイフは偽物をすり抜け、本物はナイフを弾いた。

だが、これで本体はわかった！

「忘れんじやねえぜ！」

「オホオオオツ!!」

塔城に投げ飛ばされたイツセーが本体のフリードを蹴り飛ばす!

四本のエクスカリバーの能力を持った聖剣を持つことでさらに厄介になるかと思っただが、有頂天なってるせいか能力の使い方が単調だった。それに下手に複数の能力を得たことで、器用貧乏になっていた。これならなんとかかなりそうだ。

だが、奴の戦闘センスは天才的だ。時間をかければ慣れて厄介になるだろう。その前に倒す!

身構える俺の視界の端で、ボロボロながらもなんとか立ち上がろうとする木場の元へバルパーが歩み寄っていくのが見えた。

「被験者が一人脱走したままと聞いていたが卑しくも悪魔に堕ちておったか。キミらには感謝している。おかげで計画は完成したのだからな」

「………完成?」

バルパーの言葉に木場は怪訝な様子だった。

木場たちの研究は失敗したから、バルパーは木場たちを処分した。なのに、それが完
成だと？

木場の事情を知っている皆がバルパーの言葉に訝しげになっていた。

「——私はね、聖剣が好きなのだよ。幼少の頃、エクスカリパーの伝記に心を躍らせ、聖
剣を扱う自分を夢にまで見るほどに。だからこそ、自分に聖剣使いの適正が無いと知っ
たときの絶望といったらなかつた……。だから、自分では扱えないからこそ、扱
える者に憧れを抱き、聖剣を扱える者を人工的に創りだす研究に没頭するようになった。
そしてその結果、聖剣を扱うには特殊な因子が必要であることがわかつたのだよ。
ましてやエクスカリパークラスとなると、必要な因子も多くなる。キミたち被験者には
因子こそあれど、聖剣を扱えるまでの数値を示さなかつた。そこでひとつの結論に至つ
た。——被験者から因子だけを抜き出せばよいとな。そして、結晶化することに成功し
たのだ。これはあのとときの因子を結晶化したものだ。フリードたちに使つて最後のひ
とつになつてしまつたがね」

バルパーが懐からその結晶らしきものを取り出した。

「ヒヤツハハハハハ！ 俺以外の奴らは途中で体が因子に着いていけなくなって余命僅かになってたんだぜ！ そう考えるとやっぱ俺ってつくづくスペシャル仕様ザンスねえ！」

フリードが愉快そうに醜悪な笑い声を揚げながら言う。

「………聖剣使いが祝福を受けるとき、あのようなものを体に入れられるが——因子の不足分を補っていたというわけか」

ゼノヴィアの指摘にバルパーが怒りながらも愉快そうに吐き捨てる。

「偽善者めらが。私を異端として排除しておきながら、厚かましく私の研究だけは利用しよつて。どうせ、あのミカエルのことだ、被験者から因子を抜き出しても、殺していいだろうがな。ベルたちが使っている武装十字器クross・ギアも元々はそういう犠牲を出さないために創られたのだからな」

武装十字器クross・ギアにそんな事情があったのか。

「・・・・・・・・なら、僕らも殺す必要はなかったはずだ！ どうして!？」

「おまえらは極秘計画の実験材料にすぎん。用済みになれば廃棄するしかなかるう？」

バルパーのあまりの言い草に木場は呆然と呟く。

「・・・・・・・・僕たちは主のためと信じて、ずっと耐えてきた。・・・・・・・・それを・・・・・・・・それを・・・・・・・・実験材料に・・・・・・・・廃棄・・・・・・・・」

戦場を悲しみが包み込んだ。

「・・・・・・・・酷い」

部長と副部長の傍にいるアーシアは、涙とともに胸の内を漏らす。

バルパーは持っていた結晶を木場の足元に投げ捨てる。

「ほしければくれてやる。もはやさらに完成度の高めたものを量産できる段階まで来て

いるのでな。貴様らが見てきたあの聖剣使いたちがその研究成果だ」

あの聖剣使いたちもフリードと同じように因子を入れられたのか。

「待て！　ならあの聖剣使いたちの因子はどこから?」

槐があの聖剣使いたちの因子のことを叫びながら訊いた。

そうだ。因子を他から補填する以上、因子を抜かれる存在がいるはずだ。

「ああそれなら、カリスが所属する『C B R』から量産聖剣と一緒に身寄りのない子供を大勢提供してくれたのだよ。おかげで研究は飛躍的に進んだよ」

「その子供たちはどうした!？」

「さあな。因子を取り出してしまえば用済みだったからな。そのへんはカリスに訊くがよ」

俺たちはカリスのほうを見ると、奴は淡々と答える。

「もちろん、廃棄なんてもつたないことはしてませんよ。『CBR』が抱える施設に入れていますよ」

「もつたない」という単語からいやな想像しかできなかつた。そしてカリスはその想像どおりの内容を話す。

「そこではテロリストに売る兵士に仕立てるための洗脳教育を施したり、様々な実験の被研体にしたたりなど、あなたたちの感性で言うところの非道なことをしていますよ」

「外道が！」

あまりに非道な行為を行う非道な連中に、槐は怒りで『錬域』状態が解除されるぐらいにまで憤怒していた。

「てめえら、マジで許せねえ！」

怒りに震えるイツセーがこの場にいる皆の気持ちを代弁してくれた。

「・・・・・・・・皆・・・・・・・・」

木場は足元に転がる因子の結晶を哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに手に取った。その頬には涙が伝っていた。

木場はその結晶を元となった同士たちのために祈るように両手で握り締めた。

「・・・・・・・・バルパー・ガリレイ。あなたは自分の研究、欲望のためにどれだけの命を弄んだ・・・・・・・・？」

そのときだった。木場が握り締める結晶から淡い光が発せられ、木場を囲うように広がっていく。光は徐々に人の形を成していき、やがて、青白い輝きを放つ無数の少年少女の姿になった。

あれはまさか――。

「おそらく、この戦場に漂う様々な力が、そして、裕斗くんの心の震えが結晶から魂を解き放ったのですわ」

副部長が目の前で起こつてゐる現象について説明してくれた。

「……皆！……僕は……ずっと……ずっと思つてたんだ。僕が……僕だけが生きていいのかつて！僕よりも夢を持った子がいた。僕よりも生きたかつた子がいた。僕だけが！平和な暮らしを過ごしていいのかつて！」

木場が抱えていた思いの丈をすべて吐き出した瞬間、清らかで、そして、透き通つた歌声がグラウンドに響き渡つた。

「これは——聖歌か？」

「——はい、そうです」

俺の呟きにアーシアが答えてくれた。

やがて、一人の少女の霊体が木場の袖口を優しく引つ張り、木場が振り向くと、優しく微笑んで口を動かした。

——私たちのことはもういい。あなただけでも生きて。

それを皮切りに少年少女たちの霊体が光の粒子になって木場の周囲を漂いながら木場に語りかける。

『大丈夫——』

『みんな集まれば——』

『受け入れて——』

『僕たちを——』

『怖くない。たとえ神がいなくても——』

『神様が見てなくても——』

『僕たちの心はいつだって——』

「——ひとつ」

少年少女たちの言葉に木場が涙を流しながら答えた。

「温かい……」

「うん、温かいね……」

塔城や鶴の言うとおりに、聖歌もこの光もとっても温かった。
この温かさは彼らの想い——。

「——っ？　これは？」

「なんだ？　涙が……止まらねえ！」

いつの間にか、俺もイツセーも、そして、槐、オカルト研究部の皆が涙を流していた。
やがて、光の粒子が木場に吸い寄せられるように木場を包み込んだ。

『こりや、至ったな』

唐突にドレイクが語りかけてきた。

至ったって、まさか！

『ああ。所有者の想いが、願いがこの世界の流れに逆らうほどの劇的な転じかたをした

ときに神セイクリッド・ギア器は至る。それが――』

――フランス・ブレイカー
禁手。

「――同士たちは僕に復讐を願ってなんかいなかった。願ってなかったんだ。でも、僕は目の前の邪悪を打ち倒さなければならない。第二、第三の僕たちを産みださないために――」

木場は手元に剣を生みだし、切っ先をバルパーに向ける。その瞳には憎悪の色はなく、代わりに強烈なまでの覚悟が込められていた。

「ぐう！ フリードオオツ！」

「はいな！」

木場に剣を、覚悟を込められた視線を向けられ、慌てたバルパーはフリードを呼び、応じたフリードが木場の前に立ち塞がる。

「ふん、愚か者めが。素直に廃棄されておけばよいものを」

フリードが来たことで余裕を取り戻したバルパーは木場を嘲笑う。

「木場アアアアッ！ フリードの野郎とエクスカリバーをぶつ叩けえええっ！ あいつらの想いと魂を無駄にすんなあ！」

「やりなさい裕斗！ あなたはこのリアス・グレモリーの眷属。私の『騎士』^{ナイト}はエクスカリバーごときに負けはしないわ！」

「やれ、木場！ いまのおまえなら、エクスカリバーに勝てる！ そんな三流剣士^ごごととつとつぶつた斬れ！」

「裕斗くん、信じてますわよ！」

「フアイトです！」

「木場さん！」

「木場先輩、行ってください！」

「木場先輩！」

「フアイト〜！」

俺たちオカルト研究部の声援を聞き、フリードが不快そうに言う。

「あくあ、なくに感動シーン作っちゃってんスカあ？ ああもう、聞くだけでお肌ガサついちゃう！ もうげんか〜い！ とつとつとてめえら切り刻んで気分爽快になりましようかねえ！」

木場は決意を込めた眼差しで手に持つ剣を頭上に掲げる。

「——僕は剣になる。僕の魂と融合した同士たちよ、一緒に超えよう。あのとき果たせなかつた想いを、願いを、いま！ 部長、そして仲間たちの剣となる！ 『魔劍創造』ツ！」

木場の剣から凄まじい魔なる波動と聖なる波動の渦が巻き起こり、それは交じり合い融合していく。

「——『ソード・オブ・ビトレイヤ双覇の聖魔劍』。聖と魔を有する剣の力、受け止めるといい！」

やがて木場の手元に現れたのは、神々しい輝きと禍々しいオーラを放つ一本の剣。

「聖魔融合の剣ですって!？」

目の前で起こった現象に部長は驚愕していた。

当然だ。聖と魔、この二つは相反する存在。決して交わることはないものだった。だが、それを可能にしてしまう奇跡、それが禁^{バランズ・ブレイカー}手だった。あれが木場が至った禁手。

「聖魔剣だと!？」 ありえない!？ 反発する二つの要素が混じり合うことなど、そんなこと、あるはずがないのだ!？」

「ほお、なかなかおもしろい現象が起きましたね。非常に興味深い」

目の前で起こった奇跡に慌てるバルパーに対し、カリスは興味深そうにしていた。
ゼノヴィアが木場の隣に立つ。

「リアス・グレモリーの『騎士^{ナイト}』よ。まだ共同戦線は生きているか?」

「だと思いたいね」

「ならば、共に破壊しよう。あのエクスカリバーを」

「いいのかい？」

「もはや、あれは聖剣であって、聖剣ではない。異形の剣だ」

「わかった」

ゼノヴィアは手に持つエクスカリバーを地面に突き刺すと、右手を宙に伸ばす。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして、聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

何かの言霊に応じて、宙に浮き出た魔方陣から過剰にも思えるほどに鎖を巻きつけられた一本の剣が出てくる。

「この刃に宿りしセントの御名において、我は解放する！」

ゼノヴィアが剣の柄を握った瞬間、巻きついてきた鎖が砕け、ゼノヴィアは剣を引き抜くとその剣の名を告げた。

「聖劍デュランダール！」

聖劍デュランダール!? この世のすべてを切り刻むと云われているエクスカリバーに並ぶ聖劍! 切れ味だけならエクスカリバー以上とも言われている! エクスカリバーだけでなく、デュランダールまで出てくるとは……。

デュランダールの登場にバルパーは驚きを隠せないでいた。ゼノヴィアがデュランダールを手に行っていることが信じられないという様子だった。

「バカな!? 私の研究ではデュランダールを扱える領域にまで達していないぞ!」

「私はそいつやイリナと違い、数少ない天然物だ」

「完全な適性者! 真の聖劍使いだと言うのか!」

ゼノヴィアの言葉にバルパーは驚愕する。

「こいつはなんでも切り刻む暴君でね。私の言うこともろくに聞かない。それ故、異空間に閉じ込めておかないと危険極まりないんだ」

あんな封印みたいなことをしていたのはそのためか。

「そんなのアリですかあああつ?!」

「はあッ!」

バキヤアアアン!

フリードが刀身を伸ばしたり、枝分かれさせてゼノヴィアを攻撃するが、それらはゼノヴィアの一振りですぐに切り裂かれてしまった。

「ここに来てのチョー展開?!」

「所詮は折れた聖剣。このデュランダルの相手にはならない!」

「クソツタレエツ! そんな設定いらねえんだよお!」

フリードはゼノヴィアの攻撃を高速移動で避けるが、その先に同じく高速移動をしている木場が待ち構えていた。

「そんな剣で！」

「ぐっ!？」

高速で繰り広げられる激しい剣戟。

「僕たちの想いは絶てない！」

バギイイイン!

「折れたアアアアツツ
!?!？」

決着はあつというまに着いた。

フリードは折られたエクスカリバーを見て呆然としていた。

「……………マジですか……………この俺さまがクソ悪魔ごときに……………ざけんな——」

劍と一緒に自身も肩口から横腹までを大きく斬られたフリードはフェニックスの涙で回復する間もなく倒れ伏した。

「——見ていてくれたかい？ 僕らの力はエクスカリバーを超えたよ！」

Life. 25 絶対絶命です！

「なんとということだ!? 聖と魔の融合など、理論上は——ヒツ!」

僕に聖魔剣を向けられたバルパーは情けない悲鳴をあげる。

「バルパー・ガリレイ! 覚悟を決めてもらおう!」

「こ、こんなはずでは!?!」

バルパー・ガリレイが表情を強張らせる。

彼を打倒しない限り、悲劇は続く。もう、僕たちのような存在を生みだしてはいけな
いんだ。

さあ、同士たち。これで終わりにしよう! すべてに決着を!

「——ッ! 木場祐斗、上だ!」

「——ッ!？」

バルパーに斬り込もうとした瞬間、ゼノヴィアの叫びを聞き、慌ててその場から飛び退く。

ドオオオン!

刹那、僕がいた場所に巨人が舞い降りた!

僕はその巨人の全容を見て言葉を失う。

それは、たくさんの死体を繋ぎ合わせて巨人のようにした死体の塊という醜悪な存在だった。

「バルパーさん。同じ研究者という立場のよしみです。下がっててくださいい」

そう言うカリスの傍らにはさらに巨人が複数体現れる。

「はあああッ!」

ゼノヴィアが巨人へデュランダルで果敢に斬りかかる。

ズバツ！

デュランダルが巨人の腕を両断するが、すぐに修復されてしまう。しかも、通常の人よりも修復が速い！

「——槐。『鍊域』状態のおまえなら奴の弱点は見えないか？」

明日夏くんが一抹の期待を込めて槐さんに訊く。

この場に駆けつけたときに明日夏くんから聞いた話だと、カリスが操る死人には、セイクリッド・ギア神器の力を受信する箇所があり、そこを潰すことであの死人を無力化できるそう
だ。

あの巨人もカリスの神セイクリッド・ギア器の能力で動いている以上、他の死人と同じく力を受信する箇所があるはずだった。

「——見える。だが、数が十一箇所もある！ しかも、位置も個体ごとにバラバラだ！」

十一箇所も!? 通常の死人は弱点が一箇所だというものに!

いや、違うか。あの巨体を操るためにはそれだけの数の受信箇所が必要なのだろう。そしておそらく、それらすべて潰さないといけなのだろう。

「エクスカリバー打倒を祝してちよつとだけサービスです。彼らの弱点ですが、十一箇所中六箇所はダミーですよ。だから、全部で五箇所です」

余裕があるからなのか、カリスがわざわざ弱点について教えてくれた。

わざわざダミーを作ったのは、槐さんのように弱点を見つけることができるヒトのためへの対策なんだろう。

「——どうせその五箇所すべて、それも同時に潰さないと意味ないんだろ！」

「ご明答です。花丸をあげましょう」

明日夏くんの回答に拍手を送るカリス。

戦いながらあの巨体から弱点である箇所を五つ探しだして同時に潰すなんて、とてもじゃないが不可能に近かった。それこそ、先程のイツセーくんにパワーを譲渡された部長や朱乃さんクラスの攻撃でない。しかも、現状その弱点が見えるのは槐さんのみと来ている。

しかも、このあとにはジブラエルとコカビエルも控えている。．．．．状況は最悪だった。

ジブラエルもコカビエルも僕たちの戦いを興味深そうに見ているだけで、手を出すつもりはない様子だ。だけど安心はできない。この状況でもし二人が本格的に参戦したら、たとえ聖魔剣とデユランダルがあらうと僕たちに勝機はなかった。

こうなったら――。

僕はカリスめがけて駆けだした！

この巨人たちの相手をするよりは、操つてる本体のカリスをどうにかしたほうがいいのは明白だ。

幸い、巨人の動きは速さこそあれど、単調なものだった。

おかげで間を縫って突破するのは容易かった。

「当然、そう来ますよね」

当然カリスも僕の行動は想定しており、特に慌ててることなく死人たちをけしかけてくる。

「聖魔剣よ!」

僕は立ち塞がる死人たちを地面から生やした聖魔剣で貫く。

そして、カリスの眼前まで迫った僕はその首めがけて聖魔剣を振るう!

「——悔りましたね、木場祐斗くん」

「——っ!?!」

僕の斬撃がカリスに右肘と右膝で挟むようにして受け止められてしまった!

「あまりなめないでいただきたいですね!」

ドカッ!

「がはっ!？」

剣を受け止められたことに一瞬のスキを作ってしまった僕はカリスによって蹴り飛ばされてしまった!

カリスはファイティングポーズをとりながら言う。

「これでも武闘派研究者と自称してるんですよ」

僕のスピードを見切ったことから、自称するだけであつた。

「なら、聖魔剣よ!」

カリスの周囲に聖魔剣を出現させ、カリスを包囲する。

「おやおや、囲まれてしまいましたか」

逃げ場を失くしたというのに、カリスはまったく余裕を崩さない。

「行け！」

僕は聖魔剣を遠隔操作していつせいにカリスへ切っ先を向けて飛ばす！

ザシユザシユザシユツ！

聖魔剣はカリスの脳、五臓、丹田を貫いた。

これで、彼の死人たちも止ま——。

「——痛いですねえ」

体中を聖魔剣で貫かれたというのに、カリスは笑みを浮かべていた！

これは——感覚をリンクさせた状態の個体か！

「残念ながら、この感覚をリンクさせた個体は他の個体と違って能力を受信する箇所は

ないんですよ。強いて言えば、この個体そのものが受信機ですかね」

カリスはそう言いながら、体中に刺さった聖魔剣を手で抜いていく。

個体そのものが受信機ということは、機能停止させるにはもう跡形もなく消し飛ばすしかないってことか！

だけど、僕じゃそれはできない！ クソツ！

「私にばかり集中していてよいのですか？」

「——ツ!？」

いつの間にか、巨人が僕の背後にいて、拳を振り上げていた！

「くっ！」

巨人の拳をなんとか躲し、距離を取る。

「部長、溜まりました！」

「お願い、イツセー!」

「はい!」

『トランスファー!!』

部長にイツセーくんの力が譲渡され、部長の魔力が高まる。

「消し飛びなさい!」

部長は極大な滅び魔力を自分たちに襲いかかってくる巨人二体に向けてに放つ。

巨人は塵ひとつ残ることなく、部長の魔力によって消し飛ばされた。

だけど、部長は疲弊から肩で息をしていた。

ダメだ……。巨人一体一体にこんなことをしていたら、コカビエルとの戦いまで部長の体力がもたない……。

一体どうすれば……。

「——カリス。おまえのおもちやを下がらせろ」

「仰せのままに」

すると、突然コカビエルがカリスの死人たちを下がらせた。

「……………どういうつもり、コカビエル？」

部長の問いにコカビエルは不敵に笑みを浮かべて答える。

「貴様たちにチャンスでも与えてやろうと思つてな

」
「……………チャンスですつて？」

コカビエルはイツセーくんに視線を向ける。

「小僧」

「なんだよ!?!」

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

「なんだと!？」

「ふぎけないで、コカビエル!」

「フハハハハハ」

部長の激昂をコカビエルは嘲笑う。

「ふぎけているのはおまえらのほうだ。この俺を倒せると思っているのか? しかも、このまま行けば、おまえたちは俺と戦うまでもなくジリ貧で敗れる。それではおもしろくない。だからチャンスを与えてやろうと言うのだ」

コカビエルの言葉に僕たちは齒噛みする。実際、その通りだったからだ。
部長がイツセーくんの手を握る。

「……時間がないわ。私が倒す」

イツセーくんは部長の手を握り返し、二人はゆっくりと前へと歩を進める。

『ブースト
Boost!』

そして、二人の歩みに同調するかのようにイツセーくんの力が高まっていく。

『ブースト
Boost!』

それから数分後、イツセーくんの籠手の宝玉がいつそう眩く光り輝く。
おそらく、限界まで力が高まった合図なのだろう。

「——来ました、部長」

「——イツセー!」

「はー!」

お互いに手を強く握り合う二人。イツセーくんは静かに目を閉じて籠手に意識を集
中させる。

ブーステッド・ギア・ギフト
「赤龍帝からの贈り物!」

『トランスファー!!』

部長へ力が譲渡され、部長の体を覆う魔力が先程よりも大きく膨れ上がった。絶大な魔力にこの距離からでも魔の波動がピリピリ感じる。

「フハハハハハ！ いいぞ！ その魔力の波！ 最上級悪魔の魔力だぞ、リアス・グレモリー！ おまえも兄に負けず劣らず才に恵まれているようだな！」

あれほどの魔力の波動を前にしても、コカビエルは嬉々としながら不敵な態度を崩さない。

「消し飛びなさい！」

部長は手に魔力を集中させ、最大級の滅びの塊が撃ちだされた！

コカビエルは両手を前に突き出し、部長の魔力に受け止める。

「おもしろい！ 魔王の妹！ サーゼクスの妹！」
「くっ——はああああッ!!」

部長はさらに放出する魔力を強める。

「フハハハハハッ!!」

身に纏うローブが消し飛び、魔力を受け止めている手から血が噴きだしてもコカビエ
ルは嬉しそうに大笑いしていた。

「……………うう……………!」

次第に部長の魔力が徐々に弱まっていき、勢いが死んでカタチも崩れていく。

「……………あつ……………」

とうとう部長の力が尽きてしまい部長は膝を着いてしまった。

肩で激しく息をしており、酷く疲弊しているのが丸わかりだった。

もう、同じ一撃どころか、巨人を消し飛ばす威力も難しそうだった。

コカビエルの気まぐれで得られた唯一のチャンスは無駄に終わってしまった……。

「雷よー!」

怒りを含ませた朱乃さんの叫び声が、雷鳴と共に僕の耳に届く!

天から自身へ落ちてくる雷を指先に集中させ、朱乃さんは天雷をコカビエルへと放つ。

朱乃さんの雷はコカビエルの黒い翼によってあつさりと防がれる。

「俺の邪魔をするか、バラキエルの力を宿すものよ?」

「……私をあの者と一緒にするなあッ!」

激昂する朱乃さんに呼応して激しさを増す雷だが、コカビエルの羽ばたきによってあつけなく薙ぎ払われてしまう。

バラキエル——『雷光』の異名を持つ墮天使の幹部の一人で単純な戦闘力なら総督で

あるアザゼルに匹敵すると聞く。

そして、バラキエルは朱乃さんの――。

コカビエルは部長のほうを向いて哄笑をあげる。

「悪魔に堕ちるとはな。まったく愉快的な眷属を持つているな、リアス・グレモリー。赤龍帝、聖剣計画の成れの果て――」

コカビエルが朱乃さんを一瞥して言う。

「――そしてバラキエルの娘!」

「朱乃さんが墮天使の娘!?!」

コカビエルが告げた事実にはイツセーくんが驚愕していた。イツセーくんだけじゃない、朱乃さんの生い立ちを知っている部長や僕、小猫ちゃん以外の全員が驚愕していた。朱乃さんはコカビエルの言葉に忌々しそうに視線を逸らしていた。

「フフフフ、リアス・グレモリー。おまえも兄同様ゲテモノ好きなようだ」

「……………兄の、我らが魔王への暴言は許さない！ 何より、私の下僕への侮辱は万死に値するわ！」

部長の怒りの叫びをコカビエルは鼻で笑う。

「そんなぎまでいつちよまえに吠えるものだ。もう魔力もほとんど残ってなかるうに」
「……………くっ……………」

コカビエルの指摘に部長は悔しそうに齒噛みしていた。

事実、先程の部長の一撃は僕らが出せる最大火力だった。それが通用しなかった時点で、僕たちに勝ち目はほぼなくなっていた……………。

「さて、余興はもう飽きた。ジブラエル、カリス、あとは好きにしろ。俺は見学させてもらう」

「では——」

カリスは再び死人たちを呼び出し、ジブラエルは自身の周囲に複数の光の槍を生みだ

しながら地面に降り立つ。

ゾワッ！

次の瞬間、ジブラエルからいままでの比じゃないプレッシャーが放たれる！

そして、ジブラエルが手を振ると、光の槍が意思を持ったかのように縦横無尽に軌道を描きながら僕たち全員に飛来してきた！ しかも、そのほとんどの狙いはアーシアさん！

「アーシアア！」

イツセーくんと小猫ちゃんがアーシアさんを庇って光の槍を受けてしまう！

光の槍が刺さった箇所から煙をあげ、イツセーくんと小猫ちゃんは苦しそうにしていた！

「イツセーさん!? 小猫ちゃん!?!」

アーシアさんがすぐにイツセーくんと小猫ちゃんの治療を開始し、部長と朱乃さんが三人を守るために三人の前に出る。

「はあッ！」

僕は聖魔剣で光の槍を弾きながらジブラエルに斬りかかる！

「だああッ！」

ゼノヴィアも反対側から斬りかかってきた。

「フッ」

ドガッ！

「「がっ!?!」」

ジブラエルは笑みを浮かべると、身を翻すだけで僕たちの斬撃を躲し、そのまま僕たちを蹴り飛ばす！

「くっ！」

僕は『騎士』^{ナイト}のスピードを駆使してジブラエルの周囲を駆け回る！

「速いですね。ですが——」

まう！
ジブラエルは僕と同等——いや、それ以上の速さで動き、あっさりと先回りされてしまう！

「私からすれば遅いです」
「ぐあっ!?!」

そのまままた蹴り飛ばされてしまう。

「これでもグリゴリ内ではトップレベルのスピードの持ち主と評されているんですよ」

強い！ フリードとは違い、洗練された身のこなし、慢心も油断もない冷静さ。間違
いなく、いままで戦ってきた誰よりも強い！

ジブラエルは倒れているフリードに歩み寄ると、彼の懐から何かを取り出した。

「エクスカリバーを失った以上、彼に持たせている意義はありませんからね」

あれはフェニックスの涙！

彼らがフェニックスの涙を所持していることも聞いていた。最低一個は持っている
であろうジブラエルはこれで実質、複数回倒さなくちゃならなくなかった。

「まずはあなたからです。聖と魔の融合というイレギュラー。後々厄介な存在になるの
は明白。未熟のうちに摘みます」

ジブラエルの視線が僕を捉える！

ジブラエルは武術家の構えを取ると、僕でも捉えるのが困難な速度で僕に接近してく

る！

僕は地面に手を当て、地面から複数の聖魔剣を生やしてジブラエルを攻撃する！

だけで、ジブラエルはすべての聖魔剣を一切スピードを緩めることなく最小の動きで躲してしまおう！

そして、意図も容易く僕に接近したジブラエルは蹴りを放つ。

「がはっ!？」

咄嗟に聖魔剣でガードしたけど、ジブラエルの蹴りは僕の聖魔剣を容易に砕き、僕は後方に大きく吹っ飛ばされてしまった！

「はあああッ！」

ゼノヴィアがジブラエルに斬りかかるけど、ジブラエルは光力を腕に纏わせてデュランドルの刃を受け流してしまう。

ジブラエルはそのまま正拳突きを放つ。

「ぐっ!？」

ゼノヴィアはデュランダルでガードするけど、そのままデュランダルごと吹っ飛ばされる。

「遅いです」

「——ッ!？」

背後から斬りかかった明日夏くと槐さんの斬撃を後ろを見ずに手元に生みだした光の剣で止めてしまう。

ジブラエルは二人を弾き飛ばすと、光力の塊を撃ちだす。

「槐ッ!」

「なっ!？」

明日夏は槐さんを突き飛ばし、オーラで光力を受け止める。

「がああああっ!？」

だけど、防ぎ切れなかった波動によつて明日夏くんは吹っ飛ばされてしまう!

「明日夏ッ!」

「スキありです」

明日夏の身を案じていた槐さんの一瞬のスキをついて、ジブラエルは背後から蹴りを打ち込もうとしていた!

「——ッ!？」

槐さんは辛うじてジブラエルの蹴りあげを躲した。

だけど、ジブラエルは蹴りあげの勢いを利用して飛び上がり、その体勢のまま踵落としを繰り出した!

「があっ!？」

槐さんは刀でガードするけど、ガードごと地面に叩きつけられ、しかも刀が折られてしまった!

「——大した隠行術ですが」

「——ツ!?!」

燕ちゃんがジブラエルの背後からクナイで斬りかかるけど、あっさりと防がれてしまった。

「ふッ!」

「かはっ!?!」

肩からの体当たりで燕ちゃんも吹き飛ばされる!

「おまえエッ! よくも燕ちゃんをオオオオッ!」

燕ちゃんを傷つけられ、激昂した鶯さんが正面からジブラエルに殴りかかる！

「やれやれ、激情にかられ、せつかくの隠行をわざわざ無駄にするとは……」

ジブラエルは鶯さんの拳をわずかな動きだけで躲し、鶯さんを回し蹴りで吹っ飛ばす！

「……強すぎる！ まったく手も足も出ない！」

「コカビエルといい、彼といい、僕たちと彼らとの実力差は歴然だった……」

「さて、とどめを」

ジブラエルは倒れている僕にとどめをさそうと光の槍を生みだす。

「マズい！ 逃げない！」

「だけど、いまだにダメージでまともに動けなかった僕に逃げられるすべはなかった。」

「木場ああああっ!?!」

回復したイツセーくんが小猫ちゃんと共に僕を助けようとするけど、カリスの死人たちが二人を阻む

「終わりです」

やられる！ そう思った瞬間――。

「――何っ!？」

赤――いや、緋いドラゴンが突然現れ、ジブラエルに襲いかかる！

「くっ!」

ジブラエルは高速で動いて緋いドラゴンから逃れようとするけど、緋いドラゴンはジブラエルとほぼ同じ速度でジブラエルを追う。

「チッ!」

逃れられないと判断したのか、迎え撃つ構えを取る。

「ぐっ！」

ジブラエルは手元に光力を展開して緋いドラゴンの突進を受け止める。

「ぐあっ!？」

だけど、ジブラエルは力負けし、緋いドラゴンはジブラエルの胴体に噛みつく。

そのまま緋いドラゴンは宙高くに舞い上がると、一気に急降下して自身の頭ごとジブラエルを地面に叩きつけた。

緋いドラゴンは緋いオーラとなって霧散してしまう。

あの緋いオーラは！

「——やれやれ。思った以上に早い出番だな」

倒れてる僕たちの前に明日夏くんが手元から緋いオーラを放出させながら舞い降りてきた。



「……兵藤、頼むぜ。俺、そろそろ限界……」

「サジ、気を散らしてはなりません！」

「——っ！ はい！」

疲弊から気を散らしそうになっていた匙は椿姫に一喝されて慌てて気を引き締める。

駒王学園の外で魔王の援軍が到着する一時間後まで周囲に被害を出さないための結界を張り続けていたソーナ・シトリー眷属であったが、結界内部での激しい戦闘で結界の維持に予想以上の消耗を強いられていた。

上級悪魔であるソーナと『女王』^{クイーン}である椿姫以外はもう体力も魔力も限界に近かった。

「おーおー、やってるやってる」

最悪、自分と椿姫の二人だけで結界を維持することを検討していたソーナは背後から聞こえてきた声に表情を強ばらせる。

背後を見ると、宙に浮いた墮天使が五人いた。

「くっ、墮天使……」

ソーナは現在、自分たちが危機的な状況にあることに表情を歪ませる。

下僕たちは椿姫を除き体力も魔力も限界。自分と椿姫も大きく消耗している。そもそも、結界の維持のために身動きが取れない。

だが、結界を解いてしまえば、周囲にどれほどの被害が出るかわからない。結界内部の戦闘の激しさから少なくとも見積もっても甚大な被害が出るのは明白。ゆえに結界を解くわけにはいかない。

「椿姫、墮天使たちは私が引き受けます。あなたは皆と引き続き結界の維持を。ですが、もしものときは、私を置いて皆を連れて逃げなさい」

「会長!？」

ソーナは結界を眷属たちに任せ、墮天使たちに向き合う。

「そんな消耗した状態で俺たちに勝てると思ってるのか?」

ソーナは手元に水の魔力を生みだす。

「……シトリー家の次期当主を——そして、魔王レヴィアタンの妹である私を甘く見ないでください!」

L i f e . 2 6 極煌の緋龍

明日夏くんは緋いオーラを四本のドラゴンの腕にする。

やっぱり、あの緋いドラゴンは明日夏くんの緋いオーラでできたものだったか。それを伸ばして——僕、鶴さん、燕ちゃん、槐さんを掴んだ!?

「あ、明日夏くん!？」

「えっ!？」

「ちよ!？」

「お、おい、まさか!？」

いやな予感がした僕たち。

「邪魔だからあっち行ってな!」

「!」「!」「!」

予想通り僕たちは明日夏くんによって投げ飛ばされてしまった！

「ちよ!?! 明日夏、おまえ!?! 何してんだ!?!」

イツセーくんたちが僕たちをなんとか受け止めてくれた。
それを確認すると、明日夏くんはジブラエルのほうを向く。

い、一体何が………?!

明日夏くんらしからぬ粗暴な言動に僕は困惑していた。

「お、おい、千秋、槐。あれってまさか………」

「うん………」

「ああ、間違いない………」

どうやら、イツセーちゃんと千秋さんと槐さんは明日夏くんのあの様子に心当たりがあるみたいだ。

「おまえ、ドレイクか!？」

イツセーくんが問いかけると、明日夏くんは顔だけこちらに向けてニツと笑う。

「正解だぜ、イツセー」

ドレイク——確か、明日夏くんの神セイクリッド・ギア器に宿るドラゴンで、明日夏くんの体を借りることで活動できるとイツセーくんから聞いたことがあった。あれがその状態なのか。

「言つとくけど勘違いするなよ。これはお互い同意のもとなんだからな。いざつてときは、俺がこいつの体を使って戦うつてな」

明日夏くん——ドレイクがそう言つてると、死人の巨人二体がドレイクに襲いかかる！

するとドレイクは背中からオーラを放出すると、それは巨大なドラゴンの翼となつた。

「うぜえよ」

オーラの翼が高速で振るわれ、巨人がバラバラに斬り裂かれた！

「おやおや、一瞬ですか……」

「ダミーを含む弱点十一カ所の中から五個の本物の弱点を探せ？　はん、関係ねえ。全部いつぺんにやりやいいだけだ」

バラバラにされた巨人は二度と修復されることはなかった。そして、斬られた箇所もちようど十一ヶ所だった。

荒々しいのに、なんて正確なんだ。明らかに明日夏くんよりもオーラをコントロールしていた。

いや当然か。あのオーラはもともと明日夏くんに宿っているドレイクのオーラなんだ。自分のオーラを自在にコントロールできるのなんて造作もないことなのだろう。

「さてと。本当ならコカビエルと遊ぶときに俺が出張るはずだったんだが、へぼい奴らばっかのせいで早出勤だぜ」

．．．．．ドレイクの言葉に物申したかったけど．．．．．事実、僕たちは手も足も出ていなかったなので、何も言えなかった．．．．．。

「くっ．．．．．」

立ち上がったジブラエルは左手で右腕を押さえていた。

あの様子からしてたぶん、さっきので右腕が折れたのだろう。

「．．．．．セイクリッド・ギア神セイクリッド・ギア器に宿るドラゴンとの意識の入れ替え．．．．．魔物や伝説の生物を封印した封印系セイクリッド・ギア神セイクリッド・ギア器、それもドラゴン系であろうとそのようなことができるものなど．．．．．」

「何事も例外つてのは存在するもんだろ。ついでにこんなこともできるぜ——」
ドレイクからただならぬ重圧が発せられる。

「——バランス・ブレイク禁手化」



学園での戦闘が始まる前、自宅で装備の補充をしていたときだった。

『勝算あんのか?』

ドレイクが唐突にそう訊いてきた。

……俺はすぐには答えられなかった。

『まあ、キツイだろうな。他はともかく、コカビエルがなあ。ぶっちゃけ、勝てねえな』

そう、ドレイクの言う通り、他の連中なら厳しくてもなんとか勝てるかもしれない。

——だが、コカビエルは別だ。

奴は聖書に名を連ねる伝説の存在。レイナーレたちとは比ぶべくもない。

……ああして目にしたいま、正直勝てるイメージがわかかなかった。

部長の報告で魔王が援軍をよこしてくるだろう……が、おそらく、準備に

時間がかかるはずだ。

それまでは、俺たちで相手することになるだろう。

『手え貸してやろうか？』

．．．．．手を貸すだと？

『そつ。おまえはいまだにオーラのコントロールにムラがあるからな。消耗が激しいのはそれが原因だ。だから、俺がそのへんをサポートしてやる。そうすりゃ消耗がだいぶ抑えられるぜ。具体的には緋スカーレット・フレイムい龍撃の連発ができるぐらいにはな』

だが、それでも――。

『ああ、それだけじゃコカビエルに勝てねえ。まあ、いきなりコカビエルと戦うつことにはならないだろうがな』

なんでそう言い切れるんだ？

『あいつはあの感じからして典型的な戦闘狂だ。バトルマニア そういう奴は大抵、ある程度は拮抗した戦いが好物だ。だから、圧倒的な実力者の自分が戦うよりも、下の連中と戦わせて基本的に観戦に徹するだろうな。だから——』

コカビエルが観戦に徹しているうちに他の奴らを倒せつつか？

『そうそう。んで、そこまで行けば、コカビエルも出てくるだろうな。そうなったら、俺と変われ』

おまえに変わったぐらいで勝てるのか？

『「とっておき」をやれば、可能性はあるかもな』

とっておき？

俺はドレイクの言う『とっておき』について聞いた。なるほど。確かにほんの僅かだけ可能性は出てくるか。

『むろん、リスクはあるが——構わねえよな？』

ドレイクから『とっておき』のリスクを聞く。それで勝てるのなら安いもんだ。

『なら、そんなときが来たら任せな。最低限の活躍はしてやるよ』



ドレイクから膨大なオーラが一気に解放される。その波動は先程の力を譲渡された部長以上だった。

あれっでもしかして！

「なんちやつて禁バランス・ブレイカー手。アドバンスド・スカーレット・バースト『極煌の緋龍』」

やっぱり禁バランス・ブレイカー手！ でもなんちやつてっなんだ？

『あれが正確には禁バランス・ブレイカー 手ではないからだろう』

どういうことだ、ドレイグ？

『そもそも、士騎明日夏は至っていない。そのため、ドレイクは神セイクリッド・ギア 器をバースト状態にすることで擬似的な禁バランス・ブレイカー 手に覚醒させているのだろう』

俺がライザーとの戦ったときみたいな感じか？

『いや、あれは代償を払うことで一時的に力を引き出しているのに対し、あちらは一種の暴走状態だ。相棒のように肉体を代償に支払うことはないだろうが、士騎明日夏の肉体にも、神セイクリッド・ギア 器そのものにも多大な負担をかけることになるだろうな』

俺以上にヤバイやり方で力を引き出してるとってわけか……

「さーとと。宿主さまがへっぽこだからな。速攻で終わらせてもらうぜ」

ドレイクが放出していたオーラがドレイクの身を覆っていく。背中のオーラがドラゴンの翼と尻尾、手元のオーラが鋭い爪を生やしたドラゴンの腕になった。

視界から消え去り、緋い光の軌跡を生みだしながら、ドレイクはジブラエルへ直進する。

速い！ 木場とかで目が慣れてきているはずなのに、それでも目で追いきれない！

「くっ！」

ジブラエルは光の槍を生みだしてはドレイクに向けて飛ばすが、そのすべてをドレイクは難なく躲してしまふ。

「へっ！」

ドレイクはオーラの爪を突きですが、ジブラエルはそれを辛うじて躲す。

ドガッ！

「ぐあっ!？」

ドレイクのオーラの尻尾がジブラエルを吹き飛ばした。
吹き飛ばされたジブラエルは空中で体勢を立て直す。

ザシユツ!

「があっ!？」

そのわずかな隙をついてドレイクの爪がジブラエルの腹部に突き刺さった。
そのまま突き刺している手元にオーラの塊を作るドレイク。

「ほら吹っ飛ばよ」

オーラの塊が撃ちだされ、ジブラエルはオーラの塊ごと校舎まで吹き飛ばされた。

ドオオオオオオオオン!

ジブラエルとオーラの塊が校舎に激突して大爆発が起こった！

「へへ、スカーレットショット、てか」

オーラの爆発により、校舎が酷く損壊していた。

なんだよありや！ 俺のマックスのドラゴンショットぐらいの破壊力があるぞ！

『どうやらあの疑似バランス・ブレイカー禁手はドレイクのオーラを一気に全面解放することで爆発的

に戦闘力をあげるタイプみたいだな。その状態で全身のオーラを手元に集めて放つタイプの一撃を放てばあれぐらいは造作もないだろう。だが、あの戦闘力。あの疑似バランス・ブレイカー

禁手は確実に士騎明日夏の生命力を減らす諸刃の剣だな。最悪、士騎明日夏が再起不能に至る可能性がある危険な方法だ』

そんな危険なことをして力を引き出してるのかよ！

『おそらく、士騎明日夏も覚悟のうえなのだろう』

そうしなければ、この戦いを切り抜けられないからと明日夏は思ったわけか……。破壊された校舎の壁の奥から着ていたトレンチコートがボロボロになりながらも無傷なジブラエルが現れた。

あれをくらって無傷かよ！

『忘れたのか、相棒。奴らはフェニックスの涙を持っている。それを使って回復したのだろう。折れた右腕や爪で貫かれた傷が治っているのがその証拠だ』

そっか、そういえばそうだった。そもそも、さつきフリードから回収してたっけ。

ドレイクが挑発するように言う。

「まずはひとつ。あと何回復活できるんだ？」

ドレイクの挑発を意に介さず、ジブラエルはボロボロになったトレンチコートを脱ぎ捨てる。

「……なるほど。現状、あなたが一番の驚異ですね。その牙はコカビエルさまに届きうる。ここで確実に仕留めます」

そう言うと、ジブラエルから濃密な光力が解放された。そして、解放された光力がジブラエルの体を覆っていく。

ジブラエルの体は光力そのものみたいな状態になっていた。

ジブラエルは光の軌跡を描きながら飛翔し、ドレイクに肉薄する。

「へっ、上等だ！」

ドレイクも同じ速度でジブラエルを迎え撃つ。

ドレイクが爪や尻尾、翼を使ったもはや人間離れた戦い方に対して、ジブラエルは光力を纏った手足による徒手空拳で戦う。

ドレイクの爪や尻尾、翼の攻撃をジブラエルは腕や脚で薙ぐように捌き、ジブラエルの拳や蹴りをドレイクは腕や翼で防ぐ。

二人の一進一退の攻防はもはや次元が違うレベルの戦いだった。

『このまま行くと、ドレイクの敗北は必至だな』

どういふことだよ、ドライグ。見た感じ、互角な戦いだと思うけど？

『互角だからこそだ。ドレイクは暴走状態。安定している墮天使よりも先にドレイク——正確には士騎明日夏の肉体に限界が来るの明白だ。それは向こうも把握している。その証拠に墮天使の戦いの方が長期戦的なものになっている』

それじゃ、このまま行けばドレイクのジリ貧つてことかよ！

『そうなるな』

クソツ！ 援護しようにも、あんな次元の違う戦いに割つてはいれないし、そもそも、カリスの死人たちが立ち塞がって自分たちの身を守るのが精一杯だった。

「世話が焼けるな！」

ジブラエルとの攻防の最中、ドレイクは肩から生やしたオーラの腕からオーラの塊を撃ちだして、俺たちに襲いかかってくる死人たちを撃ち抜く。

「お仲間を気にかける余裕なんてあるのですか？」

「しようがねえだろ。あいつらに何かあれば宿主さまがうるせえからな」

その後もドレイクはジブラエルと戦いながらもオーラの一撃で死人たちが俺たちに近づかないようにしてくれる。

クソツッ！ 俺たちの存在がドレイクの足を引つ張ちまうなんて！

「自分の身は自分で守るわ。だから、あなたは気にせず、目の前の戦いに集中してちょうだい！」

部長がドレイクに言うけど、ドレイクは鼻で笑う。

「現状、一番足手まといになってる奴がよく言うぜ」

ドレイクに言われ、部長は苦虫を噛み潰したような表情をする。

実際、さっきの一撃で部長は魔力と体力のほとんどを消耗してしまってる。そのせいで、死人たちの相手もキツそうだった。

「まあ、安心してろ。こんくらい、片手間にもなりやしねえよ」

そう言うけど、さっきのドライグの言葉が気になって気が気でなかった。

『安心しろ、相棒。あのドレイクのことだ。戦いながらも虎視眈々と何かを狙っているだろうさ』

本当に大丈夫なのかよ？

『ああ。あいつはずる賢いからな。白いのとの戦いにちよつかいをかけられてキレた俺たちからもうまいこと逃げおおせる奴だからな』

いや、それ、余計に安心できないんだが……。

お互いの蹴りが激突し、その衝撃でドレイクとジブラエルは距離を取る。

「ハッパッ」

その瞬間、ドレイクが口から血を吐いた！

よく見ると、体の至るところから血が出ていた！

「そろそろ宿主の肉体が限界のようですね」

「まったくだ。せめて禁^{バランス・ブレイカー}手にでも至っててくれてればもつとやれたんだがな……」

やれやれといった様子でドレイクは口から出てる血を手で拭い、ペツと口の中の血を吐く。

「ま、別にカンケーねえか」

ドレイクは地に降り立つと、体を覆っていたオーラを消した。

「これで終わらせるからな」

ドレイクは右手をジブラエルに向ける。

すると、ドレイクの右手から膨大なオーラが放出される！

オーラは手元には集まっていき、やがて、巨大なオーラの塊になった！

その大きさは明日夏の体の十倍以上はあった！

だけど、オーラの放出に右腕が耐えきれていないのか、あつちこつちから血が吹き出していた。

「なるほど。強大な一撃で一気に終わらせようという魂胆ですか。ですが、それで私を倒しきれなければ、あなたの敗北です」

ジブラエルは身構える。ドレイクのあの強大なオーラの塊にコカビエルのように受けてたつつもりのようなのだ。

「受けてたつってか？ 上等だ！ 吹っ飛びやがれ！」

ドレイクはオーラの塊を撃ちだす。

オーラの塊は真つ直ぐにジブラエルに向かって飛翔していく。

「フツ」

受けてたつ構えだったジブラエルが突然構えを解いてオーラの塊の射線上から飛び出してしまふ！

「——バカ正直に受けると思ったのですか？」

野郎！ 受けてたつと見せかけて、ドレイクに無駄撃ちさせるつもりだったのか！

だけど、今頃気づいてももう遅かった。

ドレイクの一撃はジブラエルに当たることなく、射線上にあった校舎に当たる。

あれだけの大きさだ。凄まじい衝撃が来ると予想した俺たちは衝撃に備えて身構える。

パシユツ。

『え?』

だけど、校舎に当たったオーラの塊はシャボン玉のように割れて霧散してしまった。
えっ、どういうこと!?

「アツハハハハハハハハッ!」

呆気にとられてる俺たちを見て、ドレイクはお腹を抱えて大笑いしていた。

「引つかかったな! あんなの見てくれが大きいだけの中身が空洞なシャボン玉みたいな塊さ!」

ええええええええっ!? いまのただの見せかけだったのかよ! なんだってそんなことを!?

「いまのは囿ですか！」

「正解だぜ」

ジブラエルは表情を強ばらせ、あたり見渡し始める。

そうか、ドレイクの狙いはあの巨大な見せかけのオーラの塊を陽動に本命の一撃を叩き込むための布石だったのか。

だけど、いつまでたってもその本命が来ることはなかった。

そのことにジブラエルも訝しげにしていた。

「バーカ。本命ならもうおまえの懐に撃ちこんでるぜ」

「——ッ!？」

ジブラエルは慌てて自身の懐に視線を向ける。

俺たちもジブラエルのほうを見ると、ジブラエルの懐のところに緋い米粒みたいのがあった。

あれが本命？ スゴく小さいんだけど？

入っていた。他にも死人たちが衝撃で吹っ飛んで壁に叩きつけられたのか、見るも無惨な有り様になっていた。会長たちが張ってくれてる結界にも亀裂が入っていた。

ドサツ！

そして、あの大爆発の中心にいたジブラエルはポロポロになって地面に墜落していた。

「ほーん、五体満足で残ったか。フェニックスの涙と光力のほとんどを費やしてある程度のダメージを相殺したってところか？　ま、それでも虫の息だろうがな」

ジブラエルはか細いうめき声をあげるだけだった。

「さーと、ひと思いに楽にしてやるか」

ドレイクは手元にオーラを出してドラゴンの手にすると、その爪をジブラエルに向ける。

「——やれやれ。まったくうぜえな」

ジブラエルにとどめをさそうとするドレイクに死人の巨人が襲いかかる！

ドレイクは背中からオーラを出す。

さつきみたいに翼にして攻撃するつもりなのだろう。

バシユツ。

「ありや」

だけど、背中から出ていたオーラが霧散してしまった。手元のオーラも同じくだ。

「チツ」

舌打ちをしてドレイクは巨人の攻撃を躲して巨人から距離を取る。

「どうやら限界が来たようですね」

カリスがジブラエルに歩み寄っていた。

そして、懐から小瓶を取り出し、中身をジブラエルにかけた。

ジブラエルの傷が煙をあげて治っていく。

あれフェニックスの涙かよ！

回復したジブラエルが起き上がる。

「・・・・・・・・ヤツベエな」

俺たちのもとまでやって来たドレイクも流石に苦笑いを浮かべていた。

「・・・・・・・・シスターちゃん、治療頼まあ」

そう言うと、ドレイクが倒れた！

「・・・・・・・・・・・・・・・・があ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

倒れたドレイク——いや違う、明日夏がうめき声をあげていた。

「明日夏！ アーシア、頼む！」

「は、はい！」

アーシアは急いで明日夏に回復の光を当てる。

「……おい、ドレイク。傷が治ったら——」

『あ、無理。もうオーラがほとんど残っていない。いくら俺が表に出ればオーラを自在に操れるといつても、扱えるオーラの量は宿主のレベルに依存しちまうからな。それでも無理くり引き出してやったが、それも限界だ。恨むなら、へっぽこの自分を恨むんだな。まあ、とりあえず、スカーレット・フレイム緋い龍撃一発撃てればいいぐらいの余力は残しておいた。あとは自分たちでなんとかしな』

小型のオーラのドラゴンになって出てきたドレイクが明日夏に言う。

それを聞き、明日夏は苦虫を噛み潰したような表情をする。

つまりもう、ドレイクを当てにすることはできず、ドレイクの言う通りあとはもう俺たちでやるしかないってことか。

「大丈夫ですか、ジブラエル殿？」

「……ええ、感謝しますよ。よもや、あそこまでやれるとは……」

「セイクリッド・ギア神器というのは未知な部分が多く、なかなか侮れないですからね。そちらの総督殿が熱心に研究するのも頷けるでしょう」

「……ええ。アザゼルさまが熱中するのもなんとわかりましたよ。——ですから、後顧の憂いのないよう所有者は全員ここで確実に始末します」

ジブラエルから俺や明日夏、千秋に木場にアーシアといったセイクリッド・ギア神器を持つ者に濃密な殺気を向けてくる！

「——でしたら、もう終わりますよ。——十分に死体は溜まりましたからね」

カリスがそう言った瞬間、俺たちの周りにいた動かなくなつたものも含んだ死人たちの体が膨張しだした！

な、なんだ!? 何が起こってるんだ!?

「マズい!?!」

回復した明日夏が驚愕の表情で叫んだ。

見ると、木場や槐、ゼノヴィアも同様の表情をしていた。

「おい、明日夏! 一体何が起こってるんだよ!?!」

「奴らは自爆する気だ!」

「自爆!?!」

「まさか、あのクレーターは!?!」

「そうです、部長!」

あのバカデカイクレーターはそれでできたのかよ!

いますぐ逃げないとヤベエじゃねえか!

だけど、周りはすでに膨張した死人たちの肉塊で囲まれていて逃げ場がなかった!

「朱乃！　いますぐ転移の準備を！」

「はい、部長！」

部長の指示で急いで朱乃さんが転移の準備を始める。

「そんな!?　転移の術式が組みません！」

「なんですって!?!」

転移の術式が組めないだつて!?!

「ああ、転移の妨害はバツチリですよ」

カリスが爽やかな笑顔で最悪なことを言いやがった！

「ついでに言うと、外で結界を張っているソーナ・シトリーのところには墮天使の部隊が襲撃している頃ですよ」

さらに最悪なこと言うカリス！

「ソーナ！ ソーナ!?!」

部長が通信用魔方阵で会長に呼びかけてるけど、反応からして応答がないようだ。

「応答がないのは通信妨害してるからですよ。まあ、この結界があるうちは無事ですすよ。時間の問題でしょうけど」

どうすりゃいいんだよ! 俺たちもピンチだし、会長たちもピンチなんて!

そうこうしているうちに周りは完全に囲まれていた!

こうなったら、体の大半をドラゴンにしてもあの鎧を着て——。

『無理だ、相棒。鎧を着ようと、相棒ではこの状況をどうにかするの不可能だ。せいぜい、鎧の防御力のおかげで相棒だけが生き残るだけだ』

俺だけ生き残っても意味ねえよ!

クソツ！ マジでどうすりゃいいんだよ！

バチツ！

「――バランス・ブレイク
禁手化」

絶体絶命な最中、突然の第三者の声。

「鬼刃一刀流・絶技――」

バチチチチチツ！

次の瞬間、グラウンドの一角で紅い雷が激しくほとばしりだした。

「伏せろオオツ！」

突然、槐が叫び、それを聞いた俺たちは反射的に伏せた。

それと同時に雷がほとぼしっていた場所から紅い閃光が縦横無尽に駆け巡り、肉塊のすべてを貫いた。

「――紅蓮の霹靂一閃」

カッ！

再びの第三者の声。刹那――。

ドオオオオオオオオオオオオンツ！

轟音と共にすべての肉塊から激しい雷が立ち上り、すべての肉塊を塵も残さず焼き払った！

「よう、ナイスタイミングだったみたいだな？」

雷が止んだその中心には鞘に収まった刀を肩でトントンとさせているレンがいた。

Life. 27 遅れてきた剣士たち

「とりあえず、皆無事のようだな？」

レンは俺たち一人ずつの状態を確認する。

「……いまのは一体？」

部長の疑問に槐が答える。

「兄上の禁バランス・ブレイカー手です」

「えっ、でも、あなたのお兄さんの神セイクリッド・ギア器は聴覚を高めるものじゃ？」

槐の答えに部長はますます怪訝そうにする。

レンの持つ神セイクリッド・ギア器は『龍の耳サウンド・レシーバー』。その能力は聴覚を高めるといふありふれたもの

だ。だが、さっきの攻撃は完全に雷属性系統。いかに禁バランス・ブレイカー手だろうと聴覚を高めるだけの神セイクリッド・ギア器にできることじゃない。

事実、さっきのは『龍サウンド・レシーバーの耳』の禁バランス・ブレイカー手じやないからな。じやないからな。

そのからくりは至極単純――。

「兄上は生まれつき神セイクリッド・ギア器を二つ持っているのです」

『――っ!?!』

槐の言葉に事情を知っている俺や千秋、鶯や燕以外の全員が驚愕していた。

基本的に神セイクリッド・ギア器は一人ひとつしか所持していない。複数持つてる場合もあとから移植されたものというのが原則だ。だが、例外があり、レンはその例外で生まれつき二つ所持しているのだ。

その二つ目の神セイクリッド・ギア器こそが紅い雷撃を放つ『紅い雷火』クリムゾン・レピッド。さっきのはその禁バランス・ブレイカー手、トランジェントクリムゾン・ライトニング『紅蓮の霹靂一閃』。

その能力は禁バランス・ブレイカー手としての発展や拡張を必殺の一太刀に集約させた一撃の威力を極限にまで昇華させた超高速居合斬りと斬りつけた対象を焼き払う雷撃による同時攻撃。居合斬りに関しては簡単に言ってしまう、俺の雷ライトニングスラッシュ刃の身体強化と刀身強化

の機能を併用した居合斬りだ（そもそも、ライトニングスラッシュ 雷 刃の機能はレンの能力をスケールダウンしつつも再現したものだ）。その強化された身体能力で雷の如き速さで動き、強化された刀で斬りつける。だが、レンの禁バランス・ブレイカー 手はそれで終わらない。最大の特徴は斬りつけた対象の切断箇所から太刀を通じて大量の雷を流し込み、相手を内側から雷撃で焼き払うことだ。その威力は掠っただけでもその箇所が消し飛ぶほどだ。

このことから、レンの禁バランス・ブレイカー 手は相手からしたら回避が困難な超高速斬撃にもかかわらず、掠るだけでも危険な技へと昇華させている。

むろん、欠点もあり、肉体への負担と消耗が大きく、また一撃ごとにインターバルがあるため連発ができない。そのため、ここぞというときにしか使えない。

「——アザゼルが言っていた『ダブル・ギア・ホルダー 双持者』という存在か」

ダブル・ギア・ホルダー コカビエルがレンを見てそう言った。

セアクリッド・ギア 双持者。グリゴリではレンみたいな神器を生まれつき二つ所持している奴をそう呼んでいるのか。

「………ほ、報告します………」

そこへ、コカビエルたちに切羽詰まったような声がかけられた。
声が聞こえたほうを見ると、ボロボロな姿の墮天使が膝をついていた。

「……私以外の墮天使、およびはぐれエクソシスト、はぐれハンター、カリス・パトゥーリアの死人兵……その男と聖剣使いの男の二人によつて全滅しました……」

「……何?」

「なッ!?!」

「ほう」

墮天使の報告にコカビエルは眉をひそませ、ジブラエルは驚愕、カリスは興味深そうにしていた。

俺たちもその報告に驚愕していた。

墮天使は驚異的なものを見るような目でレンを見て言う。

「……そいつらは強すぎます……! とても人間とは思えません……」

「！」

墮天使の反応からしても、ジブラエルはかなりの戦力をレンとアルミヤさんにあてがっていたのだろう。

それをたつた二人で……。

「墮天使たちはともかく、他は有象無象だったからな。そこまで苦労はしなかったぜ」
当のレンは大したことはしていないといった感じだった。

ザシュツ！

『——ツ!?!』

突然、墮天使の胸を剣が貫いた！

「……………申し訳ありません……………コカビエルさま……………」

ジブラエルさま………」

その言葉を最後に墮天使は前のめりに倒れて息絶えた。

「ひとまず一難は去ったようだな」

倒れた墮天使の後方から弓のような剣を手にしたアルミヤさんが現れた。

「ソーナ・シトリーとその眷属たちは無事だ、リアス・グレモリー」

アルミヤさんの言葉を聞き、部長は安堵する。

よかった。会長たちは無事か。

「——アルミヤ・A・エトリア。『錬鉄の劍聖』の異名を持つ、教会内でもトップクラスの戦士か。所持している神セイクリッド・ギア器は『聖劍創造』か？ 『魔劍創造』と同様、使い手の技量次第では無敵の力を発揮する神セイクリッド・ギア器。なるほど、異名に違わず戦士としては最上級だな」

バルパーがアルミヤさんのことをそう評するが、途端に見下したかのような視線を向ける。

「だが、教会が保有する伝説の聖剣を与えられていないところを見る限り、因子の保有数値レベルは大したことのないようだな。ふん、つまり、戦士としての技量はともかく聖剣使いとしては大したことはないということだな」

バルパーに好き勝手言われても、アルミヤさんは何も言わなかった。というよりも、気にも留めていなかった。

ドオオオン！

「ん？」

「む？」

レンとアルミヤさんの背後に死人の巨人が現れた！

まだいたのか！

巨人が腕を振り上げ、二人に拳を打ちだそうとする。

「十の型——斬り嗣ぎ舞」

次の瞬間、レンの姿が巨人の背後に移り、巨人がバラバラに斬り裂かれていた！

そして、アルミヤさんに襲いかかろうとしていた巨人は体の至るところに聖剣が突き刺さっていた。

「——ブローケン・ブレイド壊れた聖剣」

カッ！

聖剣が激しく光り輝くと、聖剣は聖なる波動を発しながら爆発した！

爆発を受けた巨人は爆破された箇所が大きく抉れた状態で倒れる。

レンが斬り裂いた巨人も爆破された巨人もダメージが再生することなく、ピクリとも動かなくなった。

レンが斬り裂いた箇所は十一、巨人に突き刺さっていた聖剣の数も十一。つまり、二人はあの一瞬で巨人の弱点の場所を見抜き、ダミーを含めた全てを一瞬で攻撃したのか！

レンは不敵に笑みを浮かべると、カリスに問いかける。

「——で、まだいるのか？」

レンの問いかけにカリスも不敵に笑みを浮かべて言う。

「さあ、それはどうでしょうかね」

はぐらかすかのように答えるカリスだったが、それを聞くと、レンは鼻で笑う。

「——あいにく、俺の耳は誤魔化せないぜ。俺の神セイクリッド・ギア器で高められた聴覚は相手から発せられる音から相手の状態、発した言葉の真意を聞き抜く。もう死者共は打ち止めか、ほぼストックがないんだろう？」

レンの指摘にカリスは軽く嘆息すると、あつさり白状する。

「やれやれ、あなたの場合、その強さよりもその耳のよさが厄介ですね。ええ、その通りですよ。巨人型はいまので全滅。今回用意した死体のストックもほとんど使いきってしまいましたよ。一応、何体かは残っていますが、仮に強化したところであなた方が相手では無駄に消費するだけですわね」

「どうやら、ようやくカリスの死人兵は打ち止めのようだ。」

「——ですから、データ取りもかねてとっておきを出すとしますよ」

『——ッ！』

カリスの言葉を聞き、俺たちは一斉に警戒心をあらわにする。

そして、カリスの隣に魔方陣を介して一人の男性が現れた。

二メートル近い大柄な体躯で金髪を短く刈った男だった。着ているものはボロボロであり、片眼には剣で斬りつけられたような縦長の傷痕、眼はそのものは機械のようになつていた。

あの顔、見覚えがあつた。確か、樹里さんが見せてくれた写真に写っていた男だ。

「……セルドレイ・スミルノフ！」

アルミヤさんが男の名を口にした。樹里さんの資料と同じ名前だった。

男は生気を感じさせない虚ろな表情でカリスの傍らに佇んでいた。

カリスがとっておきを出すと言っていたので警戒していたが、出てきたのはいままでの個体と変わらないものだった。素の身体能力が高いつて意味なのか？

「……あのあと、キミに殺され、操り人形にされたというわけか」

「ええ、その通りですよ。どのみち、聖剣使いの因子の副作用で長くはありませんでしたからね。貴重なエクスカリバーを扱えるレベルの聖剣使い。みすみす死なせるぐらいなら、私の——」

ズバツ！

『——え？』

俺たちは目の前で起こったことに思わず呆けてしまった。

セルドレイ・スミルノフがいきなり手に持つ戦斧で隣にいたカリスの胴体を斬り裂いたからだ。

一体何が起こったんだ!?

「ひ、ひいいいいっ!?!」

カリスの後ろに控えていたバルパーが目の前でカリスの胴体が真つ二つされたことに悲鳴をあげて尻餅をついて後ずさっていた。

「・・・・・・・・おやおや・・・・・・・・やはりこうなりましたか・・・・・・・・」

当のカリスは偽物の肉体ゆえに生きており、いま起こった事態にもそこまで驚いていなかった。むしろ、口振りからしてこうなることを予期していたみたいだった。

セルドレイ・スミルノフが俺たちのほうに視線を移す。その瞳には生氣は感じられず、完全に死者のそれだった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・ま・・・・・・・・くま・・・・・・・・』

その口からはよく聞き取れないが、うわ言ように何かを口にしていた。

そのことに俺は驚く。

これまでのカリスの死人兵は動くだけで言葉を発することはなかった。その動きに
関しても、カリスが操作するか、プログラムされた動きに従つてのもので、基本的には
完全な死体だ。

だが、奴は勝手に主であるカリスを攻撃し、あまつさえ言葉を発していた。

そこがカリスがとつておきと言つていた理由か？

『・・・・・・・・・・・・・・・・くま・・・・・・・・あ・・・・・・・・くま・・・・・・・・あくま・・・・・・・・』

聞き取りずらかつたセルドレイ・スミルノフの言葉が段々と声音が上がつていき、聞
き取れるようになっていた。

あ、くま・・・・・・・・悪魔つて言つてるのか？

マズい！ 間に合わ——。

「二の型——螺旋撃！」

ズバッ！

セルドレイに追隨するようにレンがすれ違いざまに、セルドレイ・スミルノフの戦斧を持つ腕を斬り払った！

「九の型——双龍撃！」

続けざまに太刀を振るうレンだったが、セルドレイ・スミルノフは即座にバックステップでレンの斬撃を躲し、レンから距離を取ろうとする。

ザシユツザシユツ！

セルドレイ・スミルノフの体をアルミヤさんが弓で射ちだした二本の聖劍が貫く。

カツ!

先程の同じように聖剣が爆発した。

「………やったのか?」

「うんにゃ、やってねえな」

俺の疑問をレンはバツサリと切り捨てた。

爆煙が晴れると、セルドレイ・スミルノフは爆破箇所が大きく抉れたようになっていた。

『悪魔アアアツ!!』

セルドレイ・スミルノフはそんな状態でも活動を停止していなかった。

「………さっきの攻撃、明確な敵意と殺意を持ってやがったし、即座に反応して俺

の技を回避しやがった。こいつまさか——」
「ええ、その通りですよ」

レンが疑問を口にする前に斬られた状態のままのカリスが答える。

「セルドレイさんは他の個体と違い、明確な意思を持った個体ですよ」

明確な意思を持った死者だと！

内心で驚く俺たちに説明するようにカリスは続ける。

「とある条件を満たした場合に限り、意思を持った個体にできるのですよ。その条件は二つあります。ひとつ、死亡してからほとんど時間が経過していないこと。だいたい数十秒以内ですね。そして、もうひとつ。これが一番重要です。それは——」

カリスは一呼吸をおいて二つ目の条件を答える。

「死してなお消えることのない強烈な想いを抱いていることです。本来、死者を操るだ

けの神セイクリッド・ギア 器である『死の傀儡』コルプス・マリオンネットでこのようなイレギュラーが起こったのは、おそらく、想いの強さを糧にする神セイクリッド・ギア 器の特性が影響したのでしょう。あくまでも私の仮説で、正確なところは不明ですが」

想いの強さを糧にする神セイクリッド・ギア 器の特性がセルドレイ・スミルノフを意思を持った死者にしたというのか。

「そして、セルドレイさんが死してなお消えることのなかった想い、それは悪魔への憎悪、怒り、復讐心です」

悪魔への憎悪に怒り、復讐心。だから、純血の悪魔である部長を真つ先に狙ったのか。

「偶然に発見した奇跡ですが、いくつか欠点がありましたね。意思があると言っても、その抱いていた想いに沿ってしか行動しません。しかも、その想いが成就してしまうと、ただの死者に成り下がってしまいます。さらにこれが一番の欠点ですが、まず私の言うことを聞いてくれません。それどころか、このように私の命を狙ったりします。まだま

だ課題が多いですよ」

つまり、セルドレイ・スミルノフはカリスの言うことを聞かず、悪魔への復讐心に沿ってしか行動しないってことか。

『悪魔ああッ！ アルミヤアアアッ!!』

セルドレイ・スミルノフがアルミヤさんを視界に捉えると、悪魔へのものと同等な怨嗟を叫ぶ。

「なるほど。キミを二度に渡って打ち倒してきた私のことは、悪魔への復讐を邪魔する憎き怨敵というわけか」

アルミヤさんは自分に向けられた怨嗟から即座に分析する。

「さて、私はそろそろ退場ですね。この肉体ももう限界ですから。ああ、言っておきますが、私が消えても、セルドレイさんが活動を停止することはありません。彼はもう、私

から完全に独立してしまっていますからね。しかも——」

セルドレイ・スミルノフの傷がどんどん塞がり始めていた！

カリスから独立していても修復はされるのか！

「では、セルドレイさん。存分に暴れてください。私は安全な場所からデータを取らせてもらいます。それでは皆さん。ごきげんよう」

それだけ言うと、カリスだったものが唐突に動かなくなつた。完全に活動を停止した死体になつていた。

クソツ！ 最後の最後に面倒な置き土産を置いていきやがった！

どうする。不意をつかれたとはいえ、レンやアルミヤさん以外が奴の動きに反応できなかったことから考えても、セルドレイ・スミルノフはいままでの奴よりも強敵なのは確実だつた。

「ふむ、どうやら、いまのセルドレイ・スミルノフの最優先標的は私のようだな。私がいえる限り、悪魔への復讐が成就できないと至つたのだろう」

アルミヤさんは俺たちを見渡してから言う。

「奴の相手は私一人で引き受ける。キミたちはその間に休んで、少しでも体力を回復させるといい」

レンがアルミヤさんの隣に歩み寄りながら訊く。

「いいのか？ 結構手こずりそうだぞ？」

「なに、あれはもともと私の不始末の結果だ。なら、私自身が責任を持つのは道理だろう」

「けどなあ、時間も結構限られてるぞ？」

レンは大地崩壊の術式に目を配らせる。

「安心したまえ。あちらも私がどうかしよう」

「ふーん、手があるのか？」

「私が根拠のない自信を言っているかね？」

「どうやら言っていないみたいだな。OK。なら、あれと大地崩壊の術式はあんたに任せ
た」

レンは俺たちを見渡して言う。

「てなわけだ。おまえらは休んでろ。幸い、コカビエルはまだ観戦気分みたいだからな」

レンの言う通り、コカビエルは手を出す素振りは見受けられなかった。

俺はレンに訊く。

「おまえはどうする気なんだ？」

「俺か？ 俺は——」

唐突にレンが太刀を振るう。

すると、レンの太刀が何かを弾いた。

「俺は奴^{やつ}さんの相手をしなきゃいけないみたいだな」

レンの視線の先にはジブラエルがいた。

その表情はどこか、激情に駆られているかのようなものだった。

弾いたのは奴が投擲した光の槍か。

「……… 同胞たちをよくもやってくれましたね」

「戦争を起^こそうとしておいて、犠牲なしで済むと思つてんのか？」

「——無論、覚悟はしてましたよ。ですが、それと同胞たちを殺したあなたたちに対する怒りは別ですよ」

ジブラエルの憎悪がこもった言葉にレンは飄々と返す。

「ま、そりやそうだな。俺だつて同じ立場なら同じ気持ちになつてたろうさ。——だが、同情はしないぜ。てめえらのやろうとしていることは多くの人々、特に子供に被害を及ぼすことだからな」

レンは冷淡にジブラエルを見据えて太刀を構える。

それに対し、ジブラエルも光力を身に纏って構える。

俺たちはその光景を見ていることしかできなかつた。

ここは二人を信じて任せるしかなかつた。

正直、二人の援護をしたかかつた。だが、俺たちでは足手まといになつてしまふのは明白だつた。

皆もそれがわかっているからか歯噛みしていた。

そして、アルミヤさんとセルドレイ・スミルノフ、レンとジブラエルが一拍を置いて激突した。

Life. 28 紅い閃刃

「一の型・疾風！」

「ふッ！」

レンの太刀とジブラエルの光力を纏った蹴りが激突する。

「十の型・斬り嗣ぎ舞！」

すかさず、レンは連続かつ高速で斬撃を放つが、ジブラエルも的確にレンの斬撃をいなしつつ、拳、蹴りを打ち込む。

レンもまた、斬撃を繰りだしつつジブラエルの拳と蹴りを太刀でいなす。

「はあッ！」

「ぐっ!？」

ジブラエルの強烈な蹴りがレンを太刀のガードごと吹き飛ばした！
すかさず、ジブラエルは複数の光の槍を投擲する。

「飛電の太刀——」

レンは吹っ飛ばされた状態のまま体勢を整えて着地すると居合の構えをとる。

「紅乱れ！」

居合と同時に放たれた紅雷が迫り来る光の槍をすべて吹き飛ばした。

「……やっば、出し惜しみしてる余裕はねえか」

レンは再び居合の構えをとる。

「紅纏——」

レンの体から紅雷がほとぼしり、レンの体に纏っていく。

「ほのいかづち火雷！」

次の瞬間、レンは一瞬でジブラエルの懐に踏み込んでいた！

「八の型・獣爪撃！」

「——っ!？」

先程の仕返しとばかりに、今度はジブラエルがレンの斬撃で吹き飛ばされた。

「紅纏——なるいかづち鳴雷！」

レンに纏っていた紅雷が脚に集中し、居合の構えで先程よりもさらに速い速度でレンはジブラエルに肉薄する。

「紅纏——わかいかづち若雷！——四の型——落葉切り！」

紅雷が今度は太刀に集中し、神速の居合が放たれる。

ズバツ！

レンの居合が光力の鎧を斬り裂き、ジブラエルの腕から鮮血が舞う。

「くっ！」

ジブラエルは斬られた腕を押さえながら後退し、俺が壊してしまった校舎の壁から校舎内に入ってしまう。

レンもそれを追い、校舎内に入ってしまう。



「……暗闇に乗じて姿をくらましたか」

ジブラエルを追つて駒王学園の校舎に入ったレンだったが、暗闇を利用してジブラエルを見失つてしまった。さらに、目につく蛍光灯がすべて破壊されていた。

ジブラエルが校舎に入ると同時に光源を絶つたのだ。

それにより、校舎内は完全に暗闇に包まれており、夜目がきくレンでも、視界をほぼ確保できないでいた。

だが――。

「バランス・ブレイク禁手化――」

レンに視界封じなどそもそも無意味だった。

レンは『サウンド・レシーバー龍の耳』を禁手にする。

『サウンド・レシーバー龍の耳』の禁手、『サウンド・レシーバー龍の音響結界』。能力は聴覚の周囲への拡張。離れた場

所の音をダイレクトに聞き取ることができる。それにより、より正確に音を聞き取ることができ、人間には聞こえない周波の音さえも聞き逃さない。たとえ音を忍ばせて潜んでいたとしても、心音などの僅かな音でも漏れていけばレンには丸見えも同然だった。

「——見つけたぜ」

即座にジブラエルを見つけたレンはジブラエルに向けて駆けだす。

だが、レンの心中にあったのは強い警戒心だった。

自身の聴覚のことはジブラエルも百も承知のはずであり、暗闇に乗じようと、その聴覚で見つけられることは容易に予想できるはずだった。にもかかわらず、こんな単調な潜伏を行うことに、レンを逆に警戒させた。

レンはジブラエルから意識を離さず、学園全体に意識を巡らせる。

「——ッ！」

すると、レンはとある一室で発生する奇妙な音を聴き取った。

「………なんだ？」

レンは音の正体を突き止めようと意識を集中させる。

音の正体はその部屋に仕掛けられたなんらかの術式から発生したものだだった。

術式の正体までは把握できなかったレンは、音の反射を利用してそこがなんの教室なのかを把握しようとする。

「この教室は——ッ?! マズい!」

教室の正体に気づいたレンは慌てて禁^{パランス・ブレイカー}手を解き、首にかけている遮音ヘッドホンを装着する。

キイイイイイイイイツ!

それと同時に学園中のスピーカーからガラスを爪で引つ掻いたような不快音が鳴り響いた。

術式が仕掛けられていた教室は放送室であり、術式の正体は時間経過でスピーカーから鳴り響いている不快音を放送するようにジブラエルが仕掛けたものだった。

レンの鋭い聴覚は最大の武器であると同時に最大の弱点でもあった。その感度のよさにより、聴覚を狙った音による攻撃に弱かった。レンが遮音ヘッドホンを手放さないのは、首にかけていないと落ち着かないことだけでなく、こういった状況を想定しての

ことでもあった。

間一髪で聴覚を保護することができたが、同時に最大の武器である聴覚も封じられてしまった。

「——ッ!?!」

そこへ、無数の光の槍が縦横無尽に飛翔しながらレンに襲いかかってきた。それも前方だけでなく後方からも。

「紅纏——伏^{ふしい}雷^{かづち}ッ!」

レンは即座に紅雷を纏って太刀で光の槍を迎撃する。

幸いにも、この暗闇の空間では光の槍は目立つため、数はあれど、レンの反応速度なら迎撃はそんなに難しくはなかった。

ドガアアアアッ!

そこへ、壁を吹き飛ばしながらジブラエルが現れる。完全に虚をつかれたレンはジブラエルの登場に反応が遅れてしまう。ジブラエルは光の剣の手にレンに斬りかかる。

「くっ！」

レンはどうか体勢を崩しながらも光の剣による斬撃を躲す。

だが、無理な体勢で躲したことで、レンは致命的な隙をさらしてしまった。なおも飛来してくる光の槍。レンにそれを回避するすべはなかった。

「紅纏ッ！」

レンは即座に紅雷を纏う。

『紅纏』——紅雷を纏うことで身体能力をあげる応用技。

また、纏い方によって、速度に特化させたり剣速に特化させたりと幅広い応用力があった。

『火雷』はバランスよく、『鳴雷』は足の速さを重点的に、『若雷』は斬撃を、『伏雷』は

斬撃の速さを強化する。そして、いまの纏い方は『土雷』。防御力を強化する纏い方であつた。

「ぐっ!？」

だが、不十分な纏い方だったために防ぎきれず、レンの体の至るところに光の槍が突き刺さる。

それでも、レンはなんとか致命傷を避けると、激痛に耐えながら即座に居合の構えをとる。

「……………飛電の太刀——紅乱れ!」

『飛電の太刀』——太刀に紅雷を集束させ、居合と同時に様々な放電による雷撃。『紅乱れ』は前方広範囲に紅雷を放電することで、中距離攻撃と防御を両立した雷撃である。ジブラエルは即座に距離をとることで紅乱れを回避する。

「……………飛電の太刀——」

再び飛電の太刀の構えをとるレン。

「紅月ベニつき！」

居合と同時に弧状の雷撃が放たれる。

「くっ！」

ジブラエルは光の剣で紅月を受け止め、弾き飛ばす。

その間にレンは居合の構えでジブラエルに接近していた。

「四の型・落葉切り！」

レンの居合の一閃をジブラエルを躲そうとするが、叶わず左腕を斬り飛ばされた。

「くっ……」

ジブラエルは魔方陣で止血しつつ、レンから距離をとると、廊下の角を曲がってレンの視界から消える。

「ぐっ……」

ジブラエルが一時退却したのを確認すると、レンは光の槍が刺さった箇所から血を流しながら膝をつく。

「……紅纏おほいかづち・大雷……」

紅雷を纏うと、レンの傷から流れ出る血が止血されていく。

『大雷』は紅雷で細胞を活性化させることで治癒力を高め、傷を高速で治癒させる纏い方だ。

だが、欠点として体に負担をかけるうえに体力を著しく消耗する。しかも、得られる治癒力もせいぜい止血レベル程度だった。

止血を終えたレンは肩で息をする。レンは廃工場での戦いからほぼ休むことなく戦

い続けており、先ほどの『紅蓮トランジエント・クリムゾン・ライトニングの霹靂一閃』といまの大雷の治癒で体力をかなり消耗していた。

疲弊した体に鞭を打って立ち上がると、ジブラエルを警戒しながら壁に手を当てる。

「………つたく、近所迷惑だろうが」

手から紅雷が放電されると、不快音を発していたスピーカーから煙が上がり、音が鳴り止んだ。

「………やれやれ、公共施設を壊させんなよな」

レンは配電線を通じて学園中のスピーカーを破壊したのだ。

レンは『龍スプレッド・サウンド・レシーバーの音響結界』でジブラエルの位置を確認すると、そこへ向けて言う。

「さて、これで耳も存分に使える。いい加減、決着つけさせてもらうぜ」

この後に控えているコカビエルに備えて体力を少しでも温存しておきたいレンは次

の接敵で確実に決めると判断すると、レンはジブラエルのもとへ向けて駆けだした。



レンがやって来たのは学園の屋上だった。

そこでは不敵な笑みを浮かべたジブラエルが待ち構えていた。

「わざわざこんな開けた場所で待ち構えるとはな。随分と余裕じゃねえか？」

「まさか。正直言いますと、私もそろそろ限界が近くてですね。もう小細工をする余裕もないのですよ」

「ふーん」

レンはジブラエルの言葉を鵜呑みにしなかった。

いまのジブラエルの発言は半分が本当で半分が嘘だった。本当なのは限界が近いこと。ドレイクとの戦いで相当の消耗を強いていたのだ。嘘なのは小細工をする余裕がないこと。レンを待ち構えていたことから、この場所になんらかの罠が仕掛けられていることは明白だった。

「そういうあなたこそ、余裕がないのでは？」

「まあな。ここまでぶつ通しだったからな」

お互いに限界は近いが、それでも次の戦いに備えて少しでも余力を残したい。だからこそ、ここで決着をつける。互いに同じ思いを抱いていた。

「だからな——」

レンは紅雷を纏う。

「紅纏・火雷！　ここで決着をつけてやるぜ！」

レンはその場から駆けだす。

ジブラエルは複数の光の槍生成すると、それを一斉に掃射する。

「十の型・斬り嗣ぎ舞！」

レンは迫りくる光の槍を走りながら太刀ですべて叩き落とす。

スツ。

ジブラエルが指を動かすと、周囲から光の槍が飛び出し、一斉にレンへと飛来する。

「紅纏・土雷！」

音で仕掛けを事前に把握していたレンは土雷で防御力を上げる。

先ほどと違い、完全に光の槍を耐えるが、防御重視の纏い方にしたために速度が減少してしまう。

その際にジブラエルは空中に飛び上がる。

「五の型・天翔脚！」

レンも強靱な脚力で飛び上がり、ジブラエルに接近する。

「四の型・落葉切り！」

レンの居合いを見切り、ジブラエルは的確にレンの居合いを光の剣で受け流す。

「二の型・螺旋撃！」

レンは受け流された居合いの勢いを利用して空中で回転して回転斬りを放つ。だが、ジブラエルは即座に後ろに飛行することでレンの斬撃を躲してしまう。

「紅纏・若雷——」

レンは再び斬撃の勢いを利用して回転しながら刀身に紅雷を集束させる。

「べにば紅刃！」

次の瞬間、再び放たれた回転斬りに合わせて刀身が伸びた。

『紅刃』は刀身に紅雷を集束させて斬撃を強化する若雷の発展技で、最低限の身体強化に回している紅雷も刀身に集束させることで紅雷の刃を伸ばして斬撃の間合いを広げるものだ。神速の速さを誇るレンの居合いと相まって、奇襲で放てばほぼ回避は不可能な技だった。

ジブラエルもこれは予想外だったらしく、動揺をあらわにする。

だが、ジブラエルは神の子を見張る者内でトップクラスの速さを誇る。すでに距離を取っていたことも相まってギリギリのところまで刃が届かなかった。

「紅纏・土雷！」

再び飛来してきた光の槍を土雷で防ぎつつ屋上に着地したレンは視線でジブラエルを追う。

レンの視界に入ったのは、巨大な光の槍を生成しているジブラエルだった。

光の槍の大きさから、屋上どころか学園そのものを吹き飛ばしかねないと予測したレンはすぐさま飛電の太刀で迎撃しようとする。

だが、なおも飛来し続ける光の槍を防ぐために土雷を解除することができずにいた。飛電の太刀や紅刃と紅纏は両立ができない。ジブラエルもそれを見抜いていた。そ

のため、唯一の防衛手段である土雷を使い続けたいといけないう状況を作ること、レンの動きと遠距離攻撃を封じ、その防衛を突破しうる最大火力をもつてレンを仕留めるのがジブラエルの狙いだつた。

ジブラエルの狙い通りの状況になり、ジブラエルは勝利を確信する。

——それが致命的な隙となつた。

レンは暮紅葉の鞆に備えられたトリガーを引き、居合を放つ。

「——こげつべにば弧月紅刃——」

刃渡り約四十メートルに届きうる紅刃がレンの神速の居合で振り抜かれ、ジブラエルの胴体が両断された。

暮紅葉の鞆には紅雷を集束させたカートリッジが取り付けられており、トリガーを引くことで紅雷を集束させる工程を省略して飛電の太刀や紅刃を使用できる機構が備えられていた。

これを利用することで、飛電の太刀や紅刃と紅纏の両立を可能にしていた。

完全に虚をつかれ、胴体を両断されたジブラエルは驚愕をあらわにしつつも、すぐさま自身の死を悟る。

今回の事件を起こした段階ですでに死を覚悟していたジブラエルは冷静に自身の死を受け入れると、自身を打ち倒した眼前の強敵を屠るために最後の力を振り絞って生成していた光の槍を投擲する。

「クソツッ！ 土雷・硬^こ！」

ジブラエルの最後のあがきに舌打ちをし、レンは身体強化に回している紅雷も防御に回した土雷の最大防御である『土雷・硬』を使う。

次の瞬間、屋上周辺を閃光が包み込んだ。

Life. 29 鍊鉄の劍聖

ドオオオオオオオオオオンツ！

学園の屋上のほうで閃光を伴って爆発が発生した！

『——っ!?!』

閃光が止んでから目にした光景を見て、俺たちは息を飲む。

屋上を中心に学園の半分以上が消し飛んでおり、残っていた部分も爆発の余波で損壊していた。

「……お、俺たちの学園が……」

俺たちが通う学園の無惨な姿にイツセーは言葉を失っていた。

イツセーだけじゃない、俺を含め他の皆も同様の反応だった。

「派手にやったな、ジブラエル」

対するコカビエルは心底おもしろそうに学園を眺めていた。

その姿に俺たちはさらにコカビエルに対する怒りを募らせていく。

そんななか、けたたましい金属同士がぶつかり合う音が響き渡った。

そちらのほうを見れば、アルミヤさんがセルドレイの戦斧の一撃を両手の聖剣でいなしていた。

セルドレイはその大柄な体型からは想像もつかない速度で駆け回り、戦斧を振るう。

とても復讐心が原動力な理性なき死者とは思えないほど、洗礼された動きで戦斧を速く、かつ鋭く振るわれていた。

それをアルミヤさんは最小限の動きで躲し、あるいは双剣で受け流していた。

「ふッ！」

ズバッ！

アルミヤさんが双剣を滑らせるように戦斧を受け流しつつ、懐に飛び込んでセルドレイの脇腹を斬り裂いた。

パワーでこそ劣ってはいるが、それ以外のすべてはアルミヤさんのほうが優に上回っていた。

現にセルドレイの攻撃がアルミヤさんには一切当たっていない。それに対し、アルミヤさんは要所所で確実に攻撃を当てていた。

にも関わらず決着がつかないのは、セルドレイが受けたダメージが即座に修復されるからだ。

おまけに――。

「――ッ!？」

アルミヤさんがセルドレイの腕を斬りつけるが、まともにヒットしたにも関わらずできた傷が浅かった。

そのことにアルミヤさんは苦々しい表情を浮かべる。

徐々にだが確実にセルドレイの肉体強度が上昇していた。少なくとも、腕と足の関

節、首に関してはほぼ刃が通らなくなっていた。

「チツ！」

アルミヤさんが舌打ちをすると、傍らに聖劍を持った甲冑騎士たちが現れた。

「ほう、『ブレイド・ナイトマス聖輝の騎士団』か。聖劍を持った甲冑騎士を複数創りだして使役する
ブレイド・フラックスミス『バランス・ブレイカー聖劍創造』の禁手。今回の騒動に派遣されただけあつて禁手には至って
 いたか」

バルパーは最初こそ興味深そうに見ていたが、すぐさま興味が失せたような表情になる。

あくまでもエクスカリバーなどの伝説の聖劍にしか興味が無いのだろう。

アルミヤさんが駆けだすと、甲冑騎士たちも一斉に左右に展開しながら駆けだす。

セルドレイは甲冑騎士たちを薙ぎ払おうと戦斧を振り回すが、甲冑騎士たちもアルミヤさんと同様に洗練された最小の動きで戦斧を躲していた。

アルミヤさんと甲冑騎士たちはそのままセルドレイに波状的に斬りかかるが、やはり

ほとんど刃が通っておらず、斬り傷が浅い。

「——なら」

甲冑騎士たちは振り回される戦斧を掻い潜り、セルドレイに組つく。

カッ！

そのまま甲冑騎士たちは閃光となって爆発する！

すかさず、アルミヤさんは聖剣を創りだして投擲する。

投擲された聖剣も爆発し、さらにアルミヤさんは休むことなく聖剣を創造しては投擲を繰り返す。

矢継ぎ早に投擲された聖剣が爆発し、普通ならもう相手は跡形もなくなるであろうほどに過剰にアルミヤさんは攻撃を止めない。

「——っ!?!」

すると、爆煙の中からもスゴい速さで戦斧がアルミヤさん目掛けて飛んできた！

「くっ！」

ギリギリのところアルミヤさんは飛んできた戦斧を躲すが、それによつて攻撃が中断させられてしまった。

爆煙中からアルミヤさんから距離を取るよう何か飛び出した。

それはポロポロになったセルドレイだった。着ていた法衣はもう跡形もなくなっており、体のほぼ全体に火傷ができて、焼け焦げている箇所もあった。しまいには、左腕が肩から先がなくなっていた。

見た感じはかなりのダメージだが、あれだけやってこの程度ダメージしか与えられなかったことに俺たちは驚愕していた。

『アアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

セルドレイは耳をつんざくほどの咆哮をあげる！

それに合わせるように体の火傷が再生していく。左腕も新しく生えるように再生し

てしまった。

『オオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

セルドレイはなおも咆哮をあげる。

すると、セルドレイの腕や足、胴体が肥大化し、指も太くなつていく。一回りも二回りも巨大化した身体中には血管が浮き出ており、頭髮も一本残らず抜け落ちていた。もはや、もとの人間だったころの面影など皆無であり、その姿は禍々しくおぞましいものだった。

そして、背中から何かが生えだした。よく見ると、それは腕だった。それも四本。

両腕と新たに生えた四本の腕にそれぞれ武装^{クロス・ギア}十字器の戦斧が握られる。その姿はさながら阿修羅だった。威圧感もさつきまでの比じゃない。

『アルミヤアアアアアアアアツツ!!』

絶叫をあげ、巨大化したにも関わらずさらに速くなったスピードでセルドレイはアルミヤさんに斬りかかる!

アルミヤさんは六本の戦斧による斬撃を躲すと、セルドレイの脇腹を斬りつける。だが、アルミヤさんの聖剣は儂い金属音を立てて碎け散った。刃が通るどころか、まったく歯が立っていなかった！

「くっ！」

アルミヤさんは即座にバックステップで距離を取ると、聖剣を投擲する。

聖剣がセルドレイに命中すると同時に爆発するが、セルドレイは無傷だった。

セルドレイが再びアルミヤさんに接近しようとする。

アルミヤさんはさせまいと聖剣の投擲爆破で対応しようとするが、セルドレイはまったく意に介してなかった。

ダメージどころか、怯みもしてなかった。

あつさりとしたセルドレイの接近を許してしまったアルミヤさんだったが、セルドレイの嵐のような斬撃の雨を紙一重で躲していた。アルミヤさんの表情から多少の余裕も感じられた。改めて、アルミヤさんの実力の高さを痛感する。

……だが、状況は極めて最悪だった。

いくら攻撃が当たらないといっても、アルミヤさんの攻撃も通用しないんじゃない意味が

ない。このまま行けば、アルミヤさんのスタミナが切れて、その瞬間に勝負がついてしまう。

ここはもう加勢するべきだ。現状、最大戦力であるアルミヤさんをやらせるわけにはいかない！

現に、すでに木場とゼノヴィアが動いていた。

「はあああああッ！」

左右から木場とゼノヴィアがセルドレイに斬りかかる。四本のエクスカリバーを統合した聖剣に打ち勝った聖魔剣とエクスカリバー以上の聖剣であるデュランダルなら、いまのセルドレイにもダメージは与えられるはずだった。

そして、部長と副部長もそれぞれ魔力と雷で攻撃を行っていた。

だが、セルドレイは容易く木場とゼノヴィアの斬撃を戦斧で受け止め、部長の魔力も副部長の雷も戦斧で振り払い、木場とゼノヴィアをそのまま力任せに薙ぎ払ってしまう！

クソッ！ 腕が増えたことで手数も増え、対応力が上がってやがる！

セルドレイは薙ぎ払った木場目掛けて駆けだした！

「——ッ!？」

木場は持ち前の足の速さをもってセルドレイの斬撃を躲す。

だが、戦斧に気を取られていた木場はセルドレイの蹴りを脇腹にくらっつてしまう!

「がはっ!？」

木場は血を吐き、吹き飛ばされてしまう。

「はあッ!」

セルドレイの背後からゼノヴィアが斬りかかるが、セルドレイは最小の動きでデュラ
ンダルを躲し、六本の戦斧を一齐にゼノヴィアに叩きつける!

「ぐっ!？」

ゼノヴィアはデュランダルで戦斧をガードするが、力負けして木場のもとまで吹き飛ばされてしまう。

セルドレイは二人目掛けて駆けだすが、その眼前にアルミヤさんが現れた。

シュツ！

アルミヤさんは手に持っていたナイフ状の聖剣をセルドレイの両眼に投擲する。

完全に虚をつかれた投擲にセルドレイは反応することができずにセルドレイの両眼に聖剣が突き刺さった。

肉体強度が上がっても、さすがに眼球の強度までは上がってなかったのか、セルドレイは眼を押さえながら後ずさる。

セルドレイは眼に刺さった聖剣を抜くと乱雑に投げ捨てた。

そして、再び咆哮をあげると、左右それぞれの眼の上下に新たな眼が生えた！

六眼六腕の異形となったセルドレイはまた咆哮をあげる。

「なるほど。ダメージを受けるたびにその都度再生と同時にそのダメージに対応した肉体改造が施されていくというわけか。これは時間をかけすぎた私の判断ミスだ

な………」

自嘲するアルミヤさんをバルパーは嘲け笑う。

「フン、『錬鉄の劍聖』と言われていようとその程度か。貴様が教会の保有する伝説の聖劍を持つていければ、もつと速く終わつていたろうに。『ブレイド・フラックスミス聖劍創造』によつて先天的に因子を持つているのだろうが、多彩な属性の聖劍を創りださずその程度の聖劍しか扱えぬようではな。因子の補填もされないとそこを見るところ、補填する因子に体が耐えられなかつたのか？ だとしたら運のない。それだけ劍士としての才がありながら、聖劍に祝福されないと。『ブローケン・ブレイド聖劍創造』によつて半端に聖劍使いになつていゝのがかえつて見苦しいものだな。壊れた聖劍などという苦し紛れの技でパワー不足を補つていゝのもそれに拍車をかけているな」

バルパーの嘲りを聞いてもアルミヤさんは眉ひとつ動かさない。

ただ黙々と聖劍を二振り創り構えるだけだつた。

そして同時に、セルドレイがアルミヤさんに向けて駆けだした。

そんななか、アルミヤさんが口を開く。

「バルパー・ガリレイ。キミはいろいろと勘違いをしている」
「……勘違いだど？」

セルドレイがアルミヤさんに接近し、戦斧を振るおうとした瞬間――。

「――私の因子の保有数値レベルはゼノヴィアと同等だ」

アルミヤさんの聖剣のオーラが膨れ上がり、輝きが増した！

あの現象は、廃屋でフリードがやった！

そして、アルミヤさんが聖剣を振るう。

ドオオオオオオオン！

凄まじい衝撃音が発せられ、アルミヤさんの聖剣がセルドレイの戦斧を砕き、腕を斬り飛ばし、そして衝撃によってセルドレイが後方に吹き飛ばされた！



「な、何が起こったのだ!？」

いましてがた起こった出来事にバルパー・ガリレイが驚愕していた。

「——そんな難しいことはしていない。インパクトの瞬間に剣に膨大なオーラを乗せることで斬撃の威力を高めただけだ」

「そんなことを言っているのではない!」

バルパー・ガリレイは表情を強張らせながらアルミヤさんの聖剣を指差す。

「なんだその輝きは!? その波動は!? エクスカリバーに匹敵するだど!? あり得ん! そんなことはあり得ない!？」

バルパー・ガリレイの言う通り、アルミヤさんの持つ聖剣の輝きや発せられる波動がエクスカリバーに迫るものだった。

だが、それはあり得ないことだった。僕やあのヒトが持つような創造系の神セイクリッド・ギア器で創られたものはオリジナルには及ばないからだ。

……僕自身、つい先日それを思い知っていた。

聖魔剣がエクスカリバーに打ち勝てたのは、それが聖と魔の融合という本来ならありえない奇跡によつて生まれたものだということと、何よりエクスカリバーが本来のエクスカリバーじゃなかったことが大きい。

「先程も言ったが、私の因子の保有数値レベルはゼノヴィアと同等だ」
「バカな！ それだけでその現象の説明はできん！」

フリードが刀身に因子を込めることでエクスカリバーの力をパワーアップさせていたが、それでも、あそこまでの上昇ではなかった。

まだ何か秘密があるみたいだ。

「そもそも、仮にその小娘と同等の、デュランダルを扱えるレベルの因子を保有しているというのなら、なぜ教会が保有する伝説の聖剣を所持していない!？」

バルパー・ガリレイの疑問はもつともだろう。

アルミヤさんの劍技と体捌きは一級品だ。そこに伝説クラスの聖劍が加わるといふのなら、鬼に金棒とはまさにこのことだ。

「——その理由はこれだ」

そう言つて、手に持つ聖劍を掲げた瞬間——。

バギイイイイン！

アルミヤさんの聖劍が弾けるように碎け散つた！

「——私の因子は少々特殊だね。先程のように聖劍のオーラと力を何倍にも増幅させる特性があるのだよ」

「特殊な因子だ?!? そのようなものがあつたのか!?!」

聖劍についての造詣が深い自身ですら知り得ていなかったことにバルパー・ガリレイ

は驚愕する。

「……だが、欠点として聖剣に多大な負荷をかけてしまい、最終的にこのように芯から砕け散ってしまう。以前、教会が保有する聖剣を一本ダメにしてしまったことがあつてだな。芯も砕けてしまったので錬金術で鍛え直すこともできなかつた」

なるほど。だからアルミヤさんは教会が保有する聖剣を持つていないのか。

戦いのたびにダメにされてはたまつたものではないだろうからね。

そう考えると、自前で聖剣を創りだせる『ブレード・ブラックスミス聖剣創造』を所持していたのは幸いだったわけだ。創りだす聖剣は基本使い捨てだからダメになることなんて気にならないだろうからね。

「——ゼノヴィア、木場祐斗」

アルミヤさんはこちらを見て言う。

「コカビエルとの戦いに備えて手札を温存しようとして手を抜いていたせいで余計な心配を

かけてしまったようだ。ご覧の通り私一人で問題ない。コカビエルに備えて体力を温存しておきたまえ」

僕とゼノヴィアは無言で頷き、皆のもとまでさがる。

「さて——」

アルミヤさんはセルドレイ・スミルノフのほうに向き直る。

セルドレイ・スミルノフはもうすでに腕を再生させており、新しい戦斧を手にしていった。

二人は一瞬だけ睨み合ったあと、同時に駆けだした。

セルドレイ・スミルノフが戦斧を振るうが、アルミヤさんは最小の動きでそれを躲し、すれ違いざまにセルドレイ・スミルノフの脇腹と腕を一本斬り裂いた。

セルドレイ・スミルノフはすぐさま反転して背中を向けているアルミヤさんに斬りかかるけど、アルミヤさんは背を向けたまま即座に聖剣を投擲する。

カッ！

聖劍が爆発し、セルドレイ・スミルノフが後方に吹き飛ばされた。

斬れ味やパワーだけじゃない、爆発の威力も桁違い上がった。

アルミヤさんは聖劍を手に反転し、一瞬でセルドレイ・スミルノフに肉薄すると、さらに二本の腕を斬り飛ばす。

セルドレイ・スミルノフも負けじと戦斧を振るうけど、アルミヤさんに真つ向から戦斧を碎かれ、さらに二本の腕を斬り飛ばされる。

セルドレイ・スミルノフは残る腕で戦斧を振るうけど、アルミヤさんにはかすりもない。

戦斧を躲したアルミヤさんはセルドレイ・スミルノフの体に両手の聖劍を突き刺す。

それにお構いなく腕を再生させながら戦斧と拳による攻撃するセルドレイ・スミルノフ。

アルミヤさんはそれをすべて最小の動きで躲し続け、セルドレイ・スミルノフの体の至るところに聖劍を突き刺さしていく。

十本近くの聖劍を突き刺したアルミヤさんはセルドレイ・スミルノフの両足を斬り裂き、セルドレイ・スミルノフが体勢を崩した隙に距離を取った。

そして――。

カッ!

一際眩い閃光をあげ、セルドレイ・スミルノフに突き刺さっていた閃光が一斉に爆発した。

あまりの波動に結構な距離を離れているにもかかわらず肌が焼けそうだった。

閃光が止むと、そこにいたのは下半身が完全に消し飛んだセルドレイ・スミルノフだった。

残った上半身も左側がほとんど消し飛んでいた。

再生は始まっているけど、そのダメージの大きさからなのか、再生速度は遅かった。

そんな状態でもまだセルドレイ・スミルノフは動こうとしていた。アルミヤさんを睨みつけ、手を伸ばしていた。

アルミヤさんとはどめをささそうと三本の聖剣を指に挟めて手にすると、それを一斉に投擲した。

投擲された聖剣はセルドレイ・スミルノフを貫き、そして閃光をともなつて爆発した。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツッ!?!』

セルドレイ・スミルノフは断末魔の絶叫をあげる。

聖なるオーラに身を焼かれながらもセルドレイ・スミルノフはアルミヤさんを睨む。
次の瞬間――。

『――っ!?!』

セルドレイ・スミルノフの体が膨張し、聖なるオーラをかき消しながらあつというまに首から下が巨大な肉塊に変わり果ててしまった!

そして、肉塊の膨張はなおも続く!

あれはまさか! カリスが死人を自爆させるときと一緒の!

「くっ!」

アルミヤさんは聖剣による爆撃で攻撃するけど、肉塊の膨張スピードがあまりにも速く、正直焼け石に水だった。

『アルミヤアアアアアアアツツ!! 悪魔アアアアアアアツツ!!』

セルドレイ・スミルノフは怨嗟の叫びをあげていた。

アルミヤさん、ひいてはこの場にいる悪魔である僕たちをなにがなんでも滅ぼす——それだけの憎悪がああ叫びに込められていた。

セルドレイ・スミルノフと悪魔の間に何があつたかはわからないけど、あの憎悪、おそらく、大切な何かを悪魔に奪われてしまったのだろう。……僕と同じように。

……もしも、イツセーくんたちが僕を止めようとしてくれなかつたら、僕もあんなふうになつてしまったのだらうか？

いや！ いまはそんなことを考えている場合ではない！

肉塊の膨張は続いている。その勢いは学園のすべてを飲み込まんとする勢いだ。もし、あれがなおも際限なく膨張し、そしてそれが弾けてしまつたら、周囲にも甚大な被害が出かねない！

でも、どうすれば！

「……できれば最後まで伏せておきたかつたが——やむを得まい」

そう呟いた瞬間、アルミヤさんは一度瞑目し、力強く開く。

「――バランス・ブレイク禁手化」

アルミヤさんから発せられる波動がより一層強まり、手元に一本の聖剣が生みだされていた。

「その聖剣はまさか!?!」

その聖剣を見たバルパーが目を見開いていた。

「先の三大勢力の戦争によって失われたとされていた七本の中で最強とされている最後のエクスカリバー、『エクスカリバー・ウルトラ支配の聖剣』!?!」

最後のエクスカリバーだって!

「バカな!?」 教会が最後のエクスカリバーを発見したという情報はなかった! なぜ貴様がそれを持っている!？」

バルパー・ガレイの言葉にアルミヤさんは答えることなく、そのエクスカリバーを肉塊へ向けて投擲した。

エクスカリバーが肉塊に突き刺さると、肉塊の膨張が停止した!

「……『エクスカリバー・ルーアー支配の聖剣』はあらゆるものを支配し、意のままに操ることができる支配を司る聖剣だ。その能力で、あれの膨張を止めたのだろう」

ゼノヴィアが最後のエクスカリバーの能力と目の前で起こったことについて説明してくれた。

あらゆるものを支配……確かに、最強の名にふさわしい能力だ。

「……アルさん、どうしてあなたがその聖剣を……?」

ゼノヴィアからも説明を求められ、アルミヤさんは淡々と答える。

「——『エクスカリバー・ルーラー支配の聖劍』は依然として行方不明のままだ。そしてあれは『ルーラー支配』であつて『支配』ではない」

そう言うアルミヤさんの手には新たな聖劍が握られていた。

その聖劍を見た僕たちは『エクスカリバー・ルーラー支配の聖劍』が現れた以上に驚愕した！
なぜなら、その形状はゼノヴィアが持っていた『エクスカリバー・デストラクション破壊の聖劍』とまったく同じ

だったからだ。

僕たちはゼノヴィアのほうを見る。

『エクスカリバー・デストラクション破壊の聖劍』は間違いなくゼノヴィアの傍らにあった。

つまり、これが意味することは——。

バルパー・ガリレイが驚愕の表情でそれを言う。

「貴様、『ブレッド・ブラックスミス聖劍創造』でエクスカリバーを複製したというのか!？」

そう、それしか考えられなかった。

「――『^{イミテーション・ブレイド・ワークス}極聖輝の剣製』。エクスカリバーなどの既存の聖剣を複製するブレイド・ブラックスミス、^{バランス・ブレイカー}『^{バランス・ブレイカー}聖剣創造』の禁手だ」

「バカな!? 貴様の禁手は『^{ブレイド・ナイトマス}聖輝の騎士団』のはずでは!」

「そこから本来持つ『創造』の能力を突き詰めたのが私の禁手だ。^{バランス・ブレイカー}むろん、騎士団を使役する能力も健在だ」

なんてヒトだ。^{バランス・ブレイカー}禁手をさらに進化させるなんて。

「………もつとも、複製した聖剣はオリジナルより性能がワンランク劣るがね」

既存の聖剣の複製。オリジナルより性能が劣るとはいえ、伝承に残るほどの伝説クラスの聖剣であれば、多少の性能の低下は気にはならないだろう。

いや、その性能の低下も――。

カアアアアアアアアアアアアアアアツ!

アルミヤさんの持つエクスカリバーから激しく輝き、膨大なオーラが発せられた!

アルミヤさんの持つ因子は聖劍の力を何倍にも増大させる。それがエクスカリバークラスとなれば、その力は計り知れない！

アルミヤさんはエクスカリバーを大きく振りかぶる。

それに合わせて、輝きがさらに増し、発せられるオーラも増大した！

「——セルドレイ・スミルノフ。犯した罪ゆえに、愛する妻のもとへは行けぬだろう。せめて、来世で再会できることを心から祈ろう。——だから、もう楽になれ」

そう言い、アルミヤさんはエクスカリバーを振り下ろした。

刹那、輝きとオーラが収束し、光の奔流となって一気に放たれた！

Life. 30 行け! オカルト研究部!

光の奔流が止み、あとに残ったものは何もなかった。

なんて威力だ……。先程のイツセーの力を譲渡された部長の魔力やドレイクが放ったオーラの一撃以上なのは間違いなかった。

実際、会長たちが張ってくれている結界に大きな穴が空いていた。幸い、結界はすぐに修復されていた。

件のアルミヤさんは肩で息をしていた。やはり、エクスカリバーの複製は消耗が激しいのだろう。

「あり得ん。いくら禁^{バランス・ブレイカー}手と言えども、伝説の聖剣の複製など……」

バルパーはいまだにエクスカリバーの複製という現象を信じられないでいた。

「——待てよ」

唐突にバルパーが何かを呟き始めた。

「そうか！　そういうことか!？」

そして、何かに思考が達したのか、酷く興奮した様子で喋り始めた。

「バランス、そうバランスだ！　聖と魔、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとすれば説明は——」

バルパーが何かを言い切る前に、額を飛来した剣によって貫かれた！

バルパーはそのまま飛来した剣の勢いによつて後方に勢いよく倒れこんだ。どう見ても即死だった。

やったのはアルミヤさんだった。

ここに現れたときのようになんとう士の柄を繋ぎ合わせた弓を手にしていた。

「バルパー。おまえは優秀だったよ。そこに思考が至ったのも優れているゆえだろう。」

もつとも、その優秀さのせいで命を落とすことになったがな。皮肉なものだな」

宙に浮かぶコカビエルがバルパーを嘲笑っていた。

なんだ? バルパーは何を言おうとしてたんだ?

——いや、詮索はしないほうがいいか。

アルミヤさんはバルパーが口にするのがタブーな何かを知ったからこそ殺した。それにいまは——。

「フフフ」

コカビエルが不敵に笑みを浮かべながら地に降り立つてきた。

「さて、いまだに出てこないところを見ると、勝ったにせよ、負けたにせよ、ジブラエルはもう参戦できない状態と見ていいだろう。つまり、俺だけになったというわけだな」

孤立無援だというのに、コカビエルは楽しそうに笑みを浮かべていた。

そんなコカビエルにアルミヤさんは眉をひそませながら言う。

「……もはや戦力は貴殿一人。目的である戦争など不可能なのではないのか？」
「ククク」

アルミヤさんの指摘に対してもコカビエルは笑みを浮かべていた。

「俺はあいつらがいなくても別にいいんだ。もともと、一人で戦争を起こすつもりだったのだからな」

……なんて野郎だ。一人だけでも戦争を起こそうってのかよ。

バチチチチチッ！

突如、新校舎で紅い雷が瓦礫を吹き飛ばした。

「……ジ^あブラ^いエルが酷い戦争狂とは言ってやがったが、筋金入りだなオイ」

粉塵の中から紅い雷を全身から迸らせたボロボロな状態のレンが現れた。

「無事だったか、レン!」

「……………どうにかな」

コカビエルがレンに問いかける。

「貴様が生きているということは、ジブラエルは負けたのだな?」

「……………ああ。最後の最後に派手なのをかましてくれたがな」

「——そうか」

レンの言葉を聞いてコカビエルが少し悲しそうに瞑目する。

バルパーの死には嘲笑ってはいたが、腹心の部下に対しては思うところはあみたいだな。

だが、一転してすぐさま不敵な笑みを浮かべる。

「さて、大地崩壊の術が発動するまであと数分といったところか。それまで楽しもう

じゃないか」

光の剣を手にしたコカビエルから感じられる重圧が増した！

ついに来たか、コカビエル！

俺たちも一気に臨戦態勢に入る！

「槐さん、これをー」

「すまないー！」

槐は木場から折れた刀に代わる日本刀型の魔剣を受け取っていた。

駆けだしたゼノヴィアが俺たちを通り過ぎるとき、呟く。

「同時にしかけるぞ」

ゼノヴィアの言葉を聞き、俺、槐、千秋、木場、塔城もその場から駆けだす。

「だあああッ！」

ゼノヴィアが正面から跳んで斬りかかる。

「はあああッ!」

さらに背後から木場が斬りかかる。

コカビエルは片手でデュランダルと聖魔剣を光の剣で迎え撃った。

「ほう! 聖剣と聖魔剣の同時攻撃か! おもしろい!」

二人の攻撃はまったく意に介してなかった。

「はあッ!」

すかさず、俺と槐はコカビエルの左右から斬り込む!

「そっ!」

さらに風を纏った千秋と塔城が上から強襲する。

両手は木場とゼノヴィアで塞がっている！ どうだ！

「バカが！」

黒い翼が鋭い刃物と化して斬りかかってきた！

『ぐあああああああつ?!』

俺たちは翼によつて難なく剣や刀のガードごと吹き飛ばされた！

塔城にいたつては千秋を庇い、『戦車』^{ルック}の防御力を易々と斬り裂かれて鮮血が吹き出していた。

すぐさまアールシアが駆けつけ、治癒の光を当ててくれているので、大事には至らないだろう。

「紅纏・伏雷！」

吹き飛ばされた俺たちの間を縫って、紅い雷を纏ったレンが斬り込む！
コカビエルは翼でレンを迎え撃つ。

「十の型・斬り嗣ぎ舞！」

襲いくる翼を高速の連続斬撃ですべて弾くレン。

そこへ、甲冑騎士たちを引き連れたアルミヤさんが斬りかかる。

「甘いわ！」

コカビエルはレンの刀を光の剣で押さえつけ、翼で聖剣のガードごと甲冑騎士たちを薙ぎ払う！

アルミヤさんは手に持つ聖剣を碎かれながらも翼を回避していた。

「エクスカリバーの複製はどうした？ そんななまくらでは相手にならぞ！」

哄笑するコカビエル。

次の瞬間、残り一体となった甲冑騎士が急激に高速で動きだした！

「何っ!?　ぐうっ!?」

急に加速した甲冑騎士に意表をつかれたコカビエルは背中を斬りつけられた！

見ると、甲冑騎士が持っていたのは、フリードが持っていた『天閃エクスカリバー・ラビッドリイの聖剣』だった

！

「ぐあっ!?」

さらにレンが即座に離脱し、その瞬間、甲冑騎士が大爆発した。

「………やってくれる！」

背中を斬りつけられ、爆発をまともにくらったにもかかわらず、コカビエルは嬉々としていた。

とはいえ、爆発のダメージが思いのほか少なかった。

流石は聖書に記されし墮天使。防御力も並大抵じゃないな。

「さあ、次はなんだ？」

そう言いながら、無数の光の槍が生みだされ、一斉に射ちだされた!

「クソツ! 飛電の太刀・紅雨!」

レンも無数の紅い雷の刃で光の槍を迎撃するが、数が多過ぎる!

『ぐあああああああつ!』

レンが討ち漏らした光の槍が俺たちを襲った。

なんとか直撃を避けたが、爆風でノーダメージとはいかなかった。

そんななか、比較的ダメージを最小限に抑えていたアルミヤさんがコカビエルに斬りかかる。

手に持つ聖剣は破壊と天閃のエクスカリバーだった。
アルミヤさんは破壊と天閃の能力でパワーとスピードを両立させて斬り込む。

「おもしろい！」

コカビエルも光の剣の二刀流で迎え撃つ。

エクスカリバーと光の剣がぶつかり合うたびに凄まじい衝撃波が発生してしまい、援護しようとして近づこうにも近づけないでいた。

「はあッ！」

部長と副部長がそれぞれ魔力と雷で、千秋が風をまとわせた矢で攻撃するが、翼であつさり迎撃されてしまった。

そうこうしているうちにアルミヤさんのエクスカリバーに亀裂が走り始めた！

アルミヤさんの因子による負担で刀身に限界が来ていた。

あの状況で得物を失うのは致命的すぎる！ どうする!?

「弧月紅刃!」

そこへ、レンの刀から約四十メートルに届きうる紅い刀身が伸び、神速の居合で振られた!

「——ッ!」

首筋に迫り来る紅い刃にコカビエルが目を見開く。

「ぐっ!」

コカビエルは強引に体勢を崩すことでレンの刃を躲しやがった。だが、それがつけ入る隙となり、アルミヤさんが斬りかかる!

「なめるな!」

コカビエルは光力の塊を地面に叩きつけ、光の波動がアルミヤさんとコカビエルを襲

う！

「ぐっ!?!」

光の波動で二人は吹き飛ばされるが、空中で体勢を立て直して地面に着地する。

なんて野郎だ。自分を巻き込んだ攻撃で強引に距離を取りやがった。

しかも、いまの攻撃で限界が来てしまったエクスカリバーが砕け散ってしまった。

「さすがにいまのは肝を冷やしたぞ。フッフッフッフ」

そう言うわりには、コカビエルは楽しそうに笑みを浮かべていた。

「聖魔剣よ!」

「ん?」

コカビエルの周囲に聖魔剣が出現した。

「まだ来るか? いいぞ、来い!」

聖魔剣は一斉にコカビエルに向けて切っ先を向けて飛ぶが翼によってあっさりと防がれてしまった。

「この程度か?」

そのまま翼によって聖魔剣を難なく砕いてしまった!
エクスカリバーに打ち勝った聖魔剣をあかも容易く!?

「うおおおおッ!」

そのすきに懐に飛び込んだ木場は突きを放つ!

「フツ」

だが、木場の渾身の突きをコカビエルは左手の人差し指と中指だけで受け止めてしま

う！

木場が聖魔剣をもう一本創りだし、二刀目を振るうが、それすらも右手の指で受け止められてしまう。

「フフ、バカが」

「まだだ！」

木場は大きく口を開けると、口周りに聖魔剣を創りだし、柄を歯で押さえながら勢いよく首を横に振った！

さすがにこれには虚をつかれたのか、コカビエルは聖魔剣を離して後方に退いた。入ったダメージは頬に横一文字の薄い切り口だけだった。

「貴様！」

コカビエルは笑みを浮かべ、木場めがけて強大な光力の塊を放つ！

そこへ割って入ったゼノヴィアが光力の塊をデユランダで受け止め、そのまま切り

払った。

「四の型——」

レンが居合の構えでコカビエルの背後に現れた!

「落葉切り!」

放たれた神速の居合。だが、コカビエルはまたも体勢を崩すことでそれを躲してしまっ
まった。

「同じ手は二度はくわん!」

「がはっ!」

崩した体勢のままコカビエルはレンを蹴り飛ばしてしまっ!

「弧月——」

吹っ飛ばされながらもレンは居合の構えをとる。

「——紅刃！」

再び紅い刀身を伸ばして居合で斬りかかる！

「ぐっ!?!」

体勢を崩した状態なうえ、虚をつかれた斬撃だったため、避けることは叶わず、コカビエルは肩を大きく斬り裂かれた。

「チツ！ しとめ損なつた！」

地面を転がりながら立ち上がるレンが毒づく。

吹っ飛ばされながらの体勢だったために急所を狙えなかったのだろう。

「はあああああッ!」

槐が正面から斬りかかる。

「九の型・双龍撃!」

「バカが!」

コカビエルが翼を使って槐を迎撃しようとする。

「それッ!」

「はッ!」

「ぐおあつ!」

だが、コカビエルの背後に現れた鶉と燕によつて、背中の傷口に蹴りを入れられ、コカビエルは苦悶の表情を浮かべてよろける。

さすがのコカビエルも傷口に一撃を入れられたのは堪えたようだな。

「はあッ！」

二連撃の刃がコカビエルに入った！

「——ッ！ うおおあッ！」

「きゃああっ!?!」

「ぐっ!?!」

だが、それでも決め手にならず、コカビエルは鶯と燕の足を掴み、槐に向けて投げつけた！

そのまま吹っ飛ばされる三人の影から俺は飛び出し、コカビエルの懐に入る！

スカールレット・フレイム
「緋い龍撃！」

残りのオーラすべてを込めて緋い龍撃を叩きこんでやった！
スカールレット・フレイム

「ぐおおおおおおおっ!?!」

コカビエルは地面の上を滑るように後方に大きく吹き飛ぶ。
勢いが止まり、顔を上げたコカビエルは狂喜の笑みを浮かべていた。

「ハハハハハッ! この俺がここまで手傷を負わされるとはな! おもしろいぞ!」

「……………これでもダメか……………。どうする!？」

レンのほうを見ると、鞆のカートリッジを交換しようとしていたが、予備カートリッジがなくなったのか、苦い表情を浮かべていた。おまけに疲弊で息づかいがかなり荒かった。

アルミヤさんも連続でエクスカリバーを複製した消耗が激しかったのかこちらも息づかいがかなり荒かった。

他の皆も肩で息をしていた。

クソツ、ダメーヅから来る疲弊もそうだが、前の戦闘の消耗が痛い……………!

「この調子ならもう少し本気を出してもよさそうだな!」

．．．．．これで本気じゃないのかよ．．．．．!?

どうする!? 消耗が酷い、コカビエルの実力がいまだ未知数、何より、仕掛けられた

大地崩壊の術のタイムリミットが近い!

そう思っていたら、件の大地崩壊の術の魔方陣が輝き始めた!

「ふむ、あと一分といったところか」

一分．．．．．だと．．．．．。

クソツッ! もう時間がない! どうする!?

「——頃合いか」

刹那、アルミヤさんが魔方陣の中央に降り立った!

その手に握られていたのは『支配エクスカリバー・ルイラーの聖剣』だった!

アルミヤさんはエクスカリバーを魔方陣に突き刺す。

支配の力で術式を止める気か!

「貴様! 術のエネルギーを!」

コカビエルがここで初めて驚愕をあらわにした。

見ると、魔方陣を通じて、エクスカリバーにエネルギーが流れ込んでいた!

まさか、アルミヤさんの狙いは町ひとつを崩壊させるほどの術のエネルギーを利用して、エクスカリバーの力をさらに高め、それを使ってコカビエルを倒すつもりなのか! 見ると、コカビエルが余裕を失くし始めていた。

つまり、アルミヤさんの策が決まればコカビエルを倒せる!

「させるか!」

コカビエルがアルミヤさんを妨害しようとしていた!

「紅月!」

レンがさせまいと、紅い雷の刃を飛ばしてコカビエルを攻撃する。

「くっ！」

コカビエルが紅い雷の刃を弾くと、レンはアルミヤさんとコカビエルの間に降り立つ。

「どれだけ時間を稼げばいい!？」

レンの問いかけにアルミヤさんは短く答える。

「——一分だ」

それを聞き、レンは不敵に笑みを浮かべる。

「OK! こつちもリミットは丁度一分かそこらだ! なら、こつからはスタミナ管理なしの全力全開だアツ！」

そう叫んだ瞬間、レンの雰囲気が一変した。

Life. 31 決着! VSコカビエル!

『極域』——それは『鍊域』の極致。鍊域の状態からより深い集中力と鬼刃一刀流を極めた先に至る境地。

その境地に夜刀神蓮火は至っていた。

「鬼刃一刀流・奥義——」

レンは前傾の体勢で居合の構えをとる。

その際、レンの瞳から鋭く赤い眼光が尾を引くように残像を残していた。これは極域に至った者に起こる身体的変化だった。

レンの構えを見て、コカビエルは即座に次に来るであろう一撃に備える。

「式ノ型——雷切!」

刹那、レンはその場にいた誰の目にも捉えられない速度で駆けだし、居合の一閃を振るっていた。

鬼刃一刀流・奥義——全部で七つの型が存在し、極域に至ることで初めて使用できる剣技だった。

『式ノ型・雷切』は速さを極めた神速の踏み込みから放つ居合の一閃。その速さはコカビエルでさえも目で捉えられなかった。

「ぐうっ！」

コカビエルはかろうじて居合の一閃を光の剣で防いでいた。

これはコカビエルが雷切を見切ったわけではなく、雷切が直線的な剣技であることと、数々の激戦を潜り抜けてきた経験からくる無意識の反射によるものだった。

それでも、神速の速度による運動エネルギーを乗せた斬撃の衝撃がコカビエルの腕を痺れさせる。

「ちいッ！」

コカビエルは即座に距離を取り、周囲に光の槍を生みだす。

「紅雨!」

「何!」

刹那、出現した光の槍は出現したそばからレンの紅雨によって弾かれていった。まるでそこに光の槍が出現するのがわかっていたかのように。

事実、その通りだった。

極域は錬域の状態よりもさらに動体視力や洞察力、反応速度や身体能力が上昇するが、最大の特徴は視覚だけでなく、五感すべての感覚が研ぎすまれ、鋭敏になることだった。それは単純に感覚が高められるだけでなく、人間では感じることができなかつたものを感じとることができるようになる。

元々、セイクリッド・ギア神セイクリッド・ギア器の影響で発達していたレンの聴覚は極域の領域では、筋肉の動きや空気の振動から発せられる音で相手の動きや物体の出現が察知できた。

「紅纏!」

レンは紅纏でさらに身体能力を上げ、コカビエルに斬り込む。

「おもしろい！」

コカビエルは光の槍を射ちだしながら、光の剣と翼でレンを迎え撃つ。

「肆ノ型——れつふうらんじん烈風嵐刃！」

レンは飛来する光の槍を、迫りくる光の剣と翼を連続の斬撃で斬り払った。

「肆ノ型・烈風嵐刃」は超高速で刀を振るい、相手の攻撃をすべて弾き落とす防御型の剣技。繰り出される連続の斬撃はさながら嵐のようであり、並大抵の攻撃は容易に弾き、その気になれば全方位の防御も可能だった。

これにレンの聴覚による察知能力が合わさることで、クロスレンジにおいては無類の防御力を発揮する。

しかし、コカビエルも大戦を生き抜いた猛者。攻撃を防ぎつつも、時折放たれるコカビエルを狙った斬撃を的確に捌いていた。

お互いに決め手に欠ける泥沼状態だったが、その均衡はすぐに崩れ始める。

「どうした! 技の精度がどんどん落ちていつてるぞ!」

レンはここまで、ほぼ休むことなく戦い続けていた。さらに、極域は無類の強さを発揮するが消耗が激しい。ここまでスタミナ管理をしていたレンだったが、それでも疲弊は酷く、それが技の精度に表れ始めていた。

対するコカビエルは手負いであれど体力には余裕があった。

とはいえ、コカビエルも悠長にしている余裕はなかった。

アルミヤの一撃を放つ準備が着々と進んでいたのだ。

アルミヤの特殊因子によって強化された聖剣の全力の一撃はイツサーに力を譲渡されたリアスの一撃を優に越えていた。そこに、この街を破壊するほどのエネルギーも上乘せされたら、さしもの自分でもただではすまない。

そう思いながらも、コカビエルは冷静にレンの剣技を見据える。

「はッ!」

ズバッ!

鮮血が飛び散り、レンの右腕が宙に舞った。

技の精度が落ちたことによる一瞬の隙をつかれ、コカビエルの光の剣によって斬られたのだ。

「終わりだ！」

得物を失い、体力の限界で攻撃を防ぐことも回避することも叶わないレンにコカビエルはとどめをさそうとする。

「「「はああああッ！」」」

コカビエルの背後から明日夏、槐、木場、ゼノヴィアが斬りかかる。さらに離れた場所から千秋が風を纏わせた矢を射っていた。

「邪魔だ！」

翼によって千秋の矢ごと明日夏たちは吹き飛ばされる。

同時にコカビエルは光の剣を千秋に向けて投擲する。

「きゃっ!？」

かろうじて直撃を避けた千秋だったが、代わりに黒鷹ブラックホークに直撃してしまい、黒鷹ブラックホークが原型をとどめないほどに破壊されてしまった。

「――バランス・ブレイク禁手化」

コカビエルが明日夏たちに気を取られていた一瞬の隙をつき、暮紅葉を口にくわえたレンは『紅蓮トランジエント・クリムゾン・ライトニングの霹靂一閃』を発動する。

「くっ!」

コカビエルは即座に翼でレンに斬りかかる。

刹那、レンは紅い閃光となった。

「ぐっ!?!」

レンの口にくわえられた暮紅葉の刃がコカビエルの脇腹を斬り裂いた。

だが、傷自体はそこまで深くはなく、コカビエルほどの強者なら大した問題にはならないものだった。

だが――。

「ぐおああああああああっっっ!?!?!」

暮紅葉の刃を伝って、傷口から流し込まれた紅雷がコカビエルの身を内側から焼いていく。

さしものコカビエルもこれには堪えたようで、倒れはしなかったものの、フラつき、膝をついた。

『トランスファー!!』

そこへ、イツセーがリアスと朱乃に力を譲渡する。

「くっ!」

膨れあがるリアスと朱乃の魔力を見て、コカビエルは懐からフェニックスの涙を取り出す。

さしものコカビエルも、いまの状態では二人の魔力を受けきれないと判断したのだ。フェニックスの涙がかけられ、コカビエルの傷が瞬く間に回復してしまう。

「消し飛びなさい!」

「雷よ!」

同時にリアスの魔力と朱乃の雷が放たれる。

コカビエルは両手とすべての翼を前に突き出し、二人の同時攻撃を受け止める。

「はあああああッ!」

リアスと朱乃は最後の魔力を振り絞って放出する魔力を強める。

「はあッ！」

コカビエルの翼が振るわれ、二人の攻撃がかき消されてしまう。

だが、時間は十分に稼がれた。

カアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

凄まじい波動を感じ、コカビエルは慌ててアルミヤのほうを見る。

そこには、先程よりもさらに輝きを放ち、膨大なオーラを発するエクスカリバーを振りかぶるアルミヤがいた。

コカビエルは即座に光の槍を投擲しようとするが、時すでに遅く、エクスカリバーは振り下ろされた。

「ぐっ?!」

オーラが収束して放たれた光の奔流をコカビエルは両手と翼で受け止めるが、光の奔流は容易くコカビエルの防御を打ち破る。

「——っっっ?!?!?!?」

光はコカビエルの叫びをかき消しながらコカビエルを飲み込んでいった。



強烈な閃光が止み、あたりを見渡すと、先程の一撃の余波でグラウンドは荒れ果てており、学園の損壊はさらに酷くなっていた。会長たちが張ってくれている結界もほぼ全壊状態だった。

町への被害はここからではわからない。あまり出てなければいいが。そして、肝心のコカビエルは——。

「.....っ.....」

上半身に着ていたものが完全に消し飛び、ボロボロな状態で仰向けに倒れていた。かすかにだが、うめき声を発していた。

あれをくらって、五体満足どころか、かろうじて意識まで保つてるとはな……。だが、あの様子じゃ、もう動けないだろう。

大地崩壊の術も、エネルギーを攻撃に転用されたことで術式の効力が消えて魔法陣が崩壊していた。

倒れたコカビエルを見て、イツセーが言う。

「……勝った……のか？」

イツセーの言葉に斬られた腕をアジアに治してもらってるレンが答える。

「ああ、音からも起き上がるのは無理な状態だったのがわかるぜ」

「そうでなくては困るがね」

アルミヤさんもこちらにやってきて言う。

レンもアルミヤさんも平常を装っているが、疲弊で呼吸が粗くなっており、もう限界

なのが見て取れた。

二人だけじゃない。他の皆もかなり疲弊していた。

特に部長と副部長は膝をついており、もう魔力を練れそうになかった。槐や木場、ゼノヴィアも肩で息をしていた。他はまだ余力はありそうだが、それでも疲弊で呼吸が粗くなっていた。

かくいう俺ももう限界だった。

「いまのうちにコカビエルを拘束しましょう」

部長が疲れた体をおして立ち上がる。

刹那、一発の銃声が鳴り響いた!

俺たちは慌てて銃声の発生源に目を向ける。

そこには、二階の校舎の窓からライフルを構えているカリスがいた。

カリスは笑みを浮かべると、即座に校舎の奥へと消えてしまった。

「まさかこの俺が人間に助けられることになるとはな……」

その声を聞き、俺たちは絶望的な表情を浮かべてそちらのほうを見る。

コカビエルが体から煙を上げながら立ち上がっていたのだ！

見ると、胸のあたりに注射器のようなものが刺さっていた。

その中身がフェニックスの涙だと誰もが容易に察することができた。

「……………最悪だ！　ここに來てのコカビエルの回復は俺たちの心を折るのに十分すぎるものだった！

「よもやこの俺を本当に倒すとはな。おまえたちをなめていたことを謝罪しよう」

コカビエルが笑みを浮かべて俺たちに敬意を払ってくる。

「こんなことならば、最初から俺が出て、万全な状態のおまえたちと本気で戦えばよかったな」

コカビエルが自嘲するように言う。

「しかし、仕えるべき主を亡くしてまで、おまえたち神の信徒と悪魔はよく戦うものだ」

「・・・・・・・・何!?!」

「・・・・・・・・くっ」

コカビエルの言葉にゼノヴィアは驚愕の表情を浮かべ、アルミヤさんは苦々しい表情をしていた。

他の皆も怪訝そうな表情をしていた。

「・・・・・・・・どうということ!?!」

「コカビエル! 主を亡くしたとはどういう意味だ!?!」

「おっと、口が滑ったか。そうだったな。おまえたち下々まであれの真相は語られていなかったな」

部長とゼノヴィアがコカビエルに問いかけると、コカビエルはおかしそうに吹き出していた。

「答えろ! コカビエル!」

「よせ、ゼノヴィア!」

ゼノヴィアはコカビエルに食ってかかるが、そんなゼノヴィアをアルミヤさんが制止する。

「フフフフ、フツハハハハ、ハツハハハハハ！ そうだな、そうだった。戦争を起こそうというのにいまさら隠す必要などなかったな！ フハハ！ 先の三つ巴の戦争で四大魔王と共に神も死んだのさ！」

コカビエルが告げた衝撃の事実には俺たちは絶句してしまう。

「……………う、ウソだ……………!?」

ゼノヴィアが酷く狼狽しだしていた。

無理もないだろう。敬虔な信徒であるゼノヴィアからしたら、認めたくない真実だろうからな。

「……………神が死んでいた？ バカなことを！ そんな話聞いたこともないわ!?」

「知らなくて当然だ。神が死んだなどと誰に言える? 我ら墮天使、悪魔さえも下々にそれらを教えるわけにはいかなかった。どこから神が死んだと漏れるかわかったものじゃないからな。三大勢力でもこの真相を知っているのはトップと一部の者たちだけだ。あとは何かしらのきっかけでこのことに至った者だな。先ほどのバルパーのようにな。ま、真相を知るその男に口封じとして殺されたがな」

コカビエルがアルミヤさんのほうを見ながら言う。

そうか、アルミヤさんは数少ないこの事実を知っている人物なのか。だからゼノヴィアと違い、そこまで動揺していないのか。

「あの戦争で、悪魔は魔王全員と上級悪魔の多くを失い、天使も墮天使も幹部以外のほとんどを失った。もはや純粋な天使は増えることすらできず、天使が墮ちることで増える墮天使も天使が増えなければいずれ増えることがなくなる。もはや人間と交わらなければ種を残せないまでになつてる。悪魔とて、純血種は希少なはずだ。どの勢力も、人間に頼らなければ存続ができないほど落ちぶれた。その人間は神がいなくては心の均衡と定めた法も機能しない不完全な者の集まりだぞ? だから三大勢力のトップ共は、神を信じる人間を存続させるためにこの事実を封印したのさ」

だからアルミヤさんはバルパーを殺したのか。不用意にこのことを知った者をのさばらせるわけにはいかないから。ましてや、バルパーなら周りに言いふらしかねないからな。

「……………ウソだ。……………ウソだ……………」

ゼノヴィアは力が抜けうなだれていた。

「そんなことはどうでもいい。俺が耐え難いのは、どの勢力も神と魔王が死んだ以上、戦争継続は無意味だと判断したことだ！ 耐え難い！ 耐え難いんだよ！ 一度振り上げた拳を収めるだど!? あのまま戦いが続いていたら、俺たちが勝てたはずだ！ アザセルの野郎も『二度目の戦争はない』と宣言するしまつだ！ ふざけるなッ！」

コカビエルは憤怒の形相で強く持論を語っていた。

「……………主はもういらつしやらない？ それでは、私たちに与えられる愛は……………」

「？」

アーシアの疑問にコカビエルはおかしそうに答える。

「フツ、神の守護、愛がなくて当然なんだよ。神はすでにいないのだからな。ミカエルはよくやっているよ。神の代わりとして天使と人間をまとめているのだからな。まあ、神が使用していた『システム』さえ機能していれば、神への祈りも祝福も悪魔祓いもある程度は動作するだろうしな。とはいえ、神を信じる者は格段に減っただろう。聖と魔のバランスを司る者がいなくなっただけ、その聖魔剣のような特異な現象も起こるわけだ。本来なら聖と魔は混じり合うことなどあり得ないからな」

「アーシア!?!」

イツセーのアーシアを呼ぶ声を聞き、そちらを見ると、アーシアがコカビエルの言葉のシヨツクのあまりにその場で意識を失っていた。

塔城が慌てて支え、近くの木まで運んで座らせた。

「……無理もない。……私だって、理性を保ってるのが不思議なくらい

だ………」

ゼノヴィアはかろうじて意識を保っているが、これまでの勇ましい彼女の姿はどこにもなかった。

「不覚をとってしまったが、こうして回復した。なら、当初の予定通り、このまま俺は戦争を始める！ おまえたたちの首を土産に、俺だけでもあのと続きをしてやる！ 我ら墮天使こそが最強だと、サーゼクスにも、ミカエルにも見せつけてやる！」

ルシファー、ミカエル。どちらも聖書に記されし強大な存在。コカビエルはそんな存在に一人でも相手しようとしている。俺たちはそんな奴と戦っていた。

………勝てない。

この場にいるほとんどの者がそう考えてしまい、意気消沈していた。

一度勝てたのは、様々な要因とコカビエルが俺たちのことをなめていて遊びがあったからだ。

それがなくなっただけ、もはや限界な俺たちにこいつを倒せるすべなんて――。

「ふざけんなあ!」

諦めかけていた俺たちの耳にイツセーの叫びが聞こえてきた。

「おまえの勝手な言い分で俺たちの町を、仲間たちを消されてたまるかッ!」

このような状況の中でもイツセーの闘心は衰えていなかった。いやむしろ、俺たちの町の危機、仲間の危機に、その元凶であるコカビエルに対する怒りで高まってさえた。

「それに、それに俺はな、ハーレム王になるんだああッ!」

「………はあ?」

イツセーが高々と宣言した目標、いや、野望を聞いたゼノヴィアは呆れたような声を出していた。

まあ、普通はそんな反応だろうな。

「てめえなんか俺の計画を邪魔されたら困るんだよ!」

「ククク、ハーレム王？　ハハハ、赤龍帝はそれがお望みか。なら俺と来るか？」
「え？」

「ハーレム王などすぐになれるぞ。行く先々で美女を見繕ってやる。好きただけ抱けばいい」

コカビエルの甘言に衝撃を受け、イツセーがその場で硬直していた。

「そ、そ、そんな甘い言葉で……お、俺が騙されるものかよ……」

なんとかコカビエルの誘いを断っていたがブレブレだった。

おまえなあ……

「間があるのはおまえだから仕方ないとして、もうちよいシャキツと拒否しろよな……」

「えっ、間があるのはいいの!？」

「そうぞ！　敵の甘言に乗りかけるなど！」

木場と槐からツツコミを入れられるが、俺は木場に言う。

「槐はともかく、木場。おまえはイツセーがあんなことを言われて、揺れないと思うか？」

俺の問いかけに木場少しの間考えるがすぐ「……………無理だね」と答えた。——
そういうことだ。

「イツセー！」

「はい!?!」

部長が激怒していた。

「……………す、すみません。どうにもハーレムって言葉に弱くて……………」

「そんなに女の子がいいなら、この場から生きて帰れたら私がいろいろとしてあげるわよ——」

「……………マジですか!? ……な、なら、おっぱいを揉んだりだけでなく、

『Explosion!!』
エクスプロージョン

ライザーとのレーティング・ゲームのときのように籠手に変形すると、イツセーは駆けだす。

「くっ!」

コカビエルは光の槍を投擲するが、イツセーはそれを籠手で弾き飛ばす!

「でやあああッ!」

「ぐあっ!」

光の槍を弾かれたことで虚をつかれたコカビエルの顔面にイツセーの拳が突き刺さった!

「.....ぐっ.....!」

イツセーの拳をくらって後ずさったコカビエルは異質なものを見たかのような目でイツセーを睨む。

「……女の乳首を吸う想いだけでこれほどの力を解き放つ赤龍帝だと!?　なんだ、おまえは?　どこの誰だ!」

イツセーは堂々と胸を張って答えた。

「覚えとけ、コカビエル!　俺は兵藤一誠!　エロと熱血で生きる、『赤龍帝の籠手』の宿主で、リアス・グレモリーさまの『兵士』だ!」

カツコつけてるつもりなんだろうが、いろいろとダメダメだった……。

だが、そんなこいつを見ると不思議と活力が湧いてきた。

「そうよ!　私たちはまだ負けていない!　諦めたときが負けなのよ!　イツセーに続きましよう!」

『はい、部長!』

他の皆も戦意を取り戻し始めていた。

「おーおー、皆張りつきってるなあ。なら、俺たちももうひと踏ん張りしねえとな!」
「むろん、私もこのまま終わるつもりはない」

レンとアルミヤさんも先ほどまで疲弊していたとは思えないほど戦意を昂ぶらせていた。

槐が不思議そうにイツセーを見ていた。

「……不思議なものだな。あれほど絶望感が漂っていたというのに、イツセーがあんなふざけた理由で奮起するだけで、これほど周りに活力を与えるとは」

「イツセーには、不思議とそういう魅力があるんだよ。そういうおまえはどうなんだ?」
「ああ、不思議と私も活力が湧いてきている」

俺と槐はお互いに笑みを浮かべる。

「ククク、下級悪魔の分際で俺の顔に触れるとはな！　これはもしろい！　おもしろいぞ、小僧！」

コカビエルは笑みを浮かべ、嬉々とした表情で翼を広げていた。

どうやら、俺たちの戦意に感化されたみたいだな。

俺たちも身構えたときだった――。

「――おもしろがってるところ悪いが、おいたはここまでだぜ、コカビエルさま」



突如割って入った声。この場に誰のものでもない。

「誰だ!？」

コカビエルが声がしたほうを見る。

僕たちもそちらのほうを見る。

そこには長い後ろ髪を結った長身で大柄な体躯の金髪の青年がいた。白いロングコートを着ており、黒い手袋をしていた。

「……貴様、『ネスト』の者か？」

ネスト? 聞いたことのない組織の名だった。

だが、それよりも気になったのは、男の隣にいた明日夏くんが着ているのと似た黒いロングコートを着た黒髪の青年だった。

なぜか、そのヒトを見て明日夏くんが驚愕の表情を浮かべていたからだ。

明日夏くんだけじゃない。イツセーくんや千秋さん、鶴さん、燕ちゃん、槐さんもレオンさんも同様の反応をしていた。

「ヤッホー。明日夏、千秋、イツセーくん、鶴ちゃん、燕ちゃん、槐ちゃん、レンくん」

その男性は明日夏くんたちに向けてほがらかに手を振っていた。

ふと、その男性の顔を見て、誰かに似ていると思った。それに、どこかで見たような

?

「明日夏、彼は一体？」

部長も気になったのか、明日夏くんに訊いていた。

「——兄の土騎冬夜です」

それを聞き、僕は納得した。誰かに似ているとは思ったけど、明日夏くんに似ているんだ。見覚えがあつたのも、明日夏くんが見せてくれたアルバムの写真に写つてたからだ。

クールで少し無愛想なところがある明日夏くんとは違って、愛嬌があつて穏やかそうなヒトだった。

イツセーくんからも、優しく、穏やかなヒトだとは聞いていた。

レンさんが明日夏くんのお兄さん——土騎冬夜さんに訊く。

「冬夜さん、いつこつちに？」

「ついさっきね。樹里さんから連絡をもらって、受けてた仕事を速攻で終わらせて急いで飛んできたんだ」

士騎冬夜さんがコカビエルに言う。

「うちの弟と妹、その友達たちがお世話になったみたいですね?」

ぞっ………。

にこやかにしていたけど、それとは裏腹に凄まじいまでのプレッシャーがコカビエルに向けて発せられていた。

直接向けられているわけでもないのに、思わず萎縮してしまった。

「——お礼をしないといけませんね」

士騎冬夜さんはコートをなびかせ、腰のホルスターから銃を取り出し、コカビエルに銃口を向ける。

「ほう、大した圧力だ。さすがは六人しかいないと言われるSランクハンターというわけか」

コカビエルが受けてたとうと身構えると、士騎冬夜さんに金髪の青年が言う。

「あー悪いが、冬夜。せっかく駆けつけて、弟たちにカツコいいところ見せたいところだろうけど、おまえの出番はたぶんないぜ」

「だろうね」

士騎冬夜さんはプレッシャーを放つのをやめると、銃を回転させてホルスターに戻してしまった。

金髪の青年が僕たちのほうを見て自己紹介を始めた。

「はじめましてだな、グレモリー眷属に教会の聖剣使いさん。俺はシオ・ヴィリアース。『神の子を見張る者』のエージエントチーム、『ネスト』の副リーダーだ。うちのもんが迷惑をかけちゃったな」

コカビエルがシオ・ヴィリアースに言う。

「……貴様、アザゼルの差金か？」

「ああ。総督さんからの伝言だ。『流石に勝手が過ぎるぞ。悪いがおまえには重い罰をくださなければならぬ。だが、俺とおまえの仲だ。大人しく戻ってくるのなら、少しは温情をかけないこともない』とのことだ」

「……アザゼルめ！」

墮天使総督アザゼルからの伝言を聞き、コカビエルは忌々しそうにしていた。

「ふざけるな！ ここまで来て、いまさら拳を収められるか！」

「総督さんもあんなならそう言うだろうって言ってたよ。だから、大人しく戻らないのなら、力づくでも連れてこいって言われてるよ」

「貴様に俺を倒せるとも？」

コカビエルの言葉にシオ・ヴィリアースは肩をすくめる。

「自信はあるけど、俺たちの仕事は後始末なんでね。あんたを懲らしめるのは別の奴の仕事さ」

そう言い、シオ・ヴィリアースは空に向けて叫ぶ。

「そら、いい加減仕事しねえと、総督さんに説教されるぜー」

「——そうだな。ちようど見てるだけなのも飽きてきたところだ」

シオ・ヴィリアースに答えるように空から声が聞こえてきた。

僕たちは夜空を見上げる。

そこには、月を背に宙に浮かぶ背中から神々しいまでの輝きを発している翼を生やし、体の各所に宝玉が埋め込まれた白い全身プレイト・アーマー鎧を着た者が僕たちを見下ろしていた。似ている——。イツセーくんが着たあの赤い鎧とそっくりだった。

「……『パニシング・ドラゴン白い龍』か！」

コカビエルが忌々しそうにその者の名を言った。

パニシング・ドラゴン

『白い龍』――

ウエルシュ・ドラゴン

『赤い龍』に對を成す伝説のドラゴン。

コカビエルは舌打ちをする。

「チツ！ 邪魔立ては――」

コカビエルが言葉をすべて言いきる前に、彼の黒き翼が宙を舞った！

パニシング・ドラゴン

『白い龍』がコカビエルの背後に回り込んで、コカビエルの翼を引き千切ったのだ。

一瞬、何が起こったのか理解できなかつた。僕でもぜんぜん見えなかつた……。

「まるで薄汚いカラスの羽だ。アザゼルの羽はもっと薄暗く、常闇ようだぞ？」

パニシング・ドラゴン

『白い龍』は手に持つ翼を興味なさげに投げ捨てた。

声からして若い男性か？

「………貴様！ 俺の羽をッ！」

翼をもがれ、怒り狂うコカビエルだが、『パニシング・ドラゴン白い龍』は小さく笑いこぼす。

「地より下の世界に堕ちた者に羽なんて必要ないだろう?」

「——ッ!?!」

激昂したコカビエルは手を頭上に掲げ、手元に巨大な光の槍を出現させる。

『デイバイドDivide!』

翼から音声が届く、コカビエルの巨大な光の槍がどんどん縮小していく。

「——我が名はアルビオン。我がセイクリッド・ギア神器、『デイバイン・デイバイン白龍皇の光翼』の能力のひとつ。触れた者の力を十秒ごとに半減させていき、その力は俺の糧となる。急がねば人間すら倒せなくなるぞ?」

——伝説の通りか。

赤龍帝は持ち主の力を倍加して何かに譲渡し、白龍皇は相手の力を半減させ、持ち主

の糧とする。

コカビエルは残った翼を羽ばたかせ、『パニシング・ドラゴン白い龍』——アルビオンに立ち向かっていく。

だけど、コカビエルはアルビオンにいいようにもてあそばれていた。

『デイバイドDivide!』

そうこうしている間にも、コカビエルの力が半減していく。

『デイバイドDivide!』

何度目かの音声。コカビエルの動きは僕でも容易に相手できるほどにまで落ち込んでいた。

「……つまらない。もう少し楽しめると思ったんだがな。やはり先ほどの戦いでかなり消耗していたようだ。ダメージが回復したといってもこの程度か」

アルビオンが視界から消え去り、光の軌跡を生みだしながらコカビエルへ直進する。

「ぐおおおおおっ……!!?」

アルビオンの拳がコカビエルの腹部に深く突き刺さった。

「………バカな……!!? ……この俺がッ……!!?」

そのままアルビオンはコカビエルと共に閃光となって地面に向かっていく。

「アザゼルウウウウウウウウウウウッ!」

地面に激突する寸前、コカビエルの怨嗟の断末魔が響き渡った。

ドゴオオオオオオオオオオ!

コカビエルが地面に叩きつけられ、あたりに凄まじい轟音が鳴り響いた。

Life. 32 決戦後

コカビエルが叩きつけられた場所に巨大なクレーターができあがっていた。

その中心では、ボロボロのコカビエルが意識を失っており、その傍らにアルビオンが立っていた。

アルビオンは興味が失せたようにコカビエルから視線を外すと、シオ・ヴィリアースに言う。

「あとは任せるよ」

「へいへい。了解しましたよ、白龍皇さま」

それだけ話すと、アルビオンはこの場から飛び去ろうとする。

『無視か、白いの？』

イツセーに宿るドラゴン、『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンドライグがアルビオンに話しかけた。

『起きていたか、赤いの』

アルビオンの光翼からも、アルビオンとは別の声が発せられた。

いまの声の主が『白い龍』パニシング・ドラゴンアルビオンか。

『せっかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ。いずれ戦う運命だ。こういうこともある。また会おう、ドライグ』

『ああ、またな、アルビオン』

赤龍帝と白龍皇の会話の終了に合わせてアルビオンの宿主が飛び去ろうとすると、今度はイツセーが話しかけた。

「おい！ どういうことだ!? おまえはなんなんだ!? てか、おまえのせいで俺は、俺は部長のお乳を吸えなくなっちゃったんだぞ！」

.....怒るところはそこかよ。

「すべてを理解するには力が必要だ。強くなれよ、いずれ戦う俺の宿敵くん」

それだけ言い残すと、アルビオンの宿主は白い閃光となつて、今度こそこの場から飛び去つてしまった。

誰も彼も予想外な戦いの終焉に言葉を失っていた。

「リアス」

そこへ、会長が眷属たちを引き連れて現れた。

「ソーナ！ 無事だとは聞いていたけど、こうして無事な姿を見て安心したわ」

「ええ、アルミヤさんに救つていただきました。それにしても、まさか『神の子を見張る者』が乱入してくるとは」

「自分たちの組織の者が起こした暴動を自分たちの組織の者で收拾させたカタチというわけね。でも、おかげで町は救われたわ。.....だけど、学園が.....」

「……ええ。ですが、町にはいつさい被害が出ていないのが不幸中の幸いです」
部長と会長は甚大な被害を被った学園を見つめて、悲痛な表情を浮かべていた。

「重ね重ね、うちのもんが迷惑をかけちまったな。壊れちまった学園は俺たち『神の子を見張る者』が責任をもつて修復する」

部長と会長にシオ・ヴィリアースが頭を下げ、真摯に謝罪の言葉を口にしていた。

「シオ」

シオ・ヴィリアースに声がかけられた。

声が出たほうを見ると、メガネをかけた赤髪の青年が三人の少女を引き連れていた。少女の一人は青年と同じ赤髪で、どこことなく顔つきが青年と似ていた。

他の二人は双子なのか、顔がそっくりで、片方は金髪、もう片方は銀髪をしていた。

「よう、シュウ。そっちは終わったのか？」

「ああ」

シオ・ヴィリアースはシユウと呼んだ青年の肩に手を回しながら俺たちに青年たちを紹介し始める。

「こいつらは皆、『ネスト』のメンバーだ。こいつは赤羽修嗣^{あかばねなおつぐ}。うちの頼れる参謀だぜ。こっちの赤髪はこいつの妹の赤羽ほのかだ」

「どもー」

紹介された赤羽ほのかは俺たちに軽い挨拶をしながら手を振る。

「んで、こっちのそっくりたちは金髪がレティシア・シュバリエ、銀髪がクロエ・シュバリエ。容姿と名前から察せると思うが双子だ」

「はじめまして」

「ふん」

レティシア・シュバリエは恭しく挨拶をしていたが、クロエ・シュバリエのほうはそつ

ぼ向いていたn。

どくん。

——なんだ？

なぜかわからないが、クロエ・シユバリエから目がはなせなかった。

「——なに？」

向こうもなぜか俺のほうを見ていたので、目が合ってしまう。

「なんだ？　うちのかわいい新人に一目惚れでもしたか？」

シオ・ヴィリアースがニヤニヤしながら訊いてきた。

「——いや、そんなんじゃないよ。ただ、やっぱり双子だったんだなって思ったただけだ」

「——あっそ」

クロエ・シュバリエは再びそっぽ向いてしまう。

赤羽修嗣がシオ・ヴィリアースの手を払い、学園を見て言う。

「……あいつめ、仕事を増やしやがって。観賞なんてしてないでさっさと仕事をしていれば、ここまで被害は出てなかっただろうに」

赤羽修嗣の言葉には呆れと怒りが混じっていた。

「どうやら、あのアルビオンの宿主について言っているようだな。」

確かに、どうも奴は俺たちの戦いを最初から見ている感じだったからな。

早急に介入してくれていれば、ここまでの被害は出ていなかったかもしれないな。

「まあ、そう言うなって」

シオ・ヴィリアースは赤羽修嗣を宥めようとする。

「……おまえといい、一姫かずきや二葉ふたば、総督や鳶雄たちはあいつに甘すぎる。だから調子に乗るんだ」

赤羽修嗣は呆れた様子で頭痛を抑えるように額に手を当てながら嘆息していた。兄貴が苦笑しながら言う。

「まあ、彼はかわいい弟分みたいな感じだからね。かわいい弟にはつつい甘くなっちゃうから」

兄貴の言葉にシオ・ヴィリアースが「そうそう」と同意していると、赤羽修嗣は兄貴にも「……おまえも相変わらずか」と呆れた眼差しを向けていた。ていうか、兄貴、知り合いだったのか。

「シオ、おにい、コカビエルさまの拘束、終わったよお。あと、フリードはまだ生きてたから、応急処置しておいた」

「おう、お疲れ、ほのか」

「まだ訊き出さなければならぬことがあるからな。始末はそのあとだ」

いつの間にか、赤羽ほのかがコカビエルたちの拘束をしていた。

「二人は俺が連れて行く。あとは頼むぞ」

「おう」

「りょーかーい」

赤羽修嗣はコカビエルとフリードを担ぐと、転移用の魔法陣でどこかへ転移していった。

「シオさん、ほのかさん」

レテイシア・シユバリエがクロエ・シユバリエを連れて校舎のほうからやってきた。どうやら、校舎の中を確認していたようだな。

「校舎内には誰かいたか？」

「ジブラエルさまの遺体だけでした」

ジブラエルだけ……つまり。

レンが頭を掻きながら言う。

「あー、音で確認してたけど、ベルティゴ・ノーティラスなら、どさくさに紛れてこの場から逃げてたぜ。コカビエルの相手で手一杯だったんで言うヒマなかったんだよ」

……やっぱり生きてたか。

とはいえ、コカビエルとの戦いの最中に妙な横やりを入れられなかったのは助かったが。

「おやおや、アルミヤくんの要請で急いで駆けつけたのですが、やはり間に合いませんでしたか」

そこへ眼鏡をかけた神父服の老人が金髪のススターを連れて現れた。
アルミヤさんが教会に増援を呼んでいたのか。

「へえ、『修羅』に『バーサーク・シスター狂聖女』とは、これまた手練れが来たもんだな」

シオ・ヴィリアースが老神父とシスターを見て、随分と物騒な名を口にしていた。

「——その呼び方やめてって言ったわよね、シオ・ヴィリアース」

シスターは見るからに不機嫌そうにシオ・ヴィリアースを睨んでいた。

「おや、知人でしたか？」

「ええ。少々共闘をしたことが……」

老神父の問いかけにシスターはバツが悪そうに答える。

敵である墮天使組織の者と共闘したなんて教会に属するシスターとしては後ろめた
いものがあるんだろう。

「ふむ。まあ、よいでしょう。何か事情があったのでしようし」

老神父はそのことに対して特に咎めることはしなかった。

「今回も敵である悪魔と共闘することになってしまったわけですから。なんでしたら、過去にも三大勢力が手を取り合ったこともありましたがね」

「へえ、かつて『修羅のダンテ』と呼ばれ、敵どころか味方からも恐れられるほど苛烈に悪魔や堕天使を倒してきた男とは思えないセリフだな？」

シオ・ヴィリアースの言葉に老神父は苦笑しながら肩をすくめる。

「昔の話です。いまではすっかり衰えてしまった老いぼれですよ」

「よく言うぜ。いまでも、並の上級悪魔じゃ相手にならねえ実力のくせして」

確かに、佇まいは自然体でありながら一分の隙もなかった。相当な実力者なのがお伺え
た。

「そういえば、まだ自己紹介をしていませんでしたね。私はダンテ・アツカルド。アルミヤくんの要請で教会側からの援軍としてやってきた教会エクソシストの戦士です」

「アリシエラ・ヴィスコンティ。同じく教会エックソシストの戦士よ」

二人が俺たちに自己紹介すると、兄貴がアリシエラ・ヴィスコンティに話しかける。

「ひさしぶりだね、アリシエラ」

「ええ、いつぶりかしらね」

こっちとも知り合いかよ。

俺の疑問を察したのか、兄貴が説明してくれた。

「アリシエラやネストの古参メンバーとは、ギルドからの依頼で赴いたところで度々出会ってね。なんやかんやあって一緒に戦ううちに仲良くなったんだ」

「そういうことだ」

「そうね。だけど——」

アリシエラ・ヴィスコンティがシオ・ヴィリアースを指さしながら言った。

「ひとつ訂正しなさい、冬夜。こいつらと仲良くなった覚えはないわよ」

まあ、片や墮天使組織のエージェント、片や教会のエクソシストだからな。共闘することはあっても、仲良くはしたがるまいだろうな。

すると、兄貴が言う。

「ああ言ってるけど、彼女は別にシオたちのことを嫌ってるわけじゃないんだよ。立場上、仲良くできないってだけで、敵同士じゃなかったら、内心では仲良くしたいって思ってるんだよ」

「そうなのか?」

言われて見てみると、シオ・ヴィリアースが楽しそうにアリシエラ・ヴィスコンティに話しかけており、そのたびに彼女は不機嫌そうにはしてはいるが、シオ・ヴィリアースを毛嫌いしてるふうには見えなかった。

「さて、僕はレンくんからここであつたことを聞いてくるから、あとのことは彼らに任せ、明日夏たちはゆつくり休みなよ」

「ああ、そうさせてもらおう」

正直、もう立ってるだけでもキツかったからな。

兄貴がレンのところに向かうと、俺はアジアのほうを見る。

神の死というショックで意識を失っていたアジアだったが、いつの間にか目覚めており、イツセーと千秋に介抱されていた。

とりあえず、イツセーたちと普通に会話しているところを見る限り、心の均衡は保つていそうだな。

これはイツセーたちの存在が大きいおかげだろう。

続いて、木場のほうを見る。

木場はバルパーの死体のほうに視線を向けていた。

俺は木場に歩み寄って話しかける。

「終わったな」

「うん」

「その割にはあまりスッキリしてない顔だな？」

木場の表情はなんとも言えない感じだった。

「仇を自分の手で討てなかったのが心残りなのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。彼に剣を向けたときにはもう復讐心からじゃなく、二度と僕たちのような存在を出しちやいけないという想いで剣を握っていたから。ただ——」

「奴の研究を引き継いだ者がいる、か？」

「——うん」

バルパーが言うには、奴のように被験者を殺すことはしていないが研究自体は続けられてるみたいだからな。

それに、カリスタたちが所属している『CBR』もだ。カリスタはおそらく抜け目ない。こつそりとバルパーの研究データを手に入れて、利用している可能性もあった。

そのことがある限り、木場の『聖剣計画』に関する戦いは終わらないのかもしれない。た。た。

「やったじゃねえか、イケメン！　へー、それが聖魔剣か。キレイなもんだな」

イツセーが俺たちのもとまでやってくると、興味深そうに木場の持つ聖魔剣を覗き込む。

イツセーの言う通り、確かに白いのと黒いのが入り混じり合ってなんとも幻想的な見た目をしていた

「……イツセーくん、僕は——」

「ま、細かいことは言いつこなしだ。とりあえず、いったん終了ってことでいいだろう？ 聖剣もさ、おまえの仲間のこともさ」

俺も続けて木場に言う。

「そうだな。何より、おまえの仲間たちの望みはおまえに自分たちのぶんまで幸せに生きてほしいことだったんだからな」

「うん」

俺とイツセーの言葉に木場は憑き物が落ちたような表情で笑顔を見せてくれる。

「ああ、なんかいろんなことがありすぎてき。いまは考えるのもメンドクセーや」

イツセーはそう言いつつも、何かに思いを馳せていた。

おそらく、あのアルビオンの宿主のことだろう。

二天龍を宿した宿命でいずれ戦う運命にあるみたいだからな。少なくとも、あいつは戦う気まんまんだった。

今回は何事もなかったが、それはイツセーが消耗していたことと、実力の差があまりにも大きく離れていたからだ。

あと、立場的なものもあったんだろう。イツセーは悪魔、奴は墮天使側だったからな。今後、イツセーが成長し、実力をつけたとしても、問答無用で戦いを仕掛けてくることはないはずだ。……正直、不安だが。

そういえば、兄貴は奴のことを知ってるみたいな感じだったな。あとで訊いてみるか。

「………木場さん」

アジアが心配そうに木場に訊く。

「また一緒に部活できますよね？」

神の不在を知り、自分だつてとても辛いはずなのに、それでも木場のことを心配していた。

「裕斗」

木場がアジアに答えようとしたとき、部長が木場の名前を呼ぶ。

「裕斗、よく帰ってきてくれたわ。それに禁手だなんて、主として誇らしい限りよ」

木場はその場に膝まづく。

「部長。僕は部員の皆を、何より命を救っていただいたあなたを裏切つてしまいました。お詫びする言葉も見つかりません……」

「でも、あなたは帰ってきてくれた。それだけで十分よ。皆の想いを無駄にしてはダメよ」

「部長……」。僕はここに改めて誓います。僕はリアス・グレモリーの騎士として、あなたと仲間たちを終生お守りします」

木場がそう言うと、部長は木場の頬をなで、抱き締めた。

「ありがとう、祐斗」

それを見たイツセーが嫉妬して木場に詰め寄る。

「コラッ！ 部長から離れる、イケメン！ 俺だって『兵士』じゃなくて、『騎士』になって、部長を守りたかったんだぞ！」

そう言うといッセーは怒り顔から一転して笑顔で告げる。

「でも、おまえ以外に部長の『騎士』が務まる奴なんていねえんだ。責任持ちやがれ」

「うん、わかっているよ、イツセーくん」

「さて、裕斗、明日夏」

「はー?」

いきなり俺と木場は部長に呼ばれる。

部長のほうを見ると——部長の手が紅いオーラで包まれていた!?

「あ、あれっでもしかして!？」

イツセーがケツを押さえながら戦慄していた。

というか、千秋と燕、あと離れた場所からこちらを見ていた匙も同じ反応をしていた。

まさか——。

「……あ、あの、部長。勝手なことをした罰として、その魔力のこもった手でケツ叩きつて言うんじゃない?」

「ええ、その通りよ。あなたも裕斗も勝手なことをして皆を心配させたのだから、罰としてお尻叩き千回ね」

「ええっ!？」

「マジか……………」

俺も木場も罰は覚悟していたが、まさかこの歳になってケツ叩き、それも魔力がこもった手で、しかも千回……………。

イツセーが爆笑しながら言う。

「あははは！こりやいや！頑張って耐えろ、イケメンコンビ！」

それを聞き、俺と木場は苦笑いを浮かべながらお互いを見る。

「……………勝手して心配かけたのは事実だからな。腹括るか……………」

「あははは……………そうだね」

その後、俺と木場は部長にケツを叩かれ、それを見たイツセーと匙、あとドレイクには終始、腹を抱えて爆笑された。

だがまあ、涙目になりながらもどこか晴れやかな笑顔で耐えている木場を見ていれ

ば、必要経費だったかなと思えた。



駒王町のとあるビルの屋上――。

「――なるほど。このような結末になりましたか」

カリスは自身が操る死体との視界のリンクを切ると、手に持つタブレットPCにこれまで得たデータを記録する。

「あれが現白龍皇ですか。過去・現在、そして未来・永劫において最強と評されるだけです。ね。おかげさまで、せっかくフェニックスの涙でコカビエル殿を復活させたというのに、一瞬で終わってしまいましたよ。できれば、『龍弾デア・ドラッグヘシユツツの射手』の士騎冬夜、『不屈』のシオ・ヴィリアースの戦闘データもほしかったのですがね」

カリスは苦笑しつつも記録を終え、タブレットPCの電源を切る。

「まあ、強化装甲服や特殊義眼の運用データに我々の脅威となりえる者たちの戦闘データは十分に得られましたし、成果は上々ですかね」

「……どこがだよ」

得られた成果に概ね満足していたカリスは背後から声をかけられる。

「……高い金で手に入れた貴重なフェニックスの涙を大量に消費したうえに、安くない前金で雇ったはぐれやはぐれ候補どもも全滅。引き入れる予定だったバルパー・ガリレイも死んだ。大損じゃねえかよ」

「おや、エラディオさん」

カリスが振り向いた先にいたのは、片眼が隠れるように前髪を伸ばした金髪で褐色肌の男がいた。

男の名はエラディオ・ウルタード。

カリスと同じく、『CBR』に所属するエージェントの一人だった。

「迎えに来てくれたのですか？」

「ああ。ダンナが早くおまえから今回のことを聞きたいんだよ」

「ご足労をおかけします」

「別に。これが俺の仕事だからな。それよりも、どうすんだよ、バルパー・ガリレイのことは？」

「優秀な方だっただけに残念でしたよ。間が悪かったばかりに……」

それを聞き、エラディオは嘆息する。

「元教会の人間なら『神の死』なんて知ってしまえば、口封じされるって気づくだろうに。調子に乗って意気揚々と口にしようとするとかアホだろ」

エラディオの苦言にカリスは苦笑する。

「そこは、研究者という人種の悪癖でしょうね。覚えがあります」

「それでどうすんだ？ 『聖剣使い量産化計画』はそこまで重要な計画じゃなかったとは

いえ、それでも戦力増強という観点で見れば無視できない計画だったろうが。そのためにもあの爺が必要だったてのに……」

「そこは問題ありません。こんなこともあろうかと、彼の研究データはこちらにバッチリコピーしてますよ」

カリスは懐からUSBメモリーを取り出してエラディオに見せる。

「抜け目ねえな」

「いえいえ。とりあえず、これがあれば計画は進められます。もともと、バルパーさんがいたほうが進捗はよかったですんでしようが」

「ないものねだつてもしょうがねえだろ。さつきも言ったがそこまで重要な計画でもないからな」

「それもそうなんですが」

「とはいえだ。やっぱり今回は大損じゃねえのか？」

「あの方は十分満足してくれるとは思いますが」

「だろうな。ダンナは費用面の損失はいっさい気にしないからな」

「無尽蔵ともいえる資金があるからこそでしょうが」

「まったくだ。まあいい。仕事した分の給料を払ってくれるのならやり方に文句はねえよ。ほら、もう用がねえのなら、さっさと帰るぞ」

「ええ、お願いします」

カリスがエラディオの隣に立つと、エラディオは手を前にかざす。

すると、エラディオの手元から二人を包むようにドーム状のサークルが形成される。カリスは学園がある方向に顔を向けながら言う。

「皆さん、またお会いしましょう。特にあの方のお気に入りである土騎家の皆さん」

明日夏たち土騎兄弟にとって不穏なことをカリスが口にした次の瞬間、サークルごとカリスとエラディオはその場から消え去った。

L i f e . 3 3 衝撃の展開です！

コカビエル襲撃事件から数日後――。

「やあ、赤龍帝」

部室に入った俺たちを出迎えたのはゼノヴィアだった。

ゼノヴィアの他にも、アルミヤさん、ダンテ・アツカルド、シオ・ヴィリアース、あと、レンと槐もいた。

レンと槐はともかく、アルミヤさんたちはおそらく、事後報告とかそういうのであるだと察せる。

ただ、ゼノヴィアは違う。

なぜなら駒王学園の制服を着てるのだ。

「ゼノヴィア!? な、なんでここに!?!」

イツセーの疑問はもつともだろう。

ただまあ、思い当たる節はあるんだよな。

俺はゼノヴィアに訊く。

「まさかとは思うが、ショックでヤケになって部長の眷属になったとかじゃないだろうな？」

「概ねその通りだよ」

そう言うと、ゼノヴィアの背中から悪魔の翼が生えた。

それを見て、イツセーたちはさらに驚愕していた。

「神がいないと知ってしまったんでね。破れかぶれで頼みこんだんだ」

「彼女は新しくグレモリー眷属の『騎士』^{ナイト}になったのよ。ふふふ、デュランダル使いが加わったのは頼もしいわ。これで祐斗と共に剣士の両翼が誕生したわね」

部長は楽しげだ。

ま、聖剣使いが眷属にいるのは確かに心強い。レーティングゲームの際には相手が悪魔だから相当猛威を揮うだろうな。

「今日からこの学園の二年に編入させてもらった。よろしくね、イツセーくん、明日夏くん」

「……………真顔でかわいい声を出すな」

「……………それ、イリナの真似のつもりか？」

「そうなんだが、なかなかうまくいかないものだな」

「しかし、本当にいいのか、おまえ？」

「神がいない以上、もはや私の人生は破綻したに等しいからな。……………だが、敵だった悪魔に降るといえるのはどうなのだろうか……………？　いくら魔王の妹だとはいえ、私の判断に間違いはなかったのか？　お教えください、主よ！」

ゼノヴィアはイツセーの質問に答えるなり、何やらぶつぶつとつぶやき始めたと思ったら、今度は神に祈りでした。

「あうっ!？」

悪魔なのに神に祈ったことでダメージを受けて、頭を抱えて蹲ってしまった。

なんだろうな。初めて会ったときは冷たい印象だったのに、蓋を開けてみれば、変わったというか、ちよつとポンコツなところがあるな、こいつ。

「あつ、そーいや、イリナたちは？」

イツセーが思いだしたように訊いた。

「本部に帰ったよ。私のエクスカリバーを合わせた五本とバルパーの遺体を持ってね。破壊された四本は芯となっている『かけら』の状態で回収した。芯があれば錬金術で再び聖剣として鍛え直せるからね。つまり、奪還の任務は成功したわけだ。ただ、私が悪魔になったことをイリナとユウナはとても悲しそうにしていたよ。イリナにいたっては涙を流しながら『裏切り者』とまで言われてしまったよ。まあ、神の不在が理由とは言えなかったからね。特にイリナは私よりも信仰が深い。神の不在を知れば、心の均衡がどうなるか。ただ、以外にもライニーからは終始目を合わせてくれなかっただけで、何も言われなかったよ。悪魔を嫌悪している彼のことだから、いろいろと悪態をつかれ

「と思ったんだけどね」

あいつは姉を無理矢理悪魔に転生させられている。その経験から、裏に何か事情があると察したのかもしれないな。

「そういえば、デュランダルは所持したままなのか？」

教会にとって最強兵器にあたるであろうデュランダルをみすみす悪魔側に渡しているのかと、俺はアルミヤさんとダンテ・アツカルドのほうを見る。

俺の疑問を聞いてアルミヤさんが言う。

「現状、デュランダルを扱えるのは、私と彼女と前任者だけなのだよ。その前任者も前線から退いている。そして、知つての通り、私は自前の剣以外を使えない事情がある。因子の移植による人工聖剣使いもデュランダルを扱えるレベルにまで達していない以上、いまの教会にはデュランダルを扱える戦士は事実上いないということだ。そのため、エクスカリバーよりは重要視されていないのだよ」

「でも、アルさん。本部はそれで納得したんですか？」

ゼノヴィアの問いにダンテ・アツカルドが代わりに答える。

「無論、報告したあとはいろいろと言われましたよ。ですが、『あること』を仄めかしたらすぐに何も言われなくなりました」

『あること』——すなわち、『神の死』。

それを聞き、あることを確信した俺は身構えながらダンテ・アツカルドに訊く。

「やっぱり、あんたも知ってるんですね。『神の死』を」

この場にいることでなんとなくそんな気はしてたし、ゼノヴィアもちよくちよく神の死を口にしていたのに何も反応を示さなかったからな。

そして——。

「アルミヤさん。エクスカリバー奪還は表向きで、あんたの本当の任務は『神の死』を知った者の排除、そうなんじゃないんですか？」

バルパーを殺したときの手際といい、おそらく間違いないだろう。

俺の言葉を聞き、俺と一緒に部室に入ってきたイツセーたちも同じように身構える。

「皆、落ち着きなさい」

すると、部長が俺たちを宥める。

ダンテ・アツカルドが言う。

「安心しなさい。先程、リアス・グレモリーにも言いましたが、私とアルミヤくんはキミたちに危害を加える気はありませんよ」

部長のほうを見ると、部長が頷いた。

それを見た俺たちはとりあえず、警戒心を抱きながらも構えを解く。

まあ、その気があったのなら、もっと早い段階で行動に移していただろうからな。

「キミの言った通り、私とアルミヤくんの本当の任務は主の不在の秘匿、およびそれを

知ってしまった者を秘密裏に処理すること、それが我々『執行者』の役割です」

『執行者』——教会にはそんな組織があるのか。

「私もさつき知ったことだ」

ゼノヴィアも知らなかったみたいだな。

『執行者』は神の死を知らされた者たちで構成された少数精鋭の組織です。任務の内容上、その存在は極秘とされており、存じているのは『熾^セ天使^{ラフ}』の方々と神の死を知らされていない一部の上層部の方々だけです」

いわゆる暗部組織ってやつか。

「今回のような神の死を知る者が関わっている事件には必ず私のように執行者の誰かが一人は派遣され、ゼノヴィアたちのような同行者やリアス・グレモリーたちのような協力者に神の死を悟られぬよう立ち回ることを求められる。そして、神の死を知ってし

まった者がいた場合は独自の判断で処理を任される。ゼノヴィアの場合は不慮の事故だったことと、これまでの教会での貢献度を加味し、また、人柄からいたずらに神の死を吹聴しようとはしないだろうと判断し、追放処理ということにした」

アルミヤさんのゼノヴィアへの処遇を聞いて、イツセーが訊く。

「その執行者つてのにゼノヴィアがなることつてできなかつたんですか？」

イツセーの質問にダンテ・アツカルドが答える。

「執行者には選ばれるのは、厳選な審査を経て主の不在を知っても揺るがぬ信仰心を持ち、心を平常に保つていられると判断された者だけなのです」

だとしたら無理だったな。ゼノヴィアは神の死を知った直後に冷静ではいられなくなっていたし、なんだつたら、そのあとに破れかぶれで悪魔に転生してるからな。

「ところで、俺たちはどうなんですか？ 部長たちは悪魔で、おまけに魔王の身内だつて

ことで、おいそれと処断できなかつたんだろうが、悪魔じゃない俺たちは躊躇する必要はないんじゃないですか？」

「リアス・グレモリーたちやキミたちに関しては、これまで接してきたなかでゼノヴィアと同じくいたずらに吹聴することはないと判断したまでだよ。これでも、ヒトを見る目はあるほうだ」

会ってそんなに経ってないのに、ずいぶんと信頼してくれてるな。

まあ、神の死なんて世間に広まったら、世界は大混乱に陥るのは間違いないからな。好き好んでそんなことをする気はない。

「——それに、キミたちに手を出すということは、この男を敵に回すことになるだろうか
らね」

そう言うと、アルミヤさんは後方に視線を向けた。

俺たちはアルミヤさんの視線の先のほうを見る。

「やつほー」

ティーカップとお茶菓子が入った皿を載せたお盆を持った兄貴がいた。兄貴を見てシオ・ヴィリアースが茶化すように言う。

「確かに。本気の冬夜を敵に回したら、教会は甚大な被害を被ることになるだろうからな」

「冬夜さんって、そんなに強いんですか？」

イツセーの質問を聞き、俺はコカビエルが言っていたあることを思い出す。

「そういえば、コカビエルが兄貴のことを『Sランクハンター』って言ってたが、『Sランク』ってなんだ？」

「私も初めて知ったのですが？」

俺も知らなかったみたいだな。

ハンターのランクは最大で『A』までだ。『Sランク』なんて聞いたことなかった。俺の質問にレンが答える。

「『Sランク』ってのは、多大な功績を残し、ハンターの中でも圧倒的な戦闘能力を持ったヤツに政府から与えられる特例のランクだ。他のハンターたちよりも待遇もよくなったり、政府からの極秘の依頼を任せられたりするみたいだ。なんだつたら、政府直属のエージェントとしてかなり高待遇で迎えられたりするみたいだぜ」

一介の賞金稼ぎが政府直属のエージェントか。大した出世だな。

「——とまあ、ここまで聞けば、大出世のように聞こえるけどな」

レンが途端に苦笑いを浮かべる。

兄貴が苦笑交じりに言う。

「もともと、自分たちのお抱えの戦力を欲していた政府が、高ランクのハンターを引き入れていてね。中でも強大な戦闘能力を持つ僕たちの手綱を何がなんでも握りたいんだよ。ちょうど、その頃に起こった『五大宗家』からのはぐれ者たちによるとある高校の一学年の生徒ほぼ全員が行方不明になる事件で一部の日本政府が『五大宗家』に対して

不信感を覚えて、戦力確保に躍起になってたしね」

イツセーが首を傾げながら兄貴に訊く。

「五大宗家ってなんですか？」

「古くから日本を魑魅魍魎から守ってきた異能力集団の一族だよ」

「陰陽師とかそんな感じですか？」

「まあ、だいたいそんな感じ」

ふと見ると、部長と副部長が複雑そうな表情をしていた。

事情を知っているであろう木場と塔城も似たような表情だ。

『五大宗家』の一角のお家の名は『姫島』——そう、副部長と同じ苗字だ。

最初は別にめずらしい姓じゃないから、同じなのは偶然だと思ってたが、戦闘時に巫女姿になっていたことからもしかかしてと思ったが、この反応からして間違いのないな。

副部長は姫島家の人間だ。それも、複雑な事情がある。

シオ・ヴィリアースが若干の呆れを含ませながら言う。

「それだけ聞けば正義の味方っぽく聞こえるけど、実際はちよつと問題のある一族なんだけだな。『五大』の名の通り、五つのお家があつて、お家ごとに異なる異能を扱うんだが、その一族に伝わる異能に適性を持たなければ、どれだけ力を持つていようと、たとえ宗家の出身であろうと排斥されるという仕来りがあつてな。そうやって『五大宗家』から追い出された者たちが『五大宗家』に恨みを持つて起こした事件も少なくねえ。さつき冬夜が言つていた事件もそのひとつだ」

そういえばその事件、ニュースでもやつてたな。

ハワイ諸島への修学旅行中の学生たちを乗せた豪華客船が沈没事故にあつて、乗つていた生徒全員が行方不明になつたという事件が。

結局、行方不明となつていた生徒たちは奇跡的に全員生還したことが報道されたが、裏で異能力者が関わつてたとはな。

「まあ、その件には今回のようにうちを離反した幹部が関わつてたんだがな……。俺ら『ネスト』も事件解決に駆りだされたよ」

その事件でも『神の子^ッを見張る者^ッ』の離反者、しかも幹部クラスが関わつてたのかよ。

「どうやら、思ってた以上の大きな事件だったみたいだな。」

「ま、そういう古い仕来りを優先するあまり、そのせいでそういう事件が起こりまくれば、古くから日本を守ってきたとしても安心して国の安全は任せられねえわな。そうなるってくると、自分たちの都合で動かせる戦力がほしくなるのも当然だ。特に冬夜たちのような実力者ならなおさらだな」

「まあ、本当のところはそれだけの力を持った僕たちがどこの勢力にも属さないでフリーになってることを不安視していたところもあるんだろうけどね。実際、僕たちSランカーはなかば強制的に政府に引き入れられたからね。高待遇とはいえ、多忙だし、面倒事や汚れ仕事を押しつけられることもあるし。ま、一応、そこそこ自由にやっていいようにはなっているけどね」

「なんだか、ここまで聞くと、あまり大出世と喜ばなさそうだな。兄貴の忙しさにも納得だ。」

「ところで、その『Sランク』って、極秘なんじゃないのか？」

ふと、疑問に思ったことを訊いてみた。

「うん、一応ね。ただでさえ、僕たちのような若手が台頭してきていることに不満を持つてるヒトたちが多くなか、傍から見れば若手を優遇しているようなこの『Sランク』制度が知られれば、不満が大爆発するだろうからね。だから、政府以外だと、ギルドの上層部と一部のAランカーにしか明かされてないんだよ。例外として、Sランカーが信頼の置けるヒトには明かしてもいいようになってるよ。千春や樹里さんも知ってるし、明日夏たちにも遅かれ早かれいずれ明かすつもりだったよ」

俺たちの場合は信頼の置けるというよりも、兄貴が身内に甘いだけののような気もするがな。

「ちなみに雲雀さんとリン兄——俺らの一番上の兄貴も『Sランク』だけ」

レンの追加の追加情報に俺はさらに驚く。

雲雀さん、レンと槐の兄である夜刀神竜胆^{りんどう}。

兄貴から二人の実力のことは軽く聞いてはいたが、それほどまでとはな。

それと同じ立場である兄貴はのほほんと自分が淹れた紅茶と作ったお茶菓子を俺たちに振る舞っていた。

とてもそんなスゴい人物には見えないな。

まあ、常に自然体でいられるつてのは、実力者である証拠でもあるがな。

「相変わらずおまえが淹れた茶と作った菓子はうめえな」

「よかつたら、シオ。これ、『ネスト』の皆に」

「おお、サンキュー。うちの女性陣、おまえの菓子に目がねえからな」

そう言つて、兄貴はお菓子が入っているであろうデカイ紙袋をシオ・ヴィリアースに手渡した。

「これ、アリシエラに渡してもらえますか？」

「これは？」

「彼女が好きなマカロンと他にもいろいろと。よかつたら、今回の事件に関わったメンバーにも」

「では、ありがたくいただきますよう」

「レンくん、これ孤児院の皆に」

「お、皆喜びますよ」

ダンテ・アツカルドとレンにもお菓子を手渡していた。

俺も皿の上のお菓子をひとつつつまむ。

うん、相変わらずうまい。

他の部員の皆も紅茶とお菓子を舌鼓をうっていた。

「さて、そろそろ本題に入りましょうか」

「そうですね」

部長がティーカップを置き、そう切りだすと、ダンテ・アツカルドが言う。

「教会は今回のことで悪魔側——つまり魔王に打診するそうです。『堕天使の動きが不透明で不誠実のため、遺憾ではあるが連絡を取り合いたい』——と」

あくまで遺憾なんだな。まあ、敵対関係だから当然か。

「それと木場祐斗くん——いえ、いまはイザイヤくんと呼ばせていただきます」

そう呼ばれた木場が目を見開く。

イザイヤ——それが木場のかつての名前か。

「バルパー・ガリレイの件について過去逃したことに関して正式な謝罪が送られました。私からも謝罪します。あなたたちに行われていた数々の非道な行い、そのような機関にバルパー・ガリレイのような男をのさばらせてしまったことを深くお詫び申し上げます。これであなたの同胞たちの無念が少しでも晴れてくれるとよいのですが」

「……………そうですか」

ダンテ・アツカルドが真摯に深々と頭を下げ、木場への謝罪を口にした。

「うちからも総督さん自らが悪魔側と神側に報告したぜ。今回の件はコカビエルさまが三すくみの均衡を崩し、戦争を再び起こそうと自身に賛同した連中を連れて起こした独断専行。『神の子を見張る者』はいっさい関わっていないどころか、何も知らなかったあ

りさまだ。このへんはおまえらも知つての通りだ。でだ、そのコカビエルさまは今回の罪を問われ、総督さんの手によって『地獄の最下層』での永久冷凍の刑に処された」

永久冷凍、つまり、誰かが開放しない限り、もう表に出ることはないということか。

「近いうちに天使側の代表、悪魔側の代表、アザゼルが会談を開くらしいわ。今回の件を受けて、一度トップ同士が集まり、今後の関係について話し合おうということになったの」

マジか。三大勢力のトップたちが一堂に集まるなんて、とんでもないことだぞ。

まず間違いなく、どんな結果になろうとも、今後の世界に影響が出るだろう。

「私たちも事件に関わつた者として、その会談に招待されているわ。そこで今回の報告をしなくてはいけないの」

部長の言葉にイツセーたちが驚いていた。

無理もない。そんな集まりに呼ばれば誰だつて驚く。

「当然、どの勢力に属しているわけじゃない俺たちも参加ですよ？」
「ええ」

俺たちもがつつり関わったわけだからな。

「レンちゃんと槐ちゃんには会談の顛末を事細かく資料にして提出しろってギルドから」
「うげ、やっぱりそれやらされるのか。今回の事件のことも俺たち視点で事細かく資料をまとめろって言われているのにメンドクセーな」

「仕方がありませんよ、兄上」

レンと槐は別件で面倒事があるみたいだな。

「さて、アルミヤくん。私たちはそろそろお暇しましょうか」
「そうですね」

紅茶を飲み終えたアルミヤさん、ダンテ・アツカルドが立ち上がる。

「俺もそうするか。俺たちは一応、敵対関係だからな。あんまり長居すると、うるさそうな連中が出てきそうだからな」

二人が立ち上がるのに合わせて、シオ・ヴィリアースも立ち上がる。

「では、会談のときにまたお会いしましょう。それから士騎冬夜くん。お茶とお菓子、ごちそうさまでした。それとお土産もありがとうございます。できることなら、我々教会の敵にならないことを祈りますよ」

「俺もごっそさん。菓子サンキューな」

ダンテ・アツカルドとシオ・ヴィリアースが兄貴に礼を言うと、三人は部室から退室していった。

「じゃ、俺と槐も今回の事件の資料をまとめなきゃだから帰るわ。行くぞ、槐」

「はい、兄上」

「んじゃ、会談でまた」

レンと槐も部室から退出していった。

「ふう………」

二人が出ていったところのため息を吐いた。

激戦後だつてのに、情報量が多かったり、まだまだひと悶着がありそうで、なんだか精神的に疲れた。

「兄貴、お茶のおかわりをくれ」

「もう淹れてあるよ」

俺がおかわりを要求することを読んでいたのかすでに用意されていた。おまけにグイッと一気飲みしたい気分だったことも察してくれていたのかアイステイーで用意してくれていた。

アイステイーを受け取ると、一気に飲み干した。

「だいぶお疲れのようだね」

「そりゃ、あんだけの激戦のあとだつてのに、極秘の情報をいっぺんに知らされたうえに、三大勢力のトップたちの会談に招待されたんだぞ。それに、ここんとこイベント続きだったしな」

レイナーレ、部長の婚約騒動、そして今回のコカビエル、イツセーが悪魔になつてから途端に騒動続きだ。

まあ、どの件も自分から積極的に関わつてゐるわけなんだけども。

「アーシア・アルジェント。私はキミに謝らねばならない」

「え?」

ゼノヴィアは深く頭を下げる。

「主がいらないのならば、救いも愛もなかったわけだからね。本当にすまなかつた。キミの気が済むのなら、殴つてくれてもかまわない」

「そ、そんな、私はそのようなことをするつもりはありません」

突然の謝罪にアーシアは慌てていたが、すぐに微笑む。

「ゼノヴィアさん。私はいまの生活に満足しています。悪魔ですけど、大切なヒトに――大切な方々に出会えたのですから。私はこの出会いと、いまの環境だけで本当に幸せなんです」

アーシアは聖母のような微笑みでゼノヴィアを許した。

「そうか、ありがとう。そうだ、ひとつお願いを聞いてもらえるかい？」
「お願い、ですか？」

首をかしげて聞き返すアーシアにゼノヴィアは笑顔で言う。

「今度、私にこの学園を案内してくれないか？」

「はいー！」

アーシアも笑顔で答えた。

初めの出会いは最悪なものだったが、こうして仲良くなるのはいいことだ。
ゼノヴィアも悪いヤツじゃないと思うしな。

「我が聖剣デュランダルの名にかけて、そちらの聖魔剣使いキミとも手合わせしたいものだね」

「望むところだよ。今度は負けないよ」

木場も笑顔で返した。

木場の全身から自信と共に何か力強いものを感じる。

今度はいい勝負しそうだな。ちよつと楽しみになってきた。

部長が手を鳴らす。

「さあ、新入部員も入ったことだし、オカルト研究部も活動再開よ!」

『はい、部長!』

全員が元気よく返事をする。

その日、ひさしぶりに俺たちは部室で談笑した。



休日、松田と元浜考案のカラオケにやってきた俺たちは各々で楽しんでた。

イツセーはマイクを片手にアニソンを熱唱し、松田と元浜がイツセーに野次を飛ばしていた。

千秋と鶴とアーシアも楽しそうにマラカスを振っており、塔城はカラオケそっちのけでピザやらアイスやらを食べていた。

燕と霧崎と桐生は選曲中だ。

ちなみに、追加メンバーとして木場、槐、レンも来ていた。

木場は元々誘う予定だったし、せつかくだからと槐とレンも誘った。松田と元浜は槐の参加にあからさまにテンションを上げ、レンの参加にあからさまにテンションを下げていた。

ちなみに匙のことも誘ったんだが、「会長から異性交遊を禁止されているんだ」と涙を流しながら断られた。相当来たそうにしていたな。

「ふう、歌った歌った」

歌い終えたイツセーはアジアの隣に座ると、アジアに歌を促す。

「アジアも歌おうぜ」

「はい！ この日のために歌を練習してきましたから！」

以前遊んだときは、危うく聖歌を歌いそうになってイツセーと一緒に慌てて止めたんだよな。

「槐はどうだ？ あれからうまくなったか？」

実は槐、かなりの音痴だった。何回歌っても0点にしかならなくて、逆にスゴいなと思った。

「フツ、あれから耳がよい兄上監修で特訓したからな。特訓の成果を見せてくれる！」

おお、気合入ってるな。前回の結果が相当悔しかったんだろう。

「ちなみに成果はどうだったんだ？」

レンに聞いてみると、レンは苦笑いを浮かべる。

「とりあえず、0点にはならないと思うぜ……………」

成果は一応あったんだな……………。

ちなみに、レンは逆に歌がうまい。さっきから、満点ばかり出していた。

まあ、『龍サウンド・レシーバーの耳』の恩恵で絶対音感レベルで耳がいいからな。

「俺、ドリンクのおかわり注いでくるけど、ついでに注いできてやるから、おかわりほしいヤツはグラスとドリンクのリクエストをくれ」

自分とおかわりがほしいヤツのグラスを持ってドリンクバーに向かう。

「イツセーがオレンジ、松田と元浜がコーラ、塔城がメロンソーダ、桐生がリンゴ、レンがウーロン茶、俺はコーヒー、と」

おかわりを注いだグラスを持って部屋に戻ろうとする途中、トイレ付近の椅子に座っているイツセーと木場の二人と鉢合わせた。

「二人ともトイレか?」

「……いや、部長と朱乃さんから水着の自撮り写メが来てな。鼻血が出ちまったんで、トイレで拭いにな」

「僕はちよつと、あの事件のことでイツセーくんに一言お礼をね。明日夏くん、キミにもお礼を言わせてくれ。——ありがとう」

わざわざそのために抜け出して、ここで待ってたのか。

「おまえの同士も、部長や皆も許したんだ。だからいいさ。イツセーもだろ?」

「ああ、俺も別にいいんだよ」

木場は俯く。

その口元では笑みが浮かべられていた。

「グラス持つの手伝うよ」

「俺も持つよ」

「ああ、頼む」

グラスを二人に持たせ、三人で軽く談笑しながら戻る。

「よし、戻ったら、オカ研男子でトリオとシャレこもうぜ！」

「しようがねえな」

「はいはい」

その後、戻った俺たちは無駄に熱いトリオを披露してやった。

……ただ、桐生がそのさまの写メに撮って、それが学園中に広まったせいであらぬ噂が広まってしまった。

イツセーと二人でカンベンしてくれと思うのだった。



「なあつ、また負けた!？」

俺は現在、悪魔稼業の真つ最中です。

依頼主は最近、俺のお得意さまになったワル系イケメンのヒトだ。

「キミと対戦するため、ずいぶんやりこんだからな。こここのところ、ずっとご無沙汰だったろ?」

「すみません。ちょっと、忙しかったんで」

エクスカリバーだのココビエルだのとドタバタしてたからな。

「しかし、大人買いしましたね?」

「キミにゲーセンに連れて行ってもらってからすつかりハマっちゃまってな」

「スツゲ、ハードも新しいのから古いものまで。余程のマニアでもここまですげ揃ってます

んよ」

奥の棚には最新のゲーム機から何世代か前の古いゲームが納められていた。相当のマニアだな。

「集めだすと止まらなくなる性分だね。俺のコレクター趣味は異常だとかよく言われるよ」

——ん？　いまの言葉、どこかで聞いたような？

「さて、次はレースゲームで勝負しようか。後ろの二人も交えて四人対戦とシヤレこもうぜ」

そう言い、依頼主は後ろで俺たちの対戦を観戦していた明日夏と千秋を呼んだ。

実は今回、複数人対戦をしたいとのこと、人数を集めてくれて要望があつたんだ。

で、他の眷属の皆は自分たちの稼業で手が空いてなかつたから、代わりに明日夏と千秋が来たわけだ。

依頼主がゲームをセットしているのを見ながら明日夏と小声で会話する。

(話には聞いていたが、だいぶ変わったヒトだな)

(だろ。払ってくれる対価も気前がよくてな)

ホント、依頼内容に反して対価がすごい豪華なんだよな。

「よし、準備完了だ。早速やろうぜ」

そして始まったレースゲーム。

俺の得意なゲームだったし、向こうは初心者なのもあって、最初は俺が圧倒していた。だけど――。

「一通り覚えたぜ。そろそろ、追い抜くか」

あっさりと抜き返されてしまった!

そして、そのままゴール。俺たちの負けだった。

「さあ、もう一勝負しようか。悪魔くん——いや、赤龍帝」

「——え？」

依頼主の口にした言葉に俺たちは固まってしまった。

恐る恐る依頼主のほうに視線を向けると、依頼主は立ち上がり、不敵な笑みを浮かべて俺たちを見下ろしていた。

「………あんだ、何者だ？」

明日夏が恐る恐る訊いた。

バサツ！

「ハッ!？」

次の瞬間、依頼主の背中から十二枚もの漆黒の翼が展開されていた！

依頼主が名乗る。

「俺はアザゼルだ。墮天使どもの頭をやってる」

第四章 停止教室のヴァンパイア

Life. 1 魔王と姉の来訪

「冗談じゃないわ！ 堕天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて！ しかも、私のかわいいイツセーにまで手を出そうとするなんて、万死に値するわ！」

部長が眉を吊り上げて、怒りを露にしていた。

つい先程まで、イツセーは悪魔稼業にでかけていた。依頼主は、最近お得意さまになったという外国人の男性。——その依頼主の正体が堕天使の総督アザゼルだったのだ。

向こうの要望で人数がほしいということ、自分たちの稼業で手がはなせなかった部員たちのかわりに付き添った俺と千秋も驚かされた。

千秋にいたっては、イツセーを殺す指示を出していたこともあつて殺意を全開にして襲いかかろうとしたので、慌てて取り押さえた。返り討ちにあうのが目に見えていたからな。

「本人が言うには、この町に潜伏していたのはコカビエルの動向を探るため、まさか墮天使総督自身が潜伏している思わないだろうかという心理的なものをついた行動だったらしいです」

「それはわかるけど、だからって、素性と気配を隠してイツセーと接触していたなんて……」

確かに。コカビエルの動向を探るだけなら、わざわざ悪魔稼業の依頼主に扮する必要はないはずだからな。

いくら対価を支払っていたといえど、立派な営業妨害だった。

「そもそも、目的のコカビエルを捕えたのだから、もうこの町にいる理由はないはずよ。いくらトップ同士の会談があるからといっても、悪魔の縄張りであるこの町に墮天使の総督がいつまでも滞在するなんて大問題よ……」

「……やっぱ、俺の『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアを狙ったのかな？」

イツセーが不安を口にしていった。

アザゼルは神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアに造詣が深く、神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギア所有者を集めていると聞いてる。墮天使にいい想いを抱いていないイツセーが不安を覚えるのも無理はない。

そんなイツセーの不安を和らげるように木場が言う。

「大丈夫だよ。僕がイツセーくんを守るからね」

なんか、木場が熱い視線をイツセーに向けていた。

そのせいで、イツセーが少し引いてた。

「あの日から僕は誓ったんだ。たとえ何者かがキミを狙っていたとしても、僕はキミを守ると。キミは僕を助けてくれた。僕の大事な仲間だ。仲間の危機を救わないでグレモリー眷属の『騎士』ナイトを名乗れないさ」

なんか、主人公がヒロインに向けるようなことを言いだしたぞ、こいつ………。

「問題ないよ。僕の禁バランス・ブレイカー 手とキミの『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアが合わさればどんな危機でも乗り越えられるような気がするんだ。……ふふ、少し前まではこんな暑苦しいこと

を口にするタイプではなかったんだけどね。それになぜかキミといると、なんだか胸の辺りが熱くなるんだ。でも、嫌な感じじゃないんだ……」

「……キ、キモいぞ、おまえ……。ち、近寄るな！ ふ、触れるな！」

ほんのり頬を染めながら言う木場にイツセーはガチ引きをしていた。

「そ、そんな、イツセーくん……」

イツセーに拒絶されたことで木場はシユンとしていた。

そんな反応すると、余計引かれるぞ。

「しかし、どうしたものかしら……。あちらの動きがわからない以上、こちらも動きづらいわ。相手は堕天使の総督。下手に接することができないから、文句も言いつらいわね……」

下手につつけば、悪魔と堕天使の関係が悪化しかねない。

これからトップ同士の会談が控えてる以上、そんなことはできないからな。

「そんなに気にしなくても大丈夫だよ」

いつの間にか、兄貴がお茶を用意していた。

「アザゼルさんはどちらかといえば問題児なヒトだけど、悪いヒトじゃないよ」

いまいち安心できない評価だな……。

「ていうか、アザゼルとも顔見知りなのか、兄貴？」

「うん、『ネスト』、あと『刃スラッシュ・ドッグ 狗 チーム』っていうエージェントチームのメンバーと仲

良くなった縁だね。あと、僕の神セイクリッド・ギア 器に興味があったこともあるかな」

「兄貴の神セイクリッド・ギア 器 って、アザゼルが興味を持つほどのものだったか？」

兄貴の神セイクリッド・ギア 器の能力は知ってるが、ありふれた類の『龍トウワイス の 手クレイティカル』などよりはめずらしいかもしれないが、そこまでスゴいものという印象は抱かなかった。

「まあ、能力をパツと見た感じじゃ、そんなにスゴい神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギア っていう印象は抱かないだろうね。なんだったら、完全上位互換があるしね」

そうなんだよな。能力だけ見れば、完全上位互換といえる神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアがあるんだよな。

まあ、もしかしたら神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアに造詣が深いアザゼルならではの観点では、何かあったのかもしれないな。

「で、アザゼルって、どういうヤツなんだ？」

他の皆も兄貴に注目していた。

ただ一人、副部长だけは無関心なのか、視線をそらしていた。——というより、聞きたくないって感じだな。

副部长は墮天使の幹部の一人、バラキエルの娘。そして、そのことをかなり嫌悪していた。

父親との間に何かがあったのは確かだろうが、一体何があったんだ？
部長の眷属になつてることとも関係あるのかもしれないな。

「アザゼルさんはぎっくり言えば、面倒見がいい、悪戯好きなヒトだよ。少なくとも、皆がいままで出会ってきたどの墮天使よりはマトモだよ」

「でも、あいつはイツセー兄を！」

「あつ、千秋、ストップ！」

アザゼルがイツセーを殺す指示をしたことを千秋が言及しようとして、兄貴は慌てて止めようとするがすでに手遅れだった。

「そのアザゼルってヒト、イツセーくんにかかしたの？」

鶯が低い声音で訊いてきた。

「あつ………」

「あちやー………」

イツセーが悪魔になったことは話しても、その過程でイツセーが死んだことは鶯と燕には内緒にされていた。

それを聞けば、二人とも酷いショックを受けるのわかりきっていたので兄貴が配慮したのだ。

「……………こうなると仕方ねえか。」

「……………アザゼルは当時のイツセー、人間だった頃のイツセーでは『赤龍帝の籠手』ブリステッド・ギアの力を制御できないと判断され、抹殺指令を出したんだ。そして、イツセーは派遣されてきた墮天使によつて殺された。そのイツセーを部長が転生悪魔として生き返らせてくれたんだ」

「なっ!?!」

案の定、鶯と燕は酷くショックを受けていた。

鶯にいたつては泣きながらイツセーに抱きついていた。

「その件に関してはアザゼルさんに悪意はまったくなくないよ。組織の長としては間違ったことをしたわけじゃないし、暴走した結果、世界に悪影響が出ることを案じてだろうか
らね」

アザゼルもそんな感じのことを言っていたな。

それに関しては一応頭では理解できる。ただ、感情では納得できていなかった。

「まあ、僕も個人的にはその件に関して一言もの申したいけどね。とりあえず、アザゼルさんはそういう冷酷な判断ができる一方で身内にはとても優しいヒトだよ。セイクリッド・ギア 神器

所有者の引き入れも本人の意志を無視して無理矢理なんてことはないよ。僕もスカウトされたことあるけど、無理強いはされなかったし」

スカウトされたことあるのかよ。

「イツセーくんに接触したのは、純粋に『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』と所有者のイツセーくんに興味があつたからだと思うよ」

「……あくまで興味があつただけで、危害を加える気はいつさいないということなのね」

「あとは、ちよつとした悪戯かな」

「それが一番タチが悪いわよ！」

兄貴が最後に付け足したことに部長は声を荒げる。

まあ、当然だ。ただでさえ、トップ同士の会談が迫っているデリケートなときだというのに。

「彼の言う通り、アザゼルは昔からあだからね。あまり気にしないほうがいい」

背後から突然、気さくに話しかけられ、俺たちは後ろに振り替える。

「お、お兄さま!?!」

そこにいたのは部長の兄であり、現魔王の一人のサーゼクス・ルシファーとグレモリー家のメイドのグレイフィア・ルキフグスさんだった。

即座にその場で跪くグレモリー眷属。

跪いていないのは、このヒトと初めて会うアジアとゼノヴィアだ。

「くつろいでくれたまえ。今日はプライベートで来ているのだから」

魔王は手を上げて、イツセーたちにかしこまらなくていいと促す。全員がそれに従って立ち上がった。

「プライベート？」

魔王の言葉に部長が怪訝そうにしているなか、ゼノヴィアが一步前に出る。

「あなたが魔王か。はじめまして、ゼノヴィアという者だ」

「ごきげんよう、ゼノヴィア。デュランダルの使用手が我が妹の眷属になるとは、最初に聞いたとき、耳を疑ったよ」

「私も悪魔になるとは思いもしなかったよ。我ながら大胆なことをしたと、いまでもたまに後悔している。……。うん、そうだ、どうして悪魔になったんだろう？ ヤケクソ？ いや、だが、あのときは正直……。でも……」

頭を抱えて考え込むゼノヴィア。

「ハハハ、妹の眷属は楽しい者が多くていい。ゼノヴィア、どうか、リアスの眷属として、

グレモリーを支えてほしい。よろしく頼むよ」

魔王の言葉にゼノヴィアは気を取り直して答える。

「伝説の魔王ルシファーにそこまで言われては、私もあとには引けないな。どこまでやれるかわからないが、やれるところまでやらせてもらう」
「ありがとう」

ゼノヴィアと魔王の会話が終わる頃合いを見計らって、部長が魔王に訊く。

「それより、お兄さま、どうしてここへ？」

「何を言ってるんだ。授業参観が近いのだろう？」

「なっ、まさか!？」

「私も参加しようと思っていてね。ぜひとも、妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

げっ、そう言えば、もうそんな時期だった……。てことは――。

俺と千秋は兄貴のほうを見る。

俺たちの視線を受けて、兄貴はニコツと笑みを浮かべてVサインを出して言う。

「もちろん、僕と千春も参加するよ」

「……………だよなあ……………。家族絡みのイベントを兄貴たちが逃すはずもねえよなあ……………」。

いや、来てくれること自体は嬉しいんだがな。だが、それはそれとして、俺も千秋も気恥ずかしいものがあるんだよなあ……………」。

「ていうか、姉貴も帰ってくるんだな？」

「なんだったら、もうここにいるよ」

『え？』

兄貴の言葉に俺やイツセーたち幼馴染み組は素っ頓狂な声が出てしまう。

「うわっ!？」

「呼ばれて飛び出てギュー」

イツセーの悲鳴とこの場にいない女性の声に俺たちは慌ててイツセーのほうを見る。

「姉貴！」

俺と千秋の姉——土騎千春がイツセーの背後から頭に胸を押しつけるようにしてイツセーに抱きついていた。

「ちよつと、あなた！ 私のイツセーに何をしているのよ!？」

部長が怒りを露にしていた。

千秋たちも驚きつつも不機嫌そうに姉貴を睨んでいた。

「何をしてるって、なんのこと？」

わざとらしくとぼけながら、さらにイツセーの頭に自分の胸を強く押しつける。相変わず、イツセーへのスキンシップが激しいな。

それを見て、部長たちがさらに怒る。

姉貴はそんな部長たちの反応を見て楽しんでた。

そして、件のイツセーは姉貴の胸の感触にデレデレとしていた。

「姉貴、話が進まねえから、イツセーを開放しろ」

「うーん、イツセーはあたしから離れたい？」

「いえ、ずっとこのままでも——」

「——イツセー」

「いえ、そろそろ開放してください！」

部長に一睨みされたことでイツセーは戦々恐々としながら姉貴から慌てて離れた。イツセーが離れたところで、姉貴が自己紹介を始めた。

「はいはい、注もーく。明日夏、千秋のお姉ちゃんで冬夜の妹の士騎千春でーす」

「……やれやれ」

嵐のような姉貴にため息を吐いてると、姉貴が口を尖らせて言う。

「明日夏一、お姉ちゃんの帰還にその反応はどのようなのー?」

「……. そういう反応されるようなことをしてるからだろ」

「イツセー、弟がお姉ちゃんに冷たいよー」

姉貴はわざとらしくウソ泣きしながら再びイツセーに抱きついていた。

それを見て、また不機嫌になる部長たち。

とはいえ、流石にからかわれてるとわかったのか、部長はすぐに冷静さを取り戻すと、姉貴のことはひとまずおいて、グレイフィアさんに問い詰める。

「それよりも、グレイフィアね!? お兄さまに授業参観のことを伝えたのはー!」

「はい。学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを任されている私のもとへ届きます。むろん、サーゼクスさまの『女王^{クイーン}』でもありますので主へ報告も致しました」

それを聞き、部長は嘆息する。部長も俺たちちみみたいな感じか?

当の魔王は兄貴と談笑していた。

「はじめまして、魔王サーゼクス・ルシファーさま。賞金稼ぎをやつてる士騎冬夜です。弟と妹が妹さんのお世話になってます」

「こちらこそ、『龍弾デア・ドラッグヘンユッツの射手』。魔王のサーゼクス・ルシファーだ。こちらこそ、妹がご弟妹に世話になってるよ。キミも授業参観に？」

「ええ。かわいい弟妹の授業参観なら例え激務があつたとしても参加したくなりますからね」

「まったくもつてその通りだね。キミとは気が合いそうだ。時間ができたらぜひ、語り合いたいものだ」

魔王相手だつてのに、兄貴はあっさり打ち解けあつていた。

まあ、魔王も気さくな方だし、お互い下の兄弟を持つもの同士、気があつたのだろう。

「お兄さまは魔王なのですよ！ 仕事をほっぽり出してくるなんて！ 魔王がいち悪魔を特別視されてはいけませんわ！」

「いやいや、これは仕事でもあるんだよ」

「ええ？」

「実は三大勢力のトップ会談をこの学園で執り行おうと思つていてね。会場の下見に来

「ただ」

「マジかよ。この学園で会談をやるのかよ。
他の皆も驚いていた。」

「アザゼルがいまだにこの町に滞在しているのもそのためだよ。もしかしたら、初めからこの学園で会談をする腹づもりだったのかもしれないね。なにせ、魔王の妹が二人も通っている学舎なのだから」

確かに。コカビエルもそれを理由にして、この学園を中心にして行動を起こそうとしていたからな。

「さて、これ以上難しい話をここでしても仕方がない。うーむ、しかし、人間界に来たとはいえ、夜中だ。こんな時間に宿泊施設は空いているのだろうか？」

「探せばあるだろうが、時間はかかるだろうな。」

「あ、それなら——」

イツセーの提案に魔王はにんまりと笑みを浮かべた。



「妹がご迷惑をおかけしていなくて安心しました」

「そんな、お兄さん！ リアスさんはとってもいい子ですよ」

「ええ、イツセーにはもったいないくらい素敵なお嬢さんです！」

イツセーの家のリビングにて魔王とイツセーの両親があいさつを交わしていた。

魔王の隣には部長が座っており、恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせていた。

グレイフィアさんは魔王の後方に待機しており、俺たちは離れた場所から様子を窺っていた。

さて、なんでこんなことになったかというと、あのあと、イツセーが「それなら、俺の家に泊まりますか」——と提案し、魔王が「それはいい。ぜひとも下宿先のご夫婦にあいさつをしたいと思っていたのだよ」——と、イツセーの意見を快諾したからだ。

ちなみに部長は「ダメ！　ダメよ！」と必死に抵抗していたが、魔王を止められるはずもなく、こうして魔王がイツセーの両親と談笑している隣で恥ずかしそうにしているわけだ。

一応、魔王であることは明かせないので、身の上は部長の兄で部長の父親が経営している会社の後継ぎということになってる。そのため、かつての名であるサーゼクス・グレモリーと名乗っていた。

かつての名を名乗れてなのか、魔王は少し楽しげだった。

「そちらのメイドさんは——」

「ええ、グレイフィアです。実は私の妻です」

おじさんの問いへの魔王の答えにこの場にいたほぼ全員が驚く。驚いていないのは部長、グレイフィアさん、兄貴、姉貴だけだ。

グレイフィアさんは無表情のまま、魔王の頬をつねった。

「メイドのグレイフィアです。我が主がつまらない冗談を口にして申し訳ございません」

「いたひ、いたひいひよ、ぐれいふいあ」

静かに怒っているグレイフィアさんと、涙目で朗らかに笑っている魔王。隣で部長が恥ずかしそうに両手で顔を覆っていた。

もしかして、この魔王さま、プライベートだといつもこんな感じなのか？

グレイフィアさんも手慣れた感じだしな。

つねられた頬をさすりながらも魔王はおばさんとの会話を続ける。

「それでは、グレモリーさんも授業参観を？」

「ええ、仕事が一段落しているのです、この機会に一度妹の学舎を見つつ、授業の風景も拝見できたらと思いますね。当日は父も顔を出す予定です」

「まあ、リアスさんのお父さんも」

「父は駒王学園の建設などにも携わっておりまして、私同様、よい機会だからと顔を出すようです。本当はリアスの顔を見たいだけだと思いますが」

楽しそうに談笑しているところに、おじさんが台所から秘蔵の酒らしきものを取り出してきた。

「グレモリーさん！ お酒はいけますかね？ 日本のおいしいお酒があるんですがね」
「それは素晴らしい！ ぜひともいただきましょう！ 日本の酒はいける口なのでね
！」

「冬夜くんもどうだい？ 今夜は飲んでも大丈夫なんだろう？」
「大丈夫ですよ。ぜひ、ご一緒させてください」

その後、兄貴、おじさん、魔王で酒盛りが始められ、授業参観の話で盛り上がるのだ
た。



「ふいー、ちよつとフラつくなあ……」

家のリビングで酔っ払った兄貴が椅子に座って顔に向かって手で扇いでいた。

「得意じゃないのに飲み過ぎるからだ」

酔いで若干フラついている兄貴に嘆息しながら水を出してやる。

「いやー、話が弾んじやって、ついね」

水を飲みながら朗らかに笑う兄貴。

酔いが回ったこともあって、相当話が弾んでたからな。

ちなみに魔王は今夜、イツセーの部屋で寝るらしく、イツセーと二人きりになりたいと言いだしたので、いつも一緒に寝てるらしい部長とアーシアは自分たちの部屋で寝ることになった。たった一夜だけなのにとても寂しそうにしていた。特に部長が。日増しに部長のイツセーへの依存度が増してな。

あと、魔王と一緒にの部屋で寝ることになったイツセーは緊張して一睡もできないんじゃないかなろうか？

姉貴がつまんなそうに言う。

「ちえー、せつかくイツセーと一緒に寝ようと思ったのになー」

相変わらず、イツセーへのスキンシップが激しいな。

幼稚園の頃からイツセーのことを気に入っており、しょっちゅう抱きついていた。

それが恋愛感情からなのか、ただ単に弟のようにかわいがつてただけなのか、一度訊いてみたことがあったが、はぐらかされたんだよな。

まあ、千秋たちがイツセーへ好意を寄せるようになってからは、千秋たちへのからかいと発破が主目的なところがある感じだけだな。

「さて」

水を飲み干した兄貴は一転して真面目な表情を作る。

とてもさつきまで酔っ払ったとは思えない切り替えの速さだった。

こういうときの兄貴が話すのはかなり大事な話であることが多い。

「明日夏、千秋」

いつにもまして真剣な表情をしていたので、俺も千秋も思わず固唾を呑んでしまう。

「近いうち、二人には正式にハンターになつてもらふことになるかもしれない。それもいきなり上位ランクからね」

「なっ!?!」

兄貴の言葉に俺と千秋は驚愕してしまふ。

Life. 2 夏です! 水着です!

「どういうことだ、兄貴!? それも上位ランクからって!」

俺は思わず、声を荒らげて兄貴に詰め寄ってしまった。

当然だ。俺たちがハンターになるのは大学卒業後。それが兄貴が提示した条件だったのにな。

しかもいきなり上位ランクだなんて言われれば、慌てもする。

「僕としては不本意だけど、いろいろ状況が変わってね。知つての通り、レンくんが手に入れた情報ではぐれハンターがいまも増加している原因が『カラミティ・キング災禍の盟主』をトップとする『カラミティ・キングCBR』の暗躍によるものだとわかった。おまけに政府やギルド、ハンターの中に『カラミティ・キング災禍の盟主』と繋がりがある者がいるときてる。これが厄介で、政府やギルドはうかつに動けなくなり、それによって対応が遅れているうえに、はぐれの対処にあたる人物も限られてくる。現在、はぐれの対処、というよりも、まともに活動できてるハンター

は信用がおけるSランクと一部のAランクのハンター、およびそのハンターが信頼を寄せるハンターだけだよ。……正直、他の賞金首のこともあるから人手不足だよ」
「だろうな」

個人でどれだけ高い実力があろうと、世界各地にはびこるはぐれや賞金首たちの対処にあたるには限界がある。

コカビエルのときも、そのせいでハンターの増援が期待できなかったからな。

そして――。

「――なるほど。政府やギルドは人手不足を解消したい。そこで、少しでも信用できる戦力がほしい。そして目をつけたのが俺と千秋ってわけか？」

「そういうことだよ。Sランクである僕の弟と妹ってことで、多少は信用できるとのことだよ」

それだけ、Sランクという肩書は影響あるのか。

「実力に関しても、あのコカビエルと戦って生き残った。それだけでも十分な実力があ

ると判断されたんだ」

確かに。コカビエルに遊びがあつて全力ではなかつたとはいえ、正直、あの戦いで味方側に死者が出なかつたのは奇跡に近かつた。

「少なくとも、レンくんの見立てでは、二人ともCランクでも十分やつていけるつてさ」

レンからもお墨付きか。

「正直、あまり実感わかないけどな。俺たちが上位ランククラスの実力があるなんて」

レンのあの実力でやつとBランクだと思つたと余計にな。

すると、兄貴が苦笑混じりに言う。

「実を言うと、上位ランカーのほとんどのヒトはそこまで実力は高くないよ」

「なんだつたら、二人よりも弱い奴のほうが多いくらいだし」

姉貴もぶっちゃけたな。兄貴や俺たちに対して不満を持つてる奴がいまのを聞いたら暴動を起こしそうだな。

「樹里さん曰く、昔はハンターのレベルが低かったんだって。元々、五大宗家などのいわゆる専門家たちの手が回りきらない穴を埋めるための制度だったからね。つい最近までは求められてるレベルもそこまで高くなかったてき。なんでも、当時のAランクはDランク相当だったらしいよ」

現在と比べるとえらく低いな………。

つまり、現在の上位ランカーにはその当時の基準で上位ランクになった奴が多いってわけか。

だとしたら、最近台頭してきた若手が優遇気味なのは当然の結果と言わざるをえないか。現在の基準でランクを上げてる奴らばかりなんだからな。

レンや槐たちを基準にしてたから、上位ランクってのは化け物クラスの巣窟なのだと思うってたが、実際はそうでもなかったのか。

「ところで、なんで最近になって求められてる実力の基準が高くなったんだ？」

「まあ、理由はいろいろあるけど、一番の原因は手強い賞金首が増えたことだね。特に最近セイクリッド・ギアは、セイクリッド・ギア神器を持ったはぐれ悪魔が多くなったからね」

なるほど。ほとんどの場合、悪魔は人間よりも圧倒的に強い。その悪魔がセイクリッド・ギア神器所有者だつたらなおのことだな。

たとえば、所有者の力を倍にするだけの『トクワイース・クリティカル龍の手』のようなありふれたものでも、悪魔が持てば十分脅威だ。

「それと、前にも話したけど、政府が自分たちのお抱えの戦力を求め始めたのも理由だね」

そういえば、そんなことを言ってたな。

自分たちのお抱えの戦力にするんなら、ある程度は高い実力を求めたくはなるか。

とはいえた、いくら賞金稼ぎ制度が実力主義だからって、少しいい加減じゃねえか?

「ま、とりあえず、諸々事情があつて二人に上位ランクハンターになつてほしいと政府やギルドから要請があつたわけだよ。それで、二人の答えは?」

兄貴は若干、断つてくれるのに期待した眼差しで聞いてくるが、答えはもう決まっていた。

「受けるよ」

「私も」

元々、なる予定だったんだ。それが早くなっただけ。断る理由はなかった。

「——そっか」

兄貴はそれ以上何も言わなかった。ただ、断ることを少しだけ期待してたからか、少し残念そうにしていた。

「まあ、近いうちにとっても、そんなにすぐじゃないよ。数ヶ月後、だいたい二人の夏休みが終わった頃になるかな。いろいろ手続きとか、事情を知らない他のハンター、特に下位ランクハンターへの説明とかあるからね。それに、上位ランクだからと言って

も、いきなり危険な賞金首とか難しい任務を任せられるわけじゃないよ。とりあえず、二人に任せらるるのは日本国内にいる元下位ランクのはぐれハンターの討伐だよ」

まあ、いきなりそんな難しいことを任せられるわけないか。

とはいえだ、いつ危険な賞金首の討伐や任務を任せられるかわからない。

兄貴に心配かけないよう、さらに強くなりたいいけないなこれは。

俺と千秋は改めてハンターになるために気を引き締めたのだった。

「ふにゃ〜……」

真面目な話が終わったからか、酔っ払い顔に戻った兄貴がテーブルに突っ伏してしまつた。



なんてことがあつてから早数日。

まさか大学卒業後になるはずが数ヶ月後、だいたい夏休み明けに賞金稼バウンティハンターぎになること

になるとはな。しかも上位ランクのCからだってんだからな。

ちなみに、このことはもう部員の皆には話した。

いきなり上位ランクからつてことでイツセーやアーシアあたりから心配されたが、いきなり危険な仕事はしないことを話したら、ひとまず安心してくれた。

ま、この話はもういいだろう。

あれから魔王だが、イツセーから聞いた話によると、下見と称してゲーセンで遊びまくったり、ハンバーガーショップで全種注文制覇したり、神社にお参りしたりしていたらしい。

……完全に観光じゃねえかよ。魔王が神社にお参りとか、どんな冗談だよ。お参りするために魔力で神社の神聖な力を消し飛ばすとか、下手したら日本の八百万の神に喧嘩売るレベルの暴挙だろ。

幸い、特に問題に発展することはなかったが……。

ブーステッド・ギア

あと、イツセーの家に泊まった夜に魔王から部長の胸に『赤龍帝の籠手』で力を譲渡したらどうなるかなんてとんちんかんなことを言われ、そのことが気になりすぎて一睡もできなかったとイツセーから聞いたときは内心で魔王にアホなのかとツツコンでしまった。

イツセーの家での振る舞いといい、あのヒト、確実にプライベートではノリがよく

はっちゃけるタイプだ。

一応、ただ遊び倒してゐるわけじゃなく、娯楽の少ない冥界にゲーセンや有名チェーン店などを作るためという理由はあったらしいけどな。

下見自体もちゃんとやってはいるんだろが、それにしてもだ……。護衛兼案内役と称されて付き合わされているイツセーや部長たちにはご苦労さまとしか言えない。

この調子じゃ、授業参観の日も部長と一緒に頭を抱えることになりそうだな。

そんなことを考えていた俺は現在、オカルト研究部の皆（+姉貴、槐、レン）と休日の学園のプールにやって来ていた。

「……………うっわ、スツゲエな……………」

プールの惨状を見てイツセーがそう漏らした。

苔が生い茂り、水も腐って濁っており、水中には藻、水面には枯れ落ち葉が大量に浮遊していた。

去年の夏使ってそのまま放置していたって感じだな。

「・・・・・・・・これを綺麗にすんのかよ・・・・・・・・」

イツセーがげんなりしていた。

そう、俺たちオカルト研究部が休日の学園のプールにやって来ている理由はこの悲惨な状態になっているプールを掃除するためだ。

本来は生徒会の仕事なのだが、先日のコカビエル襲来において、町に被害が出ないよう結局を張ってくれたり、諸々の後始末をやってくれたので、そのお礼として今年俺たちオカ研が引き受けたというわけだ。

実際、あの結界のおかげである程度周辺への被害を気にせず戦えたし、被害が出た校舎自体はネストのメンバーが元通りにしてくれたが、机などの備品や諸々の細かい部分は生徒会が請け負ってみたいだからな。

そのことを考えれば、このぐらいはさせてほしいと思いたくなる。

その代わり、掃除が終わったら、俺たちでプール開きしていいということになってる。「大変そうだけど、終わったならそのまま涼めるし、いつちよ頑張りますか」

ちなみにオカ研どころか学園の関係者でもない姉貴がいるのは、俺たちの手伝いをし

たいとのことだ。まあ、完全にプール目当てだろうがな。

ちなみに兄貴は魔王とすっかり意気投合して、二人して遊び倒している。特に下の兄弟の話題で盛り上がってるらしい。

まあ、兄貴も魔王と似たタイプだからな。ウマが合うんだろう。

槐とレンは先日の騒動では助けられたことで、部長がプール開きに招待したのだ。そのため、掃除が終わるまでくつろいでくれていいと言われていたが、二人とも待つてるあいだはヒマだし、俺たちが掃除しているのを黙って見ているのも気が引けると言って手伝ってくれることになった。

「さあ、皆。オカルト研究部の名にかけて、生徒会が驚くくらいにピカピカにするのよ
!」

『はいー!』

部長の号令で全員がヤル気を入れるのだった。



「グフフ、水着だ水着だあ♪」

俺は更衣室で着替えながら皆の水着姿を想像していた。

部長と朱乃さんの水着はこのあいだの自撮り写メのものだろう。

「今度のプールのときに見せてあげるわね」と、文章も添えられていたからな。

この日をどれほど待ちわびていたことか。

「浮かれるのもいいが、掃除もちゃんとやれよ」

「わかってるよ」

なんて明日夏とたわいもない話をしていると、後ろからレンが絡んできた。

「明日夏やナイトくんはどうなんだよ？ あれだけレベルが高えメンツなんだ。楽しみじゃねえのかよ？」

「そりゃ、俺も男だからまったく興味ないと言えは嘘になるが、こいつみたいに騒ぐほどでもないしな」

明日夏は相変わらずだな。俺はもう早く見たくて見たくてたまらないし、妄想だけでも相当興奮するつてのに。

「僕は眷属のことを大切な仲間だと思つています。そういう目で見れないですよ。それは皆に魅力がないということじゃなくて、単に僕のスタンスです。——共に戦う仲間に愛情を抱いても、そういう感情は持ちませんよ」

木場は木場で心までイケメンなことを言つてるよ。こいつはやつぱり騎士道精神——根っからのナイトなんだろうな……。特に部長に対しての忠誠心は本当に尊敬の念を覚えるほどだ。

「なるほどね。ちなみに俺は超楽しみだぜ」

レンは男なら至つて普通の反応だな。

「おい、レン! 部長やアーシアたちに色目使うんじゃないよ!」

あんな美女・美少女の水着姿なんて、男なら誰だつて見たいだろう。でも、それはそれとして、他の野郎になんて見せたくない！

「おいおい、独り占めかよ。ちよつとぐらい楽しませてくれたつていいだろ」

「………ちなみに訊くけど、誰の水着姿が楽しみなんだよ？」

「そうだなあ、俺の好みは年下だからな。シスターちゃんとか」

「ふざけんな!? アーシアに手出したらマジ許さねえぞ！」

俺はレンの胸ぐらを掴もうとするけど、レンにあつさり躲されてしまう。

「………遊んでないで、さっさと掃除しに行くぞ。あとイツセー、こいうときのレンの言うことはだいたい冗談だから聞き流したほうがいいぞ」

「先に行つてるね、イツセーくん」

いつのまにか体操着に着替え終わつてた明日夏と木場が先に行つてしまう。

「じゃあ、俺も先に行つてるぜ」

レンもいつのまにかジャージ姿に着替え終わっており、俺を置いて更衣室から出ていってしまおう。

俺も慌てて体操着に着替える。

ドクンツ。

「——ッ!?!」

急に左腕が熱く疼きだした!

見ると、左腕がドラゴンの腕になりかけていた!



「……このあいだ朱乃さんに吸い出してもらったばつかじやねえか……」

そうぼやくイツセーの左腕はすでに半分以上はドラゴン化していた。

副部長にドラゴンの気を吸い出してもらったのはつい先日だ。いくらなんでも早すぎる。なんでこんなことに。

『強い力に気をつけろと言ったはずだ』

唐突にイツセーの中にいるドライグが言った。

強い力——そういうことか。

「……………原因はアザゼルか」

「……………アザゼルがなんかやったってのか？」

「いや、アザゼル自身は何もしてないだろう。だが、本体がバレないように力を隠してたとしても、アザゼルほどの奴と何度も接触していれば、その強大な存在に触発されてもおかしくない。ただでさえ、ドラゴンは力の塊なんて言われてるからな」

「……………力は力を呼ぶってわけか」

「おまけに先日のコカビエル襲来、さらには宿敵に当たる白龍皇の登場だから、余計にだろうな」

レンが言ったことも原因のひとつだろうな。

「部長を連れてきたよ!」

「イツセー、大丈夫なの!?!」

木場に連れられて部長が駆けつけたきた。

俺はさっきのことを部長に話した。

「仕方ないわ。朱乃にドラゴンの気を吸い出してもらいなさい」

ということとで、プール掃除はイツセーと副部長抜きでやることになった。ほつとくと、変な悪影響が出るかもだしな。

それに、元々人数はいたからな。二人抜けても、特に問題なかった。

「どうしました、部長?」

先程から部長がなにか気になるのかイツセーと副部長がいる更衣室のほうをチラチ

ラと見ていた。

「……………どうも気になるのよ。最近の朱乃のイツセーへの接しかたが」

確かに、最近の副部長はイツセーへのスキンシップが過激になつてゐるような気がするな。

そのことが気になつて気が気じゃないのか。
すると、レンが唐突に言う。

「あ、いま巫女ちゃんの口から『浮気』って単語が出てきたぞ」

「なんですつて!？」

「なーんか怪しい雰囲気だぜ」

「——ツ!? ごめんなさい。ちよつと行つてくるわ!」

部長は慌てて更衣室のほうに駆けていった。

「……………盗み聞きとか、趣味悪いぞ」

「さすがに俺もそこまでしねえよ。ただ、ちよつとおもしろくなりそうだなって思つて、ちよつと聞き耳立てたらちよつと魔女ちゃん『浮気』って単語が聞こえてな。ありや、結構本氣つて感じだったな」

てことは、副部長もいつの間にか、イツセーのことをそういうふうに見始めていたのか。……しかも、浮氣つて。部長から奪う氣満々かよ。

「ふむ、最近学んだぞ。これがいわゆる、NTRというやつだな」

唐突にゼノヴィアがそんなことを抜かした。

「……どこで知つたんだよ、そんな言葉?」

「桐生から教えてもらった」

……あいつはまた妙なことを教えやがって。

初めて会つたときはいろいろあつたアーシアとゼノヴィアだが、いまではすっかり仲良くなつてゐる。二人揃つてうっかりお祈りして頭を痛めるのもすっかりいつもの光景

になったほどだ。

アジアと仲良くなった縁でアジアと仲がいい桐生とも仲良くなった。それはいいんだが、アジア同様、日本文化に疎いのをいいことに、妙なことを教えていた。ゼノヴィアもゼノヴィアで、意外と根が単純なのか間に受けているんだよな。

「ううう……朱乃さんまでライバルになられたら、ますます負けちゃいそうですう……」

「……スタイルのいいヒトがどんどん参戦してくる……」

もしかしたら副部長までの参戦にアジアも千秋も戦々恐々していた。

「へえ、あいつつて結構モチんだな」

「まあ、普段は度を越したドスケベだが、根は真っ直ぐで誠実な奴だからな」
「なるほどね」

「……ただ、かなり鈍感だったりする」

「……ああ」

俺とレンは揃って苦笑する。

基本ヘタレな千秋や素直じゃない燕、妹ように大事にしてるアーシアはともかく、積極的な部長や鵜の好意にはさすがに気づいてもおかしくないんだけどな。

まあ、鵜はともかく、部長は好意を寄せる前からスキンシップが過激だったからな。そのせいで、部長のアプローチは下僕に対するスキンシップ程度の認識になつてるのかもな。

そうこうしていたら、更衣室のほうから少し不機嫌な部長、ちよつと楽しげな表情の副部長、左腕は元に戻つていたが頬につねられたような痕を残しているイツセーが戻つてきた。

案の定、一悶着あつたみたいだな。



あのあと、俺と朱乃さんも加わり、水が抜かれたあとのプールから枯れ落ち葉や藻を取り除き、苔を懸命に落とした。

そのかいもあつて、プールはすっかりキレイになつた。

「はあっ！」

朱乃さんが手を上げると、プール上空に魔法陣が展開された。

ザバアアアツ！

魔法陣から水が作り出され、あつというまにプールを水で満たした。
うっわああ、す、スツゲエ！ さすがは朱乃さんだ！

「さあ、思う存分泳ぎましょう。ところでイツセー」

「はい」

「私の水着、どうかしら？」

「さ、最高っス！ この上なく！」

布面積の小さい白のビキニ！ おっぱいがこぼれ落ちそうなんですけど！ 下乳なんて見えるなんてレベルを越えている！ 艶かしい脚線美も素敵です！

「あらあら、部長つたら、張り切ってますわね。よほどイツセー君に見せたかったんのですのね。うふふふ」

「そういうあなたはどうかなの、朱乃?」

「さあ、うふふ。イツセーくん、私の水着はどうですか?」

赤と青が混ざったビキニだ! もちろん、布面積は小さい! 最高です!

部長も朱乃さんもなんてエッチな体つきなんだ!

「イツセーさん」

「ん?」

「わ、私も着替えてきました」

アーシアが着てたのは学園指定のスクール水着だった!

「おお! アーシア、かわいいぞ! お兄さん、ご機嫌だ!」

「あはは、そう言われると嬉しいです!」

特に胸の「あーしあ」と書かれた名前が素晴らしい！

ふと、アーシアの隣を見ると、小猫ちゃんがいた。小猫ちゃんもアーシアと同じスク水か。アーシアと同様、胸の「こねこ」がキュートだ！

「はは！ 小猫ちゃんはまさにマスコットって感じで、愛くるしさ全開だな！」

「……………卑猥な目つきで見られないのも、それはそれって感じで、ちよつと複雑です」

何やらぶつぶつと残念そうな感じだけど、どうしたんだろう？

「イツセーくん、見て見て〜！」

鵜さんに呼ばれて見てみると、同じくスク水を着た風間姉妹がいた！

恥ずかしがってる燕ちゃんの肩を掴んで、自分よりも燕ちゃんのほうを見せようとしていた。

「おお！ 燕ちゃんもかわいいな！」

「びしょびしょ〜」

俺の感想に鶴さんもテンションを上げて同意する。

当の燕ちゃんも顔を真っ赤にしてもじもじしてるけど、それがかえってかわいさを引き出していた。

対する鶴さんはというと・・・うん、グラマーな身体のラインが浮き出てる上、胸のそこなんかはち切れんばかりの状態で、胸の「つぐみ」の文字が大変なことになっていた。同じスク水なのに、アジアたちと違い——エロいです!

だからか、燕ちゃんと小猫ちゃんがジト目で鶴さんの胸を睨んでおり、アジアが自分の胸に手を当てて落ち込んでいた。

「じゃあ、次の姉妹水着ショーの選手は士騎家美人姉妹です! どぞー!」

次は千秋と千春さんの士騎姉妹。

恥ずかしそうにもじもじしている千秋に肩組んで千春さんがピースしていた。

「……………イツセー兄、どう?」

千秋がもじもじしながら水着の感想を訊いてきた。
黒のフリルの付いたビキニで露出は少ないけどとてもかわいい。

「うん！ 似合っているし、かわいいぞ！」

「イツセー、お姉さんのはどうかな？」

千春さんが大胆に魅惑的なポーズで水着姿を見せてくる。

こちら黒のビギニで部長や朱乃さんに負けず劣らずの布面積の少なさ！ プロポーシオンも抜群で、ポーズも相俟って非常にセクシーだ！

「はい！ 非常にセクシーで最高です！」

「あはは、イツセーは素直でいい反応をしてくれるから、選びがいがあるな♪」

それはもう、こんな眼福も眼福の水着パラダイスを見ていい反応しないわけないじゃないですか！

すでに皆の水着姿を脳内フォルダにそれぞれ名前を付けて保存済みだぜ！

「……水着をそういうふうに見せつけるのはいさかかはしたくないのではな
いか。あとイツセーもあまりジロジロ見るものではないぞ」

槐が大胆に水着を見せてくれる女性陣や皆の水着姿にテンションを上げている俺に
苦言を呈していた。

槐の水着は露出が控えめなセパレートタイプで、上からパーカーを羽織っていた。真
面目な槐らしいチョイスだな。

あと、着痩せするタイプだったのか、おっぱいがなかなか大きい!

——つと、ついついガン見してたら、ジト目で睨まれた。

「そういや、ゼノヴィアは?」

ふと、この場にゼノヴィアがないことに気づいたので、アーシアに訊いてみた。

「水着を着るのに手間取っていて、先に行ってくれと」

ふーん、手間取るか。どんな水着なんだ？ それとも、教会の出身だからかな？ 水着とかあんまり縁なさそうだからな。

「締めは男性組による水着ショーだぜ♪」

「どうかな、イツセーくん？」

「……いや、見たくもねえだろ」

最後に悪ノリしてるレンとちよつとノリノリな木場、レンに無理矢理腕をひっぱられて強引に参加させられて辟易としている明日夏の登場だった。

ふざけんな!? 明日夏の言う通り、野郎の水着姿なんか見たくねえよ!

あと、木場! 少し恥ずかしそうに頬を染めんな!? キモイぞ!

「イツセー。悪いのだけれど、あなたにお願いがあるの」

「はい?」

「あ、俺も明日夏に頼みあったわ」

「なんだよ、レン。頼みって?」

Life. 3 水着です! ピンチです!

「ぶはー」

「はい、いち、に、いち、に」

俺は小猫ちゃんの手を持って、彼女のバタ足練習に付き合っていた。

部長に頼まれたのは泳げない小猫ちゃんの練習に付き合うことだった。

意外だったな。小猫ちゃんが泳げないなんて。運動神経がいいから、てつきり泳げるものだと思っていた。

当の小猫ちゃんは時折息継ぎをしながら一生懸命にバタバタと足を動かしている。なんだか、一生懸命でかわいらしいぞ。

意外と言えば――。

「槐、もうちよい肩の力を抜け」

「あ、ああ………」

隣のレーンで槐もバタ足練習をしており、明日夏が槐の手を持って練習に付き合っていた。

槐も泳げなかったみたいで、レンが明日夏に頼んだのは槐の泳ぎの練習に付き合うことだった。槐は最初一人で練習しようとしていたけど、レンから「おまえ一人じゃ効率が悪い」と言われたので、渋々明日夏に手伝ってもらってる。

「がんばって、小猫ちゃん！ 槐さん！」

横でアーシアが二人の応援をしていた。ちなみにアーシアも泳げない。

だから、小猫ちゃんのあとにアーシアの練習にも付き合うことになっていた。

俺自身は別に泳ぎが得意というわけではなかったんだけど、明日夏が言うにはおそらく、眷属同士の連携力を高めるのが目的の眷属同士によるコミュニケーションもかねているとのこと。

確かに、小猫ちゃんとかこういうふうにコミュニケーションを取るのはあんまりなかったからな。

「……………イツセー先輩」

「ん、何?」

「……………付き合わせてしまつてゴメンなさい……………」

小猫ちゃんが申し訳なさそうに言ってくる。

「いやいや、女の子の泳ぎの練習に付き合うのも楽しいよ」

本音だ。野郎ならともかく、女の子の練習、それもかわいい小猫ちゃんやアーシアが相手だったら、いくらでも付き合っちゃうぜ!

初めての体験で新鮮だつていうのもあるかもしれない。千秋たちは皆、普通に泳げてたからな。

鷗さんの場合、泳ぐというよりも浮いてるつて言うべきかな。しかも、そのままお昼寝タイムに突入しちゃうんだよな。よく沈まないもんだ。

「うわっ!?!」

「あっ!?!」

いつのまにか端に着いてることに気づかず、急に止まったもんだから、小猫ちゃんは勢い余って、俺にぶつかってきてしまった。しかも、思わず抱き止める体勢になっちゃった!

ヤツベ、殴られる!?

いつもみたいに「……………触れないでください!」って殴られる!

警戒する俺だけど、訪れた反応はまったく別のものだった。

「……………イツセー先輩は意外に優しいですね……………ドスケベなのに」

……………誉められてるんだか、貶されてるんだか……………。

小猫ちゃんの頬がほんのり赤いのは気のせいかな?

「まあ、俺だって後輩に何かしてあげたいしさ。小猫ちゃんにはいつも迷惑かけてるしね」

俺は小猫ちゃんの頭を撫でながら言う。——って、つい、よく千秋たちにやるように

頭撫でちゃった!

千秋たちはいつも嬉しそうにするんだけど、小猫ちゃんにとって嬉しいかどうかかわからないのに。

ザバン!

誰かがプールに飛び込む音が聞こえてきた。

見ると、部長、朱乃さん、千秋、千春さん、燕ちゃんの五人が競走していた。

ここ、これはチャンスだ!

俺は急いで水中に潜り、『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』を出す。

籠手を自分の顔に当て、倍増した力を譲渡した。

『トランスファー!!』

俺の両目に力が流れ込み、視力が一気に上がった!

遠くで泳ぐ部長たちの姿を鮮明に捉える!

素晴らしい肢体まではつきりと見えるぜ!

うひょー！ 揺れてる！ 揺れてるよ！ 部長、朱乃さん、千春さんのおっぱいが水の抵抗で揺れてるよ！

俺の『赤龍帝の籠手』ブリステッド・ギア

はやつぱこういうことに使うべきだよな！

さっそく、脳内の新種フォルダに——あ、クソツ、保存の途中で別のレーンで泳いだ木場が視界を遮った！

「コラッ、邪魔だ木場!！」

上がって叫んでいると、腕をひっぱられた。

いつのまにかプールサイドに上がっていた小猫ちゃんが俺の二の腕を掴んでいた。

「………次はアーシア先輩の泳ぎを見るんじゃないんですか？」

不機嫌な様子の子の小猫ちゃん。横ではアーシアが涙目だった。

「うう、私だって私だって………!！」

俺はアーシアのご機嫌を取るためにすぐにアーシアの練習に取りかかるのだった。



「……きゆううう、疲れましたあ」

プールサイドに敷いたビニールシートの上でアーシアがダウンしていた。

隣では塔城も「……すーすー」と寝息をたてていた。

水中での運動は陸上以上に体力を使うからな。泳ぎ慣れていなければなおさらだ。

槐はまだ余裕はある感じだが、それでもかなり疲れてる様子だった。

「どうよ。成果は?」

いつのまにか木場と一緒にになって泳いでいたレンがやってきて訊いてきた。

「この調子だと正直微妙って感じだな」

「うっ……」

「だろうな」

俺の答えに槐はバツが悪そうにし、レンは予想通りの答えが返ってきたという様子で苦笑いを浮かべていた。

センス自体は悪くないのだが、どうも緊張してなのか、張り切りすぎてなのか、力みすぎてるんだよな。そのせいで体が固くなって泳ぐのに支障を出していたし、余計な体力の消耗にも繋がっていた。

「こいつは昔っから体を動かすことになる」と無意識に力みすぎるクセがあつてな。剣術にしてもそうだ。力みすぎてるから、体が固くなって余計な体力の消耗はするし、剣技の精度にもムラができる。極めつけは『錬域』だ。集中しようと無意識にさらに余計な力を入れるから、消耗はさらに激しくなる。自然体な集中状態じゃねえから集中力にもムラがあるものになる。だからスムーズに『錬域』状態になれないうえ、ちよつと感情が高ぶっただけで『錬域』状態が解除されるんだ」

レンの矢継ぎ早の指摘に槐はうなだれてしまう。

「ま、それであれだけ戦えるわけだから、おまえの戦闘センスや剣の才能は大したもんだが。だからこそ惜しいけどな。とりあえず、もつと肩から力抜いてリラックスしろ。それを意識しないでやれるようになれば、だいぶマシになるはずだ」

レンのアドバイスに槐は頷きながらも、また気負いすぎてしまい、レンから注意されていた。

「ふいー、泳いだ泳いだ」

さつきまで部長と副部長と競走していた姉貴、千秋、燕がやってきてビニールシートの上に座る。

「誰が勝ったんだ?」

五人ともなかなかのスピードだったからな。気になったので訊いてみた。

「僅差で千秋。二位が燕。やっぱ水の抵抗が少ないとそのぶんスピードが出るもんだ

な

「……………勝ったのに嬉しくない……………」

姉貴の言葉を聞いて不機嫌になった千秋と燕が胸に手を当てて姉貴を睨む。

……………この話題はもう触れないほうがいいか。

「あ、イツセー。リアスつちがあんたを呼んでたよ」

「部長が？」

「サンオイル持ってたから、オイル塗りでもお願いするんじゃない」

「オイル塗り!? 兵藤一誠、ただちにに向かいます!」

興奮したイツセーは反対側のプールサイドにいる部長のもとに向かつて猛ダツシユする。

「なんだつたら、おまえらも塗ってもらえばどうだ？」

俺はイツセーの反応に不機嫌そうになってる千秋と燕に言う。

途端に二人は一転して顔を真っ赤にしてもじもじしだす。

「・・・・・・・・・・そ、それは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あたしは別に塗ってもらいたいなんて・・・・・・・・」

いつものように千秋はヘタレるし、燕もわかりやすいツンデレを披露していた。

「じゃあ、あたしは塗ってもらおうっと」

姉貴がそう言うと、二人は悔しそうに姉貴を睨んでいた。

「そーいや聞いたぜ。おまえと千秋、ハンターになるんだってな。しかも、いきなり上位ランクから」

「兄貴から聞いたのか?」

「おう。槐共々、先輩としてビシバシゴいてやるぜ——と言いたところだが、実は俺も近いうちにAランクに昇格なんだよな」

マジか——と一瞬驚きかけるが、そもそも、肝心のAランカーにレンほどの奴は多くない。下手すれば極小数しか居ないことを考えれば納得だな。実績のほうも申し分ないだろうし、S級賞金首であるカリスの討伐を任せられるぐらいには信用もあるようだからな。

「時期はおまえらがハンターになるころと同じだな。そうなると、俺は単独でやることになる。Aランカーは基本的に単独行動だからな。おまえらと組んでもおもしろかつたろうにちよつと残念だな」

それは初耳だったな。もつとも、当てはまるのは現在の基準でAランクになった奴だけなんだろうがな。

「でだ、千春。ちよいと頼みがあるんだが」
「槐のことだろ」

「ああ。俺の代わりに一緒にいてやってくれ。つつても、たぶんこの調子だと、おまえもAランカー入りしそうだけだな」

姉貴もBランカーとして、だいぶ活躍してるからな。Aランカー入りもそれほど先の話でもないだろうな。

「というわけだ。明日夏と千秋にも頼むわ。ハンターになったら、槐と組むようにしてくれねえか」

「……ずいぶん過保護だな?」

槐はほとんどレン、たまに姉貴と組まされて行動することが多いと槐本人から若干愚痴のように聞いたことがある。いささか過保護がすぎるんじゃないのか?

「さっきも言ったが、槐は力みすぎるクセがある。そんな状態で実戦なんて致命的なミスをしてかしかねない。というか、前科があるんだよ。俺がよく槐と組むのもそのへんを心配してだ」

なるほど。それは確かに心配になってあまり単独行動はさせたくないな。槐も不満そうにはしてるが、前科もあるので何も言えずにいた。

「そういうわけだ。いぎつてときはフォローしてやってくれ」

「……逆にこつちがフォローされることが多いかもしれないだがな」

「おまえらなら大丈夫だろう。案外、俺と組むよりもいいチームになるかもだぜ」

まあ確かに、近接型の俺と槐、中遠距離型の千秋とチームバランスはいいからな。前の戦いのときもそれなりに連携できたし、レンの言う通り、いいチームになるかもな。

ドゴンツ！

『ツ!?!』

突然の破砕音に驚いた俺たちは音が鳴ったほうを見る。

「……朱乃。ちよつと、調子に乗りすぎなんじゃないかしら？」

部長がドスの効いた声音を発し、手のひらから魔力のオーラを放出していた。目が据わっており、見るからに完全にキレていた。

部長の視線の先にはイツセーとイツセーに抱きついて、いつものニコニコフェイスを浮かべている副部長がいた。

二人の後方では飛び込み台のひとつが破壊されていた。

ああ、これは……。部長がイツセーにオイルを塗ってもらっていたところに副部長が乱入し、そのまま副部長がイツセーにアプローチ的なことを始めだして、部長にとうとう我慢の限界が来てしまったというわけだな。

「あなた、自分が私の眷属で下僕だということを忘れているのかしら?」
「あらあら、そちらがその気なら私も引かないわ」

おいおい、いつもは部長を諫める立場の副部長が受けて立つ気満々で手のひらから雷をほとばしらせやがった!

声にも怒気が含まれているし、本気だなこりや……。
というか――。

「部長、副部長、何やってんですか?! 二人がやり合ったら、この辺一体が消し飛びますよ! あと、男の目もあるんですから、ちゃんと水着を着てください!」

部長も副部長もイツセーにオイルを塗ってもらうためにブラを取り払っているの
目のやり場に非常に困る。

「イツセーはあげないわ!」

「かわいがるくらいいいじゃないの!」

「だいたい、あなたは男が嫌いだったはずでしょ!」

「そういうあなたも男なんか興味ない、全部一緒に見ると言ってるわ!」

だが、俺の叫びも虚しく、二人の口論はヒートアップするっぽうだった。

そして、ついに悪魔の翼を広げて空中で魔力の撃ち合いが始まってしまった。

「朱乃のバカ!」

「リアスのおたんこなす!」

「朱乃のあんぽんたん!」

「リアスのすつとこどっこい!」

「朱乃のおたんちゃん!」

口論のほうも子供のような罵倒の言い合いになっていた。……完全に子供のケンカだ。

「あわわわわ、どうしましょう!?!」

「…………一度始まった二人のケンカを止めるのは自殺行為です」

騒ぎで起きたアーシアはあわあわし始め、塔城はもう完全に諦めていた。

「いやー、眼福眼福だなあ」

「この調子だと、プールの汚れどころか、プールそのものを掃除しかねないなあ」

「二人とも呑気なこと言ってる場合ですか! あと、兄上はあつちを向いててください!」

二人の喧嘩を若干楽しんでいる様子のレンと姉貴に槐がツッコむ。

「イツセーは何やってるのよ!?! あいつを取り合ってケンカしてるんだから、責任持つ

て止めなさいよ！」

「イツセー兄なら、もう避難してるよ」

燕が喧嘩の原因であるイツセーに毒づいており、当のイツセーは千秋の言う通り、すでに避難していた。

まあ、ケンカしてるあの二人を止めるのは荷が重いだろうからな。

というか、どうするか、マジで……。

この調子だと、姉貴の言う通り、プールの掃除に来たのに本気でプールそのものを掃除してしまったことになりかねない。生徒会の負担を減らすために掃除を請け負ったのに、このままでは逆に増やしてしまうことになる。

「このまま見てたいけど、さすがに止めたほうがいつか」

そう言うと、姉貴がプールの水面の上を歩き始めてしまう。

姉貴はプールの中央で立ち止まると、手を部長と副部長のほうに向けてかざす。

「水牢」

姉貴の言葉に反応するようにプールの水がうねり、水が部長と副部長のほうに飛んでいく。

「えっ!?!」

部長と副部長は突然のことに対応できないまま、水が二人を包み込んだ。

「そりゃ」

そのまま姉貴が手を振り下ろすと、二人を包んだ水の塊がプールに向けて勢いよく落下していく。

ドボオオオン!

高い水飛沫を上げながら、二人を包んだ水の塊がプールに叩きつけられた。

「ぷはっ……げほっげほっ……」

水面に上がり、咽せている二人に姉貴は水面の上でしやがみながら言う。

「はいはい。お互い譲れないんだろうけど、学校の施設を壊しちゃダメつしよ。あと、ケンカするにしても、イツセー以外の男の目があるんだから、やるならちゃんと水着着ようね」

そう言いながら、水で器用に二人の水着のブラを持つてきて二人に渡す。

「……ちよつとムキになりすぎたわね」

「……私もリアスを煽りすぎましたわ」

二人もやりすぎたと反省していた。

「ところで、いまのつて、あなたの神セイクリッド・ギアの能力かしら？ 明日夏からあなたたち兄弟

全員が神セイクリッド・ギアの所有者だと聞いてたけど」

「そ、いまのはあたしの神セイクリッド・ギア 器、『海龍の水槍』スブラッシュ・ランズの能力」

姉貴セイクリッド・ギアの神 器の本来の姿は水を発生させ、操る槍なんだが、水のある場所なら、槍を出さなくても水を操る能力だけを使用できる。久々に見たが、コントロール技術に磨きがかかっているな。

「あら、そういえばイツセーくんは？」

「そういえば、いつの間にかいなくなっているわね」

ここで二人はイツセーが避難していたことに気づいた。

キヨロキヨロとイツセーを探していた二人にレンが言う。

「あいつなら用具室のほうに逃げてったぜ。ちなみにちよつとおもしろいことになってるぜ」

「おもしろいこと?」

「デュランダルちゃんに迫られてるぜ」

「なんですって?!」

「……………あらあら」

レンの言葉に部長は驚愕し、副部長はニコニコフェイスながら不機嫌そうにしていた。

ゼノヴィアの奴、いまのいままで用具室で着替えてたのか。

つか、いったいぜんたい、なんでゼノヴィアがイツセーに迫ってるんだ？

とか気にしてるあいだに部長と副部長、姉貴と槐を除く女性陣が用具室のほうに駆けていった。

とりあえず、俺も木場（余程集中しているのか騒動に気づかず泳ぎ続けていた）を除く残りのメンバーと一緒にいて行く。

「……………イツセー、これはどういうこと？」

用具室の前に着くと同時に、部長の冷淡な問いかけが聞こえた。

用具室の中を除くと、上の水着を着ていないゼノヴィアがイツセーに抱きついていてた。

「あらあら、ずるいわ、ゼノヴィアちゃんたら。イツセーくんの貞操は私がもらう予定ですよ」

ニコニコフェイスで危険なオーラを発している副部長。

「イツセーさん、酷いですう! 私だって言ってくれたら……」

アーシアは涙目になりながらも、しれっと大胆なことを言っていた。

「あうわ……」

千秋は目の前の光景に不機嫌な感情と戸惑いの感情が混じって若干パニックになっていた。

「……イツセーくん。言ってくれたら、私と燕ちゃんが……」

「なんで、私も入ってるのよ!?!」

相変わらず燕を巻き込む形で大胆なことを言う鶴にいつものように燕がツッコんでいた。

「……………油断もスキもない」

塔城も半目でイツセーを睨んでいた。

「どうした、イツセー？ さあ、子供を作ろう」

「バ、バカ、おまえ!! この状況わかってんのか!? ちったあ、空気つてもんをよ!!」

『子供!?!』

『子供』という単語を聞き、女性陣の顔色が変わる。

部長と副部長が用具室に入り、それぞれがイツセーの腕を掴むと、ズルズルと引きずってくる。

「ぶ、部長! こ、これにはわけが!」

「わかっているわ。私が悪いの。性欲過多なあなたから少しでも目を離した私のせいよ

ね。でもね、イツセー。子供を作ろうってどういうことかしら?」

「そうですわね。どういう経緯で子供の話になったのか、詳しく教えていただきたいですわ」

「……………連行です」

「……………連行だよ」

塔城と鶴にそれぞれイツセーの足を持ち上げられたことで、イツセーは完全に拘束された。

「うあああああつ?!」

プールに悲鳴を響かせながら、イツセーは女性陣によって連行されていった。

「うん、なるほど。イツセーと子作りをするには部長たちに勝たねばならないのか。これは至難の業だね。しかし、ライバルが多いとなると燃えるものがある」

騒動の発端であるゼノヴィアは俺の隣でうんうんと頷いていた。

「おまえはまず水着を着ろ！」

いまだに上の水着を着ていないゼノヴィアに俺と槐はハモって叫んだ。

「ほい、ゼノヴィアっち」

姉貴が用具室の中から水着のブラを取ってきてゼノヴィアに渡す。

姉貴から受け取った水着を着たところで、俺はゼノヴィアに問いかける。

「……それで、いったいぜんたい、なんで子供を作ろうなんて言い出したんだ？」
「いやなに、私はいままでずっと信仰のために生きていた。主に仕え、主のために戦う。それが私のすべてだった。だから、主がいないと知り、悪魔となった私には、夢や目標がなくなってしまったんだ。これから何をしたいかわからず、そのことをリアス部長に尋ねたんだ。そしたら——」

——悪魔は欲を持ち、欲を叶え、欲を望む者。好きに生きてみなさい。

部長にそう答えられたみたいだ。

「そこで私は主に仕えるとき捨てた女の喜びを堪能しようと思つてね。そして、新たにできた目標、夢が——」

「……子供を作ることつてわけか?」

「そうだ」

確かに、子供を作ることが女の喜びなんて聞くこともあるが、それにしたつて、他にもつとなんかあつたんじゃねえのか……。

「で、その子供を作る相手をイツセーにした理由は?」

俺の知る限り、こいつがイツセーに想いを寄せるようになった出来事はなかつたはずだ。

そもそも、ゼノヴィアの様子からしても、そういう感情があるようには見えなかつた。

「なに、簡単な話だ。子供を作る以上、できることなら強い子になつてほしいと思つてい

てね。父親の遺伝子に特殊な力、もしくは強さを望んでいるんだ」

その考えは戦士だった故か？

「イツセーは赤龍帝。セイクリッド・ギア 神 器はともかく、ドラゴンのオーラなどが受け継がれるかもしれないってか？」

「そういうことだ。木場祐斗や夜刀神蓮火の剣士の才能も捨て難いが、そちらのほうが可能性が高そうだからね。その観点で言えば、キミもドラゴン系セイクリッド・ギア 神 器を持つてるから適任だな。どうだ、私と子供を作らないか？」

俺までターゲットにされてしまった。

「……そんな軽い理由でできるか。おまえはまず一般常識を学べ。子供だとかそういうことを考えるのはそれからだろう」

「ふむ、そういうものか？」

「せっかく学校に通ってるんだ。勉学に遊び、その他色々なことを体験する機会もある。そういう経験から自ずとやりたいことや目標が見つかるはずだ。部長もそのつもり

で言ったんだらう」

「なるほど。確かに、教会にいたときでは経験できない色々なことが体験できそうだから。まず学園生活を満喫してみるか」

「それがいいだらう」

「それはそれとして。土騎明日夏、私と子供を作らないか?」

「……だから、断るって言ってるだろ」

……ダメだこりや。



プール開きが終わり、俺、イツセー、木場、レンの男子組は校庭のほうへ歩いていった。女子組はシャワーを浴びたり、着替えたりする時間が男子よりもかかっているので、先に校門で待つてることにしたのだ。

「はあ、酷い目にあつた……」

部長たちにとつてり絞られたのか、イツセーがげんなりしていた。

まあ、部長と副部長も騒ぎを聞きつけてきた会長に説教されてたけどな。

いまは二人して自分たちが壊してしまったところを修復していた。

「僕が泳ぐのに夢中になっていたあいだにそんなことが起こってたんだね」

「……いや、あの騒動に気づかねえって、どんだけ集中してたんだよ」

俺は苦笑している木場に呆れの視線を送る。

レンがにやにやしながらイツセーに訊く。

「ちなみに、デュランダルちゃんに迫られた感想はどうよ？」

「そりや、ゼノヴィアもかわいいからな。まあ、かなり突拍子もなかったけど……」

さすがのイツセーも、スケベ根性よりも戸惑いのほうが勝ってるか。

そんな他愛のない話をしながら校門に向かっていると、校門に誰かいるのに気づいた。

ダークカラーの強い銀髪で、歳は俺たちと同じくらいの少年だった。

見慣れない奴だな。新しい留学生か？

少年が俺たちに気づき、歩み寄ってくる。
少年が口を開く。

「ここで会うのは二度目だな」

二度目? 会ったことあったか?

いや、待てよ。この声、聞き覚えが……。

「イツセーくん!」

木場の驚いたような声が聞こえ、イツセーのほうを見ると、イツセーが左腕を押さえていた。

「どうした、イツセー!」

「……わかんねえ。また腕が……」

イツセーのこの症状——まさか!?

俺は警戒心を最大にまで上げて少年のほうを見る。
そして、少年が不敵な笑みを浮かべて名乗る。

「俺はヴァーリ。白龍皇——『パニシング・ドラゴン白い龍』だ」

Life. 4 白と対面します!

「…………おまえが! ぐっ!」

左手が燃え上がりそう。プール開きのときのも、こいつが近くにいたからか?

「無防備だな。赤龍帝——『赤い龍』。兵藤一誠」

「なっ!」

いつの間にか、『バシング・ドラゴン白い龍』——ヴァーリが俺の目の前に移動しており、人差し指が額に突きつけられていた!?

左手に気を取られていたはいえ、全然反応できなかった。

明日夏も木場も俺と同じ反応していた。

レンだけは感心してる感じだった。

「そうだな。たとえば、俺がここでキミに魔術的なものをかけたり——」

ザツ！

ナイフと剣がヴァーリの首元に突きつけられた。明日夏と木場だった。

「……………冗談が過ぎるぞ？ 白龍皇」

「……………ここで赤龍帝との対決を始めさせるわけにはいかないよ」

二人とも、ドスの効いた声音だ。だけど、ヴァーリは少しも動じてなかった。

「やめておいたほうがいい。手が震えているじゃないか」

ヴァーリの言うように、明日夏も木場も、手元が震えており、表情を強張らせていた。

「二人とも、やめとけ。休日でも学園に来てる奴だっているんだ。何より、そいつに敵意はないし、さっきのも本当にただの冗談だ。それ以前に、複数人かつ様々な要因が重なってようやく本気じゃなかったコカビエルを倒せた俺たちじゃ、俺たちとの戦いで消

耗していたとはいえ、本気のコカビエルを圧倒したこいつに敵わねえよ。それはわかっているだろ?」

「くっ」

レンに言われ、明日夏と木場はヴァーリから渋々とナイフと剣を引いた。

「誇つていい。相手との実力差がわかるのは強い証拠だ。『閃刃』の夜刀神蓮火の言う通り、俺とキミたちとの間には決定的なほどの差がある。コカビエルごときに苦戦するようじゃ、俺には勝てないよ」

コカビエルごとき——。

あのコカビエルを「ごとき」と見下せるだけの力をこいつは持っていた。

「兵藤一誠、キミはこの世界で何番目に強いと思う?」

「……何?」

「キミの禁手バランス・ブレイカー——まあ、未完成な状態だが、その状態としたキミは上から数えると

四桁、千から千五百の間くらいだ。いや、宿主のスペック的にはもつと下かな?」

「……何が言いたい？」

「この世界は強い者が多い。『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』と呼ばれるサーゼクス・ルシファーでさえ、トップテン内に入らない」

サーゼクスさまよりも強いのがそんなにいるのか？ 正直、いまの俺には想像できなかった

「だが、一位は決まっている。——不動の存在が」

「誰のことだよ？ 自分だとも言うのか？」

「残念ながら俺じゃない。なに、いずれわかるさ」

ヴァーリが視線を俺の後方に向けて言う。

「兵藤一誠は貴重な存在だ。十分に育てた方が良い、リアス・グレモリー」

いつの間にか、部長や他の女性陣が俺たちの後方にいた。

部長はめっちゃ不機嫌な表情だし、対応に困ってるアジアとヴァーリを興味深そう

に見ている千春さん以外は皆、臨戦態勢だった。

「白龍皇、なんのつもりかしら？ あなたは墮天使と繋がりを持っている者。必要以上の接触は——」

「フツ」

ヴァーリは部長の言葉を鼻で笑って遮る。

「二天龍と称された『赤い龍』と『白い龍』ウエルシュ・ドラゴンに関わった者は過去、ろくな生き方をしていない。——あなたはどうなるんだろうな？」

野郎の言葉に部長が言葉を詰まらせる。

次の瞬間——。

ムニイ。

ヴァーリの頬が背後から誰かによって左右から引つ張られた！

「——ダメだよ、ヴァーリくん。皆を怖がらせるようなことを言っちゃ」

ヴァーリの背後に現れたのは冬夜さんだった。

「……何をしている、士騎冬夜？」

ヴァーリは頬を引っ張られた状態で冬夜さんに訊いた。というか、めっちゃ不機嫌そうだ。

「いやー、ちよつと皆の緊張をほぐしてあげようかなって思ってたね」

ムニムニ。

そう言いながら、冬夜さんはヴァーリの頬を引っ張ったり、戻したりを繰り返す。

「いい加減、頬を引っ張るのをやめろ！」

我慢の限界に達したのか、ヴァーリは冬夜さんの手を乱雑に振り払う。
そして、咳払いをすると言う。

「……今日は戦いに来たわけじゃない。アザゼルの付き添いで来日していてね。退屈しのぎに、この学び舎と改めて赤龍帝である兵藤一誠を見てみたただけだよ。俺もやることが多いのでね」

このなんとも言えない空気にしたたまれなくなつたのか、ヴァーリは早足この場から立ち去ろうとする。

そんなヴァーリの前に、結つた黒髪的女性が現れた!

「ヴァーくん!」

腰に手を当てて立っており、スゴい不機嫌な表情だった。

誰!? なんか、ヴァーリの知り合いっぽいけど!?

「やあ、飛神^{ひかみかずき}一姫。キミもここに用が——」

「用があるのはキ・ミ・に・だ・よ！」

「ぐうっ!?!」

女性はヴァーリの言葉を遮り、ヴァーリにコブラツイストをかけた。

「まったく、キミといい、アザゼルさんといい、悪戯好きなのも大概になさい！」

手のかかる弟に接する姉みたいなやり取りをする二人に呆気にとられていると、女性がヴァーリに関節技をかけたまま挨拶してくる。

「はじめまして、グレモリー眷属の皆さん。『ネスト』のリーダーの飛神一姫です。こんな格好ですみません」

『ネスト』って、先日、墮天使側からやってきて事後処理をやったヒトたちだよな。そのヒトたちのリーダーなのか、このヒト。

「くっ、このッ!？」

ヴァーリが関節技から抜け出すと、飛神一姫さんに非難の眼差しを向ける。

「……いきなり何を、飛神一姫？」

「キミがヒトさまに迷惑をかけるのが悪いの！」

「別に手を出してはいないが」

「敵対してる組織の者がいきなりアポイントなしで接触してきてる時点で先方にも、こっちにも迷惑かけてるの！ ましてや、白龍皇と赤龍帝の接触とか、ヒトによつては冗談じゃすまないんだからね！」

飛神一姫さんの説教を聞いても、ヴァーリはどこ吹く風といった様子だった。

反省の色が見られないヴァーリの態度を見て、飛神一姫さんが半目になって言う。

「そっちがその気なら、こっちにも考えがあるよ」

「なんだ、力づくで来る気か？ 久々にキミと戦えるのなら、大歓迎——」

「——ラヴィニアを呼ぶよ」

飛神一姫さんがその名を口した瞬間、ヴァーリは固まってしまった。

「キミに会えなくて寂しがつてたから、ちようどいいね」

「ま、待て、彼女を呼ぶな！」

硬直が解けたヴァーリが慌て始めていた。

「まったく、いっつも恥ずかしがつて逃げちゃうんだから。たまには会ってあげたらいいじゃない」

なんだ、そんなにそのラヴィニアってヒトのことが苦手なのか？

「もしくは、あの『ノート』の中身を暴露したりとか？」

「あつ、それもいいかもね、とーくん」

冬夜さんの言葉にヴァーリは冷や汗を流し始めた。

「ま、待て、二人とも！ それもやめろ!？」

あんなに傲岸不遜だったヴァーリがめちやくちや焦ってるよ。

それだけ、冬夜さんが言う『ノート』の中身は絶対にヒトに知られたくないんだな。

「だったら、ヒトさまに迷惑かけない。わかった？ わかったら、このヒトたちに謝る」

「……………驚かせてしまつてすまなかつた」

飛神一姫さんに言われ、ヴァーリは渋々と頭を下げてきた。

「……………俺はもう行く。やることがあるのでね」

若干、不機嫌そうにしながら、ヴァーリは今度こそこの場から立ち去つていった。

「まったく、いつまでたつても変わらないんだから」

「そうだね。同年代の友達とかできれば、少しは歳相応になるかもしれないんだけどね」

さつきまで怒ってた飛神一姫さんは一転して冬夜さんと一緒に微笑ましげに遠くにいるヴァーリを眺めていた。

「皆さん、うちのヴァークくんが驚かせてしまつてすみませんでした」

「い、いえ、あなたたちも大変なのね……」

部長が飛神一姫さんに同情の眼差しを向けていた。

「……トップのヒトたちが揃いも揃つて大なり小なり自由なヒトたちばかりですからね」

うわー、笑みを浮かべてるけど、目が全然笑つてない。

え、何、グリゴリの幹部たちつて、皆、アザゼルみたいな奴なの？

てつきり、皆、レイナーレとかコカビエルみたいな奴ばかりだと思つてた。

「……墮天使なんて皆、害悪な方々ばかりですわ」

朱乃さんが毒を吐いていた。かつてない程不機嫌だよ……。

「手厳しいですね……」

朱乃さんの言葉に飛神一姫さんは苦笑いを浮かべるだけだった。

「それじゃ、私も行きます。一応、アザゼルさんの護衛で来てますから」

「お疲れさま、一姫。ひさしぶりに会えて嬉しかったよ」

「私もよ、とーくん。では、皆さん。また、会談のときに」

飛神一姫さんもヴァーリのあとを追うようにこの場から立ち去っていった。

いろいろと毒気を抜かれた俺たちはすっかり置いてけぼりをくらってしまうのだった。



家のリビングで茶を飲みながら、あいつ——白龍皇ヴァーリのことを考えていた。

白龍皇と出会ったことで、イツセーの『赤龍帝の籠手』ブリステッド・ギアが呼応してしまっていたが、すぐに収まった。

プールで副部長にドラゴンの気を吸い出してもらってなかったら、一瞬でドラゴン化してた恐れがあつたらしい。

それだけ、二天龍の間には因縁があつた。

神と天使、墮天使、悪魔の三大勢力が戦争していたとき、異形の者たち、そして、人間がそれぞれの勢力に手を貸していた。だが、ドラゴンだけは例外だった。大半は戦争など我関せずで、皆、好き勝手に生きていた。ところが、戦争の最中、大ゲンカを始めたドラゴンが二匹いた。それが二天龍——『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンと『白い龍』パニング・ドラゴンだった。世界の覇権を巡る大戦争などお構いなしで、戦場を二匹で暴れまくっていたらしい。

ドライグ曰く、本人たちもケンカの理由はもう覚えていないとのことだ。

忘れてしまうような理由で周囲の迷惑を考えずにケンカするとか、迷惑な話だった。そんなだから、三大勢力も戦争どころじゃないと、一時休戦し、二天龍の始末にかかった。

そして、ケンカの邪魔をされた二匹は怒り狂い、神、魔王、墮天使に食ってかかった。『神』のときが、魔王のときが、ドラゴンの決闘に介入するな』と。……バカ丸出

しの逆ギレだな。

結局、二匹のドラゴンは幾重にも切り刻まれ、その魂を神セイクリッド・ギア器として人間の身に封印された。だが、封印されてもなお、二天龍は争った。人間を媒介にして、お互いに何度も出会い、何度も戦うようになった。それはもはや、そう運命づけられた程だ。
とまあ、これが二天龍の因縁だ。

「で、あのヴァーリってのは、どんな奴なんだ？」

俺は対面で茶を飲んでいた兄貴に訊いた。

「ヴァーリくんは強さに貪欲で、そして、貪欲なまでに強者との戦いを求めてる子だよ」
「……………ようするに、コカビエルと同様の戦闘狂ってわけか」

まあ、基本的に出会ったら即戦う二天龍の宿主にしては、問答無用で襲いかかってくるタイプではないみたいだけどな。……………単純に弱い奴に興味がないだけだろうか。

「昔からああなのか？」

「そうだね、初めて会ったときはこのくらいの子だったけど、あんな感じだったよ」

手の位置からして、小学校高学年ってところか。

そんな頃からああなのかよ……。

「まあ、そうだったのは、彼の家庭環境に原因があるんだけどね」

「家庭環境？」

いや、セイクリッド・ギア 神器所有者で家庭環境となると、大体察せるな。

「ご察しの通り、彼は白龍皇の力を恐れた父親に虐待されていたんだよ。そのせいで精神が早熟しちゃった上、『デivain・デivain・デivain白龍皇の光翼』を身に宿したことも相まってああいう言動をするようになったんだ」

そういう過去があると、強さに貪欲なもの、もしかしたら、「自分を守りたい」っていう無意識の願望から来てるのかもな。

「ま、大丈夫だよ。基本的にはいい子だから。それに、意外と寂しがり屋だから、もしよかったら仲良くしてあげてよ」

寂しがり屋？ あれで？ とてもそんなタマには見えなかった。

「……どの道、仲良くするなんて無理だろ。あいつは墮天使側、二天龍の因縁がなくても、悪魔であるイツセーとは敵対関係だ。交流がある兄貴には複雑だろうが、イツセーと敵対するのなら、俺たちの敵だ」

もつとも、俺たちとあいつの間には天と地ほどの差があるんだがな。

「ちなみに、兄貴はあいつに勝てるのか？」

「どうだろうね。彼は日増しにどんどん強くなってるからね。なんせ、アザゼルさんが『過去、現在、そして未来永劫においても、最強の白龍皇になるだろう』て言うぐらいだからね」

「……マジかよ。アザゼルの奴がそこまで言うほどか……」
イツセーも前途多難だな。よりにもよって、ライバルになることを運命づけられた相手がそんな規格外な奴だなんてな。

「ま、いまはまだ、いい勝負ができるだろうから、いざつてときは、僕がなんとかするよ」
いまの段階でも底知れないあいつといい勝負ができるのかよ。やっぱり、兄貴も規格外だな。

「アザゼルさんも、世界に悪影響を与えかねない二天龍の激突は避けたがるだろうしね」
まあ、悪戯好きな面があるが、世界を混乱に陥らせるような奴ではないのは、これまでのことで、その点は信用できるが。

「ま、ヴァーリクくんに関しては、余程のことがなければ、気にしなくても大丈夫だよ。意外とアザゼルさんの言うことは素直に聞くからね」

ならいいんだが。・・・正直、不安だがな。

「なんの話？」

風呂から上がった姉貴が風呂上がりの牛乳を飲みながら訊いてきた。

「明日の授業参観が楽しみだなんて話だよ」

ヴァーリのことと言おうとしたら、兄貴が明日の授業参観の話題に変えやがった。

現実逃避気味に授業参観のことを忘れていた俺も姉貴の隣で風呂上がりの牛乳を飲んでた千秋も、現実に戻されてしまい、げんなりしてしまうのだった。



授業参観（正確には公開授業で、中等部の生徒も観に来る）当日、いつもの面々でだべってると、松田が訊いてきた。

「イツセーんところは両親来るのか？」

「ああ。ていうか、二人ともアーシアを見に来るんだと」

「あー、わかる。アーシアちゃんが娘だったら、是が非でも観に来たくなるよな」

俺の返事に松田は強くうなずいていた。

父さんも母さんも、それはもう息子の俺そつちのけで、アーシアの授業風景を楽しみにしていた。父さんもこの日のために有給を取ったぐらいだからな。

「私、こういうの初めてなんで、スゴく楽しみです」

一緒に暮らしてる『家族』の者が来てくれるのが、たまらなく嬉しいのか、アーシアは心底楽しそうだ。

今度は元浜が明日夏に訊く。

「明日夏るところも冬夜さんと千春さんが来るんだろ？」

「……ああ、来るぞ」

「今年は千秋ちゃんもいるから、片方が片方を観に来る形なんだろ？」

「ああ」

「——ちなみに、うちのクラスにはどっちが来るんだ？」

「……………姉貴……………」

「よっしや！」

千春さんが来ると知って、松田と元浜はガッツポーズを取っていた。

まあ、イケメンと美少女が観に来てくれるのなら、断然、美少女のほうがいいだろうからな。

「……………そんなあ、士騎くんのお兄さん、来ないのお……………」

俺たちの話に聞き耳を立てていた女子が残念そうにしていた。

去年は冬夜さんを見て、女子たちはそれはもう、大はしやぎだった。

今年は千秋のクラスがそうなるんだろうな。

そういうえば、部長のクラスもそうなるかもな。サーゼクスさまも、ものスゴいイケメンだからな。

「そういえば、鶴さん。雲雀さんは来るの？」

「うん、来るよ」

雲雀さんも来るみたいだ。

「ちなみに、うちのクラスと燕ちゃんのクラス、どっちに来るの？」

「燕ちゃんのほう。私がそうしてって言ったんだ」

燕ちゃんのほうに行くのか。こりや、千秋たちのクラスは、波乱の公開授業になりそうだな。なんせ、雲雀さんも冬夜さんに負けず劣らずのイケメンだからな。イケメン二人がやって来たなんて、大騒ぎになるだろうな。

だべっている俺たちの集まりにゼノヴィアが近づいてきた。

「イツセー」

「なんだ、ゼノヴィア？」

「先日は突然、あんなこと言って申し訳なかった」

「ま、まあな……」

マジでビックリしたからな。急に子作りだからな。いや、俺もエッチできるのならさせてほしいけど。

「あのあと、明日夏に一般常識を学べと言われてね。そして学んだんだ」

ゼノヴィアがポケットから何かを取り出した？

「いきなりするのは難しいので、まずはこれを用いて練習するべきだとね」

ゼノヴィアが取り出したのは、コンドームだった！

「ば、バカかああああああああっ!?!」

「己は大衆の面前で何取り出してんだ!?!」

俺と明日夏の叫びが響いた。

「つうか、誰がそつちの一般常識を学べってつったよ!？」

明日夏もかなり取り乱しちまってるよ。

周りからも奇異な目で見られてしまっていた。

「ゼノヴィアさん、それは何ですか?」

アーシアが気になったのか、ゼノヴィアの持つるものを注視していた。

「アーシアも使うといい」

そう言って、アーシアに一個手渡すゼノヴィア。

「ありがとうございます?」

アーシアは渡されたものがなんなのかさっぱりわからないようだ。

「何々、また兵藤がやらかした？」

桐生が面白そうなことを見つけたと言わんばかりに楽しそうに割って入ってきた。

「桐生さん。これ、なんですか？」

「ああ、これはねえ——」

桐生がアーシアに耳打ちする

途端にアーシアは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「こら桐生!?! アーシアにいらんことを——」

「でも、兵藤さあ。いいのかなあ? ゼノヴィアっちを抱いちゃったらあ、アーシアがか
わいそう——」

「桐生さああああん、やめてくださいいいいいっ!?!」

アーシアが桐生の口を慌てて塞いだ。

「このウンコ野郎ッ！」

「ぐわっ!？」

アーシアのそんな反応を見て、嫉妬に燃えた松田と元浜によつて殴り倒されてしまつた！

そのまま二人によつて、それぞれ首と足に関節技を決められてしまう！

「松田さん、元浜さん！ イッセーさんは悪いヒトじゃありません！ イジメないでください！」

「そうだよ！ イッセーくんをイジメちゃダメ〜！」

アーシアと鶴さんが松田と元浜の横行を前に俺を擁護してくれる。

「ううう……二人だけだよ。俺の味方は……」

「私はイッセーさんのことをずっと信じてますから」

「私もだよ〜」

二人の信頼に俺は涙を流す。

「イツセー。それで、性行は予定だが——」

「だからよせ！」

松田と元浜の関節技を振りほどき、ゼノヴィアの手からコンドームを慌てて取り上げるのだった。

Life. 5 授業参観、始まります！

ついに始まった公開授業。——俺とイツセーは頭を抱えていた。

「今日の英語の時間は、いま渡した紙粘土で好きなものを作ってみてください。動物でも、人でも、家でも、なんでも構いません。自分の思い描いたありのままの表現を形にするのです。そういう英会話もあるのです」

ねえよ！ 最早、英会話ですらねえよ！

いざ始まった公開授業、俺たちのクラスの授業は英語。

開始早々、先生が紙粘土を配り始めたときは何事かと思つたら、まさかの英語の授業で粘土細工……。

どこの世界に粘土細工が英会話になる英語の授業があるんだよ！

「Let's try!」

レツツトライじゃねえよ……無駄にいい発音させるな。

クラスの中も困惑している——かと思えば、何事もなかったかのように、何を作るか思案している奴や、既に紙粘土をこねだしている奴がいた。

……おかしなのは俺とイツセーなのか……?

保護者の方々も誰も疑問を抱かず、俺たちの授業風景を静観してるし。

「アーシアちゃん、ファイトよ!」

「アーシアちゃん、かわいいぞ!」

おじさんとおばさんは熱心にアーシアの事を応援していて、かなり目立ってた。おじさんに至っては、実の息子のイツセーをそっちのけで、手に持つビデオカメラを熱心に回していた。

……今頃、兄貴もあんな感じなんだろうな。

千秋に同情しつつ、仕方ないので、何を作るか思案する。すると、突然、クラス内がザワつき始めた。

「ひよ、兵藤くん……」

何事かと思い、皆の視線の先を見ると、先生が何やら驚いた表情で全身を震わせながら、イツセーの肩に手を置いていた。

先生の視線の先はイツセーの手元。——そこには、裸の部長の像があった。遠目でもわかるくらい、完璧に部長を再現していた。

クラスから歓声が沸く。

「あれ、リアスお姉さまじゃない!？」

「そうよ、すごいそっくり!？」

皆、イツセーの周りに集まりだす。

「おーい、いま授業中な上、保護者の方々の目もあるんだぞ。」

本来なら注意する立場である先生も、イツセーの作品を見て、相当興奮していた。

「素晴らしい! 兵藤くん、キミにこんな才能があったなんて! やはり、この授業は正解だった! また一人、生徒の隠された能力を私は引き出したのです!」

「ああいえ、適当に手を動かしてただけで……」

桐生がメガネを光らせ、イヤらしい笑みを浮かべて言う。

「手が覚えているほど、触りまくっているわけねえ」

桐生の言葉にクラスの連中が騒ぎだす。

「クソッ! やっぱ、イツセーの野郎!」

「リアス先輩と!」

「嘘よ!」

「リアスお姉さまが野獣とそんな!」

.....どう収集つけるんだ、これ.....

「ほえー、完成度高けーな、おい」

何混ぜってんだ姉貴!! 余計収集つかなくなるだろうが!

「今度、私と千秋のも作ってもらおうかな♪」

「あゝ、私のも〜。あと、燕ちゃんのも〜」

「あ、でも、そのためにはヌードを見せて、お触りありじゃないといけないのか？」

「私はいいよ〜」

「私もいつか。一緒にお風呂入った仲だし♪」

姉貴と鶯の発言でさらにクラスの連中が騒ぎだす。

特に男子のイツセーに向ける殺意が凄まじい。

ていうか、姉貴。それ、小学生の話だろうがよ………。

「なあ、イツセー。俺の芸術と交換してやってもいいぜえ？」

「そんな、ゴミより、俺は五千円出すぞ！」

「私は七千円出すわ！」

「リアスお姉さまのお体は渡さないわ！」

松田の発言を皮切りに競りが始まりだした。

次第にヒートアップしていき、終いには姉貴と鶯の言葉を真に受けた連中が姉貴、千秋、鶯、燕の像も買おうとする輩が出てきたり、他の才力研の部員の像を頼む奴まで出てくる始末だった。

「父さん! うちのイツセーが!」

「性欲だけが取り柄のダメ息子かと思つたが、これは将来金になるアーティストになるかもしれないぞ!」

スゲエ前向きだな、おじさん、おばさん……。

テンションが上がり過ぎて、周りの親御さんから引かれてるけどな。

「私は誤解していたよ。公開授業とは賑やかに大騒ぎする余興だったんだな」

……んなわけねえだろ、ゼノヴィア。

……もうツツコミ疲れた……。

俺は現実逃避するように、自分の紙粘土をこねだすのだった。



「……………精神的に疲れた……………」

無事（……………無事なのか？）、公開授業が終わり、俺はイツセー、アーシア、姉貴と一緒に自販機の前にやって来ていた。

俺は買った缶コーヒーを一気飲みする。

……………心なしか、カフェインが体中に染み渡るような感覚がした。

「スツゴい賑わいだったなあ」

姉貴がクラスでのオークション騒動を思い出して楽しそうに笑っていた。

「結局、イツセーはリアスつちの像を売らなかったし」

ま、イツセーの性格なら、誰にも部長の像なんて渡したくないだろうからな。

で、その部長の像だが――。

「よくできてるわね」

部長が像を手にとつて、しげしげと眺めていた。

偶然、自販機の前で部長と副部長と合流したのだ。

「あらあら、さすが、毎日部長のお体を見て触っているイッサーくんですわね」

「ま、毎日なんて、朱乃さん。機会があるときに脳内に焼きつけるのです!」

副部長も像の出来に驚きながらも、興味深く、像を眺めていた。

「明日夏は明日夏で、親の仇のように紙粘土をこねてたな」

……姉貴の言う通り、ストレス発散するように、何かを作るわけでもなく、無心でひたすらに紙粘土をこねまくってたからな。――要するに、紙粘土に八つ当たりしていた。

「粘土ベラで紙粘土を滅多刺しにし始めたときは、さすがにドン引きした」

……自分でドン引きだよ。気付かぬうちに、そんなことになってたんだからな。

「あつ、明日夏に千春」

そこへ、兄貴が千秋と燕、そして、男性一人を連れてやって来た。

「あ、雲雀にい」

鵜が男性のもともとまで駆け寄ってきた。

そう、このヒトが鵜と燕の兄——風間雲雀だった。

紫色の髪をしており、右眼が隠れていた。鋭い目つきをしており、その顔つきは燕に似ていた。

「燕ちゃんの授業風景、どうだった〜?」

「——普通だったが。当てられても、動揺せず、冷静に回答していたぞ」

「え〜、かわいかったとか、そういう感想はないの〜?」

「……姉さん」

雲雀さんの感想に、鶴は不満そうにし、燕は呆れていた。

「雲雀さん、ひさしぶりです」

「兵藤か。二人が世話になってるな」

イツセーも、数年ぶりの再会を喜んでいた。

そして、雲雀さんがもとから鋭い目つきをさらに鋭くしてイツセーに訊く。

「——二人に悪い虫とかついてたり、つきまとわれたりしてないだろうな?」

「え、ええ、大丈夫ですよ」

「——おまえはどうなんだ?」

「も、もちろん、俺も手を出してないですよ。………たぶん………」

「——そうか」

雲雀さんの鋭い視線に射抜かれ、イツセーはビビリながらも答えた。その光景を見て、部長が小声で訊いてくる。

(明日夏、二人のお兄さんは、二人の想いには反対してるのかしら?)

当然だが、雲雀さんも妹たちの想いには気づいてる。

そして、さっきの質問からして、二人の想いには反対している——ように見えて、実は——。

(——いえ、普通に応援してますよ)

(あら、そうなの?)

(このヒト、結構へそ曲がりですね。燕以上に素直じゃないんですよ)

(ああ、なるほどね)

部長は燕のほうを見て納得していた。

燕も大概だが、このヒトはさらに素直じゃない。ただ、燕ほどわかりやすくもないんだけどな。だから、結構、誤解されやすいヒトでもある。それ以外は普通に妹想いのいいヒトだ。

さっきの質問も、単に仲が深まったかどうかを訊いただけだ。……イツセーにその意図は伝わってないがな。

「ところで、千秋と燕。二人とも、疲れた様子だな?」

「……………クラスの女子たちに冬夜兄と雲雀さんのことで質問責めにされた」

「……………付き合ってるヒトはいるのだから、紹介してどうか、なかなか解放してくれなかったのよ」

「それはご愁傷さまだな」

兄貴も雲雀さんも、顔立ちは整ってるからな。

「部長のほうはそうならなかったんですか? サーゼクスさまもイケメンなんですか」

「一昨年は私もそうだったわ。でも、お兄さまには妻も子供もいると言ってからは、そう

ならなくなつたわ」

「えつ、サーゼクスさま、子供もいるんですか!？」

「ええ。いつか、会わせてあげるわね」

サーゼクスさまの子供か。どんな子なんだろうな。それ以前に奥さんは誰なんだ？

——まさか、先日のイツセーの家で言つてた冗談つて……。

「ねえ、イツセーくん」

副部長が後ろからイツセーに抱きつく。

「今度、私の像も作つてくれないかしら？」

「そ、それは、ヌードという……」

「もちろん、脱ぎますわ。お触りもありで」

「お触りッ！」

副部長の言葉にイツセーは鼻の下を伸ばす。

「あつ、それ、先に私と千秋が予約してるから」

「えええっ!？」

「その次は私と燕ちゃんだよ〜♪」

「ちよつと!?! 何勝手に!?!」

姉によつて自分も巻き込まれてることに、千秋と燕は顔を真っ赤にして慌てふためく。

「あらあら、先を越されていましたか。では、イツセーくん。その次にお問い合わせいたしますわ」

「ダメよ!」

「ダメです!」

「.....あ、やっぱり」

どンドン話が進んでいたが、部長とアーシアよつて中止にされた。

「いつもこんな調子なのか？」

「………だいたいこんな感じですよ」

雲雀さんがイツセーたちのやり取りを見て訊いてきたので、軽く嘆息して答えた。

雲雀さんは「そうか」と言い、鶯と燕のほうを眺めていた。

「ちなみに、うちの千秋は将来、イツセーくんが上級悪魔になったときに眷属悪魔にしてもらう約束をしてもらってます」

「………なんのマウントだよ。あと、ドヤ顔するな。腹立つ」

兄貴がドヤ顔で雲雀さんにマウントを取り、雲雀さんがそれを鬱陶しげにしていた。

「魔女っ子の撮影会だとおおおッ!？」

「これは元写真部として、レンズを通してあますことなく記録せねば!」

『うおおおおおッ!』

突然、興奮気味の男子生徒たちが目の前を爆走していった。その中には松田と元浜も

いた。

「なんの騒ぎだ？」

「魔女っ子？」

俺とイツセーは顔を見合わせて首を傾げた。

そこへ木場が男子たちのあとを追うように通りかかった。

俺は木場に訊く。

「木場、さっきのはなんだ？」

「体育館で魔女っ子が撮影会を開いているんだって。ちよつと心当たりがあつてね。見に行こうかなって」

心当たりがあるのかよ。

「祐斗、まさか!?!」

「たぶん、そうです」

「あらあら、うふふ」

なんだ、部長と副部長にも心当たりがあるのか？

まさか、知り合いなのか？

気になった俺たちは体育館に向かうことにした。



「もう一枚、お願いします！」

「こちらに目線、ください！」

体育館に入ると、興奮気味にカメラのシャッターを切ってる男子たちと壇上でノリノリでポーズをとってる魔法少女のコスプレをした少女がいた。

「あれは、『魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブ』のコスプレじゃないか！」

「詳しいね、イツセーくん？」

「あるお得意さまの付き合いで、アニメの全話マラソン観賞をしたことがあつてな」

「それで詳しくなつたと」

「そういうことだ、木場」

「ミルたんのことか。確か、その魔法少女アニメに夢中で、そのコスプレもしてるんだってな。」

「ほえー、完成度タツケエな、おい」

「姉貴も知ってるのか？」

「昔、見てたんだ。長いシリーズだし、結構面白いんだ」

「なるほど。イツセーも意外と面白かったって言ってたし、人気のあるアニメなんだな。」

「こらー！ 学校で何やってんだ！ ほら、解散解散！」

いつの間にか、壇上に匙が現れ、男子たちに注意を促していた。

「横暴だぞ生徒会！」

「撮影会くらい、いいだろ！」

『そーだそーだ！』

松田と元浜を筆頭に男子たちは抗議するが、匙は聞き耳持たない。

「公開授業の日にいらん騒ぎを作るな！ 解散しろ！」

「………なんだよ、うっせーな………」

「………またね、ミルキーちゃん………」

男子たちは渋々と、文句たらたらで蜘蛛の子を散らすように解散していった。

生徒会の仕事をしているところを初めて見たが、結構様になってるな。

今度は騒ぎの元凶たる魔法少女に注意を促していた。

「あの、ご家族の方でしょうか？」

「うん！」

「そんな格好で学校に来られると、困るんですが。場に合う衣装つてのがあってしょう」

「えー、だって、これが私の正装だもん☆ ミルミルミルミルスパイラルー☆」
「だから、真面目に！」

コスプレ少女は匙の注意にまったく聞く耳持ってなかった。

「よお、匙。ちゃんと仕事してんじゃん」

「からかうな、兵藤！」

コスプレ少女の態度に若干、イラついていたのか、匙はイツセーの軽口に怒気を含ませて返していた。

「サジ、何事ですか？」

そこへ、会長が颯爽と現れる。

「いえ、会長。この方が……」

「問題は簡潔に解決しなさいといつも言ってる——」

「ソーナちゃん、見つけた！」

「——ッ!？」

割って入ってきたコスプレ少女を見た瞬間、会長が固まってしまった。

「……まさか、会長の知り合いなのか？」

「ソーナちゃん！」

コスプレ少女は壇上から飛び降りると、嬉々としながら会長に駆け寄る。

「ソーナちゃん、どうしたの？ お顔が真っ赤ですよ？ せっかくお姉さまとの再会な

のだから、もっと喜んでくれてもいいと思うの！ 『お姉様！』『ソーたん！』って抱き

合いながら、百合百合な展開でもいいと思うのよ、お姉ちゃんは！」

「……………」

会長が目元をひくつかせ、冷や汗をかいていた。

「お姉さま!？」

「……………おいおい、まさか……………?」

「セラフオルー・レヴィアタンさまよ」

俺とイツセーの疑問に部長が答えた。

……………マジかよ。あれが魔王レヴィアタンなのかよ。

「……………俺も初めてお会いしたけど、これは……………」

匙も困惑していた。

「本当はお姉ちゃんに会えて、とつてもとーつても嬉しいんでしょ?」

当の魔王レヴィアタンは会長の様子などお構いなしに話しかけていた。

「セラフオルーさま、おひさしぶりです」

「あら、リアスちゃん! おひさー☆ 元気してましたかー☆」

「はい、おかげさまで。今日はソーナの公開授業へ？」

「うん！ ソーナちゃんったら、酷いのよ！ 今日のこと、黙ってたんだから！ もう！ お姉ちゃん、シヨックで天界に攻め込もうとしちゃったんだからー！」

「……冗談だよな？ 冗談なんだよな？ 本気っぽいけど、冗談なんだよな!? 魔王レヴィアタンはイツセーを視界に捉えると、部長に尋ねる。」

「リアスちゃん、あの子が噂のドライグくん？」

「はい。イツセー、ご挨拶なさい」

「は、はい！ はじめまして！ 兵藤一誠です！ リアス・グレモリーさまの『兵士』をやってますー！」

「はじめまして☆ 魔王のセラフォル・レヴィアタンです☆ レヴィアたんって呼んでね☆」

「……は、はい」

イツセーもあのノリとテンションにはついていけないようだ。

「ふむ、騒がしいなと思ったら、やっぱりキミだったか。セラフォル」
「あら、サーゼクスちゃん」

そこへサーゼクスさまも現れた。

「公開授業でも変わらず、その格好なのだな」

「当然よ。これが私の正装なのなもの」

魔王同士とはいえ、ずいぶん気安く会話してるな。

というか、普段からあの格好なのかよ。

「…………お姉さま。ここは私の学舎であり、私はこの生徒会長を任されているのです…………。いくら身内だとしても、そのような行動や格好はあまりに容認できません!」

「そんな、ソーナちゃん!? ソーナちゃんにそんなこと言われたら、お姉ちゃん悲しい!? お姉ちゃんが魔法少女に憧れてるって知ってるでしょう?」

それでそんな格好してるのかよ。

確か、ミルたんも同じ理由でコスプレしてるんだっけ。

「煌めくステッキで天使、墮天使を纏めて抹殺なんだから☆」

「お姉さま、ご自重ください！ お姉さまが煌めかれたら、小国が数分で滅びます！」

．．．．．お互い、物騒なことを言ってるな。そして、事実なんだろうな。

「朱乃さん、コカビエルが襲ってきたとき、会長はお姉さんと呼ばなかったけど．．．．あの様子じゃ、仲が悪いからってわけじゃないですよね？」

「逆ですわ。セラフォルーさまが妹君であるソーナ会長を溺愛しすぎているので、呼ぶと逆に収集がつかなくなると。妹が墮天使に汚されるとかいつて、即戦争になってたかもしれないですわ」

魔王がそれでいいのか．．．．．。

「うう、もう耐えられませんか！」

ついに限界が来たのか、会長が涙目でこの場から走り去っていく。

「待って、ソーナちゃん!? お姉ちゃんを置いてどこに行くの!?!」

魔王レヴィアタンが会長を追って走りだした。

「ついて来ないでください!」

「いやあああん! お姉ちゃんを見捨てないでええええつ! ソーたあああん!」

「『たん』付けはおやめになってください!?!」

そのまま、姉妹で追いかけてっこをしながら、体育館から去っていった。

「じゃあ、俺、会長のフォローしなきゃだから」

匙も会長のフォローのために二人のあとを追っていった。

あいつも大変だな。

部長が額に手を当て、ため息をつきながら言う。

「……あまり言いたくないのだけど、現四大魔王の方々はどうなってもこんな感じなのよ。プライベート時が軽いのよ。酷いくらいに」

「……他の魔王もこんななのかよ。大丈夫なのか、冥界は……」

「うむ。今日もシトリー家は平和だな、リーアたん」

「……お兄さま、私の愛称を『たん』付けで呼ばないでください……」
「そんな……リーアたん。昔はお兄さまお兄さまと、私の後ろをつけていたのに……」
「反抗期か……」

「もう！ お兄さま！ どうして私の幼少期のことを！」

こつちの兄妹も似たようなことをやり始めた。

大変だな、部長も会長も。上の兄弟があれだと。……うちもヒトのことは言えないが。



「おお、イツセー」

「父さん？」

あのあと、正面玄関に移動した俺たちは、そこでおじさんとおばさんに声をかけられた。

二人のそばには、紅髪の男性もいた。もしかして――。

「リアス、こんなところにいたのか」

「お父さま？」

やっぱり、部長のお父さんだったか。

二児の父親にしては、だいぶ若々しいな。まあ、悪魔は見た目がある程度自由に変えられるからな。

思い出した。部長とライザーの婚約パーティーの会場で見かけたな。

「こうして面と向かって会うのは初めてだったね、兵藤一誠くんか。リアスの父です。娘が世話になっているね」

「ど、どうも！ 父さん、どうして？」

「偶然、廊下ですれ違つてな」

で、そのまま打ち解けたというわけか。

「ここで長話もなんですから、狭いですが、我が家でいかがですか？」

「おお！ それは願つてもない！」

「じゃあ、父さんたち、先に帰つてるからな。お父さん、結構いける口ですか？」

「ははは、いやー」

すつかり意気投合してるな。

「……父さん……部長のお父さまになんつう軽口を……」

「打ち解けてるなら、それでいいんじゃないかねえのか」

「……そうだけだよ。なんか、余計なことを言つてそうで怖いんだよな」

「……………私も同じ気持ちよ、イツセー」

親同士の会話にイツセーと部長は憂鬱そうだ。

「ははは、これはいい。今日は父上も含めての宴会になりそうだな。冬夜くん、私たちも、ぜひ混ざろうじゃないか」

「いいですね。雲雀もほら」

「……………俺を巻き込むな」

兄貴は雲雀さんを無理矢理引っぱって、サーゼクスさまと一緒におじさんたちのあとを追っていった。

俺、千秋、燕も憂鬱になってきた。

……………今夜は地獄になるかもな。

「あつ、士騎くん」

憂鬱な気分になってるところに、霧崎がやってきた。

隣には見知らぬ男性がいた。

「美優、彼がキミの言っていたBoyかい？」

男性が霧崎に話しかけた。

金髪で顎髭を生やしており、整った顔立ちをしていた。歳は四十前後くらいか？

「霧崎、そのヒトは？」

「このヒトは私の身元保証人の——」

「Hello。私の名はレイドウン。レイドウン・フオビダーという。以後、よろしく頼むよ、Boy」

アメリカ人、だよな？ だいぶ流暢な日本語だな。日本での暮らしが長いのか？

「とうるか、身元保証人？」

「——うん。私の両親、ずいぶん前に亡くなってるから」

「……悪い、嫌なことを訊いたな」

一人暮らしだし、まさかとは思っていたが、霧崎も両親を亡くしてたんだな。

「彼女の父親とは仕事の同僚だね。ずいぶんと助けられたものだよ。その恩返しもかねて、彼女の面倒を見てるのだよ」

そういう縁があつたのか。

「キミのことは美優から聞いてるよ。これからも、彼女と仲良くしてあげてくれ」

そう言い、握手を求めてきたので、握手を交わす。

ゾクツ!

「——ッ!?!」

．．．．．なんだ？ 握手した瞬間、急に背筋がゾツとした．．．．．。

「どうかしたかい、Bo^{ボー}y?」

「フオビダーさんは俺の様子を訝しんだのか、柔和な笑みを浮かべながら首を傾げていた。」

「い、いえ。なんでもないです……」

「なんとか平静を装って、笑みを返す。」

「そろそろ行きましょう、レイドウンさん。この学園を見て回りたいて言っただのはレイドウンさんなんですから」

「おっと、そうだった。では、諸君。また会おう。Se^{シー}e you^ユ」

霧崎とフオビダーさんは踵を返し、学園内のほうへ歩いていった。

「ふーん。やっぱ、あれが美優っちの保護者だったか。公開授業のとき、美優っちのこと

見てたから、もしかしてと思ってたけど。それにしても、なーんか——」

途端に姉貴は、怖いくらいに視線を鋭くする。

「——美優つちには悪いけど、よろしくされたくない。明日夏もそう思ったつしよ?」
「.....」

.....姉貴も俺と似たような感覚を覚えたということか。
なぜ、こんな感覚が?

レイドウン・フォビダー。——いったい、何者なんだ?

Life. 6 後輩、できました！

レイドウン・フォビダー——霧崎の身元保証人だという男。

あの男に会ったときに感じたあの感覚はいつたい……。

姉貴もどういうわけか、あまりいい印象を抱いていないようだったのも気がかりだった。

——だが、いまそれを考えてる余裕は俺にはなかった。なぜなら——。

「アーシアちゃん、よく映ってるわあ！」

「は、恥ずかしいですう……。」

「イツセーは落ち着きがなくていかんな」

「明日夏ももう少し、鶴ちゃんみたいに楽しそうにやれば良いのに」

「……いや、あれはどう見ても、やけになって紙粘土に八つ当たりしてるだけだろ」

——現在、兵藤家にて今日の公開授業の様子を撮影したビデオの鑑賞会が行われてい

たのだ。

「……おじさんが気を利かせてくれたのか、イツセーとアーシアだけでなく、俺と鵜のことも撮ってくれていた。」

兄貴、おじさん、おばさん、サーゼクスさま、部長のお父さんは、酒も入ってることもあつて、それはもう、大盛り上がりだ。

「……撮影対象である俺たちにとっては地獄だな。アーシアと鵜は恥ずかしながらも楽しんではいたが。」

唯一、無理矢理鑑賞会に参加させられていた雲雀さん（嫌そうにしてるけど、実際は表に出してないだけで、内心では楽しんでる）だけは、俺たちに同情の視線を送ってくれてる。

「次は千秋と燕ちゃんのを観てみましょうか」

「さすが冬夜くん。バツチリ撮ってるようだね」

「当然ですよ、サーゼクスさん。かわいい妹の晴れ姿ですからね。お兄ちゃんとしては張り切りですよ!」

「ははは! その気持ちはよくわかるよ!」

映像が変わり、千秋たちのクラスの授業風景が映し出された。

映像にいつさいブレはなく、非常にキレイに撮れていた。

今度は鶴もテンションを上げていた。

自分たちの公開処刑の番になったことで、千秋と燕がテーブルに突っ伏してしまつた。おそらく、顔は真つ赤だろうな。

まあ、映像でも真つ赤で、プルプル震えているが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・期待はしてなかったけど、やっぱり止めてほしかったわよ、兄さん・・・・・・・・」

燕が恨めしげな視線を雲雀さんに送るが、雲雀さんは気まずそうに顔を背けるのだつた。

「次はリアスの番ですね」

「おお、やはり撮ってましたか！」

「ははは！ やはり、娘の晴れ姿を視聴するのは、親の務めです！」

そして、とうとう部長の番になった。

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・かつてない地獄だわ・・・・・・・・」

部長は顔を真っ赤にして、プルプルと震えていた。

「見てください！うちのリーアさんが、先生にさされて答えているのです！」

「もう、耐えられないわ！お兄さまのおたんこなす！」

とうとう耐えられなくなった部長が顔を手で覆って逃げるようにこの場を走り去っていった。

「部長！」

イツセーが部長を追っていった。

「ははは。少々、ハメを外しすぎたかな？」

スパーン！

反省の色が見えないサーゼクスさまの頭部をグレイファイアさんがハリセンではいたた。

「……………痛いよ、グレイファイア」

「はあ……………サーゼクスさま、お嬢さまにあのことをお伝えしなくてよろしいのですか？」

「いまはそつとしておいたほうがいいだろう。イツセーくんがフォローして落ち着いた頃合を見計らって伝えるよ」

あのこと？

気になった俺はついついサーゼクスさまのほうを見てしまう。

「明日夏くん。キミはリアスに、もう一人の『僧侶』ビショツツがいることは聞いているかな？」

「はい」

そう、部長にはすでにアーシアとは別の『僧侶』^{ビシヨッフ}の眷属がいたのだ。ただ、表に出れない事情があるみたいで、そのせいでライザーとのレーティングゲームでは不参加だった。

「リアスのもう一人の『僧侶』^{ビシヨッフ}は本人も制御できていない危険な力を有していてね。当時のリアスでは扱いきれぬということで、私と大公アガレス家の判断で封印措置を施されたんだ」

封印……それほどまでに危険な力を持つてるのか、もう一人の『僧侶』^{ビシヨッフ}は。そんな力の制御がままならないんじや、レーティングゲームのときも、コカビエルのときも出てこれないわけだ。

「封印と言っても、まったく自由がないわけじゃない。旧校舎の一室ではあるが、そこでなら普通に過ごせるし、深夜限定なら、旧校舎内でも自由に動けるようになってる」

眷属の情愛が深い部長なら、まったく自由のない生活なんてさせたくないだろうし

な。

「いま、その話をするってことは——」

「ああ、私をはじめ、他の魔王たち、大王バル家、大公アガレス家、その他の上役たちがフェニックスやコカビエルとの戦いを見て、リアスを高評価してね。あれから眷属も増え、戦力も増強したことだし、まかせても大丈夫だろうと判断したのだ」

やっぱり、解放の許可がおりたのか。

それにしても、それほどまでに危険視されてるもう一人の『僧侶』^{ビショツプ}。いったいどんな奴で、どんな危険な能力を持つてるんだ？

ま、それはすぐにわかることか。

ちなみに、あのあと、サーゼクスさまがもう一人の『僧侶』^{ビショツプ}のことを伝えにいくのに同行したら、部長がイツセーにキスしてる場面に遭遇してしまい、部長と千秋たちが一触即発になりかけたのだった。



旧校舎には『開かずの間』と呼ばれている場所があった。その『開かずの間』の前に俺たちオカルト研究部に加え、兄貴と姉貴(気になったからとついてきた)、レンと槐(姉貴と呼ばれた)はいた。

この『開かずの間』、扉に「KEEP OUT!!」と書かれたテープが幾重にも張り巡らされており、一見すると、ただの封鎖された部屋のように見えるが、実際は厳重に封印が施されており、容易に入室、退室ができない状態だった。

ここに部長のもう一人の『僧侶』^{レリック}がいるらしい。部長が扉に向けて魔法陣を展開しながら言う。

「深夜は封印の術も解けるから、旧校舎内限定で部屋を出ていいことになってるの。でも、中にいる子自身はそれを拒否しているの」

「要するに引きこもり?」

イツセーの質問に部長はため息を吐きながら頷いた。

「でも、この子が一番の稼ぎ頭なんですのよ」

「マジですか!?!」

「パソコンを介して、特殊な契約を行っているんだ」

副部長と木場の追加の情報にイツセーは驚いていた。

そういう契約方法もあるんだな。

でもまあ、確かに、对人恐怖症などの理由で悪魔と直接会いたくないってヒトもいるだろうからな。

「……………封印が解けます」

塔城の言葉と同時に扉の封印が完全に解除された。

「扉を開けるわ」

そう言い、部長はドアノブを掴む。

オカ研古参組を除くメンバーが息を飲むなか、扉が開かれる。

「イヤーアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!」

『——っ!?!』

室内をとんでもない音量の絶叫が響き渡る!

突然の絶叫に俺たちは驚きを隠せなかつた。

驚いてないのは、オカ研古参組のメンバーだけだつた。

オカ研古参組は嘆息するなり、部屋に入つていき、俺たちは慌ててあとをを追う。

「へえ、かわいらしい趣味だね」

「さっきの悲鳴からして、こりや女の子かな?」

部屋の内装を見て、兄貴と姉貴がそう漏らす。

確かに、ぬいぐるみなどが置かれており、かわいらしく飾られた女の子らしい内装の部屋だつた。——静かに鎮座している棺桶を除けばな。

棺桶つてことは、もしかして、部長のもう一人の『僧侶』^{ビシヨッフ}の転生前の種族つて——。部長が棺桶に話しかける。

「ごきげんよう。元気そうでしたわ」

『な、何事なんですかあああ!?!』

棺桶から狼狽気味の声が聞こえてきた。

「封印が解けたのですよ？ もうお外に出られるのです。さあ、私たちと一緒に出ましょう?」

副部長が棺桶に近づき、蓋を開く。

「やですうううう！ ここがいいですうううう！ 外怖いいいいいいいい！」

棺桶の中にいたのは、金髪で赤い双眸をしており、小柄で人形のように端正な顔立ちをした少女だった。

涙目で震えており、部長や副部長から逃げようという構えだった。

「おお！ 女の子！ しかも、アジアに続く金髪美少女！」

『僧侶』は金髪尽くしつてことつスカ!」

女子ということでイツセーはテンションを上げるが、そんなイツセーを見て木場は苦笑していた。

あと、レンもなぜか苦笑していた。

「な、なんだよ、木場、レン?」

「イツセー、テンション上がってるよ、水を差すようで悪いが、そいつ、男だぞ」
『は?』

レンの言葉に俺をはじめ、オカ研古参組を除くメンバーが素っ頓狂な声を出してしまった。

「いやいや、冗談はやめろよ、レン! この子に失礼だぞ!」

「いいえ、イツセー。彼の言う通り、この子は男の子よ」

部長に言われ、イツセーはわなわなと震えながら、少女——じゃなく、少年のほうを

見る。

「見た目は女の子なのだけれど、この子は紛れもなく、男の子」
「うふふ、女装の趣味があるのですわ」

女装趣味って、また濃い個性を持った奴が出てきたな。

「マジか!? こんな残酷な話があつていいものかあああ!」

女装だったことにショックを受けたイツセーが激しく嘆いていた。

「ヒイヒイヒイ!? ゴメンなさあああ!」

少年はイツセーの叫びにビックリして、悲鳴をあげていた。

「それにしても、よくわかったな、レン」

「男と女で、体の構造の違いからか、微妙に違う音を発してるんだよ。それ聴いてわかっ

た」

音でそこまでわかるんだな。

まあ、レンの耳のよきがあつてはじめてわかるものなのだろうか。

「でも、よく似合ってますよ?」

「うんうん、かなり完成度高いぞ」

「だから、そのぶん、ショックがでかいんだって!」

イツセーはアーシアと姉貴の感想にさらにショックを受けてた。

「引きこもつてて、いったい誰に見せるってんだ!」

「だ、だ、だ、だつてえ……この格好のほうがいいもん……」

「もん、とか言うな! もん、とか!」

イツセーは床に手を着き、ガツクリと項垂れる。

「……うううう……一瞬だが、おまえとアーシアの金髪ダブル美少女『僧侶』を夢見たんだぞ……」

「……人の夢と書いて儚い」

これまた、キツイ一言だなあ、塔城。

「と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、この方は誰ですか？」

少年が部長に訊く。

「まず、この子と、あつちの金髪と青髪の子の三人が、あなたがここにいるあいだに増えた眷属よ。『兵士』^{ポーン}の兵藤一誠、『僧侶』^{ベシヨッフ}のアーシア・アルジェント、『騎士』^{ナイト}のゼノヴィアよ」

「ヒイヒイイツ?! よく見たら、知らない人がいっぱい増えてるううううつ?! 人に会いたくないいいいいつ!」

……これは重症だな。人見知りつてレベルじゃない。完全に对人恐怖症だな。

「お願いだから、外に出ましよう? ね? もう、あなたは封印されなくてもいいのよ?」

「嫌ですうううう! 僕に外の世界なんて無理なんだああああ! 怖い! お外怖い! どうせ、僕が出てつても、迷惑かけるだけだよおおお!」

部長が優しく促しても、このありさまだ。

「ほら、部長が外に出ろって言ってるんだからさ——」

いつまでも泣き喚くだけの少年に焦れつたくなったのか、少しイライラした様子で
イツセーが少年の腕を引っ張ろうとする。

「ヒッ!?!」

次の瞬間——。

「——あれ？」

——イツセーが腕を引いていた少年が目の前から消えていた！

「うう、怒らないで！ 怒らないで！ ぶたないでくださいああああい!?!」

少年は部屋の片隅でブルブルと震えながら縮こまっていた。

……一瞬だが、妙な違和感を感じた。あいつに何かされたのは間違いない。

「なるほどな。時間停止か」

「しかも、視覚から発動するタイプだね」

レンと兄貴が少年が起こした現象の正体を口にした。

「その通りよ。あの子には、視界に映したすべての物体の時間を一定の間停止することができる神セイクリッド・キア器を持っているのよ」

部長が補足説明をしてくれた。

時間停止、なるほどな。あの妙な違和感の正体はそれか。

「二人とも、よくわかったな?」

「まあ、不自然な音の途切れがあつたからな」

「僕には単純に効いてなくて、止まっちゃてる皆を見てね」

「——つて、兄貴には効いてなかつたのか?」

「誰でも停めれるわけではないのよ。力のある存在には、能力が効かないこともあるの。もつとも、それも余程の力の持ち主でないといけないのだけれどね」

兄貴の規格外さに苦笑しつつ、部長は少年のもとまで歩み寄ると、少年を後ろから優しく抱きしめる。

「この子はギヤスパーク・ヴラディ。私の眷属、もう一人の『僧侶』^{ビショップ}。一応、駒王学園の一年生で、転生前は人間と吸血鬼^{ヴァンパイア}のハーフよ」

『フォービトウン・パロール・ピュー
セイクリッド・ギア
の神 器の名前だった。』
それが、部長のもう一人の『僧侶』——ギヤスパー・ブラディ

視界に映した物体を停止させる、これは確かに、非常に強力で危険な能力だ。

何より問題は、制御できていないことだ。さつきのも、いきなりイツサーに腕を引つ張られたことで驚き、無意識に発動させてしまったのだ。これじゃ封印されても仕方ないな。ヘタすれば、味方に被害が出るわけだからな。

「リアスちゃん、ギヤスパークンって才能自体もかなり高いんじゃないのかい?」

「ええ、その通りよ、冬夜さん。ギヤスパークンは類希な才能の持ち主で、無意識のうちに
セイクリッド・ギア
神 器の力が高まっていくみたいで、将来的には禁 手に至る可能性もあるという

話よ」
バランス・ブレイカー

ただでさえ危険なのに、禁 手にまでなったら、封印どころか、いよいよ殺処分も視野に入れなければならない自体だろうな。

「……ううう……僕の話なんか、してほしくないの……」

目立ちたくないですううう……」

当のギヤスパーは、イツセーのそばに置かれてる大きめの段ボールの中でうじうじしていた。

嫌がるギヤスパーをどうにか連れてきたのはいいが、外が怖いと、すぐさま、どっから用意したのか、この段ボールに入り込んでしまった。

イツセーが無言で段ボールを軽く蹴ると、「ヒイヒイイツ!」と悲鳴が発せられた。

「リアスちゃん、『ブラデイ』って、もしかして?」

「ええ、ギヤスパーは吸血鬼の名門の一族、ブラデイ家の出身よ。だから、ハーフとはいえ、吸血鬼としての才能も高く、他にも魔法の才能にも秀でてるのよ。本来なら、『僧侶^{ベシヨツプ}』の駒ひとつで転生できないのだけれど、その子に使ったのは『変異^{ミューテーション}の駒^{ジョン・ピース}』なのよ」

『変異^{ミューテーション}の駒^{ジョン・ピース}』——『悪魔の駒^{イービルピース}』が突然変異したもので、本来ならイツセーのように複数の駒を使うところをひとつですませることができる駒だ。

本来は『悪魔^{イービルピース}の駒』のシステムができたときに生まれたイレギュラー、バグの類だったが、それも一興ということでそのままされたい。だいたい、十人に一人がひとつ

ぐらいは持つてるみたいだ。

「僕のこととは放っておいてくださいああああい！　僕はこの箱の中で十分です！　箱入り息子つてことで許してくださいああああい！」

そんな駒を使うくらい才能を秘めてる当のギヤスパーはこのありさまだ。

「部長、そろそろお時間です」

「そうね。私と朱乃はこれからトップ会談の打ち合わせに行かなくてはならないの。それと、祐斗」

「はい、部長」

「お兄さまがあなたの禁バランス・プレイヤー手について詳しく知りたいらしいの。一緒に来てちようだい」

「わかりました」

部長も大変だな。この忙しいときに、厄介な眷属のことも重なるとは。

「その間だけでも、あなたたちにギヤスパアの教育係をお願いできるかしら」

「教育係? あ、はい、わかりました」

「お願いね、イツセー」

部長は副部長と木場を連れて、この場から転移した。

「とりあえず、取りかかるか」

俺がそう言うのとゼノヴィアが勢いよく立ち上がる。

「よし! ここは私に任せろ! 小さい頃から吸血鬼とは相対してきた。扱いは任せてほしいね!」

デュランダルを担ぎ、ギヤスパアが入っている段ボールに括りつけてあるヒモを引っ張っぱりだした。

「ヒイヒイイツ! せ、せ、せ、聖剣デュランダルの使い手だなんて嫌ですうううう!

滅せられるうううう！」

「悲鳴をあげるな、ヴァンパイア。なんなら十字架と聖水を用いて、さらにニンニクもぶつけてあげようか？」

「ニンニクはらめええええええええつ!?!」

……ゼノヴィアに任せて大丈夫なのか？

……先行きが不安になってきた。

「そういうことなら、力になってくれそうなヒトを呼んでくるよ」

兄貴はそう残し、どこかへ行ってしまった。

「とりあえず、デュランダルちゃんのお手並み拝見といこうぜ」

レンの言う通り、とりあえず見守るため、ゼノヴィアのあとを追うのだった。



「ほら、走れ! モタモタしてると、このデュランダルの餌食になるぞ!」
「いやあああああつ!? デュランダルを振り回しながら追いかけてこないでえええええつ!」

夕方に差ししかかった時間帯、旧校舎の近くでギヤスパーがデュランダルを振り回すゼノヴィアに追い回されていた。

「……吸血鬼狩りにしか見えねえ。ていうか、あいつ、太陽平気なのか?」

「平気なところを見る限り、『デイトライトウオーカー』なんだろ」

「なんだそれ?」

「早い話、太陽が平気な吸血鬼だ。苦手には変わらないだろうがな」

そもそも、ギヤスパーは影もあるし(吸血鬼には本来影がない)、血にもそんなに飢えてないとのことだから、おそらく、人間の血のほうが濃いのもかもしれない。

「私と同じ『僧侶』^{ビショップ}にお会いできて光栄でしたのに、目も合わせてもらえませんでしたし

た………」

アーシアが残念そうにしていた。ちよつと涙目だ。

イツセーから聞いたが、自分と同じ『僧侶』ベシヨツプに会うのを非常に楽しみにしてたみたいだ。

「ひつく………どうして、こんなことをするんですかあああ？」

ギヤスパーは地面にへたり込み、涙目でゼノヴィアに訊いた。

「健全な魂は健全な肉体に宿る。まずは体力を鍛えるのが一番だ！」

おまえ、少し——いや、結構楽しそうにしてるな？ スポ根系のノリが好きなのか？
とはいえ、ついさつきまで引きこもってた奴にそのノリはキツすぎるだろ。

「もうダメですううう！ 一歩も動かせえええん！」

「………ギヤーくん」

泣き言を言うギヤスパーに塔城が何かを差し出す。

「………これを食べればすぐに元気に——」

「いやあああああつ!? ニンニク嫌いいいいいい!」

塔城が手に持っていたのはニンニクであり、それを見たギヤスパーは顔を青ざめさせながら、逃げるように再び走りだした。

「………好き嫌いはダメだよギヤークン」

「うわああああん!」

「………好き嫌いはダメだよギヤークン」

「いやああああああん! 小猫ちゃんが僕をイジメるううう!」

塔城も心なしに、楽しそうにギヤスパーを追いかけていた。

「ほらほら、イジメないイジメない」

そこへ、姉貴が割って入る。

姉貴の登場にギヤスパーは救世主が現れたかのような表情を明るくする。

「とりあえず、ギヤー助、これ飲みな。水分補給は大事だぞ」

「あ、ありがとうございます」

ギヤスパーが姉貴からペットボトルを受け取る。

ラベルにはこう書かれていた。

『飲んで心と体の邪気を祓ってリフレッシュ!! ホーリーウォーター』

「聖水いいいいいつ!! いやあああああ! 浄化されちゃうううううう!」

姉貴までイジリ始めやがった。

実際はそういうキャッチフレーズと製品名のただのミネラルウォーターなんだが、ギヤスパーは気づいていない。

「おー、やってるな、オカ研」

そこへ匙が現れた。

「おつ、匙じゃん」

「よー、兵藤。解禁された引きこもりの眷属を見に来たぜ」

「ずいぶん耳が早いな？」

「会長から聞いたんだよ。それで、その眷属は？」

「ああ、それならいま、ゼノヴィアと小猫ちゃんと千春さんに追い回されてるぜ」

「おお！ 金髪美少女かよ！」

ギヤスパーを見て、イツセーと同じ反応をする匙。

「……………女装野郎だけどね」

「……………マジか……………こんな残酷な話があつていいものか……………」

それを聞き、これまたイツセーと同じく、匙は地面に手を着き、ガツクリと項垂れ、同じことを呟いていた。

「こんなの詐欺じゃねえか！ つーか、引きこもりが女装って、誰に見せるんだよ！」
「わかる！ 気持ちわかるぞ、匙よ！」

匙の言葉にイツセーはうんうんと頷いていた。

「へえ、魔王眷属の悪魔さん方はここで集まってお遊戯してるってわけか」

その聞き覚えのある声を聞き、俺とイツセー、千秋は一気に緊張感が高まってしまおう！

声が出たほうを見ると、アザゼルがこちらに向かって歩いてきた。

「やあ、悪魔くん——いや、赤龍帝。元気そうだな」

「アザゼル！」

イツセーの一言で空気が一変した。

俺と千秋は身構え、イツセーも自分の後ろに隠れたアーシアを守るように
『赤龍帝の籠手』を出す。ゼノヴィアもデュランダルを構え、槐と塔城がアザゼルの背後
に回る。

「……こいつがイツセーくんを！」

鶴も目を見開くほど怒りをあらわにし、燕も怒りの視線をアザゼルに向ける。

「ひよ、兵藤、アザゼルって!？」

「マジだよ! 実際、こいつとは何回も接触している!」

「くっ!」

匙セイクリッド・ギアも神器を出して構える。

「はいはい、皆、構え解こうねー」

「千春の言う通りだ。このヒトにやる気はねえよ。それ以前に、戦っても勝負になん

ねえのはわかってるだろ？」

「冬夜の妹に竜胆の弟の言う通りだ。やる気はねえよ。ほら、構えを解けて」

姉貴とレン、そして、アザゼルの言葉を聞いても、俺たちは構えを解かなかった。

「——つたく、威勢だけはいいな」

「何しに来た!？」

「いきなりだな、赤龍帝。なに、散歩がてらちよつと見学だ。聖魔剣使いはいるか？
そつちも見に来たんだが」

「木場ならいない！ それにあんたが木場を狙ってるってなら！」

『ブー
スト
』
Boost!』

イツセーの想いに応えるかのように、イツセーの籠手から音声が届く。

「相変わらず威勢だけはいいい男だな。そうか、聖魔剣使いはいないのかよ。つまんねえな。まあいい。そのヴァンパイア」

木の陰に隠れていたギヤスパーはアザゼルに呼ばれ、ビクつきながら顔を覗かせる。

『フオービトウン・パロール・ピュー停止世界の邪眼』の持ち主なんだろう？ そいつは使いこなせないと害悪になる代物だ。五感から発動するタイプは、持ち主のキャパシティが足りないかと自然に動きだして危険極まりないからな。補助具などで不足している要素を補えばいいと思うが……。そういや、悪魔は神セイクリッド・ギアの研究が進んでいなかったな』

ギヤスパーの両眼を覗き込むようにしていたアザゼルは、その視線を匙に移す。

「それは『アフソーフション・ライン黒い龍脈』だな？ 訓練なら、そいつをヴァンパイアに接続して、余分なパワーは吸い取りつつ、発動させるといい。暴走も少なくて済む』

「……お、俺の神セイクリッド・ギア器、相手の神セイクリッド・ギア器の力も吸えるのか？ ただ単に敵のパワーを吸い取って弱らせるだけかと……」

「なんだ、知らなかったのか。そいつは五大龍王の一角、『ブリズン・ドラゴン黒蛇の龍王』ブリトラの力を宿しているな。物体に接触し、その力を散らせる能力がある。短時間なら、他の者に接続させることも可能だな」

「こいつにそんな力が……じゃ、じゃあ、俺側のラインを……例えば兵藤とかに繋がれば、兵藤のほうにパワーが流れたりとか？」

「ああ。成長すれば、ラインの本数も増える。そうすりゃ、吸い取る出力も倍々だ。……つたく、これだから最近の神器セイクリッド・ギア所有者は自分の力をろくに知らうとしない。まあ、いまのは最近の研究でわかったことなんだがな」

アザゼルはまるで学者のようにうんちくを語っていた。

「……なんのつもりだ？ 敵対してる種族にわざわざアドバイスするようなマネを……」

俺の問いにアザゼルは不敵に笑みを浮かべる。

だが、俺の問いに答えたのは別の人物だった。

「単に研究者らしく、研究で知ったことを披露したいだけだよ」

兄貴が見知らぬ少女を連れて現れた。

「よう、冬夜。ひさしぶりだな」

「おひさしぶりです、アザゼルさん」

兄貴とアザゼルは仲良さげに再会の挨拶をしていた。

「……兄貴、そのヒトは？」

俺は兄貴の隣にいる少女のほうを見ながら訊いた。

ノースリーブのゴシック調の服装で、赤いリボンで左右非対称のツインテールにした金髪、右目が赤で左目が青のオツドアイ、まるで人形のように整った顔立ちをしていた。どこことなく、容姿の特徴がギヤスパーと似ていた。

「ごきげんよう、冬夜の弟さん。お会いするのは初めてでしたわね。わたくしはレイチエル・ブラッドムーン。吸血鬼のお姉さんですわ」

吸血鬼——なるほど、だからギヤスパーと容姿の特徴が似てたのか。

「吸血鬼の特訓をするのなら、同じ吸血鬼の彼女に色々訊くのがいいと思つてね」

「冬夜に呼ばれて来ましたわ。皆さん、どうぞレイチエルと。以後、お見知りおきを」

レイチエルさんはスカートの裾を持って上品にお辞儀をした。

「ヒツ、ブラッドムーンって、純血の……」

「ええ、名門のブラッドムーン家ですわ」

それを聞き、ギヤスパーはレイチエルさんのことを怯えた表情で見る。

「アザゼルさん！ やつと見つけましたよ！」

「……悪魔以外の邪な気配を感じると思ったら、墮天使と吸血鬼がいるじゃない」

そのタイミングで、今度は飛神一姫さんとアリシエラ・ヴィスコンティさんが現れた。レイチエルさんが二人のほうを見ると、途端に挑発的な笑みを浮かべる。

「あらあら、誰かと思いましたが、不良娘にゴリラシスターではありませんか♪」

Life. 7 女の戦い、勃発です！

「——あ？」

レイチエルさんの言葉に飛神一姫さんとアリシエラ・ヴィスコンティさんがニコニコフェイスでドスの効いた声を発した。

こ、怖い！ ニコニコフェイスなのが余計に怖い！

「——誰かと思ったら、とーくんに付き纏ってる淫乱蝙蝠さんじゃないの」

「——そういうあなたは不良集団のリーダーじゃない。さすが不良。他人の縄張りを我がもの顔で闊歩してるなんて」

「それはアザゼルさんとヴァークンだけです。私たちはちゃんと、リアス・グレモリーさんに許可をもらって、仕事で来てるんです。あたまのしし頭猪 シスターさんこそ、ヒトの縄張りを

勝手にうろついでるじゃない」

「私たちもちゃんと許可もらって、仕事で会談場所の下見に来てるのよ」

「あらあら、不良とゴリラの醜い争いが始まってしまいましたわ」

「あー！」

三人は歩み寄り、お互いに睨み合う。いや、レイチエルさんだけは楽しげだった。

ヴィスコンティさんはエクソシストだから、吸血鬼のレイチエルさんと墮天使側の飛神さんを敵視するのはわかるし、逆にレイチエルさんと飛神さんもヴィスコンティさんを敵視するのもわかる。……レイチエルさんと飛神さんがお互いに敵視する理由はわからないけど。

とにかく、三人がお互いに敵視するのはわかる——わかるんだけど、なんだろう……なんか、そんな感じじゃない。

なんとというか、その……先日の部長と朱乃さんのケンカと同じように見えた。笑顔を引きつらせた冬夜さんがコソコソと三人から離れて、こちらにやってきた。

「……どうしましょう、アザゼルさん？」

「どうするって、いつものことだろうが。そもそも、おまえのせいでああなっただから、おまえが責任もってなんとかしろよ」

「……ですよねー」

冬夜さんは苦笑いを浮かべながら、ガツクリと項垂れてしまう。
俺は冬夜さんに訊いてみる。

「えーと、どういうことなんですか、冬夜さん？」

「えーと、そのー……」

冬夜さんは照れくさそうに苦笑しながら頬をかいて言葉を濁してた。
すると、アザゼルが代わりに答える。

「早い話、あいつらはこいつに惚れてんだよ。で、こいつを取り合って、ああなってるってわけだ」

あー、そういうことなのね。

あんな美人なお姉さんたちに言い寄られるなんて、羨ましすぎる……！！

それはそれとして、女の子のケンカに巻き込まれる大変さは知ってるので、冬夜さんに同情もしてしまう。

「ちなみに、あれにあと何人か加わるよ」

「さらに言うと、一人は俺と槐の姉だぜ。もちろん、超美人だぜ」

「……そして、会うとああやってすぐにケンカが始まってしまう。まあ、ほとんどはレイチエルさんが楽しんで煽るせいなんだが……」

千春さん、レン、槐が追加情報をくれた。

アザゼルが呆れたようにため息を吐きながら言う。

「………つたく、まだはつきりしてねえのかよ?」

「………そうは言いまして、彼女たちは真剣に好意を向けてくれてるんですよ。だつたら、半端な答えなんて出せるわけじゃないじゃないですか。………まあ、その結果、こうしてはつきりしないまま、ずるずると引きずってるわけですけどね………」

冬夜さんは自嘲気味に笑っていた。

「誰か一人決められないのなら、いつそのこと、ハーレムにしちまえばいいじゃねえか」

ハーレム！

アザゼルの言葉に思わず過敏に反応してしまう。

「……………それこそ、ああしてケンカしてる彼女たちが一番納得しないでしょー」
「そこをどうにかするのが男の甲斐性なんだろうが。それに、ハーレムは男のロマンだ
ろうが」

アザゼルの言葉に俺は衝撃を受けてしまう。

「……………あ、あんた、まさか、ハ、ハーレムを作ったことがあるのか……………
？」

俺はアザゼルにおそるおそる訊いた。

「おうよ。これでも過去数百回ハーレムを形成したことがあるぜ！」

マ、マジか! それはつまり、ハーレム王つてことじゃねえか!
堕天使総督アザゼル、な、なんて恐ろしい男だ………!

「イツセーくん。アザゼルさんのハーレムは全部遊びの関係だったから、参考にしないほうがいいよ。そんなだから、周りに奥さんができたヒトがどんどん増えているなか、いまだに独り身なんだよ、このヒト」

「おまつ、それを言うなよ!」

マジで! 過去数百回もハーレム形成したのに、奥さんできなかつたの!

「………そりゃ、そんだけ女遊びしてれば、できねえだろ」

明日夏が呆れ気味に言った。

う、うーん、ま、まあ、確かに。常識的に考えれば、そうだよな。
だけど、やっぱり、女遊びは男のロマンだと思っただよな!

「冬夜ー、不良とゴリラが絡んできますわー!」

レイチエルさんが冬夜さんの後ろに隠れる。

そもそも、煽ったのあなたですよね!?

「へー、とーくんはレイチエルの味方をするんだー」

「残念よ、冬夜。吸血鬼に魅入られるなんて」

飛神さんはどこからか取り出した木刀を持っており、ヴィスコンティさんは拳を鳴らしていた。

二人はニコニコフェイスで冬夜さんとレイチエルさんににじり寄ってくる。

「怖いですわー、冬夜ー♪」

そう言うレイチエルさんは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

あなた、絶対にこの状況を楽しんでますよね!?

「ふ、二人とも、とりあえず落ち着こうか？　ね？　あと、レイチエルもそろそろ煽るの

やめよう………」

「どうしまししょうかしら♪」

レイチエルさんは困ってる冬夜さんを見て楽しそうにしていた。もしかして、このヒト、朱乃さんみたいにドSなのかな？

「えい♪」

「ちよっ!?!」

「——ッ!?!」

レイチエルさんが冬夜さんの腕に抱きついた。

冬夜さんは戸惑い、飛神さんとヴィスコンティさんは怖いぐらい視線を鋭くして冬夜さんとレイチエルさんを睨んでいた。

そして、満面の笑みを浮かべると——。

「ぶちのめす!」

そう言うと、飛神さんの木刀とヴィスコンティさんの拳がオーラに包まれた！

肌がピリピリし、背筋がゾクゾクするこの感じ、エクスカリバーと対峙したときと同じ感覚！

もしかしてあれ、聖なる波導!?

「望むところですよわ！」

レイチエルさんも明日夏たちのように魔法陣から古めかしい拳銃とライフルを取り出し、銃口を二人に向ける。

ちよつ、ここでやり合う気ですか!?

一触即発の空気に俺たちが身構えた瞬間――。

「はあ」

飛神さんとヴィスコンティさんがため息を吐くと、発せられていた聖なるオーラが消えた。

「あらあら、もう終わりですか。つまらないですわね」

レイチエルさんも拳銃とライフルを魔法陣にしまった。

「……さすがにこれ以上はマズいよね。リアス・グレモリーさんに迷惑かけちゃうし、下手したら、三大勢力の戦争の再開のきっかけになりかねないし」

「……そうね。男の取り合いがきっかけで戦争再開なんて笑い話にもならないわ」

あんなに一触即発な雰囲気だったのが、あっさりと互いに矛を収めちゃったよ。

はなっからやり合う気はなかったってことかな？

アザゼルが三人に言う。

「そうだぞ、おまえら。ただでさえ、好戦的な奴らがピリピリしてんだからよ。会談前に盛大にやり合えば、戦争再開になりかねねえぞ」

あんたが言うなよ!

勝手に部長の縄張りで好き勝手やってた奴のくせに!

冬夜さん、レイチエルさん、飛神さん、ヴィスコンティさんも「どの口が言ってるんだ」って言いたそうにジト目でアザゼルを睨んでた。

「……もとはといえば、とーくんがいつまでもはつきりしてくれないのがいけないんだよ」

「……優柔不断で誠に申し訳ございません」

飛神さんにジト目で睨まれ、冬夜さんは申し訳なさそうに笑っていた。

なんか、モテてるってのも大変なんだな……。

それはそれとして、モテモテなのが羨ましい！

「だから言ったではありませんか。いつそのこと、全員が冬夜のものになればいいのですわ。わたくしはこれでも元貴族ですからね。愛人には寛容ですわよ」

「だからシレッと正妻ポジ確保するな！」

レイチエルさんの提案に飛神さんとヴィスコンティさんが即座にツツコンだ。

「はあ、これ以上、不毛な争いはやめようか……」

「そうね。いずれ決着はつけるとして、いまは自分の仕事をしましようか」

「というわけで、行きますよ、アザゼルさん。これ以上、勝手にうろついてたら、本当に戦争になりかねませんよ」

「わーったよ。そういうことだ。あとは自分たちでやってみろ。それと、ヴァーリの奴が勝手に接触して悪かったな。さぞ驚いただろうが、あいつだって、いますぐ赤白ライバルの完全決着をしようなんて思っていないだろうさ」

アザゼルはそう言うが……

「……正体を隠して、たびたび俺に接触してたあんたのほうは謝らないのかよ？」

「そりゃ、俺の趣味だ。謝らねえよ」

それだけ言うと、アザゼルはこの場から去っていった。

「……さすが堕天使のトップ。絵に書いたような問題児だわ。あんたも大変ね？」

「……いつものことだよ。皆さん、うちの総督が驚かせてすみませんでした」

俺の掛け声に頭に匙のラインを繋げ、ブルマ姿のギヤスパーは弱々しく返事する。

それにしても、ブルマが似合ってるのが腹立つな……。

気を取り直して、俺はギヤスパーに向けてバレーボールを投げる。

次の瞬間、あの妙な違和感を感じたあと、ギヤスパーが姿を消していた。

ボールだけを停めるはずが、俺たちまで停められてしまった。

「ほらほら、誰も皆を止めちゃったことを怒らないから」

冬夜さんが逃げようとしていたギヤスパーの背中を押して、優しく連れ戻してきた。

「まだ力が強すぎるのかな? 匙、もう少し吸い取ってくれないか」

「ほい来た」

「悪いな。付き合わせちゃって」

「気にすんな。俺も自分の力のことを知れたしな」

その後も、何回か投げたボールだけを停める訓練をしたけど、成功率は安定しない。ギヤスパーは失敗するたびに泣きながら謝ってこの場から逃げようとする。

まあ、匙のラインが繋がってるから場所はすぐわかるし、冬夜さんは停められてないから逃げようとするギヤスパーにすぐ追いつけるんだけどな。

「なかなか安定しないな……」

匙セイクリッド・ギアが神 器の力を散らしてるおかげで暴発自体はなくなったけど、安定して発動させることが難航していた。

そこへ、レイチエルさんが提案する。

「あなたの血を飲ませてみてはいかがかしら？ ハーフでも吸血鬼です。赤龍帝の血を飲めば、力がさらに高まるリスクもありますが、同時に安定もするはずですよ」

「だよ。試しに俺の血を飲んでみるか？」

「ひいいいつ!? 血嫌いですううう!」

吸血鬼なのに!?

「まあ、ハーフでは珍しいことではありませんわ。人間の血のほうが濃いと、味覚が人間

よりになってしまいましたから」

なるほど。それで血が嫌いなのか。

「血嫌いですううう！ 生臭いのダメええええ！」

「・・・・・・・・へたれヴァンパイア」

「うわあああん！ 小猫ちゃんがイジメるううう！」

小猫ちゃんの容赦ない一言に泣きだしてしまった。

「どう、練習ははかどってるかしら？」

部長が様子を見に来てくれた。ギヤスパーのことが気になって、少し抜けてきたようだ。

差し入れにサンドイッチを作ってきてくれたので、休憩がてら、サンドイッチをいただく。

くー！ チョーうまい！

「部長、うまいっス！」

「ふふふ、ありがとう。ありあわせの材料しかなかったから、簡単なものしか作れなかったのだけど、よかつたわ」

サンドイッチを食べながら、アザゼルのことを部長に話した。

「そう．．．．アザゼルが神セイクリッド・ギア器についてアドバイスを。アザゼルは神セイクリッド・ギア器について造詣が深いと聞くわ。敵対勢力に助言するほど余裕ということかしら．．．．」

悩む部長に冬夜さんが言う。

「ただ面倒見がいいだけですよ。あのヒト、結構お人好しだから」

お人好しね．．．．。まあ、サーゼクスさまも、戦争のとき、最初に手を引いたのは墮天使だって言ってたからな。

「それで、練習のほうはどうなのかしら?」

「狙ったものだけを停めるのになかなか苦労してますよ。何より、失敗するたびに逃げだそうとしてしまつて……」

正直、セイクリッド・ギア神器を使いこなせていないことよりも、ギヤスパアの性格のほうが厄介だった。

ギヤスパア自身も、このままじゃダメだからがんばろうって気構えは感じられるんだけどな。

「まあ、ハーフなうえ、危険な神セイクリッド・ギア器の所有者という時点で、転生するまでどのような生活をしていたかは、容易に想像つきますわね」

レイチエルさんが吸血鬼について説明してくれる。

「吸血鬼には二種類の存在がいますわ。純血とそんでない者。純血の者たちは基本的に悪魔以上に血統を重んじ、排他的で差別的ですよ。ゆえに純血でない者を軽視、侮蔑します。当然、ハーフも同様ですよ」

「ええ、ギヤスパ―は親兄弟たちから差別的な扱いを受けてきた。しかも、時間を止めるなんて厄介な力まで授かってしまった。制御すらできないものだから、怖がられ——いえ、忌み嫌われたといったほうが正しいかしら。当然よね。何をされたって自分はずっとたく気づかないのよ。そんな者の近くにいたいと思わないものね。結局、ギヤスパ―は家を追われ、人間界に來たら來たで、バケモン扱いされた。そして、路頭に迷っていたところをヴァンパイアハンターに命を奪われ、そのとき、私が悪魔として転生させたの」

……こいつにもそんな過去が。

俺はギヤスパ―のほうを見る。

部長の話聞いて、過去を思い出してるのか、ぶるぶると震えていた。

それに、レイチエルさんのことをまた怯えた表情で見ている。

純血の親兄弟に差別されてきたんだからな。同じ純血のレイチエルさんに苦手意識を持つても仕方ないよな。

レイチエルさんがギヤスパ―を安心させるように言う。

「安心してください。わたくしは変わり者ですからね。純血だとかそうでないかなど気にしませんわ。そもそも、わたくしは家を出奔した身です。ですから、もう貴族でもな

んでもありませんわ」

そういや、さつき自分のことを元貴族だとか言ってたな。

「どうして家を出ちゃったんですか?」

ちよつと気になったので、聞いてみた。

「わたくし、一族の中でも才女と言われるくらいには、才能があつたのですけど、そのせいで『ツエペシユ派』である父や兄たちから疎まれていましたの」

「ツエペシユ派?」

「吸血鬼は『ツエペシユ派』と『カーミラ派』という二つの派閥に別れておりますの。簡単に言いますと、ツエペシユ派は男のほうが偉い、カーミラ派は女のほうが偉いという時代遅れな主張をしていますの。ブラッドムーン家はツエペシユ派。しかも、父と兄たちは一際酷い男尊女卑思想の持ち主で、男の自分たちよりも才のある女の存在はたとえ純血であろうと許せない方たちでしたわ。母もそんな父にいびられていたせいで、わたくしに当たるばかりでしたわ」

うわー、酷いな、レイチエルさんの家族。

「そんな家族が嫌になって家を出たど？」

「いえ、うつとおしかつたですけど、無視すればいいだけでしたから。それに、妹のことだけは好きでしたから」

「レイチエルは結構シスコンだからね」

「冬夜にだけは言われたくありませんわ」

確かに。冬夜さんは結構シスコンだからな。

サーゼクスさまも結構シスコンぽかったし、すぐ仲良くなれたのも、そういうところで意気投合したのかも。

「妹はとてもいい子でしてね。わたくしに似て差別的でもないですし、なんでしたら、感覚が庶民寄りだったりしてましたの。まあ、わたくしもこう見えて、感覚が庶民寄りですけど」

ああ、だから、ハーフでも差別したりとかしないのかな。
途端にレイチエルさんは苛立たしげに話し始めた。

「ですが、兄たちがわたくしの目の届かないところで妹をイジメてましたの。わたくしのことで溜まっていた鬱憤を晴らすこともかねてか、もはや虐待でしたわ。父は当然止めませんし、母も父にいびられていた反動から一緒になって虐待する始末です。さすがに堪忍袋の緒が切れましたわ。ですから、妹と一緒に家を飛び出したのですわ。その際、父たちをポロ雑巾のようにしたあと、裸にひん剥いて、ニンニクで作った猿轡をした状態で純血以外の吸血鬼たちが暮らす城下町の広場に晒してあげましたわ」

うわー、えげつない……。たぶん、無視してたと言っても、家族に対して相当鬱憤が溜まってたんだろうな。

「冬夜と出会ったのは、ちょうどその頃でしたわね」

「アリシエラと出会ったのもね」

へえ、そんなときに冬夜さんたちは出会ったのか。

「そういえば、あなた、純血のわりには、影もあるし、生気を感じさせる顔をしてるわね？ それに、陽の光も平気そうね？」

「ああ、これは幻影魔法でそう見せてるだけですわ」

部長に訊かれたレイチエルさんは、手元に魔法陣を出す。すると、顔が生気を感じさせないものになり、影も消えてしまった。

「こうでもしないと、周りの人が驚いてしまいますからね」

確かに。この見た目だと、周りに騒がれるだろうな。

「陽の光が平気なものも、魔法で保護してるのですわ」

魔法か。ギヤスパーは魔法の才能もあるって言ったな。

「あの、魔法って実際どういうものなんですか？」

ファンタジーでは定番だけど、実際はどういうものなのか気になった。

「簡単に言いますと、悪魔の魔力を人の身で再現したものですわ」

レイチエルさんの説明に部長が付け足す。

「最近じゃ、悪魔の魔力じゃ再現できないものが多くなって、その技術を求めて契約をする悪魔がいるのだけどね」

へえ、もとは悪魔の魔力の再現だったけど、いまじゃ、逆に悪魔じゃ再現できないものがあるんだ。

「俺でも使えますか?」

「結構難しいですよ。『術式を扱うだけの知識』と『頭の回転と計算力』が必要ですから」

うへえ……めちやくちや頭を使うつてことかよ……。
……俺じゃ無理そうだな。

「さて、私はそろそろ戻らないといけないわ。重ね重ね申し訳ないけど、ギヤスパーのこ
とお願いなね」

「任せてください、部長！」

部長が戻ったところで、俺たちはギヤスパーの特訓を再開するのだった。